

---

# 真・恋姫十無双 ～羅刹戦記～

エアリアル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫†無双 ～羅刹戦記～

### 【Nコード】

N0128I

### 【作者名】

エアリアル

### 【あらすじ】

黄巾の乱を治めた劉備、関羽、張飛。そして、北郷一刀。ある日、劉備らは鬼と呼ばれ恐れられる伽藍洞の少年と出会う。名も、記憶も無くした少年の物語が、始まる。

## 鬼と天の御遣い（前書き）

初投稿です。私はデザインが苦手な為、版權作品の武器や設定を借りて使うことがあります。予めご容赦ください。感想、批判、お待ちしております

## 鬼と天の御遣い

森の中を4人の男女が進んでいく。

先頭を見事な黒髪の少女、その次を幼さが残る小さな少女が、そして少年と栗色の髪の少女が後に続いていた。

一見森林浴を楽しみに来たようにも見える一行だが、彼ら一人一人は武器を携えていた。

「はあ……はあ……。まだ着かないの？」

歩き疲れたのか、栗色の髪の少女　劉備は前を歩く黒髪の少女  
関羽に問いかけた。

「もうすぐ着きますから、堪えてください」

困ったように答える関羽。この様子から何度もこのやりとりがあったことが窺える。

「にやはは。これくらいで疲れるなんて、お姉ちゃんはだらし無いのだ」

劉備を姉と呼ぶ少女の名は、張飛。

そして、

「まあまあ。山道を歩くのは結構体力を使っただ。疲れるのは仕方ないよ」

劉備をフオローするこの少年こそ、劉備、関羽、張飛の主にして、流星と共に現れると言われた《天の御遣い》。

名を、北郷一刀と言う。

彼らは黄巾党による乱を平定した功勞を朝廷より認められ、平原の相に任ぜられた。

そして、今回の森林浴 もとい、任務はある邑の近くの森を根城にした山賊の討伐であった。

「しかし、乱が治まっても、こういう悪事は消えないもんだな」

「生きるのに必死、と言えば聞こえはいいですが、それで他人を傷つけていいということにはなりません」

一刀の小さな呟きに、関羽は憤りながら言った。

「そうなのだ。悪いことする奴がいるから、哀しい思いをする人がいるのだ。そんなの許せないのだ」

「そうそう。だから、頑張って誰もが笑顔でいられる世界を絶対つくってみせるんだから!!」

劉備は強い意志を込めて言った。

その劉備の姿に、一刀と関羽は頬を綻ばせた。

「……………誰だ？」

森の中に響く声に、少年は木の上で目を細めた。

緋い髪に漆黒の眼。薄汚れた外套を纏った小柄な少年の腰には、不釣り合いな二本の剣が提げられていた。

少し長く伸びた前髪の間隙から劉備たちの姿を見つけると、少年の手が剣に伸びる。柄を掴み、

「……………違うか」

手を離した。

少年は彼女らを賊かとも考えたが、それをすぐに否定した。

まず、身の丈に合わない得物を持つ二人の少女は、そこらにいる賊が相手にならない程の武の達人。後の二人は武人ではないだろうが、賊とは対極の雰囲気があった。

つまり、かなりのお人好しに見えたのだった。

そして何より、眼が違うのだ。

欲望を満たそうとする濁った眼ではなく、何か強い決意に満ちた澄んだ眼をしている。

「これで賊だったら、この世は滅んだ方がいいかな」

ぼそつと恐ろしいことを呟くと、少年は木の上から劉備たちの前に飛び降りた。

突然現れた少年に劉備たちは一斉に武器を構えた。

「何奴!？」

関羽が青龍偃月刀を少年に向ける。

「人に名を聞くのなら、自分から名乗ってからじゃないの？」

「ぬう…我が名は関羽。劉玄徳が一の家臣にして、幽州の青龍刀」

「鈴々は張翼徳なのだ」

警戒を露わに、関羽と張飛は臨戦体勢に入る。

「僕は……」

少年も双剣の柄を握り、いつでも抜き放てるような体勢に入る。

「悪いけど、名乗る名が無い」

「ふざけるな!?!」

素っ気なく答えた少年に、関羽は飛び掛かり、青龍偃月刀を振り下ろす。

迫る刃を少年は半身を反らすだけで避けた。

「何っ!？」

「愛紗、どくのだ! とりゃ〜!！」

唸りをあげる突きを張飛は放つ。だが、それも少年の拳に蛇矛の刃の腹を叩かれ、軌道を逸らされた。

「うわ!？ 愛紗、こいつ強いのだ」

「ああ、そのようだ。鈴々、同時にしかけるぞ」

「応っ!」

関羽と張飛は同時にそれぞれの得物を振り上げると、

「はあああ!！」

「うりゃあああ!！」

気合いを込めた斬撃を放った。

関羽は首を、張飛は逆方向から胴を狙う。

だが、



「やめろおお!!」

「ダメー!!」

一刀と劉備が少年を庇うように前に出て来た。

これに関羽と張飛は驚き、斬撃を止めようとするも、振り下ろされた刃は止められない。

眼前にまで迫った刃に二人は眼を強く閉じると、

「何してんのさ」

少年の呆れた声が聞こえ、服の襟を引っ張られた。その時に視界の端に見えた彼の表情は、ひどく呆れていた。

そして、一刀と劉備は黒と白の閃きを眼にした。

ガイン、と鋼がぶつかり合う音が響く。

少年は黒刃と白刃の双剣を一瞬で抜き放ち、関羽と張飛の一撃を受け止めたのだ。

「お兄さんとお姉さんって死にたがり？」

双剣を鞘に納めながら、少年は言う。尻餅をついたまま、一刀と劉備は彼を見上げるようにして笑いかけた。

「死にたい訳じゃないよ。ただ、君を助けようとしたんだ」

「そうだよ。愛紗ちゃんも鈴々もとっても強いんだから、ケガしたら大変だよ」

「助けようとした本人に助けられなくて、そんなこと言っただ」

う…、一刀と劉備は押し黙った。そんな彼らの後ろでは、

「申し訳ございません!!」

「ごめんなのだ!!」

関羽と張飛が全力で頭を下げていた。

「守るべき主君に刃を向けるどころか振り下ろすなど、仕える武将として失格！ 本当に申し訳ございません!!」

「気にしないでいいよ。生きてるし」

「いや、気にすべきことですよ」

のほほんとした一刀の言葉に少年は思わずツッコんだ。

それは劉備も一刀同様のようで、落ち込む張飛の頭を撫でて宥<sup>なだ</sup>めていた。

自分が助けなければ、一刀の首は断たれ、劉備は胴を裂かれていたかもしれないというのに。

この二人は怒るところか殺されかけた相手を逆に慰めている。全く

理解できない、と少年は思う。

「お姉さんたち、何者なの？」

少年が問うと、劉備は屈んで目線を合わせ答えた。

「私は劉備玄德。この近くを縄張りにしてる盗賊をやっつけに来たの」

「劉備玄德……平原の相自ら賊退治？ しかも、一番近くの村からでも来るのに半日はかかるこの森に？」

「そ。だって、どんなに遠くにいても盗賊があそこにいるんだって知ってたら、不安で仕様がないだろ」

「お兄さんは誰？」

「俺は北郷一刀。桃香 劉備たちの主で、天の御遣いって呼ばれてる」

ふうん、と少年は一刀を見た。光りを放つ変わった服を着ていると噂に聞いていたが、確かに一刀の服は薄暗い森の中でありながら、強い光沢が見て取れた。

「噂通りかあ。……天の御遣いさん。盗賊退治に来たなら、早く帰りなよ」

「どうしてだい？」

「もう盗賊はこの森にいないからだよ」

少年は踵かかひを返し、

「ここから西に一里先に奴らの根城跡があるから、確認してきなよ。ただ、お墓がたくさんあるから荒らしちゃダメだよ」

茫然とする一刀一行を他所に、少年は去っていった。

「どうだった、鈴々？」

一刀は少年が言っていた場所から戻ってきた張飛に早速聞いた。

「盗賊は一人もいなかったのだ。あいつが言っていた通り、お墓がいっぱいあるだけ」

「その墓って、誰のか解った？」

「多分だけど、全部盗賊のお墓だと思うよ」

「本当に？」

一刀の確認に、張飛は静かに頷いた。

「ご主人様、これは恐らく……」

「ああ、きっとあの男の子がやったんだ」

関羽の推測を一刀は肯定する。

盗賊の根城を知り、墓のことまで知っていた。

そして、関羽と張飛の攻撃に対抗できる技量を持つ彼ならば、やってのけるだろう。

ただ、あの少年がどういった経緯で盗賊を倒したのかは解らない。

「あの〜、ご主人様」

もじもじとしながら劉備は一刀を上目遣いで見つめる。一刀は一瞬ドキッとしながらも何とか答える。

「どうしたの？」

「あの子、私たちの仲間になってもらえないかな」

「あの子を仲間には？」

「うん。きっと力になってくれると思うの」

「確かにあの少年の力ならば、乱世を終わらせる一助になることでしょう。しかし……」

「愛紗ちゃんは反対なの？」

「いえ、反対ではないのです。むしろ、賛成です。しかし、あやつが言っていたことが気になって」

「？ もしかして『名前が無い』って言ってたことかあ？」

「ああ、そつだ」

関羽が気になっていたことは、一刀も気になっていた。

何故、名が無い？

あの子自身を産んだ親がいるだろうが、黄巾の乱により親を亡くした子供も少なくない。あの少年も、その一人なのかもしれない。

だが、その子らは親から貰った名まで無くしてはいない。

（もしかして捨て子なのか？）

だが、それならば何故言葉を話せる？

今より幼い頃に捨てられたのなら言葉をきちんと学べず、半端な言葉遣いになる筈だ。

しかし、少年の言葉ははっきりとしていた。

森に訪れた誰かが言葉を教えたのかもしれないが、それならば自然と名の大切さだつて解ってくるだろう。

名は自分の存在の標だ。

名は生を受けて、初めて親から授かるものだ。

それをあの少年は

「……あの子を探そう」

一刀の言葉に劉備の顔が輝く。

「ご主人様！」

「よろしいのですか？」

「うん。俺と桃香を助けてくれたんだ。きっと悪い子じゃない」

「そうそう。あの子だって盗賊を退治するくらいだもん、きっと人の為にかかしたいんだよ」

うんうん、と頷く一刀と劉備の横で、関羽は困ったように笑い、

「では、ご主人様。あの少年を探して参ります。行くぞ、鈴々」

「わかったのだ。絶対見つけるのだ!!」

張飛を連れ、駆け出した。

## 鬼と天の御遣い2

少年は焚火をしようと枯れ枝を集めていると、遠くから呼び声が聞こえた。

(まさかあのお兄さんたち、帰り道が解らなくなったんじゃない……)

そう思い、仕方ないと声の主の許に歩いていった。

いたのは、関羽だった。

「何してんのさ」

「よかった。まだこの近くにいてくれたか」

呆れた少年の声に気付いた関羽は、彼を見るなり柔らかい表情を浮かべた。

「僕に何か用？　もしかして道に迷った？」

「お前を探していたのだ」

「……へえ。それはどんなご用向きで？」

「その前に一つ聞きたい。盗賊を退治したのは、お前か？」

「……だとしたら、まずかった？」

「やはり、お主か。………良ければ、私たちと共に来ないか？」



関羽の言葉に少年は訝しむように目を細めた。

「何故？」

「我らには大望がある。皆が笑って平和に暮らせる世の中をつくりたいのだ。それにお前の力を貸してほしい」

「それであのお姉さん　劉玄徳に仕えろと？」

はっ、と少年は鼻で笑い、

「嫌だね」

拒絶を口にした。

「平和？　笑って暮らせる世の中？　夢見過ぎだよ。人はいつだって他人を淘汰しなくちゃ生きていけない。」

この森に来た盗賊だってそうだった。食物やお宝、それどころか人の命を奪うのも、みんな遊び感覚でその数を競ってた。

そんな奴らがいるのに、誰もが笑って暮らせる世の中なんか到底来やしない」

「なんだ。君も解ってるじゃないか」

関羽に自分の言葉をぶつけていたせい、少年は後ろから近付く気

配に気付けなかった。

「天の御遣い……」

やあ、と一刀は片手を上げて少年に笑いかける。彼の横には、劉備と張飛もいた。

「君の言う通りだよ。誰かが誰かを傷つけようとする限り、本当に皆が笑っていられる世の中なんて夢物語だ」

「じゃあ、永遠にこないね」

「ああ、そんな世の中を待ってる限りね」

「だから、つくる？」

「そ。待ってるだけじゃダメなんだ。そんな世の中をつくりたいって強い想いと力が必要なんだ。

だから、俺たちは立ち上がった。夢物語でなんか終わらせないために」

少年には理解できなかった。

夢幻のような世の中。それは確かに幸福な世界だろう。

だが、夢幻のようだからこそ、実現は困難を極めるのだ。

それを彼らは困難であっても、不可能ではないと思っている。

だからこそ、実現できると。

「……………この甘ちゃん集団め」

呆れた心地がするのに、自然と頬が緩んだ。

「僕を登用したいそうだけど、この眼を見てもまだそう思うっ？」

少年は嘲るように前髪を手で上げた。

緋い髪に隠れていた彼の瞳を見た劉備らは眼を大きく見開き、言葉を失った。

人あらざる双眸が、そこにあつた。

綺麗な漆黒の瞳孔が、獣のように縦に開かれていた。

「僕が近くの村人に何て呼ばれてるか知ってる？」

「もしかして……鬼？」

怖ず怖ずと劉備が口にした答えを、少年は首肯した。

童姿わらわの人喰い鬼。

この森に着く前に寄った村で、一刀たちは村人から聞いていたのだ。

森には鬼が住んでいる。子供の姿で現れ、森に迷い込んだ者を油断させる。隙を見せれば最後、森から出ることは叶わず、喰い殺されてしまうそうだ。

盗賊を倒すなら、鬼も倒してほしいとまで言われた。

だが、劉備らはこれを単なる噂としか思わなかった。

実際に、この少年の眼を見るまでは。

動揺は想像以上に大きく、言葉を紡ごうと口を動かそうとしても言葉にならず、ぱくぱくと動くだけに終わる。

その様子に少年はやはりか、と顔には出さずに思った。

「よし。じゃあ、これで鬼はいないって証明されたな」

今度は少年が驚く番だった。

一刀一人だけが異形の眼を見ても特に気にした様子もなく、その言葉の口にした。

鬼がいるなんて単なる噂は、噂でしかない。

それは鬼と呼ばれた少年を前にしても一刀の中では少しも変わらな  
い。

そんな飄々とした一刀の態度に少年は茫然とした。

「この眼を見て、気味が悪いとか思わないの？」

「驚きはしたけど、そういうのは無いな。それに、君は人なんて喰わないだろ」

「それはそうだけど……」

「俺の世界　まあ、天の国か　だと、鬼つて必ずしも悪い存在じゃないんだよ。神様になってたりもするんだ」

だから、と一刀は少年の頭に手を置き、

「天の御遣いの傍に鬼がいたって変じゃないだろ」

くしゃくしゃ、と撫でた。

自分の頭を撫でる一刀の手が、なんだかくすぐったくもあつたが、悪い気はしなかった。それどころか心地良いとさえ感じた。

「関羽さん、もしかして、この人っていつもこういうの？」

「ああ、変だろっ？」

「うん。変過ぎて益々気に入った」

「それは良かった……って、言っつていいのか？」

「別にヘンじゃないと思うよ？」

首を傾げる一刀と劉備。ああ、ヘンなのは二人だったのか、と少年は気付いてしまった。

それはそれで面白みが大きくなっていいのだが。

「天の御遣い いや、主上。僕には名前が無い。出来たら、貴方に名を付けてほしい」

「そうだったな。けど、なんで名前が無いんだ？」

「……覚えて無いんだ。今から3年以上前からのこと、自分の名前さえ」

「記憶喪失か……」

「刀は唸りながら考えた。」

「記憶、取り戻したくは無いかい？」

「んー、別に。記憶がなきゃ前に進めないなんて思っていないよ」

「そっか。偉いな」

「刀はもう一度少年の頭を撫でると、劉備たちを見た。」

「この子の名前、俺が決めていいかな？」

「うん。だって、その子の願いだもん」

「私も異存ありません」

「鈴々もお兄ちゃんが決めるなら、いいのだ」

「ありがとう、みんな」

一刀は少年を真正面から向き合い、彼の新しい名を口にした。

「性は劉、名は焔、字は翔刃。真名は、朔」

「……劉焔翔刃。それが僕の名前」

「そつだよ。君の名前は、俺を含めた4人の名前からとつたんだ」

「え？ 桃香様は解りますが、私と鈴々もなのですか？」

困惑顔の関羽。彼女と同じなのか、鈴々も首を傾げていた。

「劉は、もちろん桃香から。焔は愛紗、翔は鈴々で、刃は俺から……なん……だけど……」

少年以外の3人にジト目で見られ、一刀の言葉は段々と尻搾みしていった。

少年の名に自分の名が使われているのだ。この説明だけで納得する当人ではない。

「愛紗の性からとつた焔だけど、“関”は“繋がり”って意味だろ。同じ意味を持つ“縁”を、この子の火みたいに緋い髪に合わせたんだ。

翔は鈴々の“飛”から同じ意味を。

刃は、俺の“刀”から。乱世を終わらせる道を切り開けるように、だよ」

「へえ。なんか捻って考えたの、焰と刃だけだね」

少年の言葉の刃は、ズブリと一刀を貫いた。

バタリ、と倒れた一刀に、劉備たちは苦笑った。

「けど、気に入ったよ。僕は今から、この名を名乗る」

少年は一刀と劉備の前に跪き、双剣を鞘ごと引き抜くと、献上するように掲げた。

「この劉翔刃。この身、我が双剣の如く戦場を翔ける刃となし、主上が望む世への道を切り開いてみせましようぞ」

こうして、名無しの少年は名を得て生まれ変わった。

性は劉、名は焰。字は翔刃。

真名は、“始まり”の意味を込めて 朔。

この真名の通り、劉焰という少年の物語は始まった。



## 鬼と軍師と昇り竜

「これが城かあ」

劉備の居城を見上げ、劉焰は感嘆の声を上げた。

記憶を無くしてからずっと森で暮らしていた為、彼の眼には町のほとんどの物が新鮮に映った。

「朔くん、こつちこつち！ 行くよ〜」

「あつ、はい、桃香様」

劉備に真名で呼ばれ、劉焰は彼女の許に駆け寄った。

帰りの道中、一刀たちと劉焰は互いを真名で呼び合うことを認め合った。

劉備に連れられ、玉座の間に通されると、そこには帽子を被った小さな少女が2人いた。

「朱里ちゃん、雛里ちゃん。ただいま」

「桃香様！？ いつお戻りになったんですか？」

「盗賊を討伐にしたには、帰ってくるのが早いよっな……」

困惑顔の少女たちは揃って劉備を見た。

「ついさっきだよ。ご主人様や愛紗ちゃんは、もう少ししたら来るから。私はこの子を先に紹介する為に早く来たんだ」

劉備は劉焰の肩を掴むと自分の前に立たせ、

「この子はね、新しく仲間になった」

「劉焰翔刃。よろしく」

劉焰に自己紹介させた。

突然の告白に少女らは更に困惑の色が深まった。

突然の主の帰還に、新たな仲間の参入。どれも唐突過ぎる。

だが、彼女らは劉備軍の2大軍師。いつまでも「はわわ」とか「あわわ」などと慌て続けたりはしない……………多分。

「はわわ。えっと、私は諸葛亮でしゅ」

「あわわ。わ、私は…ほと、鳳統でし」

「あう。噛んじゃった……………」

「うう。私も……………」

「……………」

森暮らしで、あまり人と話したことがなかった劉焰だが、自己紹介で自分の名を噛んだ人は初めてだった。

ある意味凄いと劉焯は思った。

「私たちが早く帰ってこれたのは、朔くんが私たちが退治する筈だった盗賊を一人で倒したからなんだよ」

「え？ でも、報告で盗賊は300人はいたはずですよ」

「そう。軍隊崩れがね」

劉焯の言葉に、孔明と鳳統は大きく眼を見開いた。

「どうして、そこまで……」

「盗賊にしては動きに統率感があったし、戦闘技術高過ぎ。だから、用心して護衛に将を2人もつけたんじゃないの」

「……その通りです」

「すっごーい。教えてなかったのに、朔くんは気付いてたんだ」

ばちばち、と劉備は感心したように拍手した。

「劉焯くん」

「何？ えっと、はわわさん」

「諸葛亮ですよ！」

「ごめんごめん」

「もう……では、私たちの真名を貴方に預けます」

「いいの？ 初対面の新参者なんか」

「はい。劉焯くんは高い洞察力があるようですし。それにここでは、これが普通なんです」

さらっと言う孔明。

主のお人好し効果が、と劉焯は思う。そういう自分も嫌いではないのだが。

「私の真名は、朱里です」

「あの、私は、雛里……」

「朱里に、雛里ね。僕の真名は朔だよ」

改めてよろしく、と劉焯は孔明と鳳統に笑みを浮かべ、

「そっちの柱に隠れてる人は、名前を教えてくださいなのかな」

彼女らの背にある柱に一瞥いちへつをくれた。

すると、柱の陰から青い髪の少女が現れた。

「気配を完全に消していたのだが、よく気付いた。久しいな、小鬼」

「自分を殺しに来た奴の気配を忘れるもんか、常山の昇り竜」

青い髪の少女が浮かべる不敵な笑みに、劉焯は目を細める。  
自然と互いの得物に手が伸びる。

「また殺り合いたいのか？ 僕は遠慮するけど」

「また逃げる気か。だが、今度は逃がさん」

殺気だった二人の気配が玉座の間に満ちていく。

知謀に長けた孔明と鳳統には武の才は無い。劉備も全くといっていい程に無い為、武に長けた二人を簡単には止められない。

「星ちゃん、朔くんのこと知ってるの？」

筈のだが、劉備の呑気な質問がその空気に輝ひびを入れ、

「すっごい偶然だね」

と彼女の満面の笑みが見事に粉碎した。

「……………やめる」

「そつだな」

劉焯と青い髪の少女は得物から手を離すと、同時に肩を竦めた。

「趙雲だったっけ？」

「む？ 私の名を覚えていたのか。だが、あの時のお前は名が無いと言っていた。だというに、今は名がある。何故だ？」

「名を北郷一刀様に頂いて、今日から仕えさせて貰ってる」

「なるほど」

「二人してひどいんだ……」

劉備は質問を無視されたと思っっているのか、少し不貞腐れていた。

「桃香様、私は放浪中にこ奴がいた森に訪れたことがあるのです」

「村人に僕を殺してくれって頼まれてね」

「え！？ 星ちゃんって朔くんを殺そうとしたの!？」

「昔のことです。鬼退治を依頼された私はこ奴と対峙したのですが、刃を数合交えただけで逃げられました」

「だって、面倒だし」

忌ま忌ましそくに語る趙雲とは逆に、劉焯は半眼で本当に面倒くさそうだった。

「桃香様、こやつを登用するのですか？」

「そうだよ。星ちゃんは賛成してくれる？」

「はい。私は刃も交えておりますし、こ奴の武は認めています」

「認めてるなら、名前で呼んでよ」

「ほう。随分と新しき名を気に入ったようだな。私の真名は星だ。お主は……」

「朔」

「朔だな。では、決着をつけよう」

唐突な趙雲の物言いに、劉焯は眉をしか顰めた。

「何故？」

「あのような終わり方など、あつていい筈なかるう」

ニヤリッ、と口許を吊り上げ、趙雲は劉焯の首根っこを掴むと、意気揚々と歩き出す。

「僕の意志は!？」

「さてな。登用初日に趙子竜の鍛練を受けられるのだ、光栄に思え  
いやだー!と抵抗するも劉焯はズルズルと引きずられていく。

「ちょっと、桃香様も止めてよ!」

「ごめんね。私たち、お仕事があるから」

「ごめんなさい、朔くん」

「あの……頑張った」

「なっ……」

「万策尽きたか？ 諦めろ、朔よ」

「……最悪だ」

ぼそりと呟くと、劉焯は肩を落とした。

趙雲との鍛練という名の死合もどきを終えてみれば、夕方どころか夜になっていた。そんなこんなで劉焯は肩を落としながら暗い廊下を歩いていた。

仕官早々殺されるかける自分の薄幸ぶりに苦笑いさえ浮かぶ。

とぼとぼと歩いていると、扉の向こうに人の気配がした。

「11の部屋は……」

ゆっくりと扉を開くと、そこには真剣な表情で政務に励む一刀の姿



があった。

彼の机の上には山のような書類が詰まっていた。

夜の闇も深くなる刻限だ。これだけの量をこなしては、朝を迎えてしまうのではないだろうか。

「主上」

「ん？ ああ、朔か」

「山の中歩き回っただけでも大変だったのに、こんな時間まで書類仕事だなんて。体、壊すよ」

「ん……でも、俺にはこんなことくらいしかできないんだ。だから、頑張らなきゃな」

「こんなこと？ 山のような書類片付けてるのに、こんなことって程度じゃないと思うけど」

「朔、俺はさ、天の御遣いなんて呼ばれてるけど、実際はただの人なんだよ。」

桃香や愛紗の理想に共感して、協力したくて神輿になった。だけど、神輿になって終わりだなんて嫌なんだ。

武も知略も無い俺は彼女たちの力になれない。それどころか重石おもしになってるかもしれないけど、少しでも役に立ちたい」

「お人好し」

真摯に語る一刀に劉焯は言った。

「やっぱり、朔も甘い考えだと思っつか？」

「甘いね」

「ガクッ。面と向かって言われるときついな」

「でも、いい甘さだよ。できないことを無理してやるうとするより、ずっといい。」

自分が出来ないことで、主上が愛紗や朱里を頼るのは正しいと思う。だって、主上が信頼してくれてるんだって感じられる」

だから、次から僕にも頼ってよ。

そう言うと、劉焯は踵を返した。

「朔、一ついいかな？」

「何？」

「朔が住んでた森にいた盗賊、どうして倒そうと思ったんだ？」

「森を荒らされなくなかったから」

「本当に？」

「本当に」

そっか、と一刀は頷くと、

「朔には言っでなかったけど、実はさ、あの森の近くにいた邑の人から鬼を退治してほしいって言われたんだ」

その言葉に劉焯は特に驚きもしなかった。自分を殺しにきた奴など少なくともなかったのだ。

「けど、一人だけ反対していた女の子がいたんだ。あの鬼は悪い鬼じゃないって、ずっと訴えてた」

気になった一刀は、その少女にどうして反対するのか聞いた。

すると、少女は首飾りを見せて答えた。

鬼が願いを叶えてくれたのだと。

少女の母親は盗賊に襲われて殺された。その時に母親が大切にしていた首飾りも奪われた。

それには、少女の母との思い出が詰まっていた。だから、どうしても取り返したかった。

その思いが頂点に達した時、彼女の足は鬼が住む森を目指していた。着いた頃には日も落ち、辺りは暗闇がひしめき合っていた。

普段なら怖がるだろう暗闇は、逆に少女の精神を高ぶらせ、想いの

丈を叫ばせる。

「私の命をあげるから、お母さんの首飾りを取り返して」

そう何度も叫ぶと突然、

「莫迦か、君は」

少女は罵倒された。

「こんな物騒な場所に子供一人でくるなんて」

何処からか聞こえてくる声は、思ったよりも幼く、そして呆れていた。

「鬼、さんですか？」

「ああ、鬼だよ。君は死にに來たの？ 盜賊がこの近くににいるのに大声で叫んで」

「鬼さんにお願ひがあるの」

「首飾りを取り返してほしい、ってやつ？ それは自分の命を捨てるまでの事なの？」

少女はゆっくりと、確かに頷いた。

鬼はしばらく黙り込むと、一つ盛大な溜息をついた。

「いいよ。取り返してやる。明日の朝、ここに置いておくから取り

にきなよ。ただし、君の命はいらぬから今すぐ帰れ。それが条件だよ」

それきり、鬼は何も話さなくなり、少女も急いで邑に帰った。

そして、翌朝。小鬼と話した場所に来ると、母の首飾りが木の枝にかけてあり、書き置きがあつた。

鬼に頼るな、莫迦。

少女はそれを抱きしめながら笑つて、そして泣いて喜んだ。

だから、少女は反対した。

大切な首飾りを取り返してくれた鬼は、絶対悪い鬼なんかじゃないと信じていた。

「なんて事があつたそうだから、きっと朔の仕業だと思つただけだよ」

一刀はやたらとにこやかに笑つて劉焯を見た。その笑みに劉焯は眉を顰めた。

「僕じゃない鬼がやつたんだよ」

「ふーん」

「本当だよ」

「そうかあ？」

「そつだよ！」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……はい。僕が取り返しました」

遂に劉焯は根負けし、白状した。

「最初は無視するつもりだった。でも、その子、本当に必死に叫んでた。だから、どれだけ大切か凄く伝わってきたんだ」

気付いたら、話しかけていた。

自分には3年以上前の記憶が無い。その失った記憶中には、いたであろつ家族も含まれる筈だ。

だから、親の姿も知らず、思い出さえない。かといって、思い出したいと強く望んでいる訳でもない。

「羨ましいっていうのは違うけど、自分には無いからなのかな、その思い出を大切にしてほしいって思ったんだ」

「朔……」

「僕もこれからあの子みたいに思い出をつくってくよ。主上や桃香様の許で」

「ご主人様、お茶貰ってきたよ」

お盆にお茶一式を乗せ、桃香は執務室に入って来たが、彼女はすぐに首を傾げた。

「一刀が神妙な顔つきだったからだ。」

「ご主人様？」

「……あ、桃香」

「考え事してたの？」

「考え事って程じゃないよ。今まで朔がいたんだ。俺達と一緒に大切な思い出をつくるんだってさ」

「朔くん、ここを気に入ってくれるかな」

「最初は難しいかも。あいつ、あの変わった眼のせいで人から疎まれてた。」

あの森とは比べられないくらい人の多い所に連れてきたんだ、前よりもそうだった眼で見られるかもしれない」

「なら、私達で朔くんを守らなきゃ」

うん、と劉備は意気込む。

その劉備らしい言葉に一刀は頬を緩ませ、頷いた。

「そうだな。朔が街の皆に認めてもらえるまで、俺達で守ろう」

「私、朔くんともっと仲良くなりたい。そして、もっとこの街を好きになってほしいな」

「きっと大丈夫だ。朔はきっと好きになってくれる」

一刀は手元にある書類に劉焯の名を書き、はっきりと断言した。



## 鬼と御役目（前書き）

なんかしっくりとこないので、何度も書き直してたら、一ヶ月も間が空いちやいました。

やっつけ気味なので、すいません

## 鬼と御役目

自然と眼が覚める。

「誰だよ……」

誰かがこの部屋に近づいて来るのを察知し、劉焯は頭を掻きながら起きた。

まともな寝台で寝たことがなかった為に、眠りは深くなるどころか浅くなってしまい、睡眠不足特有の鈍い頭痛がした。

気分は良いとは言えない。

コンコン、と扉をノックする音が聞こえ、

「朔、起きているか？」

関羽が入って来た。

「愛紗？ おはよう」

「おはよう、朔。では、出かけるぞ。準備しろ」

入って来るなりそんなことを言う関羽に、劉焯は怪訝な眼を向けた。

「なんの？」

「お前の日用品を買いにだ」

「……愛紗にお任せする。おやすみ」

興味が無いとばかりに再び眠ろうとする劉焯。それを関羽が見逃す筈もなく、

「寝るな」

素早く抱き上げた。

彼くらいの年頃なら、これを恥ずかしがり、嫌がるだろうと関羽は考えたのだ。

「愛紗、暖かい……」

だが、劉焯の方が一枚上手だった。

抱き着き、犬猫のようにすりすりする劉焯に関羽は呆れた溜息をついた。

「……このまま連れていくか」

仕方がない、と関羽は劉焯を抱き上げたまま部屋を出て行った。

「なんで顔が赤いの？」

「うるさい」

劉焯が訊くと、関羽はぶいっと顔を背けた。

劉焯は寝ていたから知らないが、彼を抱き上げたまま街を歩いた関羽は街の民に何度も話し掛けられた。

「関將軍、お子さんがいたんですか！？」

「お相手は誰で！？ やつぱり御遣い様ですかい！？」

などと大声で話されたせいで、子持ち疑惑はすぐに街中に広がり、行く先々で親子発言をされたのだ。

「いや、嫌ではないのだ。寧ろ嬉しいというか、だが恥ずかしいというか」

「愛紗？」

「いや、待て。もしか私は他人から見て、子がいてもおかしくないように見えるのだろうか？」

「愛紗」

「いたっ」

中々自分の世界から戻ってこない関羽に劉焯は痺れをきらし、彼女のポニーテールを引っ張った。

「何をする！？ 首がグキツとなったではないか！」

「それは謝る。けど僕、何処に行くか聞いてないんだけど」

「ああ、そうだったな。まずは服屋だな」

「なら、僕は外で待ってるよ」

「何を言ってる。今日はお前の物を買うと言っただろ。いつまでもそのようなボロを着られては、他の者達の士気に関わる」

「えー……」

「あと、その伸び放題の髪も切るぞ」

思わず劉焯はその足を止めた。

「どうしてぞ？」

「戸惑うのも無理はないか。これはご主人様の御意向だ。

その眼をいつまでも隠し続けるのは無理だ。ならば、その鬼眼を持つ少年をこの街の民に早く認めてもらいたいのだ」

「こんな気持ち悪い眼を持つ奴、認めてくれる筈ないよ……」

「最初から諦めてはダメだ。現にご主人様を初めとして、私達はお

前を受け入れている」

関羽は劉焰の頭を撫で、

「だから、まずお前が民を受け入れるのだ。そして、急がなくていいから、徐々に受け入れてもらっていいこう」

母か、姉のように慈愛に満ちた笑みを浮かべた。

だが、劉焰は迷っていた。

人とは異なる眼は、確実に疎<sup>うと</sup>まれる原因だった。だから、劉焰は人とは極力触れ合わないようにした。

それでも、人は彼を疎み、鬼と呼び殺そうとした。

その過去が彼を縛り付けている。

だが、もし本当に受け入れてくれたのなら……、一瞬、そんなことを考えてしまう。

（甘い考えだ）

頭を振り、そんな考えを振り払う。

「愛紗、僕は主上の意向には従わない」

関羽はその言葉を黙って聞き、その続きを待った。

「他人と触れ合うのは、必要最低限でいい。受け入れるのも」

「最低限というのは、私達のことか？」

「他に誰がいるのさ」

「だとしても、ここはお前が住んでいた森ではない。多くの民が暮らし、生きているのだ。係わり合わずにいられることなど出来る筈もないだろう」

「“鬼は隠”だよ？」

「言い訳するな」

関羽は、はあ、と小さく溜息をつき、困ったような表情を浮かべた。

さすがにそんな表情をされては、劉焯とて心苦しい。

「解った、解ったから。……主上の意向はきっかけにするよ。

この街の人達に受け入れてもらうには、僕自身の意志で行動を起こさなきゃダメだと思っから」

不承不承ながら劉焯は言った。

それでも関羽にとっては満足な答えだったらしく、

「そうか。それならば、私は何も言わない。頑張るんだぞ」

「うん」

「では予定を変更して、まず髪を切ろう」

「心の準備時間をください!」

数刻後、玉座の間には一刀に劉備、張飛や孔明といった将が集まっていた。

「本当にいいんですか？」

そう一刀に訊くのは、孔明だ。いまひとつ納得していない、そんな顔をしている。

「もう決めたことだろ？ 桃香も星だつて賛成してくれたし、朱里も賛成してくれたじゃないか」

「はい。このことで更にご主人様の勇名は上がり、多くの人達の耳に届くことでしょう。」

ですが、反面、今以上に躍起になって天の御遣いを狙う輩も増えることになるんですよ」



「その為の朔だろ」

一刀は孔明の頭に手を置き、

「大丈夫だ。朔はきつと役目をきちんと果たしてくれる。それにさ、しばらくはあいつの事を近くで見守りたいんだ」

子供を諭すように言った。

「……………なんだか丸め込まれた気がします」

「え？」

何でもありません、と孔明はぷいっとそっぽを向いた。

そんな孔明の態度に一刀が首を傾げていると、劉備と鳳統が飛び込んできた。

「ご主人様、朔くんの用意が終わったよ！」

「……………愛紗さんと朔くんは、外で控えています」

「じゃあ、呼んでくれるかな」

鳳統は一刀の言葉に頷くと、すぐに関羽達を呼んだ。

「失礼します」

「劉焰翔刃、来ました」

凜とした声が玉座に響き、関羽と軍服を着た劉焯が入って来た。

伸び放題だった緋色の髪はバツサリと切られ、前髪で隠していた鬼眼も今ではしっかりと出ていた。

服も黒で統一し、動きの邪魔にならないように体格に合わせた比較的ピッタリとした物。黒白の双剣は交差するように後ろ腰に提げていた。

かなり軽装なその姿から、一刀は忍者チックだなと思った。

「で、どんな呼ばれたか教えてほしいんだけどさ？」

玉座の間にいる面々を見て、劉焯は訝しみながら訊いた。

それもそうだが、劉備に仕える主要人物が全て集まっているのだから。

「簡単にだけど、朔の叙任式をと思ってね」

一刀が答えるが、劉焯は更に訝しげな顔をした。

「叙任？ 何のさ？」

「お前のに決まっているだろう」

関羽が呆れたばかりに言った。

「もしま、一兵卒として戦場に赴くと思っていたのか？」

「違うの？」

「違う。お前には武将として戦ってもらおう。でなければ、軍資金を使ってまで朔の装備をこんなにも整えたりしない」

「随分な期待だね。精神的圧迫で死んじゃうかも」

「どの口がそんな戯言をほざく」

などと飄々と軽口を叩く劉焯に、関羽は軽く頭を抱えた。

「朔くん」

孔明に呼ばれ振り向くと、彼女は真剣な表情していた。

「朔くんに任せる役目は、私達のこれからを左右するものです」

「うわーい、一言目からかなり重〜い……」

「今日これから、劉焯翔刃くんにはご主人様の専任護衛役を務めてもらいます」

「護衛？ 僕が？ 新参者の僕が？」

「ああ、朔にお願いしたいんだ」

「主上、ダメだよ。それじゃ愛紗や鈴々の立場がない」

劉焯は首を頑なに横に振った。

森で一合とはいえ、関羽と張飛とは刃を交え、趙雲とは模擬試合を

しているのだ。

彼女らの強さなら、自分が護衛役である必要性はない筈だ。

「朔、一つ誤解しているぞ」

関羽は劉焰の両肩に手を置き、優しく微笑んだ。

「鈴々も星も、もちろん私もお前なら護衛役を任せてもいいと思っている」

「そんな簡単に決めていいの？」

「簡単に決めてなどいない。私達だって短い時間だが、悩みに悩み抜いた結果出した答えだ」

「朔は、なんだかお兄ちゃんとお姉ちゃんに似てるところがあるのだ」

「僕はお人好しじゃないよ」

「ほう。ある少女の願いを叶える為に、盗賊を討った奴がお人好しでないとても？」

「なっ」

ニヤリッと笑う趙雲の言葉に、劉焰は言葉を失った。

何故、それを？

直ぐさま、一刀を見るが話してないと首を横に振った。

「風の噂で少しな」

(まさか、盗み聞き!?)

劉焯が気恥ずかしさに震えていると、劉備は屈かがんで目線を合わせてきた。

「朔くんは違うつて言うかもしれないけど、君はとっても優しい子だよ。誰かの為に戦えるんだから」

「そんなお前だからこそ、この役を任せようと思ったのだ」

「水を差すようですみませんが、朔くんには辛い役目を負ってもらう事になるのに変わりありません」

申し訳なさそうに言う孔明の言葉を鳳統が引き継ぐ。

「……朔くんには、護衛役となると同時に鬼を自称してもらいます」

「鬼を？」

「……天の御遣いの傍には、彼の徳に打たれ、守護する戦鬼がいると噂を流します。」

鬼とは本来忌避すべき存在。それに守られているご主人様を敵は恐れるでしょう」

「つまり、鬼さえ従えてみせる主上は凄いだろ、って思わせると」

「……はい、そうです。だから、朔くんには」

「人である事を辞めてもらうのだ」

今度は鳳統の言葉を遮るように、趙雲が言った。

「主を守るのが鬼だという噂には、まだ根も葉も無い。ならば、その種を植え、芽を出さねばならん」

「その芽を出す手初めは、僕が人であることを辞める、ね。………  
…今更だよ」

劉焯はそんな事とばかりに言う。

「鬼を自称するなんてこと、前からやってる。それが一地域から国中に広まるごと、僕にとって大差ないよ」

「だが、今以上に人々に疎まれるかもしれないのだぞ」

「それこそ今更だよ、星。僕は自分を受け入れてくれる人がいる事を嬉しく思うけど、無理に受け入れてもらおうとは思わない」

「ほう」

「所詮、僕らは他者の犠牲の上に立っているんだ。民に向けられる感情は羨望や信頼とは限らない。憎悪や怨嗟かもしれない。

星だって自分を憎む相手に己を受け入れる、なんて言わないでし

「よ

疎まれる事も憎まれる事も同じと考える劉焯の答えを聞き、趙雲は更に訊いた。

「ならば、お前はこの先どうするのだ？」

決まってる。

劉焯はそう呟き、

「僕は主上に頂いた名の通り、誰もが笑って暮らせる世への道を切り開くだけだ」

断言した。

「……これは参った」

趙雲はくすりと小さく笑い、一刀を見た。

「主の言う通りでしたな」

「言っただろう？ 朔は簡単に揺るがないって」

どうだ、と一刀は勝ち誇った顔をし、にかつと笑った。それを劉焯は訝しんだ。

「主上？」

「朔、実はな、星と勝負してたんだ。お前が人の温かさに触れて、日和るかどうか」

「朔が鬼となる決断を一瞬でも躊躇えば、私の勝ちという有利な条件での勝負だったのだが。お前は一瞬も迷わず決断した。完全に私の負けだ」

「これで2つ目の条件も解決だ」

「……まだ何か企んでるの？」

「企み、というより希望だな。俺個人の」

「護衛役も十分に主上の希望じゃん」

「まあね。けど、こっちは断ってもいいぞ」

未だ怪訝な目で見てくる劉焯に対し、一刀は一度咳払いをすると、衝撃的な一言を口にした。

「朔、俺と家族にならないか？」



## 鬼と御役目（後書き）

恐らく、この次の話もやっつけ気味です

感想など、お願いします

## 鬼と家族（前書き）

ほぼ月1更新となってしまうました、はい。

前回のあとがきで予告？した通りやっつけです、はい。

## 鬼と家族

「朔、俺と家族にならないか？」

その一言に劉焯は理解が少し、いや、かなり遅れた。

「えっと……家族？」

「本当の、にはなれないけど、愛紗と鈴々みたいな義姉妹みたくにはなれる。だから、親とか兄貴になれたらいいなって思ったんだ」

そう言っつて照れ臭そうに、一刀は笑った。

家族。

森に住んでいた頃、実は家族に近い存在はいた。だが、それは家族とも仲間とも呼ぶには程遠いものだ。劉焯は感じていた。

事実、その人達は劉焯の前から突然消えた。

元より、一緒に居る理由もなかったのかもしれない。劉焯はただその人達が消えた事を何とも思わなかった。

だが、今は自分と近しい者達が出来た。その者達が更に近しい存在になる。

「家族……」

もう一度、呟く。

心に温かいものが広がると同時に、冷え冷えとしたものが流れ、それさえも凍り付けようとする。

もし、また去られたら……

そんな考えが脳裏を過ぎり、心が凍えた。

「……………鬼の僕を家族にしてどうするのさ。一の家臣として扱えばいいじゃないか。それしか利用価値がないんだから」

劉焯は言葉を細ながら、拳を強く握り締めた。まるで痛みを耐えるかのようだ。

「本当にそう思ってるのか？」

「そう…だよ……………」

「そうか。それなら、俺の答えは」

一刀は一度言葉を切ると、言った。

「　　そんなの絶対にごめんだー！」

一刀の突然張り上げた声に劉焯は驚き、劉備達でさえ一瞬たじろいだ。

「しゅ、主上……？」

「俺は家臣が欲しくて、お前を登用したんじゃない。仲間になってほしいから、一緒に頑張つて桃香の理想を実現していきたいと思つたから、仲間に誘つたんだ。」

利用し、利用される関係なんて求めちゃいない」

「え……あ……」

「“利用”なんて言葉は、仲間に対して使う言葉でも行為でもない。」

だから、俺は　　俺達はこう言うんだ。力を貸してほしい、協力しようってね」

一刀の言葉に、劉焯は関羽に仲間に誘われた時を思い出した。

我らには大望がある。皆が笑って平和に暮らせる世の中をつくりたいのだ。それにお前の力を貸してほしい。

確かに言っていた。

関羽は自分の力を貸してほしいと願った。

その時の彼女に自分を利用しようなどという考えがあっただろうか？

(……………ない。ある筈がない)

己の主を守ろうと人一倍頑張る頑固者そうな彼女。そんな彼女のまっすぐな性根は、利用の2文字になど結び付かないだろう。

「それにさ、お前の事、なんだか放っておけないんだ。だから、あんな森で独りになんてしたくなかった。家族として朔の居場所にもなっけてやりたかったんだ」

何故、この人はここまで人に優しくなれるのだろうか。

何故、この人はこんなにも他人の事を想えるのだろうか。

劉焯は不思議で堪<sup>たま</sup>らない。

「さ、朔……………？」

一刀が突然うるたえだした。気が付けば、劉備達も驚いていた。

「朔くん……………泣いてるの？」

「え？」

劉備に言われ、初めて気付いた。

頬を濡らす、一筋の涙に。

「あれ？　なんでだろ？」

拭っても拭っても、涙は止まらない。

「ダメだね、僕。悲しくもないのに……泣いちゃってる。男……なの  
にさ」

声までも震えてきた。

「泣いていいんだよ、それはきつと嬉し涙だから」

「嬉し……涙？」

劉備は優しく劉焰を抱きしめる。

「朔くんは長い間独りでいたんだよね。それはきつと辛くて、とても寂しいものだったと思うの。私だったら耐えられなくて、すつとく泣いちゃうかも」

「寂しいなんて……思った事ないよ」

「朔くんは、ね。でも、朔くんの心はそうじゃなかったんだよ。私達とで出会って、仲間になって、人の温かさに触れられて、それが嬉しくて、寂しさが涙に溶けて流れていってるんだよ。」

朔くん、今悲しくないんだよね？」

「悲しくなんて、絶対ない」

「だったら、それはきつと嬉し涙だよ。だから、泣いていいんだよ、寂しさを流しきらなきゃ」

「うっ…うわあああああ」

劉焯は泣いた。

涙は関を切ったように流れ出し、声も抑える事などできなかった。

今、凍り付いた心の中でひしめく気持ちを劉焯は言葉に出来ない。

ただ、劉備に抱きしめて欲しかった。

誰かと一緒にいるのだと、もう独りではないと実感したいから。

(……………桃香様の言った通りだったんだ)

自分は寂しかったのだと劉焯は理解すると、心の冷たさとひしめきが少しだけ治まった気がした。

(もう独りはヤダよ……………)

劉焯が落ち着くまで、少し時間がかかった。



「落ち着いた？」

「……うん」

劉備の問いに、劉焯は小さく頷いた。

劉焯は赤くなつた眼で一刀を見る。

「……主上は」

「うん？」

「……主上はどこにも行かないよね？」

「え」

劉焯の問いは、強く一刀の心を揺さぶつた。

「主上はいなくなつたりしないよね？」

「朔……」

「主上は僕を見捨てないよね？」

三度目の問いは、ストレートに言った。

一刀は劉焯が家族に近い者たちに突然去られたことを知らない。

「俺は、朔の前からいなくなつたりも見捨てたりもしない」

だが、それを知っていようと彼の答えは変わらないだろう。

「俺は朔を独りにしない。絶対に」

力強く断言すると、一刀は劉焯を抱き上げ、

「それにさ、朔はもう独りになりたくてもなれないぞ」

「？」

「だってさ、朔には仲間が出来た。家族も望めばできる。加えて、その仲間は中々のお節介焼きだからな」

「そのお節介焼きの筆頭は、ご主人様ではないですか」

「その上、大変なお人好しの筆頭でもあるな」

ニカツと笑う一刀に関羽が半眼でツツコミ、趙雲が重ねてきた。

「うぐつ……まあ、改めてなんだけど、そんな奴を家族になんてど  
うかな？」

「欲しい。お節介焼きでお人好しな家族が、欲しい」

劉焯は一刀の真似をするように、ニカツと笑って言った。

「よしつ。じゃあ、今から北郷一刀と劉焯翔刃は家族だ」

「うん、家族。でも、家族としての主上は、僕の何に当たるの？」

「あー……どうしようか」

「普通なら義兄でしょうが。主は朔の名付け親。義父で如何か？」

趙雲の一言に、一刀は悩む。

「父親かあ。でも、俺の歳で子持ちって変じゃない？」

「そうですね。主くらいの年頃で子を持つ夫婦は少なくともありませんぞ」

「そっか。この時代ってそういう時代だったな」

時代を遡れば遡る程、人の寿命は短い。医療技術が進歩してるかどうかの問題だけではなく、命を奪い合うような理不尽な終わりも多いのだ。

その短いかもしれない人生で、愛する人と添い遂げたいと思うのは当然の事だろう。

「んじゃ、朔。父親になるって事とでいいかな？」

「主上は、父親？」

「そうだよ、朔くん。さ、お父さんって呼んでみよう！」

劉備が元気に勧めてくるが、劉焯は口をもごもごするだけで中々口にしない。

やがて、意を決したように口を開いた。

「お……お……おと……」

「ん？」

「……お、おとつ……おと、おと」

「もうちよい、もうちよい」

「お！ お………父さん」

「……！ 応」

劉焯は最後尻窄みしたものの、一刀の事を父と呼べた。一刀もそれに応えた。

だが、二人はすぐに互いに顔を反らした。

「………」

「………」

それもそうだ。恥ずかしさの余り、顔が見事に真っ赤に染まっていたのだから。

当然、その場にいた少女達はその様をニヤニヤ　もとい、微笑ましく見ていた。

「にやはは　朔もお兄ちゃんも真っ赤なのだ」

「あう。恥ずかしいものは恥ずかしいんだよ」

「さて、親子の契りを交わしたところで、朔にはやるべき事が増えましたな」

「なんでさ？ 護衛だけが仕事じゃないの？」

「朔くん。養子とはいえご主人様の息子になったという事は、朔くんはご主人様の後継者になったという事なんですよ」

「つまり？」

「……政の勉強まもしなくちゃいけません」

鳳統に現実を突き付けられ、劉焯は肩を落とす。

「政なんて分かんないよ」

「それは学んでくしかなかろう。幸運な事に、我が軍にはそれに長けた人物が二人もいる」

関羽が言いながら視線を向ける先を劉焯は追う。その先には、えへと胸を張る孔明が、恥ずかしそうに帽子を深く被る鳳統がいた。

「はい！ お勉強なら、私と雛里ちゃんに任せてください」

「……微力ながら、じ、尽力させて頂きます」

「雛里？ なんていきなり畏かしこまるような口調に？」

「……だって、朔くん。ご主人様の息子になったから  
全員があっ…、と気付いた。

自分達で言っておきながら忘れていた。

一の将が、まさかの後継者。長い目で見れば、将来の自分の主になるかもしれないのだ。

劉焯に対する接し方を改めるべきなのか劉備達が軽く頭を悩ます中、全く頭を悩ませていない者がいた。

「にゃ？ どうしてみんな悩んでるのだ？」

「さあ？ 僕も知りたい」

「いや、朔は自分の事だろうが」

張飛、劉焯、一刀の三人だった。

一刀はともかく、劉焯と張飛は本気で何を悩んでるか分かっていない。

「朔が俺の息子になって、いきなり偉くなったから、これからどうやって接してこうか考えてるんだよ」

「にゃ？ 朔、偉くなったのだ？」

「まさか。鈴々、僕が偉そうに見える？」

「ううん。朔はいつも通りの朔なのだ」

「だよ、僕は僕だし」

首を傾げる子供二人。一刀は劉焯と張飛が思っている事に感心した。

まあ、よく理解していないからかもしれないが。

「朔、桃香や愛紗に畏まった風に話してほしいか？」

一刀の問いに劉焯は首を横に振る。

「嫌だよ。そもそもこんなガキを敬ってどうすんのさ」

「だってさ。みんな、朔は普通に接してほしいと思ってるんだ。変に態度を変える必要は無いさ」

「そうですね。ならば、今まで通りに接しよう」

いち早く順応した趙雲は話を進める。

「それで主よ、朔には誰を付けるのです？」

「そうだなあ……雛里、お願い出来るかな？」

「あわわ、私ですか！？」

「うん。朱里には悪いけど、俺と桃香の二人を面倒を頼むよ。雛里、何かあったら俺とかに頼ってもらっても構わないから」

「でも……」

「大丈夫、これもいい経験になると思うよ」

一刀に笑顔でこう言われては、鳳統は断れない。

鳳統は諦めたように、……はい、と応えた。

「んじゃ、次はお目付け役。全体的に朔の面倒を見る人は……」

「………何故、私を見るのです？」

最初に一刀、次に劉備、趙雲と続き、皆の視線が関羽に集中する。

「じゃ、全会一致で愛紗に決定」

「何故です!？」

「いや、年頃の近い鈴々の面倒を見てきたんだし、勝手が一番分かってるかなってね」

「なに、朔は鈴々より大人しい　というよりも冷めてるところがある。幾分御し易かるう、母上殿？」

「星!？　貴様　」

「風の噂よ。聞こえたものは仕様がなかるう」

「くづう……」



ニヤニヤ、と音が聞こえてきそうな笑みを浮かべる星を、関羽は唸りながら睨んだ。

だが、最終的には、分かりました……、と鳳統と同じように折れたのだった。

「朔くん。これ、あげる」

劉備は首飾りを取り出すと、劉焔の首にかけた。それには、鳥の羽を象かたどつた水晶が付いていた。

「桃香様、これ……」

「私からお祝いのお守り。朔くんが怪我をしないで、いつも元気でいられますようにって」

「ありがとう、桃香様。大事にする」

劉焔は飛び降りると、一刀達に向き合う。

「僕、劉焔翔刃は此処に再度誓うよ」

双剣を鞘ごと引き抜くと、献上するように掲げた。

「この身、我が双剣の如く戦場を翔ける刃となし、主上が望む世への道を切り開いてみせましょうぞ」

そして、と劉焔は続け、

「我らが主の護衛という大役、確かに拝命しました」

これでいい？、と眼で訊くと、皆が頷いた。

「よし、今日は朔の歓迎会を開くぞ。宴だー！！」

「おーうー！！」

この日、一刀達の夜は長く楽しいものになったのだった。

## 鬼と家族（後書き）

オリジナルの話は、書くの時間がかかりますよね、アハハ。

はい、言い訳です。スイマセン。

オリジナルの話はあと、2、3話続く予定です。一つは拙いですがバトルいれます。

感想、お待ちしております。

鬼のちよつとした一日(前書き)

やっつけ話第三段です。

## 鬼のちよつとした一日

劉焯が劉備陣営に加わり、数日が過ぎた。

この数日、劉焯は森にいた時とは全く違う生活を楽しんでいた。

そんな劉焯は部屋に籠り、眉間に皺を寄せ、手に取った筆を一心不乱に動かしていた。

「……………出来た。雛里、見てよ」

「書き直しです」

「えええ……………」

書き終えた竹簡を見せた途端、先生役である鳳統はぱっさりと切った。

「……………誤字が14ヶ所、脱字が11ヶ所。最初からやり直そ」

「9回目の書き直し……………」

うだー、と机に劉焯は寝そべった。

劉焯は今、読み書きの練習中なのだ。

ある一件により、鳳統は劉焯がある程度読み書きが出来るのは知っていた。

が、

(使わなきゃ忘れちゃうよね)

忘れてしまった字も多く、覚えていても間違えているといった事がほとんどだった。

つまり、政以前に一から勉強し直さなくてはいけないのだ。

「朔くん。いつまでも休んでたら終わらないよ」

「書いても終わりません……」

「そんな事言わないで」

「うだー」

うだーを続行中な劉焯の態度に鳳統は肩を落とす。

これで何回目のうだーだろうか。鳳統は通算で15回目までは覚えているが、そこから数えるのは止めた。

この少年が読み書きは嫌いではないのは、すぐに分かった。

だが、好きという訳でもない。興味が比較的薄いのだろう。

集中力は武術も学んでいる為が高く、持続時間も長い。やり始めたから、一気にやり遂げてしまう。

まあ、誤字脱字も少なくはないのだが。

「……朔くん。頑張ろうよ」

「うだー」

「……うう、朔くん……」

「うー!? だー……」

劉焯は困り果てた鳳統を見た途端、表面には出さずに内心慌てだす。

鳳統の眼に涙が溜まり始めていたのだ。

「……っ」

やばい。

その一言が彼の頭の中を占拠する。

政策軍策に問わず長けた頭脳を持つ鳳土元という少女の性格は、とても内気で、とても恥ずかしがり。

そして、気が弱い。

劉焯にとって相手が悪いタイプだったりする。

今も泣きそうな鳳統を前に、頭の中は警鐘が鳴りっぱなしだ。

もうとるべき行動は、ひとつしかない。

「雛里先生、出来ました!!!」

ソッコーで終わらせ、鳳統に提出。

今度は間違いが無いのか、鳳統は笑顔になる。劉焯はホッと胸を撫で下ろし、次に取り掛かった。

「……そういえば、朔くん。字は誰に習ったの？」

「んー……誰ってそりゃ」

「  
師匠」

「え……朔くんの先生？」

「そ。師匠が僕に読み書きを教えてくれた。って言っても少しだけだけ」

「……そうなんだ」

「そうなんですよっと。はい、これで課題終了。で、何が知りたい？」



筆を置くと、劉焯は鳳統の方に向き直った。

この少女が何か迷っている顔をしているからだ。聞きたい事があるが、それが自分にとって愉快ではない質問かもしれないと気付き、決断できないのだろう。

だから、劉焯は促した。

「どんな先生だった？」

「生き残り方を叩き込むのが上手な人だったと思う。だから、僕は今まで生きてこれたんだし」

「尊敬してるんだね」

「尊敬はしてない。憧れてもないし、好いても嫌っても、ましてや憎んでもない」

「……ないない尽くしです」

「正直、わかんない」

「……最後までない、なんだね」

がくつ、と鳳統は肩を竦めた。劉焯はまだ首を傾げているが、きつと答えは出ないだろう。首の角度が45°から90°に入ろうとしているから。

「まあ、いいや。前置きは終わった？」

その一言に鳳統はびくり、と体を震わせた。

また見透かされた。軍師としては失格かもしれないが、今は内気な彼女にとっては助け舟だ。

だから、鳳統は一番の疑問を口にした。

「……朔くんは先生と森で住んでたんだよね？ どうして一緒に来なかったの？」

「ああ、言っていなかったわけ。師匠はいなくなっただよ、突然」

「……いなくなった？」

「そつ。唯一の兄弟子を連れてね」

「寂しくなかった？」

「寂しいって感情を知ったのが最近だからね、その時は何も思わなかった」

劉焯は静かに立ち上がり、

「これから先も、僕はあの時を寂しかったとは思わないよ」

そう言って劉焯は部屋を出ていった。

「……………それは嘘だよ」

部屋に独り残った鳳統は、ぽつりと呟いた。

寂しかったとは思わない。

それはきつともう無理だろう。

知ってしまったから。

気付いてしまったから。

もう心の傷は、無視出来ない。

(だから、隠せなかったんだよね?)

一瞬といえども、悲しみの色が彼の眼には表れていたのを鳳統は見逃さなかった。

「……………私は何が出来るのかな」

知謀に長けた彼女でも、その零した言葉の答えは中々出てこなかったのだった。

劉焯は警邏が嫌いだ。

主の護衛が自分の仕事。その主が直々に城下街を視察するのだから、  
付いていくのは当然であり、仕方ない事なのだ。

そう割り切り切りたいのは山々なのだが、どうしても好きになれない。  
納得いかない。

「これのどこが警邏なのさ」

呆れながらぼやく劉焔の視線の先には、どうしようもなく善良で善  
人徳有で人格者でお人好しな彼の2人の主がいる。

というか、子供と一緒にあって鬼ごっこしている。

「街で一番偉い人が何してんのさ」

と、劉焔が過去にツッコんだのは言うまでもなく、

「子供達と遊ぶのも大切な事なんだよ」

と善良な笑みで劉備に返されたのも言うまでもない。

そして現在、

「……………」

何も言わず放置中。

関羽曰く、

「ああいうものだと思え」

それは言っても無駄だから諦める、と劉焯には聞こえた。

だから、劉焯は一刀と劉備が遊んでいるのを、いつも彼らの近くの店の屋根から眺めていた。

楽しそうだ。いや、実際楽しいのだろう。

でなければ、子供は笑顔でいられない。

子供の笑みに影響されたか、その光景を見た大人さえ笑みを浮かべている。

誰もが笑顔でいられる世界。

それが主の理想で、実現したい願い。

(ここ限定でなら、実現してるのかな)

ぼんやりとそんなことを考えていると、視線を感じた。

男の子が一人、下からこちらをじっと見ていた。

またか、と劉焯は思う。遊びに夢中になってる子供達の邪魔にならない。視界に入らない。ように、わざわざ屋根にいるというの

に何かの拍子に気付かれるのだ。

「……………」

「……………」

劉焯も気付いた男の子も何も言葉を発しない。

ただただ見合い続ける。

それに気付いた他の子供達も遊ぶのを止め、見上げて来た。

視線が一気に増え、劉焯は辟易しながら立ち上がると、その場を去ろうと歩き出した。

「朔——！ 何処に行くんだー？」

「散歩」

女の子を肩車している一刀の問いに劉焯は後ろ手に振りながら答えた。

とは答えたものの、行く宛ての無い筈の散歩なのに、劉焯の足は進んで行く。

着いた先は、ラーメン屋。

開いているのを確認して店に入る。すると、陽気そつなおばちゃんが出て来た。

「いらつしゃい!! あら、翔刃ちゃんじゃないかい」

「こんにちは、おばちゃん。また来たよ」

劉焯がまた、というのには理由がある。

劉焯を字で呼ぶこの女性は、このラーメン屋の店主であり、今のところ唯一民の中で心安い存在なのだ。

何せ、劉焯の第一印象を「随分と毛色が変わった子だね」と語り、普通の子供同様に扱った。

そして、後から劉焯が劉備に仕える武将の一人だと知っても、「あらあら、そりやすまなかつたね」と全然悪びれず、笑いながら謝った。

この店主の性格を呆れながらも劉焯は気に入り、以来警邏もどきの合間に訪れている。

「翔刃ちゃんが来たって事は、劉備様と御遣い様は子供達と遊んでるのかい」

「そうだよ。まあ、部屋に籠りきりで仕事してたから気分転換にはいいでしょ。つてな訳で、ラーメンお願い」

「あいよ。でも、離れてていいのかい? “一応”護衛なんだろう」

「大丈夫。僕って“一応”護衛だから、もう一人ちゃんとした護衛付いてるから」

殊更に一応を強調する店主に、劉焯も強調して返した。だから、いいんだよ的に。

「そうかい。翔刃ちゃんがそう言うんなら、あたしや何も言わないよ。大事なお客様だしねえ」

「そうそう、お客様は大事にしなきゃね」

「はい、お待ち。よく噛んでゆっくり食べな」

「いただきます！」

「……ところで翔刃ちゃん。もう一人の護衛ってのは、関將軍かい？」

「よく分かったね」

「そりゃ分かるさ」

「……っ!？」

そう答えた店主は引き攣った笑みを浮かべた。劉焯はその笑みが引き攣るような原因が自分のすぐ後ろにいるのを感じた。

正直、振り返りたくない。

だが、そうは問屋が卸さない。いや、閻魔が強制的に判決を降す、だろうか。

恐る恐る振り返ると、



「　　っ」

金棒よろしく、青龍偃月刀を構えた鬼神然とした関羽がいた。

「お疲れ、愛紗」

労う言葉をかけた瞬間、前髪が数ミリ散った。

「……………」

「職務放棄し食事とは、いい御身分だな、朔よ」

冷たい……。そう劉焯が零してしまいそうなくらい関羽の声は底冷えしている。

「……まだ昼食をとってなかったもので」

「城に戻ってから食べればいいだろう」

「食は生きる上で必要不可欠。ならば、美味しい物を食べたくなるのは道理だよ」

「空腹は最大の調味料というらしいぞ」

「空腹は嫌いだよ。というか調味料って何？」

子供っぽく　事実、子供なのだが　首を傾げる劉焯。それに怒気を抜かれたか、関羽は頭を抱えた。

簡単に説明すると、理解したのか劉焯は何度も頷いていた。

「じゃあ、このラーメンが美味しいのも調味料のおかげ？」

「翔刃ちゃん、それは違うねえ。職人が食材の味を引き出し、調味料の力を最大限に活かしているから美味しいのさ。つまり、あたしの腕が佳いからさ」

「へえ、成る程。じゃあ、おぼちゃんの腕に敬意を表して、いただ

」

「いただくな」

関羽は劉焯の首根っこを掴むとひょい、と持ち上げた。

「悪いな、店主。我らは護衛に戻らねばならん。一口も口にせず、すまないが、この代金は払わせてもらう」

「あー、ラーメンが!?!」

「諦めろ、朔」

「伸びてしまっ!」

「諦める気、皆無だな貴様は!?!」

「ラーメンが僕を呼んでいるんだ!」

「ラーメンは喋らん」

「聞こえるんだ、鬼だから」

「ラーメンと会話する鬼がいるか！ 想像しただけでおかしな構図が出来上がってるぞ！」

「いや、いるよ。最初は交遊を深め、段々と想いを募らせていつて、そしていつか告白するんだ。」

『お前が愛しい。食べてしまいたいくらいに』って

「恋愛に発展してしまっているのか！？ しかも台詞がある意味適切だー！」

「それで、こう返事されるんだよ。」

『ずっとその言葉を待ってました。でも、もう遅いんです』

「何か暗雲立ち込める様子だな」

「『だって、汁を吸ってもう伸びきって、かぴかぴになった麺しかないんだもの』」

「交遊期間が長過ぎたっ！！」

自慢の黒髪を振り乱しながら、ツッコミ続けた関羽は、ゼーはーと息を切らしながら、疲れの原因をジト目で睨んだ。

「で、食べていい？」

「……好きにきなさい」

とどめの一言に疲れきった関羽は折れた。

わーい、と劉焯は彼女の苦勞を知らずに食べ始めた。関羽は劉焯の隣の席に座ると、小さく溜息をついた。

「関將軍、頑張ってくださいな」

「……………うう、店主……………」

差し出された彼女の氣遣いとお茶の温かさが身に染みる。

少しはこういった氣遣いを見習えと視線で説教しようとした途端、関羽は目を大きく見開いた。

「……………店主」

「はい？」

「明日から私も通うかもしれぬ」

「はあ……………お待ちしてます？」

突然の関羽の言葉に、店主は首を傾げながら答えた。

余談だが、劉焯と関羽が二人の主の許に戻ると、

「待て待てー」

「ほら、捕まえたっ  
」

まだ遊んでいたのだった。

## 鬼のちよつとした一日（後書き）

朔と彼の世話係な二人の掛け合いを書いてみました。

愛紗と雛里つてこんなキャラだっけ……？、と書きながらおもってしまいました。はい、二人のファンの方、低頭伏してすいません。次回はバトルにいたらいいな、とか思っています。

感想お待ちしています。

## 鬼、初陣（前書き）

PVが3万を突破してました!!

読んでくださいました方々に、御礼申し上げます。

本当にありがとうございます!!

今回は、バトルやってみました。自信はないので、読み辛かったら  
すいません。

## 鬼、初陣

「盗賊退治？」

「そつだ。得意だろう？」

半眼で劉焯が聞き返すと、趙雲は肯定した。

「得意じゃないよ。というか、主上の護衛が僕の仕事だったと思うんだけど」

「回せる将がおらんだ。主には許可も頂いている。それに鬼の名を世に広める為にも、お前にも出陣してもらわねばな」

「鬼の盗賊退治、ね。面倒だけど、仕方ないか」

「出発は一刻後だ。なに、お前のことだ、心配はいらぬだろうが、無理はするなよ朔」

「了解。天の御遣いを鬼が守ってるってこと、思い知らせてやるよ」



劉焯は命じられた通り、盜賊退治に向かったのだが、

「いすぎでしょう」

遠くから目を凝らし、大群で移動する盜賊を眺めながらぼやいた。

盜賊の数、恐らく3000は下らないだろう。

自分が住んでいた森に来た盜賊のざつと10倍。対して味方は補佐の鳳統が連れてきた1200人。

戦いの基本は、相手よりも多い数で挑むことだという。

簡単に言えば、挑む前から敗戦の色が浮かんでいるのだ。

「報告で、何人って言ってたっけ？」

「……800」

「いや、違い過ぎでしょ。どうしょっか、雛里」

「……敵は領内に潜んでいた黄巾党の残党だから、それ程強くないよ。……けど、バラバラだった残党が、私達の来る前にこんなに多く集まるなんて計算外」

「打開策は？」

「……ここ一帯は遮蔽物が少ない平原。要所も無い上に、兵数が違い過ぎるよ」

「近くに策に使えそうな要所は無いかあ」

仕方ない、と劉焯は双剣を手に取ると、踵かかとを返した。

「雛里、僕があの数減らせれば、勝ち目は出て来るよね？」

「確かに減らせれば、方形陣である程度まで耐えて従深陣へと編成すれば、敵を引き込むように包囲も出来るけど……」

そんなのは無茶だと彼女の眼が物語っていた。

だが、劉焯は引き下がらない。

「いい機会なんだってさ、僕が経験を積むのに。それに主上に誓ったんだよ、主上が望む世への道を切り開いてみせるって」

これは、その最初の一步なのだ。

施してくれた恩を返す為にも、誓いを果たす。

「…朔くん……どうしても一人で行くの？」

「うん。危なくなったら、鳳雛殿の策がきつと僕を助けてくれるって信じてるからね」

「信じてくれるんだ……」

「仲間を信じて助け合うのは、うちの流儀なんですよ？」

そうだね、と鳳統は頷くと、兵の一人を呼び出した。その兵は箱を

持って来ると、劉焯の前に置いて隊列に戻っていった。

箱の中身は漆黒の鎧。そして、焯のように緋い兜だった。

「これは？」

「朔くんの兜と防具。意匠はご主人様が考えてくれた特注品です」

「へえ。主上の美的感覚、中々だねえ」

感心しながら、劉焯は鎧を装着していく。

黒一色に統一された軽鎧、籠手、脛当てといった必要最低限を組み合わせた代物。その為、防具としての能力は低いが、劉焯の動きをまったく邪魔しない。

防御よりも、敏捷性に重視した装備を劉焯は選んだのだった。

「あれ？」

よく見れば、どちらの籠手にも劉備がくれた羽のお守りに似せた模様が施されていた。

「御利益が3倍かな」

そして、最後に劉焯はじつと箱の中の深紅の兜を見つめた。

「ははっ。これは、確かに“鬼”には必要だね」

深紅の兜を被ると、劉焯は口許を吊り上げた。

濛々（もうもう）と土煙が上がる。その量の多さから、それを生み出す人の数がどれだけ多いかなど容易に想像がつくだろう。

彼らは今から悪行をなす。他者を傷つけ、虐げ、奪い、殺す。

そんな大群の前に、ぽつんと人影が一つ現れた。

それに気付いた盗賊たちはその歩を少し緩めた。

近づくごとに人影の形がはっきりしていく。

子供だ。

小さな体に不釣り合いな漆黒の鎧を纏い、腰には二振りの剣を佩はいている。頭には意匠の変わった真紅の兜を被っていた。

その兜には、ちょうど額の辺りからまるで角が生えたように刃が付けられていた。

(……………子供の鬼?)

武装した少年の姿を見た盗賊は、そう思った。

少年は双剣を鞘から抜くと、一直線に大群に向かって駆けた。

莫迦な子供だ、と盗賊は嗤う。

子供が大人に勝つのは容易ではないうえ、たった一人で3000の大群に挑んでくるなど、誰の目から見ても愚行この上ない。

だが、その笑みもすぐに消えた。

鮮やかな赤が宙を舞い、彼らを染めた。

それは仲間の いや、仲間だった者の血。ある者は顔に付いた血のぬめりを信じられないとばかりに手で確かめていた。

そして、彼らは一様に仲間を物言わぬ骸に変えた少年を見た。

「さて、僕はあんたらを倒さなきゃいけないんだけど」

双剣についた血を振り払いながら、少年は言う。

「覚悟、できてる?」

「て、テメエは……………」

「劉焯翔刃。平原の相、劉玄德と天の御遣いに仕えし鬼だ。主の望

む世に、アンタらみたいに悪行を為す人は邪魔なんだ。だから」

喰らうぞ。その命。

宣告直後、劉焯は地を這うように低い姿勢で疾走し、盗賊に肉薄する。

瞬間、彼の姿が消え、衝撃が盗賊を襲った。衝撃は一直線に盗賊の隊列を貫き、それをなぞるように血飛沫が上がった。

疾<sup>はし</sup>る衝撃の終端。そこには地を削りながら、足を止めた劉焯がいた。彼は短く息を吸うと、もう一度疾走した。

劉焯の双剣　黒刃の干将と白刃の莫耶が盗賊の首を撥<sup>は</sup>ねていく。

黒と白の刃の煌めきは盗賊を魅了し、そして斬撃は疾<sup>はや</sup>く鋭く美しい。

「この餓鬼があああー！」

叫び、盗賊の一人が槍を突き出す。

干将でその穂先を弾き、

「餓鬼？　鬼は鬼でも鬼違いだ。僕はあんたらに滅びを齎す鬼だよ」

莫耶で縦一閃に両断した。

「さて、ここからは鬼らしくやらせてもらおうか!!」

劉焯は咆哮をあげる。

「はあああああ!!」

大気を震わす咆哮は、盗賊を威圧する。彼らは自分が数歩後退ったことさえ気付かない。

「消えろおお!!」

干将、莫耶を一閃する。

双剣が鋭く弧を描いた途端、盗賊は黒の塊となって吹き飛んでいく。

その様はさながら、鬼の腕かいなに薙ぎ払われたかのようだ。

先程までの斬撃が優雅であるのならば、今の斬撃は荒々しくも凄まじき豪撃。

その身だけでなく、その魂さえも斬り裂いてさえいそうだ。

「相手は餓鬼一人だろうが！ さっさと囲んで殺せええ!!」

大群の後方から頭らしき男の号令が飛ぶ。

盗賊たちはその号令に従え劉焯を素早く囲んでいった。

「へえ。少しは頭を使う人はいるんだ。でも、その選択は間違いだ

よ」

人垣を睥睨すると、劉焯は己の言が誤りでないと証明した。

困いをそのすぐ後ろにいた者さえ巻き込んで吹き飛ばす。

それを眼にした盗賊の一部は恐怖が頂点に達し、一目散に逃げ去っていく。

それは瞬く間に全体に伝播し、次第に我先にとばかりになった。

「お、おい！！ 逃げんじゃねえ！ あの餓鬼を殺せ！！」

「人望無いね、大将」

叫んだ頭らしき男は、首に当てられた干将の黒刃の冷たさに声を詰まらせた。

男はゆつくりと劉焯を見、気付いた。

「なんだよ、その眼は……」

人らしからぬ劉焯の双眸に射竦められ、男は己の間違いを悟った。

「化け物を相手にしてたのかよ……くそ、逃げりや良かった」

「そう、それが正解。あんたがこの盗賊の頭で合ってる？」

「ああ、そうだ……」



「じゃあ、今までの罪を清算させてもらっよ」

干将に力を込め、劉焯は頭の首を撥ねた。

ごろごろと転がる頭の首を一瞥し、劉焯は次に盗賊たちが逃げた方角を見た。

「一個訂正。逃げても無駄だったらしいよ」

そこには『鳳』の一字が描かれた牙門旗を掲げる軍隊が、盗賊を次々と捕らえていた。

「うちの軍師殿はやっぱり聡いな」

うん、と一度頷くと劉焯は鳳統の許に歩き出した。

劉焯の戦い様を遠方より眺める者たちがいた。

「やるわね、あの子」

亜麻色のクルクルとカールさせた髪に人形のように整った顔立ち。彼女の碧い瞳が劉焯の戦い振りを見つめ、褒めた。

「華琳様」

自身の真名を呼ばれ、彼女は振り向く。

そこには髪を後ろに流した女性と片目を隠すように髪を伸ばした女性が見えた。

そして、その後ろには『曹』の牙門旗を掲げた大軍団がいた。

亜麻色の髪の少女　性を曹、名を操、字を孟徳という。

己が覇道を突き進む英雄。

乱世の奸雄。

そして、曹操の真名を呼ぶことを許された彼女らは夏侯惇と夏侯淵という姉妹である。

「あの子、どこの所属か解った？」

「はい。あ奴が逃がした盗賊を捕らえているのは、鳳土元の部隊。恐らく、劉備の配下の将かと」

「そう。また劉備の許に英傑が集ったのね」

「嬉しそうですね、華琳様」

感慨深げな曹操の瞳に、夏侯淵は喜色を見た。

「ええ。困難なき霸道はつまらないわ」

「そうでしたな」

「そうだぞ、秋蘭。強者を打ち破り、我ら曹魏の武が最強だと証明してこそ、華琳様の霸道は成るのだ」

「その通りよ、春蘭。劉備は我が好敵手になり、霸道に華を添える力を付けつつある。眠れる龍が目覚める日も遠くない筈」

ほくそ笑み、曹操はまた劉焰を見遣る。

「あの童わっぱが気になりますか、華琳様」

「……そうかもしれないわね。速く優雅に戦うかと思えば、力強く荒々しくも暴れる。まるで人と妖との境界を行き来しているようだわ」

「そういえば、あの童。己のことを鬼だと言っていたようですね」

「へえ。鬼を語るとは随分な子ね」

面白い、と曹操は思う。

緋色の一本角の兜、漆黒の鎧。

目にも留まらぬ速さに、体格に似合わぬ怪物じみた膂力じりょくも合わせ持

っ。

「まさに小さな速疾鬼ね」

「そくしつき？ 何なのですか、それは」

頭上に疑問符を浮かべる夏侯惇。そんな姉の相変わらずな面に、夏侯淵は頭を抱えた。

「姉者。速疾鬼とは地獄卒とも呼ばれる、破壊と滅亡を司る鬼神の別名だ」

「その鬼神の名はね、春蘭」

羅刹、と言つたよ

## 鬼、初陣（後書き）

珍しく短期間投稿出来ました。

作者は普通に策とか考えられません。頭悪いもんで。なんで、朔に頑張ってもらいました。

そして、さりげなく？曹操軍、登場させてみました。

正直、春蘭と秋蘭の話し方の書き分け方が合ってるかわかりません、はい。ここに読み辛さの原因がまたひとつ生まれちゃいました……

感想お待ちします。

鬼と目付け役（前書き）

やっつけです。悲しいままでにやっつけです。

大事な事なので、2回言いました。

## 鬼と目付け役

逃げた盗賊たちを捕縛した鳳統は、劉焯が一点を睨むように見詰めていたのに気付いた。

「……………どうしたの？」

「いや、誰かに見られてる気がしたんだけど」

劉焯が見た方向を鳳統も見ろが、何も見えない。

「……………？」

「気のせいかもだから。気にしないで」

「そう？」

「うん。もしも勘違いじゃなくて敵だったら、僕が雛里のこと守るよ」

「あう……………」

劉焯の言葉に鳳統は顔を真っ赤にした。

この少年、近頃主である一刀に似てきた節がある。恥ずかしげもなく、人を赤らめるようなことを突然言い出すのだ。

人一倍恥ずかしがり屋な鳳統には、効果覲面こうかてきめん過ぎた。そのうち蒸気でもあげそうな程に。

「雜里？」

「うう……なんでもないよ」

「そっか。じゃ、帰ろっか」

何と気無しに劉焯は鳳統の手を取って歩き出した。やはり、彼女の顔は沸騰寸前まで赤くなっていた。

何故だろう。

劉焯は考える。

目の前の3人は眉根を吊り上げ、怒っている。

そして、自分は正座させられている。

（なんでさ？）

盗賊退治の任務は、兵に死者は無く、軽い怪我をした者が数人出た程度で中々の結果だと彼は思っていた。



だが、城に帰ると待っていたのは贅辞などではなく、

「この馬鹿者！！」

関羽の一喝だった。

「一人で3000もの盗賊に立ち向かうなどの無茶をしおって、死  
に行くようなものだぞ！！」

「いや、ある程度敵の数を減らしたら、退くつもりだったんだけど」

「だとしてもお前一人で行く必要はないだろう」

「まあ、そうだけど……」

「いいか？ 戦場では何があるのか解らないのだから」

怒り収まらない関羽の説教は続く。さすがに長時間となると劉焰も  
辛い。

視線で関羽の後ろにいる主2人に助けを求めるが、

「今回の事はね、私も怒ってるんだからね」

「右に同じ。大人しく愛紗に怒られる」

薄ら寒い笑顔を浮かべて、そう言われた。

「聞いているのか、朔!？」

「聞いてます!」

うんざりしながらも劉焯は答えるも、関将軍のありがたい説教は夜遅くまで続くとは予想もしていなかった。

「という訳だ。解ったか………朔？」

長々と続いた説教が終わると、関羽は劉焯が微動だにしない事に気付いた。

彼の顔には生气は感じられず、眼は虚空を見ていた。

試しに目の前で手を振ったり、頬を突いてみるが反応がない。

「……説教で死んだか」

苦い表情を浮かべ、一刀は劉焯に同情した。

彼自身も関羽の説教地獄を体験済みだからか、その辛さが容易に想像できた。

「……愛紗の説教は半端ないからな」

「何か言いましたか？」

「何でもありません!！」

「本当ですか？ まったく。……雛里からの報告、お聞きになりましたか？」

「愛紗の説教中に簡単にね」

「朔くん、大暴れって感じだったんだよね」

説教時とは打って変わって感心したように言う劉備に対し、関羽は苦い顔をしていた。

「大暴れ。正しくその通りなのですが、私は今回の件で少し心配になりました」

「どうして？ 朔くんなら、大丈夫だって思うんだけど」

「ええ、賊程度ならばご奴の相手ではありません。しかし、我らが進む道の先には、諸侯の軍との戦いも無いとは言えません。

朔に今回のような身勝手な行動を取られれば、軍全体に損害を招きかねません」

「そうかもしれない。けど、朔は大丈夫だ」

脳天気な一刀の発言に、関羽は眉をしか顰める。

「随分と朔を買っておいでですね」

「親バカって訳じゃない……とは言いにくいな。ただ、俺は朔を信じてる。もちろん愛紗達の事も」

「それはとても嬉しいのですが。しかし、朔は戦争というものを知りません。鈴々でも戦いは数だと理解し、朔のように大軍に突っ込んで行きませんよ」

重い溜息をつく関羽。軍部を取り仕切る者としても、劉焔の目付け役としても、今回の件は頭を悩ませる事には違いないのだ。

「私達は大勢の命を預かっているのです。私は朔の独断専行を決して許しません。」

ご主人様には申し訳ありませんが……もし、またこ奴が今回のような行動をとった場合、見捨てる心積もりでいます」

「……うん。そうしてくれて構わない」

「……よろしいので?」

「言っただろう? 俺は朔も愛紗達も信じてるって」

一刀はそう言うと、まだ呆けている劉焔の肩を揺らした。

「さーく、起きろ。少し、というかけっこう遅いんだけど、夕飯食いに行くぞ」

「ううあー……お父さんだー」

「そう、お父さんだ。ほれ、行くぞ」

「はわわー」

「朱里に怒られるぞ」

「あわわー」

「雛里に泣かれるぞ」

「にゃー」

「今度は鈴々かよ。蛇矛で刺されるなよ」

「メンマー」

「わざとか？ 星に襲われても助けないからな」

壊れたように仲間の口癖？を真似しだした劉焯を抱き上げると、  
刀は部屋を出て行った。

「驚きました……」

関羽がぼつりと呟く。

「まさかご主人様が朔を見捨てる事をお許しになられるとは」

「そう？ 私は違うと思うな」

「何故です？ 私は朔を見捨てると言い、ご主人様はそれで構わないと言いました。」

これで違うという桃香様のお考えが、私には分かりません」

「うん、確かにご主人様は許可したよ。でも、愛紗ちゃんはそんな事しない、しなくていいんだよ」

劉備の言葉に関羽は困惑する。劉備は劉備で優しいに笑いかけていた。

「愛紗ちゃんは優しいから、わざと厳しい事を言ったんだよね」

「それは……そんな事ありません。あれは本心からで」

「そんな事あるよ。私やご主人様じゃ言えない事、愛紗ちゃんはしっかり言ってくれてる。叱ってくれてる。」

私もご主人様もそんな愛紗ちゃんに本当に感謝してるんだ」

「桃香様……」

「ゴメンね、嫌な役させちゃって」

「謝らないでください。私は朔の目付け役です。あ奴の至らなさは、私の至らなさでもあるんです……私の教えが足りぬから」

肩を落とす関羽に対し、劉備は今度はふにゃつとした笑顔で、

「じゃ、もう大丈夫だよ。朔くんは身勝手に独りで突撃したりしないよ」

そう断言した。

「そうでしょうか？」

「だって、愛紗ちゃんは戦争を知らない朔くん、ちゃんといけない事だって教えたんだよ？」

朔くんは教えられた事を無駄にする子じゃない。

だから、愛紗ちゃんは朔くんを見捨てるような事しないでいいんだよ」

「……そこまで見越していたのですね、ご主人様は」

「そうだ。あと愛紗ちゃんと一緒に、朔くんは頑固なところがたまに出て来ると思ってから注意してね」

まったくこの人達には勝てない、そう関羽は思う。

日頃、政務で執務室に缶詰状態だというのに、劉焯の事をよく見ている。

本人に言えば否定するだろうが、彼は他人の情を無下に扱う人間ではない。むしろその情を大切する側だと関羽は思っている。

自分から他者を受け入れてほしいという一刀の願いは、劉焯にとって困難な事だ。だが、それを城の侍女を手伝う事から始めているのを関羽は知っていた。

そして、一刀と劉備も知っていたのだろう。

だから、信じると言ってくれた。

「前言撤回です。私も朔を信じます。」

もし、教えた上で単身突撃するようなら、青龍刀で殴り付けてでも連れ帰る事にします。そして、またお説教です」

「あはは、お手柔らかにね。じゃあ、私達も行こっか」

「はい」

次の日、関羽は訓練場に向かいながらも劉焔に何を教えたものかと考えていた。

「ん？」

すると、後ろから腰の辺りに何かぼすつとぶつかってきた。見れば腹の辺りには小さな手、振り返れば焔色の髪が。

はあ…、と苦笑混じりの溜息を零す。

「朔？」

「しめんなさい」

突然の謝罪に、関羽はまた苦笑した。



「それは何に対する謝罪だ？」

「……昨日、独りで大軍に突撃してダメだって怒られた。なのに、謝ってなかったから」

「そうか。偉いな」

「偉くなんかない。お父さ 主上に言われて気付かされた。いけない事をしたのなら謝らなきゃだめだって、師匠にも言われてたのに」

きゅっと、抱き着いている腕に力が入った。

一刀の事を父ではなく、主と言い直したのは仕事だからだろう。子供の割に分別をつけようとしていたのか、この少年は思わず言ってしまった為に若干恥ずかしいようだ。

昨日は普通にお父さんと呼んでいたというのに。

子供とはいえ男の子だ。やはり、見栄は張りたかったのだろう。そう考えると何とも微笑ましいものだと、関羽は思った。

「朔よ、私はご主人様に言った。次、またお前が単身突撃するようならば……」

「見捨てるんでしょ。そうしてくれて構わないよ」

「だけど、と続け、

「愛紗にそんな辛い事させないけどね。………僕も愛紗に嫌われた

くないし」

ボソツと呟くと、恥ずかしさ増大。またギュツと抱き着く力が強くなった。

「嫌われたくない、か。中々嬉しい事を言ってくれる」

「~~~~つ」

関羽は劉焯の腕を解くと、屈んで正面から向き合い、

「ひゃう」

照れで赤くなっている彼の両頬をむにっとした。

「ふぁいひゃ？」

「ほう。中々の柔らかさだ」

「やふぁー」

「思いの外、<sup>ほか</sup>伸びるな」

「ふぁー」

「……朔よ」

「？」

「私もお前を見捨てたくない。お願いだから、見捨てさせないでく

れ

関羽の手が優しく頬を撫であげる。

その伝わってくる温もりを離さないように、劉焯は彼女の手にも自分の手を添えた。

「本当の事言うとき、単身突撃しないって約束出来ないんだ」

何故、と視線だけで彼女は問う。

「愛紗。僕さ、みんなの役に立ちたい。みんなを守りたいんだ」

温もりを教えてくれたから。

「どんなに苦しい状況で絶体絶命な危機でもさ、雀の涙程の勝機やみんなが助かる可能性があるなら、僕が命を賭けてそれを掴み取る。もぎ取ってやる」

もう失いたくないから。

「嫌われたくないけど、それ以上に主上達を失う方がずっと嫌だから」

劉焯はまっすぐ関羽を見て言った。

「無理も無茶もする必要があるなら、僕は躊躇わないよ」

「……頑固なところか」

劉備が自分と同じと言っていた、一面が出て来て関羽は納得した。

譲れないところは、簡単には譲れない。そういう一面があるのは自覚していた。

ならば、こう言ってやるぞ。

「必要があれば、無理も無茶もするのだったな」

「うん」

「ならば、話は簡単だ」

「どうしてさ？」

「その“必要”を無くしてやるぞ」

自信満々に断言する関羽。

その言葉に劉焔はキョトンしている。

「我が軍には、有能な軍師に将もいる。その我らが力を合わせ、お前が無理も無茶もしなくて済む」

彼は言った。

“無理”も“無茶”もする。

だが、“無謀”までするとは言っていない。

勝算も可能性の無い事はしないのなら、この少年は簡単に命を賭けない筈だ。

「この関雲長の名に誓って、お前一人にやらせはせん」

「……………熱いなあ」

劉焔はわざとらしく肩を竦めると、

「んじゃ、頼りにしてますよ関雲長殿」

「ああ、目に物見せてやろう劉翔刃よ」

「……………」

「……………」

「……………ぶっ」

どちらが先かは分からないが、二人は笑いあった。

大笑い、なんて程ではない。ただ、ちょっとしたした心地良さが笑みを浮かばせた。

「ところで、愛紗は何処行くの？」

「訓練場だ。手が空いてるのなら、一緒に行くか？」

「んにゃ、行かない。雛里にも謝んなきゃだし……読み書き練習、逃げたら泣かれるだろうし」

「ま、まあ、雛里を泣かさないようにな」

「うん……頑張ります。んじゃ、愛紗も頑張ってたね」

手を振りながら走って行く劉焯を見送った関羽は、

「よし、私も頑張るか」

切り替えるように気合いを入れ、訓練場へと向かって行った。

鬼と目付け役（後書き）

そろそろ反董卓連合編にいきたいです、はい。

感想、批判お待ちしております。

**鬼と手紙（前書き）**

長いです。

過去最長です。

2倍の文量です。

読み辛いかもです……。



## 鬼と手紙

城の庭で、二人の武将が対峙している。

劉焯と張飛だ。

どちらもその小さな体躯に不釣り合いな覇気を放ち、相手の一挙一動を一寸足りとも逃さないよう集中力は高まっていく。

「朔、行くよ。怪我しても知らないのだ」

「はいはい。じゃあ、せいぜい怪我しないように頑張るよ」

楽しそうに口角を吊り上げ、蛇矛を構える張飛。対する劉焯は飄々としながらも、いつでも双剣を抜けるよう柄を掴む。

互いに、自然と言葉を発するのを止めた。

数瞬の間が開き、劉焯は蛇矛の刃先が揺れたのを見た。

「ううりゃあああ！」

「疾っ！」

張飛の上段からの切り下ろしを劉焯は抜き放った右手の莫耶で弾く。そして左手の干将で地面へと叩き落とした。

「ありゃ？ 防がれたのだ」

「力、少し入れすぎたでしょ？ そのせいで初動を読まれたんだ」

「そっかあ。なら、これはどうなのだ!!」

地に落とされた蛇矛が押さえ付けていた双剣を跳ね上げ、軽く万歳したように劉焯の両手も上がった。

張飛は蛇矛を再度振り下ろす。

双剣で弾こうとするも、斬撃に間に合わないと悟ると、劉焯は半身を引くように躲した。

「まだまだ行くのだっ!!」

頭、胴、足と次々切り掛かる張飛。

だが、それも紙一重で避ける。

「いやあ、危なかったねえ」

「にゃーっ！　なんか他人事っぽく済ましてム力つくのだ!!」

うにゃー!!と叫びながら次々と放たれる張飛の斬撃を、劉焯は双剣で防ぎもせず回避に徹していた。

(もうちょい本気になってもらおうかな)

劉焯は頃合いを見計り、

「どうしたのさ？　燕人張飛の力はこんなもんなの？」

口端を吊り上げ挑発した。

ブチッ、と何か切れるような音が劉焯は聞こえた気がした。

「おっ?」

「……………朔は鈴々を怒らせたのだ」

張飛はゆっくりと蛇矛を構え、穂先を地に向ける。

そして次の瞬間、その穂先が消えた。

「ちいつ!」

強烈な斬り上げ。

舌打ちながら劉焯が後ろに体をのけ反らせた直後、彼の頭があった場所から空気が斬り裂かれた音がした。

「こんのおおお!」

張飛は振り上げた穂先を勢いそのままに後ろに回す。勢いは刃の無い石突にも作用し、劉焯の胸を打ち砕かんと放たれる。

劉焯はバツク宙で回避。着地と同時に距離を一旦取ると、今度はこっちの番だとばかりに接近する。

「疾っ!」

短く呼吸を吐き、双剣を振るう。二刀の手数之多さで攻め入り、張飛に反撃の暇を与えない。

雨の如く放たれる連撃は少しずつだが、段々と蛇矛を握る張飛の手を痺れさせていく。劉焯は更に手の力を奪おうと、双剣の一撃一撃の重みを大きくしていった。

「でえええい!!」

「にやつ!?!」

劉焯はここ一番の重みを乗せ、双剣を同時に振り下ろした。一撃に耐えかねた張飛は後ろに飛ばされてしまった。

劉焯はすぐさま追撃を仕掛け、張飛はそれに合わせるように、剛速の突きを繰り出す。劉焯自らの突進力も相俟あいまって、当たればただでは済まない。

それでも、劉焯は地を蹴って踏み込んだ。

刃が肩を掠めた。だが、傷などそれだけ。

危険を犯した対価は、張飛の間合いの侵略。

「突きを放った直後ってさ、結構スキが出来ると思わない? 特に槍使いのはさ」

至近距離まで詰め、劉焯は不敵に言った。その手にある莫耶の刃を張飛の首に当てながら。

「ま、参ったのだ」

降参の声を聞き、劉焯は双剣を鞘に納めた。張飛は悔しそうに蛇矛をブンブンと振り回し始めた。

「うわ、危なっ!? ちょっと鈴々、危ないって」

「うにゃー!! また負けたのだ。朔、ずっとこいのだ」

「何がさ?」

「鈴々、まだ朔に勝った事ないのだ」

「そんな事ないですが。この前、大食い勝負で勝ったじゃん」

「にゃー、あれは嬉しかったのだ。肉まんも美味しかったし、って、違うのだ。そういう勝負じゃないのだ!!」

「……………気付かれたか。武人として勝利が欲しい、って事ですよ」

うーん、と困ったように劉焯は頬を掻いた。

劉焯は自分を武人と思っていない。

確かに戦う力はある。だが、これは住み処であった森で、師に教わった己が生き残る為の手段の一。

関羽や張飛、趙雲のように武に対しての矜持は持ち合わせていない。

誇り云々の前に、死んだら元も子もない。生き抜く事こそが肝要、

というのが劉焯の考え方なのだが……

(そんな事言っただって、簡単に納得しないよね)

どう言ったものかと頭を悩ませていると、

「お、ここに居たか。朔、鈴々」

「あ、星」

振袖のように長い袖を靡かせながら、趙雲がやってきた。

「なんだ鈴々、また朔に負けたのか」

「ぬぬう」

「朔との手合わせは、これで21戦目だったか？　そして21敗目か」

「にゃー！！　星だって朔に勝った事なくせに！！」

「ああ、しかも全力の片鱗さえ出させられずにな」

心から忌ま忌ましそうに見てくる趙雲に、劉焯は苦笑いを返す。

「全力の片鱗って、いつもギリギリで勝ってるんだけど」

蛇矛が掠めて肌が露出した肩を指差すが、趙雲は取り合わない。

「それは異な事を申すな。私は知っているのだぞ？ その鬼眼ではなく、本当の鬼の所以ゆえんを」

「……それはそれは」

趙雲の視線が劉焯の体の一点を見る。その視線を追い、劉焯は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

「何処で知った？」

「さて、な。……その様子だと、主もご存知ないようだな」

「……言えよ」

冷徹な声が零れた。

劉焯の小さな体から、徐々に殺気が漏れていく。

「言え」

それは臍げなものから、段々と明確なものとなり、右手をゆっくりと動かす。

「言え」

動いた手は趙雲の喉元へと向かい、彼女の白く細い首を掴む。

後は……………

「ころ、朔」

「っ！… うわぁ!？」

いきなり首根っこを掴まれ、劉焔は趙雲の首から手を放した。

振り返れば、一刀が半眼で呆れていた。

「あ、主上」

「朔、星に何しようとしたんだ？ まさかケガさせようとしたんじゃないだろうな」

「……………」

「む、だんまりか。いけないことしたら、どうするんだっけ？」

「……………ごめんなさい」

小さく頭を下げる劉焔に、よし、と一刀は頷くと手を放した。

「で、何したんだ？ 朔と鈴々を呼びに行った星まで中々戻って来ないし、来てみたら朔が殺気立ってるしさ」

「いえ……………実は私が朔の逆鱗を撫でてしまいましたな」

「へえ。……………朔、玉座の間に先に行って、桃香達に少し遅れるっ



て伝えてくれ」

「なんで？」

いかにも不満げな面持ちの劉焯。確かに機嫌が悪そうだが、と一刀は思いながら、

「お父さんは星に少し用事があるからさ。ほら、桃香や愛紗が待つてるぞ」

「……………先に行く」

不承不承の呈で劉焯は歩き出すが、猫のように何歩か歩く毎に一刀達の方を振り返る。

その度に劉焯は趙雲を陰のある視線を向けた。

その行動に趙雲が気付かない筈もなく、

「安心しろ。趙子竜の名に誓って、口外せん。流石に本気の鬼を相手取るのは骨だからな」

「……………言ったら、兵糧庫のメンマをみんな滅ぼしてやる」

意を汲んだつもりが、手痛い反撃をくらった。

「何！？ 朔よ、メンマを滅ぼすなど莫迦な真似はよせ！！ 朔！  
朔うう！！！」

手を伸ばし引き止めようとするも、劉焯は走り去っていった。

劉焯の姿が消えると趙雲は膝から崩れ落ち、

「……なんて事だ。私のメンマが……」

「おーい、星？」

「にゃー。星、世の破滅みたいな顔してるのだ」

「メンマが絡むと人が変わるなあ。星、朔にはやらないよう言っておくから」

「はい……ありがとうございます、主」

「それで？ 朔の逆鱗を撫でた、ってどどういうことだ？」

趙雲は立ち上がると、武人の顔になる。

「申し訳ありません、主。先程の言の通り、趙子竜の名に懸けて詳しくは申し上げられませぬ」

「そっか。詳しくは、ね……外堀だけでも頼むよ」

趙雲の言葉の意図に気付き、一刀は言い方を変えて訊いた。

「……では、大まかな説明を致しましょう」

こほん、と趙雲は一つ咳払いをし、

「主よ、私が過去に朔を退治しようとしたのを知っておいでか？」

「ああ。桃香から聞いたよ」

「鈴々も聞いたのだ。星が朔に逃げられたって」

「その通り。当時、朔を追っていた私は、数日に渡ってやっとの思いで奴を見つけました。」

その時、見てしまったのですよ。あ奴が“鬼”だと呼ばれ、人々から疎まれた最大の原因を」

「その言い方だと、鬼眼より厄介そうだな」

うーん、と一刀は頭を悩ます。

劉焯の鬼眼に対するコンプレックスは少々 本人にとってはかなりの荒療治で最近には気にする様子はかなり減ってきたのだが、趙雲の言い様ではそれ以上。

それに殺気立った彼の様子を思い出せば、どれ程気にしているかなど一目瞭然だ。

鬼として生きる彼の抱える問題を少しでも軽くしてやりたい。

それが主として、義父としての北郷一刀の想いだ。

「星、その最大の原因ってさ、人の眼に着くようなのか？」

「いえ、あ奴がその気にならない限り、誰も気付かぬでしょう」

「そっか。なら、放っておこう」

一刀の予想外な発言に、趙雲と張飛は目をぱちくりとさせて、驚いた。

「お兄ちゃん、それでいいの？」

「いいんだよ。俺にも話せないくらいの問題なんだ、ゆっくり考えさせてやるう。話せる時が来たら、きつと話してくれるさ」

「……………まっこと、凄まじき親バカぶりですな」

呆れたように呟く趙雲の横で張飛も頷いた。

「え、そう？」

「にゃー、鈴々もそう思うのだ。というか、お姉ちゃんも朱里も言ってたのだ」

「あと、愛紗と雛里も言っておりますな」

「何それ！？ みんなしてそんな事言ってたのか!？」

「はい、侍女も交えまして」

「鈴々は兵士の皆と話したのだ」

「北郷一刀親バカ説が城中に!!」

「違うのだ。天の御遣い親バカ説なのだ」

「いや、どっちにしろ親バカって言われてんじゃん、俺」

「諦めよ、主。朔を側に置いておく為に、専任護衛にした時点で貴方の親バカは始まっていたのですよ」

「う……うわああああ!!」

趙雲の止めの一言に、一刀は恥ずかしさの余り叫び声を上げた。

一刀達が玉座の間に着くと、

「……………」

むすつとした表情の劉焯が関羽の腰の辺りに抱き着いていた。

「星よ、朔に何を言ったのだ?」

「うむ、おいそれと語れる事ではないな」

半眼で訊いてくる関羽に、趙雲は腕組みしながら答えた。

「語れば、私の命が危ういのでな。流石に玉座を私の血で汚す訳にもいかんだろ」

「それは随分だな。朔がそこまでの事をするとは思えんが」

「……………ここにも親バカがいたか」

「何か言ったか？」

「いや、何も」

「あの、そろそろ軍議を始めたいんですけど」

長くなりそうな関羽と趙雲の言い合いに孔明が口を挟んだ。

それを皮切りに、全員が（約1名を除き）表情を真剣なものに変える。

「それでは、軍議を始めます」

進行役の孔明が言う。

「皆さんに集まって頂いたのは、ご存知の通り、河北の雄。袁紹さんから届いた文の件です」

「僕、知らない」

「鈴々も知らない」

「朔、少し黙ってなさい」

「鈴々ちゃんもね」

いきなり茶々を入れた劉焯と張飛は、それぞれ関羽と劉備に口を押さえられた。

「えっと………続けますよ？ 内容は簡単に言うと洛陽の董卓さんについてです」

話は少し時間を遡る。

一刀達と趙雲、劉焯が仲間になった頃の事だ。

漢の皇帝、靈帝が死んだ。

大陸の支配者の死が契機となり、劉備を含めた諸侯達が治めた黄巾の乱から朝廷内に燻っていた権力争いが具現化した。

朝廷内を牛耳る宦官、十常侍。

軍部を握る軍人、その中心たる大將軍何進の一派。

この二つの派閥が権力を手に入れる為に対立、どちらも懐中にある未だ幼い皇太子を即位させようと争い出した。何進一派は、靈帝の妻であり自身の妹である何太后と共に、弁太子こと少帝弁を擁立。

宦官一派は、靈帝の母である董太后と共に、聡明と評判高い次子、劉協を擁立した。長く続くかと思われた権力争いは、意外にも呆気なく決着が着く。

何進一派が擁立した、少帝弁が即位したのだ。

その背景には、何進一派による軍という武力の威があったのは否めない。

しかし、十常侍も黙って指をくわえる事はしなかった。

何進を罠に嵌め、暗殺。最大の味方を無くした何太后も洛陽から追放し、暗殺した。

これに終息するどころか、因果応報の連鎖はまだ続く。

何進の部下の將軍達は、何進暗殺の報復に、十常侍を急襲。数名の命を奪うが、それよりも早く十常侍筆頭の張讓は少帝弁と劉協を連れ逃亡していた。

彼は將軍達の報復を危惧していた。故に、命からがら逃亡に成功出来たのだ。

だが、將軍達が目を光らせている都には戻れない。彼らの武力に対抗できる術がないのだ。

そこで、張讓は涼州の董卓仲穎を味方に引き込み、揚々と都に戻った。



だが、所詮は虎の威を借る狐よろしくの文官とでも言おうか。董卓の裏切りにより、掌中の皇帝を奪われ、張讓は殺されてしまった。権力の中枢を手にした董卓は、少帝弁を廃位。劉協を玉座につけ、彼を献帝とした。

献帝劉協を傀儡に、自身は相国という宰相のような位に着き、朝廷を牛耳っていった。

そんな時に届いたのが、反董卓連合結成の檄文である。差出人は河北の雄、袁紹。

これは各地で割拠する諸侯に飛び、劉備の許にも届いたのだった。

「今回の議題は、今後の方針として連合に参加するかどうかを決めたいと思っんです」

孔明の説明が終わるや否や、息巻き出すのが3人いた。

言わずもがな、劉備、関羽、張飛だ。

「当然、参戦！ 董卓さんは洛陽の人達に重税をかけて苦しめてるって聞いたよ。そんな人を天子様の側に置いておくなんて言語道断！ 助けに行かなきゃ！！」

「そうです。暴悪な為政者に苦しむ者達がいるのです、助けに行か

ぬ道理などありません」

「悪い奴はみんな鈴々がやっつけるのだ！」

(この3人の正義感、流石のまつすぐさだね)

劉備達の発言を聞いた劉焰は、関羽の腰から離れ、腕組みして近くの柱にもたれ掛かった。

そして劉備達とは正反対に、眉を寄せるようにして難しい顔をする3人を見た。

趙雲、孔明、鳳統の三人だ。

「……ふむ。桃香様や愛紗達が言うことも尤もだが」

「……本当にそれでいいんでしょうか？」

ぽつりと疑問の言葉を呟く孔明。それに気付いた関羽は眉をしか顰めた。

「何？ 苦しむ民を見捨てると言うのか？」

「そんな事言ってますん！！ ただ……」

「……簡単に信じていいものか、計りかねているんです」

表情を曇らせる軍師二人。

靈帝が倒れた今、朝廷に諸侯を抑え従える力は無い。

張り子の虎か、それとも骨と皮だけが残る巨竜の骸とでも呼ぼうか。  
貴ぶべき存在は、名ばかりの存在に堕ちてしまった。

抑止力が失われた世界なら、野心ある者は皆立ち上がる。

群雄割拠の時代。

そう、劉焯は鳳統からそれとなく聞いていた。

用心すべきは、力ある者に糸で操られる事。流言甘言に踊らされ、  
利用され、滅ぼされる事などあつてはいけない。

だからだ、

「理想に猛進しやすい人間がいる以上、制動をかける人間が必要な  
のだ」

「見えてない事象に注意を喚起する為に、反対意見を出すのも軍師  
の役目です」

ストッパーとなる反対意見を出す者が必要なのだ。はっきり言って  
それは損な役割だが、それ故に重要役割でもある。

鳳統の言に、趙雲も抑え役に回った為、関羽は劉焯の方を向いた。

「朔よ、お前はどつだ」

関羽の顔には、劉焰ならば自分の側の味方に回ってくれるのでは、という期待が浮かんでいた。

正直、もうしばらく傍観に徹していたかった劉焰だが、仕方ないと口を開いた。

「正直に意見を言っていいたよね？」

「はい。その為の軍議ですから」

「なら、言わせてもらうよ。僕はその文、なんか気に入らない」

劉焰はそっけなく言うと、孔明は首を傾げた。それは一刀達も同じで、彼の発言は連合参加に反対とも取れるが、ただ好き嫌いを言っているようにも取れた。

「…えっと、朔くんは反対なの？」

「反対とは言っていないよ、雛里。連合には参加した方が良いと思ってる。」

桃香様が売りにしてるのは、徳。苦しむ庶人が本当にいるかどうか知らないけど、そんな人がこの噂を聞いて無視してた、なんて言われたら見る目が変わるよ、みんな。

真偽はともかく、助ける為の行動を起こした事実は、作つといった方が後々の為になるよ。

「だけど、その檄文だけは気に入らない」

「どづいづいとっ？」

「要するに、董卓は帝を操って民を苦しめる悪い人だから、皆で倒

そうつて事でしょ？

確かにそんな長々と経緯語いきわづらひつてれば、董卓は悪人だと思わされるさ」

「朔くんも、内容が一方的過ぎるって感じたんだね」

顎に手を当て腕を組みながら、孔明は頷いた。

「どついうことなのだ？」

「朔くんが言った通り、敵対勢力について書かれているとはいえ、余りにも一方的過ぎるって思うの」

「それにさ、檄文の内容を見る限り、どろつどろした厭な感じもする」

「にゃー……朔、鈴々にも解るように言ってほしいのだ」

頭を抱えだした張飛に、鳳統は補足するように言う。

「その……この手紙は董卓さんが悪い奴だから倒そうつていう単純な話だけじゃないって事」

「権力を欲してる諸侯が、抜け駆けして朝廷を手にした董卓さんに嫉妬した結果、今回は連合という形になった」

「じゃあ、朔が言った厭な感じって……」

「袁紹だっけ？ そいつの嫉妬と欲望だろつね」

馬鹿馬鹿しい、と劉焯は鼻で笑った。

その近くではまだ張飛が頭を抱え、劉備が納得がいかないのか、むくと悩んでいた。

「そんなに難しく考えなきゃダメなのかな。董卓さんに苦しめられてる人がいるってことだけで充分だと思っただけど」

「まあ、桃香様にとってはそうだろうけど」

劉備の行動理念には、確かに充分過ぎる理由だろう。戦う力が無くとも、誰か助ける為に剣を取るのが彼女なのだから。

だが、それは少し前の劉備になら許せても、今の劉備には簡単には許されない。

流浪の義勇軍ではなく、一つの地域を支配する候となったのだから。

「董卓の圧政に皆が苦しんでいるって本当なのか嘘なのか。それだけじゃない、どれが真と偽か見極めなきゃ後々酷いよ、きつと」

「朔くんの言う通りです。先の事も考えて動かなければ、私達のような弱小勢力は後の戦いで生き残れません」

「桃香様の 我らの理想は素晴らしいと思う。だが、その崇高さ故の目映さに眩んでいては、いつか転んでしまう。

太陽は蒼天に、確かにあるのだから。その光を浴びながら地に足を着けて歩く事こそが重要だと、私は思うのだよ」

劉焯、孔明、趙雲の言に、劉備と関羽にも思うところがあるのだろ

う。

だが、彼女らの心は良くも悪くもまっすぐなのだ。

「皆の言いたいことは分かるけど……でも、じゃあ、私達は参戦しない方が良いつてこと？ そんなの嫌だよ」

「例え圧政の確たる証拠が無いにしても、苦しむ庶人いる可能性があるならば、私はその人達を助けに行きたい……」

「だってよ、主上」

後は任せた、と目で言ってくる劉焰に一刀は少し苦く笑った。

皆の意見を頭の中でまとめていく。

檄文の裏に潜んでいるであろう様々な思惑。これは深読みのし過ぎなのだろうか？

もしそうであったのなら、圧政に苦しむ人達がいるかもしれない可能性を否定する事になる。

なら、今までの事を振り返ろう。

何を思い、何の為に戦ってきたか。

それを思い出して考えれば、答えはすぐに浮かぶ。

「……連合に参加しよう」

その言葉に、劉備達参戦派の顔が華やぐ。慎重派の趙雲達も口許を緩めた。

「蒼天にある太陽が地を照らしてくれてる限り、しっかり歩いて行ける。それに杖を持てば転ぶ事は無い……なんて思うんだけど、皆はどうかな？」

諸侯の思惑がある可能性は提示されている。

それが最悪の事態を引き起こすかもしれないと分かっているなら、それに対処、防ぐ事が出来る術を持てばいいと一刀は考えた。

「さんせーさんせー！ 大賛成！！」

飛び上がり、いの一に劉備は一刀に賛同する。

「準備万端整えておけば、どんな事があっても平気だつて！！」

「私も賛成です……我が青龍刀は弱き者を守る為のもの。圧政に苦しむ庶人がいるのなら、この目で確かめ、正義の刃を振りたい……」

「鈴々も大賛成なのだ！！」

関羽、張飛も劉備に続いて賛同する。そんな意気勇む彼女らの様子を見た一刀は、次に趙雲達を見た。

「星達もいいかな？」

「我らとて苦しむ庶人を助けたい気持ちは同じ。些かの異議もあり



ませぬよ」

「そうですね。先の事を見据えて動いていけば、いざという時にすぐ対応出来ますし」

「…私も朱里ちゃんと同じ考えです」

「それじゃ、全会一致って事で連合に参加決定だ」

パンツ、と手を合わせて一刀は、劉備達一人一人の顔を眺め、最後に劉焯を見た。

「朔もいいよな？」

「主上の決定に異は唱えないよ」

「分かった。俺と桃香の命、守ってくれよ」

「鬼の威信に賭けて、ってね」

おどけ半分で答える劉焯に、一刀は微笑む。すると、劉焯は半眼で、

「そついや、兵糧とか軍資金とか大丈夫なの？」

場の空気を凍らせる一言を口にした。

ビキッ、と固まった空気の中、一刀は苦笑いしながら孔明の方を見ると、可愛らしく苦笑いを返した。

かなり厳しいらしい。

劉備達が赴任してからの日数では、税収を得る為の組織を構築出来ていなかった事が影響し、資金が足りていない。

「資金が無いにしても、連合結成に遅れる訳にもいかんだろう……軍師殿、何とかならんか？」

「無い袖は振れないだろ……仕方ない、“あれ”しかないか」

一刀が“あれ”と言った途端、劉焔と趙雲以外、皆顔に難色を示した。

“あれ”が何か解らない二人にとって、劉備達が気乗りしない理由も方法も解らない。

「……なんでさ？」

「……あれ？ あれとは一体何なのです、主？」

「名付けて、《寄らば大樹の蔭方式》！」

ようは、準備は出来る限りするが、足りない分は他の諸侯の世話になろうという方法だ。

劉備達は黄巾の乱時にこれを行い、その時は曹操に世話になっていた。

恥ずかしいやら格好悪いやら。そう思っ済み、劉備達は気乗りしないのだ。

「…………成る程。それは妙案ですな」

「背に腹は代えられない。お金が無いんだ、四の五の言ってられないさ」

それを二人は一蹴する。

趙雲は己の矜持の為に槍を持った訳でない。民の暮らしの為を思えば、恥をも忍ぶと語った。

劉焯に至っては、もっとシンプルだ。森暮らしをしていたからか、彼は食物の大切さをよく考えている。

餓えの苦しさに苛まれながら戦えば、兵は敵にまともに抵抗出来ず殺されるだろう。

命を預かる将の一としても、そんな事は許せる筈もなかった。

そう語られては、誰も何も言えなかった。

「ま、実際、格好悪いのは事実だしな。皆の気持ちはよく解る。うんうん」

わざと一刀はおどけて見せ、

「けど、時間も金も無いんだ、少しでも早く連合に合流して情報を集める。そして、圧政に苦しむ人を助けよう」

自分達の目的を改めて述べた。

貧乏云々言われるのは、正直気持ちの良いものではない。だが、面子にこだわる状況ではない。

名より実を。

名声よりも、助けた結果を手に入れる。

一刀の言葉に、皆考えを改め頷いた。

「それじゃ、出陣の準備を始めよう。皆、よろしく頼む」

『応っ！！』

それを皮切りに、反董卓連合参加への準備は始まった。

## 鬼と手紙（後書き）

まずは、読んで頂き、ありがとうございます。

そして、お疲れ様でした。

朔の伏線とか檄文の内容をちゃんと書いた方が良いかと思い、書いてみたら2倍の長さになってしまいました。

次も長くなるのかな……

感想お待ちしています。

鬼と連合1 　　く集う英傑く（前書き）

久しぶりの更新です。

また長くなりました。

文章におかしな箇所があるかも、です。

鬼と連合1 集う英傑

城を発ち、連合の合流場所まで一週間かかった。

「へえ、これは壮観というか何と云うか」

並び立つ諸侯の旗を見て、興奮したように一刀は呟いた。

劉備、関羽といった英雄と暮らす一刀だが、並び立つ軍旗一つ一つが三国時代の 過去の英雄達が集う場に自分も立っているという事実が更に興奮を沸き上がらせる。

そんな一刀の様子を、子供のようだ、と関羽は評した。

「でも、ご主人様の気持ち、解るよ。話でしか聞いた事ない人と会うって、なんかわくわくするよね」

賛同する劉備も劉備で、少し興奮していた。

「……………」

ね、などと頷き合う主二人。いつも通りな二人を見習うべきなのかもしれないが、劉焯は取り敢えず答えを保留にした。

ふと、視界の端で軍旗が揺れた。組まれた陣の中央にある《袁》の旗だ。

「あれ？ 雛里、雛里」

「あわわ。ど、どしたの？」

急に呼ばれ、少し慌てた鳳統に劉焰は指を指して訊いた。

「《袁》の旗が二つあるんだけど。真ん中のは袁紹のだとして、その隣は？」

「……あれは袁術さんだね。袁紹さんの従妹で、荊州・南陽の太守だよ」

「へえ。じゃあ、あれは？」

「えっと……《曹》の軍旗は曹操さん。その奥の《孫》の軍旗は、江東の麒麟児、孫策さん。」

「んじゃ、《公孫》の旗は」

「公孫伯珪殿の旗だな」

割り込むように先を告げたのは、趙雲だった。

体重を預けるように抱き着かれ、劉焰は重くは無いが煩わしそうに問い返した。

「知り合い？」

「知り合いも何も、私は伯珪殿の許で一時期客将をしていた。

桃香様達にとっては恩人だ。義勇軍立ち上げの際には、身を削る思いで兵を預けてくれた。いやいや、その時の伯珪殿の笑みは忘れ難いな」



兵を預ける際、劉備と共に行くかどうかの選択は兵士自身に任せていた。

そして、彼女についていく道を選んだ兵の数は公孫賛の予想を超える数だった。それはもう、引き攣りに引き攣った笑みを浮かべていたそうだ。

あらましを聞いた劉焯は、

「お人よしの友は、お人よしか。ああ、類が友を呼んだんだね。しかも、苦勞性のを」

公孫賛なる人柄をなんとなく掴んだ。

「ああ、まさしくご同類だな」

視線を浮かれ中な主達に向けて、趙雲は言った。

それだけで、劉焯の中で《公孫賛〓苦勞性のお人よし》が確立した。

「主や桃香様には歯止め役となる我らがいるが、伯珪殿にはいない。他の諸侯にあの人の良さを付け入られぬとよいが……」

ああ、心配だ心配だ……、とぼやくように呟く趙雲。

この趙子竜を人柄だけでこうもしてしまうとは。本当に人が良いらしい。

「んじゃ、助ければ？」

事もなげに劉焯は言う。

「恩があるんでしょ？ 助ければいいじゃんか。残念ながら、助けるのは僕の仕事じゃない。趙子竜の槍なら出来るでしょ」

まあ、そうなら主上達が動かない訳ないし、と劉焯は遠くを見ながら言った。

確かに、徳高い劉備と一刀の事だ。公孫賛に何かあれば絶対動く、という確信が持てる。

「そうだな。我が槍、龍牙を以て伯珪殿の恩に報いよう」

ぽん、と劉焯の頭を撫でながら趙雲は言った。

そんな時だ、

「総大将がまだ決まってないんですか!？」

驚く劉備の声に、何事かと劉焯達は彼女の方を向いた。

「まだ決まってないって、僕らより早く着いた諸侯、結構いたよね？」

「ああ……という事は、この場所に駐屯し、一体何をしているのだ？」

劉焯と趙雲が首を傾げていると、

「総大将を決める軍議をしているのさ」

背後からの声が疑問に答えてくれた。

振り向けばそこには、赤い髪をポニーテールにまとめた少女がいた。

「白蓮ちゃん！」

「よ、桃香。久しぶりだなあ」

またも驚く劉備に、赤い髪の少女が気さくに返事をする。

「あれが、公孫贇殿だ」

「あれが、苦勞性のお人よし」

「……朔くん、ちょっと失礼だよ」

「？ なんですさ？」

趙雲の言葉を変換し、呟くと鳳統に小さな声で叱られた。だが、反省しない劉焯だった。

「星も久しぶりだな。元気になっていたか？」

公孫贇が近付き、話し掛けた。趙雲も居住まいを軽く正し答えた。

「はい。あれから各地を放浪し、今は桃香様と一刀様にお仕えしております。」

……伯珪殿もご健勝のようで何より」

「ま、お前が抜けた後の穴を埋めるのは大変だったけどな」

「おお。厭味を言われるなどと、伯珪殿も成長されたようですね」

「ほざくな、莫迦」

趙雲と公孫贇。

口ではきつく言いつつも、二人に嫌な雰囲気は全く無い。旧友との再開を果たしたような、そんな感じを劉焯は感じた。

「そんで、この子らは誰だ？」

孔明、鳳統、最後に劉焯を見て、公孫贇は言った。

「あ、朱里達とは初見だっけ」

思い出したように一刀は呟くと、チビっ子三人を自分の前に並ばせる。

その様は、私塾の先生と小さな生徒といった感じだったが、公孫贇は言わない事にした。

なんか、言ったら傷付きそうな少女がいたから。

「あの、その、しょ、諸葛孔明でしゅ！ まにやは、朱里です！」

「あわわ、ほ、鳳統でし！ ひ、雛里が真名です、えと、宜しくでしゅ！」

「落ち着きなよ、二人とも」

予想通り、自己紹介で噛んだ二人を宥める劉焰。その顔には、軽い呆れが張り付いていたりする。

知謀に長けているのに、緊張するとカミカミになる二大軍師。

余談だが、そこが可愛いんだっ！、と一刀と趙雲に説かれた事があったが……劉焰も否定する要素無かったので肯定していたりする。

気を取り直し、劉焰も自己紹介する。

「えっと、僕は劉焰翔刃。ただの鬼だよ」

そっけなく言う劉焰だが、公孫贇は目を見開いた。あと、口も少し開いた。

「へえ、お前がねえ……」

じろじろ、と見てくる公孫贇の視線に、劉焰は居心地が悪くなり、逃げるように一刀の後ろに隠れた。

身長差もかなりある為、すっぽりと隠れ、見えなくなる。

「あー……ゴメン、白蓮。朔　　劉焯は人にじっと見られるの、かなり苦手なんだ」

「あ、悪い。そういうつもりじゃなかったんだよ。

噂の“賊狩りの戦鬼”がこんな子供だと思わなくてさ」

「は？　賊狩りの戦鬼？」

聞いた事無い名に全員がポカン、とした。

未だへえ、ほお、と唸っている公孫賛を除いて。

「なあ、白蓮。賊狩りの戦鬼って、劉焯の事か？」

「ん？　鬼を自称する奴が他にいるのか？」

「いや、いないけど……」

一刀は背中に隠れた劉焯を見遣り、呟く。

鬼とは元来、忌避すべきもの。忽々自称する者はいない筈だ。

この少年以外を於いては。

「そこそこ噂になってるんだよ。天の御遣いを護る鬼は、民を苦しめる賊を滅ぼすってさ。

お陰で一部じゃ、平原は賊の墓場って呼ばれてるぞ」

「墓場で……だってさ、朔。名が売れ出したな」

「……知らない。僕に賊討伐ばかり、やらせるからでしょ」

少しご機嫌斜めな劉焯は、ぶっきらぼうに答えた。

実際、劉焯が初めて賊討伐に出て以来、討伐任務の7割方は彼に押し付け  
もとい、任されてきた。

天の御遣いという存在を強めるのが、劉焯が担う鬼の存在だ。

天の御遣いが知られていても、鬼が知られていなくては話にならないのだ。当然といえば、当然の割り振りでもあった。

「おい、小鬼。あたしは公孫贇。真名は、白蓮だ。宜しくな」

公孫贇が笑いかけると、劉焯はまだ一刀の後ろから出て来ない。

「さーく。ごういう時はどうするんだ？」

「……真名、朔だよ」

一刀に窘められ、劉焯は少しだけ顔を出して言った。

「なんだ、北郷。まるで、朔の兄貴みたいだな」

「ちょっと違うかな。白蓮ちゃん、ご主人様は朔くんのお父さんだよ」

「え」

劉備の一言に公孫贇は固まった。

一刀をいじる気満々でいた彼女には、予想斜め上をいくその答えの衝撃は中々のものだった。

「何！？ 北郷、お前、子がいたのか！？」

「そして、こちらが母上です」

「愛紗が相手か！？」

「星！！ 嘘をつくな！」

公孫贖の驚きに拍車をかける趙雲。関羽の叫びも虚しく、彼女の胸中に、《劉焰》一刀と関羽の息子《の図式が出来てしまっていた。

「そうか……北郷は愛紗と番<sup>つが</sup>いになったのか……」

「ち、違う！ 誤解なのだ、伯珪殿！ 星は出鱈目を言ったただけだ！」

「しかし、内心嬉しい愛紗であった」

「星は黙っている！ いや、お前が蒔いた種なのだぞ？ 早く誤解を解け！」

「黙れと言ったかと思えば、次は誤解を解けとは忙しい奴だ」

「……………」

「解った。解ったから、青龍刀を無言で構えるな」



関羽の文字通り力強い説得に屈した趙雲は、こほん、と咳払いをす  
ると言った。

「伯珪殿、愛紗は朔の母親ではない。ちょっとした冗談ですよ」

「えっ……そうなんですか？」

「何故、敬語に？ とにかく、愛紗は母ではなく、朔の目付け役で  
すよ」

「そ、そうか……」

「はい」

公孫贇は、ほっ、と小さく胸を撫で下ろした。

だが、口を挟む間を掴めず何も言えなかった一刀は見た。

趙雲が、くすつ、と喉で笑ったのを。

「……………なんか爆弾落としそうだな」

一刀がそう呟くと同時に、爆弾は投下された。

「何せ、愛紗はそういった行為は未経験ですからな」

爆弾の威力は凄まじく、その場の時が凍り付いた。

大半の者が顔を赤らめ、何とも言えない表情をしていた。例外として、理解してない赤毛チビコンビは急な空気の变化にキョトンとしていたが。

「あ、ああ……」

爆弾の被害を盛大に被った当人は、赤面した顔を両手で隠し、座り込んで小さくなってしまった。

「愛紗ー？」

「にゃー？」

赤毛チビコンビに頬を突かれようが、自慢の黒髪ポニーテールを弄られようが、相手をする余裕さえ彼女には無かった。

一刀は心の中で関羽に合掌しつつ、

「えっと、まあ、色々あって朔は俺が引き取ったんだよ。こいつの名付け親でもあるから、父親って訳」

「そ、そうだったのか。けど、その割には……」

公孫贖は一刀、劉焯、関羽と何度も見比べる。

「目許とか、顔つきが二人に似てるような……」

「そうかな？」

「ご主人様と一緒にいたからじゃない？」

「あれですか？ 飼い犬や飼い猫は、飼い主に段々と似てくるといっ」

「犬猫と同列かよ……」

頬をひくつかせながら、一刀は劉焯を見た。

義理とはいえ、親子だ。似てると言われて悪い気はしない。むしろ、少し嬉しいくらいだ。

ほんの少しの照れを押し隠し、

「話を戻すけど、総大将が決まってないってどういう事なんだ？」

諸侯の主導権争いが泥沼化したとかじゃないよな？」

「違うよ。実のところ、その逆なんだ」

一刀の問いに、公孫贇は首を横に振る。軍議での出来事を思い出しているのか、彼女の眼は遠くを見ていた。

「一部を除いて、総大将なんて面倒な仕事はごめんだ……という人間がほとんどでな。軍議が進まないんだよ」

「やりたい奴がいるなら、やりたい奴にやらせればいいのだ」

「実際そうなんだが、やりたそうにしている人間が立候補しないん

だよ」

「……つまり、やりたそうにしている人間に押し付けたいけど、その人間は立候補せず、また他の諸侯も推薦の責任を負いたくないから薦めない……という事ですか？」

鳳統の推論に、公孫贄はその通りだ、と肩を落として頷いた。

面倒というのは確かなのだろうか、その裏にあるのは、後々の事を考えて無用な責を負わない為の思惑なのだろう。

反董卓連合は、連合という名の通り、幾つもの軍で構成されている。そして、その特徴や構成も異なるであろう諸侯の一つ一つが後の覇権を狙っている事も忘れてはいけない。

統率力を以て、多くの思惑さえ操ってみせる程の能力を持っている将など忽々（そうそう）いないだろう。

だが、その連合を率いて董卓を見事討つたとなれば、総大将は莫大な名声を手にするだろう。

ただ、ここまで集まっておきながら失敗したとなれば、不名誉な敗軍の総大将として後世まで名を残すことになるのも明白。

その責は、推薦者にも当然及ぶだろう。人を見る目も無い、節穴な目の推薦者だと。

「だからさ、腹の探り合いにも疲れてさ、気分転換に軍議を抜け出してみたら、ちょうど桃香達が到着したって訳だ」

肩をもみながら公孫贄は言う。本当に疲れているのか、首を回すと  
コキコキと音まで鳴った。

「洛陽の人達が苦しんでかもしれないってのに、真面目にやってま  
だ決められないのかよ」

「それは大真面目ですよ。……権力争いなんですから」

「朱里ちゃんの言った通りになっちゃったね」

「……この間に董卓軍は着々と軍備を整えてるか考えると、やり  
きれないです」

「全く、英傑と呼ばれる者が揃ってこれではな」

「船頭多くして船が港でおねんね、なのだなあ」

「あ、鈴々、上手いね」

口々に愚痴を零し、あはは、と乾いた笑いを浮かべ、

『はあ……………』

一斉に重い溜息をついた。

「権力争いを莫迦らしいとは言わないけど、莫迦みたいに時間を浪

費するのは莫迦らしいよ。さっさと決めてもらわない?」

劉焯の言葉に、皆が頷く。

「朔くんの言う通りだよ。私、行ってくる!」

「へ? 何処に!?」

「軍議をやってる天幕!」

「えっ!? ちょっと待って、桃香!」

他人の為となるとやたらと積極的になる主とそれを心配する主はいきなり走り出した。

皆、呆気にとられる中、劉焯は頬を掻きながら呟く。

「えっと……もしかしなくても、僕のせい?」

一斉に頷かれる。

「取り敢えず、早くご主人様と桃香様を追いなさい」

「行つてきます」

関羽に言われ、劉焯は一刀達を追いかけた。その彼の背中を見なが  
ら、

「……本当に親子じゃないのか?」

「違つと言っている！」

公孫贄は疑惑が再燃し、関羽に否定されていた。

一刀と劉備が各軍の代表が集まる天幕に着くと、劉焯はその近くで待機してゐる事になっている。

代表が集まる中、武官を連れて乗り込んでしまえば、他の諸侯との和は乱れ、余計な不興や警戒心、最悪、敵愾心まで呼んでしまうかもしれない。

孔明にそう言われていた劉焯は、防護柵に腕組みしながら寄り掛かり、静かに主達が出て来るのを待っていた。

一刀達が天幕に乗り込み、しばらく経った頃、周囲を見回していた劉焯の耳に入口が開く音がした。

やっとか、と少し退屈していた劉焯が目を向けると、肩を落とした。

いたのは、主ではなかった。

流れるように長い黒髪に艶の良い褐色の肌。

顔つきは、秀麗。それを強めるように眼鏡をかけている。

細くしなやかな長身に、紅い衣を纏う。

その女性を見た劉焯の感想としては、格好いい人、だ。

涼やかな切れ長の眼には強い意志が秘められているのが感じ取れ、足取りからは確実に進む為の慎重さが見て取れた。

（大将じゃない……のかな？ 代表の代理って感じだし、軍師かな）

勝手な推測を立てていると、自分の前を格好いい女性が通り過ぎようとしていた。

だが、女性は劉焯の前まで来ると、急にその足を止めた。

秀麗な顔に訝しげな表情を張り付け、彼を見下ろしている。

「？ 何さ？」

劉焯の問いに答えず、彼女はただじつと彼を見続ける。

なんて日だ、と劉焯は思う。

初見の相手に二度もじろじろと見られる心地悪さを味合わされている。

焯のような緋髪に、漆黒の戦装束。そして、場にそぐわない子供の容姿。極め付けは異形の双眸とくれば、劉焯だって目立つのは仕方ないと後悔しつつ諦めていた。

（だからって、じろじろ見られても平気な訳じゃないんだけどさ）



内心逃げ出したい気持ちで一杯になって来たが、一刀達がまだ出て来ない為にままならず、最終的に泣きたくなくなってきた。

そんな時だ。

ふと、気付く。

(…………あれ?)

「あら、「美周郎」ともあろう者が、子供を捕まえて何をしているのかしら」

そして気付くと同時に、鈴を転がしたような声が聞こえた。

声の主は悠々と歩き、二人の間に立った。

「…………曹孟徳」

格好いい女性が、そう呟いた。

声の主　　曹操は不敵な笑みを浮かべる。それは彼女が内包する自信から零れ落ちたものか。

「それとも、幼い少年を愛でる趣味でも持っていたのかしら?」

くすつ、と喉で笑い、曹操は劉焯の頬を撫であげる。

「だとしたら、佳い眼をしているわね。この子、中々の逸材よ。」

容姿は可愛らしく、武芸は一鬼当千。閨房けいぼうは……まあ、これから  
でしょうね。じつくりと貴女好みに染め上げたら？」

「……………失礼する」

嘲るような曹操の物言いに、“美周郎”は憤りが表に出ない内に去  
ろうとしたのか、足早に去って行った。

「……………さて」

“美周郎”を見送った後、曹操は撫で上げていた手を引つ込めた。

「初めまして、でいいかしら？ 羅刹。私は、曹操」

「……………劉焰」

「劉焰ね。ふふ、そんなに警戒しなくてもいいわよ」

(……………気付かれたか)

劉焰は内心舌打ちした。

胸元で組んでいた腕の位置を、気付かれないように自然に下げている。後ろ腰に差している双剣を抜き易くする為に。

曹操からは敵意は発せられていない。殺意も何もない。

向けられているのは、好奇だけ。

だというのに、劉焰は警戒した。

武人としての直感が、鬼としての本能か。もしくは、どちらもか。

この曹孟徳という将に  
いや、曹孟徳という“王”に一片の  
隙も油断も与えてはいけない。

そう彼は感じ取った。

その警戒心を見破られ、一段と警戒心は高まる。

「……」

「その眼光、やはりただ者じゃないわね」

「ありがとう、とでも言っておくよ。あんたも、ただ者じゃ……いや、ただ者である筈が無いか」

「あら、随分と評価が高いわね」

「威風が全部物語ってるよ。それにしても、外と内の差が激しいね」

「そう?」

「見かけは………そうだね、小さい」

劉焰は率直に口にする。それに、曹操は綺麗な形をした眉を顰めた。

小さい。

その言葉は、彼女にとって侮辱にあたる言葉だ。

それを知らない劉焯は、その事に全く気付いていない。気付いていたらとしても、彼はその続きを口にしただろう。

「小さい。けど、大きい」

「……………どういう意味かしら？」

「言ったでしょ？ 威風が物語ってるって。」

見かけは、小さくて可愛いらしい女の子。けど、その内に秘める覇気は尋常じゃない。異常とも言えるね。

一軍を率いる将には、相応しいさ。まあ、その枠に収まるとも思えないけど」

劉焯は言い切ると、天幕から一刀達が出て来た。その顔から、何か面倒事を押し付けられたんだらうと簡単に察しがつく。

お人よしの性がそうさせるのだろうか。

「主上が来たから、さよならだね。戦場で会ったらよろしく」

後ろ手に振りながら行くことすると、

「羅刹、一つ教えてあげる。“小さい”とは、私にとって侮辱にあたるわ。今回は見逃すけど、次はないわ」

曹操からの忠告があった。

「じゃあ、僕からも一言。今度は見るだけじゃなくて、手伝ってくれると助かるよ」

その言に、曹操は大きく眼を見開いた。だが、次の瞬間には不敵に笑っていた。

面白い、とその笑みは如実に語っていた。

(……あれが霸王、ね。面倒な相手だ)

内心ぼやきながら、劉焰はまず目先の面倒事を片付けるのを優先する事にした。

鬼と連合1 　　く集う英傑く（後書き）

ほぼ一ヶ月振りの更新ですかね。

遅筆ここに極まれり、です。

本当にすいませんでした！！

感想、批判お待ちします

鬼と連合2

く弱小の悲哀

呉への往訪く(前書き)

やっつけのうえ、グダグダな内容になってる気がします。

「連合の先陣を任された？」

自陣に戻り、一刀達から軍議での顛末を聞いた劉焯は、半眼で呆れながら聞き返した。

はい、としゅんとなりながら、主二人は答えた。

軍議の場に乗りに込んだ一刀と劉備は、直球で早く総大将を決めてほしい、と正攻法で訴えた。

これは公孫贇が言っていた、本心を隠した腹の探り合いによる時間の浪費を終わらせる一手になる、と一刀は考えた。

互いに責任を負う事を避けようと何も言えない状況ならば、“何も知らない”自分達が発言すれば、少なくとも話は進行するだろう。

だが、これは発言の責任を自分達が負う可能性が高い。

淡い期待としては、総大将になりたそうにしている将が、推した劉備を感謝して援助してくれれば……………

「……………なんて思ってたら、見事玉砕したと」

「はい……………」

乗り込んだ直後に、絶望感を覚えたらしい。



なりたそうにしている将は、すぐに解った。

金ぴかの衣装に、天を衝くようなクルクルで螺旋<sup>ドリル</sup>な髪をしていたそうだ。

その人の名は、袁紹。

反董卓連合の檄文を各地の諸侯に飛ばし、呼びかけた張本人だった。

口調、態度。どれをとっても、彼女が総大将になりたそうにしていたのは、小さな子供でも解っただろう。

何せ、彼女が言う総大将の要素とは、

「第一に、これほど名誉ある目的を持った連合軍を率いるには、相應の家格というものが必要ですわ」

そして、

「次に能力。気高く、誇り高く、そして優雅に敵を殲滅できる、素晴らしい能力を持った人材こそが相<sup>ふさわ</sup>応しいでしょう」

最後に、

「天に愛されているかのような美しさと、誰しもが嘆息を漏らす可憐さを兼ね備えた人物。

そんな人物こそ、この連合を率いるに足る総大将だと思つのです  
が、如何かしら？」

などとタカビーなお嬢様口調で宣ったそうだ。

明らかに、私が総大将でしょ。当然でしょう、みたいな態度に、援助してくれたら……なんて期待は期待で終わった。

だが、ここまで来たら引き下がれない。

劉備は当初の打ち合わせ通り、腹の探り合いを止めて、早く総大将を決めてほしい、と訴えた。

その際、仕方なく……本つ当に仕方なく、袁紹を推した。仕方なく。それに、曹操など他の諸侯も賛同し、総大将は袁紹に決まった。

余談だが、その直後に気分転換を終えた公孫賛が戻り、劉備と同じ事を言ったそうだ。

やはり、苦労性のお人よしである。

やっと、という言葉が相応しいだろうか。作戦を立てる段階に入ると、曹操と流麗な黒髪の美女が決定事項だけ伝えてくれればいい、と軍議の席を外してしまったらしい。

その外にいた劉焔は、黒髪の美女が“美周郎”と曹操に呼ばれた女性であろうと察しがついた。

そして、彼が“美周郎”に凝視され、曹操と軽い会話を交わしていた間に、一刀と劉備は袁紹に難題を投げ掛けられていた。

自分は貴女の発言のお陰で、総大将なんて重大な仕事をするはめになった。だから、連合軍の先頭で勇敢に戦ってみせろ。

袁紹は遠回しに、そう言ったそうだ。

勿論、二人は異議を唱えた。

劉備軍は、連合軍の中でも兵の数は最少のうえ、兵糧も少ない。

まともに先陣をきって戦うなど、難しいどころではない。これでは、捨て駒同然だ。

だが、断れば報復が待っているだろう。

ならば、と一刀は一計を案じた。

条件付きでの承諾。

一つ、一ヶ月分の兵糧を譲ってくれる事。

二つ、兵士5千人を貸す事。

この条件を飲まなければ、先陣には立たない、と一刀は言った。

当然、袁紹は渋ったが、劉備軍活躍の裏側には袁紹軍の助力があったから、という風評の餌をちらつかせたところ、

「いいでしょう。三國一の名家、袁家が力を貸しましょう!」

と見事に食いついた。

「袁紹さんって扱いやすい人だね」

「桃香様に言われたら、おしまいだね」

「朔くん、ひどい!」

他人の事を棚にあげる劉備に、劉焰はしれつと言った。

「何にしても、もう兵糧とか兵とか来ちゃってるし、今更断れないね」

「我らの気が変わる前に、という事だろうな」

「既成事実ってやつ?」

「多分そうだな。大領主つてのは、やっぱただの飾りじゃないなあ。案外抜け目ない」

提供されている軍事物資諸々を見ながら、劉焰、関羽、一刀は口々に呟いた。

孔明は顎に手を当てて腕を組みながら、思考する。

「それにしても、この人数で連合軍の先陣を切るとなると……かなり厳しいですね」

董卓軍の軍勢は、約20万。

対して、連合軍は約15万。

全ての敵軍を受け止めるという訳ではないが、切り込むにしろ劉備

軍は寡兵も寡兵。

いくら5千人の兵が増員されても、難題である事には変わらない。苦戦は必至だろう。

だが、苦境に於いても策を以て敵に打ち勝つのが、軍師の役目。ならば、その役を見事に全うしよう。

孔明が鳳統をみると、彼女は魔女帽を被り直して頷いた。

想いは一緒だった。

「ご主人様、総大将である袁紹さんからの指示はなんですか？」

孔明が訊くと、一刀は顔を引き攣らせた。そして、困ったように笑う劉備と顔を見合わせ、同時に溜息をついた。

「その……何て言うか、なあ？」

「そう、だねえ……あはは………はあ」

「……何となく先が解りましたけど、言っちゃってください」

孔明が嫌な予感がしながらも、先を促すと、主二人は観念したように肩を落とした。

「作戦、無いんだ」

その一言で、場の空気が凍った。

誰もが思考を停止　　いや、その言葉の意味を理解するのを拒否した。

「よし、帰ろう」

「わあー！　ダメ、待って！！」

一番先に我を取り戻した劉焯が踵を返すと、それを劉備が抱き上げて阻止した。

「続きがあるから、最後まで聞いて。ね？」

「どうせ、莫迦な事言ったんじゃないのさ？」

「……………」

「否定してくれないんだ……………」

顔を反らした劉備に、劉焯は真剣に帰ろうと進言しようと思いはじめた。

「作戦はあるといえばあるんだけど。あつてないような感じかな？」

「ご主人様、はっきり言ってくれた方が私達も助かります……………」というより、覚悟が決まります」

「ごめん、愛紗。作戦というより行動指針になるんだけど」

こほん、と一刀は咳払いを一つ。

「雄々しく、勇ましく、華麗に進軍」

またもその一言で、場の空気が凍った。

そして、やはり誰もがその言葉の意味を理解するのを拒否した。

「やっぱ、帰ろう」

「そうなのだ」

一番先に我を取り戻した劉焰が踵を返すと、それに続いて張飛も踵を返した。

そして、またそれを関羽と劉備が抱き上げて阻止した。

「朱里と雛里が頭を打っておかしくなっても、こんな事考えないと  
思う」

「というか、朔でもこんな作戦考えないのだ」

「鈴々に言われたくない。鈴々、作戦と言ったら？」

「突撃、粉碎、勝利なのだっ！」

「五十歩百歩じゃんか」

ガオー、と言い放つ張飛を劉焯はジト目で見ながら言った。

肩を落とす面々の中で、孔明と鳳統は思考を最大限に回転させる。

「ご主人様、一つ確認なんですけど」

「……雄々しく、勇ましく、華麗に進軍さえしていればいいんですね？」

「……成る程。そういうことが」

「あ、やっぱり気付いた？」

孔明と鳳統の言葉に、趙雲は何か気付いたように口端を吊り上げた。

予想していたのか、一刀は頷く。

「三人の予想通りだよ。言質はとってある」

「む？ どういう……ああ、そういう事ですか。」

雄々しく、勇ましく、華麗に進軍さえしていれば、我らは我らの作戦通りに動ける、と」

「それって、総大将公認で勝手にやれって事じゃないのさ？」

得心したのか、関羽も口端を吊り上げた。関羽に抱き上げられたままの劉焯は、呆れながら言った。



「統率の要となる人がそれでいいのかなあ」

「朔よ、あの総大将の命を聞きたいのか？」

「絶つ对やだね。ちらと見たけど、あの人は将の器どころか武人としてさえ怪しいよ。」

「星だつて同感でしょ？」

「うむ。異論ないな」

「鈴々も嫌なのだ。お姉ちゃんの方が、ずっと、ずっ〜と佳いのだ！」

「鈴々ちゃん……」

袁紹との引き合いに出すのは可哀相ではないかと、劉焔は思う。

何気に劉備が傷ついたようにも見えるし。他人の事は言えないが。

「曹操とか“美周郎”って人なら、まだマシだったかな」

関羽に降ろしてもらった劉焔がぼそり呟くと、趙雲が眉を顰めた。

「曹操と“美周郎”に会ったのか？」

「天幕の前で主上達を待ってたからね。必然的に、って感じかな」

「ほう。鬼の眼から見て、どう思う？」

「“美周郎”は、格好よい人だったよ。朱里が凍えるくらい冷静さ

を持つて、大人の女性になったらあんな感じかな」

「ふふ、願望が入ってはいまいか？」

「少しだけ。まあ、朱里は朱里らしくていいよ。

それで、“美周郎”ってなんなのさ？」

「……呉の大軍師、周瑜公謹さんの事です」

そこに鳳統が混じる。

「……周瑜さんは孫策さんと断金の契りを交わし、公私共に支えと  
なっている方らしいの。」

政務においても有能、軍師としても聡明という事で有名だよ」

「やっぱり軍師なんだ、あの人」

「……ところで朔くん、私は周瑜さんみたいにはなれないのかな？」

聞いていたのか、妙な威圧感を鳳統から感じ、背中に冷や汗が軽く  
流れた。

「ひ、雛里は雛里のままできてくれたら、僕は嬉しいよ」

軽く吃りながら答えると、そっか、と嬉しそうに鳳統は孔明の隣に  
戻った。

「尻に敷かれ始めたか」

「うるさい……」

実際そうなるかもしれない、と思い始めているのは確かなのだが。

「曹操だけど、あれは“王”だね。覇道を突き進む王に相応しい霸気だったよ。見かけに反してね」

劉焯の感想に趙雲は一つ頷く。

「やはり、あれは“王”の資質を持つと考えるか」

「うん。それと桃香様とは対極に位置してるかな。桃香様は僕らの後ろにいて見守ってくれてるけど、曹操は自ら先頭に立つ将に見えた」

人の輪を描く線の始点となるのが劉備なら、曹操は輪の中心点だろう。

（曹操は中心に、先頭に立っているから傍らに並ぶ人がいない。それはどんな気持ちなのさ？）

何となく考えるが、自分が察しても詮無い事だと劉焯は考えるのを止めた。

「そだ、星。“羅刹”って何？」

「羅刹か？ 羅刹とは、速疾鬼とも、地獄卒とも呼ばれる、破壊と滅亡を司るといふ鬼神だ。」

容姿は……そつだな。丁度お主のようだ」

「僕と？」

「全身が黒く、赤い髪をした鎧を纏った鬼だったはずだ」

「ああ、それなら納得」

肌は黒くないが、黒の戦装束に焰髪の上には深紅の鬼兜。

遠目から見れば、羅刹の容姿そのものだ。

（ああ、教養も備えてるんだ。やっぱり、面倒な相手になりそうだ）

誰にも気付かれないように、劉焯は小さく溜息をついた。

董卓軍に対する作戦も決まらぬまま、合流初日は行軍のみで終わった。

劉焯も護衛の役目柄、一刀の天幕にいた。劉備の天幕は関羽に任せ  
てある。

初めは外で護衛をしようとしたが、一刀が許すはずもなく、眠って  
いる彼の横で眼を閉じながら気配に感覚を尖らせていた。

（さてと、お仕事だ）

そして、察知した知らない気配に面倒だと思いつつも眼をゆつくりと開く。

双剣を腰に佩<sup>は</sup>いて静かに天幕を出ると、趙雲の天幕に向かった。

自分のいない間、一刀の護衛をしてもらう為だ。

「星」

外から声をかけると、天幕の中で人が動く気配がした。

「……………朔か」

外には出ず、趙雲は確認する。

「うん。夜遅くにゴメン」

「構わんさ。どうした？」

「夜の散歩に行ってくる。主上を頼むよ」

数瞬の間を置き、

「気をつけるよ」

「……………了解」

趙雲のその言葉を背に、劉焯は歩き出した。

黙々と歩き、劉焯は闇に眼を凝らしながら心を平らにしていく。

暗い視界に不安が尽きないが、奇襲に取り乱して周りに混乱を伝播でんぱしたくない。

夜という時間も時間だ、気が緩んでるだろう。一般兵が知らない気配の主に出会えば一発だろう。

(その前に、終わらせる)

動く気配の影を捉え、駆け出す。

そして、影の前に回り込み、気配の主の姿に眼を細めた。暗がりの中でも解る、地面に着くくらい艶のある長い黒髪。猫の目のようなアーモンド形の瞳に、褐色の肌。

身長は劉焯より少し大きいくらい。紫がかった赤い軽装な服を纏い、その背には身の丈はありそうな長刀を背負っている。

その少女の顔は、驚きと戸惑いが入り混じっていた。

「さて、他人の陣地で何してんのさ？」

劉焰の問いに、彼女は長刀に手を伸ばす。

「答えない、つてのはしないでもいいな。僕もどうしたらいいか解んないし。」

「そんでもって、刀傷沙汰はもっとヤダね」

「……………」

「…………交渉決裂、ね。交渉になつてたか解んないけど」

「そう言いながらも、劉焰は構えない。」

カチリ、と鯉口を切る音が鳴る。次の瞬間には、刃が首に迫っていた。

「だから、刀傷沙汰はやだつて言ってるのに」

「屈んで斬撃を避けながらばやく劉焰。避けられた事に少女は大きく眼を見開き、」

「ったくもう。呉の諜報役は気が短い」

軽く呟いた彼の言葉に、少女は顔を歪めた。

その様子に、あ…………と頬を掻き掻き、

「適当に言ったんだけど、凶星だったたり？」

「はうあ！」

劉焯は駄目押しした。

「てえい！」

口封じが目的か。少女は再度、長刀を振り上げる。

少し短絡的やしないか、と劉焯は思いながら少女に向かって踏み込む。

左手で長刀を持つ少女の肘を押さえて斬撃を止め、右手で腹に当て身を打ち込んだ。

「あ……う……」

崩れ落ちる少女の体を支え、溜息をつく。

「はあ……どうしよ」

取り敢えず戦おうとする彼女を止める為に気絶させたが、その後の事を考えてなかった。

連れ帰ったら連れ帰ったで、面倒な気がしないでもない。

特に、目付け役のお説教が。

だったら、こっししよう。



「その人、この娘連れ帰ってくれない？」

目の前の闇に向かって頼んだ。

ジャリ、という足音と共に、また少女が姿を現す。

頭頂部で紫がかかった黒髪を団子形に纏めている。目付きは鋭く、冷たい視線でこちらを見ている。

軽装の紅い衣を着た彼女の立ち姿から、気絶させた少女より強く、足音をわざと立てたのが解った。

「呉の将、でいいんだよね？」

「……ああ。私の名は甘寧。お前の推察通り、呉の王孫策様に仕えている。そっちは、周泰だ」

「やっぱり、呉の人間か……。僕は劉焰っていう小鬼だよ」

「お前があ……。いや、周泰が面倒をかけた。すまない」

素直に頭を下げられ、劉焰は拍子抜けした。

「非は認めよう。他の諸侯の陣地を忍び込んでいたうえに、襲い掛かった。本来なら討たれていても不思議ではなかった。

それをお前はしなかった。感謝する」

「はあ、そりゃどうも」

「だが、腑に落ちない点もある。何故だ？」

「……戦いの前に将が一人消え、他の諸侯の陣地で死体が見つかる。それがどう影響を及ぼすか、少しくらい考えてるさ。」

それに、うちの主は無用な殺しを嫌うんだ」

「……そうか」

「何してたとか、なんとなく解るから聞かないけど。まあ、少なくとも交渉材料にはなるよね？」

甘寧の眼の鋭さが一段増し、警戒の色が濃くなっていく。

「殺気は出さないでよ、うちのお姉様方が飛んでくるから。」

これは個人的なお願いだよ。周瑜って軍師がいるよね？ その人に会いたいんだ」

「周瑜様に？ 会ってどうする？」

「確かめたい事がある。ついでに、ちよいと交渉をするかも」

劉焯は言うど、甘寧を真っ直ぐに見た。警戒と疑念の視線で見返す彼女は、劉焯の眼から真偽を押し量る。

甘寧は、彼の鬼眼の中に偽りは無いように見えた。

「いいだろう。協力してやる」

「ありがと。じゃあ、この娘は僕が抱えていくよ」

躊躇いもなく周泰を抱える劉焯は、変な視線を感じた。

言うまでもなく、その視線の主は甘寧なのだが。

「何さ？」

怪訝な視線を返すと、

「いや、他軍の将を簡単に抱え上げるものだからな」

「？ 別に重くないよ」

「警戒しないのが不思議だと思ったのだ」

あー、と劉焯は納得し、理由を口にする。

「強めに当て身放ったからね、朝まで起きないよ」

だから攻撃されない、と劉焯は周泰を抱えたまま歩き出した。

そんな理由を聞かされた甘寧は、頭を抱えたまま彼の後を追った。

(あー……心地悪い)

周囲から突き刺さる奇異と不審な視線に、劉焯は内心で独り言ちた。

甘寧の後に続き、孫呉の陣地までやって来るなり、この視線だ。

他の諸侯の将が突然来たというだけでなく、自軍の将を抱えてやってきたのだ。当然も当然だ。

「……………怖気づいたか？」

辟易へきえきしていたのが顔に出ていたか、甘寧は後ろをちらと見ながら聞いてきた。

同じ連合の一員とはいえ、ここは他の諸侯の陣。自分の仲間が一人もない状況に加え、相手は子供なのだ。その不安が出て来たのだらうと、彼女は思った。

だが、

「違うよ。周りの兵にじろじろ見るな、と叫びたい気持ちだね、こ  
う沸々とね」

半眼の劉焰に手振り付きで返され、甘寧は呆気にとられながらも歩を進めた。

（本当に怖くないのか？）

甘寧は疑念を表に出さぬよう、前を見据えた。

それとも薄氷の上を歩くような自分の状況を理解していないような  
莫迦なのか。

または、危機に陥ったとしても切り抜ける自信があるか、ただ胆力

が並外れているのか。

何にしても、この少年はよく解らない。

そんな印象を甘寧は受けた。

「ここだ」

陣の中央辺りだろうか、そこにある天幕を甘寧は指差す。

「勝手に入っていいの？」

「先に兵を孫策様の下に走らせてある。呉の将が捕らえられたのだ、火急の件と伝えてあるから会ってくださるだろう」

「何その博打的というか、希望的観測な適当っぷりは」

「仕方なかつ。それが事実だ」

「うっわ冷静だねえ」

「そして、こ奴の落ち度だ」

「うっわ極寒だねえ」

周泰を見下ろし言う甘寧に劉焯は苦笑った。

そんな劉焯を他所に甘寧は天幕まで歩いていく。

「夜分遅くに申し訳ございません。甘興覇にございます」

「思春か？ どうした？」

甘寧の言葉に、天幕越しに声が返ってくる。

「もしや、火急の件についてか？」

「はい。周泰が劉備配下の戦鬼に拿捕され、ここに連行されました」

「……………ここに？」

「はい。既にここにおります」

数秒は間が空いた中からの確認に、甘寧は淡々と答えた。

劉焰はどこまで冷静なんだ、と内心ツッコんだ。

「劉玄徳に仕えし鬼、劉翔刃だよ。ちょいとお話がしたくてね」

「夜遅くに来るとは、礼儀がなっていないな。やはり小鬼は小鬼か。羨がなっていないと見える」

「その声は美周郎さんかな？ 確かに、夜遅くに訪問したのは悪かったと思うけど、その契機を作ったのはそっちだよ。」

それに、捕えられた将の落ち度は主の落ち度でもある。諦めてよ」

「貴様……………！」

激昂する声とガタリツと何か倒れるような音が重なる。甘寧も自分の獲物の柄に手を伸ばし、

「まあまあ、冥琳。落ち着きなさいよ」

そして、宥める声が続いた。

「小鬼くん、いいわよ。お話しましょ」

「伯符!？」

「いいの?」

「呉の王が会うと言ったのよ? 構わないから、入ってきなさい」

物言わせぬ語気に、劉焯は表情に出さずに警戒心が沸き上がるのを感じた。

(まずい。この感じ、“王”の資質持ちだ)

曹操と会った時にも感じた異質の覇気が、天幕から滲むように流れ出てくる。

周泰を今すぐ投げ捨ててでも、双剣を抜き放ちたくなる衝動に駆られる。

それを抑えながら、周泰を甘寧に預けて劉焯は天幕の中に踏み込んだ。

中にいたのは二人。

美周郎と呼ばれる、周公謹。

そして、

「こんばんは、小鬼くん」

長く華麗な桜色の髪、鋭さと柔和さを合わせた碧眼に艶の佳い褐色の肌。

周瑜と並び立つ程の美貌を持ち、紅い衣装を纏う女性。

「性は孫、名は策、字は伯符。江東の虎、孫堅の娘にして呉の王よ」

呉王、孫策。

小霸王と呼ばれる麒麟児が、にこやかに微笑んでいた。



鬼と連合2      弱小の悲哀      呉への往訪（後書き）

連合編第二話となりました。

はっきりいって話が全く進まないです。

呉陣営の話し方が合ってるかも心配です。周泰なんかセリフは「はうあ！」だけですし……

後の話の展開の為に書かなくてはいけない部分があるので、話がまとめきれないですね。

今回は、その影響が最後の部分に出ちゃいました。

一体あと何話かかることやら……

感想お待ちしてます。

鬼と連合3 小霸王との会談(前書き)

お久しぶりです。投稿が遅れ、本当にすみません。

そして、グダグダでやっつけな話で本当にすみません。

## 鬼と連合3

### く小霸王との会談

呉の王、孫策は劉焰を前にして、口端を吊り上げる。

「小鬼くん、お話があるんでしょ？ なら、座って話しましょ。他軍の陣地じゃ居心地悪いでしょうけどね」

空いている椅子を指差され、劉焰は黙って座る。机を挟んで正面に孫策、その横に頭を抱えた周瑜が座った。

初めは沈黙が場を占めた。

用があつてきたのは劉焰なのだが、中々話を切り出さない。

そんな彼の様子を孫策と周瑜が不思議に思ったのは当然だろう。だが、劉焰とて切り出したくない訳ではない。

孫策の顔を見た途端、話す内容が増えてしまつてどうしたものかと、彼は肩を落とした気分だったのだ。

そんな中、まず先に口を開いたのは孫策だった。

「緊張してるの？」

「緊張、ね。そうだね、鬼でも緊張するさ。今は小さな領地に鎖で押さえ付けられたとはいえ、一応王様の前だし」

「あら、言ってくれるじゃない？」

「餓鬼が虚勢張ってんだから、少しの失言は見逃してよ」

「……………」

互いにおどけ合うと、軍師から冷たい視線を浴びせられた。

「まず、謝らなきゃね。周泰の諜報活動、その行為の責は貴方の言う通り、私にある」

「僕に謝罪はいらない。謝るんなら、他の将にしてよ。それに先を見据えた将なら、当然の行為なんだろうし」

「あら、器が大きいのね」

「まさか。器が小さ過ぎて容量過多なだけだよ。僕が扱えるような問題じゃない」

肩を竦め答える劉焰に、孫策はへえ、と小さく呟いた。

そして、周瑜はまた一段と頭を抱えていた。孫策が劉焰を猫のような眼で見たからだ。

絶対に面白がっている。

付き合いの長さ故の直感で、彼女は一瞬でそう悟った。

「はあ……………」

「あれ、格好いいお姉さんに溜息つかれた？」

「周瑜の事？ 気にしなくていいわよ。今のは私に呆れただけだから」

「いや、気にしよじよ」

あっけらかんと言う孫策に思わずツツコミを入れてしまった。

だが、彼女は気にせず、にこやかに大軍師の心労を増やす。

猫みたいな奔放さ、だと劉焰は思う。

（違うか。あれは猫の皮を被った虎の娘だ）

虎として小さい時は、猫に近い愛嬌がある。小虎同士でじゃれあう様には頬を緩ます事だつてある。

だが、時間が経てば小虎は一頭の猛獣となる。

孫策は、大人の虎のほんの一步手前。大虎並のずば抜けた武力に、小虎の時の愛嬌を合わせて持っている。

それが、孫伯符だと。そんな印象を受けた。

「ね？ 私はどう？」

「どつって何がさ？」

「周瑜みたいに格好いいとか綺麗とか、色々あるでしょ。どつ？」

「うん、お姉さんも格好いいと思うよ。えっと……あれだ、佳い女  
ってやつだよ、きつと」

言いながら、“あれ”が見えなければもっと良いだろうに、と同時  
にも思う。

「そう？　ありがと。子供の割に嬉しい事言ってくれるじゃない」

「逆に言えば、子供にだって解るくらい佳いって事だよ」

自分の周りにいる女性で見慣れているつもりのは、ある程度は自  
信を持って言った。

「伯符、いい加減に……」

「はいはい。それじゃ、周瑜が心労で倒れない内に用件を聞きまし  
ょうか」

「……………」

「睨まれてるよ？」

「それが彼女の私に対する愛情表現よ。だから、私は平気」

「いや、だから気にしようよ……」

さすがに軍師が可哀相になってきた。

「僕の用件ってのは、まずこれ」

劉焯は腰に佩いていた双剣を抜くと、机の上に置く。

途端、孫策と周瑜の眼の色が変わる。

それもそうだ、この少年が持つ双剣は、ある名工が呉王に命じられ創りあげた名剣。

「干将、そして莫耶……」

孫策は黒刃の干将を撫でながら、双剣の名を口にした。武人としてか、はたまた呉の王としての血のか、彼女は双剣の刃の輝きに魅せられている。

「やっぱり知ってるか」

「小鬼くん、どうして君が呉の名剣を持ってるの？」

「それには答えるから、先に質問させてほしいな。呉は、これの行方は掴んでた？」

「いや、干将と莫耶、どちらも行方は不明だった」

首を横に振りながら、周瑜は否定する。劉焯もそっか、と妙に納得していた。

「随分と簡単に納得したな」

「周瑜と総大将の天幕前で会った時、僕の事じろじろ見てたけど、双剣もすっかり見てたから。本物かどうか凄く気にしてたでしょ？」

「……気づいていたか」

「ま、ね。あとさっきの問いの答え。僕がこの双剣を持つてる理由は至極簡単。もらったからだよ。僕の用件ってのは、干将と莫耶をくれたある人の所在が知りたっただけだよ」

駄目元で聞くけど、と劉焯は続け、

「北斗”って奴、知らない？」

劉焯が挙げた名前に、孫策と周瑜は黙考を続ける事2分。

答えはどちらも、知らないだった。

その答えに仕様がないか、と劉焯は思う。干将と莫耶の行方を掴めていなかった時点で、望みは酷薄。トントンと事は運ばない。

「その北斗なる人物は、お前の何だ？」

「双剣をくれた人だって言ったでしょ？ 行方知らずだから、聞いてみようと思っただけさ」

にべもなく答える。実際に胸に秘める感情は、答えのような何となくといったものでないが、それをしっかりと知るのは何だか嫌だった。



「次の用件だけど……最初に聞いとく。占いとか信じる？」

そんな彼の一言に、孫策らは怪訝な眼を劉焯に向けた。

「それがお前の言う用件と何の関係がある？」

「あるよ。大有りだ。なんせ、今から僕は現実だけを見据える人には戯言ざむごころにしか聞こえない事を言うんだから」

「あら、私達の先行きでも占ってくれるの？」

「半分、正解。国の将来は知らない。自分で何とかして」

「それもそうね。じゃあ、私達個人の将来を占う訳ね」

「そんなところかな。先に言っとくけど、占いってのは当たるか当たらないかってのは未知数だから」

「当たるも八卦、当たらずも八卦。そういう事か？」

「そ。それを頭に入れといて」

劉焯はコホンと小さく咳払いをつく。そして、孫策と周瑜を異形の鬼眼で見つめた。

(本当、いつ見ても嫌な相だ)

二人から滲むように湧きだし、纏わり付く陰り。それは彼女らの命の光を侵すかのようだ。いや、事実そうなのだと劉焯は知っている。

「二人共なんだけどさ、特に孫策」

「何？」

「死相が視える」

不吉を予見する劉焰の言に、告げられた二人は息を呑んだ。そして、孫策は険しい表情を浮かべ、周瑜は椅子を蹴り飛ばす勢いで立ち上がった。

「貴様！ いかにも戯言だろうと、呉の王に対して冗談にも程がある！」

「当たるかどうかは未知数だ、って前以て言った。戯言みたいな事を言つとも言つた筈だよ」

「だとしてもだ、貴様は私だけならいざ知らず、あろう事か孫策が死ぬと言った。それを許せるものか！！」

周瑜の激昂の前に、劉焰は顔を俯かせ、体をふるふると震わせた。

まさか泣かせてしまったか？と周瑜は怒気を潜めさせ、内心かなり焦り出していた。

劉焯という将がまだ幼い子供だという事など一目瞭然だというのに、すっかり失念していた。

天幕の前と今までの孫策と会話する姿に、子供らしさなど欠片しか見受けられなかった。

王を前にしても物怖じしない不敵な態度は、幼いながら大した胆力だと感心してさえいたが。

「……………」

「お、おい、どうしたのだ？」

「あーあ……………冥琳が子供泣かした」

「なっ！？ 私のせいなのか!？」

「どうみてもそうじゃない。冥琳が急に怒鳴ったりしたから、びっくりして泣いちゃったんでしょ」

「それは雪蓮が死ぬなんて言うから……………」

「それは私は生きてるし、戦場に立ってるんだもの。民草より死に近い所にいるのは理解してる。それは冥琳も同じじゃない」

「それはそうだけど……………」

「でも、こんな小さい子を泣かすなんて……………」

「く……」

さつき見せた険しい表情を消した孫策はここぞとばかりに周瑜をいじり、いじられる周瑜はすっかりたじたじになっていた。

そんな時だ、

「喧嘩、終わった？」

若干涙目な劉焰は、他人事とばかりに傍観しながら言った。

「なっ……」

それにダメージの大きかった周瑜は話そうとするが、口をばくばくするだけで言葉が出来なかった。

「泣いてたんじゃなかったの？」

「？ 欠伸が出そうだったから我慢してただけだけど」

周瑜の代わりに孫策が聞くと、劉焰は首を軽く傾げながら答えた。

その間、周瑜は子供は苦手だ……、と小さく呟いてうなだれていた。

「さすがに堂々と欠伸するのは失礼かな、って」

「それは正しいんですけど……」

物凄く紛らわしい、と孫策は思う。実際、茶化してはいたが、周瑜だけでなく彼女自身も親友が子供を泣かせてしまったと思い、内心

焦っていたのだった。

「……まあ、いいわ。時間も遅いし、子供じゃ起きてるのも辛い制限よね」

「話、戻していい?」

「どうぞ、続けて」

周瑜に冷たい視線を向けられるが、無視して続ける。

「死相は見えはしたけど、今回の董卓軍との戦いで死ぬって訳じゃない。」

孫策はこの戦いの少し後くらい。周瑜は孫策より遅いけど、そんなに遅いって訳じゃないみたいだね」

「それに確証はあるのか?」

「占いなんかには確証なんか無いさ。言えるのは、信じてくれれば嬉しい。それだけ」

「でも、すぐって訳じゃないのね。……なら、もう少しだけ蓮華やシャオに遣せる物が増やせるわね」

「雪蓮……」

「小鬼くん、本当に私の死期はまだ先なのね?」

孫策の再確認に劉焰は確かに頷く。嘘などつかないし、つく必要もない。

「そう。なら、一先ず良しとしましょう。それにしても鬼は他人の死期さえ視れるのね」

「師匠が変わり者でね、そっち方面を少しかじってたんだ。つて言っても、僕が視えるのは死相だけだよ。何度も死にかけたおかげでね」

「でも、どうしてこんな事を教えてくれたの？」

「その……あれだよ、簡単に死んでほしくないんだ。あと、僕の師匠の教えを守っただけだよ」

劉焯の師匠は、今よりも幼い彼に“男子たるもの”と前置きを於いて教訓じみた事をよく口にしていた。

その中に、

「佳い女は守れ、佳い女は世界遺産だ。まあ、遺せないけど」

と半ばふざけたものがあり、それを律義にも劉焯は守ったのだ。

それを話すと、孫策らは啞然とした。

「……それだけ？」

「それだけ」

コクン、と頷く劉焰。おまけに、何かおかしい？ と首を傾げる始末だ。

もう、二人は何も言えなかった。

「あはは、君、変わってるわ」

何も言えないから笑うしかなかった。少し呆れながらも、劉焰の変なところに孫策は益々好感と興味が湧いた。

鬼と自称し、呼ばれる少年。会って話してみれば、この変わり様。

(ふふ、やっぱり面白い。この子の主は劉備って娘だったわね。どんな娘なのかしら)

主である劉備は新進気鋭の将で、自分も周瑜も一目置いていた。

そして、劉備とはどんな将で、戦鬼が守る天の御遣いはどんな人物なのだろうか？

興味は湯水のように湧き出していく。

「む。僕は変じゃないよ」

「佳い女を守れ、などという教えも、それを律義に守るお前も十二分におかしいと思うが？」

「なんでさ？ 主上にも言ったら、その通りだなんて言ってくれたよ」

「なるほど。お前の主も変わっているようだな」

「あ、それは当たってる」

周瑜の言は否定しようがなかった。

「とにかく、僕は変じゃない。あと、死期が迫っているのを教えたんだから、無駄にしないでよ」

むう、と若干むくれながら劉焯が言うと、二人は頬を緩ませた。

「周泰の責もある、今回は信じるとしよう。孫策もそれでいいか？」

「ええ、それでいいわ。小鬼くん、物は相談なんだけど」

「何さ？」

「貴方の双剣、呉に返してくれない？」

突然の要求に、劉焯は眉を蹙しかめた。当然、答えは否だ。戦いの前に愛用の武器を手放す訳がない。

だが、それを口にする前に聞いてみた。

「どうしてさ？」

「知らない？ ある使者がこの名剣から呉の将来を予見したって話」

それは当時の呉の王が一振りの剣を、ある使者に与えようとした時の事だ。



その剣とは莫耶の事であり、使者は鞘から抜き出された莫耶の刃に一つの刃は毀れを見付けた。

そして、

「呉は霸王となるだろう。しかし、欠点が一つでもあれば、滅ぼされる事だろう」

そう告げたのだった。

それは後に現実になり、呉は他国に滅ぼされてしまった。

その予見が今の呉にも当て嵌まるのなら、孫策自身が必要としていなくとも、呉という国の民であり兵でもある者達の士気向上には打ってつけなのだ。

何せ、劉焰の持つ干将はもちろん莫耶には刃毀れ一つ無く、今も天幕の中の少ない明かりを煌々と照り返しているのだから。

「この双剣が呉の将来を予見させるのなら、刃毀れが一つも無いという事は繁栄を約束してるようなもの」

「……………そんな迷信じみた話、信じてるの？」

「どうかしらね。この場合は私が信じるか信じないかなんて関係ないわ。重要なのは、信じる人が“いる”って事実なの」

「うちと同じ効果を望むって事ね」

信じる者は救われる、という、ここ大陸の西も西の国のような宗教ではないが、“信じる”という行為は人の精神から力を生み出す。

その例として、劉焯が所属する劉備軍がそうだ。

代表は劉備であるが、彼女には仕える主がいる。

それが《天の御遣い》。

流星と共に現れ、世を平和へと導く存在だと、とある自称大陸一の占い師は謳った。

天とは、国を統べる帝を、果ては万物の支配者さえも指し示す。

その為、“天”という一字に、この時代の人々はとても敏感であり、そして畏敬の念を見出だす。

そんな存在が今の乱世に現れたとすれば、助けてほしいと願ってしまふ。救ってほしいと縋ってしまう。

そして、そんな存在が手を差し延べ、共に乱を鎮めようと言うならば、彼らは信じるだろう。

自分達には、天よりの使者がいる。天の加護がついている。ならば、出来ない筈はないと。

実際には、知略も武力も無いと自称する優し過ぎるただの青年だと知らずに。

他者の向ける感情は様々だと、劉焯は理解してるつもりだ。

勝手に信頼し、勝手に裏切られたと思い、勝手に嘆き、勝手に憎む。鬼である自分は疎まれ、殺意を向けられた。それが嫌で人との関わりを避けていた。

だが、あの主であり義父である青年はそんな感情をぶつけられようと、民の願いを叶えようと奮闘する事だろう。

彼らを救う事は、自身達の理想に繋がっているのだから。

「ねえ、お姉さんは何がしたいのさ？」

野望、大望、宿願と言いは幾つかあるが、迷信さえ利用してまで叶えたい彼女の願いとは何なのか。

劉焯は少し興味が出てしまった。

「内緒よ。でも、私は呉の為に生きているのは確かよ」

「あつそ。てつきり、虎の首を締め付けている枷と鎖を断ち切る為だと思っただけだ」

さらっと自身の予想を呟いてみる。だが、孫策と周瑜は変わらず微笑を浮かべ、揺らぎを欠片もみせない。

軽くかまをかけたつもりだったが、やはりこの程度で尻尾は見せないらしい。

(それとも、呉の為に、ってやつが端的だったけど答えなのかな)

はあ、と溜息が一つ、劉焯の口から零れた。

国の為に、という愛国心をまだ彼は知らない。

自身が平原という街を守っているのは、偏ひんに一刀や劉備達がいるからだ。

大切な人がそこにいる、という条件じみた事柄がなければ、正直言  
って守る気など更々ない。

けれど、孫策はもちろん周瑜は違うのだろう。

国を想い、国の為に戦い、国の為に血を流す事を厭わない。

それが、真に綺麗な願いなのだとしたら、尚更渡す訳にいかなかっ  
た。

「ゴメン。この双剣は渡せない」

劉焯は頭を下げ謝る。

「元から簡単に返してもらえとは思ってなかったけど、頭まで下  
げて断られるとは思わなかったわ」

予想外だったのか、孫策は少し眼を丸くしていた。反して、周瑜は  
冷静に劉焯を見ていた。

「今の所持者は確かにお前かもしれない。だが、これは元は呉の所有物だと言ってもか？」

「違う。これは呉の名剣じゃない」

「今更自身の言を違える気が、小鬼。この双剣が干将と莫耶だと私達は見定め、お前は認めたではないか？」

「ああ、そうだよ。これは干将と莫耶だ」

でも、と劉焯は続け、言った。

「これ、レプリカなんだ」

聞いた事もない言葉に、孫策達は眉を顰める。

それもそうだ、彼の言葉を知っている者は、まずいない。

その言葉は、この世界でいう天の国の言葉なのだから。

「何だと？ れぷりか、と言ったか？」

「小鬼くん、通じるように話してくれる？」

「レプリカってのは、贋作。つまり、偽物って意味らしいよ」

「偽物……」

偽物。

その一言が孫策の胸に突き刺さる。

目の前にある双剣を彼は偽物だと言う。

双剣の拵じこえに刃の鋭さ。どれも一級品だが、これは真作を模造した贗作。

どれだけ崇高に出来ていようが、その事実だけは変わらない。

そして、その干将と莫耶を予見に照らしてしまえば、王の孫策の統治は、彼女が齎すかもしれない繁栄は偽物になってしまうのか。

だが、それでも

「構わないわ」

孫策は言う。

自分がこの双剣によって偽王とでも蔑まれようと、宿願が叶えられるなら、それでいい。

自分の後には、二人の妹がいる。彼女らなら真の善き王となってくれるだろう。その確信があった。

だから、孫策は真っ直ぐに劉焰を見返した。

そして、彼の鬼眼に微かな苛立ちを見た。

「……………あんだ、嫌いだ」

ぼそり、と劉焯は呟く。

「なんでさ？ どうして自分の命をそんな風に見ようとするのさ！  
正々堂々真正面から戦えよ！ あんたにはそれだけの力があるんだろ！」

劉焯の激昂に、孫策も周瑜も驚きの余り声が出せなかった。何より、この小鬼が本当に激怒してるのに驚いてしまった。

「後に託せるなんて思ってんな！ 仲間だって、家族だっているじゃないか。協力すればなんだって出来るだろ！ 自分で叶えろよ！」

くそ、と吐き捨てると、劉焯は双剣を掴んで天幕を出ようと踵を返した。その背に声がかかる。

「優しいのね」

振り返ると、孫策が笑顔を浮かべていた。それは女性特有の柔らかさと慈しみが同居していた。

その笑みのあまりの綺麗さに、劉焯は一瞬息を呑む。

「鬼、なんて呼ばれてるのにそんな事を言うなんてね。君はやっぱり、とんだ変わり者でお人よしだわ」

「……………お人よしじゃないよ」

「だゝめ。反論は許しません。君は変わり者でお人よしよ。それで

かなり甘い考えの持ち主」

「……………そんなの解ってるさ」

「いいえ。君は解ってない」

顔を背ける劉焯に孫策は尚も続ける。

「君は私達に簡単に死んでほしくないと言った。勿論、私も周瑜も簡単に死ぬつもりは無いわ。」

皆と力を合わせるのも当然していく。けど、君の考えを押し付けてほしくないわ。

後に託せる者がいるからこそ、全ての力を奮えろという事もあるのよ」

笑顔を消して、淡々と紡がれる言葉が劉焯の苛立ちに拍車をかける。

理想の押し付け。

そんな事、百も承知だった。

だが、気に入らない。

命は、そんな捨て鉢に考えられるようなものじゃない。

それは自身を救ってくれた光やみこりを否定する考えだ。

「甘いつてのは認めるよ。誰かに死んでほしくないとか言いながら、僕は悪党の命を奪ってる矛盾もさ」



「それが当然で普通だろう。自分の他人に対する価値など、個々人で様々だ。平等など言葉だけの飾りだ」

「ああ、そうだろうね。だけどさ……誰も笑顔でいられる世を創りたいって言った人がいたんだ。それを僕は嘲って否定した。そんな世の中は永遠に来ないってさ。」

その人もそれを認めた。だから、待つのは止めて創っていくんだって意気込んでさ」

莫迦みたいな夢でしょ？ と劉焯はそう言いながらも、彼の表情は呆れたようにも、楽しげにも見えた。

「それで僕はそんな莫迦みたいで、甘ったれてて、でも凄く綺麗なあの人達の理想の行く末を見たくなくなった」

だから、あの人達の理想への道を切り開く刃になった。

だから、あの人達の理想を守る為に戦う鬼になった。

「僕らが後に遺すとしたら、理想が実現した世だ。夢半ばになんてしない、叶えてしまえば後に託す必要もないんだから。」

託すより、力を合わせて共に歩いていく事を、僕達は選ぶ」

残念だよ、と小鬼は言う。

曹操よりも、劉備に近しいかと思ったが、彼女らの心は劉備のように莫大で漠然とした人々に向けられていなかった。

だが、劉備に叶えたい理想があるように、孫策にも果たさなければならぬ宿願がある。

それを邪魔も否定もする権利が、こんな小鬼一匹にある筈がない。

「夜もかなり遅い。僕は帰るよ」

「そうか。ならば、最後に聞いておきたい」

「どうぞ」

手振り付きで先を促すと、周瑜は質問を口にする。

「私達、呉が細作を連合軍内に放っていた件、どうするつもりだ？」

厳しい表情で問う孫策とは違い、劉焯は怪訝な表情になる。

「……………脅してほしいの？」

「違う。口外しない代わりに要求は無いのか、と聞いているんだ」

周瑜の補足に劉焯は眼を丸めた。

「言えば何かしてくれるの？」

「要求内容次第だが……………まさか、口外する気が無かったのか？」

「うん」

「なんて奴だ……………」

「秘密にしるとか情報を記した物を破棄しるとか言っただって、そん

なの結局後になれば洩れちゃうよ。それに調べた奴の頭の中には、しつかりと残ってるだろうし。

それとも何さ？ 調べた将とその部下の首でもはねろって、言えばいいのかな。それこそヤダね」

劉焯は肩を竦めると、

「じゃあ、私からも最後に」

「まだあるんだ……」

その肩を落とした。

「小鬼くん、“誰もが笑顔でいられる世”が創れるって、君自身は本当に信じてるの？」

「そりゃあ………信じてない」

孫策の質問に、劉焯は少しの間を置いてしれっと答えた。

彼は人の善行より悪行を多く見てきた。人の善性など、一刀や劉備と出会って尚更に希少で儂いものだと感じた程だ。

だから、信じきれない。

「でもね」

劉焯は否定の後に、その言葉を付け足す。

「劉焯翔刃つて鬼はさ、甘っちょろい幻想が好きなんだ」

笑みを浮かべ、言い放った小鬼は啞然とする小霸王とその大軍師の  
天幕を後にした。

やられた、と周瑜は思う。

劉焯という小さな鬼に、主にして親友の彼女は多大な興味を持って  
しまった。

もし付き合いが長くなかったとしても、周瑜はそれに気付く自信が  
ある。

「伯符……伯符！」

「……………」

「雪蓮……！」

「きゃっ……！ な、何！？ どうしたの、冥琳？」

「……………はあ」

何せ、この始末だ。周瑜の呼び掛けにも中々気付かず、肩を揺さぶってやっとだ。

孫策の頬は微かに上気したように赤く、少し眼を離すと劉焰が出て行った天幕の入口を見て、ぼおーっとしだすのだ。

そして、

「冥琳。私、決めたわ」

こうなった孫策は次にこう言うだろうと予想し、

「小鬼くんのところにするわ」

異口同音に合わせて言ってみせた。

「さすが冥琳。私の事、解ってる」

「ありがと……雪蓮、本当にいいのね？」

抱き着いてはしゃぐ孫策に、念を押すように確認する。

周瑜自身、孫策が選んだ選択肢が最良だと思っている。小鬼が言った通りの主ならば、事前に手に入れた情報とも合致する。

「ええ」

「ならば、明日赴くとしよう」

「そうね。母様の　いえ、呉の宿願成就の為にも」

鬼と連合3 小霸王との会談（後書き）

朔、雪蓮と冥琳しか出てこない連合編第3話。

作成中、雪蓮と冥琳の話し方が分からず、試行錯誤しながら、けっこう二人のセリフを交換したりと修正しました。

合ってます？

孫策と冥琳。この二人、作者的にはかなり好きなキャラです。

なので、書きたかったのですが、地雷を踏んで動けないみたいなので、けっこうもどかしい気分を味わいました。

次話も出るので、次はサクッと小気味よい感じで書きたいですね。

感想、批判、お待ちしてます。

伏線、回収出来るかな………

鬼と連合4      〽予想外な申し出〽 (前書き)

久々の短期間での更新出来ました。でも、話がちょっとしか進まな  
い……



## 鬼と連合4

### 予想外な申し出

「ふあっ……」

劉焯は欠伸を一つ零すと、半分しか開いていない眼を「し」と擦った。

単純に眠くて堪らない。

呉の陣営より戻ったはいいものの、それからとった睡眠時間が短く、子供の体には不足も不足だった。

足りない分を補え、と眠気が全身に訴えてくるのだ。

「朔、休むか？」

流石に頭が揺れ出したのに心配になった一刀が聞くが、劉焯は首をふるふると横に振った。

「でも、眠いんだろ？ 後ろに下がって桃香に休ませてもらいな」

優しくもう一度、たしな窘めるが、それでも彼はまた首をふるふると横に振り、

「……やだ。お父さんという」

「っ」

一刀のズボンをぎゅっと握って、離れないと意思表示した。

一刀にしてみれば、ガツンと衝撃を受けた気分だ。

主としての一刀なら、劉焯の自分に対する呼称が“父”になってしまっただけに眠くなってる事にすぐ気付いただろう。

だが、少し父としての自分が混じっていたせいか、義理の息子が眠いのを我慢して一緒にいようとするいじらしさに打ちのめされてしまった。

「？ お父さん？」

「……………はっ、思わず和んでしまった。ならさ、俺がおんぶするからさ。そしたら、一緒にいられるし、眠れるぞ」

「……………うん」

一刀の提案に劉焯はコクンと頷く。一刀は劉焯を背負うと、すぐに耳元で小さな寝息が聞こえた。

(ごめんな)

一刀は心中で劉焯に謝る。

劉焯を背負った時、その軽さに罪悪感が募ってしまったから。

劉焯の体格に合った重さであり、軽さ。

そんな自分より幼く、小さなこの少年に苛酷を強いてしまっている。

人を殺させている。

いくら理想の為とはいえ、その事実は変わらない。

昨晩も、一刀はふと眼が覚めると劉焯がない事に一瞬動揺しかけた。

心を落ち着かせ、彼の代わりに護衛にいた趙雲に話を聞き、そこで罪悪感に苛まれていた。

確かに守ってくれと頼み、その役に就けた。

しかし、それで良かったのかと、正しかったのかと悩んでしまう。

「おや。どうしました、主？」

「あ、星、桃香」

声に振り返ると、劉備と趙雲がいた。

「朔くん、寝てるんだ。あは、寝顔可愛い」

「確かに。これを見て、誰がこ奴を賊狩りの戦鬼と思えますかな」

寝てる劉焯の頬をぶにぶにとつつく劉備。趙雲は劉備の言に仕切に頷くと、

「さて。それで、主は何をお悩みです？」

やれやれといった感じで聞いてきた。

「あー……解る？」

「それはもう。昨晚も同じ顔をなさってましたからな」

「うんうん。ご主人様、今すつごく辛そうな顔してたよ」

そこまで顔に出てると言われれば、否定もごまかす事も無理だった。

一刀は悩んでいた事を素直に告白すると、

「なんと。そんな事でお悩みなのですか」

と、趙雲は一笑に付した。

「星……俺、結構まじめに悩んでるんだけど」

「そうなのでしたら、申し訳ありません。いえ、主もすっかりと親をしてらっしゃると思ひましてな」

「本当に出来てるのかな……」

「親の悩みの9割は子についてだと思ひますが。主の場合、我らの御旗でもありますから、5割程度ですかな」

「残りの5割は？」

「我らに関してが3割5分、残りが政などといったところかと」

「……………」

すっごく不真面目な主の評価を頂きました。

「ごめんなさい」

「それは朔くんにもだよ」

「朔にも？」

「だって、朔くんはご主人様の事、大好きなんだよ？ 朔くんの気持ちを見殺しして、そんな事考えたら酷いよ」

「それに、朔にそのような事を考えてしまえば、次は朱里や雛里、その次は鈴々へと、その気持ちは移ってしまいますぞ。」

そして、それは同じ理想を持つ彼女らへの冒涇と変わりませぬ」  
そんなつもりで考えていた訳ではないが、劉備と趙雲の指摘は一刀の心に突き刺さった。

「どうしたら……いいのかな」

思わず零れた呟きに、

「今のままでいいと思うよ」

答えたのは劉備だった。

「悩むのは、その人が大切だから悩むんだと思う。だから、あっさり答えは出ないし、出しちゃダメだよ、きつと」

ふにゃ、とした劉備の笑顔に、一刀は暖かいものを感じ、劉玄德の人に対する優しさの深さを改めて実感した。

「そうだな。簡単に答えを出しちゃダメだよな……よし、悩むのは後だ。今は、これからの戦いをどうするかだ」

頭を切り替え、目先の問題に思考を移す。

「それじゃ、みんなが集まって　　って、うわっ!?!」

寝ていた筈の劉焯が一刀の背中からいきなり飛び降り、

「さ、朔!?!」

呼び掛けにも答えず、劉焯は着地と同時に走り出した。

「朔くん、どうしたんだろ?」

「恐らく、他の諸侯の誰かが訪ねて来たのでしょう」

首を傾げる劉備に、趙雲は劉焯の様子から予想した。

他の諸侯と言っても、公孫贄ではないのは確かだ。それならば、劉焯が一刀の呼び掛けにも答えず走り去る訳がない。

(どうやら大物が来たようだな)

趙雲は劉焯が行った先を見ながら、ふむ、と一人頷いた。

劉焯は走りながら、劉備軍にいる筈のない気配が陣営内に入ってきた事に驚いていた。

（何でいるのさ!?!）

知らない気配ではない。しかし、他の誰かに任せて放っておくには  
いかない相手だ。

何せ

「……下がれ、下郎。我は江東の虎が建国した孫呉の王!」

呉の王、孫伯符その人なのだから。

「王が貴様の主に面会を求めているのだ。家臣である貴様はただ取り次げばよい」

王の風格を露わにし、対峙する関羽に命令する。それに齒噛みして

関羽も声を張り上げた。

「何だどつ！ 我らには主を守る義務がある！ 例え、王といえども不信の者をご主人様と桃香様に会わせられるか！

それでもまかり通ると言うならば、この関羽が相手となるう」

関羽は青龍偃月刀を構えるが、

「ほお……………大言壮語だな、関羽」

それに孫策は不敵な笑みを返し、己が得物の剣を抜き放つ。

「ならば、相手になってやろう」

一触即発か。

じりじりとした緊張が空気を変えていく。

関羽と孫策の周りの兵に動揺が走りかけているのが、関羽の眼には入っていないようだ。

関羽の近くにいる張飛も、その事をまるで気にしていない。彼女の事だから、二人の様子に気付いてるからだろうが。

仕方ない、と溜息を吐きつつ、

「はい、物騒な事はよしなよ」

「あぐっ」



一気に接近して関羽の後ろを取ると、彼女のポニーテールを引つ張った。

「朔！ また首がグキツとなったではないか！」

「それは謝る。けど、関雲長ともあるう人が、武器を構えて周りに不安の種を蒔かないでほしいな」

「く……」

「非礼があつたなら詫びる。そつちも武器を納めてほしい」

劉焔は関羽を窘め、孫策の方を向くと彼女も剣を納めてくれた。

「こんにちは、小鬼くん。半日ぶりくらいかしら」

「そうなるのかな。で、孫策は何しに来たの？」

「あら、いきなり本題。もっと親交を深めようとか思わないの？」

「どうだろ。主に刃を向けない限りはそう思うよ」

「つれないわね」

むう、とむくれる孫策に、劉焔は淡々と返した。

そんな孫策の後ろでは周瑜が軽く頭を抱え、劉焔の後ろの関羽と張飛は眼を丸くしていた。

「周瑜、今回のご用向きは？」

「ちょっと、何で私じゃなくて周瑜に聞くのよ？」

「孫策だと話が進まなそう」

「小鬼は中々の慧眼を持つてるようだ」

周瑜がクツ、と喉で笑うと、孫策のむくれ度があからさまに一段階上がった。

「私達の用とは、お前の主に挨拶と提案があつてな」

「ふーん……ま、いいでしょ」

「朔!？」

「関羽と違って、小鬼くんは物分かりがいいわね」

「違う違う。騒ぎを起こしかけたからね、呼ばなくてもうちの主達は飛んでくるんだよ」

お人よしだから、と劉焰が小声で付け加えると、一刀と劉備が息を弾ませて走ってきた。

「愛紗ちゃん、どうしたの？」

「桃香様！ それにご主人様まで!？」

「遠くから今にも戦いそうになってるのが見えて、かなり焦ったよ」

苦笑を零す一刀に若干の罪悪感が沸いたのか、関羽は顔を顰めた。

「愛紗と孫策お姉ちゃんがちょっと喧嘩したのだ。でも、二人とも本気じゃなかったし、朔が愛紗を止めたから、お兄ちゃんもお姉ちゃんも心配しなくていいのだ」

「あら、私が本気じゃないって、どうして解るのかしら？」

「武器を構えたのに殺気がないのだ。だから、鈴々は安心して見たのだ」

「ふーん……凄いわね、張飛ちゃん」

「お姉ちゃんもな」

互いを褒め合う二人を見ながら、劉焰は溜息を小さく吐いた。

やっぱり気付いていたという確信と、自分より早く場を治めてほしかったという疲れ成分を混ぜて。

「孫策さんでよかったかな？ 愛紗が迷惑をかけて、すまない」

「すみませんでした」

「いいわ、気にしないで。関羽も本気じゃなかったろうし」

一刀と劉備が頭を下げると、孫策は手を振って答えた。

「それで……貴女が劉備？」

「はい。私が劉備です」

「じゃあ、こっちの貴方は？」

首を傾げながら孫策が聞くと、

「天の御遣い……北郷一刀、だな？」

答えを口にしたのは、周瑜だった。

「ああ、俺が北郷一刀だよ。天の御遣いって呼ばれてる」

「冥琳、知ってるの？」

「官輅という占い師が謳った、戦乱の世に太平を齎す存在。それが劉備に与していると聞いた事がある。

それに、独特の意匠が凝らされた光り輝く服。一目瞭然だ」

「へえ………」

しげしげと一刀と劉備を孫策は見る。上から下まで嘗めるように見終えると、次に劉焰に視線を移した。

「昨日の夜に小鬼くんが言ってた、変わった主ってこの二人よね？」

「そうだけど　っ」

猛烈に背筋に冷たいものが流れた。

原因は解る。何せ、自分の事だから。

ゆっくりと劉焯は振り返ると、怒気が全身から滲み出る関羽がいつの間にか後ろにいた。

「昨夜、見回りに行つて中々帰つて来なかつたと聞いていたが……  
そういう訳か」

「あ、あはは……」

「さ〜く〜……!」

「ひゃぐつ!?!」

「またお前は勝手に行動しおつて!」

「ひいあああ!」

関羽に両頬をぐにゅっーと引っ張られ、劉焯は軽く悲鳴をあげた。

その様子に、孫策と周瑜はポカンとしてしまった。

関羽にされるがままに怒られている劉焯に、孫呉の王を前に不敵に飄々としていた昨夜の彼とは全く違ふ、見る影も無かつたからだ。

「あゝ、見苦しいところを見せてすまない。うちの子、勝手に動く事が多々あってね」

「なるほど。その苦勞、理解できるな」

苦笑する一刀に周瑜は同情すると、孫策に目を向ける。だが、孫策

は存ぜぬとばかりに首を傾げて見せた。

周瑜が頭痛を堪えるように頭を抑えると、

（朔は、まだマシな方か）

と内心胸を撫で下ろした一刀だった。

「それで、孫策さんは何しに来たんだ？」

「貴方も率直に聞いてくるのね。まあ、話を進め易くていいけど」

「我らの用件はその小鬼にも言ったが、挨拶と提案をしにきた」

「提案ですか？」

「そ。貴女達、先鋒にさせられたのよね？」

「はい…」

「どう？ 勝てる見込み、あるかしら？」

「正直言つて、解らない。愛紗や鈴々達がいくら強いと言つても、兵の数が絶対的に違い過ぎる」

「董卓さんの軍勢とまともにぶつかれば、きっと負けちゃうと思ひます」

肩を落として答える一刀と劉備。それを見た関羽から解放された劉焰は、彼女に引つ張られた頬を撫でながら孫策の質問を不審に思っ

た。

戦いの基本は、相手よりも多い数で挑むことだと、劉焯は孔明と鳳統に頭に叩き込まれていた。

基本も基本が守れていない劉備軍が勝つなど、天の加護があっても難しいだろう。

そんな分かりきった事を、嫌味でも何でもなく孫策は聞いてきたのだ。まさかな、と劉焯は思ったが、その予想は的中する。

「そうよねえ。だったらさ、手を組まない？」

「へっ!？」

劉備が驚きの余り間の抜けた声をあげるが、それは仕方のない事だろう。声に出さなかつただけで、心境としては一刀達も一緒だったのだから。

「孫呉の軍と劉備軍が協力して先鋒を打つて出る。どう？ これなら兵の数に関しての心配は減るでしょ？」

「兵に関しては、袁紹からの支援を受けてしまってるんだよね……」

「でも、使い物になるのかしら？」

「ぐっ……」

孫策の言に、関羽は齒噛みした。

確かに袁紹軍の兵を借りる事で数は増えた。だが、問題は兵の質だった。装備は財力頼みの立派な物を皆身につけているが、兵一人一人の質は決して高いとは言えなかった。

しかも、元が他軍の兵だ。自身が鍛えあげてきた精兵ではない為、戦場での指揮に対する反応と対応速度はどうしても遅くなるだろう。

その点、孫策率いる呉軍ならば問題は少ない。

兵の質は申し分ないだろうし、直ぐさま足並みは揃えられないとしても、指揮は孫策に任せておけば劉備軍の指揮系統と混乱しないだろう。

「……………それで、孫策さんにはどんな得があるんですか？」

それでも、劉備は提案にすぐに飛びつく事は出来なかった。

「あら、しっかりしてるのね」

「えへへ、鍛えられていますから」

見た目ぼわつとした劉備が、魅力的なこの提案にすぐ飛びつかなかった事が孫策には少し意外だったのだろう。

うん、と一度頷き、孫策は口を開く。

「いいでしょう。貴女“達”を信じて、胸襟を開きましょう」

(……………ん?)



“達”の部分若干強めに孫策が言った瞬間、劉焰は彼女の視線がこちらに一瞬向いたのに気付いた。

それが気になりはしたが、今は彼女の話に耳を傾けた。

「知っているかどうか分からないけど。呉の土地を奪われた私達は今、袁術の客将という身分に甘んじているわ」

だが、このままで終わるつもりは無い、と孫策は語る。

彼女の母、孫堅が命を燃やし、広げた呉の全ての領土の回復。

それが、孫伯符を筆頭にした呉の民全ての叶えたい 否、叶えなくてはならない宿願なのだ。

「この先待ち受ける割拠の時代。だから、敵は少ない方がいいし、外の味方もいれば尚良しって訳か。

そこで、俺達を選んだのか？」

「察しが良くて助かるわ、御遣いさん。それに味方が必要なのは、貴方達も同じでしょ？」

「……………ああ」

「ほら、利益は一致した。手を組むには十分な理由だと思っただけど……………私の勘違いかしら？」

その言に勘違いも間違いもない。孫策の言う通り、味方がいる事に不都合な事は無いだろう。

劉備の治める領地は、周りを他の諸侯がひしめく位置にある。

東には、公孫贇に袁紹。

南には、董卓に曹操。

公孫贇は、劉備と旧知の間柄という事と彼女の人柄から侵略の可能性は極めて低い。

董卓は、今回の戦いで連合軍に討たれるだろう。

この二人を除いても、大領主たる袁紹とあらゆる面で優れている曹操の存在は、眼を閉じてても反らしても無視できる存在じゃない。

図星を突かれ、誰もが声を詰まらせた。

「俺達を選んだ理由は？ それも聞かせてほしい」

その中、一刀は真っ直ぐ孫策を見据えて問う。

それに孫策は指を一本立てて答えた。

「貴方達が義理堅そうだから。これが最大の理由」

更にもう一本指を立て、

「次に、貴方達と私達の勢力が五分五分だから」

最後に、と三本目の指を立て、

「その劉焰翔刃つて小鬼を、私が気に入ったからよ。  
これが孫伯符の一番の理由」

綺麗な笑みを浮かべて、孫策は言い放った。その後ろでは、周瑜が困ったように苦笑っていた。

劉焰はそんな周瑜の様子から、孫策が本気で言ってるらしい事を悟ったが、

「……………」

後でされるだろう目付け役のお姉様のお説教レベルが、もう一段階上がったのも同時に悟った。

「このご時世に会ったばかりの人に、簡単に死んでほしくない、なんて本心から言う子を信用してみたくなかったの」

「はい、朔くんが嘘でそんな事言う筈ありません！」

孫策に加え、胸の前でぎゅっと拳を握って断言する劉備にそこまで言われ、劉焰としては気恥ずかしい限りだ。

隠れるように関羽の後ろ腰に抱き着いて、劉焰は赤くなりそうな顔を隠した。

「あ、朔が照れてるのだ」

「……………うるさい」

「ぶぶぶ……………」

目敏く気付く張飛に一言だけ返すと、関羽は何も言わずに微笑みながら彼の手に優しく自身の手を被せた。

「朔の事、そう言ってくれると嬉しいよ。けど……」

「信義を見せろ、と言いたいのだろ？」

周瑜が言葉を先読みしてみせると、一刀は静かに頷いた。

「いいでしょう。なら、見せてあげましょう」

孫策は踵を返し、

「孫呉の戦い振り、その眼に焼き付けなさい。もし、私が信頼するに足らないと判断したのならば、それはそれでよし」

戦場で矛を交えるだけよ

そう告げると、孫策と周瑜は自陣へと帰って行った。

「そんな事があつたんですか」

一刀と劉備から孫策達が来訪した経緯を聞いた孔明はほへえつ、としながら言った。

「朔くん、江東の麒麟児さんに気に入られるなんて凄いですね」

「まあね。けど、そこに行くまで独り勝手な行動したのは許されないよ」

「ああ、だから、あんな風になつたんですね」

孔明が視線を向けた先には、関羽に抱き上げられてる劉焰がいた。

抱き上げてる関羽は顔が緩みそうになるのを必死に堪え、趙雲は意地の悪い笑みを浮かべながら、げんなりとした劉焰の頬を突いていた。

「うん。ああやって愛紗のご機嫌回復中」

「星ちゃんは……よく分かんない」

「はあ……その後は雛里ちゃんですね」

「だな」

「だね」

劉焰が孫策に気に入られたと聞いて以来、本当に少しだが鳳統はむ

っとしていた。

普段内気、気弱、恥ずかしがりやと三拍子揃った彼女にしては珍しい反応だった。

「……な、何ですか？」

一刀と劉備に孔明の視線に気付いた鳳統が聞くが、三人は何でもないと首を振った。

「それで作戦だけど、どうしよっか」

「そうですね……………」

孔明は顎に手を当てて腕を組みながら、思考する。

「兵の数は袁紹さんに、質は孫策さんが協力してくれるという点ではある程度改善されましたが、苦戦する事には変わらないでしょう」

洛陽へ向かう道は二つ。

距離は短いが、東のシ水関と虎牢関と最難所が二つ続く道。

距離は遠くなるが、難所が極めて少ない西の函谷関の道。

とは言うものの、選択する余地は劉備達が連合軍に合流した時点で無くなっていった。

ただでさえ、総大将を決めるのにかなりの時間を浪費しているのだ。これ以上董卓軍に防備を固める時間を与えるような真似は避けたい。

「となると、東のシ水関と虎牢関を抜けるしかないか」

「難攻不落絶対無敵七転八倒虎牢関を抜くとなると、かなり厳しい戦いになりそうですね……」

「何だか物騒な四字熟語がいっぱい並んでるね」

「……それ程強大で凶悪な要塞だって事です」

虎牢関は、その両脇に崖がそびえ立ち、董卓のいる洛陽に向かう一本道にあるらしい。

正面からしか攻撃できないという防衛には最適な要塞。聞いているだけで鬱になりそうだ、と一刀は思う。

「敵軍の配置状況はどうなのだ？」

「大分前に斥候を前線に放ちましたから、おっつけ情報が集まるかと」

ご機嫌回復した関羽が質問すると、孔明はすぐ様答えた。

さすが伏龍といったところか、如才ない働きだった。

「とにかく、今は出来る限りの情報を集めるのが肝要かと」

「うむ、情報がなければ作戦は決まらんからな」

劉焰をいじり終えた趙雲も戻り、一刀の方を向いた。

「ならば、主よ。今は勇を鼓して出陣しようではありませんか。いつまでも暗い顔していると、全軍の士気に影響しますぞ」

「そうだよ。人は危機の中にも、好機を見付けられるらしいし」

ボスツと背中に重さを感じた一刀は振り返ると、飛び乗ってきた朔の顔が見えた。

「まあ、死中に活を見出だせ、なんて実際には言わないけど。今呼び寄せられる活を最大限に利用しようよ。」

皆で生き残る為にもさ」

「皆で生き残る為に……………」

劉焯の言葉を一刀は呟いた。

暗い顔をしていれば現状は良くなるのか？

否。

落ち込んで、嘆いていれば現状は良くなるのか？

否。

そんな事は、決して有り得ない。

勝ち負けだけを考えるな。

考える。



状況を最大限に活かし、いかに損害を抑え、どうやって皆で生き残る方法を。

一刀は自身に何度も言い聞かせる。

「……………よし、足掻くぞ。俺達は洛陽の人達を救う為に来たんだ、袁紹の捨て駒になんかなってやるものか！」

一刀は強く言い放つ。

その言葉の力強さに、劉備達も深く頷いた。

「全軍に出陣の準備を通達。愛紗と星には、袁紹軍の兵士の采配を頼む」

「「御意」」

「朱里と雛里は袁紹からの兵糧の再確認。それと、斥候が戻り次第、その情報を基に作戦をすぐ立てられるようにしてくれ」

「御意です」

「はい！」

「お兄ちゃん、鈴々は？」

「はい、はい！ 私は？」

「鈴々は朔と一緒に俺と桃香の護衛を頼むよ。桃香はいつものよう

に」

「うう、待機してればいいんだね……」

数秒前まで手を挙げてテンションを高くしていた劉備は、途端に肩を落とした。

落差激しいなあ、と思いながらも劉焰は劉備に近寄り、彼女の耳元で、

(主上の近くにいられるって思えば?)

そう囁いた。

すると、

「あ、そういうばそうだね」

と一瞬で立ち直った。

「……………朔、何言っただ？」

「さてね。鬼のちょっとした気遣いだよ、気にしないで」

「そうか? ………………それじゃ、みんな。準備に取り掛かるう……………」

……………悔いの無いように」

付け足されるように出たその言葉は、一刀が激戦を予感したが故か。

軽い戦慄を覚えながら、彼らはそれぞれの持ち場に向かった。

鬼と連合4      予想外な申し出（後書き）

また出しちゃいました、雪蓮と冥琳。

一話丸々お休みだった蜀メンバー。やっぱり人が増えるとセリフ割り当てが大変です。

そして、あんまりセリフの無かった朔、鈴々、朱里、雛里のチビーズ。朔以外は影薄くなるなあ、と再確認してしまいました。

そして、最後に反省。予定では最後らへんに戦闘入れる筈でした。

でも、入れられませんでした……次回は入れられるかなあ……。

感想、批判などお願いします。

鬼と連合5      〽水関前哨戦〽（前書き）

鬼と連合5

なんか長くなってしまいました。

久々にバトルあります。名ばかり戦記の返上の為にも、なんて言えませんが。

鬼と連合5 〱シ水関前哨戦〱

「さあ！ 連合軍総大将、袁本初の号令と共に、雄々しく、勇ましく、そして華麗に進軍しようではありませんかっ！」

そんな総大将の号令が耳に届くと、劉焯はうんざりとしながら行軍を開始した。

向かう先は、一つ目の難所であるシ水関。虎牢関と並ぶ難攻不落の要塞である。

そして、そこを守るのは董卓軍兵5万。その内の3万が主力部隊らしく、それを率いる将は。

「華雄？」

劉焯が聞き返すと、孔明は頷いた。

「董卓軍の中でも猛将で知られ、兵士達の人気も高い方だよ……かなりの強敵なると思う」

「良将にして猛将………難儀なものだな」

孔明の言葉に、趙雲は顔を渋くする。

「加えて、装備も兵の質も高く、士気も意気軒昂。難儀も難儀で厄介過ぎだよ」

「確かに。しかも、作戦が無いってのは不安になるな」

「……だけど、こと攻城戦に限って言えば、作戦や策らしきものは必要ではないです」

難題に頭を悩まされる劉焰と一刀に鳳統は言う。

「攻城戦はどう頑張ってみても、圧倒的に籠城側が有利ですから。……なので野戦とは違い、策というものは調略方面でしか活躍できないんです」

「っていうと、今回は作戦無しで火の玉特攻？ そんな無謀極まりなのヤダよ」

「袁紹さんなら言い兼ねませんが、今回は1対多数の戦です。いきなり横から挟撃される心配も少ないでしょう」

孔明の言に理解を促されるが、結論としては何も変わっていない。

「やっぱり、作戦は特に無し、と」

「戦況を見て、その都度即応……という事しか言えませんが」

「ごめんなさい、と鳳統は頭を下げた。

軍師として有効な策を立てられず、皆の役に立っていない自分が悔しいのだろう。

魔女帽を握る小さな手にぎゅっと力が入っていた。

「雛里」

そんな彼女に、朔は躊躇う事なく声を掛ける。

「天下の鳳雛殿が、今考えつかないなら仕方ないさ。雛里が分からないなら、僕なんか倍の時間使っても考えつかないよ」

でもさ、と彼は続け、

「考えついたなら、すぐ教えて。僕が雛里の望む戦況に変えてみせるから」

真っ直ぐ鳳統の眼を見て力強く宣言してみせた。

「……朔くん」

この少年がそう言った以上、多少の無理も無茶もするかもしれないが、自分の望む戦況へと確実に変えてくれるだろう。

鳳統には、劉焯が言を違えるのを想像できない。

だから、

「うん、頑張るね」

俯きがちだった暗い表情を消し、鳳統は笑みを返した。

「ほう。言うではないか、朔よ」

「何さ？ 大言壮語だったのさ？」

「いや、お主は鬼であり、戦場を翔ける刃だ。その言は違うまい…  
…だがな」

「朔だけに任せたら、何か心配のだ」

「そうだな。朔一人では心許ないな」

「ですね。逆に混乱させちゃうかもしれませぬね」

「……何、この四面楚歌」

趙雲、張飛、関羽に孔明と次々と言われ、さすがに劉焯も顔を引き  
攣らせた。

鳳統はフォローしようとしているが、あわわ、と言って慌てていた。

「朔くんが一人で頑張る事ないからね」

劉備はしよげかけている劉焯の両肩に後ろから手を置いた。

「朔くんが雛里ちゃんの力になりたいようにね、私達だって愛紗ち  
やんだって力になりたいの。」

だから、仲間同士協力したらもっと力になれるよね」

「……だね」

自分の間違いを諭され、劉焯はさっきの宣言を訂正する。

「“僕ら”が雛里の望む戦況に変えてみせるから。絶対にね」



「何やら大言壮語の度合いが上がってはおらんか？」

「そりゃそうさ。関羽、張飛、趙雲っていう物凄い武将に戦鬼までいるんだ。出来ない事の方が少ないんじゃないかな？」

「朔、良いこと言ったのだ！」

張飛ははしゃいで見せたが、彼の言葉の裏に隠された意味に気付いた面々は、苦笑いやら微笑を各々浮かべていた。

裏に隠された意味。

出来る出来ないではなく、やってみせる

そう言外に挑発してみせたのだ。

ただの挑発ではなく、信頼と一掴みの悪戯心を混ぜており、武人を心踊らせるには十分な効果があった。

趙雲は艶のある笑みを浮かべながら、

「いいだろう。我らの武勇の高み、見せてやろうではないか。なあ、関雲長殿？」

関羽も凜々しい笑みを浮かべ、

「そうだな。我らの仁と義の刃は匪賊を討つ為にある。董卓配下の

将などに負けはしない」

劉焯に負けじと宣言してみせた。

そんな彼女らに頼もしさを感じながらも、一刀は再度問う。

「さて、ここから先は一方通行……後戻りもやり直しも無しだ。みんな」

勝つ心意気は十分か？

解っていないながらも、確認するようにわざと聞いた。

首を振る者。

俯く者。

眼を反らす者。

笑ってごまかす者。

そんな事を、誰一人しないと解っていないながら。

答えは、予想通り。皆、一刀から眼を反らす事なく頷いた。

「それじゃあ、甲羅に籠った亀には退場してもらいに行こうか」

一刀は視線をシ水関へと向けて言った。

あれから作戦はごく単純な考えから決まった。

城に籠っているなら、出てもらえばいい。

そんな単純極まりない考えを基点にだが、決めれば案外すんなりと流れが決まるもんだな、と劉焯は思った。

まず、第一に、華雄の武人としての誇り高さを利用し、城からおびき出す。

第二に、突出してくるだろう華雄軍を一旦受け止め、機を見計らい押し込まれたように後退しながら誘導する。

第三に、劉備軍の後ろに位置する袁紹軍に誘導した華雄軍を押し付ける。

しかし、問題はある。

第一の点で、華雄の武人の誇りを罵倒しおびき出すのだが、見え透いた挑発に簡単に乗るのか。

第二の点で、突出してくる華雄軍を誘導する為に戦線を疑われないように本気に崩さなければならぬ。失敗すれば、そのまま立て直し不可能な程に瓦解する可能性を孕んでいる。

「それは大丈夫です」

そう問題は無いと孔明は言う。

「第一の問題は、華雄將軍は己の武に相当な誇りを持っていますから、それを罵られれば黙っていませんよ」

「そんなに簡単な事かな？」

「朔よ、鈴々を見れば解る」

「にゃ？」

「……あ、納得」

関羽に言われ、張飛を見ると彼女が言わんとしている事が解った。張飛には悪いが、と前置きが必要かもしれないが。

「第二の問題は、恐らくといったところでしたが、それは朔くんが解決してくれました」

「僕が？」

自分が解決したと言われても、身に覚えが無かった。まだ董卓軍と戦ってすらいないのに、役立つと言われても劉焰は首を傾げるば

かりだ。

「……孫策さんの事だよ」

「孫策？」

少しむつとしながら鳳統が答えを教えてくれた。

「……今回の戦は連合軍だから、私達の旗色が悪くなれば他の諸侯が援護してくれる筈。

皆さん、こんなところで負けてられませんから」

「じゃあ、袁紹さんだけじゃなく、みんなを巻き込んだんじゃえって事？」

「はい、乱暴に言うのと桃香様の言う通りですね。

ですが、朔くんが孫策さんと接触してくれた事で、手を貸してくれる事が確実にになりました」

重要な問題点は解決。後は自分達の働き次第。

難儀なのは難儀なままか、と劉焯は内心で独り言ちる。が……

「……………ん？」

「どうした、朔？」

一刀に聞かれるが、遠くを見ながら劉焯は何でもないと首を横に振る。

「そうか？ 愛紗、星、二人には先陣の中の先陣を任せる。上手く戦線を崩せるように頑張ってくれるかな」

「ふっ……やってみせましょう」

「大任ですね。やってみせます」

趙雲と関羽は力強い返事に、一刀は頷きを返す。

「朱里と雛里は二人の補佐を。俺や桃香は本陣で、崩れてくる愛紗達を援護する」

「お兄ちゃん、鈴々はーっ！」

中々自分の名前を呼ばれない事に痺れを切らしたか、張飛は不満げに聞いた。

「鈴々も本陣に居て」

「嫌なのだ！ 鈴々も先陣が良い！」

開口一番に拒否。来るのは解っていた一刀だが、余りの早さにさすがに苦笑った。

「イヤイヤ！ 鈴々だって暴れたいのだ！ 本陣で待機なんてつまんないのだ！」

「こら、鈴々！ こんな時にそんな我が儘を言つな。朔だって本陣で待機なのだぞ」

「朔はそれがお仕事だからいいのだ！ それに、この前戦うの面倒だっけ言ってたもん！」

「勝手にバラさないでよ」

我が儘発動でこっちにまで火の粉を飛ばすな、と半眼になる劉焯。そして、そのまま視線を一刀に向けた。

その視線を向けられた当人も、無言で訴えてくる息子の視線に促され、口を開いた。

「鈴々、間違えたらダメだ。鈴々にはとっても重要な役目をしてもらいたいから、本陣にいてもらうんだ」

「重要な役目？」

「そう。俺と桃香だけじゃ撤退してくる愛紗達を援護するには役者不足だし、朔じゃ経験不足だ。

けど、鈴々だったら？」

「鈴々だったら大丈夫なのだ」

「だろ？ 敵の追撃を何とか防ぎながら撤退してくる愛紗と星。そこに本陣を率いて颯爽と登場する鈴々……どう？」

「かつ、かついいのだ……」

途端に眼を輝かせる張飛。あと一押しと見た劉焯は一刀を援護する事にした。

「鈴々、天の国にはさ、“主役は遅れてやってくる”なんて言葉があるらしいよ」

「鈴々、主役!？」

「うん、主役主役」

「鈴々、本陣にいるのだ! それでね、お兄ちゃんを守りながら愛紗達の前に颯爽と登場するのだ!」

さつきと打って変わって、上機嫌になった張飛はぴよんぴよん飛び上がりながら受け入れてくれた。

「……お見事です、ご主人様」

「愛紗……」

労いの言葉を関羽はくれるが、一刀としては若干心苦しい。

口八丁を自覚しながら、張飛を丸め込んだ。気分は、もうペテン師だ。

「口八丁、大いに結構さ。主上、物事に際して適切な言い方があるんだから、今の主上の言葉は間違っていない」

「ああ。作戦の要の一つは間違いなく、鈴々の援護だ。嘘を言ったつもりはないよ」

「よく解ってらっしゃる。ならば、主。鈴々の手綱はお任せしますぞ」



「了解。でも、俺がとやかく言つまでもなく、鈴々ならちゃんと言つてくれるさ」

「しかし、あ奴は朔のようにたまたま暴走しますからね。ご主人様、朔共々鈴々を宜しく頼みます」

「朔もか……」

関羽にそう言われ、暴走要注意の赤毛チビコンビを御しきれるか、一刀はかなり不安になる。

「ふむ。主よ、不安ならば、鈴々だけでもその可能性を低くしましょうか？」

「そんなの出来るのか？ 星」

「はい。まあ、結果苦勞するのは朔だけかと」

「僕に苦勞を押し付けるな」

しれつと言つてのける趙雲に、劉焰は訴えるが、彼女はさらっと聞き流した。

「くそう……取り敢えず、孫策達に僕らの作戦を伝えてくるよ」

協力相手の孫策にも伝えておかなければ、ただでさえ揃えにくい足並みが尚更揃わなくなるだろう。

そう思い、劉焰は向かおうとしたが、誰かに袖を捕まれて邪魔され

た。

「だ、ダメっ!!!」

なんて、言葉付きで。

「ひ、雛里ちゃん?」

孔明が驚きの余り、劉焰の袖を掴む彼女の名前を口にす。

心境としては、皆同じ気持ちだったろう。

何せ、あの鳳統が。内気、弱気、恥ずかしがりと三拍子揃った彼女が声を大にして劉焰を引き止めたのだ。

当の本人としては咄嗟の行動だったのか、綺麗な朱に染まった顔がありありと物語っていた。

「雛里?」

「あ、あの、その、あわ、あわわ!?!」

「ひ、雛里ちゃん!?!」

恥ずかしさが頂点に達したか、鳳統は叫びながら何処かに走って行ってしまった。

孔明も彼女を追いかけに行ってしまった為に、軍議の場に軍師がいなくなってしまった。

「離里、どうしたんだろ？」

鳳統の意外な行動にキョトンとしている劉焯の後ろでは、劉備達がそんな彼の様子に溜息をついていたりするのだった。

劉焯はさっきからずっと悩んでいた。

鳳統が何処かに走って行った間に、劉焯は孫策陣営に赴いて作戦を伝えた。

その時に軽く鳳統にしては珍しい行動を彼女の名前を出さずに孫策と周瑜に話してみた。

すると、孫策は少し面白くなさそうな顔を浮かべ、周瑜はやれやれといった表情をして、

「もう少し女心も学ぶといい」

そう言いながら劉焯の頭を撫でた。

女心を学べと言われ、頭の中が疑問符で埋め尽くされる。心境としては、どうしろと？といった気分だ。

自陣に戻り、劉備に聞いてみた劉焯だが、

「ごめんね、私も教えてあげられないんだ。

答えはいっぱいあって、どれも正解だったり間違っていたりするから」

そう言われ、頭を撫でられた。

ごまかされた気もするが、どうやら女性でも女心とは難解なものらしい。

「女心って何なのさ？」

「戦の前に何を考えてるんだよ」

劉焯が独り言ちしていると、一刀にツッコまれた。

「あ、主上。女心って何さ？」

「え、女心？……………ごめん、俺も分からない」

男二人が頭を悩ませて出せる答えではなかった。

「それとさ……………もう一個質問」

「何だ？ 出来れば、女心とかそういうの以外で頼む」

「勝つ心意気は十分。なら、耐えられる？」

「っ！？」

鬼の双眸に見据えられ、一刀は一瞬息を呑む。

戦が始まれば、殺し合い、殺され合う。

人が、自分の知っている人も知らない人も死ぬ。

多くの人が命を落とす。

暗に小鬼は言ってくる。

迷いはないのかと。

辛くはないのかと。

苦しくはないのかと。

哀しくはないのかと。

「……………大丈夫だ」

声は震えていなかったか自信はないが、一刀は問いに答えた。

主として、なりより親として、この少年にうつろたえている姿は見せたくない。

だが、

「……………そう」

短く答えたこの少年には、内心を見透かされている気がする。

劉焯にしてみれば、そんな強がりを見せてくれなくても良かった。

これは劉備にも言えるが、先にあった黄巾の乱を治めた経験があつても、人死にに慣れるようなしつかりと割り切った人柄ではないと知っている。

苦しみも迷いも抱えながら、それでも前に進もうとする意志いじぶんの強さ。それを持つているからこそ、今ここに立っているのだという事も知っている。

自分にそんな強さがあるかは解らないが、

(せいぜい気張ってみますか)

一刀との約を違える気はない。

「ちよつと行つてくるよ」

一刀の世界であれば、ちよつとコンビニまで、みたいなノリで劉焯は言った。

「珍しいな、言つてから動くなんて」

「今朝怒られたばかりだからね……………何も無ければそれでよし。30分経つて戻つて来なかつたら援軍頼むよ」

劉焯は一刀に背を向け、歩き出す。その歩みの先は進軍方向とは逆だ。

「無理するなよ。危なくなったら、すぐ戻ってくるんだ」

仕方ない、といった表情で一刀は劉焯を送り出す。

「まあ、ほどほどに暴れてくるよ」

劉焯は後ろ手に振る。

その瞬間、彼の姿は消えた。

風が渦巻き砂塵が舞う中、華雄は戦場を突き進んでいた。その後ろには彼女を慕う兵達が隊列を乱さずに追従している。

向かう先は、連合軍の“後方”。奇襲を以て、先手を打つために彼女は駆けていた。

華雄はシ水関を既に出ていたのだった。兵の数は奇襲する為にも多くはないが、大きく迂回するようにルートを取って連合軍に気付かれないうよう行軍していた。

それに華雄は手応えを感じていた。

事実、連合軍は何処も気付いた様子も目立った行動を起こしていな

い。

「行くぞ、我が精兵達よ！ 連合の奴らに一泡吹かしてやるぞっ  
」！」

『応っ！！』

華雄の檄に兵達は力強く答え、足取りが一段と速くなる。

士気は上々。これならば奇襲をし損じる事はないと華雄は確信する。

だが、

(……………何だ、あれは？)

その順調な行軍の前に、阻むように人影が現れた。

遠方に見える人影は黒衣の戦装束に、一本角の如く刃の付いた真紅の兜を纏っている。

その容貌にどこか聞き覚えがあった。

思い出せそうで思い出せない。喉元まで出ているのに、後一つきっ  
かけが足りない。

「華雄様、あの者を如何致しますか？」

「あ、ああ。このまま蹴散らすぞ」

部下に聞かれ、華雄ははっ、となりながらも命令を下す。



間違ってもあれはただの一般人ではない。ここ一帯の住人であればここが戦場へと変わっている事を知っているだろうし、ましてや防衛の為とは言えどあんな変わった兜は被らないだろう。

「私が行きます」

部下の一人が先行し、それに他の3人が続く。

近付けば分かったからだろう、相手は年端も行かぬ少年だと。

「小僧、ここで何をしている!？」

強く問い質されるが、少年は退屈そうな視線を返すだけ。

互いにその眼を見合わせた瞬間、兵士達は思わず後退おとすった。

少年の双眸は人のそれではない。

異形の眼。

「何、臆したのさ？」

少年は笑う。

情けないと嘲笑った訳ではなく、当然の反応だと笑った。

「ぐ……」

「さて、ここで何してるか、だっけ。答えは簡単、あんたらの邪魔

をしに来たのさ」

「は……」

兵達は少年の言葉に啞然とする。いきなり何を言っかと思えば、かなりとち狂った内容。腰に双剣を佩<sup>は</sup>いてはいるが、それでも独りで何が出来るというのか。

「あ、そうそう。僕、反董卓連合の一員だから」

「何っ!？」

連合という言葉に反応し、兵達はすぐ様抜刀する。対して、少年は何も行動を起こさない。

「反応が速いね。けど、刃を抜くのが遅過ぎだ。あと、子供だろうとこんな戦場<sup>とくろ</sup>にいるんだ、もっと警戒しなよ」

「黙れ、小僧っ!！」

「小僧ではあるけど、僕にも名前があるんだ。ついでだし、倒される前に聞いていきなよ」

少年は双剣の柄を握り、

「僕は劉焰翔刃<sup>りゅうえんしょうじん</sup>って鬼で、あんたらの敵だ」

瞬間、黒と白の閃光が4つ閃いた。

叫び声一つあげず、崩れ落ちる兵達。

骸となつた者達に一瞥をくれ、劉焯は双剣に付いた血を振り払いながら華雄を見る。彼の鬼眼が次に華雄を見遣つた時、彼女はある噂を思い出す。

平原の相の傍らには天の御遣いがある。そして、彼の徳に打たれ、守護する戦鬼がいると。

鬼は御遣いに仇なす賊を許さず、彼と彼を慕う民を守る為ならば千の賊にも恐れず立ち向かい、その力を振るうという。

(それが、この小僧だというのか……)

華雄はぎりつと音が鳴る程に歯を噛み締める。

心を占めるのは落胆と怒り。

鬼と呼ばれる存在が本当に噂程の力を持つならば、彼女は一人の武人として槍を交えてみたいと思つていた。

だが、蓋を開けてみれば、正体は小生意気な小僧だった。

4人の兵を一瞬で倒したのは見事だとしても、華雄は己の武はその上を行くと自負している。

「貴様、本当に賊狩りの戦鬼なのか？」

「誰が言い始めたかは知らないけど、そうらしいよ。まあ、何だつていいさ。僕は仲間を守るだけだ」

「はつ。小僧一人で何が出来る？」

「ああ、出来る事なんて限られてるよ。でも、何も出来ない訳じゃない」

「所詮、世を知らぬ餓鬼であつたか。やれ！」

また数人の兵が劉焔に襲いくるが、迫る刃を軽々と避けてみせる。

「そんなに死に急がなくてもいいんじゃないの」

軽口を叩きながら、向かってくる兵を全員蹴り飛ばした。

「逝くなら、鬼の奇術でも見てから逝きなよ」

そう言うと、劉焔は双剣を真横に投げた。

突然敵もいない方向へと自身の武器を投げるといふ暴挙に、驚きの余り皆足を止めてしまう。

劉焔がにやりと口端を吊り上げた瞬間、放物線を描く筈の双剣がピタリと止まる。

「さよなら」

劉焔が空手となった両腕で振るう。それに連動するように双剣が宙を駆けた。

「莫迦な!？」

華雄が驚きの声を上げ、目の前の光景を否定した。

剣が縦横無尽に宙を舞っている。持ち主の手から離れて尚、意を汲んだように敵に襲っていく。

それだけでも有り得ないというのに、その刃は兵の首を斬り飛ばし、胴を薙いでいく。

信じられない。

信じたくもない。

華雄も兵達も同じ心境だった。

しかし、現実是否定したところで変わらない。小さな戦鬼が、命を絶っていく事でそれを直視しろと突き付けていく。

劉焰が右腕を振るう。

干将の黒刃が兵達の腕を断ち、足を裂く。

劉焰が左腕を振る。

莫耶の白刃が兵達の首をまた幾つも斬り飛ばした。

「嘘だ……」

華雄は、また現実を否定する。

「有り得ん……あつてたまるか……」

「ぐあああああ！」

兵達の断末魔が聞こえようと、まだ否定する。

「あつてたまるかあああああー！」

否定はいつしか叫びに変わり、華雄は自身の戦斧、こんごうばくろ金剛爆斧を強く握り締め駆け出した。

「この餓鬼がああああー！」

華雄は振り上げた金剛爆斧を叩きつける。戦斧から手に伝わる鋼の感触に苛立ちが一段と燃え上がった。

「来たか、良将にして猛将」

手に戻した干将で戦斧を受け止めた劉焰は冷笑する。

「恐いのかな、あんたもさ？」

「貴様ごとき恐るるに足りんわ！」

強く華雄も言い返すも、冷笑は消えない。

「そうなんだ。だったら、その手の震えをさっさと止めなよ」

「ぐっ！？」

華雄は後ろに跳び、劉焰から距離を取る。

「動揺もしてるなよ」

冷ややかに言い放ち、劉焯は宙を舞わせていた莫耶を華雄に向かつて飛ばす。

華雄は金剛爆斧でそれを防ぐが、視界が急に薄暗くなる。刹那、咄と嗟つさに金剛爆斧を振り上げると、劉焯が振り下ろした干将と戦斧の柄が激突した。

「いい反応だね」

「舐めるなよ、小鬼いいい！」

「おっと」

一瞬の鏢つば迫り合いで押し返され、劉焯は後ろに飛ばされた。

「……片手一本じゃ時間かかるかな」

劉焯は莫耶も手に戻し、干将と莫耶の両方を構える。

それに華雄は眼を細めた。

「貴様、私を片手だけで倒す気だったのか？」

「さてね。そう思ったなら、それが真実じゃないのさ？」

「貴様……」

「怒りに燃えるのは結構。その分、生き抗いなよ!!」

ダンッ!と音がした瞬間、劉焯の姿は消え、華雄は黒と白の閃光を見た。

必死に迫る閃光を金剛爆斧で受けて防ぐが、閃光の瞬きは衰えるどころかその速さと重さを増していく。

華雄に驚きの声をあげる暇さえ与えないまま、連撃は続く。

続く。

続く。

続く。

まだ続く。

そして、

「ぐあああつ!!」

連撃に耐え兼ねた戦斧が宙を舞う事で唐突に終わりを告げ、

「これでおしまいだ」

戦鬼が終幕の刃を振り下ろす。



「ざんねん。エンディングは、まだ先っすよ」

突然現れた白銀の閃光が振り下ろした干将を弾き、そのまま劉焔に迫る。

「ちいっ！」

咄嗟に莫耶で弾いて横に転がるようにして避けるが、刃が頬を掠め血で朱に染まった。

劉焔は突然の乱入者に敵意を向けようと睨むが、その乱入者である女性に敵意をぶつけられなかった。

赤みがかった長い茶髪。それを頭の後ろで上から小中大の3つのポニーテールで束ねている。

丸くぱつちりと開いて愛嬌のある藍色の眼。自分と似た黒の戦装束を纏い、両腕両足に計4つのリングをはめている。

そして、手には自身の身の丈はありそうな白銀の突撃槍を持っていた。

「やあやあ、奇遇っすね。小鬼ちゃん」

明るく言うつ乱入者だが、劉焯は答えない。

「むう。無視はいけないですよ？ お姉ちゃん、傷付いちゃうっす……」

「……………でね」

「はい？」

「何でさ！？ 何であんたがここにいるっ！？」

「それはこっちの台詞っす。しかも、人がこんな砂埃舞すなほこりってる中や  
つて来たのに、小鬼ちゃんが友達を殺そうとしてるなんて」

「華雄は僕の主の敵だ」

「敵？ ありや、小鬼ちゃんは反董卓連合の一員っすか」

そっかあ、と乱入者は一度頷き、華雄を担いだ。

「なっ！？ こら！ 旭！！ 放せ！！」

「だーめっすよ！ 負け犬ちゃんはゴーホームっす」

「訳解らんことを言うな！！」

「退却するって言ってるんすよ」

「まだまだ！ まだ私は……………！」

じたばたと暴れる華雄を器用に担ぎながら、旭と呼ばれた乱入者は劉焯を見る。

「追ってくるっすか？」

「追わない。奇襲に足る戦力は削ったし」

「そっすか。助かるっす」

「……………早く行きなよ」

「……………そうさせてもらっす」

あはー、と笑いながら乱入者は歩を進め、ふと足を止めた。

「ねえ、小鬼ちゃん」

「何さ」

「今は名前あるんだよね？ 教えてほしいな」

「……………劉焯、翔刃」

「ありがと。またね、小鬼ちゃん」

乱入者は今度は立ち止まらず、生き残っていた兵を引き連れ退却した。

「……………何が、またね、だよ。ばか旭……………」

その場に独り佇み、劉焯は独り言ちた。

鬼と連合5      シ水関前哨戦（後書き）

ええ……前書き通り、だらだらと長く書いてしまいました。過去最長、更新しちゃいましたよ。

戦闘に力を入れようとした結果がこれです。描写が解りにくかったと思います。

本当にすいません。

そして、最後の乱入者ですが、二人目のオリキャラ登場です。

予想つく方もいるかと思いますが、正体は次回で。

感想、ご指摘お待ちしております。

鬼と連合6     〵シ水関攻略戦〵〵（前書き）

月一更新、守れず一週間遅れての更新。

すいませんでした。

そして、今回はかなり無理矢理な話になってると思います。

鬼と連合6      ～シ水関攻略戦～

自陣に戻った劉焯は、華雄が突撃槍を持った將に担がれたままシ水関に退がったのを聞いた。

しかも、退却ルートは堂々と連合が集まっている中央を突破していった。退却に専念していた為か、交戦も一切無いまま、物凄い速さで突破されたらしい。

奇襲にはならなくとも連合軍を一時的に混乱させられたのなら、董卓軍の狙いは半ば成功と言っていいたろう。

あいつがいたから仕様がなか、と劉焯は思う。

「ただいま」

「あ、お帰り      つえ!？」

何となしに劉焯が戻ると、劉備が出迎えてくれたのだが、彼女の顔が一瞬で青くなった。

それもそつだ。頬の傷はまだしも、劉焯の両手は血で真っ赤に染まっていた。

「さ、ささ、朔くん!？      血、血が!！」

「あ、これ?      大丈夫だよ」

「ほっぺたじゃなくて!!--      手が!!--      手、血だらけ!!--」

「手？ 別に何ともないけど」

「痛くない筈ないよ！！ 救護の人ー！ 早く来てー！ 朔くんが死んじゃう！」

「勝手に死にかけにしないで!？」

「うめんなさい」

劉備は頭を下げ謝る。

謝罪を向ける先には手を布巾で拭く劉焯がいる。

正直、彼としては自分を心配してくれたからこそ起こしてしまった行動なので、怒るも何も無かった。

彼の手が血で染まっていたのは、華雄率いる奇襲部隊との戦闘の為に間違いはなかったのだが、それは決して自身の血ではない。

ちょっとした奇術の種をしまう際に汚れたのだが、その種ももう使えないだろう。

「気にしてないから、頭を上げてよ。主が臣下に簡単に頭下げちゃ



ダメだよ」

「でも……」

「でも、桃香様が心配してくれて嬉しかった。僕、桃香様のそういう優しいところ好きだよ」

「朔くん……」

「だから、今度は少しだけ格好良い桃香様を見せてよ」

「うん！………って、少しだけしか格好良くなれないの、私？」

「人にはそれぞれ個性があるもんだよ。格好良いのは愛紗と星に任せて、桃香様は人を安心させられる個性で頑張って」

「そっか。じゃあ、それで頑張るね！」

両手を胸の前で握り締め、熱意を燃やす劉備。

それを見て、劉焯はごまかせたと胸を撫で下ろした。

正直言って、格好良い劉備があまり想像出来ない。そんな本心の欠片がぼろっと出てしまったのだった。

「そっか、桃香様」

「どうしたの？」

「実はね、ちょっとマズイ事になったんだ」

「へえ、そうなんだ」

笑顔で劉焯にそう言われ、劉備も笑顔を返す。

事の重大さに気づくには、たつぷり10秒はかかったのだった。

シ水関の中では、華雄の怒声が響き渡っていた。

「何故、邪魔をした!？」

怒りの矛先は、戦鬼の刃から自身を救ってくれた少女に向けられていた。

「ありら、余計なお世話だったすか？」

だが、少女はあっけらかんと返す。

「そうだ。奴には部下をかなりやられた。一矢報いねば、死んだ者達に顔向けできん!」

「えっと、つまり、華雄たちはあそこで小鬼ちゃんに殺されたかったと」

「そうは言っていない!」

「じゃあ、あの時のピンチ　　じゃないや、窮地を脱したとして、あのまま戦ってれば勝てたんすか?」

「それは……」

「無理っすよね?　猛将にして良将と呼ばれる華雄っちが、実力の彼我を悟れなかった筈無いです」

淡々と軽い口調で少女は真実を語る。

次、戦鬼と戦えば、華雄は死ぬと。

「散々な言われようやなあ」

そんな時だ、からからと笑いながら紫の髪をした少女がやって来た。

紫の羽織を肩にかけ、胸元をさらしで巻いている。

その少女の手には偃月刀が握られ、担ぐようして持っている。

彼女の名は、張遼。

神速の驍将ウチウチと呼ばれる英傑の一人だ。

「旭、あんた、もうちょい物の言い方があるやろ」

「変にごまかさなかっただけっすよ。それにシーでも危ないっすよ」

「な、マジでか!？」

張遼の問いに少女は頷いてみせる。

「対抗できるのは鬼だけ。人が鬼に敵う事なんて稀っす」

「って事は、戦鬼を止めるには旭か、虎牢関におるあいつだけかいな」

「賊狩りの戦鬼と戦場の鬼の闘争か……………怖気が走るな」

「正直なところ、私もあんまり相手したくないっすよ。あの子の相手はかなりしんどいし」

マジでイヤです、と声音に乗せる少女に張遼は片頬を引き攣らせる。

戦鬼との戦闘をしんどいの一言で済ませるこの少女は神経が図太いというか何と言うか。

「ちよい待ち。旭、あんたの口ぶりからすると、もしかして戦鬼と知り合いなんか？」

「そりゃ知ってるっすよ。一時期、一緒に暮らしてたんすから」

とんでもなく重大な発言を少女は何でもない事のように言った。

「なんやと!？」

「あれ? 言ってなかったっけ？」

「初耳じゃ、ボケエ!!!」

「華雄うち?」

「私も初耳だな」

「わお」

そんなふざけたリアクションをとった少女は、次の瞬間には当然のように痛みに喘あえいだ。

武将二人によるげんこつは中々の威力があった。

「あいやあああ……酷いっす。酷いっす! 憧れのおば様みたいに  
なれなかったら、どうするんすか!？」

「知るかい!!! 敵将の情報持つとるくせに喋らん莫迦が何処にお  
る!？」

「……………」

ゴガン、と音が響いた。

「では、説明させて頂きます」

少女はビシッと敬礼を決めながら言った。頭にはこぶが2つ出来ているが、まあ言わずもなだろう。

「まず、華雄つちの奇襲つすけど、小鬼ちゃんがいる時点で失敗ね」

「何故だ？」

「それはうちも疑問。細作の報告やと、連合軍は気付いたようすは無かった筈や」

「答えは簡単。単に小鬼ちゃんの気配探知能力が半端ないからっす」

「それ、答えになっているのか？」

「事実が物語ってるっす。あの子は昔から敵になってしまっ人が多かったから、気配にはかーなり敏感なんすよ」

それを言われると華雄も黙るしかなかった。

確かに奇襲に気付き、阻んで来たのは劉焔という小鬼だけだ。それに少女に担がれ退却した時も、突然現れた自分達に連合軍は対応しきれていなかったのも紛れも無い事実だ。

「では、あれはなんだ！？ 剣が宙を舞っていたぞ」

「なんやそれ？ 夢でも見たんやないの」

「戦闘中に寝る莫迦がいるか！」

「まあまあ。あれなら、ちやちい手品っすよ」

少女は言いながら懐から短剣を取り出すと、その柄に糸を結んでぶら下げた。

「これが答えっす」

「はい？　ただ糸で結んで剣を振り回しただけ言っんか？」

「そっす。っていっても、多分使ったのは鋼糸っすね」

名の通り、鋼で出来た糸。貧弱なイメージが生まれそうになるが、それ程現実には甘くない。

えげつなく、かなり危険な武器だと少女は認識している。

ただの糸ですら圧力と摩擦力を上手く高めれば、人の肉でも切る事が出来る。

その点、鋼糸は圧力と摩擦力を高めるまでもなく、ただ鋼で出来ているが故に既に十分な凶器である。

それに細く研ぎ澄まされている為、視認し辛いうえに場合によっては見る事さえ困難だろう。

劉焯がそれを用いていたのに気付いたのは、少女が生き残りの兵の手当をしていた時だ。

剣でやられた傷と、それよりも細く鋭さを感じさせる傷の2種類の

切り傷。

兵に聞いてみると、突然切れたと証言もとれ、それに加えて華雄の証言だ。劉焯を知る少女が確信を得るには十分だった。

「見える刃と見えない刃の二段構えかいな。そりゃきつついわあ」

「シー、それは無いっす。次の戦い、鋼糸は使ってこないっす」

「有効な策を使わない筈ないだろう」

「その筈があるんすよ。着眼点は二つ」

まず一つ、と少女は指を一本立てる。

「次の戦いは、私達対連合軍。奇襲戦の時みたいに一对多の状況じゃないっすから、敵と味方が激しく入り乱れてる所で鋼糸を使うとは思えないっす」

「隠れお人好しだし、とボソツと付け加えながら少女は二本目の指を立てる。」

「一つ目を強める補足みたいなもんなんすけど、小鬼ちゃんは鋼糸を扱い切れてないっす。剣に結んだのは、きつと鋼糸の動きを制限する為かな」

「扱い切れてない武器を戦場で使うものか？」

「自滅しないくらいには使える。だからこそ、味方のいない一对多の状況で使ったんすよ。」



それに鋼糸を剣に結んで振り回したのは、華雄うち達を動揺させるのが主な目的です。

足を鈍にぶらせれば良し、奇襲を防げれば尚良し。ダメだったら、逃げればいいんですから」

一対多の状況が不利なのは百も承知。それが難敵ならば尚のこと。少しでも有利な状況に持ち込み、生き残る可能性を上げるのが劉焰と少女が師から教わった事だった。

「てな訳で、鋼糸は使わないってより使えないんですよ」

「なら、小鬼の事も含めて防衛主体で戦えばええって事か。……旭、いけるか？」

「私はいつでも」

「華雄もええか？」

「ああ、あの小鬼との雪辱を晴らす!!」

拳を握り締め、闘志を燃やす華雄に張遼と少女は口端を吊り上げる。

「さて、降り懸かる火の粉を払いますか」

「そやな。月の為にもな……………小鬼が前線に出たら頼むで」

「了解です」

少女は白銀の突撃槍、羲和を握り締め断言する。

「この周倉が連合軍なんか薙ぎ払っちゃうつすよ」

「周倉さん、ですか……」

劉焯からの報告に、一刀達は頭を悩ませる。孔明と鳳統は特にだ。

作戦がやっと決まったというのに、ここに来ての思わぬ伏兵の登場。

しかも、劉焯の兄弟子らしい。

作戦の成否がかなり綱渡りな状況である今、周倉という不安要素が危うい方向へと誘っている気さえしてきた。

(でも、朔くんが教えてくれなきゃ、それに気づけなかった)

不安要素が見えなければ、対応も対策も打てない。それに対する修正を頭の中でかけていく。

何度も何度も修正し、鳳統はこれしかないと自身を納得させた。

同じ答えに辿り着いた孔明も顔を沈ませているが、次の瞬間には軍師の顔に戻った。

「……朔くん、あの……」

「大丈夫。解ってるから」

「……ごめんね」

鳳統の口から思わず零れた謝罪に、劉焯は気にするなとゆっくり首を振った。

その優しさに、辛い目に合わせるしかない自分が嫌になる。

「……朔くんには、周倉さんの相手をしてもらいます」

鳳統は告げる。

かつて家族に近しかった相手と殺し合え、と。

「待て、周倉の相手は私がする！」

劉焯を庇うように関羽が前に出る。目付け役として、劉焯を一刀に負けず劣らず見てきた彼女の事だ、その残酷な行いをさせたくはないのだから。

無論、関羽も鳳統が言いたくて言った訳ではないと理解している。同時に、それが確実な策だとも理解している。

それでも、言わずにはいれなかった。

「ダメです。朔くんが周倉さんの相手をするのは、この中で唯一その人を知り、対応できるからです」

「しかし！」

「愛紗、退がるんだ」

だが、その想いは阻まれる。

「しかし、ご主人様！」

「愛紗、頼むよ」

「っ……分かりました」

一刀の言葉に、関羽は洪々引き下がる。彼の手がきつく握り締められているのを見てしまっただけでは、何も言えなくなってしまった。

場に沈んだ雰囲気の流れ、誰も言葉を発さなくなる。

沈黙が戦場の喧騒を掻き消している気さえしてきた。

「あの、や」

そんな中、劉焯は口を開く。

「僕がやるよ」

「朔……」

「他の誰にもやらせない。それに、あいつの狙いはきつと僕だよ」

「何故だ？」

「うちと同じで僕にぶつけてくるだろうから。まあ、後は華雄が先走ってくれば、状況はまた変わってくるよ」

劉焔が周倉を知るように、周倉も劉焔の事を知っている。

なら、対処が似通うのは当然だ。

「いいんだね？」

「うん」

劉備からの最終確認に、劉焔は頷いた。

「兵士の中にも今の僕みたいな目に遭ってる人がいるかもしれないのに、僕だけ甘ったれた事言ってるんじゃないよ」

いい機会だから、と続け、

「名無しの頃の僕と決別してみるよ」

連合軍の進軍は、シ水関の目前まで進んだ。

遠目から見ても堅牢に見えるその要塞に、劉焔はつまらなそうな視

線を向けていた。

といっても、それは表面上でしかない。

内心、彼は若干の戸惑いがあった。

どうやって周倉を相手に勝つかではなく、作戦の邪魔をさせないかでもなく、

(なんか引つ掛かる)

周倉が董卓に仕えている事に疑問があった。

劉焯が知る周倉は、簡単に言えば“正義”なんて言葉が好きな人物だった。

彼女の憧れの人達は、困っている人を躊躇いなく助けるような正義の味方じみた人だったらしく、その影響を直に受けたのが彼女だ。

だから、自分の力は誰かの為に使うのを当然と考え、高める事を怠らなかった。

そんな彼女が、洛陽の民を苦しめている董卓を許す筈がなく、ましてや仕えるなど有り得ない。

「……………悩むより本人から聞いた方が早いかな」

独り呟き、シ水関から視線を外そうとすると、

「さーくくんっ」

なんて劉備に呼ばれる声が耳に届くと同時に、彼の視線が強制的に下げられた。

原因は劉備の豊かさに富んだ女性の部分が、抱き着かれた際に後頭部に押し付けられたせいだ。

「桃香様……放して」

「だめー。まだぎゅっとする」

「うう……うにゃうあぁぁ！」

じたばたとするが、本当に暴れたら劉備が怪我するのでそれもできない。

「兵の皆が見てるから！」

「ううん、もうちょっと」

「もうちょっともダメ！」

言いながら劉備を引きはがそうとすると、劉焯は彼女の手が震えているのに気付いた。

「桃香様……」

劉焯は震える劉備の手に自身の手を重ねる。すると、抱きしめてくる力が少し強くなった。

(あつたかいや)

じたばたするのを止めて、劉備の温かさに身を任せるように力を抜く。

そういえば積もり積もった寂しさの籠たがが外れ、大泣きしてしまった時も劉備が抱きしめてくれたのを思い出した。

「桃香様、ありがと」

劉焯は小さく感謝する。

「もう、大丈夫だから」

「……ほんと？」

頷き返すと、劉備はゆっくりと離れる。

「桃香様が願掛けしてくれたんだから、僕はもう怪我したりしないよ」

劉備が劉備の真似をしてふにやっとした笑みを返すと、彼女もふにやっとした笑みを浮かべた。

「朔くんはやっぱり鋭いね。私のしてた事、解ったんだ」

「桃香様を知ってる人なら誰でも解るよ。ちゃんと無事に帰ってこれますように、って自分の想いを込めてるんでしょ？」

「うん、正解」



秀でた武も智もない彼女は、戦場に於いては、ただ皆の無事を祈る事が大体だ。

それは辛くて大変な事なのだ和刘焰は思う。

武器を振るうのは関羽や張飛、建策は孔明や鳳統。

力になれないのが歯痒くて、悔しくて。

もしかしたら、関羽や張飛が負傷、最悪の場合など戦死するかもしれない、そんな不安にいつも心を擦り減らしている。

大丈夫だから、絶対帰ってくるから、なんて言葉は最早気休めにもなっていないのかもしれない。

それでも、それを口にしなければならぬ事に罪悪感が生まれる。

「僕はもう大丈夫。だって、お守りがあるし」

首に提げていた水晶で出来た羽のお守りを取り出して見せる。

正直なところを言えば、御利益なんて信じていない。それでも、このお守りは大切な物だから、肌身離さず持っていた。

「ちゃんと持ってきてくれたんだ……」

「桃香様がくれたんだよ？ 大切にしない訳無いよ」

戦装束の中に羽のお守りをしまうと、同時に劉焰は戦場の流れが動

いたのを感じ取る。

眼を向ければ、関羽と趙雲がシ水関に 正しくは華雄に向かって舌戦を始めていた。

だが、まだ堪えているのか動き出す気配は無い。

(まあ、約一名の怒気は凄く高まってるけど)

華雄の気の増大加減には、苦笑が込み上げてくる。

何故か解らないが、華雄が周倉あたりに押さえ付けられている様子が眼に浮かぶ。

とはいえ、

「時間かかりそう」

「だねえ」

「なら、短くしませんか？」

「え？」

突然の声に劉備は驚くように声をあげた。それが彼女の知っている声ならば、当然驚きはしなかったろう。

劉備は振り向き、声の主を見るがまったく知らない少女がそこにいた。

「周泰だっけ？」

劉焯が彼女の名前を呟くと、周泰は満面の笑みを浮かべる。

「はい！ 劉備殿、お初にお目にかかります。孫策様に仕える将が一、周幼平です！」

「うん、初めまして。私が劉備です。朔くんとはお知り合い？」

「はい。一手、手合わせをして頂きました。結果、私は一撃で負けてしまいましたけど」

「へえ、そうなんだ」

周泰は少し恥ずかしそうに語り、劉備はそれをほへえ、と聞いていた。

（あれは手合わせで済むのかな）

劉焯は周泰が忍び込んで来た夜を思い出し、遠い目をした。

寸止めなんてとんでもない。あの時の周泰の斬撃は、間違いなく首と胸がサヨナラするレベルだった。

「それで、周泰はわざわざまた忍び込んで何しに来たの？」

「また？」

「はうあ！ またって言わないでくださいー！」

「はいはい。それで、華雄をおびき出す妙案があるの?」

「うう……………華雄は先代の呉王、孫堅様と過去に戦って負けています。なので、呉に対して遣る方ない感情を抱いている筈なのです」

「つまり、呉も挑発に加わって引っぱり出すのに参加するって事?」

劉備が確認するように聞くと、周泰は頷いた。

「孫策様が前線に立ち華雄を挑発しますので、一度呉に場をお譲りください」

「うん、それなら構わないよ」

「でも、袁術はどうするのさ? 客将なんて扱いじゃ勝手できないでしょ」

「その点は心配いりません。ただ、確実なものとしたいので、劉焰殿にも来て頂きたいと孫策様が」

「僕? ………………解ったよ。すぐ行くって伝えといて」

「了解しました! それではお待ちおりますね、お猫様!! では  
!!!」

周泰は一礼すると、気配を消して走り去っていった。

劉焰は周泰の言葉に首を傾げると、劉備と顔を見合わせた。

「あの娘、今僕の事……………」

「うん、お猫様って……」

「……何ですか？」

「あと、朔くんってやっぱりご主人様の子供だよね」

「それって喜んでいいんだよね？」

「ん〜。喜んでいいけど、悪癖は控えめにね」

「悪癖？ え？ え？」

孫策は口許に微かな笑みを浮かべ、袁術の下へ歩いていった。

忌ま忌ましい事に、己が身が客将という身分に甘んじている以上、勝手な行動は許されない。

仮初めの主、袁術に許可を取らねば動くに動けない。

実際問題、袁術を口で上手く誘導するのは容易い。その場に彼女の側近の軍師である張勳がいなければ尚の事。

張勳は普段袁術を甘やかし放題であるが、言葉は悪いが腐っても軍

師だ。疑心を持たせては、後々障害をつくる事になってしまう。

そこで、救援先に属する劉焯を呼び出した。

あの少年の事だ、こちらの思惑を読んでいそうだと孫策は思う。

考えながら歩を進めていると、いつの間にか劉焯が目の前に立っていた。

「あら、意外と早かったわね」

「どついう事さ？」

「何が？」

「一緒に来いって言うから行くことすれば、あなたの気配が陣地から離れて動いてるし」

「でも、君は気付いて先回りした。無問題じゃない」

「何処がさ。事を確実とする為の要素を置いて、先に行くなんて普通しない。」

「僕が気付かなかったら、どうする気だったのさ？」

「君は来るって思ってたわよ」

「根拠は？」

「ない。強いて言うなら、勘」

「勘？」

「そ。乙女の勘」

「……………」

やけに自信満々に言うから聞いてみた劉焰だったが、聞かない方がよかった気がしてきた。

（乙女の、ってより英雄の勘でしょが）

内心で独り言しながら劉焰は孫策を半眼で見ると、笑みだけ返された。

続きを待ったつもりだったが、本当に勘で動いたらしい。

こんな性格の孫策の手綱を周瑜はよく握れるものだ、劉焰は素直に感心した。

「ほーら、ボサツとしてないで行くわよ」

「了解……………」

揚々と歩く孫策の後をとぼとぼと追いて行くと、《袁》と書かれた銀の軍旗が段々と見えてくる。

袁術軍の陣地に着くと、前を歩く孫策は門番に一言一言告げて勝手に入っていた。

勝手に、と解ったのは門番が孫策を止めようとするが、彼女はする

りと避けたからだ。

仕方ないので劉焯も孫策のように制止をするりと避けた。

視界の端で門番が膝から崩れ落ちていた気がするが、見なかった事にする。

少し歩くと、劉焯は甘ったるい匂いを感じて顔をしかめた。

それは覚えがある匂い。

蜂蜜だ。

匂いの元を辿れば、その先には頭に紫の大きなリボンを付けた小さな少女がおり、その隣には彼女の笑顔に身悶えしている女性がいた。

「あれが……袁術？」

「そうよ。名と見ての通り、袁紹の従姉妹。隣は軍師の張勳よ」

「そっか。じゃ、僕はこれで」

「ダメよ」

帰ろうとするも首根っこを掴まれ、引きずられながら無理矢理前に進まされた。

「んくんくんく……………ぷふあー！ やっぱり蜂蜜水はサイコーなのじゃー！」



蜂蜜水が入っているだろう杯を両手で持ち、袁術はその甘さを堪能している。

「美羽さまあゝ。孫策さんがいらっしやっただそうですよあゝ?」

彼女の笑顔を堪能しつつ、張勳は主に真名で問いかけた。

「孫策が? 何のようじゃ?」

「何でも、膠着してる戦線を動かす作戦を伝える為とか。……何でしょうね?」

「ふむう……よし、通してよいぞ」

本当に考えたのか解らない数瞬の黙考の後、袁術は許可を出すのだが、

「あら、ごめん。勝手に来ちゃった」

そんなもの出す前に疾とうに孫策は来ているのだ。

劉焰からすれば、結構近くにいたのに気付かなかった彼女らに疑問を抱いたりしていた。

「ふおっ!?! 無礼じゃぞ、孫策!」

「ごめんごめん。ちょっと急ぎの用件だからさ」

「むう……まあ良い。それより何か作戦を思い付いたそうじゃが?」

先を促す袁術の言葉に、孫策は一瞬だけ口端を妖しく吊り上げた。それからの孫策の口上はこうだった。

シ水関を囲んでいるものの、事態は一向に動かない。これでは袁術も活躍できないだろう。

そこで、シ水関を守る華雄と因縁のある自分が劉備軍と連携し、事態を動かす要となる。

だが、自分は袁術の“部下”だ。許可無くでは動けない。

「袁術ちゃんの許可があれば、すぐに動けるわ……………どうする？」

「ふむ。では、妾が命じるぞ。孫策は劉備と連携して華雄を引きずり出すのじゃ！」

孫策の誘いに袁術は即答。あまりの早さに劉焔は啞然とする一方、孫策の思惑に確信した。

「……………了解。じゃあ、すぐに軍を動かすわ」

心中でにやり、と笑い、孫策は踵を返そうとする。

「ところで、孫策さん。貴女の後ろにいる子は？」

そこに張勳は劉焔の存在に疑問を投げ掛けた。

はあ、と内心で溜息を一つ吐き、劉焔は袁術に向き直る。

「僕は劉備軍が戦鬼、劉焔と言います。此度は寡兵なる我が軍に、

孫策殿より助力の申し出を頂き、感謝しております」

礼儀正しい風体で劉焯が挨拶を終えるや否や、ガシャンという音が響いた。

それは袁術が持っていた杯が割れる音だった。中にまだ少し蜂蜜水が残っていたのか、残りが地面に染み込んでいく。

「み……美羽……様？」

これに張勳はとても驚いた。

蜂蜜水は袁術の好物だ。いくら張勳がおねしよしますよ？ 虫歯になりますよ？ と忠告しても飲むのをやめない。結果、それが現実になっても尚飲み続ける。

それ程好物の蜂蜜水を地に落とすなど考えられなかった。

「のう、お主！！ 名は！？」

「いや、だから、劉焯だってば」

やたら食いついてくる袁術に、思わず素に戻る劉焯。

「お主！ 蜂蜜水は好きか！？」

「いや、蜂蜜みたいに凄く甘いのはちょっと」

「そうか……ならば、何が好きなのじゃ？」

「……………昼寝？」

「ぬう、物ではないのか……………ならば」

「ちよつと待った」

長くなりそうな気配を感じた劉焯は、手でも制止を示しながら袁術の質問を止める。

「僕個人に対しての質問は、今すべき事じゃないでしょ」

「ぬぐう。そ、そうじゃな……………」

うんづん、と袁術はぎこちなく頷く。

「では、これで最後じゃ」

「うん、そうして」

「そ、そのじゃな……………」

「はいはい？」

「そち、妾の下で働かぬか？」

「……………え？」

突然の勧誘に、流石に劉焯も眼を丸くする。

それは孫策も張勳も同様で、何も言葉を発せずにいる。

「どうじゃ？ 今の倍以上の禄も与え、妾とこの張勳の次の地位に抜擢もする。衣食住だって、そなたが望む限りを聞いてやるぞ」  
自分の望むまま。

そう袁術に言われ、うん、と一つ頷いて劉焯は答えを口にする。

「断る」

素っ気ない返事一つだけ残し、劉焯は踵を返す。

横目で孫策を見れば、彼女は何故か妙に訳知り顔をしていた。まるで、自分が誘いを蹴る事を解っていたかのような。

「な、何故じゃ！？ 妾の誘いを断る！？」

「み、美羽様！」

袁術の声に振り返れば、彼女の眼には涙が溜まり、今にも零れ落ちそうだ。

「金もやる！ 地位も与える！ 家だって服だってやると言つのに！」

「それさ、あんまり興味ない」

「何……？」

「僕、元は森暮らしだし、金とか服とか言われてもこだわりとか興

味も無いし。だから、欲しいものは特に無いんだ」

欲しいものは、既に全て貰っている。

後は、無くさないように守るだけ。

「僕は今の主と仲間といられるだけで十分。これが断った理由」

「そんな理由で……」

「そ。袁術が言うそんな理由が、僕にとっては大した理由」

ぼん、と劉焰は袁術の頭に手を置く。一瞬、これは無礼だとか言われるかな、と思ったが、今更遅いと割り切った。

「袁術が笑顔のとても可愛い女の子だったのは解ったけど、鬼が仕えるにはまだ何か足りないんだ」

「……………何が足らぬと言っのじゃ？」

「それは自分で考えなよ」

言い残し、今度こそ劉焰と孫策は踵を返してそれぞれの自陣に戻って行った。

その彼の背中を、袁術は見えなくなるまで見つめ続けていた。

自陣に戻った孫策は、周瑜にすぐ様に軍を動かす命令を降した。

「冥琳。さつさと軍を動かすわよ」

「ん？ いきなりどうした？」

「袁術ちゃんに許可を貰ったの。これで劉備軍との連携の名目はたつたわ」

それを聞いた周瑜は袁術の目先の利に飛びつく様に呆れる。

「……………それを許すか。つくづくだな」

「でもあの娘、我が儘だから。気が変わる前に前に出ましょ」

「そうしよう。……………興覇！ 幼平！」

周瑜が名を呼ぶと、直ぐさま甘寧と周泰が姿を現わし、彼女の命令に耳を傾ける。

「劉備の横まで前進する。その後は華雄の挑発に参加するぞ」

「はっ」

「了解です」

「挑発には私も参加するから」

「却下」

さらっと何でもないように参加を口にする孫策に、周瑜は眉間に皺を寄せて即断する。

だが、それを孫策もすぐ取下げさせた。

「今の状況を長引かせる訳にはいかないでしょ。私が餌にならなきゃ」

孫策の身を案じる身としては、周瑜は反対したい。だが、袁術が我が儘を発動させてしまえば、せつかくの策も使えない。

それは、好機を逸する事と同義。

軍師として、冷静に執るべき行動を決める。

「……………わかった。それでいこう」

「ありがと、冥琳。それじゃ、冥琳と穩は後曲の部隊の指揮をお願い。思春、明命、行くわよ」

孫策は甘寧と周泰を連れて歩き出す。その背中に、

「雪蓮、風よけは上手くいったの？」

思い出したように周瑜は問いかけた。

風よけ。



袁術に許可をもらう際に劉焰を連れていったのは、この為だった。自分の言動に万が一の誤りがあつてしまった場合、劉焰という存在に注目させて上塗りしてしまう魂胆があつた。

袁術の性格ならば、彼の容姿に興味を抱くと考えた上での実行。効果は………予想斜め上だったが十分だったろう。孫策としては、一部不満な箇所があるが。

「一応、上手くいったんじゃないかしら。あの娘の意識は釘付けになつたし」

「あの小鬼は気付いていたか？」

「気付いた上で来たみたいね。それに、袁術ちゃんのおかげで一つ解つたし」

「袁術のおかげだと？」

「そ。小鬼くんはやっぱり劉備軍の将よ」

だつて、と孫策は続け、

「戦鬼は金玉では動かないわ。

あれは、人の心によつてしか動かない」

「はあ、い、劉備ちゃん。中々てこずってるみたいね」

「あ、孫策さん」

孫策は手をひらひらと振りながら、一刀と劉備の下にやってきた。

「敵さんが思ったより冷静みたいで。このままじゃまずいかもしれませんね……」

「ほら、不安そうな顔しない。その為に私が来たんだから」

不安に顔を曇らす劉備の肩に励ますように孫策は手を置いた。

「孫策さんが本当に挑発するんだよな？ 大丈夫なのか？」

「大丈夫。袁術ちゃんには許可貰ったし………腹立つけどね」

孫策は付け足すように本心混じりの軽口を叩いた。

「取り敢えず、華雄の挑発は私が受け持つから。劉備は吊り上げた魚の調理をお願いね」

「はい。……でも、勝てるんでしょうか？」

「呉が協力してるんだから、簡単になんか負けない。勝てるわよ。それと出来る限りは助力するけど、こちらも余力が無い限りは助

力はないと思っておいて」

「解った。……俺達だけで華雄と張遼を相手するって状況より、かなりマシだよ。ありがとう」

「感謝は後にして。じゃ、行ってくる」

「ご武運を」

一刀と劉備は前線に向かう孫策を見送り、

「朔」

「何さ？」

「もし、孫策に危険があれば守ってあげられるか？」

一刀に聞かれ、姿を現わした直後に劉焰は、その人の好き加減に呆れて半眼になる。

「今回はやけに注文が多いね。まだ同盟を結ぶか迷ってる相手も守れ、だなんて」

「手を差し延べてくれた相手を、何もせずに見捨てるのは嫌なんだ」

「朔くん、私からもお願い」

「桃香様まで……あのさ、孫策まで守ろうとすれば、主上達の護衛が疎かになるんだけど？」

「それでも、だ。頼むよ」

「鈴々ちゃんも頑張ってくれるから。ね？」

「……………はああああ。解ったよ、善処する」

盛大に溜息を吐き、仕方ないと劉焯は折れた。これはきつと関羽でも折れただろうと、自分に言い聞かせながら。

「じゃ、行ってくるよ。このお人好しめ」

最後に軽口を叩いて、劉焯は孫策の後を追った。

シ水関を目の前にし、孫策は紅い衣を風にはためかせながら声を張り上げた。

「シ水関守将、華雄に告げる！ 我が母、孫堅に破れた貴様が、再び我らの前に立ちはだかつてくれるとは有り難し。

その首をもらうに、いかほどの難儀があるう？ ……無いな。稲を刈るぐらいに容易い事だろう！」

返事待つように、孫策は数拍の間を置き、先を続ける。

「どうした、華雄。反論は無いのか？ それとも江東の虎、孫堅に

破れた事が余程怖かったのか？

……そうか、怖かったか。ならば致し方なし。孫堅の娘、孫策が貴様に再戦の機会を与えてやるうと思っただがな！」

孫策は口端をありありと吊り上げ、

「それも怖いと見える。いやはや……それ程の臆病者、戦場に居て何になる？ さっさと尻尾巻いて逃げるが良い！」

では、さらばだ！ 負け犬華雄殿！」

孫策が挑発を締め括り、戻ってくる。

劉焯は守りに行ける範囲ぎりぎりから彼女の姿を見ながら感心していた。

戦場の倣いとして舌戦を用いる事は多いのだろうが、劉焯自身はそれに関しては知識としてはあっても言葉に出した試しがない。

今まで相手にしてきたのは匪賊であり、当人としても面倒くさがって形式張ったものはしていなかった。

「まあ、形式張ったからって必ず効果がある訳でなし、か」

劉焯はシ水関の中の大勢の気配の位置がざわついたものの、飛び出してくるような動きを見せないのを感じとっていた。

華雄は論外として、張遼と周倉が罵声に堪えに耐えているのだらうと、察しがつく。

「仕方ない。ダメ押ししますか」

「ダメなのだ」

一步踏み出した途端、制止される。振り返れば、張飛がぶくう、と頬を膨れさせていた。

「鈴々？」

「朔、勝手に動いちゃダメなのだ」

「なんか、同じ暴走仲間と言われると堪えるものがあるね」

「むう。お姉ちゃんに対して、酷い言い方なのだ」

「はい？ お姉ちゃん？」

思わず出て来た単語に劉焯は聞き返すと、張飛は胸を張った。

「そうなのだ。朔の名前は鈴々の名前からも取ってるから、鈴々は朔のお姉ちゃんなんだって。星がそう言ったのだ」

「星が？ ……………そういうことか」

趙雲が言っていた、鈴々だけでも暴走する可能性を低くする方法を悟り、劉焯は顔を苦々しく引き攣らせる。

姉の威厳を振りかざさせ、今のように弟の手本となるようにさせる。そこに世話焼きまで加われれば……………、そう思っただけで劉焯はぞつとする。

「鈴々、僕も挑発に参加しようかと……………」

「ダメ」

「でもさ……………」

「ダメだったらダメなのだ。鈴々だって、先陣に立ちたいのに」

「……………」

それが本音か。

心中でツッコミつつ、劉焯は不満げな張飛を半眼で見遣る。そして、何か思い付いた顔をした。

「ならさ……………」

シ水関城壁の上で、華雄は怒りの余り体を震わせていた。

「い……言わせておけばあ………！」

孫策の挑発に、華雄は低く唸るように呟いて金剛爆斧を手取る。

今にも飛び出しそうになる華雄を必死に張遼は引き止め、

「待て待て待て！ 落ち着け！ 落ち着かんとアカンて！ あんな見え透いた手に乗ってどうすんねん！」

宥めようと諭すが、華雄の怒りは治まる様子はない。

制止を無視して歩を進める彼女に、張遼は苛立ちが込み上げてくるのをぐつと飲み込む。

「じゃあない。旭！」

「あいさー」

張遼の呼びかけに、間の抜けた返事返す周倉。そして、即座に華雄に足払いをかけて、尻餅をつかせた。

「旭！ 貴さ　ぐあっ！」

「しゃーらつぶ。猪は大人しくしてるっす」

抗議してくる華雄を、周倉は片手で強制的に長座体前屈させるように押さえ付けた。

逃れようとしても、周倉の押さえ付けてくる力はびくともしない。華雄は呻くしか出来なかった。



「旭、助かったで」

「いいっすよ。でも、華雄っちの部隊の皆も我慢の限界が近いっす」

「ちいっ！ 猪の部下は猪っちゅうことか」

「聞こえてるぞ、張遼！」

「変な体勢してる猪は黙っとき！」

「ぬおっ!?!?」

華雄の反論を一喝で蹴散らすと、張遼はぎりつと歯噛みした。

周倉はどうか知らないが、同じ武人として自身の武の誇りが傷つけられる悔しさは理解できる。

その代償を払わせてやりたい。

だが、今はそれをすべきではない。してはならない。

それをしてしまえば、自身の後ろにいる主に迫る危機に拍車をかけるようなものだ。

自身を落ち着かせていると、

「へえ。中々出て来ないと思ったら、猪の首輪は大した優れ物だね」

知らない声が耳に届く。

「嘘っ！」

「きつ…：貴様ああ！」

続いて、周倉の驚く声と彼女に解放された華雄の怒声が聞こえた。

張遼も眼を向け、知らない声の主の姿を見た。

「お、お前は……」

黒衣の戦装束。

刃の一本角付きの真紅の兜。

異形の鬼眼。

「戦鬼か!!」

叫ぶような張遼の声に、戦鬼は答えずに莫耶の剣先を向ける。

「喰らいに来たよ、その命をね」



## 鬼と連合6 ｼ水関攻略戦? (後書き)

自己最長記録、また更新してました。

なんだか書く度に文量が増えてきてます。

オリキャラ2号の名前と武器名をちよろっと出しました。

基になった武将ほとんど無視してます。

面影が残ってるのは今のところ、旭の3連ボニテが、周倉の“毛”にまつわる話からきてるくらいですかね。

……それでも、かなりつつすらすらですけど。

感想、ご指摘お待ちしてます。

鬼と連合7　　くシ水関攻略戦？く（前書き）

お久しぶりです。

今回は戦闘ばかりです。

しかも、グダグダです。ホントすいません。

## 鬼と連合7

### 〜シ水関攻略戦?〜

「お前、どうやって此処に!?!」

張遼は声を荒げ、劉焯に問い質す。

此処は城壁の上だ。門は破られておらず、ましてや既に潜り込んでいたのだとしても、彼のいる位置はおかしかった。

劉焯は城壁の縁ふちに立っている。正面は張遼達に、連合軍を背にするように。

「どうやって? 跳んできたんだよ、下から」

何でもない事のように劉焯は張遼の問いに答えた。

「アホめかすな! 下から此処までどんくらいの高さがあると思っ  
てんねん!」

「嘘は言っていない。まあ、ちょっと大変だったけど」

時を少し戻そう。

劉焯が挑発に参加しようとする、趙雲にお姉さん風を吹くようにされた張飛が立ちはだかった。

「鈴々、僕も挑発に参加しようかと……」

「ダメ」

「でもさ……」

「ダメだったらダメなのだ。鈴々だって、先陣に立ちたいのに」

「……………ならさ」

劉焯は口角を片方だけ吊り上げ、

「鈴々、一緒に先陣に行かない？」

「にゃ？」

張飛を誘ってみた。

先陣に、という言葉に張飛はピクリと反応する。それに、彼はもう片方の口角も吊り上げた。

「愛紗と星、それに孫策が挑発しても出て来ない。これじゃ、よろしくないよね？」

「そうだけど、二人とも先陣に出たらお兄ちゃんとお姉ちゃんを守

れないのだ。

それにそんな事したら、愛紗に……………」

「確かにあれは怖いね……………」

関羽の折檻を想像したか、張飛は顔を青くする。その恐怖には鬼も太刀打ちできないので、仕方ないだろう。

「愛紗の折檻は……………」この際考えない」

「凄い間が空いたのだ」

「そこ、ツツコまないで。」

僕としては作戦を成功させる 引いては、雛里の望む状況をつくるって約束を破る気は無いんだ」

「鈴々も……………鈴々だって雛里の力になりたいのだ」

「だから、挑発に参加したいんだ。周倉が華雄を抑えているかもしれない以上、あいつをなんとかしなきゃいけないんだ」

それにさ、と劉焰は続け、

「弟の頼みを聞いてくれるのも、お姉ちゃんなんじゃないかな？」

劉焰の言い分に、張飛はぐっ、と狼狽えた。

確かに、姉である劉備と関羽は何かと妹である自分の世話を焼いてくれ、何だかんだと言って我が儘も聞いてくれる事が多い。



そして、今は自分が姉だ。

諫めるべきか、聞いてあげるべきか。

「うう……………解つたのだ。鈴々も行く」

迷いに迷つた結果、聞いてあげる事にした。

「ありがとう」

内心で勝つた、と勝ち誇りながら、劉焯は張飛に耳打ちする。

その内容に張飛は一瞬驚くが、次の瞬間には眼を輝かせた。

「なんだか、面白そうなのだ」

「気に入ってくれたなら重畳。それじゃ、燕人張飛と戦鬼が董卓軍を驚かしてやるう」

互いに顔を見合わせ、ニヤリと笑う。

子供が二人、まるで今から悪戯をするような意地の悪い笑みを浮かべて。

劉焯と張飛は先陣を突き抜けるように走っていた。

「いい？ 機会は一度だけ。一発で決めるよ」

「大丈夫。鈴々に任せるのだ！」

やる気十分な張飛は答えながら、更に走る速度を上げる。

劉焯もそれに合わせるように速度を上げた。そして、しばらくすると先陣の中の先陣にいる関羽と趙雲の姿が見えた。

初め、首を傾げていた彼女らだが、足を止める様子もなく赤毛チビコンビが突っ込んでくるのに顔を引き攣らせた。

「鈴々！」

劉焯は張飛に呼び掛けると同時に彼女を抱え、地面を踏み抜くように跳ぶ。

その高さは関羽と趙雲の頭上を軽々と越し、誰をも唾然とさせた。着地の衝撃を上手く殺し、赤毛チビコンビはまた走り出す。その後ろで関羽が叫んでいるが、今は無視した。

そして、シ水関の門の前まで来ると、

「鈴々、頼んだ」

「にゃー。行つくよーー！！」

劉焯は軽く上に跳び、張飛はその彼に向かって思い切り蛇矛を振り

上げた。

「ううりゃあああ!!」

振りぬかれた蛇矛の“刃の腹”は真つ直ぐ劉焯の足の裏を捉らえ、十二分に込められた燕人張飛の剛力を以て彼を高々と打ち上げた。

風を切る感覚が体に巻き付き、その音が劉焯の耳に流れてくる。それに心地良さを感じながら、張飛の剛力に感心していた。

走ってきた勢いも無駄にする事なく、蛇矛に込めていたのは英傑の成せる力量の証明なのかもしれない。

(って言っても、やっぱり届かないか)

跳ぶ勢いが落ちてきた事に気づき、劉焯は独り言ちる。

まだ城壁の上までは高さがある。このままでは城壁に激突し、落下して見事に墜落死。

ここまでしといて墜落死はアホくさい。劉焯はそう思いながら、腰の干将の柄を掴んだ。

「ま、後は僕の工夫次第でしょ」

一瞬で干将を抜き放つと同時に、城壁に向かって投擲する。

深々と干将が刺さった位置は、劉焯が城壁にぶつかるだろう位置だ。

「よっ」

干将の柄を足場代わりにし、劉焯は跳躍。

それを以て城壁の最上部への“届かなくなった”高さを、“届く”高さへと変えた。

辿り着いた城壁で見た光景は、飛び出そうとしている華雄を張遼と周倉が押さえ付けているという予想通りの光景だった。

「へえ。中々出て来ないと思ったら、猪の首輪は大した優れ物だね」  
自然と劉焯の口からそんな言葉が零れ、シ水関の守将達は彼の姿を見て一様に驚いた。

そんな彼女達を見ながら、劉焯は残る莫耶を鞘から抜いてその刃先を向ける。

「喰らいに来たよ、その命をね」

そして、現在に至る。

混乱するなら存分にしてもらおうと、劉焯は上に跳んできた方法を張遼達に教えたりなどしない。

「さて、わざわざやってきたんだ。最低でも一人くらいは命を食らわせてもらう」

威圧し、張遼達の方向へと一步踏み出す。それに反応し、張遼は自身の得物である飛龍偃月刀を構え、

「小鬼いいいいい！」

「なっ！？ 華雄！」

金剛爆斧を手に突撃する華雄の姿を見る。

振り下ろされた戦斧はけたたましい音を発て、城壁の縁を破砕した。

そこに劉焔の姿はなく、

「遅いよ」

彼はいつの間にか華雄の背後を取り、逆手に持った莫耶の刃を彼女の首筋に当てていた。

（なんや、今のは！？）

張遼は劉焔の回避から反撃まで完全に見る事が出来なかった。

初動の瞬間など、消えたようにしか見えなかった。

“神速”と謳われた自分は、彼の前では贗物にまで貶おとしられた気さえする。

届くのか？

彼に自分の一太刀は届くのだろうか？

いや、届く。届く筈だ。

だが、戦鬼はこちらを見てすらいない。周倉だけしか見ていない。見る気がない。

相手にすらしなと言つのか？

焦燥と不安がごちゃまぜになる。

「ちいつ……」

「シー」

歯噛みする張遼に、周倉は穏やかな声で話し掛ける。

「なぐんかごちゃごちゃ考えちゃってるみたいっすけど、無駄な事は考えない事っす」

「無駄やと？」

「そつす。敵が目の前にいる。仲間が人質に取られた。なら、やる事なんて決まってるんすよ」

周倉は突撃槍ランクスである義和ぎわを突き出すように低く構えた。

「敵を討ち、仲間を救出。ただ、それだけ」

言い終えるや否や、周倉の姿が消える。

同時に、劉焯の姿も消えた。

「……………え？」

思わず零れた声は、張遼か華雄か。本人にすら解らない。

いや、どちらでもいい。

どっちにしろ、この状況に対する感慨は同じだ。

二人が消えた瞬間、床が爆ぜた。

鋼のぶつかる音がした。

城壁の縁が爆ぜた。

また鋼のぶつかる音がした。

それが幾度も続き、城壁の上はたちまちボロボロになった。

ザザツと床を滑る音が二つ。ちょうど相対するように鳴った。

「相変わらず、速いっすねえ」

からからと笑いながら、周倉は義和を一振りする。

「昔の人は言いました。

男子三日会わざれば刮目して見よ。

「いやあ、よく言ったもんすねえ。小鬼ちゃんがおっきくなって、お姉ちゃん嬉しいなあ」

心からそう思っているのか、彼女の笑みはより彩りを増していく。

だが、

「あつそ。言いたい事はそれだけ？」

「えっ」

小鬼は彼女の笑みを凍り付かせる。

鬼の双眸で彼女を見つめながら、劉焯は莫耶を両手で持つて腰溜に構えた。

「!?!? やばっ!?!?」

周倉は劉焯の攻撃を感じ取り、羲和を縦に構えた瞬間、彼女の体が浮いた。

「っ!?!? きゃああああ!?!?」

劉焯の横薙ぎの一撃。

普段片手で振るっていたそれならば、彼女も耐えられたらう。

だが、両手 都合、倍の力で振るわれた一撃は周倉を吹き飛ばし、床に叩きつけた。



「ぐ……いったあ。何すんすかあ！」

「そんな解りきつた事、聞かないでよ。

僕は天の御遣いを守護する戦鬼だ。お前が主上に仇なすなら

」

「お姉ちゃんの命を喰らうまで、っすね？」

周倉の言葉に劉焯は頷き返す。

旧知の弟弟子に討つと宣告されたのが堪えたのか、周倉は俯き苦笑した。

(やっぱり、この子に言われるときついなあ)

涙が込み上げて来そうになるのを必死に堪え、彼女は義和を強く握り締めた。

「小鬼ちゃんはその気なら、お姉ちゃんはお姉ちゃんの義のままに武を振るうっす」

義和を構え直した彼女の顔は、劉焯が知る“正義”を信念とした戦鬼のものに代わった。

(相変わらずだなあ)

それに懐かしさを感じながらも、劉焯はまた両手持ちで莫耶を正眼に構えた。

「征くよ」

「どんと来〜い!〜!」

間の抜けたような返答する周倉に、劉焯は力強く斬り込む。

ぶつかり合う莫耶と羲和。

互いの得物の衝突、そして鎧を削り合う音が拮抗の激しさを知らしめる。引く事など考えず、行わず、そのまま押し切るように、鬼二匹は更に踏み込むように足に力を込めた。

その結果、

「!?! くそ!」

「!?! によわ!?!」

城壁の床が砕け、劉焯と周倉はシ水関の外へと放り出されるように落下してしまった。

劉焯と周倉の幾度の激突により脆くなった床が二人の拮抗に耐えられなかったのだ。

「旭!〜!」

張遼が駆け出して手を伸ばすも、周倉の手には届かず、空を掴む。

「くそ!〜!」

「張遼！ 旭を助けに行くぞ！！ 文句無かるう！？」

「ある訳あるか！！ あの莫迦が城壁から落ちて死ぬような奴やない」

間に合わなかった事に苛立ちながら、張遼は華雄と共に兵をまとめに駆け出した。

「けほつけほつ……あー、酷い目に遭った」

体に着いた埃ほこりを叩き落とし、劉焰は半眼で独り言ちた。

城壁から放り出された際、壁に莫耶を突き刺し落ちるようにして落下スピードを減速させた。

「また一段と無茶しちゃたなあ。……つと、あつたあつた」

瓦礫がれきを除け、埋もれてしまった干将を見つけた。そして、そのまま一振りして、飛んできた矢を斬った。

目を向ければ、董卓軍兵が次の矢を番つがえていた。

「動いたか………華雄はもちろん張遼も来るな」

次々と放たれる矢を双剣で落としながら、関羽達がいる先陣まで退がる。

その間も感覚を研ぎ澄まし、周倉の気配を探した。自分が生きているのに彼女が死ぬ筈がないと、劉焰は確信している。

そして、関羽の折檻が待っていることも。

「……………逃げようかな」

「ほう。どこにだ？」

「冗談ですよ……………」

いつの間にか先陣まで戻って来ていたらしい。

目の前に青龍偃月刀を持った閻魔様が出現。背中に冷たいものが流れた。

あはは……………とごまかすように笑うと、関羽の冷たい視線が突き刺さる。

「ごめんなさい」

もう頭を下げ謝るしかなかった。

「まず、謝るとは殊勝なことだ。だが、勝手な行動をとった件は後でじつつつくりとお説教だ」

「はい……………」

青龍刀の冷たさを首に感じながら、劉焯は肩を落としながら、ただただ頷くしかなかった。

「うう……それじゃ、後は愛紗達に任せたまよ」

「朔」

「何さ？」

周倉を食い止めに行こうとした劉焯は振り向く。兜で解りにくい顔にはお小言続行ですか？と表れていた。

「よく華雄を誘い出した。偉いな」

だが、関羽の口から発せられたのは、予想に反して彼を褒める言葉。

「ぼかん、とする劉焯を置いて、関羽は指揮をしに戻っていった。

「うむ。愛紗も子を育てる事の秘訣が解ってきたようだな」

「星……」

関羽はいつの間にか近くにあった趙雲に軽く頭を抱えた。

先の劉焯に彼女がやったように、今度は関羽が趙雲にやられる番だったらしい。

「で、秘訣とは何の事だ？」

いつもだったら適当に流すところだったが、今回は気になる事を言っていたので付き合う事にする関羽。

「賤云々もあるだろうが、子は怒られてばかりではやる気が減るばかりだ。

褒めるべきところは褒める。これこそ肝要なのだ。褒められる喜びを知れば、また褒めてほしいと次も頑張るだろう」

「まあ、それは理解できるが」

「何よりも愛紗よ、照れる朔を見たくは無いか？」

「っ！！」

「あ奴は褒められ慣れてない。褒めれば褒める程照れに照れ、最後はお主に隠れるように抱き着く」

「どうだ？ と聞いてくる趙雲。関羽にしてもあの状態の朔に癒されているので、

「それは……佳いな……」

うっとりしたような表情を浮かべて同意した。

そして、

「あの、関將軍、趙將軍。指示を頂きたいのですが……」

そこに兵の一人が及び腰で聞いてきた。

何故及び腰なのかは言うまでもなく、戦場でうつとりしている人がいたら、普通に怖い。

そんな彼の後ろでは、敬意を表するように小さく拍手が鳴り響いていたりする。

「ん？ ああ、すまん。この悩める若母に子育てについて一つ説いてしまった」

「そ、そうでしたか。何と言いましょうか……その、頑張ってください」

からかう趙雲に、よく解っていないまま応援する兵。

何？ この状況。

内心でそう関羽はつつこんだ。

「すまない。すぐに軍を動かす。準備は出来ているな？」

「はっ。既に完了しております」

ならば善し、と頷く関羽に、趙雲は違った意味で頷く。

「遂に母である事を自認したか」

「莫迦な事を言っていないで行くぞ。朔が掴み取ったこの機を不意にしたくない」

「そうだな。子にばかり活躍されては、親の面目がないものな」

「言っている。……では、子龍殿。私の背中、お主に預ける」

「我が背中も同様だ、雲長殿。……では、参ろうか」

微かに笑み、関羽と趙雲は己が得物を握り、劉備軍の兵達に檄を飛ばす。

「……聞け！ 勇敢なる兵士達よ！」

「いよいよ戦いの鐘が鳴る！ この戦いこそ、圧政に苦しむ庶人を解放する、義の戦い！」

「恐れるな！ 勇気を示せ！ 皆の心にある思い、皆が持つ力……その全てを振り絞り、勝利の栄光を勝ち取る為に！」

「我らに勝利を！！」

『勝利を！！』

「我らに栄光を！！」



『栄光を！！』

「全軍、拔刀せよ！」

「位置につけ！」

関羽と趙雲の代わり代わり飛ばす激に、劉備軍の士気は一樣に跳ね上がるように高まる。

締め言葉を発する為に関羽と趙雲はすうつ、と息を吸い、一段と大きく声を張り上げた。

「皆の命、私が預かる！！」

劉備軍と董卓軍が激突した時、黒い影が戦場を駆けていた。

影は自身の対とも言える白銀の閃きを放ち、劉備軍を薙ぎ払うように蹴散らしていく。

影 周倉は視線を至る所に飛ばし、弟弟子である戦鬼の姿を探していた。

自身の最優先事項は、劉焔の相手をして自軍の被害を抑える事だ。

それでも、目の前の、俗に言う同じ釜の飯を食べた董卓軍の兵士の倒れる姿を、彼女は見たくなかった。

「あああああつ！！」

だから、叫ぶ。四肢に力を込め、大砲の弾丸となって劉備軍兵を義和で次々と貫いていく。

「次いいいい！」

もう一度叫び、弾丸と化そうした瞬間、周倉は視界の端に血の色ではない赤を捉えた。踏み出そうとする足に急制動をかけ、目に映った赤を探す。

一瞬、劉焰のあの目立つ緋髪かと思ったが、

「うっわ、かなり人違いっす！！ 最悪！！」

「何だか解らないけど、いきなり随分と落胆してくれるわね」

見つけた赤の持ち主は女性だった。彼女は手に持つ剣 南海霸王をゆらゆらと揺らしながら、困ったように笑った。

「貴女、強いよね。中々やるじゃない」

「あは。どうすかねえ？」

「謙遜する事ないわよ。私は呉の孫策。名前は？」

「周倉つすよ。義により董卓ちゃんに味方して、ボンツキユツボ  
な孫策お姉さんの敵をしてるっす」

「イエーイ！と義和を振り上げる周倉。」

「何がイエーイ！なのか理解出来ない孫策は首を傾げるしかなかった。」

「取り敢えず、敵同士が出会ったのなら、解るでしょ？」

「そつつすね。んじゃ、やりますか。斯<sup>か</sup>くもメンドい殺し合いを」

「言い終えるや否や、周倉は文字通り姿を消す。」

「それに孫策は驚くが、すぐに南海霸王を振り向き様に自身の背後に  
繰り出した。」

「そして、剣は忠実に周倉の攻撃を弾いてみせた。」

「ありゃ？ 防がれた」

「周倉が驚くのも当然の事。彼女からすれば、全力でないものの劉焰  
以外には防げないくらいの不意を打ったつもりだったのだ。」

「おまけの鋭い蹴りを避け、後ろに跳んで距離を取る。」

「孫策お姉さん、私の動き見えてたんすか？」

「貴女の動きなら見えなかったわよ」

「うへえ。じゃあ、勘で防いだとか？」

「そうよ、乙女の勳」

「そうっすかあ。あははは……………やってらんない！！」

突如叫びながら、周倉はガンガンと義和を地面に叩きつけ始めた。

「何すか何なんすか！？ 色っぽくて、綺麗で、ボンツキュツボンでスタイル良くて！ 武も凄くて！ 天は二物を与えないんじゃないんすかああああ！！」

「あ、あの、ちょっと……………」

「しかも孫策って言ったたら、呉の王様じゃないっすか！ あれ、3つじゃんか！ ちょっと！ どんだけだ、こんちくしょう！！」

「お、お〜い、周倉ちゃん〜ん？」

「何っすか！？ ボンツキュツボンめ！！」

八つ当たりがエスカレートしている周倉は、フカーッと威嚇する。

いきなりの豹変ぶりに戦う もとい、関わらなきゃ良かった思い出す孫策。

「何に対して怒ってるか解らないけど」

「世の理不尽！！」

「はいはい。解ったから、こっちをビシッと指差さないでね」

少し遠い目をしだした孫策は、南海霸王の剣先を周倉に向ける。

「まだ一合しか撃ち合っていないわよ？ 続きは本気を出してもらいましょうか」

「……………はあ。ホント、世は理不尽っすね。一合で普通見抜くもんすかね」

仕方がない、と周倉は突撃槍である義和を突き出すようにして低く構えた。

その構えに合わせるように、彼女の手足にはめているリングが淡く光り出す。

そのリングの輝きに、孫策の天性の勘はえも言われぬ警告を発した。

「行くっすよ。鬼の閃光、その身に刻んじゃうっす」

周倉は軽く一步踏み出す。そして、また姿を消した。

（ …… また後ろ！！ ）

勘が伝える周倉の位置に、孫策は南海霸王を横に薙ぐように振りぬく。だが、今度は空を切るに終わった。

「惜しい。下っすよ」

「っ！ あぐっ！！」

周倉は肩から体当たりし、孫策の体勢を崩す。続け、突撃槍を横薙ぎに振り抜き、孫策の体に打ち込んだ。それを孫策は突撃槍と体の間に南海霸王を挟むようにして防ぐが、周倉も鬼を自称している。

「ううりゃあああ！」

見掛けに反した剛力を持つ彼女は、その防御を無視してみせた。

孫策は防いだ体勢のまま、優に10mは飛ばされた。

「くううう……驚いた。なんて力してるのよ、防いだのに手がかなりジンジンするじゃない」

「ってか、防いだ上に着地成功してる孫策お姉さんにビックリですよ」

「そう？　じゃ、次は完璧に防いで、貴女に一太刀入れてあげる」

「あは……。それは無理っすよ。なんせ」

「　　っ!?!?」

「お姉さんの反応不可能な速度は判っちゃったんで」

明るく言う周倉だが、その手に持つ羲和の石突が孫策の腹に打ち込まれていた。

いつ間合いを詰められたのか、孫策は全く解らなかった。周倉の口ぶりから、勘が働くよりも速く動いて見せたのだろうか。

(いくらなんでも速過ぎでしょ!!)

反撃しようと南海霸王を振り下ろすが、また空を切り、逆に肘を脇腹に打ち込まれていた。

「ほらほら、生きたいならもつと足掻あがくつすよ」

孫策の腕に、足に、腹に、肩に衝撃が走る度に激痛もそれに付随する。

救いなのは、周倉は間合いを詰めて以降、拳で孫策の体を打ちのめしている事か。それに手加減をされているのかは解らないが、一発一発の威力はどれも致命傷を齎すものではなかった。

そんな中、孫策の頭にふと疑問がよぎった。

(槍を使わないってどういう事? とういうか、槍はどこに?)

拳を当てられるなら、勝手は違っただろうが槍でも当てられるのではないだろうか?

そう考えるが、勘は何も知らせてくれない。

(……………賭けてみましょうか)

痛む足になけなしの力を集め、孫策は地面を蹴って後ろに跳んだ。

一瞬だけだったが、拳を空振った周倉が目を大きく見開いたのが見えた。

着地と同時に、ズガアアアン！という轟音を轟かせ、白銀の閃光が地を突いた。

義和が突き刺さった位置は、孫策が元いた位置。

あのまま拳打を受け続けていれば、上空から落下する義和が孫策を脳天から串刺しにしていただろう。

「むむ、避けられちったすね。気付いてたんすか？」

軽い口ぶりで聞きながら、周倉は突き刺さった義和を抜き取る。

「気付いてないわよ。まさか、とは思ったけど、本当に槍が降ってくるなんて思わないでしょ、普通。」

「どれだけ上に投げたのよ？ って感じかな」

「あは〜。実は私も上げすぎて困っちゃいまして、仕方なく予定より長く拳で語ってたんすよ」

でもまあ、と周倉は続け、

「これで終幕。ジ・エンドっす」

義和の穂先を孫策に突き付けた。

だが、孫策は死に恐怖するでもなく、口許を緩ませる。それどころか、南海霸王を鞘に納めてしまった。

「何の真似っすか？」



「何の真似も何も、見ての通りよ」

孫策は何でもない事のように抵抗を完全に止めてみせた。

「この孫伯符の頸、早くしないと取れなくなるわよ？」

ほらほら、と急かしてまでみせる孫策に周倉は困惑する。

考えが読めない。

諦めた末の潔さにしては、彼女の眼は生の彩りが鮮やか過ぎる。

なら、諦めておらず、止めを刺す瞬間に一矢報いる気なのか。

（いや、違うつすね。あれは、自分は死なないって確信してる眼だし）

何が自身の生をそこまで確信させるのだろうか。興味が惹かれるが、周倉はそれを押さえ付けるように自粛した。

「ねえ、貴女には見える？ 私に浮かぶ死相」

突然の孫策の話の切り出しに、周倉は面食らった。だが、そんな事を気にせずに孫策は続ける。

「私ね、死期が近付いてるらしいの。だから、死相が色濃く出てるんですって」

「……………確かにぼんやりとっすけど、死相が見えるっすね」

「へえ、貴女も見えるのね。」

「それでね、死期はいつかって聞いたら、この戦いじゃ死なないそうなのよね」

にんまりと孫策は笑みを浮かべ、

「あの小生意気で可愛いらしい“小鬼”が言うにはね」

「小鬼！？　しまっ

」

「　ま、そういう事だよ」

周倉が好機を逃したのを悟った瞬間、彼女の動きを制止するように黒と白の双剣が足元に突き刺さる。

「っ！」

「驚き過ぎ。相も変わらず、気配探知が下手だね」

幼い子供の声だし、孫策の後ろから小鬼はすつと姿を現した。

彼の表情は、どこか面倒くさげで、どこか苛立たしげで、どこか呆

れていた。

「やっぱり来てくれた」

「なんでそんな嬉しそうなのさ？ あと、ちよろちよろ動かないですよ。お守りを探して連れて来るのに手間取ったじゃんか」

どこか嬉しげな孫策をジト目で見る劉焯は彼女のお守りを指さす。その先には、走り寄る甘寧と周泰の姿があった。

「雪蓮様、ご無事ですか！」

「なんとかね。思春、明命、心配かけたわね」

「雪蓮様、本当に良かったです」

孫策の答えに、甘寧は微かに表情を和らげ、周泰は安心したからか涙目になっていた。

「水を差すようで悪いんだけど、早く孫策を連れて退がってくれないかな？」

「小鬼……すまない」

「謝らないですよ。僕は僕の都合で動いてるんだ。ほら、さっさと行つた行つた」

手を振って孫策達を促す劉焯。それに従って離れようとし、

「小鬼く　ううん、翔刃！」

「ん、何さ？」

「負けたら、許さないから」

綺麗な笑みを浮かべて言い残し、孫策は今度こそ退がっていった。

そんな言葉を受けた劉焰はぼりぼりと頬を掻き、

「ま、そういう事だそうだから。とつとと勝たせてもらうよ」

「いきなり勝利宣言。カッコイイ事言うじゃないっすか。

でも、勝つのは“義”を胸に持つ者。つまり、私っすよ」

「なんだ、まだそんな戯言ほざいてたのか」

「！？ 戯言……“義”を胸に持つ事が戯言だって言うんすか！  
」

自分の信念を貶され、周倉は怒りを露わにする。

彼女にとって、それを否定や貶される事は自身の人生を、延いては憧れの“あの人達”を否定や貶される事と同義だった。

何より、この小鬼 劉焰翔刃という一人の少年にだけはしてほしくなく、させたくなかった。

「取り消しなさい」

「ああ、嫌だ」

「くっ……取り消せ!!」

叫びながら周倉は突撃するように劉焔に義和を繰り出す。それを劉焔は跳躍し、彼女の肩を足場代わりにして飛び越えた。

「避けるな!」

「莫迦言わないでよ。死ぬ気なんてないんだからさ」

「なら、取り消せ! それなら、戦えないようにだけして、命までは奪らない」

「はぁ……取り消しもしないし、負けるつもりもないんだってば」

劉焔は地に刺さった双剣を引き抜く。そして半眼で周倉を見遣り、

「ま、お前が僕に勝てたら取り消すよ。勝たせないけど」

「……………ホントっすね?」

周倉の確認に、劉焔は頷き双剣を構える。

「んじゃ、喰い殺してやる」

「鬼の閃光、その身に刻んじゃうっす」

軽い口調で言い合う二匹の鬼。

次の瞬間には、文字通りの激突。

突き上げた義和と、振り下ろした干将が甲高い激突音を鳴り響かせる。

劉焯は続け様に莫耶を繰り出すが、周倉は冷静に見切り、莫耶の刃のない腹を蹴る事で空を切らせた。

「せいっ！」

呼気を短く吐き、莫耶を蹴った足でもう一度蹴りを放つ。周倉の蹴りは劉焯の左肩に当たり、彼の顔を歪ませた。

「いったいな！」

劉焯とて只ではくらわない。衝撃を後ろへ逃がすように体を反らし、ダメージを減らすと、バック転の要領で周倉の足を蹴りあげた。

そのまま一回転して着地すると、周倉も同じようにしてダメージを減らし同時に着地していた。

「しっぴれる〜。もう許さないっす！」

「端<sup>なは</sup>から許してもらおう気も無い！」

周倉の振り下ろしの斬撃を、双剣を交差させて受け止める劉焯。途端、下から義和の石突が跳ね上がってきた。

周倉は受け止められた瞬間に義和の持ち方を変え、衝突の反動を利用して劉焯の顎を砕こうとしたのだ。

辛くも顔を反らしてそれを避けた劉焯だが、まだ周倉の連撃は続く。

上段蹴り、上段後ろ回し蹴りと続き、そして、

「飛んでけえー！ 必殺の葬無乱ホウラン！！」

「ぐっ……あああ！」

蹴りを何とか避けたものの、最後のふざけた名前の一撃は避けられなかった。

2発の蹴りで作った回転の勢いを余す事なく込めた剛速の一撃は、劉焯の小さな体で受け止めるには酷だった。

双剣で防いでも体が一撃の重さに耐えられず、劉焯は宙を舞い、地面に叩きつけられた。

「おやおや？ 今度はお姉ちゃんが優勢つすね」

にまにまと笑い出す周倉に、劉焯は素直に腹が立った。

「あんまり調子に乗らないでほしいね」

「調子には乗ってないっすよ。優勢な状況が嬉しいだけっす」

それに、と周倉は続け、

「調子に乗るのは、相手を生き返らなくなるまで殺したらっす」

笑みを消して義和を構える。

瞬間、劉焔は背筋にゾクリとしたものが流れた。立ち上がり、双剣を構え直すと、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

周倉のリングの輝きがより一層強くなり、義和の穂先の辺りの空気が揺らめきだした。

「!? やばい!!」

「遅いつす! 紅蓮衝!!」

突き出される義和。その穂先から炎が生まれ、劉焔を飲み込もうと一直線に走った。

「でえええい!!」

劉焔はその炎に対してではなく、地面に向かって双剣を振り下ろす。双剣で地面を砕くと、生じた大量の土砂で即席の壁を作ってギリギリ焼死を避けたのだった。

「ぺっ、ぺっ。うにゃ……砂食べちゃったよ」

焼け砂塗れになってしまったが。

「まだじゃりじゃりひゆる……ぺっ」

「お姉ちゃんの紅蓮衝を砂の壁で防ぐなんて……」



「ぺっ……今のはとっておきの一撃なのさ？　だとしたら、残念だったね」

感慨もなく素っ気なく言う劉焔だが、内心ほっとしていた。

（内力系だけじゃなく、外力系も使えるようになってたんだ………  
…愛紗とかが相手してたら、今ので殺されてかも）

大切な仲間になれるのは嫌だ。

まだ、この戦いには先がある。

（仕方ない……殺るしかない）

失わない為に、失おう。

「旭」

劉焔が真名を呼ぶと、茫然としていた周倉は肩をビクリと震わせた。

「お姉ちゃんの真名、覚えててくれたんだ………」

「忘れないよ。一緒に暮らした仲だし」

「そっか………」

「……次で決めるから」

「うん………」

周倉は頷いて義和を構え、リングがまた強く輝き出す。

劉焰は何故か双剣を鞘に納めて徒手空拳で構える。

それに周倉は目を細めるが、疑問を口にはしなかった。

互いに無言になり、無心になる。

遠くで、鋼の碎ける音がした。

「ああああ!! 紅蓮衝おおお!!」

放たれる火炎。先よりも遥かに出力の大きなこの一撃は、即席の土砂の壁程度では防ぎようがないだろう。

だというのに、劉焰は真っ向から火炎に飛び込むように走り出した。

火炎はあっさりと彼を飲み込み、

「残念賞だね」

突き抜けられた。

火炎を突っ切った劉焰は、技後硬直中の周倉の腹に拳を撃ち込んだ。

「……嘘」

そう零しながら、周倉は崩れ落ちた。

それを見届けた劉焰は空を仰いで、溜息を一つ吐く。

「ああ……しんどい……」

孫策と周倉が激突していた頃、華雄は自軍と連合軍の戦況に歯噛みしていた。

連合軍の先陣の劉備軍、そして協力する呉軍。

華雄は劉備軍、張遼は呉軍を相手にする二正面作戦を決行した。

華雄は彼らを寡兵と笑い、鎧袖一触とばかりに蹴散らそうとした。しかし、思いの外粘りに粘る。

こちらが距離を取った後に蜂矢の陣で突撃した際にも、絶妙なタイミングで後退。続く、先陣の後退を援護する一軍の矢によっても出足を挫かれた。

( 旭も見つからんというのに、こ奴らのせいだ！ )

苛立ちが更なる苛立ちを呼び、敵意は油を注がれた火のように燃え上がる。

「このまま劉備軍を蹴散らす！ 周倉を探すのはその後だ！」

蜂矢の陣での突撃を続行。

途中、劉備軍の後衛が進軍を抑えるが、それでもじわじわと押し込んで行く。

そして、次第に本陣に掲げられた金色の《袁》の牙門旗が見えた頃、華雄は先陣から本陣へと標的を変えた。

「敵を押し込み押し込み、そのまま本陣に突入した後は、連合の牙門旗に向かう！ 狙うは大将の頸のみだ！」

全軍突撃いいいいー！」

華雄の号令が下り、華雄軍は唸り上げて本陣に突入。袁紹軍との戦闘を始めた。

連合軍の中で最多の兵数を誇る袁紹軍を、華雄軍は正に削るよう押し込んでいく。

兵の拙速が肝要だと自覚し戦うが、勢いは上手く袁紹軍の中まで伝わりきらない。

そこに連合の他の諸侯が横槍を入れ、更に勢いを殺して行く。

そして、駄目押しするかのように大量の劉備軍の旗が自軍の後方に

現れ、混乱へと誘った。

「そんなもの陽動に決まっている！ それぐらい見抜けんのか！」  
さすがは良将にして猛将といったところか。直ぐ様に策と見抜くが、彼女一人が見抜けたところでどうしようもない。

多くの兵が劉備軍に気を取られ、指示系統は役に立たない程に乱れてしまった。

「全く……我が軍の質も落ちたものだ。このように無様な有様を曝すとは……」

華雄が落胆を口にした時、

「それは兵隊のたいしょーに責任があるのだ！」

それに答えるように声が聞こえた。

「誰だ!？」

「平原の相、劉備が一の家臣、張翼徳とは鈴々の事なのだ!!」

現れたのは、身の丈以上の蛇矛を構えた小さな少女は堂々と名乗りを上げた。

「劉備の家臣だと!？ どうやってここまで！」

「んとねー、関羽と趙雲が華雄の部隊を引き付けてくれて、劉焰が駄目押しで道を広げて通り易くしてれたから、鈴々はここまでやってこれたのだ」

「何だと……！　ここまで単騎で来たのか！」

「そういう事なのだ。さあ、華雄のお姉ちゃん、鈴々と勝負するのだ！」

「ふん。ガキが、怪我をする前にこの場より　……いいだろう、相手してやる」

小さな張飛を見て最初は鼻で笑う華雄だが、思うところがあるのか戦斧を構える。

「劉備軍の小鬼に苦汁を舐めさせられてな。その屈辱をお前にも味合わせてやる」

「にゃー……なんか、とばっちり受けてる気分になってきたのだ」  
ここにいない劉焰をちよつと恨めしく思いながら、張飛も蛇矛を構えた。

「さあ、かかってこい！　童わっぱ！」

「鈴々はガキじゃないのだ！」

張飛は蛇矛を振り下ろし、切り込む。華雄はそれを見切り、避けてみせた。

その空を切った一撃は地を陥没させ、それを見せ付けられた華雄は大きく見開いた。

「なんと重い斬撃だ……だが、当たらなければ、どうという事はない！」

反撃の一撃を華雄は撃ち込み、張飛は危なげもなく蛇矛で受ける。

その一撃の重さに、張飛は心なしか口許をニヤつかせた。

「これが華雄の戦斧？ 全っ然効かないのだ」

「……生意気な口を叩きおつて！」

「生意気っていうのは、自分能力を弁<sup>わか</sup>まえない奴がデカイ口を叩く事なのだ。

でも、鈴々は強いから生意気じゃないのだ！ その証拠を見せてやるのだ！」

「ならば、来い！ 返す刀でその素っ首叩き落としてくれる！」

「やれるものなら、やってみるなのだ！」

身の丈八尺の丈八蛇矛、簡単に受け止められると思っただい！」

張飛は蛇矛を振り上げ、

「いつくぞおー！ てええええ〜〜い！」

先のものよりも格上の斬撃を繰り出す。

蛇矛の斬撃を宣言通り受けて見せるが、華雄の顔はありありと苦しげなものに変わった。

張飛は反撃の余地も与えず、続けて攻撃する。受け止める華雄はどんどん後ろへと後退るように追いやられていく。

そして、

鋼の碎ける音が辺りに鳴り響いた。

「なっ!?! 私<sup>の</sup>金剛爆斧が!?!」

「これで……最後だあー!?!」

張飛の止めの一撃は、得物を失った華雄を捉え、切り裂いた。

血を流し倒れた華雄が動かなくなるのを見て、張飛は声を張り上げて鬨の声を上げる。

「シ水関の猛将、華雄。劉備が一の家臣、張翼徳が討ち取ったのだ  
ー!」





鬼と連合7      ～シ水関攻略戦～（後書き）

また文量が増えました。

戦闘描写、難しくて書いてて泣きたくなりますね。いい年なんでも、心で泣きましたけど。

朔VS旭が中心の今回ですが、もう旭のキャラがぶれてる気がします。早過ぎです。

そして、鈴々VS華雄。どう見ても手抜きですね。すいません。

次は虎牢関。まだ戦闘が続きますがなんとかやってきます。

恋、出さなきゃなあ……

鬼と連合8      ｼ水関攻略戦後(前書き)

今回は会話ばかりです。

支離滅裂で意味不明とか言われるの覚悟の連合編8話です。

## 鬼と連合8

### 〜シ水関攻略戦後〜

ズザザツ、という音が耳に届き、周倉は目を覚ます。

(あ……れ……私、確か小鬼ちゃんにやられたはずじゃ)

ぼやけていた視界が、ゆっくりとはつきりしてきた。すると、視点が妙に低く、ゆっくりとだが視界が確実に横に動いていた。

「ほえ？」

「ん、起きた？」

思わず間の抜けた声をあげると、劉焯の軽い調子の声が至近距離から聞こえた。

そこで初めて、周倉は劉焯に背に担ぐようにして引きずられていたのに気付いた。

ズザザツ、という音は自身の爪先が地面を擦っている音だったようだ。まあ、小さい劉焯では周倉をしっかりと背負ったりできないのは、身長差からすれば当然も当然だ。

「……小鬼ちゃん」

「何？」

「……どうしてお姉ちゃんは引きずられてるんすか？」

「なんか、旭が気を失ったから」

「いやいやいや、お姉ちゃんが勝手に気絶しました的に言わないでほしいっす!!」

「っていうか、それは気を失わせた本人の言葉じゃないっすよね!?!」  
「って痛ーーい!!」

叫んだ拍子に思わず腹に力を入れてしまい、周倉は悲鳴を上げた。

同時に、劉焯に負けた事を思い出された。

「そうでした……………お姉ちゃん、負けちゃったんすよね」

何かをごまかすように、周倉は苦笑した。

劉焯に“義”を戯言だと言った事を取り消させる事が出来なかった。

憧れの“あの人達”の人生を否定させてしまった。

世界中の誰もがそれを否定しても、この少年にだけは肯定してほしかったのに。

(……………私が弱いから)

ごめんなさい。

ただ、周倉は心の中で謝る事しか出来ない。

「ねえ、旭。まだ気にしてる？」

「……んむ？ 何をつすか？」

「“義”を戯言だつて言った事」

「それは………」

周倉は言葉を濁した。

気にしていない筈がない。取り消してくれるなら、頭でも下げるし、土下座でもしていいと思えるくらい気落ちしていた。

「本当の事言つとさ、僕は旭が言う“義ただしさ”って嫌いじゃなかったよ」

「そうなんすか？」

「うん。一緒に暮らして時の僕だったら、その道を選んだなら頑張れば？ くらいは言つてた」

「あは。今は言つてくれないんすね」

「まあね。けど、今は腑に落ちないんだ。旭が言ってるのに、旭が言つてないみたいに変な感じがしてさ」

「お姉ちゃんが言ってるのに、お姉ちゃんが言つてないみたい………」

劉焯に指摘され、周倉はそう言われた原因とつか理由はすぐ解つ

た。

何故なら、それは“貰い、持っている”だけで、自身の内から“生じている”ものではないから。

間に合わせの歯車が上手く噛み合わない時計が、些細なズレを生み出してしまつように。

「僕は本当の“義しさ”が何なのかなんて知らない。知ってるのは、仲間が胸に抱えてる“義しさ”くらいだし。」

まあ、それが本当の、なんて言っていていいのかも知らないよ」

希少で儂い人の善性。それを信じきれない自分では尚の事解らない。

それでも、それだからこそ、劉焯には思う事があった。

「それでさ、あれが本物だとしたら、旭の“義”はどうなるんだろ  
うね」

「決まってるっす。お姉ちゃんの……私の“義”は、偽物」

しれつと意地の悪い事を言ってくる劉焯。それに自嘲するように周倉は返した。

だが、その返答に劉焯は呆れたように溜息を吐く。

「偽物、ね。それで旭は終わるのさ？ もう頑張れない？」

「偽物に頑張る価値なんて無いっす……」

「……そうかな？ 偽物が本物を真似て作られたんだったら、本物と同じ事が出来ない道理はないでしょ。」

それに、偽物は本物に劣る、なんて誰が決めたのさ？」

「でも、偽物は偽物っす」

「はあ……………とある王様が言っただ」

「小鬼ちゃん？」

唐突に語り出す劉焯を、周倉は不思議に思ったが、黙って耳を傾ける事にした。

離れ離れになっていた自身の知らない彼の空白を聞く良い機会でもあったから。

「後に託せる物を遺す為にも、偽物の繁栄を齎して、偽王と蔑まれても宿願を叶えられるのなら構わないっつてね」

そして、と劉焯は続け、

「とある青年は、天の御遣いなんている筈もない存在の役を演じてる。いつその衣装を剥がされるか解らない中を必死にね」

違い、解る？

小鬼はそう問いてくる。

偽物の王様に、偽物の天からの遣い。



嘘で固めて、偽造で飾り、虚偽で包装した、偽物。

だが、その偽物は本物の役目を果たそうとしている。

偽物だとしても、偽物だろうと、関係ないと。

(そっか……)

劉焯の言わんとしている事を悟り、また自嘲する。

「お姉ちゃんは偽物としても、中途半端なんすね」

本物には届かず、偽物としても役を真似しきれていない。

どっちつかずの途中で半端な義しさ。

「旭がその中途半端な義しさを本物にするか、それとも偽物にするかは好きにしたらいいよ。」

でも、決めたら、それを貫いてよ。僕の好きな主上がそうしてるみたいに」

「……………小鬼ちゃんはお姉ちゃんが貫いてけるって思う？」

「うん」

「そっかあ」

即答してくれた事に、周倉の頬は自然と緩む。

(可愛い弟分がそう言うてくれたのに、ウジウジするなっす私！)

心中で自身に喝を入れ、彼の知っている自分に戻る。

それに、今の自分である事はあの時に誓った中の一つだった筈だ。

“あの人達”との約束を守る為にも。

「にゅふふ。いやあ、小鬼ちゃんがそう思ってくれるなら、お姉ちゃんも出来そうな気がしてきたっすよ」

「なんか現金じゃない、それ？」

「いいんすよ。お姉ちゃんは小鬼ちゃんが大好きなんすから。例え、敵でも」

「あっそ。僕は敵なら打ち倒すよ」

「もう、連れないなあ」

あは〜と笑う周倉に、劉焯は呆れた顔をするが、口端が小さく上がっていた。

そんな時に、

「あ、そうそう。小鬼ちゃん」

「何さ？」

「小鬼ちゃん、チビっこいからお姉ちゃんの爪先がずっとズリズリされて痛いっす」

周倉は要らぬ一言で宙に待った。

「あ、朔なのだ」

「鈴々、お疲れ。やっぱり勝ったね」

「へっへーん、当然なのだ！ 鈴々、強いから負けたりしないのだ  
！！」

劉焯は周倉を担いだまま少し歩くと、蛇矛を手に息を弾ませている張飛がいた。

そんな彼女の前には、血を流して倒れている華雄がおり、周りにあるのは金剛爆斧らしき残骸が散らばっていた。

（傷はそれなりに深いけど、致命傷の一步手前。この感じなら、死にはしないか）

猛将とか呼ばれるだけはあるか、と華雄の生命力に小さく感心しながら、劉焯はのびていた周倉をどさりと落とした。

「ぎにゃっ！？」

「ほら、出番だよ」

「……小鬼ちゃんが冷たい」

「はいはい。怪我人が目の前にいるから、愚痴るのは後にしてよ」

やっぱり冷たいっす、とむくれながら周倉は華雄の容態を診る。

ふむ、ほお、へえ、と一人頷く彼女に張飛は首を傾げ、劉焰の袖をちよいちよいと引つ張った。

「ねえねえ、朔。このお姉ちゃん、誰なのだ？」

「周倉だよ。僕の兄弟子」

「兄弟子？ でも、このお姉ちゃんはお兄ちゃんじゃないのだ」

「そうだけど……姉弟子とは言わないよね」

「うん。……姉弟子じゃダメなのかな？」

「……どうなんだろう？」

湧いた疑問に劉焰と張飛は二人揃って頭を悩ます。

（死に体一步手前の人がいるのに何考えてるんすかね、この子らは）

二人の疑問が聞こえてきた周倉は、呆れながらも診断を続けていた。

「しかし、ホント見事っすね」

華雄の傷は、左肩から右腰まで斜めに切られていた。揺らぎの無い斬線の鋭さに、張飛の技巧の高さがありありと証明されていた。

「勝敗に関しては相手が悪かったすね。傷に関しては逆っすけど」

これなら治っても傷痕は残らないだろうと周倉は判断する。華雄も女性だ、傷痕が残れば気にするかもしれないだろう。

「小鬼ちゃん、それと馬鹿でかい槍持った幼じ　　コホン。お嬢さん、ちよいと手伝って」

「今、幼　　」

「さあさあ！　小鬼ちゃんは華雄っちの右手、お嬢さんは左手を押さえてね！！」

周倉に言葉を遮られた劉焰は渋々と、張飛はよく解っていないまま華雄の両手を押さえた。

周倉は右手の人差し指を一本立てると、意識を集中する。集中の高さに呼応するように彼女の右腕のリングが輝き出し、指先に淡い光が灯った。

「いくつすよ」

指先の光を華雄の傷口に当てると、

「ぎゃああああ！！」

気を失っていた華雄が突然叫び、暴れだした。

「にゃにゃっ!?!」

「しっかり押さえて!」

「わ、解ったのだ!」

鈴々は驚くも周倉の真剣な声にすぐに落ち着く。

周倉が傷口をゆっくりとなぞるように動かすと、華雄は更に暴れだした。叫ぶ声も悲痛さが色を濃くしていき、瞳孔も開いていた。

それでも周倉は止めず、傷口に光を当て続け、

「ああああ……あ……あ……あ……あ……」

「……………これで終わり」

端まで終わると同時に華雄は落ち着き、周倉は肩の力を抜いて呟いた。

「? ホントに終わったのか?」

「うん。ホントに終わったっすよ。ほら」

自分が何をしていたか解っていないなかつただろう張飛に、周倉は答えを見せる為に取り出した布で、華雄の血を拭いた。

拭かれた箇所には、傷が無かった。

「お姉ちゃん、傷を治したのか!？」

「そつす。といつても、閉じただけ。血は足りないだろうし、体力も戻る訳じゃないつすから、しばらくは戦えないつすね」

驚き眼を輝かせる張飛に、周倉は疲れた表情を浮かべたまま答える。かなり疲れたのか、周倉は立ち上がるうとするも足がふらつき、劉焯に支えられる程だった。

「見つけた!!! 旭!!!!!!」

「んあ、シーだあ」

自分を呼ぶ声に周倉は怠そうに顔を向け、張遼の名を呟く。

紺碧の張旗を掲げた一団。間違いなく、張遼の部隊だ。兵の少なさから、どうやら撤退の際に運よく彼女を見つけたようだ。

騎馬を器用に劉焯と周倉の前で止めると、張遼は飛龍偃月刀の穂先を彼に向けた。

「旭を返してもらおか」

「いいよ。おまけに、討たれた武人を付けるね」

「何っ!？」

劉焯は軽く了承すると、放り投げるように周倉を張遼の騎馬に、そ

して彼女の近くにいた補佐らしき兵の騎馬に華雄を乗せた。

こんな展開は想像していなかったのか、張遼の口は半開きになってしまう。

「どうしたのさ？ 早く行きなよ。でないと、逃げ切れなくなるよ」

「敵将を簡単に見逃すなんて、何考えとんのや？」

「楽しただけ。切った張ったに、走り回ったから早く自陣に帰りたい。疲れた」

「はあ？」

張遼は訳が解らなかった。自分の背中を突こうと虚言を弄しているでもなく、劉焰は本気で言っている。

同じように感じ取っている彼の仲間である張飛も困ったように笑っていた。

「シー。小鬼ちゃんを武将の常識で考えちゃダメっすよ。ってか、ダルダルで死ぬ〜〜帰る〜〜」

「……解った。小鬼、これは貸しにしといたる。覚えとき」

「やだ。忘れるから、そつちも忘れてよ」

「……っこのガキ！」

「シー、早く帰ろってば〜。でないと、張將軍の魅惑のポロリを大



公開しちゃっす〜」

「なっ!?! くら、サラシに触れるんやない!?!」

有言実行な周倉に慌てながら、張遼は馬を轉身させて撤退していった。

その際に周倉が劉焯に視線を飛ばし、指を二本立てて手を振っていた。

それを見た劉焯は凄く面倒くさそうな顔して、溜息をついた。

「……………」

「朔、どうかしたのだ?」

「ちょっとね。それより鈴々、僕が言うのもなんだけど、見逃しちやって良かったの?」

「んー、ホントは張遼のお姉ちゃんとも戦ってみたけど、逃げてる相手に挑むのって好きじゃないのだ」

「鈴々らしいね」

「あとね、今追ったら愛紗にもっと怒られる気がするのだ」

「そう、だね……………」

「そうなのだ……………」

疲れているけれど、自陣に帰りたくなかった二人だった。

「で、これはどうしたの？」

一刀は自分の腰辺りを指差しながら言う。その先には、顔を一刀に押し付けるようにして抱き着いている劉焰がいた。

「少しいつもよりきつくお説教ただけです」

そう言い張るのは、勿論関羽である。浮かべている黒い笑みが怖いのは、きつと見間違いではない。見間違いであつたらいいなあとも思っくらいた。

「しかし、小一時間程で朔の心を叩き折るとは、流石と言うべきか」

「多分、愛紗さんしかできませんよ。鈴々ちゃんも燃え尽きた灰みたいになって天幕で休んでますもん」

「……………今度、愛紗さんに聞いてみよう」

「ひ、雛里ちゃん、何を教わる気なの……………？」

感心半分呆れ半分といった評をする趙雲と孔明。その陰で不穏当な

眩きをする鳳統に、それを聞いてしまった劉備は不安になっていた。

劉焰の頭を撫でり撫でり、一刀は仕方ないかと思う。

人間大砲よろしくの城壁登りに、城壁の一部を崩落させて落下。

普通であれば、2回死んでいたのだから。

「それで……シ水関の一番乗りは、孫策さんがしたんだっけ」

「はい。一度張遼さんの部隊を受け止めると、気付かれないように少数の別動隊を編成。

そして、指令系統を途切れさせるように突撃して混乱させて分断後はじわじわと削るように押し返したみたいです。

最後は私達が華雄さんの部隊を袁紹さんに押し付けてる隙に、一番乗りを果たしちゃいました」

「そっか。そういえば、一度だけ呉の勢いが弱まったよな？ なんでだろ」

「それは我らが玉が勝手な行動を取ったからだ」

一刀の疑問に答えたのは孔明でも誰でもなく、眉間に皺を寄せた周瑜だった。

そんな険しい表情を浮かべる彼女の脇には、首根っこを掴まれた孫策の姿があった。

それだけで瞬時に理解する。

うちと同じか。

同じ苦勞を抱えた者同士故の理解速度か。嫌なシンパシーもあったものである。

「冥琳ってば、放してよ。歩き辛いじゃない」

「お前は反省する気はないのか？ 王として少しは恥ろ」

「あら。じゃあ、反省する為に冥琳の胸に飛び込んだら、抱きしめてくれる？」

「いいだろう。そのまま二つ折りにしてやる」

「愛が痛いわ……」

声音に凄みを持たす周瑜に、孫策は顔を引き攣らせながら後退った。来て早々に漫才し始めた二人の呉の柱石。口を挟んでいいものやら悪いのやら、戸惑う一刀達。

「と、取り敢えず、孫策さん達が無事で良かったよ」

「そちらも思惑が成功したようでは何よりだ。それと、礼を言わなくてはな」

周瑜に礼と言われ、一刀は首を傾げる。一仕切り考えるが何も思い当たらず、劉備や孔明に目で聞くも、やはり解らなかつた。

(さすが、小鬼の主であるだけあるな)

その様子に、周瑜は苦笑いを浮かべた。

「先程、我らが玉　伯符が勝手な行動したと言つたらう」

「あ、そう言えば言つてたな」

「その時だ、こ奴の悪癖が出て単身突撃したんだ。周倉という将に向かつてな」

「また相手が悪い……」

「だから、指令系統が混乱して一度勢いが弱まったんですね」

孔明が納得していると、そつだ、と周瑜は頷いた。

「しかも、だ。勝つならまだしも、小鬼が来てくれなければ、討たれていたら聞く。お前達には大きな借りを作ってしまった」

「借りだなんて言い方止めてください。それに最初に力を貸してくれたのは、孫策さん達ですよ」

「そう言ってくれると助かるよ、劉備。……だが、王を救ってくれたのだ。これでは申し訳が立たん」

「お礼なら、いりません。私達は董卓さんに苦しめられている洛陽

の人達を助けにきたんですから」

はっきりと言い返す劉備には強い光があった。

ただの頼りないかわいらしい少女。

それが周瑜の最初に見た時の第一印象だった。

それがどうした事が、今相對してみれば、頼りなさは消えきれないものの、確かに一の将としての顔をしている。

それに、劉備には孫策とは違う何かひきつけられるものがある。

小鬼くんはやっぱり劉備軍の将よ

不意に周瑜は孫策が言っていたのを思い出す。

戦鬼は金玉では動かないわ。あれは、人の心によってしか動かない

成る程、と周瑜は思う。

劉玄德は人を強く惹き付ける。

それは彼女の人柄から、積んできた徳から、想いから。

何より、彼女の心から生じる力なのだろう。

劉焯翔刃という戦鬼を従える程に強く、優しい心。

甘っちょろい幻想が好きだと宣う劉焯にとって、主とするならば格好の人物だろう。

だが、

（それを言えば、この男の方が上かもしれん）

周瑜は考えながら、一刀に眼を向けた。

この青年にも、何か引き付けられる何かがある。

劉備と同質でありながら、同質でない何か。

天の御遣いと呼ばれ、噂では劉焯は彼の徳に心打たれたという話を思い出す。

誰かを想ってした行動が彼にとっての当たり前。だから、簡単に思い出せないのかもしれない。

それは徳が高いとも言え、器が大きいと言ってもいいのではないだろうか。

（底知れぬ点は、小鬼と一緒にか）

「？ 俺に何か」

「いや、気にしないでくれ」

「あとなんだけど、もしお礼を言わないと気が済まないんだったら、朔に言ってくれ。」

俺と桃香は朔に頼むしか出来なかったし」

「……………やはり器も大きい」

周瑜は小さく笑みを零し、聞こえぬよう呟いた。そして、未だ一刀に抱き着いたままの劉焔の視線の高さに屈んだが、彼はこちらを見てくださいなかつた。

「……………北郷」

「朔、ちょっと怒られて落ち込んでるんだ」

「いつ立ち直る？」

「……………正直解らない。まあ、取り敢えず、さーく」

一刀は劉焔の名前を呼びながら、頭にぼんぼんと手を置いた。

すると、劉焔はやっと反応し、一刀の方に顔を向けた。

「……………愛紗」

「……………愛紗ちゃん」

「……………愛紗よ」



「うっ……………面目ない」

一刀、劉備、趙雲と三者三様の反応に、関羽はいたたまれない気持ちにされた。

それも仕方ないのかもしれない。

何せ、劉焯は涙目に弱々しい八の字の眉になっていた。

「あ……………朔？ 孫策お姉ちゃんと周瑜お姉ちゃんがお礼を言いた  
いんだって」

「……………？」

自然と小さい子に語りかけるような口調になるが、一刀は気付かず彼の頭を撫でながら言った。

劉焯としては何に対する礼なのか解らないのか、涙目に疑問の色を上乗せした。

「ほら、孫策お姉ちゃんが危ないところを朔が助けてくれたから、そのお礼を言いたいんだって」

「そうだ、小鬼よ。よく我らが王の命を救ってくれた。礼を言う」

周瑜は優しく感謝を口にするが、

「僕、助けてないよ」

劉焯はすぐに否定した。

これに驚くのは周瑜と孫策の二人だけ。

「刀達に至っては、やっぱりか、といった表情を浮かべている。」

「何でそんな嘘つくのよ!? 周倉から私を助けてくれたじゃない!」

「その事は甘寧と周泰からも聞いている。伯符ならともかく、あの二人が意味のない嘘をつく筈がない」

「冥琳、さりげに酷いわね……」

「助けてないもん……」

孫策と周瑜の言葉を劉焯はまたも否定する。

このまま言い続けられ、ぐずりかけている劉焯が泣くのではないかと感じ始めた孫策らは、二人同時に視線を一刀に向けた。

視線は言外に、どういう事だ、と問い質していた。

(まあ、そうなるよな)

こうなると感じていた一刀は、仕方ないとフォローを入れる。

「朔、孫策お姉ちゃんの事、守ってくれたんだよな?」

「……………うん。だって、お父さんをお願いされたもん」

「そっか、ありがとな」

くしゃくしゃと頭を撫でられ続け、嬉しくなったのか劉焯は少し照れ臭そうに笑った。

こういう事だ、と今度は一刀が視線で言ってくる。

それに気付かぬ周瑜ではない。

「小鬼……………劉焯翔刃よ、よく我らが王の御身を守ってくれた。呉を代表して礼を言う」

「私からも、ありがとう。駆け付けてくれた時の翔刃、格好良かったわよ」

「……………僕、お父さんに言われたから守った。だから、お礼はない」

「これはこれは、主と同じ事を言うとはな。これでは、誰に感謝したらいいか解らなくなるぞ」

「じゃあ、孫策さんにしたらいいな」

劉焯を抱き上げながら、一刀は言う。

「誰が助けた、守ったとか考えないでさ、孫策さんが生きていてくれた。それに感謝したらいいんじゃないかな」

な！？」と一刀は劉焯に言ってみるが、見た目相応な子供モードな彼は首を傾げた。

「……つくく……あははは」

そんな一刀と劉焯を見て笑い出したのは、孫策だ。

だが、その笑いは決して罵りや嘲りが含まれていなかった。

面白い。

ただそれだけの感情が齎したものだ。

「あれ？何か変な事言ったかな、俺」

「ふふ、ごめんなさい。翔刃と話した時も思ったけど、やっぱり貴方達がいいわね」

「そうだな。その心根の持ち主なら、裏切りなど無さそうだ」

「あ、もしかして同盟の話ですか？」

思い出したように口にする劉備の言葉を、孫策は首肯する。

「そう、劉備軍と孫呉の同盟。……どう？信用してもらえたかしら」

「はいっ！」

「ちょっと、桃香様！そのように簡単に信用しないでください！」

「ご主人様も、ダメなの？って顔しないでください」

「ダメなの？」

「口に出してもダメです！！」

完全に同盟賛成に頭が行っている主二人に諫言する関羽。

彼女の横では、孔明と鳳統の軍師二人が思惑を計るように周瑜と孫策を見ていた。

「あら、酷い言い方するのね、関羽は。……………私を信用出来ないって言うのかしら？」

「……………信用するしないの問題ではないでしょう。英雄に真の友人などいません。……………居るのは利用する輩のみ」

「当たり前でしょ、そんなの。私だって、劉備と友人になろうと思っ  
てないわ。あ、翔刃は別ね。」

「だけど、共通の敵がいるなら話は別でしょ？」

共通の敵。そう孫策が口になると、関羽は悔しげに歯噛みした。

それは、その共通の敵がいかに強大であるか解っているが故の悔しさだった。

「共通の敵、ですか？」

「そうよ、劉備。私達が勢力を伸ばしていく上で、一番の強敵となる者」

「人を揃え、資金を揃え、天の時を待っている北方の巨人の事だ」

「えーっと……袁紹さん？」

「わお！ 可愛いらしいボケなこと」

「えっ、違うんですか!？」

劉備の本気の驚きに、孫策と周瑜一瞬固まった。そして、一刀達は恥ずかしげに苦笑いした。

「桃香。北方の巨人と言えば、曹操の事だよ、きつと」

「ええっ!？ 曹操さんなの!？」

「……北郷、お前のところの代表は中々面白い発想をするな」

「あー……あはは。そこが桃香の良いところという事で」

周瑜の言葉に一刀がフォローにもなっていないフォローをしていると、劉備はまだ納得いつてないのか、また首を傾げていた。

「でもでも、曹操さん、いい人でしたよ」

「確かに曹操はいい人だったよ。けど、桃香、これからはそうも言っ  
つてられないんだ」

「何で？ また協力できないの？」

「歩む道が違うからです、桃香様」

困惑している劉備に、孔明は諭すように理由を告げる。彼女にとって少し悲しい現実を。

「桃香様、私達は皆が笑って暮らせる世を創る為に立ち上がりました。

けど、曹操さんは違います。曹操さんが歩む霸道は、魏一国による天下統一。

武力による統治は、いつか私達の領土にまで侵攻してくるといふ事です」

「そっか……いつか曹操さんとも」

「だから、その時が来て慌てるよりも、互いの利益の為に手を結んでおくべきではないか。

私達はそう提案しているのだよ」

「私達は魏を討った後、貴方達が呉に侵攻してこない限り、矛を交える気はないわ」

どう？　と言外に言ってくる孫策。

今は割拠の時代。

戦わなければ生き残れないこの時代に、味方が出来るのは有り難い。

自分達の理想の実現には、侵略という方法は必ずしも必要というものではない。

解り合えたのなら矛は交えず、解りかけているならば言葉を交わす。

戦争という名の思想のぶつけ合いは、最終手段であるべきだ。

「……………桃香」

「うん……………孫策さん、同盟のお話、受けます」

一刀の考えを察した劉備は協力する事を決めた。

それに孫策は口端を吊り上げ、再度確認する。

「そう、本当にいいのね？」

「はい。勝手な思い込みって言われるかもしれませんが、孫策さんは悪い人なんかじゃない。優しい人だって解りましたから」

「そんな簡単に解られるような人となりじゃないと思うけど……………」

まあ、そう思っならそう思い込んでなさい」

「はい、そうさせてもらいます。これからよろしくお願いしますね、孫策さん」

「ええ。よろしくね、劉備」

劉備と孫策は互いの手を握り締め合う。

これにより、劉備軍と孫呉の同盟は結ばれる事になった。



劉備軍と孫呉の同盟が結ばれた夜、やっと心が回復した劉焯は遠い目をしながら夜空に瞬く星を眺めていた。

そんな彼は、

「……………死にたい」

いきなりネガティブまっしぐらな発言を零してしまう。

関羽からの説教によって心が折れていた彼は、回復中ずっと子供然とした行動をとっていた。

例を挙げれば、一刀に撫でられては嬉しくなり、一刀に抱き上げられては喜び、一刀の膝の上に座ってご飯を食べてはしゃぐなどしていた。

心が回復し、我に返った劉焯は彼にとって悲しい事に全て覚えていた。

そして、劉備や関羽達から向けられる母性を含んだ視線に堪えられなくなり、劉焯は干将をおもむろに抜くと自刃しようとして一刀に羽交い締めになされて止められた。

つまるところ、ものすっごく恥ずかしかったのだった。

余談だが、関羽に、

「……………その、もっと私にも甘えてくれてもよいのだからな？」

と顔を赤らめて、もじもじされながら言われた。

そして、どこかむっとした鳳統にはさっきまで無言で腕を組まされていた。

どうしたのさ？ などと聞いたら最後、泣かれて組んでいる腕を折られる気がした。

非力な鳳統には無理な筈なのに。

「……………雛里先生が黒くなってる気が」

自分が原因かもしれない、という可能性を考えずにぼやいた。

「ま、いい……………とは言えないよ」

「そう思われたら、俺も困るな」

「ん……………お父さん」

「子供はさっさと寝る時間だぞ」

一刀は劉焔の隣に立つと、彼と同じように星を見上げた。

「でも、このすごい星空を見たいなら、保護者同伴で許可な」

「それってずるくない？」

「ずるくない。親と子が一緒にいれば、こついうのは大抵許されるもんだ」

半眼で見上げてくる劉焯に、ごまかすように笑いながら一刀は言った。

「そついえば、怒ってないの？」

「んー、何をだ？」

「周倉と華雄を逃がした事」

「……………愛紗にも言ったのか？」

「言った。けど、その事だけは怒られなかった」

「そつか。じゃあ、俺も怒らない」

うん、と一人頷く一刀。対して、劉焯は目を丸くして言葉を失っていた。

正直言えば、この主ならこつ言う気がした。あくまで“気がした”だ。

実際に言われると、やはり驚くしかなかった。

「戦争やってる奴が言う事じゃないとは思っけどさ、討ちたくないなら討たなくていい」

「どうして？ 敵は倒さなきゃ、僕らがやられるだけだよ」

「かもな。でも、必ずしも殺さなきゃいけない訳でもないだろう？  
戦わずに勝つ、なんて作戦も世の中にはある訳だし」

「結局、言いたい事は何さ？」

「……辛い役目をさせて、ごめん」

劉焯の頭に手を乗せ、一刀は謝罪を口にする。

「本当は周倉と戦いたくなかったんじゃないか？ 誰だって家族や  
友達同士で戦うのは……辛い事だろ」

「……お父さん、本当の事を言うとき、解んないんだ」

夜空に手を伸ばして、劉焯は自身の手を見つめる。

確かに自分はその時覚悟した筈だった。

失わない為に失おう。

そう覚悟したのに、そのつもりで拳を撃ち込んだのに。

周倉を失わなかった。

そして、それにどこか安堵した。

それから殺す気は全く起きず、張遼という将に返してしまった。

ちぐはぐ。

一言で言えば、そうだった。

心と体がバラバラで、気持ちと行動があべこべ。

偉そうに旭を説教した本人が、何より“偽物”で“偽者”。

自分を偽った者だった。

それを一刀と自嘲するように語ると、

「違うと思うな」

彼はすぐに否定した。

「どっしてそう思うのさ？」

「朔は自分に関する事だと鈍いから、そう思うんだよ」

「む、お父さんに言われたくない」

「俺も朔には言われたくない。

まあ、聞けって。朔は、はっきり言っただけ素直じゃない」

「ツッコミ辛い発言はよしてよ」

「それで、やっぱり周倉を殺したくなかったんだよ」

「流しますか、そこ……。  
でも、僕は確かに覚悟したんだ」

「したんだろうな。けど攻撃の瞬間に、本当は周倉を殺したくない  
って素直な気持ちで覚悟に勝ったんだよ」

だから、討てなかった。

どこか自信ありげに、一刀はそう断言した。

納得していいのか悪いのか、劉焯はそれすら解らず困惑します。

「つまり、周倉の事もさ、桃香や愛紗に雛里、あと俺とかを含めた  
朔の“大切”に入ってるんだよ」

「……え？」

「嫌われるより失う方がずっと嫌だって、前に愛紗に言ったんだろ？  
だから、失う覚悟は失いたくない思いに負けたんだよ」

「は……はは……」

なんだ、その答えは、と劉焯は自問し、乾いた笑いを浮かべた。

答えを前に口にしておきながら、その答えに気付かないとは。

「莫迦みたい……」

「莫迦じゃないさ。素直じゃないだけ」

「あつ……」

「それに朔が偽者なら、俺も天の御遣いの偽者だしな。ま、偽物だからってこの神輿から降りる気はないさ。まだ……降りていい時じゃないしな」

また夜空を見上げ、一刀は小さく呟いた。

「“偽”、即ち人為なり」

「何、それ？」

「俺のじいちゃん　朔にとってのひいじいちゃんが言ってたんだよ。」

偽る事は、決して騙すって意味だけじゃない。誰かを思って人が為す事、それは時に“義しさ”の鏡映しの“正しさ”でもあるんだって」

「……なんか正義じぎの敵は、別の正義じぎって言ってるみたい」

「実際そうさ。桃香と曹操が良い例だしな……でも、立ち止まる訳にはいかないんだ。絶対に」

固く拳を握り締め、一刀は決意を口にする。

夜空を見つめ続ける彼の眼に、きつと星は映っていない。見ているのは、過去だろう。

理想を実現する為の対価には、自分達に協力してくれた兵の決して少くない犠牲が含まれている。

それを無駄にしない為にも、彼は歩みを止めない。歩みを遅くする事すら許さないだろう。

このまま歩き続ければ、いつか潰れるのは明白だ。

(想いを貫けるように、潰れずに歩けるように、僕が道を切り開けばいいさ)

心中で一刀のように決意を改めてすると、劉焯は一刀のズボンをくいくいつと引っ張った。

「お父さん、もう寝よう」

「だな。明日も早いしな」

「じゃ、僕は厠に行ってから寝るから、先戻ってよ」

「……………」

「な、何？」

「いや、あんまり遠くの厠に行くなよ」

「う、うん」

寝床のある天幕に一刀が入っていくのを見届けると、劉焯は頬をぽりぽりと搔いた。

「……………見抜かれてたかな」



劉焯は自陣を抜けだし、荒野を走っていた。

目印などある筈もないような場所だが、彼は何かを目指すように直線に向かっていた。

その目的地には、

「あは、やっぱり来てくれたっすね」

満面の笑みを浮かべた周倉がいた。

「いや、来てくれなかったらどうしようかと思っただっすよ」

「指を三本立てたら、密かに抜け出す合図。昔から思ってたけど、密だから三つ指立てるって、ちやちい考えだよね」

「来て早々にお姉ちゃんの心に短刀をぶっ刺さないでほしいっす！」

「で、本題は？」

「ツッコミスルーで短刀2本めった刺し……」

よよよ、とわざとらしく泣きまねを始める周倉。

めった刺しどころか、双剣で心体諸とも解体してやるうか、と劉焯は思った。

「早く言つてよ。じゃないと、殺して解して並べて揃えて晒すよ？」

「小鬼ちゃん、眼がマジになってるっす……。もっと穏やか且つ和やかにいききたいなあ、なんて」

「……………」

「無言で干将と莫耶を構えないで！ お姉ちゃん、怪我で戦えないんすからー！」

無抵抗を示すように両手を挙げながら周倉が叫ぶと、劉焯は双剣を鞘に納めた。

「はあ……………んじゃ、本題っす。今回の戦争、小鬼ちゃんはどっ思ってるっすか？」

「……………本題にその質問は必要なの？」

「必要。だから、聞きたいの」

劉焯は怪訝な表情を浮かべるが、周倉は真剣な顔つきになる。重要ではあるらしい。

「第一印象は、何となく気に入らない。うちの軍師殿は、これが董

卓への嫉妬から始まる権力争いだって言った」

「ふむふむ」

「で、うちの主は権力争いなんて二の次な人だから、董卓が圧政を行って民を苦しめてるって噂を聞いて連合に参加したんだ」

「……………へえ。ね、小鬼ちゃん」

董卓が圧政を行っている、という部分で周倉は眼を細めた。

そして、彼女は言う。

「もし、その噂が嘘だとしたら？」

冗談とも本当とも聞こえる声音で発せられた言葉に、劉焯は眉を顰めた。

それが本当に嘘ならば、とんだ茶番で大層な贅が用意されたものだと思う。

しかし、

「嘘か本当か、そんなのどっちでもいいさ。僕は“董卓”を消すよ」

小鬼は冷ややかに告げた。

「……嘘でも？」

「そつだよ。もう人が沢山死んでる。世を乱した責は簡単に贖あがなえるものじゃないよ。

というか、“もし”なんて仮定じゃなくて、本当なんですよ」

違う？ と聞いてみれば、周倉は不自然なくらい眼を反らした。

「旭が協力してる時点で引っ掛かっていたんだ。董卓が民を苦しめてるなら、お前は協力なんてしないだろうし」

「そつつすよ………董卓が悪人なら、お姉ちゃんとが疾とうに討つてるっす」

あの娘がいるからムズいんすけど、と付けたし、周倉は意を決したように劉焰の前で跪いた。

「お願いがあるの……！」

彼女のお願いに、劉焰は底知れぬ面倒事を予感した。

鬼と連合⑧ ｼ水関攻略戦後(後書き)

お疲れ様でした。

敵武将を素直に返すという朔の暴挙。ホント、この子は何してるんですかね。

あと、朔の“助けてない”は否定し、“守った”は肯定した意味。

感づいた方、いましたか？ ちょっと気になります。

別に、どこかの怪異専門のオーソリティを気取った訳ではないので、あしからず。

感想、批判お待ちしております。

鬼と連合⑨      虎牢関攻略戦      飛將軍、出陣（前書き）

今回は、やっと虎牢関です。9話かかって、やっとです。

そして、呂布登場の今話です。

## 鬼と連合9

### 虎牢関攻略戦

### 飛將軍、出陣

シ水関を落とした反董卓連合は、次なる難所である虎牢関へと向かう。

その道中、一刀はずっと劉焔が気になっていた。

夜に抜け出して以降、目に見えて面倒そうな表情を浮かべていた。

そして、虎牢関に徐々に近付くにつれ、ある一点を見る時間が増えているのに一刀は気付く。

「……なあ、朱里」

「はい、何ですか？」

「朔がさっきから見てる方向の先にさ、何かあるのか？」

「朔くんが見てる方向ですか？」

小首を傾げる孔明に、一刀はそう、と頷く。

孔明は劉焔に倣って同じ方向を見ながら、頭の中で地図を開いた。そして、ああ、と彼女は納得した。

「ご主人様、朔くんが見てるずっと先に虎牢関がありますね」

「虎牢関か……朔の奴、何か感じ取ってるのかもな」

「かもしれませんね。私も朔くんが遠い所をじっと見てると、伏兵がいるんじゃないかって思っちゃいます」

あはは、と苦笑いをする孔明に、一刀も苦笑いを返す。

実際、連合参加前に行った劉焔の賊討伐でも、戦闘前に彼がじっと遠くを見ている事が何度かあった。

そして、その先には必ずと言って言い程に伏兵が潜んでいた。

だが、劉焔はそれを言わず、単身突撃して殲滅する事しか伏兵の存在を知らせない。

現に、シ水関攻略戦前の華雄隊の奇襲を単身阻んでみせた。この時のように予兆的な発言をしていたのは、本当に稀だ。

「主よ、一つよろしいか」

そこに、一刀同様に劉焔の様子に気付いた趙雲が来る。

「なんだ？」

「朔が見ている方向に、細作を走らせたいのです」

「星もか……」

「む。私も、とはどういう事です？」

「いや、俺と朱里も朔の視線の先が気になってさ。あいつ、虎牢関をずっと見てるみたいなんだ」



「虎牢関を……なるほど。大方、朔は強き武人の気配を感じ取っているでしょう」

「強き武人……っていうと天下の飛將軍、呂布かな」

「まず間違いないと思いますよ」

事前に入手した情報によれば、虎牢関を守るのは呂布と陳宮という軍師に、張遼だという。

シ水関攻略戦で、劉焔はまだ遠く離れた位置からシ水関を眺めるといった行動をとっていない為、感じ取っているのは張遼の気配ではなく、呂布という事になる。

天の世界 現代を生きていた一刀も呂布の名は知っていた。

呂布の名ならば、三国志をよく知らぬ者でも聞いた事はあると言って良いのではないかと思う。

前漢の時代、武勇に優れていたとされた李広になぞらえた“飛將軍”の称号。

そして、それを証明するかのようにな《人中に呂布あり》と賞された武勇を持つ。

(演義の虎牢関の戦いだ、劉備に關羽と張飛の三人を相手にして生き延びたんだよな)

それを思い出しながら、どうしたものかと一刀は小さく呻く。

この世界の劉備に戦闘は無理だ。となれば、関羽、張飛、趙雲の三人に任せればなんとかなるだろう。

それに、天の世界には無かった鬼札ジョーカーがこちらにはある。

胸に宿る小さな不安を抑えるように、一刀はなんとかなると自分に言い聞かせた。

一刀が劉焔の隣りに立つと、彼は一度だけ眼を一刀に向けて、すぐ戻した。

「気になるか？」

「……………気になってる、かな。なんかさ、虎牢関に近付くにつれて心がざわつくんだよね」

「今までと比べられないくらい危険だったりとか？」

「かな。師匠程じゃないけど、確実にヤバイ相手がいるよ」

因みに伏兵はいないよ、と劉焔は付け足す。

聞こえてたのな、と一刀は心中で独り言ちた。

「それともう一つ。気を落とさないでね」

面倒そうな表情を悪化させて呟く劉焔の言葉に、一刀は嫌な予感がした。

「大本営より伝令！ 劉備軍は速やかに前進し、虎牢関前方に布陣せよ！」

その後は敵の動きに合わせて、華麗に適を撃退せよ！ 以上！」

現れた袁紹軍の伝令の言葉に、一刀は顔を引き攣らせた。

『はあ……………』

溜息が幾つも重なり合う。

一刀と劉備達は揃いも揃って皆苦く笑っていた。

「はい、今回も華麗に撃退せよとの御達示がありました」

場を切り出したのは、一刀。だが、眼はどこか遠くを見ている。

「案の定という訳ですな。……………それにしても、華麗に敵を撃退せよというのは、冗談としては面白い」

「もっと面白いのは、それが冗談ではないっていう事ですね」

く、と趙雲は喉で笑い、孔明はどこか乾いた笑みを浮かべた。

「朱里も口が悪くなったのだ」

「こつも続けられたら、口も悪くなっちゃいますよ」

肩を落とす孔明の隣で、鳳統も同じ気持ちなのか重い溜息をついていた。

次の相手はシ水関の華雄以上の武将だ。

三國無双の飛將軍、呂布。

呂布の武を支える軍師、陳宮。

そして、文武両道の張遼。

彼女らを相手に突破する困難さが容易に想像出来てしまい、一刀は思わずまた溜息をつく。

「でも……やるしかないよ」

思考が後ろ向きになる中、劉備は前をしつかりと見据えた。

そんな彼女に触発されたか、関羽は顔を明るくし、

「桃香様のおっしやる通りです。呂布など何する者ぞ……きつと」  
の私が討ち取ってみせましょう」

熱く語るが、難色を示したのが2人いた。

「うん、期待してる……と言いたところだけど、愛紗一人で呂布と戦うのは禁止。」

「……………これは絶対に守ってほしい」

一人目は、呂布の逸話を知る一刀だ。

「どうしてです？ まさか、この私が負けるとでも」

「高確率で負けるよ、きつと」

関羽の反論を淡々と肯定したのは、二人目である劉焰だった。

相変わらず虎牢関の方向を向いているが、軍議にはちゃんと耳を傾けていたらしい。

「な！？ 朔まで！」

「虎牢関までまだ距離はかなりあるのに、莫迦みたいに強烈な気配を感じるんだ。」

「これが呂布のなら……正直、一人で相手取るには難しいだろうね。だから、僕は主上の意見に賛成」

「朔の言う通りなんだよ。俺の世界の呂布將軍の強さは並大抵のものじゃない。」

「……………愛紗が強いのはよく解っているけど……………俺は万が一にも愛紗を失いたくない」

「ご主人様……………」

「一刀の真摯な言葉に、関羽は眼を大きく見開いた。

「一刀は全員の顔をゆっくりと見渡し、約束だ、と告げる。

「愛紗だけじゃなくて全員との約束だ。絶対に一人で呂布と対峙しないで。卑怯かもしれないけど、皆で力を合わせてほしい」

「一刀の約束を受け入れるように、皆ゆっくりと確かに頷いた。

「……解りました。ご主人様がそうおっしゃるならば、私はご主人様の言葉に従います」

「あや？ 愛紗が珍しく素直なのだー！」

「ば、馬鹿者。私はいつだって素直だぞ！」

関羽がしおらしく答えたのに気付いた張飛が途端に茶化しだす。

少しは自覚があるのかないのか、関羽の頬は赤く染まりだした。

「愛紗ちゃんは何故かご主人様の言葉だけは、素直に聞くんだよねー？」

「桃香様までそんな事をつ！」

「だって、ホントの事だもーん」

「まあ、愛紗さんも女の子だって事です」

「朱里ちゃん、それ、何気にひどい……」

普段弄られる側だからか、劉備はここぞとばかりに関羽を弄る。そして、孔明もそれに乗るが発言が若干黒く、鳳統にツッコまれている。

「くっ……皆で好き勝手言っ！ ご主人様も朔も何か言っやってください！」

「んー……まあ、でも、こっつものも」

「別にいいんじゃないのさ？ 間違ってないと思うし」

「私に味方はいないのかっ！？」

助けを求めた二人が弄る側に回り、関羽は顔を真っ赤にして叫んだ。

その叫びに、周囲の兵達にも大きな笑いの波が起きる。

連戦を重ねる兵達にも良い気分転換になったのか、空気が和やかなり、少しだけ足取りが軽くなった。

笑みが生み出した力で前に踏み出し、一刀達は最後の難関に駒を進める。

三國無双が待っ 虎牢関へと。

劉焯達が虎牢関へと行軍している、とある日の夜。

周倉は城壁にその縁から足を投げ出すようにして座って、空を見上げていた。

星詠みの仕方は師匠から習ってはいたが、今はする気はない。それに当たるかと言えば、それは別問題だった。

当たるのが27回に一度と、また切りの悪い的中率なのだ。

何にしる、星詠みが当たるうが当たるまいが周倉にはどうでもよかった。これは彼女にとって、夜寝付きづらい時の暇つぶし代わりでしかない。

「旭……」

「は〜い？」

見上げていた視線を戻し、周倉は自分の名を呼んだ主を見る。

深紅の髪に、綺麗な紫色の瞳。褐色の肌には入れ墨。

天下の飛將軍、呂布奉先。その人がいた。

「ありゃ、レンレンじゃないっすか。どうしたんすか？ お腹空い



「て眠れないとか？」

「（……………フルフル）」

「違うすか」

「……………半分正解」

「お腹は空いてる？」

「（……………コク）」

「……………そうきますか。夜遅い時間での夜食は美容と健康の大敵  
つす。我慢つすよ」

「（…………………………コク）」

「そこはすぐに頷いてほしかったつすよ」

後で絶対厨房に行くな、と察した周倉は苦笑いを浮かべる。呂布は  
彼女が何故苦く笑っているか解らないのか、小首を傾げた。

「……………旭、小鬼の事、考えてた？」

「いきなり話変えるんすね、君は。そつすね、小鬼ちゃんにお説教  
された事を反芻はんすうしてたんすよ」

「……………？」

「想いの真贋とか、貫かなきゃいけない事とか。ま、色々つす」

自分より年下に説教されて、遠回しに励まされて。

素直に優しさを出そうとしない、相変わらず不器用なあの少年のらしさを思い出すと、周倉は自然と頬が緩んだ。

「そだ。レンレンは何の為に戦ってるんすか？」

「？ 何の為に？」

「そつっす」

天下の飛將軍が戦う理由。純粹に興味が湧き、周倉は訊く。

「……………お金」

「ありゃ……………」

返ってきたのは、即物的な答えだった。

「……………恋、頑張れば、お金たくさん貰える。そしたら、皆でご飯いっぱい食べれる」

「あ、レンレンの家族のご飯代っすか。大家族っすからね」

この理由には納得した。

短い間ではあるが、彼女の人柄はある程度把握しているし、周倉にとっても呂布の家族への愛情は応援したい。

「……それに、恋、月好き。だから、負けない」

「そうっすね。月の為にも負けられない　　といっても、私は次の戦には出られないんすよ〜」

とほ〜、と肩を落とす周倉。

劉焰に受けた攻撃は、彼女の骨に痺ひびを入れていた。華雄のような切り傷ののように治せるが、骨が変にくっつかないようにゆっくりと治す必要がある。

その為、動けても戦闘は無理、というのが周倉の現状だった。

「……大丈夫」

そんな彼女に呂布は断言する。

「……恋、強い。旭の分も頑張る」

「あは〜。ありがと、レンレン」

でも、と周倉は続け、

「本気の戦鬼は、無双を無双ではなくする。覚えておいて」

真剣な声音で忠告する周倉に、呂布は頷く。

そして、視線を地平線の彼方に向ける。その先にいるであろう連合軍の一角へと。

「……解る」

劉焯が呂布を察知していると同時に、彼女も劉焯を察知していた。

何とも言えないビリビリとする感覚。

初めて周倉と会った時に感じたそれが、数倍に強くなって呂布の才覚に訴えていた。

「恋と似てる奴が来る」

自分と同類。

戦場に於いて、鬼となる者。

自分と同格。

小鬼が無双に並び立つ者ならば、打ち倒す。

それだけだ。

それが、主を救う方法であるのなら。

「な〜んか、レンレンってば小鬼ちゃんに似てるっすね」

「??？」

「何でもな〜い。ほら、お迎えが来たっすよ」

「恋殿——!!」

周倉が指差す方向には、帽子を被った小柄な少女が走り寄る姿があった。

「……ねね」

呂布が少女の真名を呼ぶと同時に、彼女は呂布に抱き着いた。

「恋殿——！ 探したのです。部屋にいなかったなので、厨房に行ってもいなかったので大変だったのですよ」

「あは。軍師陳宮の推理は一步先を読んでたみたいですね」

ぽやっと周倉が笑っていると、陳宮がむっとしながら、こちらを向く。その眼には、今からお小言を言いますとありありと書いてあった。

「旭殿も旭殿なのです！ 怪我が治ってないのに、昨夜に続いてまた部屋を抜け出すなんて莫迦のする事なのですぞ。」

いくら恋殿くらい強くても、自分を大事にしないのは見逃せないのです」

腕を組んでつらつらとお小言を並べていく陳宮。それに、うへーとしながらも周倉は耳を傾けた。

だが、彼女は知らない。劉焯はこれと比較にならない程の説教を受けていることを。

「……ねね、もう夜遅い。旭、休ませなきゃ」

「む、そうだったのです。さあ旭殿、一緒に部屋に戻るのですよ」

「解ったつすよ。……………ねね、心配かけてごめんねえ」

「ふにやつ！？ 何をするのです！」

周倉は謝罪の意味を込めて、陳宮を抱っこ+なでなでする。たまに揺すったりしていると、まるで赤子をあやしているように見えてくる。

一見からかっているように見えるのだが、

「ああ……………それはずるいのです……………」

取り敢えず、効果はばつぐんだ。

余程気持ちが良いのか、陳宮の顔はぽおっと赤みを帯びてうつとりにしている。

「ふふふ……………私のなでなで真拳は、おじ様譲り。これで箆絡できないお子様はいないっす！」

ドギャン！と周倉のバックに雷のエフェクトが走る。

が、呂布の性格上ツッコミ出来る筈無く、出来そうな陳宮も絶賛箆絡中で不可能だった。

「あ……………ああ……………この気持ち良さは、恋殿のなでなでに匹敵してるのです……………」

「……旭」

「はいはい？」

「……恋も後で撫でてほしい」

「うははは！ 二人まとめて相手しちゃるっす！」

聞きようによつては誤解を受ける事間違いなしな発言をし、周倉は呂布と陳宮の手を握って歩き出す。

「そうそう、レンレン」

「？」

「月は死なないっすよ。鬼のお姉ちゃんがごり押ししといたんで」

「なんとまあ、意味不明で根拠の無さそうな言なのです」

「あはゝ。ま、根拠は無いすけど、自信はあるっすよ」

なんせ、と周倉は続け、

「口では文句言いながら、期待に応えちゃうお人好し。それがあの子の性分っすから」

そう楽しげに断言した。

「さて、どうしたもんかな」

そんな呟きを零したのは一刀だった。孔明も鳳統の二人も彼と同じ心境であり、眼を細めてこの状況を窺っていた。

董卓軍の城外での部隊展開。

防衛に於いて、絶対的な利<sup>城</sup>を捨てるという軍略に沿わない行動を董卓軍は取ったのだ。

その軍略に沿わない行動は、一見潔く決戦を望んでいるようにも思える。

また、予想外の何かを企んでいるようにも思えてしまい、連合軍は訝しむ余り二の足を踏んでいた。

「どうして城を捨てたんだ？ 普通なら、籠城戦に持ち込むのが常套手段なんだろ」

「はい。通常ならそうなんです……」



「まさか、籠城を諦めて決戦を。そう思ってるのではないだろうか？」

「でも、それなら私達にとっては好都合だよ。野戦なら、数の多い私達の方が有利に」

「……………それはどうでしょう」

関羽と劉備は自分の推論を並べていくが、軍師二人は難色を示す。

「……………難攻不落の虎牢関を捨てて、わざわざ野戦に持ち込むなんて……………ご主人様が言った通り、普通はしないはずです」

「では、何をやる気なのだ？」

「考えられるのは乾坤一擲、玉砕覚悟で総大将の頸を望むか……………それとも退却するか、です」

鳳統は二つの可能性を呈示する。だが、後者を選んだのだとすると、防衛力の高い関を捨てるのは愚策に聞こえた。

だが、鳳統はその考えは間違いだと言う。

「籠城を選ぶと、関の防衛力に頼りがちになってしまって、逃げ時を失ってしまう事がありますし。」

まだ戦えるって勘違いして逃げ時に迷うくらいなら、野戦で包囲されても必死で突破する方が生き残れますから」

「だとすると、崩れたが最後。董卓軍は一目散に退却か」

「でも主上、相手は呂布に張遼だよ。簡単に崩れてくれるような将じゃないでしょ」

「だよな」

半眼で口にした劉焯の言に、一刀は肩を少し落としながら同意した。しかも、総大将の考えが考えの為に、戦略における策らしい策を施しようがなく、戦術においても董卓軍の動きが解らない為に、策を考えるには情報不足が否めなかった。

「それじゃ、基本的にはシ水関の時と同じで、その都度に即対応して事で」

「では、我らはしばらく待機ですね」

「うん。董卓軍がいつ動くか解ら」

「くる」

一刀の言葉を遮るように、劉焯は呟いた。

相変わらず視線を虎牢関へと向けたままだが、それは険しいものへと変わっていた。

それにいち早く気付いた一刀は、若干の焦りが心に生まれながらも、指示を出す。

「愛紗、鈴々、前曲を率いて董卓軍の突撃を受け止めてくれ！  
星と雛里は二人の左右を固めるんだ！」

「ご、ご主人様、どうしたの？」

突然口早に出された指示に、劉備達は眼を白黒させ、やがて気付いた。

皆一様に董卓軍の方向に振り向き、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべて走り出す。

意を解した関羽達の動きは早く、なんとか戦闘態勢をとる事が出来た。

それと同時に、

董卓軍の突撃が始まった。

一刀と劉備達が董卓軍の行動に頭を悩ませていた頃、劉備軍とは違い、曹操は静かに敵軍を見据えていた。

そんな彼女の横では、他の陣営同様に夏侯姉妹とネコミミフード軍師、荀文若は口を揃えておかしいと発言していた。

「虎牢関の防衛に当たってる部隊が城外にいるなんて……何を考え  
ての布陣なのかしら」

「確かにな。地の利を捨てての布陣だ、何か策があるのだろうか……  
読めんな」

「ただのバカか、自棄になったのではないか？」

董卓軍の裏を読もうとする文若と夏侯淵。彼女らとは違い、夏侯惇  
は表だけを見た率直な答えを口にした。

「……春蘭は相変わらずね。ま、そこがあの娘の可愛いところでもあ  
るんだけど」

そんな彼女の答えを聞いていた曹操は、呆れの混じった声音で独り  
言ちた。

「桂花。貴女なら、どう見る？」

「はっ。……あそこまで本隊を晒しているのは私達の眼を引き付け  
る為。狙いは伏兵の利用……というのが定番でしょう」

曹操の問いに、文若は自身の考えを語る。

虎牢関の両側は高い崖だ。その上を見ようとして簡単に見える高さ  
ではない。

絶対的な死角。そこに伏兵として多数の弓兵を配置され、矢の斉射  
を受ければ、部隊の混乱は必至。対処しようにも、高さのアドバン

テージによって後手後手に回ってしまう事だろう。

有効な策である為、夏侯淵はなるほど頷くが、曹操はそれに首を横に振った。

「敵の狙いは、そのようなものではないわ」

「は……？　そうなのですか？」

「ええ。風に靡く軍旗に充溢している決意。……それが解らないかしら？」

曹操が董卓軍の軍旗に眼を向け、倣うように夏侯惇達も眼を向けた。

「飛將軍、呂布。驍將、張遼。彼女らの軍旗には決戦への渴望が見て取れる」

だが、文若は曹操の言に納得しきれしていない顔をしていた。

軍師としての性なのだろう。文若にとって、董卓軍の軍略の選択肢は二つしか見受けられなかった。

一つは、伏兵による奇襲で連合の戦力と戦意を削ぎ、時期を見計らったの本陣急襲。それによる袁紹の首級をあげる。

もう一つは、兵を纏めての退却に専念するか。この二つであり、“決戦”の選択肢は無かったのだ。

それを聞いた曹操は、またも違つと言つ。

「“軍略”としてなら正しいわ。でもね、この孟徳の片腕ならば、事象ではなく敵の魂をも見抜いてみせなさい」

何とも難しい事を言う曹操だが、文若は彼女の言葉に聴き入っている。

「二人の気高い魂。そして、導き出される軍略。どちらか一方を見ただけで全てを見抜いたと思うのは早計でしょう。」

……敵は恐らく、堂々たる決戦を行い、連合に痛手を与えた後で悠々と退却を敢行するはずよ」

曹操はくっ、と喉で笑い、口端を片方だけ吊り上げる。

連合軍と董卓軍では兵数を見る限り、連合軍が有利だ。

その厚い兵の壁を越えて退却するのは、無理難題の域だ。それを可能だと考えているのだとしたら、確固たる自信があるか、ただの自惚れでしかない。

しかし、彼女らは向かってくるだろう、と曹操は確信していた。

呂布は、天命を感じている。

自分と同じように天命を感じられる者は、人の理解を超える者。思考の枠に囚われる者達には、その考えを理解するどころか、受け止める事すら困難だろう。

己が同類ならば、きっと呂布は曹孟徳の前に立ち塞がる。

そう思うと、胸中に喜悦と期待の念が込み上がってきた。

英傑との戦いこそ、血湧き心躍る瞬間。

それに天の意志を感じられる最高の刻は、曹操孟徳という一人の霸王の心を満たすには切っては離せぬものだ。

「そういえば……………あの子もいたわね」

脳裏を過ぎったのは、一匹の小鬼。

話したのは、一度きり。だが、霸王を相手に不敵に飄々として見せたあの少年。彼も天命を感じられる一人かもしれない。

何故か、そんな予感がした。

「華琳様、劉備軍が戦闘態勢に入ったようです」

「へえ。やるじゃない、あの娘達も。それともあの男達かしら」

文若の報告を聞き、曹操は若干感心したように呟いた。

「か、華琳様？」

「それじゃ、私達も戦闘態勢を」

「で、ですが」

「あの年増の総大将の命令なら、待つだけ無駄よ」

曹操は口端を吊り上げ、ニヤリと笑みを零す。

「さあ、私達も戦を始めましょう」

一刀と劉備達が董卓軍の行動に頭を悩ませていた頃、孫呉陣営も同様に頭を悩ませていた。

「ふむ……軍略の定石ならば、ここは関に拠って敵軍を撃退するのだが……解らん」

「あら、冥琳。解んないの？」

そんな彼女とは反対に、孫策は得心がいったような顔をしている。

「雪蓮には奴らの考えが解るのか？」

「そりゃ、もちろん」

「では、お答え頂こうか」

「正々堂々戦って、隙を見て逃げる！」

自信があるのか、胸を張って答える孫策。

だが、彼女の答えは軍師である周瑜には、マルどころかサンカクさ



えあげられないものだった。

「……どんな真意を見抜いているかと思えば、そんな訳ないでしょ」

「そっかな？ 私にはそれ以外には考えられないんだけどなあ」

「そうよ。自分から有利な条件を棄てる訳ないわ」

「そうとも限らんのではないか？」

孫策の考えを否定すると、周瑜は彼女の考えを後押しする声に、困った顔をした。

眼を向ければ、そこには孫呉二代の王に仕える宿将の姿があった。

黄蓋

「黄蓋殿……貴女までそんな事を言うのか？」

「我らが主の勘は神懸かっておるからな。それに相手は飛將軍、呂奉先。奴の武が噂通りならば、有り得ん話ではなかるうて」

「確かに……ならば、主の神懸かりを信じてみる事にするか」

「だな。で、兵をどう動かす？」

黄蓋に聞かれ、周瑜は一瞬の黙考に入る。

意気軒昂なる呂布が率いる董卓軍と正面からぶつかり合つのは、どう考えてもまずい。

それ以前に、そんなものは策とは言わない。

この戦いが終わっても、宿願を果たす為の戦いが待っている。

(袁紹はともかく、恩があるあ奴らには悪いが……)

心にじくりとした罪悪感が滲むが、周瑜はそれを無視して答えを口にする。

「呂布との交戦はなるべく避ける。奴の相手は袁紹と……悪いが劉備軍に任せるとしよう」

「えー！？ やだやだ！ 呂布と戦いたい！」

「……………雪蓮。私が許すと思って？」

底冷えするような周瑜の凍てつく視線を受け、孫策は首をぶんぶんと横に降った。

「で、でも……………」

「周倉に討たれそうになり、翔刃に助けられたのは誰だったかな？」

「ぐっ……………」

「儂も今回ばかりは、公謹の意見に賛成じゃ」

「祭までそんな事言っ。私の味方はいないの？」

「いないな」

「おりませぬな」

「うっ」。冥琳と祭のいけず!」

にべもなくバツサリと願いを断つ軍師と宿将。

頬を膨らませていじけ始めようとした孫策だが、弾かれるように虎牢関の方へと向いた。

彼女の顔には、さっきまでの少女らしい顔は無い。今は王として、一人の武人としての顔をしていた。

「冥琳、全軍に戦闘態勢を」

「雪蓮、何を言っている？ こちらから攻め込む気なの?」

「いいから、早く。お願い」

「雪蓮様、冥琳様、大変です!」

「明命? どうした?」

「りゅ、劉備軍が突然戦闘態勢を取りました!」

飛び込んできた周泰のその言葉に、周瑜がハツとする。

「そういう事が………祭殿、明命と思春を率いて、我が軍の先陣をお願いします」

「任せよう。興覇、幼平、儂に続け」

「はっ」

「は、はいっ！」

黄蓋が甘寧と周泰を引き連れ、先陣へと行く姿を周瑜は見送りながら孫策へと釘を刺す。

「雪蓮、抜け出して呂布に挑もうなどと思わないでよ」

「い、いやあねえ、冥琳ってば。それは我慢するわよ」

「そう。それと、翔刃に会いに行くのも禁止ね」

「……さっすが私の冥琳。読まれてたか」

更なる釘刺しに、孫策は肩を落とした。

抜け出した先が呂布のいる董卓軍ではなくとも、董卓軍の攻撃を一番先に受け止めるであろう劉備軍でも良かった。

そこにはお気に入りの劉焰もいれば、手助けを理由にあわよくば呂布と一戦交えられるかもしれない。

などと、淡い期待もあったのだった。

「それにしても、劉備軍の対応はかなり迅速だったわね」

「そりゃそうよ。劉備軍には、小さな戦鬼がいるんだもの」

周瑜の疑問に孫策が当然とばかりに答え、董卓軍の突撃が始まった。

「なんや、随分と機に敏感な部隊ある思つたら、小鬼のとこやないかい」

目の敵、その先陣たる劉備軍の慌ただしい動きを見ながら、張遼は呟いた。

自軍の戦闘準備はもう間もなく終わる。だが、劉備軍の準備も異様な早さで整えられている。

「寡兵故に伝達速度が早い、いうことが。欠点が助けになるやなくて、やっぱり戦はおもろいわあ」

連合中、一番兵数が少ない劉備軍。それは見方を変えれば、将の指揮が隊の端から端まで伝わる早さが一番早いということでもある。

曹魏や孫呉の軍ように練度の高い兵が揃ってる訳でもない。けれど、志は負けていない。

将の 関羽や趙雲の号令があれば、彼らは必死に応えようとしてくれる。ついて来ようとしてくれる。

そんな奴らに文字通り、一丸となって来られては作戦に支障が出る可能性がある。変更すべきかどうか、張遼は小さく唸りながら考え出した。

「霞……考え事？」

そんな時に、呂布は首を傾げながら聞いてきた。その隣には陳宮がいる。

「恋……いや、気にせんで。それより、あの二人は大人しゅうしとった？」

張遼の言う“あの二人”とは、周倉と華雄の事だ。

ケガにより戦闘不能の二人を戦場に置いておける筈もない。他の負傷者と一緒に密かに逃がすよう、呂布に頼んでいたのだ。

片や鬼、片や猪が相手とあっては一般兵では頼りない。最悪、力づくでも、といった意味を含めての選任だったのが、陳宮からの答えは拍子抜けするものだった。

「二人共、びっくりするくらい大人しく逃げてくれたのです」

「ほんまか？ 旭はともかく、華雄の奴なら暴れそうなもんやけどな」

「華雄ですか？ 華雄は何やら神妙な顔をして、ずっと黙り込んでたのです。正直、気味が悪かったのですよ」

「ふうん。……ま、あいつもあいつで何か思う事があったんやろ」

一先ず、逃げてくれたならそれでいい。そう自分に言い聞かせ、張遼は飛龍偃月刀を担ぐようにして持った。

「恋とねねが戻ってきた事やし、作戦もっかい確認しとこか」

「敵は虎牢関を出て布陣している我々に対し、驚きと疑念を抱いているのです。」

そこに恋殿が一気呵成に敵本陣を突き、その混乱に乗じてさっさと逃げるのです」

「こらこら、作戦が一つ前に戻ってるて。恋が突っ込んだ後にウチの部隊で駄目押しする手筈やろ」

「あ、そうだったのです」

「ほんま頼むわ」

「大丈夫……恋、頑張る」

「ああ、便りにしてるで」

そんじゃ、と張遼は飛龍偃月刀の刃先を向け、

「ええか、お前ら！ あいつら、しばきまわしてから堂々と退却するんで！ 全軍抜刀じゃー！！」

檄を飛ばしてニヤリと笑う。

「連合のポケ共全員、いてこましたねー！ー！！」

連合と呂布、張遼率いる董卓軍の衝突は総兵数の差こそあれ、最初は拮抗していた。

警戒していたにも関わらず、総大将である袁紹の合図などなく、素早く対応できたのは劉備、曹操、孫策の三軍だけ。他は慌てる余り、急ぐどころかもたつく始末だった。

そこに、他とは一線、いや二線は画す呂布の武力が突き刺さる。

彼女の得物、方天画戟が振るわれる度に、連合軍兵は木屑か小石の如く薙ぎ払われていった。

一騎当千。

三國無双。

その武ならば、そう讃えられるのも当然だと。まるで洗脳するかのよう連合軍の頭に強制的に刻み付けていく。

「……邪魔」

脅威などまるで無く、物を退かすように呂布は呟き、得物を振るっ



た。

一太刀。それだけで三人の胸が一気に割られた。

邪魔。

今の呂布の思考は、この一言に集約されている。

張遼や自軍の兵達を逃がすには、連合の兵は障害でしかない。

だから、退かす。

だから、崩す。

だから、排す。

顔色一つ変えず、方天画戟で道を切り開き続ける。

だが、それも時が経つにつれて困難になった。

連合軍の出遅れていた部隊が戦闘態勢を整え終え、参戦しだしたのだ。

こうなってしまうば、後は数の暴力で徐々に勢いを削がれ続けるだけ。

「……まだいける」

それでも、呂布は方天画戟を振り、連合軍兵を屠っていく。

そして、

「強い敵が来た……」

方天画戟を止め、兵ではなく将の気配を感じた先へと眼を向けた。

そこには、三人の将の姿があった。

関羽。

張飛。

趙雲。

劉備軍を代表する武将達はそれぞれの得物を構え、飛將軍と対峙する。

「ふっ……よくぞ気がついたな、呂布よ！」

「ここから先は行かせないのだ」

「……うーむ。何だか我々の方が悪役のような台詞を言っているな」

気迫に満ち満ちている関羽と張飛と並び、趙雲は何やら微妙に気にしました。

実のところ、関羽も気にしていたのだろう、彼女も顔を若干赤らめ

た。

「星、マジメな場面で混ぜっ返さないでくれ！」

「うむ、済まない。だがそう思ったのも確かなのでな」

「……………冗談？」

呂布に不思議な物見るような眼で問う。戦場でいきなり漫才しだせば、誰だってそう思うだろう。

趙雲は顔を武将としてのそれに戻し、

「いいや、本気だ。……………呂布よ、ここから先へ行きなければ、我らを倒して見せるがよい」

「……………三人同時？」

「一対一で戦いたくはあるが、ご主人様と小鬼との約束でな。……………三人同時で当たらせてもらおう」

関羽の言葉を聞き、呂布は微かに笑みを零す。

「……………お前達の主人と小鬼、頭がいい」

そして、方天画戟を肩に担ぐようにして構えて不遜に告げた。

「恋は強い……………同時に来い」

「鈴々達三人に、簡単に勝てると思うなのだ！」

「簡単じゃない……………でも、やるだけ」

言い終わるや否や、呂布は一瞬にして関羽達に切り込み、方天画戟を振るった。

繰り出された豪撃を関羽達は辛くも受け止める。それでもその威力の凄まじさは得物を通して十二分に伝って、彼女らの顔を微かに歪ませた。

「……………良く止めた」

呂布の簡潔な贅辞が耳に届く。

「恋、強い……………舐めてると死ぬ」

「舐めてるつもりはないのだがな。噂通りのその武、まったく大したものだ」

「だが、我らとて腕には多少の覚えがある。全力を以て貴様を止めて見せよう」

「……………来い」

「参る！ でやああああ！！」

渾身の力を込め、関羽は青龍偃月刀を振り下ろす。刃は呂布の頭上に飛ぶが、彼女の赤い髪を撫でる事も出来ずに空を斬った。

「何っ！？」

「振りが大きい……避けるの簡単」

「次は鈴々が番なのだ！ ええーい！」

続く張飛は全身の力を使って横薙ぎに蛇矛を振るった。放たれたその剛速の一撃を呂布は後ろへ跳ぶだけで軽々と避けて見せた。

「……軌跡が単純」

「うぐっ……鋭いのだ」

「最後は私だ！ 受けてみよ、常山の登り竜、趙子龍の一撃を！」

繰り出すは神速の三連突き。頭、胸、足と狙うが、これも呂布は最小限の動きで避けられてしまった。

「……速いけど、特に怖くない」

「……むう。それはすまなかった」

「……いいけど」

一瞬和やかな雰囲気の流れるが、趙雲の内心は穏やかではなかった。

（……完全に見切られているな）

呂布は自分を含めた三人の攻撃を、武器を使わずに避けた。しかも、ご丁寧に品評付きで。

（主と朔の言通りか……武を極めた、と言われれば信じてしまいたいそうだ）

数瞬の黙考を終えると、関羽の様子が違うのに気付いた。

怯えるでもなく、怒りに燃えるでもなく、覇気が一段と研ぎ澄まされている。

「……………行かせぬ」

「愛紗？」

「ここから先には、絶対に行かせぬぞ！！」

趙雲の呼びかけにも応えず、関羽は呂布に切り込んだ。

「っー」

先の一撃とは段違いな斬撃に呂布は大きく眼を開き、方天画戟で受け止めた。

「……………変わった」

小さく呟き、呂布は関羽から距離を取る。そこに張り付くように関羽は追い縋る。

上段からの振り下ろし、そこから跳ね上げるようにしての振り上げ。引き戻しての突き。

次々と放つ関羽の連撃は、呂布に届かないまでも避ける事は許さず、

防戦を強いらせた。

「あああああ！」

咆哮をあげ斬り掛かってくる関羽の変わり様に、呂布は斬撃を防ぎながら不思議に思った。

気迫は十二分であった。だが、こんなにも鬼気迫ってはいなかった。

一撃の重さ、鋭さはこつも簡単に変わるものか。

呂布がそう考えている中、関羽の心中は言葉通りの想いがほとばしっていた。

趙雲が思っていたように、関羽も攻撃が見切られているのに気付いていた。

そして、考えてしまった。

もし、自分達が抜かれたら？

後ろには、守るべき二人の主がいる。それに彼らを守る小鬼がいる。

抜かれれば、呂布は主らを討とうとするだろう。そうなれば小鬼は呂布と戦う事になる。

目の前の並外れた武を持つ、この飛將軍を一人で、だ。

(……ダメだ)

あの子の事だ、主を守る為に自身を顧みない無茶かえりをするに決まっている。

最悪、小鬼の命一つを対価に逃がす事を選ぶかもしれない。

(ダメだ…ダメだ……ダメだダメだダメだダメだ!！)

食い止める。

何が何でも食い止める。

あの子に無理や無茶をさせないと宣言しておきながら、させてしまっているこの身が口惜しい。

もう、させてなるものか。

その悔しささえも力に変え、青龍偃月刀に込めて振るう。

だが、

「しまっ!?!」

呂布の反撃の一太刀が、青龍偃月刀を遠く弾き飛ばした。

ザンツ、と自身の得物が地に刺さる音。怒号が響く戦場にいるのに、何故かはつきりと聞こえた。

「愛紗っ!?! 逃げろ!」



「愛紗——！」

趙雲と張飛の声を聞き、関羽はやっと気付いた。

禁じられていた呂布との一騎打ち。

それを演じてしまい、いつの間にか張飛と趙雲の二人とも離れてしまっていた。

そして、方天画戟が突き付けられる。

「……いきなり強くなるから、驚いた」

でも、と呂布は続け、

「……恋の方が強かった」

方天画戟を振り下ろした。

瞬間、関羽には自身の命を奪う凶刃がゆっくりと迫っているように見えた。

刹那の時が何倍にも何十倍にも感じられ、静かに眼を閉じて、その間に何度も詫びた。

大切な主に。

愛する主に。

理想を共にした仲間。

何かと無茶をする、小さなあの子に。

「……………すまない」

口から零れた謝罪は、凶刃が空気を裂く音に掻き消された。

「謝るくらいなら、もう少し生き足掻いてよ」

死を覚悟した関羽は、確かに聞いた。

呆れたようにぼやく、小鬼の声を。

眼を開ければ、方天画戟の刃が首を断つ寸前で止まっている。

刃から眼を動かせば、小さな手が方天画戟の柄を握り締め、次に漆黒の戦装束の小さな背中、真紅の鬼兜。

「……………さ、朔？」

名を呼べば、小鬼はちらとだけ振り向き、またぼやき出す。

「最近さ、僕の役回りってこんな面倒なのばっかなんだけどさ」

これみよがしに溜息までつき、方天画戟の柄を放した。

呂布も劉焔の乱入に警戒してか、彼から間合いを取り出した。

「命令じゃなくて、これがあのお人よし二人のお願いだから、質悪いんだよねえ」

「朔？ 何を言ってるんだ？」

「愚痴です」

「至極簡潔に言われても、その……な？」

「帰ったら、ふて寝します。絶対してやる。愛紗に何か言われてもするから、よろしく」

「よろしくできるか！ 話を聞いて!？」

「うん、後でね」

「今、聞きなさい!!」

愚痴り若干拗ねだす劉焔に、関羽は慌て困らせた。

思わず声を張り上げてしまったが、劉焔はやっと関羽の方を向いて、

「ていつ」

「いたっ!？」

デコピンを放った。

「これは僕なりのお仕置き。簡単に生を棄てる人は嫌いだよ」

「うっ……………」

「ま、今話す事じゃないか」

そう言っつて、劉焯は真正面から呂布に対峙する。

「んじゃ、やりますか」

「!？ さ、朔！ それは私の

」

関羽愛用の

青龍偃月刀を構えて。

## 鬼と連合9

### 〜虎牢関攻略戦

### 飛將軍、出陣〜（後書き）

お疲れ様でした。

各陣営の話を入れてみましたが、華琳の出番が『鬼と連合1』以来の登場です。なんで、呉陣営より力入れちゃいました。

7ヶ月も未登場……ごめんなさいね、華琳さん達。

恋の話し方、書いてみて思いましたが、あの言葉足らずのたどたどしさ。どうすればいいの？

愛紗達と恋の戦い、原作だと一合ずつしか撃ち合っていないんで戦闘を伸ばそうにも、またどうすればいいの？、と考えた結果がアレ。愛紗さん暴走。

そして、朔のいつも通りの乱入。マンネリじゃん、と自分でツッコミいれました。ヤバイ。

感想、批判お待ちしてます。

鬼と連合10 虎牢関攻略戦 戦鬼 対 戦場の鬼 (前書き)

ついにできました、劉焰VS呂布!!

そして、過去最長の内容にしてバトルです。

鬼と連合10

虎牢関攻略戦

戦鬼 対 戦場の鬼

戦場の鬼

呂布奉先。

そして、賊狩りの戦鬼

劉焰翔刃。

二匹の鬼は、虎牢関を前に対峙する。

「あんたが、呂布奉先でいいんだよね？」

劉焰は関羽の青龍偃月刀を振り回して扱い方を確かめながら聞いた。

呂布は静かに頷くが、彼を不思議に思った。

劉焰の得物は、双剣。

槍のような長物を使うとは、周倉からも聞いていなかった。

「…………お前が小鬼？」

「そ。見ての通りの小鬼だよ」

「双剣」

「ん？」

「…………旭、言ってた。小鬼は双剣を使ってる」

「うん、使う。けど、今は使わない」

「??.」

あから様に首を傾げる呂布。そんな彼女に劉焯は何となしに告げる。

「単に使ってみたくなっただけ。気分の問題だよ」

言い終えるや否や、劉焯の姿が消えた。

だが、呂布は取り乱しもせずの方天画戟を真上に振るつた。

響く鋼の衝突音。

方天画戟の刃は、空中から振り下ろされた青龍偃月刀の刃と激突した。

(さすが、やるね)

劉焯は一撃を防がれたにも関わらず、呂布の反応に感心していた。

空中では呂布の一撃は耐えられない。劉焯はその一撃を利用して、器用に距離を取るように着地した。

「……次、恋の番」

そして、呂布の方天画戟の一閃が迫る。



豪速の一撃を青龍偃月刀の柄で受け止め流すと、劉焯は即座に石突を繰り出さそうとするが、

「……捕まえた」

それよりも速く呂布の手が劉焯の襟を掴んだ。

「なっ!?!」

予想以上の反応に驚く劉焯の声を聞きながら、呂布は片手で彼を地面に叩きつけた。

頭から叩きつけられるのは避けられたが、痛烈な衝撃が背中から全身へと瞬く間に広がる。

その衝撃は簡単に地に沈む事を許さず、劉焯の小さな体を勢いが無くなるまで何度も弾ませた。

「……う……いつたあ……」

青龍偃月刀を杖代わりに立ち上がりながら、劉焯は小さく呻いた。

格が違う

内心で独り言ち、三國無双と呼ばれる実力の一端を叩き込まれた体を摩る。

神速の動きを視認でき、刹那の如く反応して、一瞬にして反撃。

(反則級だよ、まったく)

並外れの武力を持つならば、関羽や張飛も例に漏れない。だが、この武人はある意味で例に漏れる。

並外れも外れ。一刀が以前教えてくれた“チート”なる言葉を体感させられた気分だ。

そして昔、ふとした拍子に師匠に聞いた質問を思い出した。

『本当に鬼がいるかって?』

『うん』

『いるわよ。ごまんとね』

『え? そうなんだ』

『鬼は“隠”<sup>おん</sup>。いないのが自然で当然。だから、人は認識しない、出来ないと言っても良いかもね』

『いないって事と同じじゃないのね』

『同じであって同じじゃない。禅問答みたいなものだと思ったら？』

『なんか納得しにくい』

『ま、世の中そんなものばっかよ。でもね、小鬼』

『何さ？』

『人の姿をした鬼は、確かにいる』

『それは僕らなんでしょ』

『人から為った、のはね。生まれながら人であり鬼である。そんな天然物があるの』

『……………』

『信じてないねえ、その顔は。別にいいけど、会ったら本当だったって痛感したらいいのよ』

半眼で言い放った師の顔もついでに思い出し、劉焯は方天画戟を構える呂布を見た。

「……………文字通り痛感させられてる」

ばやきつつ、自身も青龍偃月刀を構えた。

ふう…………、と短く呼気を吐き、劉焯は地を踏み砕くようにして駆けた。

青龍偃月刀の刃を呂布の足へと突き出すも、足を一步後ろへ下げただけで避けられる。

続く下段突きからの振り上げも、体を小さく反らしてかわ躲されてしまった。

「…………腕、もらった」

その言通りに、呂布の方天画戟は槍を振り切った状態の劉焯の腕へと飛んでいく。

刃は彼の腕に当たり、ギャリリと音鳴らして、そのまま“空”を斬った。

その空振りに近い感触に、呂布は眼を見張る。

確かに当たった。けれど、劉焯はその刹那の瞬間に得物から手を離し、籠手を滑らせるようにして一撃を受け流してみせた。

「今度はこっちがお返し番だ」

声は真下から。

一回転して受け流した勢いを利用し、劉焯は体の捻りを存分に利用した反撃の回し蹴りを放った。

一撃は方天画戟を間に差し込まれて防がれたが、呂布の顔を大きく歪ませた。

「おまけだよ」

「ぐっ……」

持って行けとばかりに振るった劉焯の拳打は、またも方天画戟によって防がれるが、衝撃まで殺し切れず呂布に地を滑らせた。

その事実には呂布は薄らとだけ、驚嘆の色を瞳に乗せた。

「……お前、デタラメ」

「あんたに言われたくない」

ぼそり、と呟く呂布の言葉に劉焯は反論した。

「私達からすれば、二人共デタラメなのだがな」

「そうなのだ」

「仲間から言われると反論し辛いから、そこ黙っててね」

さりげなくツッコんでくる趙雲と張飛の声を聞きつつ、釘を刺しておく。そして、気付いた。

「愛紗？」

「」

「朔の紙一重の回避を見た瞬間、固まっちゃったのだ」

「あー……………そう」

張飛の説明を聞き、何とも言えなくなった。

劉焯自身もあれはギリギリだったと思っていた。外から見れば、より衝撃的光景だった事だろう。

「呂布、ちょっと待っててね」

「？（……………コク）」

試しに言ってみただが、どうやら待ってくれるらしい。

案外話が解る人だ、と思いながら、劉焯は膝について固まった関羽に近付いた。

目の前で手を振ってみるが、反応は無い。抱き着いたら復活するのでは？、と趙雲に言われるが、即座に却下した。

うん、と一つ頷き、劉焯は双剣を関羽の膝に置く。すると、

「……………朔、待ちなさい」

関羽に腕を掴まれた。

「何さ？」

「私も戦う。だから、青龍刀を返しなさい」

「やだ。もうちょい借りる」

「朔っ!？」

「ま、見ててよ。それまで僕の双剣貸すから」

関羽の手を放し、劉焯は不敵に笑う。その笑みに、いつもとは違う何かを滲ませて。

「今は朔を信じろ。我らが割って入っても、単独戦闘が得意なあ奴の邪魔になるだけだ」

「星……」

趙雲は関羽の肩に手を置き窘めながら、劉焯の背を見つめた。

「それに、朔にしては珍しいものが見れるやもしれん」

「珍しい……もの？」

「何なのだ？ それ」

「何、見てれば解るだろう」

口許に手を当て、趙雲はくすりと喉で笑った。

「……………なんかがごちゃごちゃ言ってるし」

趙雲が何やら口にした言葉が引つ掛かるが、今は捨て置いた。

劉焯はそのまま呂布と向き合う。

「仕切り直しって事でいいかな？」

「……………コク」

「んじゃ、開始だ」

またも言い終えるや否や、劉焯の姿は消える。

呂布も動じずに方天画戟を構え、眼だけをゆっくりと動かし、小鬼の姿を探す。

「……………そこ」

そして、驚異的な動態視力を以て劉焯の姿を捉え、方天画戟で一閃した。

刃は空を駆け、地を刳<sup>えく</sup>る。

外した。

そう思った瞬間、

「やっぱり視えてるんだ」



小鬼の声が耳に届き、即座に彼がいるであろう背後を薙いだ。

またも空振る。

呂布は空を斬ってばかりいる自分に違和感を覚えた。

いつもなら躲されないうまでも、受け止められる。その鋼同士がぶつかって伝わる感触すらない。

(……………なんで当たらない?)

焦りや戸惑いもなく、純粹に不思議に思う。

さっきと同じように、ちゃんと小鬼の姿は捉えていた。防がれはしたかもしれないが、それでも避けられる可能性は低かった筈だった。

やっぱり視えてるんだ

小鬼が呟いた言葉に、呂布は得心がいった。

小鬼に試された。いや、正確には確認か。

初撃が完璧に防がれた。だから、小鬼は初撃と同じ速度から呂布の眼に捉えられる速さを確かめているのだろう。

現に、二撃目以降の反応と反撃の速さは徐々に上がっている。自身の攻撃が掠りもしなかったのが証拠。

呂布は方天画戟を肩に担ぐようにして構える。

「……………ちよつとだけ本気出す」

途端、呂布は駆け出し、方天画戟を振り下ろして地を砕いた。

「……………っ」

地面が割れる轟音。巻き上がった土砂の降る音とが混ざる中、紛れるように小さく舌打ちが聞こえた。

「……………見つけた」

呂布は即座に逆手に持ち替え、方天画戟の石突を真上に突き上げる。

ガンッ、という音に、伝ってくる手応え。

空中で石突での一撃を受け止めた劉焰は、驚きと呆れが混じった顔をしていた。

「……………飛べ」

空中で身動きが取れない劉焰。そこに呂布は方天画戟をくるりと縦に回転させ、上段からの一撃を叩き込んだ。

「……………つがあ！？」

青龍偃月刀で防いでも、それは直撃を避けたにすぎない。受け止める事が出来ない空中では、劉焰の小さい体は軽々と飛ばされるしか

なかった。

「またもゴロゴロと地を転がされ、やっと止まった頃には劉焯は体が軋きむのを感じた。」

（まったく面倒な勝負だよ、本当に）

内心で愚痴りながら、劉焯は立ち上がる。

呂布が構えたまま油断なくこちらを見ているのに、少しは油断と间隙とか見せてくれてもいいんじゃない？と思わないでもない。

（今も僕の進行方向を読んでたし、急に止まらない加速直後を狙ったの斬撃で回避方向を限定された。」

「……………愛紗や星でも難しいのをやってのけますか、この人は」

「はあ、と溜息を零しつつ、劉焯は数瞬だけ眼を閉じた。」

「その数瞬で記憶を掘り起こし、思い出したものを体に馴染ませる。」

「眼を開き、青龍偃月刀を構える。」

「だが、泣き言も言ってもらえん。もう少し真剣になるとしよう」

「普段使わない彼らしからぬ口調で、小鬼はそう呟いた。」

関羽は居ても立っても居られなかった。

呂布が方天画戟を振るう度に、劉焯がその攻撃を防ぐ度に体がびくつく。

頭が勝手に想像もしたくない、最悪の状況を思い浮かべてしまうのだ。

劉焯が呂布の一撃で飛ばされた時など、心臓が止まるかと思った。

止めてほしい。

劉焯の武が自身に引けを取らないのを知っていても、そう願ってしまふ。

でも、口に出せなかった。

見ててよ、なんて軽い口調で彼は言っていたが、絶対に一騎打ちを止める気が無いのは明白だった。

意地を張っているというか、頑固というか。

変なところばかり誰かに似たり、同じだったりする。

（私を困らせたいのか？）

内心で問題見たる小鬼にばやいてしまふ。

そんな時、

「だが、泣き言も言ってるねん。もう少し真剣になるとしよう」

彼らしからぬ、どこか真似たような口調でそう呟いた劉焯の構えに、  
関羽はどこか見覚えがあった。

「ほう……」

「にゃ！？ あ、愛紗！」

劉焯の構えに趙雲は面白そうに呟き、張飛は驚きながら関羽を見た。  
張飛と眼を見合わせ、やっと気付く。

今の劉焯の青龍偃月刀を構え方は、

「……………私の構え、か」

劉焯は関羽のように青龍偃月刀を構えると、普段の不敵とも飄々と  
も言える態度を消した。

ただただ実直に、真剣に呂布と対峙する。

「こちらばかりこうもやられるのは、性に合わん。一矢……………いや、最低でも三矢は報いらせてもらう」

語る劉焯の顔つきは、どこか関羽に通じる凛々しさが際立ち出す。

人が変わったような彼の気構えに呂布はもとより、普段の彼を知っている関羽達でさえ驚いた。

「……………お前、何者？」

「呆けたか？ 呂奉先。貴様と矛を交えているのは、この戦鬼に他ならん」

訝しむ呂布に劉焯は平然と答え、

「無駄な口問答はせぬ事だ。答えならば、この青龍刀を以て答えよう」

言外に仕合おうと告げた。

呂布も納得したのか、方天画戟を構える。それに劉焯は頷き、静かにゆっくりと息を吸い込んだ。

「行くぞ！ 我が豪撃、受けてみよ！」

「……………来い」

「でやああああー!」

劉焯は青龍偃月刀を振り上げ、氣迫を込めた斬撃を放つ。

それに呂布は眼を見張ってしまった。回避出来ると思った一撃を方天画戟で受け止める。

苛烈な一撃は呂布をまたも地を滑らせた。

呂布は思わず微かな痺れを感じる自身の手と劉焯の姿を交互に見てしまう。

その瞳が、初めてありありと動揺の色に染まっていた。

「よくぞ止めた」

斬撃を放った態勢から劉焯はゆっくりと構え直す。

「だが、何を感っている？ それでは、せっかく武の煌めきが曇ってしまうぞ」

「……………今の」

「ん？」

「関羽の動きだった」

呂布は動揺の原因を口にした。

関羽の構えから始まり、足捌き、重心の取り方、胴使い、振り下ろす際の腕の使い方。

どれも先の関羽のものと酷似していた。

違つとすれば、膂力。小さな体から信じられないくらいの剛力が込められていた。

それに驚いたのは何も呂布だけではなかった。関羽達も同様に、あの意味彼女以上に驚いていた。

「愛紗よ」

「な、なんだ？」

「いつの間に朔に槍術を教授したのだ？」

「……………私は教えたという程の事はしていない」

「でも、愛紗の戦い方にそっくりなのだ！」

「2、3度だけ、手遊び程度に朔に教えはしたが」

だが、あそこまで様になつてはいなかつた筈だった。

劉焯が槍を振りたと言つてきたので、関羽は仕方ないと自分が監督するのを条件に青龍偃月刀を貸した。

最初、青龍偃月刀を持った劉焯はあゝ、と感嘆して唸り、何故か眼を丸くして首を傾げた。

次に構えてみると、僅かにだがおかしな点があつたので修正したの



と振り方を指南したので、合わせて2、3度。

その時は慣れていないが故のぎこちなさが感じられた。しかし、今はそれすらなく、関羽の鏡写しのように槍を振るってみせた。

密かに鍛練でもしていたのか、それとも別に理由があるのかは解らないが、何にしても劉焯が関雲長の槍捌きをしたのは事実。

「……ふふ」

その事実が口許を緩ませる。

何故か解らないが、劉焯が自分の槍捌きを見せてくれたのが嬉しかった。

それに彼がわざわざ槍を手に取った理由も解った。

「存分にやりなさい」

とても簡潔に穏やかな声音で呟くと、返事するかのように劉焯は駆け出した。

「はあああああ！」

咆哮を上げ、振り下ろされた青龍偃月刀は方天画戟と激突し、熾烈な金属音を響かせる。

刃がぶつかり弾き合う度にその音は大きくなり、刃の担い手たる両者の思考を極単純なものへと変えていく。

一撃を、ただ一撃を眼前の敵に叩き込む。

今はそれだけを考える。

いや、考えるのさえ余計だ。

思考になど意識を回すな。

本能に従え。

生きようとする本能に。

敵を打ち倒そうとする本能に。

果たせ。

やれ。

「ああああああ！」

咆哮に覇気が籠り、大気を震わせる。

震える大気を掻き交せるように、劉焯は呂布と打ち合う。

幾度も槍と戟は交差し、戦鬼と戦場の鬼は鏝迫り合うようにして互いの視線をも交差させた。

互いの双眸は、生へ通じる勝利への渴望の色に染まっている。

「らあああ！」

「……………っ！」

鏢ぜり合いから照らし合わせたかのよう繰り出した互いの斬撃を弾き合い、劉焯と呂布は距離を取った。

いつの間にか二人の息は弾み、肩は小さくだが上下していた。

「然<sup>さ</sup>しもの飛將軍も疲れて来たようだな」

「……………お互い様」

「違うない」

軽口も叩くも言葉の端に疲労が滲んでしまっている。

ここまでの疲労は久々だ、と劉焯は内心で独り言ちる。

幾ら鍛えていても体力には限りがある。鬼の自分は大人の数倍以上の体力はあるとは自負するが、相手が悪い。

呂布は、師の語る天然物の鬼。

同じ鬼とはいえ、こちらは子供であちらは大人。良くて同等、最悪では最大値で負けている可能性が高い。

持久戦を選ぶにはリスクが高い。

(だから、選ばない)

すう、と深呼吸を繰り返し、呼吸を整える。

「次の一撃、耐えられるか？」

「恋は負けない。返す刀で小鬼を討つ」

「ほう、やってみるがいい」

青龍偃月刀と方天画戟を互いに構え、一瞬にして集中力を最大まで高める。

そして、噴き出すかの如く放たれる覇気がチリチリと肌を焼く錯覚を覚えさせる。

「我が槍は無双！ 我が魂は無敵！ 我が魂魄を籠めた一撃、受けてみよ！！」

敵を威圧し、己を鼓舞するように吠える戦鬼は言通り、魂魄を籠めた一閃を放つ。

その一閃は、関羽が必殺の奥義

「青龍逆鱗斬！」

苛烈にして熾烈。

比類無き斬撃は空を断ちながら、呂布へと飛ぶ。

対抗しようとしたか、呂布は今まで以上の凄まじい速さで方天画戟を振る。

豪撃と豪撃は喰らい合うように衝突し、凄絶な音を戦場に響かせた。

ザンッ

地に突き刺さる音。

それは一時の勝者と敗者が決まった知らせとなった。

「これで、先ずは一矢。僕の一勝だ」

戦鬼は青龍偃月刀を、無手となった戦場の鬼の首に突き付け言った。

呂布の得物、方天画戟は彼女の後方20m程の所で地に突き立っていた。

今や、呂布の命は劉焯の掌の上。生殺与奪の権利は彼に握られた。

死を覚悟したか、呂布は静かに眼を閉じる。

そして、最期の時を待つ。

「へえ、辞世の句……なんてのは詠まない主義なんだ。ま、詠ませる気もないけど」

勝者の戦鬼は淡々と言う。彼にとって“死”など刹那的なものであって、句を遺す意味は理解しがたい分類に入る。

だからといって軽んじている訳でもなく、彼の言葉には別の意味が含まれていた。

「ほら、早く得物取ってきなよ」

呂布はその信じがたい言葉に閉じていた眼を開き、劉焯を見た。

そんな彼女の驚きの視線を受けながら、劉焯は関羽達をちらと一瞥し、

「言ったでしょ？ 三矢は報いらせてもらうって。今ので一矢……残り二つもやらせてもらおうよ」

再戦を告げた。

三矢。

その内、一つは終わり、残りは二つ。

自然、呂布の眼は劉焔の後ろにいる関羽達の方を向いた。

「……関羽達の為？」

「違うかな。自分の為だから、ただの自己満足。それが、結果的に仲間の名誉を挽回するのに繋がるだけ」

あと、と劉焔は続け、

「仲間がいいようにあしらわれて、その上、殺されかけていたんだ。いい気分じゃないのは確かだね」

飄々とした態度の中に苛立ちを見せた。

仲間などいなかった彼にとって、こんな感情があるものだとは思わなかった。

いつだって独りで戦ってきた。そんな自分を独りじゃなくしてくれた仲間は強く、簡単に死ぬような人達ではなかった。

だからか、どこか安心してたのかもしれない。

自分の前からいなくなったりはしないと。

けれど、そんなものは有り得ない。死なない者などいないと知っていたのに。

呂布が関羽に方天画戟を振り下ろそうとしていたのを見た時、劉焰は衝撃を受けた。

そして、心に湧いたのは苛立ち。

知らず知らず、甘い考えをしまっていた自分に。

大切な人を奪おうとする呂布に。

どうしようもない程に苛立った。

「僕は、この“いま現在”を失くしたくない。  
奪おうとするなら、容赦なく喰い殺して守ってみせる」

「っ」

戦鬼の殺気に辺りの空気の温度が根刮ねしぎ奪われ、零下にも近い冷たさを生み出す。

無論、それはただの錯覚でしかない。錯覚であるが、拒絶も無視も赦さないその感覚は、身体の内まで確実に侵していく。

だが、呂布は敢えて戦鬼の殺気を受け止めた。否、受け入れた。

共感できる。

彼女が慕う主と家族の為に血で手を汚す覚悟をしている自分は、こ



の目の前の戦鬼と似ている。どころか、同じとすら思っ。

「……ふふ」

「真面目に答えたのに笑いますか」

「お前、面白い」

「いや、だから真面目にしてるんだってば」

呂布の面白い発言に半眼で返す劉焯。そんな彼を尻目に、呂布は飛ばされた方天画戟を拾った。

手にかかる重さにどこか安堵しながら、呂布は劉焯と向き合った。

「小鬼」

「何さ？」

「小鬼も負けられない。でも、恋も負けられない。だから」

「恋、本気出す」

ゾクリ、と冷たいものが背中を流れる。

それが冷や汗だと気付くのに、数瞬遅れた。

「……………やっぱり面倒だなあ」

小さくぼやき、劉焯は顔を引き攣らせた。

何合も刃を交え、彼女の武の強大さは解ったつもりだった。

底を見付けたと思えば、それは仮初めの底。二重底もいいところだ。

二番目の底は谷を覗き込んでいる気分になった。

異様に暗く、異状に深い。

認めよう。

今度こそ、本当に認めよう。

あれは鬼だ。

人の姿をした鬼だ。

自分と同じ、人の皮を被った鬼だ。

「……………余裕は皆無です、ってね」

またぼやきながら関羽の前まで来ると、

「愛紗ー、青龍刀返すね」

「あ、ああ」

劉焯は青龍偃月刀と双剣を交換する。

その際に見た関羽の顔は驚きと警戒の感情が見事に混ざっていた。

それは張飛と趙雲も一緒に、彼女らも関羽と同じ顔をして呂布から眼を離せない。

こつちも余裕無しね、と思いつながら劉焯は双剣を鞘から引き抜いた。

「そんじゃ、やるつか。斯かくもメンドい殺し合いをさ」

「……………今の言い方」

「何さ？」

「旭みたいだった」

「そりゃそうだよ、これが僕ら鬼のやり方だから」

言いながら劉焯は双剣を構え、

「それで、これもそう」

一瞬で干将を呂布へ投擲した。

矢の如く放たれた黒刃は方天画戟に弾かれ、呂布の顔には影がかかった。

見上げれば、計算していたかのように弾かれた干将を掴み、莫耶と共に振り下ろそうとする劉焯の姿がある。

重力を利用しての一撃。それ単体の重さは中々だが、

「ふっ！」

呂布の豪撃には届かない。

また弾き飛ばされるが、劉焯は足から着地するとすぐに呂布へと切り掛かる。

喉元へと突き出した莫耶を呂布は首を反らして避け、逆に膝を打ち込んだ。

それを劉焯は足場にするようにして跳び上がり、呂布の背後を取る。双剣を同時に横薙ぎに振るい、呂布の固い防御ごと叩き込んだ。

「それじゃ、まだ恋には届かない」

手に伝わってくる硬い鋼の感触に威力を完全に受けきられた事を知り、劉焯は思わず苦笑う。

「少しは手加減してほしいね」

「無理。恋も負けたくない」

「同感……だっ！」

黒と白の閃き。劉焯は一瞬にして4つの斬撃を放つ。

呂布は首を狙う一つ目の黒閃を首を反らして躲し、逆袈裟の二つ目の白閃を方天画戟で流す。一回転しての横薙ぎの三つ目の黒閃を後ろに下がって避け、追いつめる最後の白閃を弾き返した。

「恋の一撃、受けてみる」

抑揚の乏しい声で言葉少なに呂布は言う。

言葉で足りない分は、方天画戟が物語る。

放たれた神速の豪撃。双剣を交差して受け止めた劉焯の口から苦悶の呻きが零れた。

「ぐっ……がああ……」

重い。重過ぎる。

斬撃で潰される錯覚を味合わされ、耐える劉焯の膝は地に着いた。

そこまでなら、常識の範囲だったろう。

彼を中心にして地面を陥没さえさせてなければ。

ギギギギ、と鏑迫り合う音がやけに耳障りに聞こえる。

劉焯が歯を食いしばり押し返そうとすれば、更に圧力が増した。

このまま押し切られれば、待つのは死だ。そんなのは絶対に御免被る。

「すー……はあー……すー……はあー……」

斬撃を受け止める双剣に意識を集中させながら、深呼吸をして更に高める。

そして、

「重過ぎでしょうが!!--」

最高まで高まった瞬間、文句を叫びながら押し返した。

「まだ恋の番」

「そんな重い何回もくらってらんないね!!--」

押し返した直後に呂布の攻撃が再び襲ってくる。何とか受け流すが、それでも手を痺れさせる衝撃までは流し切れなかった。

「いったいなあ!!-- もう!!--」

「反撃、させない」

呂布の次々と迫りくる斬撃はどれも劉焯の命を脅かす。

劉焯も紙一重で避けるものの、黒の戦装束を掠め、その下にある肌に朱い線を引いていった。

「くそ！」

空気に触れヒリヒリとする傷口の感覚を頭の中から消し、足に力を込めて加速する。

呂布を通り抜けて距離を取り、ヒット&ウェイで回避と攻撃を繰り返す。

幾度も刃を防がれ、そのうちに確信した。

「呂布、あんた、旭と戦った事あるな？」

「（……………コク）」

「やっぱりか」

「その走り方、縮地」

名前まで教えるなよ、と劉焯は内心で毒づく。

師から教わった歩法、それが縮地。

劉焯と周倉が神速を以て駆け抜ける事を可能とさせる歩法であり、練度次第では国一つの端から端まで一日とかからない。

それを近距離で用いれば、正しく消えたようにしか見えないだろう。

そして、それを用いる者しか知らない機微がある。その機微を見る事が出来れば、視認出来るかは別にしても出足は読める。

周倉と手合わせしていた呂布は出足の機微を見切り、その上、動きを視認している。

（かなり分が悪いな）

神速での攪乱で虚を作らせ突こうとしたが、捉えられては意味が無い。

力勝負で引けを取る気はないが、それでは決定打に欠ける。

「　　なんで、本気出さない？」

その問いに、劉焰の足が止まった。

胸に感じた強い衝撃。続く浮遊感、そして落下。

「つつつつあ……ぐ」

余りの痛みに悲鳴もあげられず、方天画戟の柄を打ち込まれた部分を手で押さえながら劉焰は呻く。

痛みに思考を掻き乱されながら、意識を走らせて傷を確かめた。

（大……丈……夫。骨は……折れてない。でも、痺ひびは入ったかも）



痛みに歯を食いしばりながら立ち上がると、呂布はもう一度聞いてきた。

「恋は本気出してる。けど、小鬼は違う」

「……………どうしてそう思うのさ？」

「鬼の象徴が無い」

「そこまで……………聞いてるんだ」

「小鬼の“角”は、どこ？」

「……………っ」

呂布の問いに答えられず、劉焰は俯むいて右腕を強く握り締めた。

使いたくない。

使えば、きつとまた畏れられる。

きつと疎まれる。

やっと出来た仲間も。

やっと出来た家族も。

（ またいなくなる ）

「劉焰翔刃！！」

いきなりの一喝に劉焰の体は震えた。

声の主である趙雲は眉根を吊り上げ、尚叫ぶ。

「何を揺らいでいる！！ お主の覚悟とはその程度のものだったか！？ 違うだろう！！」

疎まれようと、憎まれようと自身の名の通り、戦場を駆ける刃となり、我が主の望む道を切り開くと言ったのは誰だ！？」

それを言ったのは他でもない劉焰自身。

「何がお主を揺らがせているかは、なんとなくだが予想できる。だが、我らのお節介と人の好きを見くびるなよ？」

ふふん、とどこか気取った笑みを浮かべる趙雲。

「朔！ 鈴々がまだ勝ってないのに呂布に負けちゃダメなのだ！！」

劉焰の劣勢に我慢ならないのか、熱り立つ張飛。

そして、

「朔、私はお前の抱えているものを知らない。だが、私はこの戦い

を見届ける。最後の一瞬まで、絶対に見ていてあげるから」

だから、と関羽は続け、

「存分に暴れなさい!」

「……………っふ」

劉焯は関羽達の言葉に顔を右手で覆うようにして隠すが、笑みが抑えられない。

嬉しい。

その感情の波が劉焯の心を包み込み、揺らぎを掻き消す。

「……………呂奉先」

「……………?」

「仲間ってさ、本当に良いものだね」

「(コク)」

「やっぱり同感か。ならば、これも解るでしょ? 仲間の信頼には応えなきゃいけないって」

劉焯は顔を隠していた右手を胸元へと持って行く。

「だから、見せてやる。僕の本気をさ」

言葉と共に、劉焯は心の奥深くに嚴重にかけた封を解く。

解放された“それ”は、劉焯の右肘から肉を突き破り、血を滴らせて存在を示した。

先端は鋭利に尖り、陽光を受け水晶のように仄かに輝いて見える。

人に無く、鬼にあるべきもの。

鬼の象徴たるもの。

「これが僕の本気だ」

戦鬼は淡々と告げ、右拳を強く握り締めた。

角は存在を示すと同時に、鬼としての本来の能力を劉焯の細胞一つ一つに浸透させていく。

言葉に出来ない力の奔流。

解き放ちたいと破壊衝動が込み上げ、生き残ろうと戦闘本能が烈火の如く燃え上がる。

暴れ狂おうとする鬼の力を意志を以て統率し、劉焯は無手で構える。

「饒別だ、胸元に撃ち込むから防いでみなよ」

宣告直後、呂布は彼の言葉通りに方天画戟を構えた。

劉焯の言葉を信用した訳ではない。ただ、こうしなければ殺されると直感したが故の行動だった。

そして、それは吉と出る。

「……………つぁあ!？」

半分までは。

劉焯の拳は、呂布が盾とした方天画戟の柄を撃つ。

ここまでは先と何も変わらない。

だが、今の戦鬼の拳には異常なまでの剛力が宿っている。その力は盾を構えた敵ごと屠ろうと突き進んだ。

力の拮抗さえ許さず、方天画戟の柄は呂布の体に叩き込まれ、そのまま彼女を数瞬だけ空の人とした。

簡単に言えば、戦鬼の剛力を以て防御ごと呂布を殴り飛ばしたのだ。

背中から落下した呂布は痛みも忘れ、空を見上げている双眸を大きく見開いた。

(……………凄い)

呂布は驚嘆に心を埋め尽くされながら、周倉の言に間違いはなかったと思った。

無双を無双ではなくする戦鬼。

自分と並び立つ者。

本気の自分と存分にぶつかり合える者。

驚嘆から移り変わるように、呂布の心に歓喜の感情の波が流れる。

「……………旭の弟、凄い」

「弟じゃない。弟弟子」

立ち上がりながら呟く呂布に、劉焯は半眼で訂正した。

「で、当然まだやるんでしょ?」

「(コク)」

「そ。良かった。あと一矢分残ってるからね、ここで終わられたら困るところだった」

飄々と言いながら劉焯は無手のまま構え、呂布も同時に構えた。

「再開だ」

深く呼吸をし、戦鬼は名乗りを上げる。

「天の御遣いを守護せし戦鬼、劉焰翔刃」

「董卓軍所属第一師団師団長、呂布奉先」

対峙する二人は前に歩を進め、

「疾っ！」

「……ふっ！」

激突した。

拳と戟の衝突音が耳をつんざく。

今度は呂布が劉焰の剛力に対抗してみせた。

並の武将でも両手でも持つのがやっこの方天画戟を、呂布はいつも片手で振るっていた。

片手でダメならば、両手で。そんな単純明快な答えで対抗策として用いる。

結果、打ち負ける事は減り、劉焯に対して怒涛の攻めを敢行した。完全な戦鬼となった劉焯は剛力を以て、その凶刃を真っ向から弾きに弾く。

鬼同士の力と力のぶつかり合いが地面を陥没させ、粉塵を巻き上げ、その強大さを周りに示していく。

「……はっ！」

呼吸を短く吐き出し、呂布は方天画戟を振り下ろす。

劉焯はその斬撃を体を捻らせて回避し、同時に回し蹴りで反撃。

技後硬直の直後なら当たるかと思いきや、彼の予想は当然の如く裏切られる。

地に伏せるようにして躲され、空気を唸らせるだけに終わった。

「もらった」

言葉少なに呂布は方天画戟で劉焯を薙ぐ。

刃は彼の体を捉え、

残



空を切るように通り過ぎる。

続け、彼の気配のする方向へとほぼ反射的に振るう。

念

また空を切るように通り過ぎた。

「賞っ！」

裏をかくように背後から戦鬼の声が出た。

「やらせない」

即座に迫りくるであろう拳打に合わせ斬撃を放った瞬間、呂布は目が合った。

天を地になっているかのように上下逆さまの戦鬼と。

「………っつー!？」

驚く間もなく肩が燃えるように熱くなり、痛みが走った。

呂布は静かに肩に手を当てると、ぬめつく血の感触に斬られたのだと自覚した。

見れば、劉焔の鬼兜の角を模した刃には自身の血が滴っていた。

「伊達や酔狂でこんな頭してないよ」

淡々と言い放つ劉焯は、自身の兜を指差す。

呂布は斬られた肩の具合を確かめ、問題ないと判断した瞬間に切り掛かった。

自身の体など容易く両断するだろう一閃を劉焯はバックステップで避け、続く首目掛けて飛んでくる突きを体を反らして避けた。

突きを避けられた直後、呂布は全力で戟を引き戻す。

方天画戟には突く、斬る、引つ掛けるといった用途が可能な武器だ。

このまま劉焯の首に戟の刃が食い込めば、一息で彼の首は宙に舞う。

突き出す速度が神速ならば、引き戻す速度も神速。しかも迫る刃は劉焯の死角にある。避けるなど不可能だと彼女は確信する。

そして、ガイイインという音が響き、方天画戟はあらぬ方向へと舞い上がった。

「これで、終わりにしよう」

方天画戟を打ち上げた拳を振り上げたまま、戦鬼は終幕を告げる。

そして、戦鬼の震脚が地を割って粉塵を巻き上げ、掌打が鳩尾に突

き刺さった。

諸手を上げさせられた状態の呂布に、それを防ぐ術は無く、全身を走る激痛が思考を白く塗り潰す。

劉焯は追い討つように足払いをかけ、呂布に回避という選択肢を無くさせる。

「じゃあね、飛將軍、呂奉先」

戦鬼の別れの言葉を聞きながら、呂布の視界は暗い闇に飲み込まれていった。

視界を潰す粉塵が巻き上がる中心点。

そこで、劉焯は横たわり動かない呂布を見下ろしていた。

初めて会った天然物の鬼。

三国無双やら飛將軍と持て囃はやされようと、今の呂布は眠りに落ちた

可愛らしい女の子にしか見えなかった。

「恋殿ー！ 恋殿ー！」

「来たか」

必死に呂布のであろう真名を叫びながら、帽子を被った小さい女の子が駆け寄ってきた。

女の子 陳宮は静かに眼を閉じたまま動かない呂布を見た瞬間、膝から崩れ落ち、涙が頬を伝った。

「そんな……恋殿。恋殿が……負けるなんて嘘なのです……」

ゆっくりと呂布へと伸ばす陳宮の手は、小さく震えている。彼女の頬に触れば、伝わってくる温かさが陳宮の目の前の現実を否定してくれる気がした。

「さ、さあ、恋殿。立って……立ってください。一緒に逃げるのです。今が好機なのですよ？」

お願いだから……眼を……眼を開けてください！ 恋殿ー！ー  
「！ー」

涙は、もう止めようがなかった。

いつも側にいてくれた人が、今いなくなろうとしている。

ここが戦場のど真ん中だろうと、その悲しみを押し殺すには陳宮はまだ幼過ぎた。

「あー……そのさ」

「……ヒック。……誰なのですか、お前は」

「劉焯翔刃つて小鬼だよ」

「！ お前が旭殿の弟……」

「違うんだけどなあ……まあ、今は置いてこ」

どんな説明したんだ、と内心で周倉を小憎らしく思いながら、劉焯は気を取り直す。

「言いたい事は二つ。逃げるなら早く逃げてほしいんだけどさ」

「もう無理です……恋殿がいなくなったのでは逃げられないのです」

「あともう一つ。勝手に呂布を殺さないでほしいんだけどさ」

「……え？」

「だから、呂布は死んでないってば。あんたの早とちり。確かめてみなよ」

劉焯に言われるまま、陳宮は呂布の左胸に耳を押し当てる。

そして、聞こえてきたのは命の脈動。しっかりと心臓の鼓動が呂布が生きていると教えてくれた。

「……っ。良かった……良かったのです」

「喜んでるとこ悪いけど、早く逃げなよ。目眩ましが消える」

安堵に胸を撫で下ろす陳宮を、劉焰は辺りを見回しながら急がせる。

「一人で抱えられる?」

「無問題なのです。それに自軍がすぐ近くにいますから、すぐに逃げれるのです」

「そう。なら、いいや」

「……………」

「……………何さ?」

「本当に逃げていいのですか?」

陳宮のその問いに、劉焰は半眼になる。

「もしかして、僕が後ろから討つなんて真似するとも思ってるのさ? 必要があればするけど、今はしない。

こっちだってボロボロだし、早く横になりたいって気持ちを優先したいんだよね」

「でも、天下の呂布に勝ったという名声が……………」

「そんなのいらない。誰とも知らない人に誉められても、ぴんと来ないし。」

「だったら、主上に誉められ方が何倍も嬉しいよ」

劉焯は陳宮達に後ろ手に振りながら背を向けて歩き出した。

「旭殿の弟だけあって、変わった奴なのです」

去っていく小鬼の姿をしばらく見送りながら、陳宮はぼつりと呟いた。

劉焯が粉塵の幕を抜けると、すぐに関羽達の姿があった。

粉塵が劉備軍と董卓軍の両軍を混乱させたらしく、関羽達は兵士達が潰走かいそうしないよう纏めていた。

やり過ぎたかな、となどと思いつながら歩いていくと、

「朔!!」

劉焯の姿を認めた関羽が駆け寄り、そのまま彼を抱きしめた。

「えーっと、ただいま?」

「ああ、お帰り!」

「っ」

感極まったか、関羽は抱きしめる力を更に強くした。しかし、劉焯の体は切り傷、打撲、骨には輝ひびとボロボロである。

要するに、めっちゃくちゃ痛い。

関羽が嬉しがっている様を見ては、悲鳴をあげられる筈もない。劉焯の隠しているつもりのお人よし加減が、ここにきて響いた。

(……………死ぬる)

本当にそう思った。

「ほう、やはり生きていたか」

「その軽く引つ掛かる言い方は何さ、星」

「鬼になった朔なら負けないって、星が一番言い張ってたのだ」

「り、鈴々！」

「へえ」

いつも通りのやり取りに、劉焯はやっと落ち着いてきた心地がした。

同時に視界がぼやけ、体の自由が利かなくなる。

(あ……………限界か)

抱きしめてくれている関羽に身を預けるようにして、劉焯は崩れ落



ちた。

「さ、朔!？」

「ごめん……………限界。あと、よろしく……………」

「解った。よく休みなさい」

「うん……………そだ、愛紗」

「なんだ？」

「僕の事……………気持ち悪いと思う?」

その問いは、暗に角の事を言っていた。

人には有り得ないものが、この小さな体には眠っている。

「……………そんな事はない。お前は私が他の者に自慢したいくらいの子だよ」

関羽は言外に、そんなものは関係ないと優しく答えた。

その答えに満足したのか、劉焯はゆっくり目を閉じて眠りに落ちた。

(本当に、よく頑張ったね)

小さく寝息を立てて眠る劉焯を抱き上げながら、関羽は心中で誉めた。

眠る劉焯は聞こえる筈のない聲に照ねるように、くすぐったそうに笑っていた。

鬼と連合10      虎牢関攻略戦      戦鬼 対 戦場の鬼（後書き）

長い……長かった……朔と恋のバトル。

内容は賛否両論あると思いますが、とりあえず疲れました。

この流れに持っていきたいと決めたら、展開がもう長くなること長くなること。

読み辛くありませんでしたか？

読み疲れてはいませんか？

ちなみに私は後者でしたが………修正に30分以上かけてるので  
眼精疲労と戦ってます。

朔の鬼の角ですが、知っている人はある小説のまんまじゃね？と思  
った方がいらつしやると思います。というよりも、『戦鬼』の呼称  
はこれからとってますので。

上記の事を思い、これはどうだろう？と思った方は、1話の前書に  
書いた通りなのでご了承ください。

連合編は次の話で終了予定です。ちょうど20話なので、ちょうど  
いいのかなと思います。遅筆のくせに。

感想、品評、お待ちしてます。

鬼と連合11      戦鬼と悪逆とされた少女の邂逅（前書き）

お、お久しぶりです……

投稿が遅れに遅れ、お待たせしてすいませんでした。

そして前回、連合編は今回で終わると言いながら、終わりませんでした。

「……………痛い」

目が覚めた劉焯はぼつりと呟いた。

全身の傷も痛いのは勿論、いつの間にか乗せられている荷車の振動が傷口を小刻みに刺激してくるのだ。

「動けないからって荷物扱いは酷くな

いつ!？」

立ち上がるうとするが、全身に痛みと痺れが走り、腰がストンと落ちてまた座ってしまった。

「“角”、使っちゃったもんなあ」

劉焯は独り言ちながら、体に喝をいれて今度こそ立ち上がる。

“角”は戦鬼本来の比類無き剛力を齎す。だが、人が持ち得ぬ剛力は反動が酷く、蝕むように劉焯の体を痛めつけてもいたのだ。

結果、外は呂布に、内は“角”にボロボロにされている。

「久々に使うから最低限にしたつもりだったけど、失敗だなあ」

ビキビキと体が痛みに鳴くが、劉焯は我慢して先頭にいるだろう主の下に向かった。

「着いたなあ」

「着いちゃったねえ」

不思議そうに一刀と劉備は呟いた。

少し遠くに見える城は、洛陽。

劉備達は目的地に着きながら、自分達の状況に戸惑いを覚えていた。

虎牢関を攻略した連合軍は数日の休止を終え、最終目的である洛陽を目指した。

シ水関、虎牢関と2つの難所を難無く攻略したと考えている連合軍  
正確には袁紹は、他の陣営まで聞こえてきたそうな程高笑  
いをあげていたそうだ。

そんな袁紹は、またも劉備軍に命令を下す。

先行し、洛陽の状況を調べよ。

すっかり小間使い扱いされる劉備軍だが、そこは弱小勢力の悲哀。従わない訳にはいかなかった。

余談だが、

「いつか復讐してやらないといけませんね」

「その時は私が策を考えます」

黒い笑みを浮かべる関雲長と鳳士元。二人が放つ異様な雰囲気、皆がズザツと音を発てて後ろに下がった。

そんな反応をした彼らは悪くない。決して悪くない！

……閑話休題。

劉備達の目の前の洛陽は、董卓軍の本拠地。ここに配置された兵数は、噂では現在の連合軍の兵数にも引けを取らないらしい。

それ程の数の兵がいるならば、何度かは董卓軍の襲撃があるものと誰もが思っていた。

だが、虎牢関から洛陽までの道中、董卓軍の襲撃どころか影すら何処にも無かった。

そして、警戒を続けたまま行軍し、何事も無いまま、あれよあれよと着いてしまった。

「ここ、本当に洛陽なんだよな？」

「はい。正真正銘、洛陽……なんですけど」

この世界の住人ではない一刀が質問したのはおかしくない。だが、孔明の答えはどこか自信のないものだった。

洛陽は天子がいる都だ。

都ならば、多くの人が行き交い、交流が盛んであり、特に発展しているのだろう。

そして、ここには重税を課して民を苦しめる董卓がいるのだ。

きっと人々は、助けを求める声をあげている筈だ。

そう思っていた。

「動き無し。薫風くんぷうを受け止めて清々しくそびえ立つ城。詩が作れそうな程ですな」

とどのつまり、普段と変わり無し。

城の様子を偵察してきた趙雲の報告によって、檄文と現実の状況に差異が生まれた。

孔明と鳳統は、この差異にやはりと確信を持った。



この戦争は、帝位争いから始まる官軍の醜い嫉妬と欲の連鎖が続いている証拠なのだ。

朝廷は、もはや腐敗している。

天子　　いや、もはや帝の存在すら、名ばかりの価値に落ちただろう。

そして、目の前の洛陽も引きずられるように、その重要性は下落した。

そうしてしまったのは、皮肉にもこの連合の決起を持ち掛けた袁紹。そして、裏で彼女の糸を引いているであろう袁術だ。

皇帝が居ても洛陽が奪われた。

皇帝が居なくとも連合は決起した。

皇帝が命を下さなくとも連合は董卓を討った。

朝廷  
頭が命令を出さず<sup>官軍</sup>に手足が好き勝手に動いては、物事の統一はならない。

己の野心が表立った瞬間に、袁紹達は痛い目に遭う結果となるのが既に決まっていたという事になる。

(朔くんなら、莫迦みたと言って呆れそう)

鳳統はふと未だ眠っている小鬼を思う。

劉焯は主二人の不安からの願いを不承不承ながら聞き入れた。

鳳統は劉焯が呆れたふりをしながら関羽達の援護に行っても、心配は少ししかしていなかった。

彼の事だ、いつもみたいに事もなげに飄々と帰ってくると信じていたから。

そして、彼は帰ってきた。

ボロボロになって。

関羽に抱かれた劉焯は動かない。黒の戦装束の切れ目からは血が流れているのが見えた。

息が止まりそうになった。目の前が真っ暗になって倒れそうになったところを、劉備に支えられた。

関羽から劉焯は疲れて眠っているだけだと言われた時、鳳統は安堵の余り泣きそうになった。

それは一刀も同じだったのか、関羽から劉焯を抱き受けた時の彼の表情は何とも言えなかった。

凄く優しく、とても愛おしそうに抱きしめていただけに、主の心配は相当なものだったらしい。

関羽達から事の顛末てんまつを聞いた面々は言葉を失う。

一刀など、抱き上げている劉焯を落としかけた。その後、彼の無茶に片手で頭を抱えた。

しかし、鳳統は彼の口許が微かに緩んでいたのを見た。

劉焯が仲間の為に怒りを露わにしたのが嬉しかったのだらうと察しをつける。

いつも飄々淡々としてる彼はそんな姿を滅多に見せない。

戦鬼という役割が私事に混じり過ぎているのが原因かもしれないと、一刀は先生役の鳳統に相談を過去に持ち掛けていた。

その時は何も解決策は浮かばなかったが、心配はいらないのかもしれない。

劉焯には笑っていてほしい。

「……………朔くんの笑顔、可愛いし」

「雛里の方が可愛いと思うんだけどさ？」

劉焯が一刀達の下に着くと、主二人が呆けていた。

半眼になった劉焯は思い切り肩を竦める。

皆、洛陽を見ており、誰も劉焯が来た事に気付いていない。なんか話しかけ辛かった。

そんなところに、

「……………朔くん、可愛いし」

などと呟く獲物を発見。丁度いいと劉焯は後ろから鳳統に抱き着いた。

「雛里の方が可愛いと思うんだけどさ？」

呟きに返すように答える劉焯。すると、鳳統がギギギッとゆっくりとこちらを見る。

「……………朔くん？」

「そだよ」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………あはー」

「……………あはー？」

「……………っ！？」

「あーら」

鳳統は劉焯を認識した瞬間、顔を瞬く間に紅く染め上げた。

言うなれば、瞬間沸騰。

見事な早業だった。

「さ、朔！？」

「あ、おはよう。もしくは、こんにちは」

劉焯の登場に一刀達は驚くが、当の本人は手を振って呑気に挨拶した。

「朔、体はもういいのか？」

「まだちょっと辛いかな。って事でこのまま話に参加します」

「っ！？ ……っ！？」

「朔くん、そのままだと雛里ちゃんが恥ずかしさ限界突破しちゃうから。せめて、イジるのは後にしてほしいな」

「でも朱里、体が辛いのは本当」

「……………頑張って、雛里ちゃん」

「しゅ、朱里ちゃん!?!」

救いの手をあつさりと返した親友に、鳳統は啞然とする。

そのやり取りの間にも、劉焯の温かさが服越しに伝わってくる。心臓の鼓動はどんどん速くなり、紅い顔は更に紅くなる。

「……………雛里って、良い匂いするね」

そして、劉焯に耳元で

無自覚に

甘く囁かれた。

「……………きゅっ」

「ありゃ」

それがとどめになり、目を回して鳳統は倒れかける。その為に抱き着いていた劉焯が逆に彼女を支える形になった。

「主上、雛里が」

「あ……………そのまま支えてあげな」

「はい」

助けるのではなく現状維持を指示する一刀に、素直に返事する劉焯。

この親子、中々に質たちが悪い。

「で、どうしてこんなところで呆けてんのさ？」

情報不足の劉焯が問うと、孔明は簡潔に説明してくれた。

話を受けた劉焯はあからさまに面倒そうな顔をする。

「莫迦みたいだね」

鳳統の予想通り、劉焯は肩を竦めて呆れた。

あの“自称”姉から聞かされた通りの内容に、劉焯としては嘘でし  
たと裏切られたかった気分だ。まあ、彼女が嘘をつくとは思わな  
い  
が。

（ま、やる事と変わらないか）

半眼になりつつ、また洛陽に眼を向けると張飛の声がした。

「お兄ちゃん、鈴々も斥候せいきうに出ても良いー？」

「鈴々が直接？ またどうして？」

「んとなー、状況を自分の目で確かめたいのだ」

「あ、それじゃ僕も」

「朔まで……」

張飛が言い出すと、劉焔もそれに便乗する。一刀はさすがにそれに二つ返事は出来なかった。

「鈴々が参加したい理由は解った。で、朔は？」

「野暮用？」

「俺に聞くな。朔はまだ体が辛いんだろ？ だったら、ダメ」

「んじゃ、鈴々と同じで」

「朔と鈴々が揃うとなんか不安ですな……………」

「星に同感…………という事で、ダメだ」

この赤毛チビコンビが揃うと、いきなり突撃しそうで怖い。

斥候じゃなく奇襲になるんじゃないか、と一刀は酷く心配する。

「行くにしたって、朔ちゃんと鈴々ちゃんだけじゃ危ないよ？」

劉備が屈んで劉焔の目線に合わせて、別方向から説得に入る。

言い方が言い方だけに、一刀は初めてお使いに行く弟妹とその姉の構図に見えた。

まあ、その弟妹ならば並の賊くらい一蹴するだろうが。

「ん…………なら」



危ないからダメだと言われた劉焰は、

「愛紗、一緒に行こ？」

保護者を連れてこようとした。

「え、私!？」

名指して呼ばれた関羽は戸惑うが、劉焰の期待に満ちた眼差しに伴い、おつかなどと思ってしまう。

「莫迦者、将が三人も連れ立って行かれては軍を動かせん」

「はっ……!？　そ、そうだぞ朔。今回は我慢なさい」

「……………愛紗ちゃん、陥落しかけてたね」

「……………愛紗さん、朔くんへの厳しさと甘さの振れ幅が大きいですから」

諫めるような趙雲の言に、我を取り戻した関羽はどもりながらも窺<sup>たしな</sup>める。

その横で劉備と孔明が半眼で見っていたのを、関羽は気づかなかった。

「でも、主上がこの前保護者がいれば大抵の事は許されるって」

「状況が違うだろ、状況が」

はあ……、と一刀は溜息を零し、

「本当は、何の為に行きたいんだ？」

「本当は、って何がさ？」

「質問を質問で返さない。そのままの意味さ」

「……………何か、最近鋭くなってる気がするんだけどさ？」

「朔のお父さんだからだよ」

劉焯は顔をしかめ、してやったりとばかりの顔をする義父を一睨み。そして観念したか、ポツリと呟いた。

「……………頼まれたんだ」

「頼まれた？」

一刀が確かめると、劉焯は小さく頷く。

「ある人を助けてほしいって言われた。でも、それは敵からのお願いだっだし、助けるなんて僕には無理だから断っただけだね」

「断っておきながら行くというのか？」

「無視したら夢見が悪そうだし。せつかくの昼寝を台なしにされたくないよ」

劉焯が肩を竦めて見せると、一刀達は皆一様に同じ表情をして、

『この、お人好し』

異口同音に言い放った。

「みんなして何さ!？」

「いやいや、お主が主の子だと改めて認識しただけよ」

「ああ。いつか大徳を継ぐかもしれんな」

「やっぱり、お兄ちゃんに似てきてるのだ」

「素直じゃないのも時間の問題ですね」

「そうだねー。でも、悪い癖まで似たらダメだよ」

「好き勝手言われた!？」

趙雲を始めとして言いたい放題言われ、劉焯は彼女らを指差しながら助けを求めるように一刀を見る。

「ごめん、無理」

だが、彼女らと同意見の一刀にはそれは無理だった。

「なあ、朔。どうしても行きたいか？」

「うん」

「なら、お父さんと約束だ。今回は斥候なんだから、無理も無茶も無謀もダメだ。鈴々もな？」

「解ってるのだ。鈴々は朔と違っていい子だもん。そんな事しないのだ」

「そっくりそのまま熨<sup>のし</sup>付けて全力で投げ返すよ」

一緒にしないでみたいな顔をする張飛に、半眼で言い返す劉焯。

一刀は何の為に二人に言ってるか解らなくなってきた。

「ったく。いいか、二人共？ 中の様子を探るだけでいいんだ。下手に何処かしらに首を突っ込むんじゃないぞ。

………じゃないと、愛紗に怒られるぞ」

ぼそり、と最後に付け足すと、面白いくらいの早さで二人の顔から血の気が引いた。

「り、鈴々、約束するのだ！ いい子に斥候するのだ！！」

「」

張飛は慌てたように返事するが、劉焯に至っては絶句した。しかも、よく見れば涙目だ。

関雲長の説教は、鬼も畏れるらしい。

「朔、大丈夫だ！ お父さんとの約束を守れば怒られないから！」

殊更に“守れば”と強調して言い聞かせると、劉焯は何度もコクコクと頷いた。

「よし。じゃあ、二人に斥候を任せるから。あ、朔にはこれな」

一刀は思い出したようにそれを持ち出し、劉焯に被せた。

それとは外套がいたうであり、劉焯の小さな体をすっぽりと覆った。

「ちよつと大きいね」

「朔の格好は目立つからな。旅人風に頼むよ」

「了解。じゃ、雛里をお願い。鈴々、行こ」

「応なのだ！」

駆けてゆく赤毛チビコンビの背中を見ながら、

「今のところだけ見れば、子供二人が遊びに行く一幕でしたな」

「言つな、星。不安が増す」

「あつ！？ 朔くん、今転んだよ！？」

「外套の裾を踏んじやっただんだと思いますよ。少し丈が余ってましたから」

「……………きゆう」

「……………ホント、大丈夫かよ」

好き勝手言っつて不安を紛らわせていた。

「潜入成功つてね。そっちはどう?」

「大丈夫。兵の皆も合流できたのだ」

軽々と城に侵入した劉焯と張飛は、駆け足で追い付いた兵を見ながら確認しあつた。

「それにしても、見張りがいないのだ」

「まあ、いないところを選んだつてもあるんだけど……………変な感じだね」

劉焯達が今いる所は、城壁の上だ。通常なら見張りが巡回をしている筈なのだが、見える範囲では影すらない。

洛陽を占拠したのが嘘だとしても、都の外に敵の大軍いるというのにも関わらず、この対応は杜撰<sup>ずさん</sup>過ぎる。

「逃げるのに手一杯なのかな……………ん?」

考えを一度止め、洛陽内に眼を向ければ黒煙が見えた。

今はまだ小さいボヤのようだが、燃え広がっては手の打ちようがなくなってしまう。

「鈴々」

「解ってるのだ。鈴々は兵士の皆と火事の所に行くから、朔は董卓を探して」

「そうしよ。董卓よりあそこの人達の方が優先で」

二人は頷き合つと、即座に駆け出した。

最悪。

賈馱は大切な親友の手を引きながら、心中で毒づく。

今の彼女にとって、世界がこれほど憎らしく見えた事はない。

一言で言えば、自分は甘かった。

これだけが原因ではないだろうが、最たるものはこれだろう。

「え、詠ちゃん……」

「……っ」

息を切らし、自身の真名を呼ぶ親友  
む。

董卓の顔が苦しげに歪ゆが

自責と後悔の念が心を苛こむ。

いつそ責めてくれたら、楽だったのかもしれない。

お前の言う通りにしたら、こうなった。

お前を信じたから、こうなった。

何故。

どうして。

お前のせいだ。

お前が全て悪いんだ。

そんな陳腐な言葉でもいい。一言でいいから、心も体もズタズタに切り裂いてほしかった。

でも、

「大、丈夫、だから」



息も絶え絶えに、親友は止まりそうになる足を無理矢理動かしながら強がってみせた。

(……………ごめん。ごめんね、月<sup>ゆえ</sup>)

解ってはいたのだ。

この親友は言わないだろう、言ってくれなどしないだろう。

優しいから。

優しすぎるから。

(月をこんな目に遭わせてしまったのは、ボク<sup>ボク</sup>の責任。だから、ボク<sup>ボク</sup>の命に代えても守ってみせる！)

眼に溜まりだしていた涙を引っ込め、握る力を込め直した。

「へっ、やっと追いついたぜ」

だが、彼女の意志を折るように不幸はぞろぞろと形になって現れた。

悪化する事態に賈馱は齒噛みする。

今、賈馱と董卓を狙う敵は連合だけではなかった。

黄色い頭巾を被った集団。言うまでもなく、黄巾党の残党である。

その数、7人。

董卓軍と連合の戦いの隙を突いた彼らは、早速民家を襲い略奪を始めていた。

そこに逃げようとしていた董卓達は遭遇してしまった。

黄巾党の残党は彼女らの整った容姿、綺麗な衣服に目をつけ、我が物にしようとして襲い掛かる。

勿論、董卓達には少数だったとはいえ護衛がいた。

襲い掛かる黄巾党の残党を阻み、董卓達が逃げる隙を作り出してくれた。

だが、下卑た笑みを浮かべる賊の服には、真新しい返り血の跡がある。

彼らがどうなったかなど、想像に難くない。

「……………くそ」

毒づく賈馱は董卓を庇うように前に出る。董卓は降り懸かる恐怖に、賈馱の服を握り締めて耐えようとした。

「ったく、随分と走らせやがって。足が棒になっちまうじゃねえか」

「そういきり立つなよ。苦勞させられた分、楽しませてもらおうじゃねえの」

「そいつはそつだ。せつかくの上玉だ、売り飛ばす前に味見くらいはしてえ」

「ひっひゃ。そいじゃ、服を汚さねえように、嬢ちゃん達をひんむくか」

ギャハハハ

ヒヒヤヒヤ

ガハハハ

下卑た笑いが路地に木霊する。

それが耳に届く度に足が震え、荒れた呼吸が更に荒れ、呼吸の仕方さえ解らなくなりそつだ。

「さ、最低ね、アンタ達」

賈馱が零した一言に黄巾党の残党は笑うのを止め、彼女を見た。

詰まりそうになる言葉を虚勢でカバーして賈馱は続ける。

「獣みたいに莫迦丸出しで吠えて。醜いったらありやしないわ」

時間を稼ごう。

「女？ 金？ 頭の中、単純で羨ましいわね」

時間を稼げば、連合軍の連中が入城してくる筈だ。

「ボクもアンタ達くらい頭が悪かったら、幸せだったのかも」

来なくとも、自分に意識を向けさせ続ければ、董卓への暴行は減るだろう。

「教えてくれない？ 莫迦のなり方」

味方は、もういない。いなくなった。

どうせ終わる人生なら、こんな奴らに大切な親友を汚されて終わりたいなんてない。

「あ、そっか。ごめんなさいね、莫迦にそんな説明出来る筈ないか」

でも、叶うのなら

（ 誰でもいいから、月を助けて ）

黄巾党の残党は賈馱の罵声に顔を真っ赤にして殺気立ちだした。怒り心頭といったところか。

容赦しない、と全身で告げてくる彼らに気圧され、賈馱は思わず後ずさる。

迫る恐怖に負け、賈馱と董卓は目をギョッと閉じた。

「うわ、暴行現場に遭遇しちゃったよ」

面倒そうな声音が耳に届き、賈馱はゆっくりと目を開いた。

黄巾党の残党もその声に反応し、声のした方向を見ている。

目を向ければ、頭まですっぽりと外套を纏った子供が頭を抱えていた。

解りにくいが、立ち振る舞いで恐らく男の子だと賈馱は当たりをつけた。

「正確には婦女暴行？ はるばる都まで来たのに、そりゃないよ」

「おい、ガキ。とっとと消えやがれ。今から大人のお楽しみなんだよ」

「ふーん。……………何するのかわからないけど、そこのお姉さんは楽しみなさそうだけど」

興味なさげなくせに突っ掛かってくる少年。気の短い残党達にしてみれば、不愉快極まりなかった。

「とつとと消えろってんだよ！ 殺すぞ！！！」

「怖いねえ、子供に対してそんな事言うなんて。泣いちゃうよ、僕？」

脅しも飄々と流す少年は肩を竦めた。賈馱はそんな彼の腰に双剣が差してあるのに気付いた。

（もしかして、武侠？）

でも、彼は小さい。もしかしたら、董卓よりも小さいかもしれない。そんな彼が戦えるのだろうか？

「……………賭けるしかない。お願い！ ボク達を助けて！」

一縷の希望に賭けた叫びに少年は、

「うん。それ、無理」

素っ気なく断った。

「……………」

「……………」

「……………」

三者三様ではなく、三者一様に絶句する。だが、理由はそれぞれに違った。

黄巾党の残党の場合。

少年が断るのも当然だと思っている。彼らと少年では彼我の差は明らかだ。

ただ、無理と素っ気ないにしても怖がる素振りを全く見せない少年に違和感を感じてはいた。

賈馱の場合。

普通に断る少年に、驚きの余り言葉が出なかった。いや、普通ここは助ける場面でしょ！？、と考える彼女は間違っていないと筈だが、頼む相手が悪かったらしい。

ただ、この少年の断り方が誰かに似ているような気がした。

董卓の場合。

何故か解らないが、あの少年が現れてから、とある少女が頭の中をちらついて仕様がなない。

だからか、少年が賈馱の頼みを断る気がした。そして、それは的中

した。

「あの……」

気付けば、口が勝手に動いていた。

「助けられなくて……いいです」

「ゆ、月？」

「……………へえ」

見えていないのに、少年の視線に射抜かれた気がする。体がビクッと震えた。

「助けられなくていいんです」

「だから、それは頼まれても無理なんだ」

肩を竦めて断る彼の様子に、董卓は確信した。

「私はいいです。今助かっても、明日は無い身ですから……………」

その代わりに、と彼女は続け、

「詠ちゃんを……………彼女を守ってくださいー!!」



声を張り上げる。

その瞬間、彼女はズダンツと何かが突き刺さるような音を聞いた。

いつの間にか一番近くにいた黄巾党の残党の姿は消え、入れ代わるように少年の姿があった。

「えっ！？ あ、なあっ！？」

理解が追い付いてないのか、賈馱は言葉になっていない言葉を発する。

かくいう董卓も、よくは解っていなかった。

けれど、これだけは解る。

「まあ、それならいいよ」

少年は自分達を守ってくれる。絶対に。

「さてと、覚悟いいかな？ 賊」

少年は問い掛けながら一歩前に踏み出す。

ジャリ、という足首に黄巾党の残党は揃って見ていた方向から少年に驚愕の視線を向ける。

視線のあった方向には、廃屋の窓に頭から突っ込んで動かなくなった黄巾党の一人の姿があった。

「僕には、あんたらみたいな奴の相手をするなんて面倒な役目があるってさ」

纏う外套に手をかけ、

「そんな訳で、容赦なしだよ」

少年は瞬く間に賊に接敵する。

脱いだ外套を黄巾党の一人に叩きつけ、視界を潰す。

視界を潰された彼が聞いたのは5つの轟音。驚きに囚われままに慌てて外套を剥がすと、少年の姿が見えた。

焰色の緋髪。

漆黒の戦装束。

そして、異形の双眸。

「あ、あ、ああ……………！？」

見た事があった。

自身が黄巾党の残党であるが故に、見た事があった。

この少年　　いや、この小鬼に自分のいた集団は潰されたから。

血飛沫が舞う中、それを終わらせないかのように仲間を切り伏せて

いったその姿は今も眼に焼き付いていた。

「ぞ、賊狩りの……戦鬼………」

「何だ、僕の事知ってたんだ。んじゃ、自分が到る末路は解ってるね」

末路。

それは過去の仲間と同じように黄泉路を辿れという事。

では、今の仲間は？

「は……はは………」

確かめるまでも無い。答えは、先に黄泉路へと逝った、だ。

もう無理だ。

そう覚った最後の黄巾党の残党は、董卓達に向かって走り出した。

単なる自暴自棄。

小鬼が邪魔しようが、もう関係ない。いや、どうしても良かった。

死ぬ前に一矢報えなくても。

「うがあああっ!!」

「ひっ……!?!」

奇声をあげて迫る賊に、董卓と賈馱は身を強張らせる。

何故なら、

「最後まで、自分でやりなよ」

などと言い、一步も動こうとしないからだ。

小鬼の強さに呆気にとられていた二人は恐怖を忘れていた。そこに最後の黄巾党の残党の特攻に、小鬼の突き放し。

文句を言う隙ひまさえ無い。

それでも、彼女らの救いはまだ終わらない。

「怪我人相手に酷いっすねえ」

明るくて軽い口調で誰かが言った。

ズドンッ！、と爆ぜるような音。その音を生み出したのは、白銀ランスの突撃槍。

それは董卓達と黄巾党の残党の間に突き立っていた。

まるで阻むように。

「二人が可愛いから襲いたくなる気持ちは解るっすけど」

また声が響き、トンツと軽い音だけ発てて、声の主は突撃槍  
義和ぎわの柄に降り立った。

赤みがかった茶髪を束ねた小中大の3連ポニーテール。

小鬼と似た漆黒の戦装束。

丸くぱつちりと開いて愛嬌のある藍色の眼。

「でも、お痛が過ぎるんすよ」

もう一匹の戦鬼      周倉は口許を吊り上げて言った。

「あ、旭ちゃん？」

「おひさ〜。ギリでセーフっすねえ」

「アンタ、何でここに!?!」

「私もいるぞ」

周倉の登場に驚く中、人影が飛び込んできて、戦斧で硬直していた賊を両断した。

「ありやー。今の不意打ちみたいだったっすね。やーい、卑怯者！」

「う、うるさい！！ 戦闘中に呆けている奴が悪いんだ」

周倉に茶化されているのは、華雄。

シ水関で連合軍に敗れ、行方不明だと聞いていた二人がそこにいた。

「な、なんでアンタ達がここに……」

「よつと。何でって、仲間を助けるのに理由はいらさないじゃないっすか」

突撃槍から降りた周倉は不思議そうに賈馱に言った。

さも当然に。

当たり前のように。

変な事など無いと。

短い間であつたとしても、思い知らされた彼女の“らしさ”。

それに安心させられた瞬間、賈馱は力が抜けて座り込んでしまった。

「助かったよ、旭。来てくれてありがとう」

「詠が素直にお礼言った！？ ヒヤッホウ！！」

「何でそこまで喜んでんのよアンタは!?!」

「ツンデレ娘のお礼は金玉に値するんす。でも欲を言えば、素直じゃないバージョンが聞きたかった!?!」

「意味解んない事言うな!」

「だから、お礼は体でお願いするっす」

「華雄。この賊、切り捨てて」

「即断で賊決定っすか!?!」

「敵の目の前でふざけ過ぎだろう、お前達」

漫才しだした二人を余所に、華雄は敵である劉焔を警戒していた。

だが、董卓と賈馱は一応守ってくれた彼を敵と認識し辛かった。

「本当にあの子は敵なんですか?」

「ああ。連合に組する劉備軍の将、劉焔翔刃。私と旭を負かした小鬼だ」

「嘘っ!?!」

華雄の言に董卓と華雄は愕然とする。

黄巾党の残党6人をあつという間に倒して見せたのだ、強いとは思っていた。

だが、その正体が敵である連合の将で、そのうえ華雄と周倉を相手に勝利していたとあっては、状況が好転としているとは全く思わなかった。

「そ、そうだ。恋は？ アンタ達がいるなら恋や霞だっているんじゃないよ」

「いたら、真っ先に飛び込んできてるっすよ」

「そんな……」

にべもなく告げられた返答に、絶望を覚えた。

一瞬でも世界に自分の祈りが届いたと思ったのに。これでは谷に落ちかけたのを助けられた瞬間、突き落とされた気分だ。

「旭、相談は終わった？」

「小鬼ちゃん、まだタイム。もうちょい待ってほしいっす」

「早く済ませてよ。でないと、うちのー総大将（考えなし）が来るよ？」

「うへえ。……？ どうしたんすか、詠」

周倉は劉焰と話していると、袖を誰かに引かれた。見れば、怖いくらい無表情な賈馱が袖を掴んでいた。

「旭。アンタ、あの子供に真名を預けてるくらいの知り合いなの？」



「そつすよ。私の可愛い可愛い弟分つすか　　らくあ!？」

自慢するように胸を張った瞬間、周倉の腹に賈馱の拳が打ち込まれた。

奇しくも劉焔に殴られた場所に入った為、激痛に意識を刈り取られそうになった。

「だったら、アンタが何とかしなさい」

「い、いえす……まむ」

這うようにのろのろと劉焔に歩み寄ると、ズザツと後退りされた。

「……怪我人のお姉ちゃんが苦しんでるのに、その対応っすか」

「近寄り方がなんか怖い」

「……………」

反論出来なかった。

「それは横に置いて。小鬼ちゃん、友達を守ってくれてありがとう。お姉ちゃん、とっても助かったっす」

「友達、ね。礼はいらないよ。僕は僕の役目を果たしただけだし」

「それでもつすよ。……………で、本題つすけど、ここにいるのはお姉ちゃんのお願いを聞いてくれたって事でいいんすか？」

「董卓を助けてほしい、だっけ？ だから、それは無理だって言ったじゃん」

若干嬉しそうに聞いてくる周倉に、劉焰は半眼になって否定した。

『お願いがあるの！』

『お願い？ やめてよ。どうせ董卓を助けてとか言うんでしょ』

『あ、あれ？』

『自分は戦えないから助けられないし、守れもしない。』

でも僕なら、獅子身中の小鬼の如く手引出来るかもしれない、とか思ってるんじゃないのさ』

『正しくその通りなんすけど………無茶を承知でお願い。お姉ちゃんはお姉ちゃんの命を救ってくれたあの娘を助けたい。』

でも、今はそれが出来ない。だから、小鬼ちゃんにお願いしたいの』

『………無理だよ』

『そんな』

『僕には……誰も助けられない』

誰も助けられない。

その考えは数日経った今でも変わらない。

いくら兄弟子の頼みであっても、それは聞けないのだ。

何故なら、自分は天の御遣いや大徳ではないのだから。

この身は鬼で、賊を狩るのが役目。守るのがやっとで、後は消し滅ぼすしか出来ない。

「言ったでしょ、世を乱した責は簡単に贖あがなえるものじゃない。だから、僕は“董卓”を消すって」

最初からそれだけが目的だったとでも言うように、劉焯は淡々と言う。

そして、華雄が背に守る二人の少女に向かって歩いていく。

華雄が間に合わせの戦斧を構えるが、彼女も周倉同様に完治していないのだろう。

その動作に以前見た時のような鋭さは無かった。

「どきなよ。あんたに用は無。また怪我するよ？」

「お前に無くても、私にはある」

起こり得る高い可能性を示唆してみるが、華雄は動かなかった。

睨み合うまでいれないが、互いに互いの一挙手一投足を見逃さないよう注意していた。

だが、このまま膠着状態（じょうちやく）が続くのはよろしくない。力付くで退かせようと劉焯は思った。

「答える。私は何故貴様に負けた？」

意外にも膠着状態を先に崩したのは、華雄だった。そして、その間にもまた意外なものだった。

「負けた理由？ そんなの、弱いからでしょ。弱い僕は、華雄より弱くなかった。それだけ」

「弱い？ お前が？ お前は呂布と引き分けた程の武の持ち主だろ  
う」

「あー……まあ、うん」

華雄に怪訝な眼を向けられながら、劉焯は曖昧に答えた。

劉焯と呂布の一騎打ちは、激戦の末に引き分けとなったと言われて

いるらしい。

らしい、というのは、砂塵が邪魔をして決着を誰も見ておらず、勝者である劉焯も勝ち名乗りを上げずに帰還して倒れたのが原因だった。

真実を知らない者達は、呂布が手傷を負わされて後退させられたという情報を受け取り、劉焯の容態から勝手に引き分けたと解釈したのだった。

劉焯も劉焯で、性格上勝ち負けに興味ないので我関せずと放置を早々に決めていた。

「華雄ってさ」

「なんだ？」

「自分の強さは天下無双、とか思ってたな？」

「思っていた……貴様らに負ける時まではな」

華雄が言う、あの時とは劉焯と張飛と矛を交えた時の事。

自分よりも幼い子供に勝てなかった。

自分の鍛え築き上げた武が崩された気がした。

その瞬間から、自身の武は張りぼてに感じ、風に吹かれてぐらぐらと揺れ動くみたいに安定しなくなった。

天下無双などと、劉焯らに対峙する前に、あの呂奉先を前にして謳うたっていたなんて、今思えば莫迦らしい事だったろう。

……いや、逆にどうして謳うたっていたのだらうか？

「意地になつてたんだよ。比較対象が強過ぎて、自分の鍛えてきた武がちつぽけなもんじゃないって信じたくてさ」

小鬼は淡々とにべもなく言う。

過剰に信じたくて。

過度に信じてしまったのだと。

「私は私を偽ってきたのか……」

「偽る事は人の性さがだよ。ただ、偽り過ぎて視野狭窄に五里霧中って感じで何も見えなくなっただけ」

つまりは、自分でいつの間にか自分を見失っていたから負けた。

解かれた答えに、華雄はショックを受けたのか座り込んでしまった。

彼女がこうなってしまうえば、後は互いを助け合おうとした二人。

「どっちのお姉さんが董卓なのさ？」

「ぼ、ボクが董卓よ！」

「はい、嘘。ツンケンしてるお姉さんじゃないね」

「そうです……私が董卓です」

「！月！」

庇おうとした董卓に名乗り出られ、賈馱は慌てる。

華雄の言が本当ならば、相手は呂布と同等の武人。その気になれば、黄巾党の残党と同じように瞬殺されるかもしれない。

董卓とて、それは解っていた。けれど、言いたい事があったのだ。

「小鬼くん、お名前は？」

「劉焰翔刃だよ」

「それじゃ、劉焰くんだね。詠ちゃんを守ってくれてありがとう」

そう、董卓は穏やかな声音で礼を述べた。

それに劉焰は面食らった。そして、微かにお人よしの匂いを嗅ぎ取った。

「何でお礼なんて言うのさ？ 僕は連合の一員だよ。今からあんたを消すのに」

「そう……だね。でも、もしかしたらだけど、私達が君に助けを請わなくても助けてくれたんじゃないかな？」

「助けはしないよ」

「じゃあ、守ってくれた？」

「うぐ……」

「ふふ。だから、ありがとっ、だよ」

董卓は穏やか笑みを形作り言うが、劉焯は彼女の瞳の奥に生への諦めが見て取れた。

心の隅の方で苛立ちが生まれた。

「あゝもう！ 主上、交代！！」

董卓に背を向け劉焯は叫ぶ。すると、

「来て早々か？」

入れ代わるようにタイミング良く一人の青年が現れた。

この時代にある筈もない未知の衣服を纏う、天の御遣い。

北郷一刀が関羽達を引き連れ、劉焯に追い付いてきた。

誰もが彼に眼を向け、固唾を呑んだ。

中でも、



「……………おじ様？」

周倉だけ、その度合いは何倍も違った。

彼女は一刀を見た瞬間、心臓が止まる思いだった。それくらいの衝撃があった。

込み上げてくる感情の波は、一筋の涙となって零れ落ちる。そして、彼女を突き動かした。

「おじ様！」

周倉は一刀に向かって走り出した。

だが、彼女は董卓軍の将。例え違かったとしても、護衛である将が主に易々と接近を許す筈もない。

「止まれ！ ご主人様に近づく事まかりならん！！」

関羽が阻むようにして立ち塞がる。

「！ おば様あああ！！」

「嘘おおおお！？」

だが、周倉は減速どころか加速する。そして、そのまま抱き着くようにして関羽にフライングボディプレスらしきものを敢行した。

叫び虚しく、受けきれずに関羽は押し倒された。打った背中が痛い  
が、それよりも周倉を引きはがすのを優先し、

「……………く……………グス」

出来なかった。

何故か解らないが、声を殺して周倉は泣いていた。

泣きまねでもなく、本当に。

そんな彼女がいつかの劉焯に重なって見え、関羽は自然と優しく頭  
を撫でていた。

「旭……………」

劉焯は周倉の泣いているところを初めて見た。

当然、真剣な顔をしたり落ち込んだりもするが、すぐに笑顔に戻る  
印象が劉焯の中にあつた。

そんなのお前の柄がらじゃない、なんて言わないが、それでも彼女が泣  
いているのが酷く嫌だった。

「ご主人様……………」

「……………解つた」

泣いている周倉の頭を撫でながら、関羽は一刀を見る。一刀も彼女  
が何を言いたいか解つた為、董卓の前に歩いていく。

「こんにちは。君が董卓ちゃんだね？」

「はい……あと、えっと」

「俺は北郷一刀。天の御遣いなんて呼ばれてる」

「董卓……です」

「……」

「……」

「……」

「……」

「にゃー？ お兄ちゃん、見つめ合ってどうしたの」

見つめ合うように互いを見続ける一刀と董卓を不思議に思ったか、張飛は首を傾げた。

「あ、ごめん。想像してた董卓とは全然違っていたから。少し驚いてた」

「ふむ。あまりの美しさに見惚れていたのですな」

「まあ、そういう感じなのかな」

茶々を入れてくる趙雲の言に、否定できないかと一刀は頷く。

ただ、背中に痛いくらい突き刺さる視線には気付かないふりをした。

「董卓ちゃん。残念だけど、君を逃がす訳にはいかない。」

……大人しく俺達に捕まってほしいんだ」

「それは……」

「そんなの出来る筈ないでしょ！ 月を守る為には何処までも逃げるしかないんだから！」

「それで、また多くの人を犠牲にするのか？」

「ぐ……」

その一言に賈馱は押し黙る。それは気付いていながらも、眼を逸らした事であった。

「逃げて、どうする？ 俺達を含めて連合は君達を何処までも追い掛ける。」

……この戦いの責任を君になすりつける為に」

「………っ」

「君らの状況は理解してる。それにこの戦いの本質が何処にあったのかも、今の俺達は見抜いている。」

……だからこそ、このまま逃げ続けて、追い詰められるのが目に見えてる二人を、放っておく気なんて無いんだ」

「え……」

董卓は自分達に手を差し延べてくる一刀の行動に戸惑う。

偽りであったといえ、世の噂では董卓は天子を傀儡かいらいとし、暴政を振るった悪逆。

それを討つたとなれば、世の莫大な風評は一刀達のものになる。

しかし、彼らはそれをいらな<sup>い</sup>と言っているのだ。それは戸惑いもするだろう。

「……どういう事ですか？」

「こづい<sup>い</sup>事だよ。って事で、朔」

「何さ？」

「俺が考えてる事と朔がやろうとしてた事、同じだよな？ だから、頼む」

「ふうん……お人好し」

「お互い様だ、お人好し」

軽口を叩き合いながら、劉焯は一刀に頼まれた行動を取ろうとする。

伸ばした両手が双剣の柄を掴み、

「痛くないから、安心してよ」

「ちよつ、何を!？」

賈馱の問いを無視して斬撃を放った。

双剣が生み出した風が二人の顔を撫で、通り過ぎる。思わず閉じた眼を恐る恐る開いて、自身の体を確認する。次に互いを確認し合った。

どこも斬られてなかった。

「はい。終わり」

何食わぬ顔で双剣を鞘に納める劉焯。それに一刀は独り領いた。

「あの……今のは？」

「今、董卓は僕、劉焯翔刃の手で討たれた」

「え……」

「そういう事。二人は死んだ事にさせてもらう。」

天の世界の物語じゃ、月並みでベッタベタなやり方だけだな」

「この戦いを終わらせる為に、嘘の情報を流すって事？」

「「そうだけど」「

賈馱の確認に、一刀と劉焯は異口同音に肯定する。

この親子は……、と呆れながら、趙雲は仕方なくいつものストップパ

一の役目を果たす事にした。

「主、そして朔よ。まさか今更偽善に目覚めたとおもっしやる気か」

「偽善か……確かに偽善かもしれないけど、それだけじゃないんだ」  
どこか苦い笑みを浮かべ、一刀は言う。

「諸侯の権力争いに巻き込まれて、事態に流された二人の姿……  
…俺は他人事には思えない」

北郷一刀は、この世界の住人ではない。

それは一刀自身が一番解っていて、解らない事だらけだった。

何故、ただの高校生である自分がこの世界に来たのか。

何かしらの理由や因果があるのだろう。劉備達に出会い、天の御遣いなんて神輿になり、鬼の父親にもなった。

そういつた時を経て、ここに立っているのだ。

自分の意志だけではどうにもならない現実には、流されるままに立ちすくんで。

違いはあれど、流されてきた面がある自分と董卓は似た境遇ではな  
いかとってしまった。

「偽善と言われても仕方ないと思うけど、助けられる可能性がある

なら、俺は助けたい。

その選択を後悔しない為にも」

「しかし、主よ。もし、この密事ひそかごとがバレたら、今度は我々が権力争いの贄とされるぞ」

「それは重々承知してるよ。だから、色々と小細工をしなくちゃいけないんだけど……。」

これは俺の我が儘だから、無理には言わない。手を貸してくれたら嬉しいよ」

あまりにも一刀らしい発言に、趙雲は気付かれないように溜息をついた。この人の在り様だからこそ、付いて来たのだと再認識させられて。

「……………では、朔よ。お主はどうだ？」

「正直言えば、助ける気はないよ」

「何故だ？」

「生きようとしてない奴を助けても意味は無いよ」

理由を淡々と述べる劉焯の眼には、薄らと苛立ちの色が滲んでいる。

「ツンケンしてるお姉さんは生きてほしいみたいだけど、本人にその気がないんじゃないや骨折リ損。」

黙って見逃してあげるから、勝手に何処かで野垂れ死になよ」

珍しく辛辣な言葉をやたらと使い、劉焯は不快感を露わにする。



彼の戦いとは、生き残る事だ。それは生きようとする意志がなくてはならない。

そして、その意志は彼の生き方に対する考えの根幹になっている。

故に、生きようとする意志を持つ者を好み、その意志が無い者を嫌う。

今の董卓は彼が感じた限り、後者であった。

「劉焯さんの言う通りです……」

「月……」

「全て……私のせいだから」

董卓は訥々と語り始める。

「助けを求めてきた張讓さんに求められるがままに手を貸して……果ては天子様まで軽んじる行いまで」

「違う！ それは月のせいじゃない！ あれは張讓の莫迦がボクらの知らないところで勝手にやってたんだから！！」

「それに……シ水関や虎牢関で死んでいった多くの人達に対する償いは私自身が果たさないと……」

「死んでお詫びするってのさ？」

はっ、と劉焯は鼻で笑い、

「ふざけんなっ!!」

怒り叫んだ。

「死んで詫びる？ 償う？ そんなのに何の意味があるってのさ!!  
何でアンタらみたいのは、簡単に命を捨てるような考えが持てる  
？ 生きたいなら生きたいって叫べばいいじゃんか！」

「でも、この戦争を起こした一因は私……」

「だったら、尚更生きろ！ アンタを思ってくれてる人がいる。手  
を差し延べてくれる人がいる。」

その幸せを噛み締めて、無くさないように握り締めて、償って生  
きてみせるよ!!」

それは独善エゴかもしれなかった。

孫策に言われた理想の押し付け。

正しくその通りだ。

けれど、

だけど、

それでも、

「死ぬなんて莫迦な事、口にすんな!!」

命を軽んじるのだけは、赦してなるものか。

「朔……」

皆が皆、言葉を失う。

飄々淡々とした彼の風体は影も形も無い。

初めてだ。

初めて見た劉焰翔刃の激昂に、一刀は驚愕を覚え、内心喜んでいた。

鬼と自他共に呼称する劉焰だが、もっと人間のように、厳密に言えば子供のように感情を爆発させてもいいんじゃないかと思っていた。

それが今、爆発させている。

しかも、乱暴な言い方だが生きると叫んでいる。

これが嬉しくない筈がない。

「董卓ちゃん、俺が言いたい事は朔が言った通りだよ。

死ぬなんてダメだ。死んで償いなんて出来ないし、しちゃいけない

「いんだ」

まだ怒り心頭中の劉焰の頭を宥めるように撫でながら、一刀は言った。  
なだ

「確かに、一因である君が死ねば胸が空く奴もいるのかもしれない。でもさ、逆に君が死ぬ事で哀しみを胸に抱えなくちゃいけない人も出て来るんだよ」

実際に隣りにいるでしょ、と一刀は優しく示す。

董卓は、はっとする思いで賈馱を見た。

いつも強く前に出れない 引いては、積極的ではない自分の手を握り、共に歩いて来てくれた親友。

今もその手で握り締め、生きてほしいと願ってくれている。

「私は……生きていいんですか？」

「違うよ。生きるべきなんだよ」

問うような董卓の呟きに、劉備は断言する。

「生きていいのか、なんて誰にも解んないよ。けど、だからって死んでいいって訳でもないの」

「貴女は……？」

「劉備玄德。一応、この軍の代表だよ」

「アンタみたいのが？」

「うん。頼りない私みたいなのが。

ずるい言い方かもしれないけど、私だって兵隊の皆を死なせてる。

ほら、形は違っても董卓ちゃんと同罪だよ……」

でもね、と劉備は続け、

「私は死なないよ。死ねないの。私は、こんな私について来てくれた皆に誓って、信じてくれた理想を実現するまで生き続けるよ」

はっきりと断固とした意志は、彼女の心から奔流の如く噴き上がる。

その生きようとする意志と理由に当てられ、董卓は息を呑んだ。

そして、劉備から差し延べられた手に戸惑う。

「私達は貴女達を助けない。」

「そんな私達の我が儘に付き合ってくれませんか？」

どこか頼りないのに、劉備の浮かべた笑みには力があつた。

この人に　　この人達に裏切りはない。

そんな人を信じさせてくれる優しさがあつた。

「詠ちゃん」

「うん……月がそう決めたなら、ボクはそれについていくよ」

「ありがとう……」

口に出さずとも理解してくれる賈馱の存在はやはり有り難い。

「北郷さん、劉備さん。私達を助けてください」

差し延べられた手を握り、董卓は言った。

生きたいと。

涙を零す董卓の手を握り返し、

「任せなさい！」

天の御遣いと大徳は断言した。

鬼と連合11      〽戦鬼と悪逆とされた少女の邂逅〽（後書き）

前書きでの二つ目のお詫びでも申し上げましたが、連合編がまだ終わりません。

前回の後書きで、終了予定と書きましたし、終わらせるつもりで書いていたのですが、執筆が行き詰った時に書いた分を保存してみたら気づいたのです。

規定の4万文字の半分を既に使っていた事に。

まだ書くことあるのに、まだ長くなるのに、これはヤバイと思い、急遽投稿することにしました。

3万文字超え？ 読み疲れるわ！！といった幻聴を振り払いつつ、次話作成中。

予定は変更になるかもしれませんが、次話で連合終了。その次に幕間で完全終了としたいです。

終わるかなあ……………

感想、品評お待ちしてます。

鬼と連合12      く狂鬼く（前書き）

お久しぶりです。

連合編、ラストです。サブタイトルの意味は、読んでご確認ください。



今、劉焯の目の前では、劉備と董卓が手を握りながら、笑みを浮かべている。

次に劉焯は未だうなだれるように座り込んでいる華雄へと眼を向けた。

「華雄、アンタはどうする？」

「私は……解らない」

「なら、董卓と一緒にくれば？ 武の道をまた進むなら、関羽とかが格上相手には事欠かないし。それに」

「それに？」

「武人とは違った強さ、つても見てみたらいいさ」

まだむすっとしているものの、いつもの飄々淡々とした雰囲気に戻しながら、劉焯は言う。

まさか誘われるとは思っていなかったのか、華雄は眼を丸くした。

「武人とは違う強さ、か。」

「……視野が狭くなっていった私では、見向きもしなかった別の力だな」

うん、と一つ頷き、

「見聞を広める為、私も同行したい。教授、お願いする」  
華雄は頭を下げた。

「了解だよ。よろしく」

「ああ、よろしく頼む。師匠」

「はいは い？」

「どうした？ 師匠」

「いや、うん。何それ？」

「？ 何の事だ」

「僕の事、師匠って……」

「私は貴方に師事したい。拒否も例外も認めない」

「……………」

何故か、教えを請う方が上から言ってきた。

何それ？、と内心で再び独り言ちながら、劉焯は首を横に振った。

「僕は教えらんないよ。関羽や趙雲に教わって」

「嫌だ」

「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」

華雄の顔には、これだけは譲れないと書かれている。引き下がる気は無いらしい。

うん、と今度は劉焯が頷き、

「お父さ〜ん!!」

一刀に泣きついた。

「華雄が解ってくれない」

「俺は朔が何を言ってるか解らない」

劉焯が華雄の同行と師事の件を話すと、一刀は快く承諾してくれた。

だが、

「誘ったのは朔なんだから、それくらいしてやりな」

やんわりと押しつ

もとい、たしな窘められた。

うへえ、と肩を落とす劉焯の後ろで、「やるぞー！」と華雄が叫んでいるのを聞いて、更に肩を落とした。

「ご主人様、こちらもよろしいでしょうか」

沙汰を決めたばかりの一刀に、関羽は遠慮がちに聞いた。

彼女の隣りには、泣いて眼を赤くした周倉がいる。

「どうした？」

「この周倉も、我らと共に来たいそうです」

「正確には、小鬼ちゃんと一緒にいたいんです」

「朔とかい？」

「！……そうっす。それが私の使命っすから」

一刀は一瞬だけだが、周倉の様子に引つ掛かった。

劉焯の真名を口にした瞬間、彼女は何故か驚いていた。それに、劉焯と共にいる事を使命とまで言った。

後で彼女に幾つか聞いてみるか、と一刀は思考を切り替える。

「解った。一緒に行こう。朔の兄弟子なんだから？」

「そうっすよ。そして、お姉ちゃんなんすよ、おじ様」

「お、おじ様！？ 俺、そんなに老けて見える！？」

「あっ……………違うつす。おじ 御遣いさんは全然若いつす  
「よ」

あはー、と笑いながら周倉は言う。一刀にはその笑みが無理しているように、引き攣って見えた。

「どうやら、私とご主人様によく似た知り合いがいるようですね」

「その人達は、私にとって凄く大切な人だった。

もう会えないのに、あんまり似てるから驚いちゃって……………それでちよつと感極まって泣いちゃったんすよ」

「そっか」

「え…………？」

一刀の手は自然と周倉の頭を撫でていた。

まるでよく頑張ったとも言つように。

( やっぱり……………解っちゃうんだ )

手からの温もりに、また涙が込み上げてくる。

泣かないように堪えても、彼が《北郷一刀》であるなら、自分程度の偽り加減じゃ看破される。

関羽にも看破されたし。あと、この可愛いらしい弟分にも。

「小鬼ちゃん。お姉ちゃんも一緒にいていい？」

「好きにすれば。無理に笑わないなら、だけど」

屈んで聞いてみれば、劉焯は予想通り素っ気なく答えた。

「ありがとう」

「朔だよ」

「え？」

「僕の真名。いつまでも小鬼って呼ばなくていいよ」

「うん。これからよろしくね、朔ちゃん」

「コクン、と劉焯が頷いて見せると、

（また君をその名前で呼べるんだね）

周倉は心からの笑顔を浮かべた。

「さて、それじゃ董卓ちゃん達をどう保護しようか」

「死んだ事にするって事だと、今の名前は使えないね」

「なら、名前を捨てて真名を預ければいいですよ」

董卓と賈馱の保護方法に頭を悩ませる一刀と劉備に、周倉は簡単だ

と言わんばかりに提案する。

しかし、名前とは自分という存在の標しるしだ。それを捨てるなど、簡単に決断出来るものではない。

「二人の真名を知ってるのは極僅か。しかも、知ってる内の過半数は今ここにいて、後は行方知らず。

策としては、上々だと思っすけど」

それでも周倉はこの策の利点を述べる。

生き残る為だと。

「あと、二人には御遣いさんの侍女になってもらっす。

あ、勿論っすけど、政まつじしととかで表舞台に立つちゃダメっすよ」

「なっ、なんだってボクらが侍女なんて!?!」

「そっか。ご主人様の傍にいれば、他人の眼は二人には行きにくくなるもんね」

「ん。劉備さん、正解」

「えへへ」

「さっすがおっばいが特大なだけあるっす」

「そこは関係無いよ!!--」

周倉は何故か一人感心したように頷き、劉備は顔を紅くして叫んだ。

「桃香様の大きなおっぱいについての談議は後にして、だ」

「うう……星ちゃんまで」

「董卓よ、お主らはどうする？ 名を捨てる覚悟はあるか？」

趙雲の問いは単純で簡潔なものだったが、それ故に曖昧な答えは口  
に出来ない。

「……………捨てます。董卓という名前は、この地に遺っていきます」

「月……ボクも賈馱という名を捨てる。月と一緒にいる為だもの、  
仕方がないわ」

侍女になるのは不本意だけど、と付け足しつつ賈馱も賛同した。

そんな彼女らを強いと劉焰は思った。

名前の無かった自分。あの頃は、特に欲しいとも思わなかった。

けれど、家族になってくれた人に貰った《劉焰翔刃》という名前と  
《朔》という真名は、もう自分にとって掛け替えの無いものだ。

もし董卓と賈馱のように名を捨てるかの選択を迫られる状況になっ  
たとしたら、きっと捨てられないだろう。

だから、彼女らは強いのだと思わされた。

「私は董卓、字は仲穎。真名は月です」



「ボクは賈馱、字は文和。真名は詠」

「んじゃ、私も。名前は周倉で、真名は旭。ヨロっす」

「最後は私か。名は華雄、真名は直葉だ」

董卓　　月達は一刀達に真名を預けた。

それを信頼の証として、一刀達は受け止める。

そして、自身の真名も預け、新たな仲間の参入を歓迎したのだった。

「さて、それじゃ　　」

「「ご主人様ー！！」」

「なんだ!？」

一刀が声のした方向を見れば、危なかつしく走る二人の少女の姿がある。

それが慌てている孔明と鳳統とあつては場合が違った。

「どうしたんだ？　もしかして袁紹が何かしたのか？」

「はわわ！　ちゅがうんでしゅー！」

「あわわ！　合ってるんでしゅけど、ちゅがうんでしゅー！」

「はい、落ち着いて。深呼吸〜」

「す〜は〜す〜は〜」

彼女達との付き合いも長い。一刀も慣れたもので、手早く彼女達を落ち着かせる。

「で、何があったの？」

「「ちやいへんなんでちゆ!?!」」

「でちゆ……えーと、それで？」

「ちえんちようさんとちえんじゅちゆしゃんがいちえばんによりををあらしよいだして!!!」

「しよこにいきにやり白装束の人ちやちが!?!」

「袁紹と袁術が一番乗りを争い出して、そこに白装束の一団が乱入してきたそうっすよ………白装束?」

「一発で理解出来たのか」

字面にしても理解しにくい文章を周倉はさらりと聞き取り、通訳してみた。

今を理解しきれなかった一刀としては助かった。

「とにかく、その白装束の奴らを止めないと。じゃないと、終わりかけてる戦いで、また洛陽の人達に迷惑がかかる」

「そうですね。では、私と星が先行します。ご主人様と桃香様は董卓達を連れて、後から来て下さい」

「やれやれ。仕様の無い奴らだ」

「頼んだよ。愛紗、星」

「はっ！」

駆けていく二人の背を見つめながら、

「旭。君は白装束の奴らに心当たりがあるのか？」

思案顔の周倉へと問い掛けた。

「いや、その……何と言うか、あるにはあるし、無いとも言えちゃったりして」

「旭ちゃんは何か知ってるの？」

「多分っすけど……確証無いんではっきりとは言えないっすよ？」

「それでもいいよ。正体不明の相手だ、可能性の一つでもあった方が気持ち楽だ」

まあ、それなら、と周倉は答えた。

「白装束の一団っすけど、恐らく……私と朔ちゃんの師匠の天敵で宿敵」

「朔達の師匠の天敵にして宿敵、か」

「でも、そうだとしたら………あっ!？」

うっん、と数秒頭を悩ますと、弾かれるようにして周倉は辺りを見回す。

いきなりの彼女の慌てように一刀達も首を傾げた。

「朔ちゃんは!？ 朔ちゃんはどこ!？」

「え? ……つて、あれ? いない!？」

「そんな!？」

いつの間にか劉焰の姿は消えていた。

それに気付いた一行は皆、いつもの暴走かと頭を抱える。

しかし、周倉はそうだと知っても落ち着くどころか、顔を青ざめた。

「止めなきや………」

「ちょっと待って! どうしたんだ!？」

一刀は走り出そうとする周倉の腕を掴み止めた。彼女の眼には動揺と焦燥の色で塗り潰されている。

「早く……早く行かなきゃ!！」

「だから、君が何を焦ってるのか教えてくれ」

「……白装束の一団が師匠の天敵の奴らなら……朔ちゃんには会わせちゃいけないの」

もし、会ってしまったらどうなるか？

周倉は答えを口にする。

「朔ちゃんが朔ちゃんじゃなくなっちゃっうー!!」

悲壮の叫びに乗せて。

間違いだったのかもしれない。

劉焔翔刃は切実に思う。

あの時、孔明と鳳統が白装束の一団が現れたと話した瞬間に、劉焰は走り出していた。

気付かなかった。いや、気付けなかった。

体が万全ではないといえ、意識を向ければ袁紹軍と袁術軍の気配がぶつかり合っているのは察知出来た。

けれど、彼女達が言う乱入者達の気配が微塵にも感じられない。

「何だつてのさ……」

疑問を愚痴るように零す。跳び上がったのは家の屋根から屋根へと跳び移り、目的地へとショートカットしながら目指した。

着いてみれば、確かにいた。

袁紹軍と袁術軍。

それに、

「  
っ」

白装束の一団が。

頭から足の先まで白で統一された衣装は、まるで道士のような出で立ちだった。

「  
あ、ああ」

彼らを見た瞬間、劉焯は息を呑んだ。

息が出来ない。

体が震える。

視界が明滅する。

頭が割れるように痛い。

立ってられない。

ダ

視界が暗転した際に脳裏に映る光景を幻視する。

ラダ

一人の女性が大きな血溜まりに倒れている。長い黒髪がその朱に浮かんでいた。

ツラダ

彼女はもはや死に体となっている。それでも、文字通り必死に劉焯

へと手を伸ばした。

イツラダ

血で濡れた手は慈しむように劉焔の頬を撫で、血溜まりへと落ちた。それは彼女が事切れた証に外ならない。

アイツラダ

彼女の亡きがらの向こうには、ほくそ笑む白い道士がいた。

アイツラガ

そつだ、あいつらが

「  
殺した」



間違いであってほしかった。

北郷一刀は切実に思う。

焦る周倉を先頭に、先行していた関羽と趙雲に追い付いた時、彼女らは何もせず呆然と立ち尽くしていた。

何があつたと聞くまでもない。

「見ちゃダメ！」

周倉が張飛、孔明、鳳統の三人を抱きしめるようにして視界を遮る。まへ

それが正解だと一刀も思う。

こんな惨いものは、誰も見たくない。

ドサツ、とモノが落ちてきた。それを見た瞬間、肺が引き攣る。

音源であるそれは、人の首。

白いフードのようなものとマスクを付けたそれは、瞳孔が開ききった眼で自身を冷たく睨んでいるような気がした。

「朔……」

弱々しく、姿の見えない我が子の名を呼ぶ。

だが、返事は返って来ない。

返ってきたのは、鉄に似た臭いのする紅い雨だった。

紅い雨は洛陽の路上をまるでペンキを使ったように塗り潰していく。

いや、それでは語弊があるか。一刀達が追い付くよりも早く、関羽達が到着するよりも早く。

この道は、既に紅く塗り固められていたのだから。

彼ら、白装束の一団の血によって。

「

」!

声ならぬ咆哮が耳をつんざく。

また血の雨が降り、人体のパーツが続いて降ってきた。

プラモデルのパーツやパズルのピースみたいにバラバラで。

どれも斬られて出来たモノじゃないのは確かだ。

切断面がやけに汚い。まるで

（ 力尽くで引き千切ったみたいだ ）

そんな異様な人体パーツは足場の無いくらい道に転がっている。だが、白装束の一団はそれが仲間の亡きがらの一部だというのに平然と踏み付け、人垣を為していた。

狂ってる。

眩かすにはいられない。

作り上げているだろうアイツも、無謀にも立ち向かい惨状の一部となる彼らも。

（そう、狂ってるんだ。狂ってしまったってるんだ）

ならば、止めなくてはいけない。止めてあげなくては。

「朔っ……っ！」

一刀は震え出した足で何とか前に進み、我が子の名前を呼ぶ。

だが、劉焰の返事はない。

反応したのは、

「同志達よ！ 諸悪の根源である北郷一刀が現れた！ 奴を殺し、世界を救え！」

皮肉にも白装束の一団だった。

団長なのかは解らないが、一刀達に背を向けていた彼らは彼の言葉

にこちらへ一斉に向いた。

そして、手に持つ武器で一気呵成に襲い掛かってきた。

「！ ご主人様、後ろにお下がりください！」

「あ、ああ」

「同志達よ、逃がすな！ 世界を滅ぼす悪である北郷一刀。そして、悪鬼、劉焰翔刃を殺せ！」

白装束の一团の武は差ほど高くない。だが、その数は脅威だった。

一刀の前にいた関羽と趙雲はその数の多さに徐々に押され、別々に孤立させられた。

逃げるように後ろに下がると、華雄が一刀と劉備を守るように前に出る。

しかし、すぐに彼女の顔が苦しげに歪む。体調が万全でない上に、間に合わせの戦斧では実力を発揮しきれないからだ。

そんな中、一刀は白装束の一团の言葉に揺れていた。

「……………俺が悪？ 朔まで悪だっていうのか？」

「ご主人様が悪者な筈ないよ！ 朔くんだって！」

「否、北郷は世界を破壊する悪なり」

動揺する彼の眩きを否定しながら、劉備は腕を引いて走る。

だが、追い付いた白装束の一人が劉備の否定を更に否定した。

「悪に魅入られた愚か者め。悪が正義の刃に討たれる様をその目に焼き付ける！」

白装束の一人は手に持つ短剣を一刀へと振るう。

迫る凶刃から庇おうとする劉備を突き飛ばし、一刀は襲いくる肉を裂かれる痛みを堪えられるよう歯を食いしばり、

「正義って言った？」

凶刃は白銀の閃光に砕かれた。

「あ……旭？」

一刀は思わず彼女の名を呼ぶ。

羲和を白装束の一人に突き付けた彼女は、さっきまで弟分と一緒にいられる事を喜んでいた彼女ではなかった。

「今、正義って言ったよね？」

底冷えするような声音で言い、周倉は一步前に進む。

白装束の一人は気圧されたか、後退りながら肯定した。

「そ、そうだ、託宣は下された。北郷は世界を壊す悪。悪を討つは正義の役目。即ち、義は我らにあり！」

「そう、それがそつちの正義ね。正義の名の下におじ様を討つ気なんだ」

なら、と彼女は続け、

「私は私の約束で貴方達を討つ」

宣言直後に義和で貫き、白装束を紅く染め上げた。

前に進み出した周倉は殺し合いの渦中を平然と歩き、襲い掛かる白装束を突撃槍を瞬かせ貫いていく。

骸は路上に増えていき、まるで彼女の足跡を残すかのようだ。

「貴様……もしかや北斗の」

「今頃気付いたの？ 私は北斗の一番弟子。つまり、戦鬼よ」

白装束の一団は北斗の名前を口にすると、途端に狼狽える。それを周倉は冷たく嘲笑った。

「北斗の弟子であるのなら、我らの行いを理解出来るであろう！？ 何故に正義の行いを阻む！？」

「理解は出来ても、肯定はしてやらない。

それに言った筈。私は私の約束で貴方達を討つと。だから、もう

殺させてやる訳にはいかない」

「く……貴様も奴の道を追うか。所詮は貴様も悪に魅入られた者であつたか」

「当然。私は一途な女なの」

冷笑を浮かべた周倉が羲和を構える。同時に四肢に着けているリングが激しく輝きだす。

その輝きに脅威を感じたのであろう、白装束の一団は津波のように多勢で彼女に向かっていく。

その時点で、彼らに勝機も勝算も消え去つたとも知らずに。

「 鬼の閃光、その身に刻め」

白銀の閃光は放たれる。

閃光は一瞬にして敵を貫き、津波を殺し尽くして、骸の垣を築いた。圧倒的。

その光景を間近で見た一刀はそう思った。同時に、人の律から外れた“鬼”と称し称される者の力を見せ付けられた。

（本気になった朔も、こんなにも凄まじいのか？）

これでも幾つもの戦場を渡ってきた身だ、ある程度の眼力はあるつもりだ。

強者の風格、実力。

正直、どちらも一刀に薄ら寒いものを感じさせる。

鬼と人は同格でないと思わされた。

けれど、あそこにいるのは鬼だろうと劉焯に違いない。

「旭……」

一刀は小鬼の姉の名を呼ぶ。周倉は返事するでもなく、眼を向けるだけで先を促した。

「朔の所まで連れてってくれ」

「危ないよ？ それでも？」

「それでもだ」

「即答、か。《北郷一刀》なら、そここなくちゃね」

満足そうな笑みを一瞬だけ浮かべ、

「生き残る気で付いて来てよ」



どこか劉焯のような言い方で周倉は言い、駆け出した。それに一刀は離れないように全力で走った。

自分より小さい彼女に頼るのは、なんだか情けない気がしないでもない。

けれど、周倉に力を貸してもらわなければ、辿り着けない。

あそこには彼女よりも小さく幼いアイツがいる。

きつと苦しんでいる。

もしかしたら、泣いてるかもしれない。

(独りは嫌なくせに、突っ走るなっの！)

内心で叱り付けながら、一刀は更に足に力を込めて走った。

(やっぱり似てるなあ)

白装束の一团を薙ぎ払いながら、全力で走る一刀を見た周倉は不意に思った。

憧れた“おじ様”。

いつも優しくくて、哀しくて泣きそうになった時は暖かな笑顔で癒してくれた。

そして何より、誰かの為にいつも全力で力になろうとする心の強さ。

それは幼かった自分が知った最たる強さで、自身の在り方の根幹と  
なった。

（私のおじ様達の正しさを模倣まねしてるだけの偽物。  
だけど、この偽物ただしきを貫いて貫いて、貴方達へ頑張がんったって言いた  
い）

だから、その前に彼によく似たこの青年に今の自分の姿を見てもら  
おう。

そして、可愛い弟分にどんなもんだと胸を張って笑ってやろう。

（そしたらまた、お姉ちゃんって呼んでほしいな）

内心で独り言ちながら、壁となった最後の白装束を蹴散らした。

「朔……」

背後で一刀が息を呑んだのが見なくても解った。

辿り着いたその先に、自分達に背を向ける小鬼がいた。彼の周りには  
はまだ数人の白装束がいる。

そして、血染めの白装束を纏った残骸が散らばり、道を埋め尽くし  
ていた。

「朔ちゃん……」

周倉も彼の名を呼ぶ。

振り向いた小鬼の焰色の緋い髪には血の朱が混ざり、黒の戦装束も赤黒くなっていた。

異形の鬼眼は本来の色が失せ、血より尚濃い緋へと変わっている。

そして、彼の右肘から鬼の象徴たる“角”がその存在を示していた。

呑まれてる。

周倉はそう判断した。

「まだまだ！ 同志達よ、巨悪に連なる悪鬼を滅し、世界を救うのだ  
！」

多対一でありながら、彼我の戦力差も戦況も明らか。

けれど、白装束の一団はそれを無視するように小さな戦鬼に襲い掛かる。

「この自殺志願者め……………」

周倉が哀れむように呟くと同時に、小鬼は姿を消す。

瞬間、白装束の一人の首が消失した。

噴水の如く噴き上がる血の向こうで、小鬼は生首を手に姿を現し、それを乱暴に投げ捨てた。

何故、首が消失したかなど、もはや愚問だ。もう何十と繰り返す行われたのだから。

その小鬼が力尽くで引き千切ったのだ。

ただ、それだけ。

言葉にすれば、たったそれだけの事をやった。

雑草を抜くようにして。

「　　ウツ」

その光景をリアルタイムで眼にし、一刀は胃液が喉元まで逆流しかけ、口を手で抑えながら呻いた。

人の死体はある意味　　いや、悪い意味で見慣れたと思っていたが、これは違った。

体を走る不快感が秒刻みで悪化する。

それに拍車をかけるが如く、小鬼はまた白装束の一団と接敵する。

指を揃え突き出した貫手ぬきては、白装束の左胸を容易く貫いた。

腕を引き抜けば、出来た空洞から貯水タンクが爆ぜたように血が噴き出した。

まだ血が噴き出しているその死に体を蹴り飛ばし、別の白装束にぶつけて動きを止める。

そして、小鬼は跳躍し、“角”を肘鉄の要領で使い、動きを止めた

白装束の頭を穿った。

「悪鬼め、正義の刃で滅べ！」

着地直後を狙ったか、凶刃が振り下ろされる。

その勢いを流すようにして、凶刃を振るう腕を掴む。同時に握り潰し、小鬼は蹴りを放ち腕を裂いた。

蹴り裂かれた腕が宙を舞って地に落ちる。

その間に、小鬼は苦悶の叫びをあげる事すら許さず、白装束の頭を掴んで地に叩きつけて潰した。

それで、白装束の一団全てが絶命した。

「……………」

言葉が出ない。

口にすべき言葉が浮かばない。

誰かに教えてほしいくらいだ。

それでも、一刀は立ち尽くす小鬼へと歩み寄った。

「朔」

名前を呼べば、彼は振り向いた。

眼は虚ろ、表情に感情の色は無く、まるで人形かおのようだ。

そして、彼の頬には一筋の涙が零れ落ちた。

「ごめん……」

やっと言えた言葉がそれだった。

謝る事しか出来なかった。

正面から小鬼の両肩を掴んで、膝を地面に着けて、何度もごめんと  
呟き続けた。

「俺……お前のお父さんなのに……本当にごめん」

情けない。

悔しい。

許せない。

そんな感情が一気に押し寄せ、いちゃいちゃと混ざり合って一刀  
の心を痛め付ける。

「ふむ、やはり人形では相手にもなりませんでしたが」

そんな時、平然とした男の声がした。

「誰だ!？」

咄嗟に小鬼を背に隠すようにして声の主を捜せば、屋根の上にその姿はあった。

黒髪、眼鏡を掛けたその顔は秀麗であり冷酷な印象を受ける。

そして、白装束の一団とは違った道士服を纏っていた。

「嘘……なんで……」

そう呟いたのは周倉だった。

「おや、そこにいるのは周倉でしたか」

「……旭、あいつを知ってるのか？」

「あいつは……張讓。月を利用した悪党。そして、私が討った死人  
つすよ」

周倉は怨敵にでも会ったかのように、張讓らしき男を睨みつけた。

「死人? でも、アイツ生きてるじゃないか？」

一刀の疑問は尤もである。周倉が嘘を言っているようにも見えないし、言う必要も無い筈だ。

しかし、件の本人が現れ、こちらに冷笑を向けている。

「確かにこの手で討ったつす。蘇らないように

「頭と心臓を貫き、ご丁寧に生中線をなぞるように両断されてましたよ」

クツ、と張譲らしき男は喉で笑い、自身の殺害方法を語った。

周倉が苦虫を噛んだような表情から、その通りなのだと一刀は悟れた。

「だったら、お前は　　っ!？」

「……ひっ」

「……む」

何故、生きているのか？

そう問い質そうとした瞬間、体が硬直した。

それは周倉も張譲らしき男も同じで、怯んだように小さく声をあげた。

硬直したのは、体が危険を感じて恐怖したからだと一刀は思い当たった。



(殺気だ……………)

戦場に満ちるこの感覚に覚えがある。

だが、質が違い過ぎる。

ドロドロとした恨み、焼き付けるような怒り、存在する事すら赦さない絶対的な殺意。

それが背中から全身を貫き、ここに縫い止めているのだ。

そして、疑問を持った。

(背中から?)

何故、背中越しに感じる?

自分の後ろには一人しかいない。

小さな戦鬼しかいない。

「お前らだ……………」

呟きが聞こえ、影が一刀を飛び越えた。

「お前らが殺したッ……!!」

怨恨の叫びをあげ、小鬼は張譲らしき男へと殴り掛かった。

「まだ動けましたか」

ちっ、と舌打ちをし、張譲らしき男は懐から札を一枚取り出すと言だけ呟いた。

「……………【阻】」

「っ!？」

突如、発現する紫色の障壁。それは戦鬼の剛力を宿した小鬼の一撃を“阻”んだ。

小鬼の拳は障壁に触れた位置から微動だにしない。

「大した一撃です。さすがは彼女の門弟だけある。ですが、私には……………む」

戦鬼の一撃を防いだ張譲らしき男は、嘲りの笑みを浮かべようとし

てすぐに消した。

ピシリツ、と音が鳴った。

それは小鬼の拳を中心に障壁に罅が入り出した音。

「  
！」

咆哮をあげ、小鬼は障壁を突き破ろうと更に剛力を込める。

罅が徐々に広がっていくが、張譲らしき男に慌てる様子は無い。

冷静にまた札を取り出し、同じように呟いた。

「離れなさい。……【斥】」

今度発現したのは見えない衝撃波。

不可視の攻撃を防ぐ術の無かった小鬼は、何も出来ずに無人の家屋を壊すようにして吹き飛ばされた。

「朔！？ お前、よくも！！」

「ふつ、死んじゃいませんよ。これくらいで死ぬようなら、鬼北斗の弟子など名乗れませんからね」

向けられる一刀の怒気を流しながら、張譲らしき男はほくそ笑む。

「しかし、やっとお話が出来ますよ。まあ、長くは出来ませんが」

「お前、何で師匠の名前を!？」

「知っていますよ。知らない訳が無い。彼女とは、ちょっとした縁があるのですね」

「嘘だ! 師匠は俗世 特にお前みたいな官吏に関わりを持つような人じゃないです」

「誰が官吏だと? ああ、張讓の事ですか。でしょうね、彼は彼女とは知り合えないでしょう」

「え」

不自然な解答に、言葉を失う。

自分の事をまるで他人の事のように言っている。

一刀は董卓を利用した張讓を知らない。彼を知っている周倉がそう言ったから、そう認識した。

「お前が張讓じゃないなら 誰だ？」

もし、の可能性に賭けて、一刀は男に問う。

「相変わらず変なところに鼻が利くんですね、貴方は」

「黙れ。早く答えろ」

「手厳しいですね」

肩を竦めた男は自身の名を告げる。

「私の名は、于吉。」

これが北郷一刀に敵対する内の一人の名ですよ」

また冷笑を顔に貼り付けて。

「なんで俺と朔を狙う!?!」

「何故？ 貴方が《北郷一刀》だからですよ。この世界の異物である貴方が、ね」

「何だよ、それ……じゃあ、朔は!?!」

「あの少年はそうですね………未知の脅威、とでも言うっておきましよう。」

ただでさえ戦鬼なんて化け物ですからね、そんな不安材料の芽を刈るのは当然でしょう」

退屈そうに于吉は淡々と答えていく。

自身がこの世界にとって異物なのは、百も承知だ。

自身が知る歴史で、物語で《天の御遣い》なんて呼ばれた存在はない。

だから、この世界の人々が《北郷一刀》という異物そんざいを受け入れてくれて嬉しかった。

そんな自分が

「俺が世界を壊すつていうのか？」

「ええ。もはや狂い出していると　　おや、もう察知されましたか。こちらもちちらで鼻が利く」

やれやれ、と于吉は肩を竦めると、その姿が段々と薄れだした。

時間のようです、と于吉は告げる。

「北郷一刀。貴方という異物を私達は赦さない。  
その命がある限り、自身が世界を脅かす存在おびやかである事を悩み、苦しみなさい」

「……………ま、て」

消え入るような細かい声と共に、満身創痍の小鬼が瓦礫を退かして這い出てきた。

「殺し……………て……………やる……………」

何度も呟き、傷だらけの四肢に力を入れて立ち上がろうとするが上手くない。

「ぐ……………ぬう……………あ、ああ」

「まだ幼いながら、その復讐心は大人以上とは歪んでますね。残念ながら、今は君の相手をしている時間はありません」

「あ、ああああ……」

「君も、またそこで己の無力さを嘆き、打ちのめされていなさい」

蔑むように鼻で笑い、于吉は霞みの如く姿を消した。

「……うあああああああ！」

小鬼は未だ燃え上がる怨嗟を吐き出すように、天に向かって咆哮をあげた。

そして、憤怒を叩きつけるようにして地面に何度も拳を打ち付けた。その度に彼の近くにある家屋が揺れていた。

誰も何も言えず、誰も動けない。

劉備と一刀は小鬼の怨嗟に混じった濃い哀しみに、どうしたらいいか解らなくなっている自分に不甲斐なさを感じていた。

孔明と鳳統は小鬼の拳が地を微かに揺らす度に、恐怖に耐えるように互いを抱きしめ合っていた。

趙雲と張飛は小鬼から噴き出る殺気に武人としての本能が働いてしまい、警戒の余り動けない。

誰も何も言えず、誰も動けない。　　筈だった中を関雲長は歩を進めた。

足取りは急いだものではなかった。まるで倒れないように一歩一歩しっかりと地を踏んで歩くようにゆっくりとだ。

そして、関羽は小鬼の後ろに立ってその小さな背に声をかける。

「……朔」

「ッ!？」

それは本当に反射的なものだった。

自身の名を呼んだのが劉備でも鳳統でも、恐らくは一刀でも同じだったろう。

動きは一瞬。

怨嗟を吐き出し続ける小鬼は関羽に牙を剥いた。

小鬼の拳は関羽の顔面へと迫る。しかし、その荒々しい一撃は彼本来の速さも鋭さも無い、何とも力任せな荒い一撃。

如何に戦鬼の“角”を解放しようとして、関羽に避けられない道理は無かった。

拳は彼女の顔の真横を突き抜け、髪留めを掠める。それにより髪留めは壊れ、流麗な黒髪がはらりと宙を舞った。

追撃すべく小鬼は関羽へと向き、



大きく眼を見開いて動けなくなった。

関羽は何もしていない。ただ避けただけで、今は立っているだけだ。

けれど、ダメだ。

頭から足の指先まで、一つとして動いてはくれない。

「朔」

自身の真名を呼ぶ関羽の声に小鬼の体がビクリと震えた。

そして、感じたのは心地良い温かさ。

「あ……………」

「もう……………大丈夫だ」

抱きしめられている。そう理解するのに、小鬼は数瞬だけ時間がかった。

関羽の温もりに安心して力が抜けていく感覚がする。

マダダ

“角”がズグン、と震えた。

マダダ。ゼンブコロサナキヤ

「がっ……ああ……」

“角”から流れ込む力の奔流に体が軋む。

ゼンブコロサナキヤ、マタウバワレル

マタ

「殺される」

「殺されない」

小鬼の呟きを関羽は即座に否定し、更に強く抱きしめた。

「白装束の者達は、もういない」

「もう……いない？」

「ああ。ここにいるのは、朔の家族と仲間だけだ」

だから、と彼女は続け、

「朔を怖がらせる者は、もういない」

安心しなさい、と小鬼

劉焯の頭を優しく撫でた。

「もう、いない……」

そう繰り返し呟くと、力の奔流は止まった。それに続くように全身の力が抜け、劉焯の視界はぼやけていった。

脱力感は徐々に強くなり、意識も遠退いていく。

気を失う寸前に見た関羽が、何故か知らない筈の誰かにダブって見えた。

「奴らは何者なのでしょうか」

そう呟いたのは関羽だった。彼女の腕の中では、劉焯が死んだように眠っている。

白装束の一団。

正体は知れず、目的は北郷一刀と劉焔翔刃の抹殺。

世界を救う為、世界を破壊する悪を誅する。

正義を掲げる彼らに、迷いは無かった。

一刀には天の御遣いの噂は出ていても、名声目当てに悪と評するにしても噂や声に関しては極僅かだ。

劉焔も噂を流し、鬼と自他共に称しているが、活躍し始めた期間が昔という程過去の事ではない為に、一刀や劉備程に有名ではない筈だ。

平原での善政を行う天の御遣いに、民を守る戦鬼。

そんな彼らの極僅かな少数派の者達の中に、白装束の一団程に迷いなく悪と評して襲撃してきた者はいなかった。

その理由は、于吉が言っていた。

（俺が《北郷一刀》だから、か）

実際の歴史にはいない、《天の御遣い》という存在。そして、《賊狩りの戦鬼》。

そして、一刀はふと気付いてしまった。

（朔が狙われるのは、俺のせい……？）

もし、あの森で出会わなければ。

もし、劉焯翔刃という名前をあげなければ。

もし、鬼と称して表舞台に立たせなければ。

あんな連中に狙われなかったんじゃないのかと、そう思ってしまっ  
た。

そんな時、一刀は袖をくいと引かれた。

見れば、周倉が顔を俯かせて袖の端を掴んでいた。何を言いたいの  
か、すぐに解った。

「あの……朔ちゃんの事」

「大丈夫。怖がったりとか嫌いになったりしないよ」

「本当ですか？」

「ああ。……けど、やりきれない」

「やりきれない？」

「俺は朔の家族になって、あいつの居場所になってやりたかった」  
けれど、それは自身の問題に巻き込んだだけだったのかもしれない。

「……………俺は朔の親になるべきじゃなかったのかな」

「それは違つつす」

一刀が吐いた弱音を周倉は一蹴する。

「この“世界”で朔ちゃんのお父さんになれるのは、おじ様しかないっす。

天の御遣いなんて関係ない。おじ様が《北郷一刀》だからこそ、朔ちゃんの家族になれたんすよ」

「《北郷一刀》だから？」

確認するように聞いてきた一刀に、周倉は力強く頷く。

朔ちゃんのお姉ちゃんが言うんだから間違いないっす、とまで断言してみせた。

その言葉に陰りが無いように、彼女の眼に同情の色も憐れみも無い。本当にそう思ってくれている。

「ありがとうな、旭」

感謝を込めて一刀は周倉の頭を撫で、周倉は照れながらも嬉しそうに笑った。

悩むのは後だ。

まずは、あの素直じゃない息子に誇ってもらえるような父親になるう。

一刀は強く決意した。

とある場所で3人の女性が茫然と立ち尽くしていた。

その3人とは、董卓と賈馱。そして、護衛役の華雄である。

「嘘、でしょ……」

「詠ちゃん……」

自身の眼を疑う賈馱の呟きに、董卓は不安げに彼女の手を握る。

華雄も眼を細め、沈黙を続けていた。

彼女らの前にあるのは、一体の亡きがら。確かめなければならない事があり、墓を掘り起こしたのだ。

亡きがらはそこそこに腐食し始めていたが、その生前の人相が判別つく程度には変わっていなかった。

いや、正確に言えば、変わっていた。

「……誰なのよ、コイツは」

既知の人物が、未知の人物へと。

眼前にあるのは、張讓の遺体の筈だ。現に、周倉の必殺の痕<sup>あと</sup>がある。

けれど、彼女らは彼を知らない。

自分達が知っている張讓は、こんな男じゃなかった。

知っているのは、于吉と名乗ったあの男の姿だ。

「……………どうなってんのよ」

誰に問い掛けるでもなく、零れた疑問。

その疑問に答えられる者など、その場にいる筈もなかった。



## 鬼と連合12 　　く狂鬼く（後書き）

お疲れ様です。

今回の話は、前回の話で載せきれないと判断した部分とその追記での構成です。なのに時間がかかった理由は、今回のラストのあたりが気に入らず、ずっと書き直していました。

サブタイトル通り、朔の本当の意味での暴走。あとは、旭と朔の伏線関連をぼやかしばやかして……要はかなり面倒だったのです。

今回は、幕間を予定しています。ちょっとあの人を出そうかと画策中です。

感想お待ちしています。

鬼と連合 終 く鬼の居ぬ間に (前書き)

遅ればせながら、あけましておめでとございます。

今回、朔視点の描写は無かったりします。そして、文量はいつもの半分です。

## 鬼と連合 終 く鬼の居ぬ間に

天子を傀儡とし、民を苦しめた董卓は討たれたという。

これにより、反董卓連合の戦いは終わった。

そして、連合は矛を置き、洛陽を復興する為に槌を手にとった。

各陣営は、自軍の備蓄した物を民の為に使い、城壁や家屋等を補修。炊き出しをして、食料不足を少しでも補おうとしていた。

そんな数日を過ごした明るる日、曹孟徳は従者も付けずに洛陽の町並みを歩いていた。

彼女の目に映るのは壊れた家屋、どこか疲れたような表情を浮かべた民。

それらを見た曹操は目を細め、この戦争の結果を胸に刻んだ。

そう、犠牲だ。

この犠牲が必要だったか必要でなかったかは解らない。けれど、目の前の惨状は弊害でしかない。

野心が生み出した不幸の。

(不幸を生み出した責任、その一端を私も担っている)

どうしてこうなる？

皇帝もいた。それに仕える臣もいた。

けれど、朝廷は腐敗し、世は乱れた。

結果、その皺寄せは民が被る事になった。

今回もそうだ。袁家の野心が引き金を引き、諸侯を巻き込んで董卓という贅を“戦争”という名の化け物へと差し出した。

曹操が董卓を贅と言えたのは、虎牢関の戦いの際、夏侯惇が捕えた張遼から聞き出したのだ。

董卓は天子に対して不敬な行いなどしておらず、圧政もしていない。全ては張讓という男の仕業だと。

それを聞いた時、夏侯淵は少し董卓に対して不憫だと同情するような言を口にしたが、曹操は同情などしなかった。

それどころか、不憫であれど自らの不明が招いた事、と切り捨てた。

現実には甘くない。

夢心地でいられるような優しい世界などない。もし、あるのだとしたら、それは幻想だ。まやかした。

幸せなんてものは、きつと砂粒のように細かくて、それが寄せ集められて初めて気付ける程儚いものだ。

けれど、集めてやっと気付けたそれを戦争が喰い荒らす。

だから、必死に守るしかないのだ。力が有る無しに関わらず、生きてる限り、ずっと。

（守れなければ、私も董卓と同じ穴の貉ムジナね）

歩きながら、曹操は内心で独り言ちる。

力はあった方が良く、と彼女は思う。武力だろうと、権力だろうと、財力だろうと。

自身が歩む覇の道を切り開くには、どれも必要なのだ。

それが民を救う事へと繋がるから。

そして、それを実現する為の布石が、あそこにいる。

### 賊狩りの戦鬼

見掛けは、どう見ても年端も行かぬ少年。だが、噂ではシ水関の守将であった華雄の奇襲に気付き、単身で防いでみせたという。

そして、飛將軍と謳われた呂布と引き分けた程の武力を持っているそうだ。

あの飄々淡々不敵な少年が、だ。

聞いた瞬間、曹操はゾクリとした。

恐怖などではない。きっと、あれは歓喜が齎したのだと自己分析する。

天が意思を持つならば、彼はきっと御遣いと同じように、戦乱を鎮める為に遣わされたのだ。

その絶大な武を以て。

（欲しいわね、あの子）

曹操の口角が僅かに釣り上がる。

鬼という忌避すべき存在だろうと関係ない。要は、その武が曹孟徳の為に振われれば、それでいい。

あの小鬼が自身に災厄を齎すならば、跳ね退けてみせよう。

災厄などに負けるようでは、この身は霸王足り得ない。

戦鬼の武は、この曹孟徳じゆんにこそ相応しいのだ。

（だから、渡してもらいましょうか、劉玄德）

曹操はほくそ笑み、劉備軍の陣地前まで来ると見知った顔を見付けた。

「あら、こんなところで奇遇じゃない。曹操」

「貴女……呉の孫策」

名を呟くと、孫策はゆっくりと口角を片側だけ釣り上げた。

「孫策。貴女、何故ここにいるの？」

曹操は疑念を口にし、一瞬だけ孫策の背後にある劉備軍の陣地を見た。

彼女は明らかに劉備軍の陣地から出て来た。

恐らくではあるが、劉備と孫策は今回の戦争で初めて顔を合わせた筈だ。しかも、彼女は鎖で縛られているとはいえ、一国の王。義勇軍から出世してきた劉備と話す事などあるのだろうか？

「それはこちらこそ聞きたいわね。曹孟徳程の人物が劉備なんて弱小軍に用があるの？」

「問いに問いで返すのは頂けないわね」

「それもそうね。私はお見舞いに来たのよ」

何と無しに孫策は問いに答える。お見舞い、という言葉に曹操は眉を顰しんめた。

王がわざわざお見舞いに来る程の人物が此処にいるのか？

「劉備軍で誰かそこまで負傷した者がいると言つもの？」

「ちょっと私のお気に入りが倒れたって聞いてね。護衛の眼を盗んで飛んできたのよ」

「お気に入りに？ 麒麟児と言われる貴女が気に入るなんて余程な人物なのでしょね」

「まあね。なんせ、あの曹操が欲しがるくらいなもの」

何食わぬ顔で孫策は曹操の目的を見抜いてみせた。しかし、曹操は驚きもせず、不敵に笑みを浮かべた。

あの少年は孫策に認められている。尚の事、自分の眼に狂いは無いと言われたも同義だ。

「ええ。貴女も気に入っているなら解るでしょ？ あの桁外れな武を持つ小鬼を劉備が従え続けるなんて無理でしょう。」

だから、この私が貰い受けに来たのよ。我が覇道を切り開くに相応しい力だわ」

「……………そうね。きっと劉備には翔刃を従え続けるなんて出来ないでしょうね」

孫策は曹操の言を否定しなかった。それに曹操はやはり、と確信するが、すぐに裏切られた。

「でも、貴女にも従え続ける事は無理でしょうね」

その言葉に愕然とする。



否定された？

何故、と疑問が次から次へと沸いて来る。

「あの小鬼が忠誠を誓うかしら？ いえ、元から忠誠心なんてもの  
持って無いのかも」

「……………どついう事？」

「言葉通りよ。翔刃は劉備に従ってない。つまり、臣下の礼は形だけよ」

それすらあんまり見られないけどね、と孫策は付け足した。

臣でなければ、何だと言うのだろうか？ 何故、倒れるまで力を貸す？

「従ってないのだとしたら、羅刹が劉備に与するのは何故？」

「羅刹？ 変わった言い方するのね。

理由は、好きだからよ」

は？、と曹操はその答えに怪訝な表情を浮かべる。

「以前、私に言ったのよ。

劉焰翔刃つて鬼は、甘つちよろい幻想が好きなんだって」

「甘つちよろい幻想……………」

そんな幻想を好むなら、劉備の理想はお誂え向きだ。

何せ、誰もが笑顔でいられる世、なんて夢見がちな理想だ。そんな甘ったれた底の浅い願い。

最近の子供の中でさえ、そんな事は無理だと悟る子供も出て来ているだろうに。

「所詮、世を知らぬ子供だったという事ね……」

「それに、徳だけで鬼の心を打ったって言うあの男がいるしね」

「天の御遣い……」

喰えない奴であるとは思っていたが、ここにきて霸道の邪魔をする。だが、手に入れられない理由が彼にあるのなら

「ふ……ふふ……」

「あら、怖いわねえ。どんな笑みよ、それ」

「孫伯符。私はね、欲しいと思ったモノは必ず手に入れる人間なのよ。」

もし、あの男が羅刹を従わせる障害であり鍵であるならば、天から遣わされた存在だろうと利用してみせる」

そうだ。あの羅刹は天の御遣いを守護する。天の御遣いの敵は、羅刹の敵でもあるのだ。

ならば、選択肢は二つ。いや、最悪を想定して、三つか。どれを取るかは、じっくりと考えるとしよう。

曹操は踵を返すと、歩いて来た道へと足を向けた。

「意外ね。翔刃を貰わずに帰る気？」

「今が羅刹を貰い受ける機ではないと判断したまで。……いずれ手に入れてご覧に入れるわ」

孫策の言に答えると、背を向けて曹操は歩き出す。

その背に孫策は、ただ一言だけ告げた。

「しないとは思っけど、あの戦鬼を金玉で懐柔しようとしても無駄よ。」

あれは、天の御遣いがした方法でしか力を貸さないわ」

その言葉に曹操は振り向かず、答えもせず歩を進めた。

語らずとも彼女の 霸王の背中が語っていた。

そのような事など百も承知。

故に、覇を以て従えてみせよう。

曹操がこの場を去り、その背を見送った孫策は振り返って劉備軍の陣地を見遣る。

「曹孟徳は厄介な相手よ？　せいぜい気をつけなさい、翔刃」

そして、眠り続ける小鬼へと届く事のない忠告を口にした。

董卓を保護した一刀と劉備達は、洛陽の民の救助活動を開始した。

手持ちの物資は少ないが、それでも誰かの助けになりたい。

そんな劉備らしい希望に反対意見は出ず、全員が張り切って行動に移った。

だが、一刀の心中では物足りないような、何処か欠けたような気持ちで渦巻いていた。

このお人好し

呆れたように告げてくる、いつもの幼い声が聞こえてこない。

(朔……)

劉焯は戦鬼の角を使って白装束の一团を屠殺してから意識が戻って  
いなかった。眼を覚ます様子すら見られない。

お前が……

ただ静かに、死んだように眠り続けていた。

お前らが殺したッ……！！

怨嗟の叫びを仲間の耳に焼き付けて。

「ふう。今日の仕事は終わりだー！」

一日の救助活動を終え、一刀は独り城壁の縁にもたれ掛かって座った。

彼の頭上には、星々が自己の存在を主張するかのように、もしくは近い未来を誰かに教える為に瞬いていた。

「もう一週間か……」

視界一杯に広がる星を眺めながら、一刀は呟く。

その日数は救助を始めてのであり、同時に劉焯が眠り続けている日数でもある。

周倉の話では、短期間でかなりの反動がくる“角”を2度も使ったのが主な原因であるらしい。

実際、呂布との戦いの後に劉焯が数日間眠っていた為、それは理解出来た。

だが、白装束との戦闘で叫んだ劉焯の怨嗟の声。

「お前らが殺した、か……」

それは劉焯が知る明確な“誰か”が白装束の一団に殺されたのだらう。

しかし、そこに引っ掛かった。

劉焯の交遊関係は広くない。むしろ、狭いと断言出来る。

彼の性格とコンプレックスから考えれば、その広さは簡単に一刀の知る範囲にすっぽり収まる程度しかない。

しかも、普段から飄々淡々としている劉焯が、想像出来ない程に殺気に満ち満ちていたのだ。余程繋がりが強い人でなければ、ああはならないだろう。

(だったら、俺が知らない訳ないよな……なら、もしかして)

思い当たる節はある。

一刀が知らない、知る事が出来ない部分がある。それは劉焯自身でさえも。

劉焯の無くした記憶。

劉焯の3年以上前の無くした記憶の中に、白装束の一団が関係した何かがあったのだろう。

しかも、最悪の関わり方で。

もしかしたら、周倉なら知っているかもしれない。けれど、彼女は知っていても教えてはくれない気がした。

「何が……あつたつてんだよ」

「お悩みのようね？」

零した咳きは空に消える事なく拾われた。

立ち上がり眼を向ければ、一人の女性がいた。手には月琴を携えて、静かにゆっくりとこちらに近づいてくる。

「こんばんは」

「こ、こんばんは」

「こんな夜に殿方が独りだなんて。貴方も占術を？」

「いや、占いは門外漢だよ。っていつか、アンタ、どうやってここに入って来たんだ？」

「どうやって？」

くすり、と月琴の女性は微笑み、一刀は息を呑んだ。

近づいて来た事で彼女の顔が見えた。

整った顔つきは綺麗だと断言出来る。劉備や関羽にだって引けはとらない。



けれど、眼が違った。

劉焰のように異形の双眸という訳ではない。

綺麗なのだ。

息を呑むくらいに。

怖いくらいに。

「星に乗って。貴方もそうでしょ？ 天の御遣いさん」

「……………何者なんだ」

「私は、ただの観測者。星と会話し、未来ひきを見る者よ。俗に言えば、占い師」

はぐらかすように答えた月琴の女性は、手を伸ばして一刀の頬を優しく撫でた。

一刀はそれを避けるでも払いのける事もしなかった。

女性の眼と合った瞬間、射竦められたように動けなくなった。何より、彼女の双眸は色濃い哀しみに染まっていたから。

「本当……………あの人にそっくり」

「あの…人…………？」

「まあ、貴方が『北郷一刀』なんだから、当然と言えば当然なんだ

けど」

「何で俺の名前を知ってる!?!」

「星に教えてもらったから」

「っ! ふざけるな!」

一刀は苛立ちの余り、掴みかかろうと手を伸ばしたが、虚しく空を掴んだ。

「案外せつかちなのね」

声が聞こえたと同時に膝の裏を足で突かれ、一刀は強制的に座りこまされた。

驚愕は無かった。

させられたのに、それが自然な気さえした。

今や一刀には、月琴の女性が既知の外にいる化け物にしか見えなかった。

「……………っ」

「そう睨まないで。貴方と敵対する気なんてないの。お詫びに、貴方が知りたがっている事を教えてあげる」

「……………俺が知りたい事が解るのか?」

「ええ。星は遠い遠い遙か彼方から私達を見ているし、何千倍も長生きなの。だから、ちっぽけな私達の考えている事なんてお見通し  
つて訳よ」

「……………なら、朔　劉焔翔刃が倒れてから眼を覚まさないんだ。  
いつ眼を覚ますか教えてほしい」

「……………私情に走るか。案外、親バカなのね」

ま、それも《北郷一刀》らしいか、などと呟きながら、月琴の女性は空を見上げる。

沈黙が二人を包む。

十数秒と経っていないが、それでも一刀には何時間にも感じた。それが彼の心に焦らしていく。

「……………解ったわ」

「本当か！？　いつなんだ？」

「慌てないの。劉焔翔刃が目覚めるのは、明日よ」

「明日？　そっか……………」

月琴の女性が告げた結果に、一刀は安堵し、いつの間にか強張っていた体の力を抜いた。

「そんな事で安心出来るのね。占いなんて、当たるも八卦当たらぬも八卦よ？」

「確かに信じた事に裏切られるのは辛いよ。でも、外れたからって君に八つ当たりするのは違うだろ？」

「そうね。未来なんて不確定で不安定なもの、完全に予知するなんて占いじゃないしね。ましてや、すが継るものでもないわ」

「占い師がそれでいいのかよ」

「いいのよ。占いなんて、ちょっととした可能性への矢印よ。その方向に歩いていくかは、当人にしか決められないもの。」

占い師の占いは、ただの気休め。信じ込ませた者勝ちのハッターがほとんど」

一刀が苦笑しながら言うと、月琴の女性は飄々と自分の職をそう語った。

一見、莫迦にしているようにも聞こえる物言い。けれど、真実も含まれているのだらう。

《天の御遣い》なんて神輿の自分もそうなのだから。

「エセ占い師さん」

「なあに？」

おどけて呼んでみると、月琴の女性はのってくれた。それが少し嬉しかった。

「良い親ってというのはどんなのか、星は知ってるのか？」

「さあ、どうかしらね」

なんて事の無いように聞くと、彼女は肩を竦めて答える。

「笑いかけてあげなさい。怒ってあげなさい。泣いてあげなさい。手を繋いであげなさい。抱きしめてあげなさい。一緒に寝てあげなさい。お話を聞いてあげなさい。お話を聞かせてあげなさい。色々な事を教えてあげなさい。見守ってあげなさい。守ってあげなさい」

あと、と彼女は続け、

「ずっと一緒に生きてあげなさい」

最後にそう言った。

その言葉に、はっとする。

主上はいなくなったりしないよね？

いつか、あの子が呟いた言葉が頭を過ぎる。

ずっと独りで寂しかった心を露わにした瞬間の言葉だ。

俺は、朔の前からいなくなったりも見捨てたりもしない

だから、自分はそう答えたのだ。

「ははっ。そうだ、そうだったじゃないか……最初に言ってたじゃないか」

「あら？　今のなんかで答えが見つかったの？」

「いや、見つかってないよ。うん、見つかってない」

月琴の女性は見つかってないと言う割には、一刀の表情がどこか晴れ晴れとしていたのに首を傾げた。

「見つかってないなら、答えはどうするの？」

「どうもしない。保留」

「保留て……」

「だから、息子アイツに初めて父親おれが約束した事を守るよ」

「それはどんな？」

「俺は朔を独りにしない。絶対に」

いつだってあの子の傍にいよう。

あの子の抱える闇はずっと深くて暗いのかもしれない。

けれど、寂しくないように、自分さえ見失わないように手を繋いであげよう。

前のように殺意に吞まれて、狂ったように力を振るうかもしれない。けれど、怖くないように、安心出来るように抱きしめてあげよう。

「エセ占い師さん。アンタの言葉、意外に結構参考になった。ありがとう」

「なんだか納得しにくいけど、まあ、いいですよ。  
為になったのなら、占い師としては本懐を遂げたって感じだし」

「“エセ”を忘れてるぞ」

「あら、いけない。私とした事が」

「一刀がおどければ、おどけて返してくれる。そんな彼女との会話が  
なんだか心地良かった。それに何故か懐かしい気さえした。」

いつの間にか、自然と表情が笑みを形作っていた。

「おい、何を遊んでいる」

そんな時、苛立ち気味な声が聞こえた。

振り向けば、一人の青年がいた。

年頃は一刀と同じくらいか。亜麻色に似た髪に、端正な顔立ちは美少年と言っていていいだろう。

鋭い眼光を湛えた眼には、若干険があるように見え、一刀と眼が合った瞬間に彼は小さく舌打ちした。

「早かったのね」

「ふん。こちらの用は済んだ。遊んでないで、さっさと奴を追うぞ」

「はいはい。それじゃ、御遣いさんへ最後の一言」

コホン、と一つ咳ばらいし、月琴の女性は言う。

「人生には無数の選択肢がある。が、正しい選択肢なんてもんはない。選んだ後で、それを正しいものにしていくんだ」

「えっ」

「とあるカツコイイお姉さんの言葉よ。迷える貴方にはぴったりでしょ？ 覚えておきなさい」



ピツ、と月琴の女性は一刀へと指差した。

「北郷一刀！ 劉焰翔刃をまた今回のような目に遭わせてみる、その時は貴様を殺す！」

「っ！ 当たり前だ。もう朔にあんな事させない！」

「だったら、守ってみせろ！」

「ああ！ やってやる！」

会っていきなりの喧嘩腰な青年に、さすがに一刀も苛立ち、荒げて返してしまふ。

睨み合いまでし始めた二人に、月琴の女性は頭を抱えた。ひとしきり溜息を吐くと、

「っがあ！？」

「はいはい。喧嘩しないの」

月琴で青年を殴り付けた。ガゴンッ、と良い音がした為、一刀はかなり痛いだろうなと察した。

現に青年は蹲って低く呻きながら、殴り付けられた頭を押さええている。

「だ、大丈夫か？」

「大丈夫だ……問題ない……」

(大丈夫じゃないだろ？ 声、震えてるぞ)

やっぱかなり痛いんだな、と一刀は同情し、容赦ない月琴の女性に背筋が寒くなった。

「はい、起立」

「ちょ……ちょっと待て」

「……立ちなさい」

「はっ！」

静かな威圧に抵抗出来ず、強制的に青年は立ち上がった。その光景に一刀は何故か親近感を覚えずにいられない。

「ごめんなさい。この人の代わりに謝るわ。お詫びのお詫びに、もう一つだけ知りたい事を教えてあげる」

「もう一つか……」

一刀は数秒黙考すると、うん、と頷き口を開いた。

「アンタ達の名前、教えてくれないか」

予想してなかったのか、月琴の女性は眼を丸くした。対して、青年は予想してたのか、どこか確信と呆れの混じった微妙な顔をしてい

た。

「そんな事でいいの？」

「“そんな事”なんかじゃない。大切な事だろ」

「そうかしら」

「そうだよ。“友達”の名前を呼べないなんて哀しいだろ？」

「　　つく……あは、あはははは」

月琴の女性は思わず笑ってしまった。真面目にそういう事を言う刀は、彼女が知る“彼”にとても似ていた。

「会ったばかりなのに、もう私を友達だなんて。貴方、かなり変よ」

「また言われたか……まあ、いいや。俺はアンタと話して楽しかった。だから、また会えたら雑談でもしたいんだ」

「そうね。私も楽しかった」

「ついでに、お前とも話してやる」

「貴様……殺すぞ」

「やるか、テメエ」

また睨み合いし始めかけるかと思ったが、月琴の女性が鈍器げつきんを振り上げた為、二人は即座に土下座に移行した。

「まったく……会って早々喧嘩ばかりなんて。貴方達、案外馬が合  
うんじゃない？」

「「違っつー!!」」

「ほら、みなさい」

「「……………」」

沈黙さえ息を合わせたようにしてしまふ。一刀と青年は苦々しく思  
いながら、互いに顔を背けた。

「ホント仲がよろしい事で」

怖いくらいに綺麗な眼を半眼にし、月琴の女性は言う。

どう反論しようが彼女は仲良し発言を取り消さない。そんな気がし  
た一刀は、立ち上がって話を戻す事にした。

「俺は、北郷一刀。アンタ達は？」

「悪いけど、名乗る名が無い」

「うわ、いつかの朔みたいな答え」

「冗談よ」

月琴の女性はジト目で見てくる一刀の視線を飄々と流し、今度こそ  
自身の名を口にした。

「私は管輅。星詠みの管輅」

「かん…………る？」

「そう。そして、こっちが」

「…………左慈だ」

面倒臭そつに名乗る左慈に、管輅は困ったような表情を浮かべる。

そして、彼女は一刀へと柔らかな笑みを向けた。

「もう行かなくちゃいけないから…………」

「そつか。んじゃ、また会ったら次も雑談とかしような」

「そうね。その時はまたお侵入せいりするわね」

「心なしが漢字が違うような……………」

「気のせいよ」

「左慈…………」

「俺にはどうも出来ん」

「見掛けに寄らず奔放なんですネ……」

勝手に動き回られる苦勞が劉焔で理解出来る一刀は、また左慈に同情した。

けど、なんか気に食わないので頑張れとは言わなかった。

「それじゃ、一刀」

「ああ、またな」

「ええ。縁があれば、また」

それを最後に、管輅と左慈の姿は夜闇に溶けるようにして消えた。

後に、一刀は思い出す。

黒天を切り裂いて、天より飛来する一筋の流星。その流星は天の御遣いに乗せ、乱世を沈静す。

そう予言した者こそ、彼女であつた事を。

「変な奴と知り合っちゃったな」

昨日の事を思い出しながら、一刀は独り言ちた。

今、彼が向かっているのは劉焯が眠っている部屋。管輅から今日や  
つとあの子が目覚めると聞いた。

まだ目覚めていないかもしれない。今日も目覚めないかもしれない。  
そんな不安に駆られるが、一刀に彼女を責めるつもりは、昨日言っ  
た通り毛頭無かった。

「でも、起きてほしいな」

望みを呟いた瞬間、ぽすつと何かぶつかってきた。

その覚えがある衝撃の感触に、一刀はまさかと思う。

確かめる為に目を向ける。

そこには、大切な我が子の姿があった。

小さな腕で一刀を放さないようにしがみ付き、顔を隠すようにして  
抱き着いていた。

「は……はは」

安堵の余り笑みが零れ、目の前が涙でぼやける。

(エセじゃ、なかつたんだな)

ありがとう。

新しい友に、心の中で感謝した。

取り敢えず、皆に知らせなくちゃ。

一刀はそう思いながら、抱き着く我が子の手に自身の手を重ねた。

(それと、謝んなきゃな)

皆には悪いが、今日だけは復興作業を休ませてもらおう。

今だけは、この子の気が済むまで一緒にいよう。

(俺も……一緒にいたいからさ)



## 鬼と連合 終 く鬼の居ぬ間に〜（後書き）

新年一発目の投稿となりました今話ですが、セリフ無し+最後にちよつとだけ、と主人公の出番サクほぼ無しでした。

まあ、初めからそういう予定だったので仕方ないのですが。

曹操の視点で書くの中々難しいですね。書こうとすると、小難しいことを言わせたくなくなってしまい、序盤が思ったより長くなってました。孫策の出番が遠い……

そして、管輅と左慈の登場。原作だと、彼女はキーパーソンじゃないの？ とずっと思っていたのですが、小説版でしか管輅の出番は無いという扱いに首を傾げてました。彼女の描写は少ないので、ミステリアスはミステリアスではありませんけど。

まあ、うちの管輅はこの管輅から改変入れています。

左慈は、あれです。于吉出したら、出さずにいられないという理由ではないですよ？ 中の人は非常に好きですが。

今回の二人は、何気にキーパーソン予定です。なので、早々出番は無いかもです。

今回は、IMASARAな朔たちの自己紹介かもしれません。

感想、品評お待ちしてます。

2 / 2 4 サブタイトルの『番外』を『終』へと変更しました。

## 鬼の名乗り（前書き）

IMASARAなキャラ紹介です。

書き方がいつもと違います。

あと、きっと読みにくいとおもいます。すみません……

## 鬼の名乗り

一刀「どーもー！ 最近、お父さんやってます北郷一刀です！」

旭「どもどもー！ オリキャラ2号にして鬼のお姉ちゃんこと、旭  
つす！」

朔「……………」

一刀「そして、白い目で俺たちを見ているのが、主人公の朔です！  
！」

旭「イエエーイー！」

朔「……………」

旭「白い目で見てくるレベルが上がったっすね。もう、そんな目で  
見られたらお姉ちゃん泣いちゃうよ？」

朔「 黙れ」

旭「にべもないっ！？」

一刀「一言目から暴言かよ……………」

朔「僕の勝手だよ。言いたいことは結構あるんだけど、まず、これ  
は何なのさ？」

一刀「これ？」

朔「だから、これは何の集まりなのさ？ 3人しかいないし、会話しかしてないし」

一刀「そのことが。答えは簡単だ。頼んだ、旭」

旭「了解っす！」

朔「……………簡単なら自分で答えればいいのに」

旭「今回は番外の番外……………朔ちゃんと私の自己紹介でもしようか、という作者の今更な復習的構成っす。あとついでに、華雄っちこと、スグっちの真名も」

朔「確かに今更だね。初投稿から1年経ってるのに、僕みたいなのを紹介するなんてさ」

一刀「今まではやらないつもりだったし、伏線の都合とか朔の設定とかでごちゃごちゃするのが嫌だったらしい。そんなこんなしてたら、反董卓連合編に入っちゃってさ」

旭「そのうえ私も出て来ちゃったっすから」

朔「ふぐん、そっか。それじゃね」

一刀「おう　　って、帰ろうとしない」

朔「うにゅっ!?!」

旭「おお、見事な猫っ掴み」

朔「何で帰っちゃだめなのさ？」

一刀「お前が話の主役だろうが。早々に帰ろうとしない」

朔「何が悲しくて、自分の事なんて話さないといけないのさ？」

一刀「そうかもしれないけど、読者の皆さんにお前の事をもっと知ってもらいたい機会なんだからさ」

朔「そんなこと言って、本当は作者が最近書いてると僕の設定が変わってきてる気がするから再確認も兼ねて、とかじゃないのさ？」

一刀「ソ、ソンナコトナイサ」

旭（凶星突かれた……そして、動揺し過ぎっすよ、おじ様）

朔「あからさまだね。主上、もっと腹芸の練習しといたほうがいいよ」

一刀「はい……ん？ いやいやいや、今は朔についての紹介をするって話だったろ。観念しなさい」

朔「鬼は隠<sup>おぬ</sup>、ってことでヤダ」

旭「仕方ないっすね。朔ちゃん、これを見るっす。あと、その言い回しは意味が伝わり辛いと思うな」

朔「さあね。で、何なのさ、この手紙……………っつ」

旭「ふっふっふ　まだ帰る気はあるっすか？」

朔「旭のズル！」

旭「ふふん。鬼の世界は厳しいのだよ、っす」

一刀「その手紙、誰からなんだ？」

旭「見れば、解るっす」

「ご主人様の言うことをちゃんと聞いて、良い子にしてなさい

愛紗より

一刀「朔、憐れな……………」

旭「読者様から、ほぼ朔ちゃんのお母さん認定されてるおば様から言われては、朔ちゃんは逆らえないっすよ」

一刀「あれ？　俺は？」

旭「気にしたら負けっすよ」

一刀「気にせずにはいられないんだけどな。まあ、今回は見逃そっ」

朔「うう…………お父さんのバカ……………」

旭「いじけた朔ちゃんは後からイジるとして」

一刀「追い討ちかよ。容赦ないな」

旭「ではでは、まずは朔ちゃんの紹介からっす」

### 《劉焰翔刃》

真名：朔

燃えるような緋色の髪に、瞳孔が縦に開いている異形の双眸“鬼眼”を持つ少年。

身長は愛紗の胸元くらいしかなく、鈴々よりも頭半分程小さい。顔つきは幼いが故に中性的であり、呆れや不満などがあるとよく半眼になる。白蓮曰く、一刀と愛紗に似ている気がする。

性格は基本的に飄々淡々にして不敵。頼まれると文句を言いつつやっつけてあげてしまう、素直じゃないお人好し。北斗からの教えの為か、生きようとする意志を持つ者を好み、その意志が無い者を嫌う傾向がある。決して“助ける”とは言わず、“助ける”ような行動をとっても“守った”と言い張る。



武器は双剣の干将・莫耶（形状は某弓兵さん愛用の物と同形）、戦鬼の“角”。

戦装束は漆黒の軽鎧に、籠手に脛当てを組み合わせた余り動きを邪魔しない物を装備。そして、刃が角のように付けられた真紅の鬼兜。因みに、籠手には桃香から貰った水晶製の羽のお守りに似せた模様が彫られている。

一刀と出会う3年前からの記憶が無く、名前も失くしていた。当初は師である北斗から兄弟子の旭と共に生き残る術を、文字通り死に掛けながらも叩き込まれていた。これにより生き残る事を第一にし、多少生き汚い事も手段も辞さない考えも持っている。培った戦闘技術も、あくまで生き残る為の手段の一でしかなく、勝ち負けに興味は無い。

1年半程して突然に北斗と旭は失踪。当時は今以上に自身の内にも外にも無関心な面が強かった為、特に何も思わなかった。

以降は独り、住処の森に侵入してくる賊を倒すなどしながら生活していたが、その際に近くの邑の住民などに何度か目撃されてしまう。鬼眼の影響もあってか邑の住民から『童姿の人喰い鬼』と呼ばれ、恐れ疎まれていた。それ故に他人との距離を置くようになった。

それから時が流れ、住処の森へ賊討伐へと来た一刀と桃香に出会い、<sup>お</sup>“誰もが笑顔で暮らせる世界”を待つのではなく創りたいという理想を聞き、仲間になる事を決意する。（実際は実現出来るとは信じていないが、甘っちょろい幻想が好きだからという理由もある）

この時、一刀からその場にいた桃香、愛紗、鈴々と自身の名前を元にした『劉焔翔刃』という名前と、始まりの意味を込めた『朔』と

いう名前を貰った。

『劉』 言わずもがな、桃香。

『焰』 愛紗の“関”に繋がりという意味が含まれている事から、同じ意味の“縁”を朔の火のように緋い髪の色に合わせて。

『翔』 鈴々の“飛”を同じ意味を持つ“翔”を。

『刃』 一刀から。二字を合わせ、乱世を終わらせる道を切り開けるようにと意味を込めて。

平原に着いてからは一刀の専任護衛役に就く。同時に、『天の御遣いの傍には彼の徳に打たれ、守護する戦鬼がいる』と噂を流して一刀の勇名を高める為に大々的に“鬼”を自称する。

一刀とは親子の契りを交わし、目付け役として愛紗が、先生役で雛里が付く事になった。

《天の御遣い》を守護する戦鬼の存在を世に知らしめる為、賊討伐を繰り返す内に『賊狩りの戦鬼』と呼ばれるようになる。その武力は呂布と並び、右肘の戦鬼の“角”を開放すれば、戦鬼本来の武力を發揮して互角以上の戦闘も可能となる。その類い稀た武で、どんなに苦しい状況で絶体絶命な危機でも、雀の涙程の勝機や一刀たちが助かる可能性があるなら、無理でも無茶でも命を賭けてそれを掴み取ろうとする。

旭「とまあ、こんな感じすかね」

一刀「一言で言つと、かなり長いな」

旭「それだけ放置+補足があつたつて証拠つすよ。で、朔ちゃん」

朔「……………」

一刀「朔、恥ずかしかつて俺の後ろに隠れるなつて。」

朔「やーだー……………」

旭「何故に半泣き…………？ あ、それと補足の補足。朔ちゃんの子どもモードつすけど、頭が上手く働かなかつたり、心が折れるとなつちやうつす」

一刀「例としては、睡眠不足だつたり、愛紗の厳しい説教を受けたりとか。な。つてことは、今は心が折れかけてるのか」

旭「まあ、あともう一個あるんすけど。それは追々」

一刀「んじゃ、次は旭の紹介」

旭「どぞぞー！」

《周倉》

真名：旭

朔の姉を自称する鬼の少女。

赤みがかった茶色の長い髪を頭の後ろで上から小中大の3つのポニテールにして束ねている。鬼であるが、朔と違って異形の双眸ではなく、丸くぱっちり開いた藍色の眼をしている。綺麗というよりも可愛い顔立ちをしている。年齢、身長は共にたんぼぼと同じくらいである。

性格は基本的に明るく陽気でフレンドリー。たまに人を食ったような発言でからかったりと、朔とは違った意味で飄々としている。普段、語尾に「っす」と付けて話すが、真面目な場面になると言葉遣いが変わる。朔に対してだけ一人称が「お姉ちゃん」になる。

武器は自身の身の丈ほどある白銀の突撃槍

羲和<sup>ひら</sup>。

戦装束は朔と似た漆黒の物を纏っているが鎧などは付けず、代わりに両腕両足に計4つのリングをはめている。旭の戦闘中に光り出すことがある。その際には、羲和から炎弾を放った事もある。

北斗に師事する朔の兄弟子。朔と同様に生き残る術を叩き込まれた

為、戦闘　延いては生き残ることに關しては朔に近いものを持つ。

一刀と愛紗に似た“おじ様”と“おば様”に強く憧れている。彼らは困っている人を躊躇いなく助けるような正義の味方じみた人であったようで、その影響を強く受けている為、自分の力は誰かの為に使うのを当然と考えている面がある。

反董卓連合戦では、とある事情により恩のある月が、張讓に成り代わっていた于吉に利用されていると知って恩を返す為にも参戦する。シ水関で朔と交戦するも敗れ、虎牢関で呂布に朔の強さを忠告して撤退。その後、虎牢関が落とされたと知ると華雄と共に月のいる洛陽へと駆けつけ、朔と再開した。

師である北斗から何かしら聞いているのか、北斗と白装束の一団との因縁はある程度知っている。そして、朔と白装束の一団を合わせではいけないと聞かされていた。

とある約束を守る為、朔と一緒にいる事を望んでおり、それを使命とさえ思っている。

旭「あれ？　朔ちゃんと比べると量が違い過ぎないすか？」

一刀「あんまり書くとネタバレ事項を書いちゃいそうだから、書きたくても書けないって」

旭「まあ、そうっすよね。私の事は話の最後にでも近づかないと書けない事多いっすから」

一刀「そっさいや、作者が旭のセリフで横文字使ってもツッコミが来ないのに驚いてたな」

旭「本編でツッコんでない部分を、ここでツッコまないでほしいっす」

一刀「付け加えると、あれは意図的に横文字使ってるそうです。気が向いたら、探してみてください」

旭「まあ、あの人、ツッコまれるかなって思った所がツッコまれな  
い悲しい人っすから」

一刀「あと、PVのアクセス数が切りのいい所で、万突破記念  
！の話とかやろうと画策していると、知らない内にとっくに突破して  
たりとか間が悪いんだよな」

朔「だって、第一話投稿した時点で僕の名前が決まってるじゃないよな  
人だし。仕方ないんじゃないのさ？」

一刀「フォローしようとして失敗してるぞ、朔」

朔「？」



《華雄》

真名：直葉すくは

適当です

旭「 以上っ！！ 」

朔・一刀「 嘘をつくな！ 」

旭「 ありゃ？ 親子のふれあいは終了したんすか？ 」

一刀「 それはまた後で触れ合っ 」

朔「 だよ 」

旭「 朔ちゃん、お姉ちゃんとのふれあいは？ 」

朔「 無い 」

旭「 …………… 」

一刀「 おーい。そんな部屋の隅っこで体育座りして落ち込むなよー 」



朔「今度は僕らが放っておこうか。それじゃ、今度こそ由来説明だよ」

## 《華雄》

真名：直葉すくは

真名を決める際、史実の華雄を調べていると華雄の名前が“葉雄”であるという説を見つけて一字は『葉』に決定。

原作で、敗走中に敗將の自分についていくと語った華雄隊の生き残りりと熱い叫びを上げていたことから、かなり根が真つ直ぐであると判断。これにより、『直』に決定。

二字を合わせ、『直葉』と決定した。

武に関して傲慢とも取れる並々ならぬ自信を持っていたが、今作では子供の朔と鈴々に負けた事でそれも喪失する。何故負けたかを感じとって考え、朔の言葉で“武”とは違う強さを学ぶ為に劉備軍に入り、朔に教えを請う。

旭「……………あれ？ 私の説明、そんなに間違っていないんじゃないっすか？」

一刀「いや、文章にしたらこんなもんだけど、意外に時間かかってるんだよ」

朔「作者が、名前はそう投げ遣りに決めていいもんじゃないってさ」

一刀「それに萌将伝のビジュアルファンブックで直葉のページを見た時、仲間にしてよかったって思ったんだぞ」

旭「ふえ？」

朔「だって、原作製作者の言葉がさ……………」

一刀「色々とありがとう」

旭「……………これだけ？」

朔「そ、これだけ」

一刀「作者は涙で前が見えなくなるかと思ったそうだ。いくら何でも不憫だって」

旭「……………後で、スグうちに謝ってくるっす」

朔「そうしてあげて」

一刀「とまあ、こうしてお送りしましたI M A S A R Aなキャラ紹介でしたが、どうだったでしょうか？」

旭「初期設定とか残していたものを再編して書いていたので、矛盾らしきところとかあったら教えてくれると助かるっすよ」

朔「まあ、やっつけな部分もあるし、書いてない事もあるしね。読みにくかったら、ごめんなさい」

一刀「次回は、原作で言う拠点フェイズの話の数話書いていく予定です」

朔「一年ぶりの日常を描く……戦闘ばかり書いてたのに、ちゃんと描けるのかな？」

旭「それは作者のがんばり次第ですよ。なんでも、少しふざけたらしいから……頑張ってね、朔ちゃん」

朔「うわあ、他人事ですか」

一刀「主人公の宿命だろ」

旭「おじ様も頑張って」

一刀「あ、俺も巻き込まれるのか………」

旭「さて、こんなグダグダなお話ですが」

一刀「これからも朔を始めとした皆で楽しんで頂けるように頑張ります」

朔「応援してくれたら、嬉しいかな」

朔・一刀・旭『ではでは、本編でまた会いましょう!~!』

## 鬼の名乗り（後書き）

なんだ、これは!?

そう思った方は挙手願います。

手を挙げた方、本当に申し訳ないです。

ちょっと書き方を変えてみたら、思ったよりも大変でして、こんな感じで文章を書いている作者さん、すごいですね。私は、もうしないだろうと確信が持てますよ。ええ。

本文でも書きましたが、変なところがあったら教えてくださると助かります。

## 寝込んだ鬼（前書き）

日常編に戻ってきたはいいのですが、こっちの書き方が分からなくなっていました。

なんてこった……

## 寝込んだ鬼

反董卓連合が解散し、集まった諸侯は各々の領地へと帰還していく。それは劉備達も同じ事。

平原に戻った劉備一行は戦後処理に忙しい毎日を送り、眼を回すかと思っただ。

そんな明くる日の事だ。

一刀は息が切れるのを堪えながら、城の廊下を全速力で走っていた。

賊の集団が現れたのでもなく、城下街で火事が起こったでもなく、一人の親として走っているのだ。

「朔が倒れた!？」

そう聞いては走らずにはいられない。

劉焰は少し前に倒れたばかりなのだ。まさか、その後遺症のようなものが残っていたのか？

不安に駆られながらも、目的の部屋の扉が見えてきた。不安を吹き飛ばすように扉を蹴破らんばかりに開けて飛び込んだ。

「朔、大丈夫」

「うるっさい!!」

「ギャアーっ!?!」

そして、自分が吹き飛んだ。

「風邪?」

「そう。風邪っすよ」

一刀は正座させられたまま、周倉の言葉を繰り返した。

因みに彼の隣には同じように正座させられた関羽がいた。何故かは言わずもなだろう。

「まったく、カズ兄も愛ちゃんも病人の部屋にドタバタと。もっと気を使ってほしいっすよ」

「わ、悪い」

「面目ない……」



年下であろう周倉にジト目で怒られ、一刀と関羽は小さくなるばかりだった。

その周倉は水の入った桶から浸した布巾を絞り、寝台で眠っている劉焰の額に乗せた。

一刀と関羽が騒がしく入って来たというのに起きる様子は無かった。というよりも、劉焰の場合は眠っていたとしても扉の前に誰か来ると気配で目が覚めるらしい。いつもなら一刀が廊下にいる時点で起き上がっている筈なのだ。

しかし、彼は起きていない。相当辛いのか、と一刀は心配に表情を暗くする。

それに気付いた周倉は、心配ないと告げた。

「風邪の原因は主に疲労つすね。慣れない行軍に、残ってた“角”の反動。これが家に着いて気が緩んじやった弾みで、一気に出て来て、体が参っちゃったんすよ」

「じゃあ、安静にしてれば、すぐに治るんだな」

「そうつす。けど、風邪は万病の元。しっかりきっちり安静にしてしなくちゃダメつす」

「解った。なら、見張りを立てましょう」

「そこまでしなくていいんじゃないか？」

「ダメです。朔は勝手に動いてばかりなのですから、見張りは必要です」

「そっか。じゃあ、早速誰か来てもらおう」

うん、と頷き合う二人に周倉は苦笑いを浮かべる。

(この親バカさん達は過保護っすね)

そう思わずにいられず、劉焯の服の中に手を突っ込んで棒状の物を取り出した。

「えっと、38度4分。まだ高いっすね」

「あれ？ 旭、それって」

「ふえ？ 体温計っすよ。水銀の方の」

「いや、なんである？」

「？ 作ったからっすよ」

何かおかしい？ と周倉は首を傾げる。

おかしいに決まっている。

ここは三国志の平行ワールドとはいえ、天の国である現代から遙か昔である事には違いない。

一刀も現代の知識から、この時代にある筈の無い物を作ってはいる。

あった方が便利であるし、医療器具等は無くてはならない物だつてある。

(俺、体温計は造ってないぞ)

デジタル表示の物はともかく、水銀式体温計はまだ完成出来る余地はあった。

ただ、水銀が危険物でもある以上、手が出し辛いのだ。固形状ならいざ知らず、気化してしまえばたちまち公害レベルの被害が起こるかもしれない。

そう思っていた一刀が二の足を踏んでいたというのに、周倉は完成させてしまっている。

しかし、

「旭、何でそれが作れるんだ？」

事実、水銀式体温計は1866年に作られた物だ。

現代から来た一刀“以外”に作れる筈が無いのだ。

一刀の問いに、周倉は一瞬だけキョトンとすると、次の瞬間には彼女らしからぬ妖艶な笑みを浮かべた。

「女には秘密があるもの。それを暴くの？」

「いきなり真面目な口調になったな。」

けど、お前がこれを作ったのなら、俺以外の誰かに教わったんじ

やないのか？」

「私が天の国 現代に行つた事があるのかもよ？」

周倉の言葉に関羽は驚き目を見開くが、一刀はその可能性を考えていたのか、動揺一つ見せない。

「……そうかもな。だから、真面目に答えてくれ」

それを踏まえた上で、一刀はもう一度聞く。声音に真剣さと真摯さを乗せて。

「………ずるいつすよ、そんな顔されたら答えたくなるじゃないすか」

「答えてくれるのか？」

「端的に、なら。でも、それ以上は答えないつすよ」

「それでもいいよ。ありがとう」

「………やっぱりずるい」

「………その気持ち、解る」

一刀が笑みを浮かべて言うと、周倉は顔を背けて小さく呟いた。関羽は彼女の気持ちが解る為、かなり共感していた。

「それじゃ、端的に答えるつす。師匠から教わつたんすよ」

「師匠？ 確か北斗と言ったか。天の世界の知識を持っているとは……もしか、ご主人様と同じようにこの世界に来たのでは？」

「……………」

「旭？」

「答えたくないのな」

「ぬう……………」

「まあまあ」

口を押さえて黙秘を主張する旭。それに齒噛みする関羽を、一刀は宥めた。

「でも、カズ兄。師匠が天から来たとして、会ったら天に帰る方法でも聞く気だったんすか？」

「ご主人様……………」

今度は彼女が聞く番だった。

遠回しに、元の世界に帰りたくはないのか、と聞いている。

それに一刀も関羽も気付かない筈がない。

関羽は、その瞬間に一気に不安が込み上げてくる。

元々、一刀は義勇軍立ち上げの際に劉備と張飛の三人で《天の御遣

い』になってくれと願い倒した。

戦争に巻き込まれるというのに、一刀はそれに頷いてくれた。

### 誰かの為に

その気持ちに応えてくれて嬉しかった。反面、罪悪感が無かった訳でもない。

戦争など他人事のような国せかいにいたのだ。直視しなければいけない惨げん状じょうに心乱さないなど難しい。

けれど、それに耐えて、今まで劉備軍の支えとなって引つ張つてくれている。

あの時と今の彼が違つるように、この胸に秘めた一刀に対する想いも違つのだ。

もし、彼が帰りたいのならば、誰にもそれを止める権利は無い。

それでも、

( 帰らないで…………… )

一緒に居てほしい。

そう、願ってしまふ。

安心して前に進めるように、背中を押してほしい。

優しい笑顔で、この心に暖かな灯を燈してほしい。

こんなもの、単なる我が儘だ。

だとしても、これは                   この想いは間違いなく心からの願いなのだ。

「帰らないよ」

そして、彼はいつだって願いに応えてくれる。

「……え」

「俺は帰らない」

不安が顔に出てたのか、一刀は関羽の肩に手を乗せてもう一度答えた。

「帰りたくないんすか？」

「あつちの世界が恋しくない訳じゃないよ。俺にも家族や友達だっているし」

「ご主人様……」

「けど、俺にはこっちでの実現したい理想がある。果たさなきゃな

らない責任がある。

それに、こつちにだって家族も仲間もいる」

まあ、その家族は今は寝込んでるけど、と一刀は付け足す。

「帰るにしたつて、こんなに未練ばつかじゃ帰れないさ。

それに朔と約束してるしな」

「約束つすか？」

ああ、と一刀は答える。

「朔を独りにしない、つてさ」

気怠い体は熱いのに、異様に寒い。

そんな不快感を久しぶりだな、とはつきりとしない意識で劉焔はそう思った。

いつだったかは覚えてない。少なくとも、独りで森暮らしをしていた時期じゃないだろう。

独りの時期だったら、病気になどなっっていられない。守ってくれる人も看病してくれる人もいないのだから。



なら、北斗や周倉と一緒にいた時期か？

(絶対ないなあ)

彼女らと一緒にいた時期なら、寝込むではない。文字通り、死にかけていた、だ。

肉を潰され、骨を砕かれ、精神を裂かれ、魂さえ破壊され、黄泉路の門前までよく送られた。

その時の感覚は体に十二分に染み付いている。だから、違つと断言出来る。

(なんだ、大した事ないんだ)

命に危険がある訳じゃない。そう判断すると、すぐに思考を放棄した。

体調は万全ではないが、敵性があればいつものように体が勝手に気配を察知するだろう。

そんな投げやりな思考の止め方をすると、

(……………あ)

誰かが自身の手を握り締めてきた。

一瞬、一刀かと思ったが、すぐに違つと解つた。あの父親の手は、こんなにも小さく細く柔らかではない。

でも、安心する。

一刀とは違った心地良さがある。

「だ……れ……」

水分を取ってなかったからか、声が掠れた。

まどろんでいた意識で閉じていた眼を開くも、視界はぼやけてはつきりしない。

かろつじて見えるのは、手を握るその人の輪郭がやっと。人の顔さえ見えやしないというのに、いつか幻視した女性に見えた。

「っ……あ……」

それは突然に。

急に心が弱り出す。今の今までであった投げやりな思考は影さえ無くなり、怖いくらいに不安が劉焯の精神に爪を立て出した。

心境はまるで高所から落ちかけ、命綱を必死に掴んでいるような宙ぶらりん状態だ。

訳も解らぬ切迫感と不安に恐怖が混ざりに混ざり、パニックになりかけている劉焯にとって、握り締めてくれている手の温もりが本当に命綱のように思えた。

放したらどうにかなってしまいそうで、この温もりを失いたくなく

て、上手く力が入らない手でなんとか握り返した。

「大丈夫」

そんな彼の不安を察したか、女性は劉焯の手を両手で包んで言った。

「何も怖くない。私が傍にいるから」

優しく穏やかな声は、ゆっくりと不安を掻き消していく。

「早く元気になる為にも、今は寝ていなさい。もし、怖い夢を見ても私とお父さんが助けてあげる」

「ほ、んと……？」

「本当。だから、早く元気になって笑顔を私達に見せて」

温もりが手から頬へと移る。

くすぐつたいような心地良い感覚が、劉焯をまた眠りに誘う。

もう不安感はない。

きつと悪夢も見ないだろう。見ても、嫌な夢からこの人が守ってくれる。

そんな確信があった。

なら、大丈夫だ。怖くなんて、かけらもない。

「おや……すみ……おか、あさ……」

「……おやすみ」

眼が覚めた。

熱も引いてきたのか、倦怠感も寒気も少ししか感じない。

まあ、それは良い事なのだろうか。

「なんか恥ずかしい事、口にした気がする……」

誰かが手を握って、大丈夫だと語りかけてくれたような気がするのだが、

「夢、だったのかな？」

記憶が朧げ過ぎて自信が無い。夢だ、と言いつ切れれば悩まずにも済むのだが、いかんせん残っている気がするのだ。

この手に、優しい温もりが。

握られていただろっ手を目の前まで持って来て、ためつつがめつしてみる。

無論、眼に見えるものなど何も無い。

「うーん……?」

首を傾げていると、部屋の前から3人分の気配を察知する。

そして、扉をコンコンコンと3回ノックされ、まず周倉が入って来た。

「朔ちゃん、入ったっすよ」

「そこは、入る、なんじゃ……」

「でも、入っちゃったし……」

何食わぬ顔の周倉の後ろでは、孔明と鳳統が彼女の代わりにすまなさをそうにしていた。

「あ、起きてるって事は回復してきたみたいっすね」

「ま、ね。それと、僕の了承無しに部屋に入らないでよ、バカ姉」

「弟の総てを知る者、それがお姉ちゃんっす!」

「私的な時間や空間は無視なんだね……朔くん、可哀相」

「……旭ちゃん、いいなあ」

「雛里ちゃん……」

鬼の姉弟のやり取りを聞きながら、段々と色んな意味で変わっていく親友に孔明は一抹の不安を覚えた。

「で、何の用さ？」

「あ、そうそう。元気になる一押しを持ってきたんすよ。ほら、ヒナヒナ」

「頑張つて、雛里ちゃん」

孔明の応援に頷き、鳳統は劉焯の前に出た。その手には小さな鍋を乗せたお盆を持っている。

「？ 雛里？」

劉焯が名前を呼ぶと、鳳統は顔を一瞬で赤くした。

「あ、そ、その……そのね……」

「うん」

「そ、その……お、おか、おかか」

「おかか？」

「だ、だから、ね」

「雛里ちゃん、もう少しだよ!」

「ふぁいと〜!」

「あわ、あわわ」

状況が掴めない。

劉焯はそう思い、半眼になる。

さつきから不思議な応援をする孔明。周倉はこの状況をなんだか楽しんでいるように見えた。

鳳統に至っては、顔を真っ赤にしてあわわモード突入。

単独戦闘には慣れていても、この状況での孤軍奮闘は勘弁してほしい。

取り敢えず鳳統に落ち着いてもらおうと、劉焯は鳳統に向き直る。

「雛里、落ち着いて。ほら、深呼吸だよ」

「ひっひっふー、ひっひっふー」

「? 変わった深呼吸だね」

「女の子がいずれ必要とする呼吸法っすよ」

「なのさ?」

「なのっす」

周倉の言葉に劉焯は、へえ、と感心したように頷いた。

その横で、鳳統がした呼吸法がいつ必要となるか一刀から聞いた事があつた孔明は、顔を赤らめ俯いていた。

「そ、そうだ。雛里ちゃん、早くしないと冷めちゃうよ」

「あ！」

あわわモード中の鳳統に孔明は忠告する。

我に返つた鳳統は小さな鍋を見る。これは彼の為に作った物。親友と新しい仲間が手伝ってくれた努力の成果でもあるのだ。

無駄にしたくない。

「さ、朔くん」

「何？」

「こ、これ、つくつたの」

劉焯に差し出されるのは小さな鍋。鳳統が蓋を取れば、湯気が立ち上り、その向こうにお粥があつた。

「お粥、さ、朔くんの為につくつたの」

「僕の？」



劉焯が聞き返すと、鳳統は照れているのか一層顔を赤らめて頷いた。

「た、食べてくれるかな？」

正に恐る恐ると言っただころか。

彼からすれば何を怖がってるか解らないが、答えはもう決まっていた。

「ありがとう、雛里」

劉焯が感謝を述べ、笑みを向ける。

その可愛いらしい笑みに、女子三人は衝撃を受けた。

（相変わらず卑怯なくらいカワイイっすよぉ〜）

（雛里ちゃんがやられちゃうのも解るかも……愛紗さんもこれにやられたくらいだし）

（いや、あの人は元からカワイイもの好きっすから。自明の理じゃないすか）

（ほわぁー……）

（逝っちゃったすね……）

（雛里ちゃん……）

やっと言えて礼まで貰ったところで、鳳統の意識は旅立ってしまった。

仕方ない、と孔明が代わりに渡そうとすると、それを周倉が遮る。

すると、周倉は先に小瓶を劉焯の前に差し出した。それを見た瞬間、劉焯の顔が蒼白になったのに孔明は気付いた。

「ヒナヒナ特製お粥を食べるその前に、病気に打ち勝つ為のステックプ1。って事で飲もつか」

「や、やだ……」

「我が儘言っちゃダメっすよ」

「旭ちゃん、それってお薬？」

「そっすよ」

ほら、と周倉が小瓶の蓋を開けると毒々しい紫？と緑？色した液体が入っている。

色に疑問を持った時点でヤバイと誰しもが思うだろう。

これ、本当に薬？ と聞き直したいくらいだ。これなら劉焯が嫌がるのも仕方ないだろう。

「風邪も瞬殺必殺出来ちゃうくらい効くっすよ」

自慢げに言う周倉。確かに瞬殺必殺しそうではある。

(朔くんも瞬殺必殺しちやいそう……)

孔明が同情していると、劉焰も両手で口を押さえて拒否するという可愛いらしい抵抗を見せていた。

しかし、そんなちやちな抵抗に屈するような自称姉ではない。

「朔ちゃん」

「むー(ブンブン)」

「イヤイヤ、じゃなくて。早く良くなないと、皆に心配かけちゃうっす」

「む……むー(ブンブンブン)」

「朔ちゃん……」

ささやかな抵抗を見せる劉焰に、周倉は小さく溜息を零す。それに孔明と帰ってきた鳳統が苦笑いを合わせた。

仕方がない、と周倉は溜息をもう一つ吐く。そして、「コホンと咳ばらいをした。

「朔」

彼の名を呼ぶ。けれど、周倉の声音がいつもと違い、気が付けば雰囲気も変わっていた。

それに敏感に反応したか、劉焯の体がビクリと震える。

「朔、お薬飲みなさい」

「む……………」

「ヤダ、なんて我が儘聞かないからね。心配かけてるんだから」

「む……………」

「お姉ちゃんの言う事、聞けないの？」

会話の内容は先とほぼ変わらない。しかし、どちらが優勢かは違つ。

雰囲気の変つた周倉に劉焯は何故かたじたじになり、

「……………飲む」

長い黙考の末、遂に屈した。

「うん。やっぱり、朔はいい子だね」

勝者の周倉は満面の笑みで劉焯の頭を撫で、瞬殺必殺風邪薬を手渡した。

その姿に孔明と鳳統は戸惑いを覚えていた。

いつもなら周倉が劉焯に飄々淡々とあしらわれる事が多く、本当に“自称”姉といった感じを受けていた。

しかし、今の彼女はちゃんと一人の姉に見えた。我が儘を言う幼い弟に、少しだけ厳しく言い聞かせるそれだったのだ。

「あ、あの、旭ちゃん？」

「ん？ 何？」

鳳統は躊躇いがちに話し掛けると、周倉はゆっくりと振り向く。

「……そのね、何だか雰囲気が違うから、どうしたのになって」

「あー……これね」

あはー、と困ったような表情をする周倉。何と言えば言いのか、言  
いあぐね、

「題して、真・お姉ちゃんモード……なんてね」

やはり困ったように言った。

「昔から私の言う事を聞いてくれる子じゃなくて。こっちの感じに  
ならないとダメなんだ」

「だったら、いつもその感じでいた方がいいんじゃないのかな？」

孔明がそう提案するも、周倉は首をゆっくりと横に振る。

「うっん。それはしない」

「……どうして？」

「昔、そう決めたから。だから、私は……………朔ちゃんのお姉ちゃんは、いつも呑気に笑ってるんすよ」

その言葉から、どれだけの決意が彼女にあつたのかは解らない。

言葉少なだったからか、それ以上は聞けなかった。聞いてはいけな  
い気がした。

立ち入ってはいけない境界がいつの間にか出来ていた。

「……………やっぱり」

思わず零した鳳統の言葉に、孔明と周倉が彼女の方を向く。

「旭ちゃんと朔くん、やっぱり姉弟なんだね」

「それは嬉しいんすけど、今の会話から一体どうやってその結論に  
到ったんすか」

「あ、何となく解ったかも」

孔明も鳳統の言葉の意味に気づき、小さく笑う。

本人達はきつと否定するだろう。

簡単には本心を語らない二人。

それは言い換えれば、こうなるだろう。

素直じゃない、と。

「うわ、私だけ仲間外れ……………酷いわ！ はわわ、あわわ！」

「はわわじゃないですっ！」

「あわわじゃないですっ！」

意味が解らない周倉は二大軍師を弄り始めた。

むー、と顔を赤らめてむっける二人の姿に、こっちもこっちで卑怯なくらいカワイイな、と周倉は顔を緩ませた。

「朔ちゃんもそう思わないっすか？」

いきなり話を振ってみるも、返しどころか反応も無い。不思議に思っ  
って目を向ければ、

「……………」

「……………」

「……………」

劉焯の様子に三者一様に絶句する。

顔は蒼白く、瞳孔は開き切り、口は力無く小さく開いており、微動  
だにしない。

そして、手には空の瞬殺必殺風邪薬の瓶。

原因は、明らかだった。

「あ……やっぱ」

「朔く……んっ!？」

くくしばらくお待ちくださいくく

「……だから、飲みたくなかったんだ」

意識を取り戻した劉焰の一言目がこれだった。

その声音はどこか異様に疲れていて、震えていた気がする。

「この事は愛ちゃんには内緒でお願いしたいっす」

「うん。知られたら大変だね」

「……旭ちゃんが死んじゃう」

どこか遠い目をする周倉の頼みに、孔明と鳳統は頷いた。



これが彼の目付け役の耳に入れば、きつとただでは済まない。

確実に言えるのは、青龍偃月刀の刃が何度も閃くだろう。

「そんなスプラッターな恐怖を忘れない！　ってな訳で、ヒナヒナ特製お粥を食せ、朔ちゃん！！」

「はいはい」

いやにテンション高めの周倉に辟易しながらも、劉焯はレンゲでお粥を一口食べた。

ゆっくりと噛みに噛み、嚥下する。そして、もう一口、口にした。

劉焯がすぐに感想を言ってくれない為に、作製者側の三人は僅かにだが焦れ出す。

周倉と孔明はまだいい。鳳統は体が微かに震えだし、祈るように両手を組み合わせている。

そして、程なくして劉焯はやっと口を開いた。

「ごめん。味、解んない」

三人同時に思考が止まった。

それも仕方ないだろう。

頑張って彼の為につくったのに、結果がこれでは理解が遅れて当然

だ。

美味いとか、まずい以前の問題だ。

「えーと、これは……………」

「あ、旭ちゃん？」

「う、うう……………」

「多分、風邪と旭の薬で味覚が一時的に機能してないみたい」

「あ、あは、あははは……………」

ちびっこ三人からジト目で見られ、周倉は乾いた笑いを浮かべるしか無かった。

孤立した周倉の取る道は、

「さらばっ！」

逃げる、だった。

「旭ちゃん、待ちなさいっ！」

勢い良く部屋から飛び出す周倉を追って、孔明も出て行った。

残った鳳統は膝から崩れ落ち、劉焰は開けっ放しにされた扉を溜息を吐きながら閉めた。

「……ごめんね、朔くん」

「何がさ?」

突然の鳳統の謝罪に劉焯は首を傾げる。

「味が解らない時につくるなんて……ダメだね、私」

「ああ、その事か。あれ、嘘だけど」

「そっか、嘘なんだ……ふえ?」

鳳統は耳を疑った。

危なく聞き逃すところだったが、確かに聞いた。

「嘘、なの?」

「うん。あんな薬飲まされたんだし、少しくらい仕返ししたかったから」

何て事の無いように劉焯に、今回ばかりはむっとする。

けれど、今回は許そう。

「それで、お粥だけど」

「う、うん」

「凄く美味しかったよ」

この言葉が聞けたから。

## 寝込んだ鬼（後書き）

日常編、何を書こうとしてたか途中から分からなくなっていました。

そのせいか、雛里と朱里の台詞が分からなくなって、もうグダグダでしたね。本当にすみません。

鬼とすれ違い（前書き）

日常編第2段です。

文量ダイエット計画が早くもリバウンドしました……

## 鬼とすれ違い

風邪から完全回復した劉焯は、病み上がりという事で今日は非番になった。なので、久々に街に繰り出していた。

と言っても、店を覗きながら歩く訳ではない。ルートはいつも通り、家の屋根を渡って行く猫みたいな行き方だ。

そんな行き方と彼の無音にも近い歩き方もあり、人の目に着かない事がほとんどなのだが。

(また見られてる)

今日はやけに視線が自分に集まっている。

(最近寝込んでたから、鈍ったかな)

そう思いながら足を止めて、通りを見下ろす。こちらを見ている民に目をわざと合わせてやると、彼らは慌てて目を反らした。

またか、とそれに劉焯は嘆息し、また歩を進める。

人の視線が集まってくるのは、不快だ。

戦場で敵意の籠った視線を向けられるのは慣れている。

けれど、奇異と畏怖の混じった視線は別だ。

劉焯翔刃という存在に興味はある。しかし、鬼という人の律から外

れた存在でもある事から、民は彼に近寄れない。関われないのだ。

それを理解しているから、こちらからも近付かない。

彼らが劉焯を恐れるように、劉焯も自身を恐れているからだ。

化け物と揶揄されたのなら、それを肯定出来る。

やろつとすれば、この街の住人全てを葬る事が出来るだろう。戦闘訓練を受けた事の無い民なら尚更。

「……何考えてるんだろ」

不毛だと考えを投げ捨て、馴染みのメシ屋に入る。

そこでは戦前と変わらず、女性店主が仕込みを行っていた。

「おばちゃん、久しぶり」

「おや、翔刃ちゃん。いらっしやい」

店主は劉焯に快活な笑みを向ける。

「寝込んでたって聞いたけど、良くなっただみただねえ」

「でなきゃ、ここに来れないよ」

「何にしろ、街で寄るところなんてウチだけなんだろ？」

「まあ、その通りだね」



痛いところを突かれ、劉焯は苦い顔をする。

劉焯が街でまともに話すのは、未だにこの店主だけだ。

民を自分から受け入れてほしい、という一刀の願いもあるが、現状ではそれは難しい。

受け入れようとした相手が一定の距離を取ろうとしているのだ。それを無理に縮めようとするれば、不和しか生まれないだろう。

だから、今のところ現状維持といった状態だった。

「そっぴゃ、街の人達がやたらと僕を見てくるんだよね。僕、何かしたかな？」

ふと思い立ち、劉焯が聞いてみると、店主は意外そうな顔をしていった。

まるで、知らないの？　と言っているようだ。

「ありゃま、知らないのかい？」

正解だったらしい。

「翔刃ちゃん。何でも、天下の飛將軍と引き分けたそっぴゃないかい？」

「そっぴゃなってるみたいだね。……？　何で知ってるのさ？」

「この前の戦争の時に洛陽近くにいた商人の一団が来てね、その時の噂を流して言ったのさ」

「……まさか……ああもう、そういう事か」

「他にも、羅刹のような格好をした将が千もの敵兵を単騎で殲滅したとか、シ水関を飛び越えたとかも聞いたね。」

あたしらはすぐ解ったよ。翔刃ちゃんだってね」

「……………」

「でもまあ、半分くらいは嘘だろうけどねえ」

そう言い、店主はまた快活に笑う。それに劉焯も愛想笑いを合わせた。

すみません。ほとんど本当です。

心中でそう呟きながら。

「じゃあ、街の人達が見てくるのは、それが原因なんだ」

「それもあるねえ」

「まだあるんだ……………」

さすがにうんざりしてきた劉焯はガクリと肩を落とした。そして、次の原因を聞いた瞬間、彼は頭を抱えた。

馴染みのメシ屋を後にした劉焯はある場所へと真つすぐ向かっていった。

目的の部屋を目視した瞬間、途中で会った兵から借りた槍を振りかぶる。

そこまでやったら後は決まっている。この槍を、

「ちえいさーっ！」

ふざけた掛け声と共に投擲した。

槍は一直線に飛んでいき、ドズンと音を立てて目的の部屋の壁を深々と貫いた。

『うわあああっ！！？』

『きゃあああっ！！？』

当然の如く、中にいたであろう男と女の悲鳴が響く。しかし、劉焯は気にした様子もなく目的の部屋へと入った。

「や、朔？」

「さ、朔くうーん……」

そこでは中にいた男女　正確には忠義を尽くすべき二人の主が腰を抜かしていた。

「なに、みつともない姿曝してんのさ」

「い、いや、だって、朔。槍、槍だぞ？」

「そ、そうだよ。槍が、槍がバビユンで壁をズギャンなんだよっ！？」

「そう。じゃあ、これが敵勢力の刺客からの攻撃だったとしたら？それでもそんな言い訳するつもりなのさ？」

それを言われては何も言い返せない。劉焯の指摘に一刀も劉備も閉口した。

「まあ、今は僕の嫌がらせ兼仕返しだけど」

「「やり方が酷いっ！！」」

しれっとカミングアウトする劉焯に主二人は、半ば本気で嘆いた。

しかし、劉焯は知らんとばかりに突き刺さっている槍を抜いていた。

「で、僕が寝込んでる間に、とんだ噂を流してくれたようで」

「何事も無かったように話を切り出そうとするな」

「で、僕が寝込んでる間に、とんだ噂を流してくれたようで」

「息子が話を聞いてくれない……」

「あはは……」

目の前で繰り広げられる親子のやり取りに、劉備は苦く笑うしかない。

ただ、このままでは一刀が更に精神的に傷つきそうなので、劉備が代わりに先を促した。

「洛陽近くにいたってという商人の団に僕の噂を流させたでしょ？  
提案、実行したのは朱里だろうけど」

「もう、バレてるんだ……」

「しかも、ほとんど事実で。普通はもう少し脚色するもんじゃないのさ？」

「あ、それは満場一致って感じで必要ないって」

「なんでさ？」

「もう十分デタラメだからって」

「……………」

反論どころか否定さえできなかった。

「じゃあ、あれは？」

「あれ？」

「僕が 賊狩りの戦鬼が天の御遣いの息子だって大々的に発表したでしょ」

「うん」

えらくあっさりと頷かれ、逆に聞いた劉焯が面食らった。

劉備はいつものふにやっと笑みを浮かべ、

「今まではちゃんと公表してなかったけど、しなくていいって思ってた訳じゃないよ。」

だから、朔くんは怖い鬼じゃなくて、お父さんが大好きな男の子でもあるんだって街の皆に知ってもらいたかったの」

考えを一息で述べた。

公表が彼女と義父の いや、仲間全員の善意から決まったのだと、劉焯にも想像がつく。

理解も出来る。嬉しくも思う。

だとしても、

「僕が鬼だって事実は変わらない。本当なら忌避すべき奴なんだよ」  
自分という存在が招くマイナスは看過出来ない。

「親子と主従じゃ、それぞれの距離とか身分が違い過ぎるよ。

今はいいよ。賊狩りの戦鬼は天の御遣いの臣。忠義を尽くし、賊を討ってきた。その結果から民は僕を信用してるんだろっし」

今回の公表で民の認識は変わった。

鬼である臣下をいきなり息子にしては距離が近過ぎる。

いくら民を守るといふ善行と思われる行為をしようと、根底は変わらない。

天の御遣いは鬼の術にかかり、我を失っているのではないか？

そんな考えが浮かんでくる可能性はゼロではないのだ。

それは違うのだと声高に叫べば解ってもらえるような問題ではない。それに火が着き、一刀と劉備達の悪評が増大して流れ出す可能性だってある。

そんな状況など、劉焯は許せる筈もない。

「取り返しのつく内に早く取り消そう」

「うん、しないよ」

劉焯の進言を劉備は一蹴する。

「な、なんでさ?」

「だって、必要無いもん」

「どつしてそう言い切れるのさ!？」

「朔。その疑問は、軽く街の人達を莫迦にしてるぞ」

「そんなつもりないよ」

「でも、俺達にはそうとも取れるんだ」

若干語気が強くなってきた一刀に劉焯は顔を少し強張らせるが、彼も退いていられない。

「そういう風に聞こえたなら、それでいい。」

でも、お父さんの息子である前に、僕は将で天の御遣いの専任護衛なんだ。自分より主の事を優先して何が悪いのさ!」

「なら、その考えは止める。俺は民を大事にしてほしい」

「守ろうとしてる相手に嫌悪されてもいいっての!？」

「それはその人の勝手だからだ」

「っ」

ぴしゃりと言いつ切る一刀に、劉焯は絶句。言い合っていた内に苛立ちが互いに溜まってきていたのか、段々と睨み合うようになる。

「待つて! 二人とも、一回やめよ?」

不穏になり始めた空気を切り替えるように、劉備が二人の間に入っ



た。

動かし易い劉焯を抱き上げるようにして、劉備は劉焯を一刀から少し離れた。

「桃香様、離して!!」

「ケンカはダメ。それに私もご主人様に賛成だよ」

「何で解ってくれないのさ!?!」

「解ってるつもりだよ。だから、今度は朔くんが私達の考えを解ってね」

そう言うと、劉備は劉焯を抱き上げたまま執務室から出て行ってしまった。

残された一刀は溜息を一つ吐き、ぼーっと天井を見上げた。

「おやおや、何やら顔色が優れませんな、主」

気付けば、いつの間にか趙雲が窓枠に座っていた。

取り敢えず、一刀は一つ言う事にした。

「不法侵入」

「お気になさるな」

飄々と流し、趙雲は劉備と劉焯が出て行った扉と一刀を交互に見る。

そして、頷く。

「成る程。痴情の纏れですかな」

「何処からその答えが出たのか教えてくれ」

「違いましたか。てっきり、主が桃香様と愛紗という母親候補のどちらを選ぶか中々はつきりしない為に、朔も我慢の限界が来ての口論かと思ひまして」

「一寸足りとも合っていない推理だ」

「そして、私が参戦。ドロドロもドロドロの女の戦いの火蓋が切つて落とされる」

「確実に導火線に火をつけたの、星だろ」

しかも喜々としてやりそうだと、一刀は思った。

「で、そんなところから入って来たって事は、今の話聞いてたんだよな？」

「ええ、楽しませて頂きました。主と朔の親子ケンカなど、そうそう見れるものでも聞けるものでもありませんからな」

「質悪いぞ、それ」

「気に障ったのでしたら申し訳ない。これも趙子竜の性分ですので」

口では謝るものの、一刀はしたり顔の趙雲はこの状況を楽しんでいる気がした。

けれど、良いタイミングで来てくれた。

「星、俺の判断は間違ってるのかな？」

「親子であるという公表の件ですか？」

「そう……。正直、取り消せなんて言われるとは思わなかったよ」

「一刀としても朔に相談しなかったのは悪かったと思っている。」

けれど、したとしても彼は断固として反対しただろう。先のように自分よりも仲間を優先する面がそうさせているのだ。

だから、勝手に卑怯だが相談も無しに公表した。事後承諾になるが、説明すれば解ってくれると思っていたから。

「でも、ダメだった。やっぱり、自分の都合を押し付け過ぎたかな」

「仕方ありませんね。あ奴は他人の好意に疎い上に鈍い。」

その上、あれの生い立ちが生い立ち故、容易にそれを信じる事が出来ぬのでしょう」

それも人間らしくもありませんが、と趙雲は言う。

「良い頃合いだと思ったんだけど、まだ早過ぎたって事が」

城の兵士と侍女の面々とは以前よりもまた打ち解けて来ているらし

いと聞いていた。

反董卓連合の時など、自分から孫呉の面々に会いに行ったりもしていた。

会ったばかりで生きる気力を無くした董卓に、言葉は乱暴でも生きると訴えた。

劉焰も変わってきたのだ。あと一押しすれば、民とも打ち解けられるんじゃないか？

そう思っていた。

しかし、その結果が親子ケンカだ。

「主よ。主に主なりの考えがあるように、朔にも朔なりの考えがあった。そういう事です」

「でも、落ち込むよ……」

「ふつ。あ奴は元々なのか、それとも誰に似たのかは知りませぬが、頑固ですからな。理解をさせるのに時間がかかるでしょう」

「本当、似たんだとしたら誰に似たんだろ」

「……敢えて言いますまい」

首を傾げる一刀に、趙雲はやれやれと肩を竦めた。

その時、彼女の脳裏に黒髪ポニテ少女が過ぎっていたのは言うまで

もないだろう。

「ともかく、今言える事は桃香様にお任せする事ですな」

「？ 俺じゃダメなのか？」

「ダメとは言いませんぬ。が、貴方は親……バカ……ですからな。主として諭さとそうとしても、どうしても親……バカ……としての情が混じる事でしょう。」

故に、親ではない者の目線や言葉が必要なのですよ」

「そっか。ところで、親って言った後に小さくバカって付け足すな」

「主は“親バカ”ですから」

「強調された!？」

「主は“子煩悩”ですから」

「それ、言い換えただけだろ!」

「事実を述べたままでですよ」

「くっ……」

否定できない事に一刀は悔しげに歯噛みする。それに趙雲は愉快そうに口角を吊り上げた。

「主イジりはここまでにして」

「主従って言葉の意味が解らなくなってきたよ……」

「朔との口ゲンカ、有意義な時間だったと思っっては如何か？」

「……………」

朔のスルースキルは彼女の影響ではないか、と思いながら一刀は返すように問う。

「ケンカしたのに、有意義？」

「ええ。ケンカしたという事は、ただの仲良し小良しではない。ぶつかり合えたのなら、また一步親と子として進歩したのですよ」

窘めるように言った彼女の言葉に、一刀は返答出来ず、また天井を見上げた。

劉焯が劉備に連れ出された場所は、またも城下街だった。

ただ、今回は遊びに来たのではなく、これも劉備の仕事であった。

恒例と言ってもいい、太守自ら行う警邏。劉焯はこれの護衛を頼まれたのだ。

「僕、今日は非番なんですけど」

「いいからいいから」

苛立ちがまだ燻っているのか、劉焯の声色にも若干それが出ていた。しかし、劉備は気にする様子も無く彼の手を引いてどンドン歩いていく。

その為に、いつものように屋根を渡ってもいけず、劉備と手を繋いでいる事もあってか、また視線が彼らに集まっていた。

それに辟易しながら、劉焯の心中では公表を取り消さないという一刀への不満が、中々静まる様子を見せられなかった。

自分よりも誰か優先するのは、一刀だって同じだと言いたかった。

一刀が劉焯を大事に思ってるように、劉焯も一刀を大事に思っているのだ。

その大事に思っている人をけなされて、良い気分はしない。

「朔くん、そんな不機嫌そうな顔して警邏しちゃダメだよ。ほら、笑顔笑顔」

「じゃあ、天然主に無理矢理付き合わされて不機嫌な顔をするよ」

「むう。なんだか言葉にトゲを感じる」

「その内、槍になるかもね」

「槍投げはやめてね」

先の仕返しを思い出したか、劉備は苦い顔をする。それに劉焰は知らん顔で返答もしなかった。

そうこうしている内に、劉備と劉焰は街の賑やかな通りに着いた。

太守自らの警邏が恒例ならば、それによって起こるこれも恒例なのだろう。

「劉備様、見回りかい？ いつも大変だねえ」

「全つ然大変じゃないですよ。私もみなさんに負けないうように頑張んなきゃ、だから」

「お、劉備様。どうだい？ 良い桃が入ったんだけど、買ってかないかい？」

「ごめんない！ 今、警邏中だから、また後で。ちゃんと私の分、取って置いてくださいよ？」

「これはこれは、劉備様。今日もお元気で」

「うん！ おじいちゃんも元気みたいで、嬉しいよ」

街の誰もが劉備に笑顔で声をかけていく。それに劉備もひとつひとつ応えていくので、街を回るスピードは否が応でも遅くなる。

こうなると解っていた劉焰は一層不機嫌の色を深めた。



早く終わらせてしまいたい。

皆、劉備に注目しているものの、その何割かはどうしても劉焯に向いてしまう。

そして目が合えば、またギクシャクとした動きで目を逸らすのだ。

ああ、不愉快だ。

心はそんな感情で満たされる。劉備の手を握る力が緩んだ一瞬を突き、劉焯は屋根の上へと跳び移った。

「あつ、朔くん！ もう……」

劉備が呼んでいるが、今は気にかける気も無い。あくまで自分は護衛だ。やり方はどうあれ、彼女を守ればいいのだ。

それにあの輪の中に自分がいては、劉備と民の触れ合いの邪魔になるだけだ。

劉焯はそう思った。

「あー！ お姉ちゃんなのだ！」

その時、不機嫌な劉焯とは対称的な明るい声が聞こえた。

見なくとも解るその声の主　張飛は嬉しそうに劉備に駆け寄る。彼女の後ろには、どこか疲れたような表情をした華雄がいた。

「鈴々ちゃん！ 鈴々ちゃんと直葉ちゃんも街の見回り？」

「そうなのだ！」

「実際は、そうだと胸を張って言えんがな」

えへん、とばかりに張飛は胸を張るが、華雄は反対に釈然としない様子を見せる。

張飛の姉として、劉備は妹が迷惑をかけたのではないかと不安になった。

「警邏を始めてそれ程経たない内に子供達に捕まり、鈴々が仕事を放って鬼ごっこをしたすわ、犬を見つけて鈴々が先頭を切って追いかけて、腹が減ったと鈴々が勝手にメシ屋に突撃して食いだすわ……」

「あの、それ、まだ続く？」

「ああ、まだまだある」

「ホントにごめんなさい！」

妹に代わって劉備が頭を下げた。主従云々の前に、一人の姉として謝罪した。

しかし、その妹は知らぬとばかりに姉を前にしてニコニコ顔だった。

(鈴々ちゃん……)

誰の為に謝ってるのか解らなくなり、劉備は泣きなくなった。そこ

に華雄に気にするなと優しく肩を叩かれ、更に泣きたくなくなった。

「それでお姉ちゃんも見回りなのか？」

「そつだよ」

「それはいかん。桃香殿は太守なのだぞ？ 護衛を付けずに見回るなど、愛紗に大目玉を喰らうぞ」

「一応、独りじゃないんだよ？」

「でも、お姉ちゃんしかいないのだ」

「あそこ、あそこ」

首を傾げる二人に劉備は屋根の上を指を指す。指された方向を目で追い、

「……………」

「……………」

「……………」

不機嫌な劉焰を見て同時に頷く。

「お姉ちゃん、何やったのだ？」

「師匠が怒るなど余程の事をしたのだろ？ 早めに謝る事をお勧めする」

「ええっ！？ 私のせい！？」

まるで犯人を前に哀愁を漂わせて自首を促す刑事のような目をして張飛と華雄は言った。

劉備も劉備で驚くが、それがあながち間違いでもない為に否定しにくかった。

仕方ないと劉備は劉焰が不機嫌な理由を話す。原因が解った二人は気まずそうに腕を組んで唸った。

「それなら朔が不機嫌な理由も解るけど……困ったのだ」

「師匠と北郷がケンカ……想像しにくいが、あの様子では本当なのだろう」

「うん。初めての事だから、どうしようって焦っちゃった。それで朔くんはそんな心配しなくていいんだよって証明したくて連れ出したんだけど……」

劉備ら三人が目を向けると、犬猫のおすわり態勢をしている劉焰は、ツンとそっぽを向いていた。

「どうしよ……」

彼の心配を無くそうにも、あの様子では簡単にいく筈もないのは明らかだ。

劉焰と街の人達の間には、まだ大きな溝があるのだろうか。

鬼を自称する小さな少年が、幾度となく賊からこの街を守っているのを彼らは知っている筈だ。

反董卓連合での戦でも、あの小さな体で無茶な事をして、仲間の為に有利な状況を導いた。

三國無双と謳われる呂布と死闘を繰り広げ、見事生還してくれた。

これも噂を流したから、知ってくれた筈だ。

もっと知ってほしかった。

自分も含めて、皆あの鬼の少年に守られている。

今、笑顔でいられるのは、彼のお陰でもあるのだと。

誰かの為に必死になれる優しい少年なのだ。

けれど、現実はそのもいかず、ままならない。

単なる好意の押し付けになっている。

戦場で何もしてやれない劉備や一刀にとって、こういう機会でなければあの子の力になってやれないのだ。

それすら叶わず、劉備は自身の無力さを呪いたくなった。

そこに、

「きゃああああ！」

追い討ちをかけるように悲鳴が聞こえた。

「え？ え！？ どうしたのっ！？」

突然の悲鳴に劉備は慌てて周りを見渡すが、状況を把握出来ない。

武人である張飛と華雄は弾かれるように反応するも、声のした方向を見たまま動かない。

まるで行く必要がないかのように。

「鈴々ちゃん、直葉ちゃん、早く行かなきゃ！」

劉備は慌てて急かすが、二人は慌てて行く必要は無いと言う。

「朔が先に行っちゃったのだ」

「したがって、我らが桃香殿の護衛せねばならん」

肩を竦めて言う二人の言葉に、劉備は劉焰の姿を探す。

当然ながら、影も形も無かった。

悲鳴が聞こえた瞬間、劉焯の体は動いていた。

意識して動いた訳ではない。自分は劉備の護衛だ。彼女を優先して然るべきだ。

なのに、

(なんで走り出してのさ、僕は……!?)

心中で叫びながら、尚もその駆ける速さはどんどん増していく。

苛立ちと戸惑いを抱えたまま、劉焯は現場に到着した。

場所は青果店の前。その店主だろう初老の女性が腰を押さえて蹲っていた。

「おばさん、何があったのさ？」

「！ あ、あなたは……あたた……」

劉焯が声をかけると、初老の女性店主はビクッと体を震わせた。それを見なかったことにして再度尋ねる。

「腰を痛めたなら下手に動かないように。で、何があったかさ」と話してよ

「ど、泥棒だよ。うちの野菜やら果物を盗って逃げてったんだよ。

「それで、気付いたあたしが捕まえようとしたら、あたたた……」

「突き飛ばされて腰痛めたと」

予想を口にしてみると、初老の女性店主はそうだと首肯した。

「ふーん。逃げた方向はあつちで、人数は3人？」

「た、たまげたねえ。その通りだよ」

「そう。後から劉備様が来るから、おばさんは介護でもしてもらいなよ」

しれっと面倒事を主に押し付け、遠くで慌てたように離れていく気

配　もとい、逃げ続ける犯人達を見遣る。

「ついてないなあ」

ボソリと呟き、劉焯は姿を消した。

初老の女性店主にはそう見えた事だろう。

彼にとっては何て事のない技法を用いたからだ。

縮地。

この歩方を用いたからには、もう誰も逃げられない。

人と人の間を刹那に駆け抜け、窃盗犯さえも追い抜いて彼らの正面取った。



「さて、泥棒さん方、覚悟は出来てる？」

苛立ちを前面に出して劉焯はいつものように聞く。

突然の劉焯の出現に、窃盗犯らは慌てふためき、滑るようにして足を一様に止めた。

「な、どっから現れやがった!？」

「何処からでもいいよ。何なら、地獄から、とでも言ってあげようか？」

飄々と彼らの問いを流し、劉焯は窃盗犯を注視した。

(でっかいデブと、ヒゲのオッサンと、チビの3人か)

劉焯は半眼で溜息を吐いた。

「僕が来るまでも無かったかな」

「何ぶつくさ喋ってやがる！」

「え？ ああ。街の警備隊の仕事、盗っちゃったなって思って」

「デメエ、ふざけてんのか!？」

「正直、若干ふざけて気晴らししたい気分」

「もう十分ふざけてんだろっが!?!」

「まさか。まだほんの序章だよ?」

「長編化すんのかよ!??」

「きつと、あと一章で終わる。うん……多分。いや、でもなあ」

「短けえくせに、自信無えのかよ!??」

チビがやたらツッコミを入れる中、ヒゲのオッサンが目を細めて劉焯を見ていた。

その相手を探るような視線に、劉焯は違和感を覚えた。ただ訝しむのなら分かる。

だが、彼の視線は相手の拍子 劉焯の動きに対応しようとするものだった。そこらの賊ではこうもいかない筈だ。

( 武術の経験者か。それでも素人より少し腕が立つ程度 )

相手になるような敵じゃない、と見切った劉焯は、後ろ腰の双剣の柄に手を伸ばしかけるが、掴みはしなかった。

今、彼がいるのは街の通りの一つだ。

血生臭いやり方は、好ましくないだろう。

「面倒だからさ、大人しく縛に就いてほしいんだけど」

「そうはいかねえんだよ、ボウズ」

「？ あんたら、もしかして最近この街に来たの？」

「だったらどうした」

劉焯の問いに、チビがぞんざいに答えた。

「いや、納得した」

自分を前に、まだ逃げられると思ってる様子を不思議に思っていた。目の前にいるのが、劉焯翔刃という小鬼だと知らないのだから当然か。知っていたのなら、彼らは一樣に抵抗もせずに諦めている筈だ。

「ついてないねえ、あんたらも」

「何が言いてえんだよ!？」

「僕が近くにいたなんて、運が悪いつて事」

淡々と言い終えた瞬間、劉焯は地を蹴る。一瞬で距離詰めチビの腹に片足の裏を当てた。

「はい、さよなら」

そして、足で押すように突き飛ばす。

痛みは無いのか、それとも痛覚の許容レベルを超えたのかは解らないが、悲鳴をあげる事なくチビは飛んでいった。

距離にして、優に10メートルも。

「ち、チビ!？」

「よくも!？」

チビが蹴飛ばされた事に驚きながらも、デブは劉焯に掴み掛かる。

文字通り乱暴に突き出される手。それを劉焯は平然と受け止めた。デブは更に力を込めるが、彼は顔色一つ変えず受け止め続ける。

デブの顔には驚愕の色が満遍なく見て取れた。それもそうだ、自身の半分以下の身長しかないような子供に、力負けしているのだから。

「ぬ……ううううああああ!」

「力の込め方がなってないよ。雑過ぎ」

まるで注意するような事を言う劉焯は、次の瞬間に赤子の手を捻るようにデブを投げ飛ばした。

「へっ……?」

真上を見ながら、ヒゲのオッサンが間の抜けた声を漏らした。

巨体が屋根の高さまで到達する。

世の中に万有引力の法則が働いているのならば、高く上がったものは落ちるのが自然の摂理だ。

したがって、投げ上げられたデブが落ちるのも当然。

ズウウンッ！！、と轟音が響く。音源であるデブはピクリとも動かない。

「さてと……最後だね。投降するなら今の内だよ？」

大の大人二人を地に沈めた劉焔は淡々と問い掛ける。

「……………」

しかし、ヒゲのオッサンは無言でナイフを構えた。

やれやれ、と劉焔は面倒そうに独り言ち、溜息を一つ吐く。諦めが悪いというより、執念じみたものを彼から感じたからだ。

こうなっては仕方がない。劉焔は正面からヒゲのオッサンと向かい合う。

「来なよ」

劉焔は言葉少なに挑発する。

その瞬間、凶刃が閃いた。

迫る凶刃を払い、劉焔はカウンターで肘をヒゲのオッサンに打ち込んだ。

肘打ちの威力は彼を飛ばすには十分の威力があった。地を滑るよう

に落ちた衝撃もあつてか、その勢いが死んだ後もヒゲのオッサンは苦しげに呻いた。

「まったく手間掛けさせないで　　へえ」

劉焯は感心するように口角を吊り上げた。

ヒゲのオッサンがよろめきながらも立ち上がったのだ。

手加減したとはいえ、他の二人同様に一撃で終わるつもりでやった。それに耐えた事に素直に感心した。

「たいした根性だね。それとも執念？　あんだ、何がしたいのさ？」

「……やんねえと……いけねえ、事が……あんだよ」

「それは何なのさ？」

「ボウズには……関係、ねえ」

息も絶え絶えにヒゲのオッサンは言葉を紡ぐ。それには止めても止まらない意志が籠っていた。

ただの悪人じゃない、と劉焯は内心で思う。

悪事だと理解していながら、それに手を染めるしかない。そう考えた故に行動した　　そんな目をしていた。

これは時折、平原に来た難民の何割かが必要に迫られて行動を起こしたケースと同じだ。

しかも、彼らは賊狩りの戦鬼である劉焯を知らない事もある。

（この人達も難民か……）

戦争の皺寄せを受けた被害者の一。

主が助けたいと思っている一部だ。

（なら、止めてやらなきゃ）

ただ劉焯はそう思う。

彼の犯行理由は知らない。生きる為にやったのなら、劉焯としては安易に責め立てられない。

生きたいという想いは、彼の好む感情だ。だから、一概に否定できないのだ。

けれど、誰かを哀しませる方法は間違っているのだろう。

彼らを助けてはやれないが、止めてはやれる。

「後は……まあ、あのお人好しに押し付けよう」

小さく独り言ちると、ヒゲのオッサンは怪訝な顔をした。

「ボウズ……見逃しちゃ……くれねえんだよな」

「うん。止める気でない」

「そうか……すまねえ」

突然の謝罪に劉焯は眉を顰る。投降する気は無いはずだ。なら、何に対して謝った？

思考する劉焯の視界の端に、自分より小さな男の子が映る。

昼寝でもしていたのか、男の子のは寝ぼけ眼まなこで家から通りに出て来た。

それもヒゲのオッサンのすぐ真横に。

彼も劉焯同様に気付いていたのか、苦々しい顔をして男の子を抱き上げ、その細い首にナイフを突き付けた。

「動かねえでくれよ」

どこか懇願するようにヒゲのオッサンは言う。

男の子も目が冴えてきたのか、突き付けられた凶器に今にも泣き出しそうになっていた。

「う…うえ……」

「泣くな」

「っ!？」

声をあげて泣きそうなる男の子に、劉焯は告げた。



「簡単に泣いちゃダメだ。怖がるのはいいよ。けど、恐いのに一方的に負けるのはダメなんだ」

君も男の子なんだ。まだ頑張れるよね？

そう優しく問い掛けると、男の子は小さくだが確かに頷いた。

「……………うう」

「そう、いい子だね。今、僕が怖いのを終わらせてあげるから、もうちよっとの我慢だ」

幼いながらも気丈に涙を堪える男の子から、ヒゲのオッサンに視線を移す。

そして、劉焯は彼に一步近付いた。

「く、来るな!?!」

「知らないよ」

慌てるヒゲのオッサンに短く返し、二歩目で瞬く間に接敵。劉焯は男の子に突き付けられたナイフの刃を掴み、

「子供に、こんなの物突き付けるな」

バキヤリ、と音を発して握り砕いた。

「な、刃を手で」

「寝てる」

劉焯は握り締めた拳をヒゲのオッサンの顔面に叩き込んだ。

二度目の飛行体験をさせられ、男の子を投げ出すようにして地に沈んだ。

男の子に劉焯の動きなど解る筈もない。そのせいか、脅威から守られたというのに、劉焯に抱えられたまま呆然と彼を見ていた。

「よく我慢出来たね。偉いよ」

「う……」

「将来、良い武人になれるかもよ」

「うえ……うええええっ!?!」

「あー……今、泣きますか……」

至近距離で大音量で泣かれ、劉焯は辟易していると華雄と張飛が駆け付ける姿が見えた。

「遅いよ、二人とも」

「いや、師匠が早過ぎるんだ!」

「それにお姉ちゃんが遅いのが悪いのだ!」

張飛が指差す方向には、息を弾ませて走る劉備の姿があった。

護衛対象を置いてくるな、と言いたいところだが、先に自分がやった以上は下手に言えない劉焰だった。

「や、やっと追いついたよー……」

「桃香様。足、遅いね」

「きつとおっぱいが大きいからいけないのだ」

「? そうなのさ?」

「う……それを言うのはズルイと思う」

「語るべきはそこなのか?」

論点がズレだした3人に華雄は首を傾げる。きつと正しいのは彼女だろう。

「とにかくだ。師匠、窃盗を行った不届き者は気絶している3人でいいのか?」

「そうだよ。でも、その前に聞きたい事があるんだ。桃香様、この子お願い」

「え? う、うん」

泣きじゃくる男の子を劉備に預け、劉焯は倒れたままのヒゲのオッサンに歩み寄る。

「起きてる？」

「……気絶してえがな」

彼は気絶していなかった。腫れ上がった頬が片目を上手く開かせていなかったが、両目で空を見上げていた。

「さっきの気迫はどうしたのさ？」

「うるせえよ……」

「黙る気はないよ。」

あんたら、難民だよね？ 察しはつくけど、何で盗みを働いたか答えてくれない？」

数秒の間の後、彼はゆっくりと話し始めた。

彼らは劉焯の予想通り難民であった。

元は平原から少し離れた街で兵士をしていたが、黄巾の乱によって街は荒らされ、家族を連れて命からがら逃げ延びたらしい。

だが、その先で待っていたのは職を失ったが故の貧困。

今までは何とかやり繰りをして、少ない食料を分け合いながら生活していた。そして、体の限界が彼の家族を襲い、遂に倒れた。

原因は明白。食料不足による栄養失調。

金が無いのだ。今の自分達では、どうにもできなかった。

悩みに悩み、似たような境遇のチビとデブの二人と共に食料を盗む事を決断したらしい。

そして、成功して何とか家族に食べさせた後に、彼らは自首するつもりだったそうだ。

「でも、終わっちまったよ……」

重苦しい諦めの言葉をヒゲのオッサンは口にする。

何もかも終わりだと言っているようで、劉焯にはどこか癪に障った。

「不景気な事、あんまり言わないでほしいんだけどさ」

半眼でヒゲのオッサンを見遣り、劉焯は言う。

「まあ、いいや。取引しない？」

「は？」

「だから、あんたらと僕とで取引」

事も無げに取引を持ち掛けてくる劉焯に、ヒゲのオッサンは困惑する。

しかも、持ち掛けた内容が、

「あんたらが盗んだ食物代、僕が代わりに払う。それに、弱ってるあんたらの家族には医者も手配してあげる。」

その代わり、あんたら3人は軍に入りなよ」

自分に不利益なところなど無かったのだから、驚きもするだろう。

「本当、なのか？ それ」

「本当。兵士やってた経験者だし、問題無いでしょ？」

「あ、ああ」

「じゃあ、最後の確認だ」

劉焯はヒゲのオッサンに手を差し延べる。

「この手を取れば、あんたらは国の為に 延いては、自身の家族を守る為に敵を殺す事になる。」

その覚悟はいい？」

人を殺す事は、時に自身の心を壊す。

魚や動物とでは違う。自分と同類の命を奪うのは、体ではなく精神へと掛かる負担が半端ではない。

異常を来たせば、最悪、人は獣へと堕ち、魔に魅入られる。

それは高名な武人でさえ例外ではないだろう。

彼らが持つ誇りが魔へと堕ちる一線を踏み止まらせている。

関羽や張飛なら、そこに理想が足されるだろう。だから、彼女達は強い。決して折れぬ物が彼女らを奮い立たせているのだから。

けれど、会ったばかりのこの3人組にそのような物があるかなど、解る筈もない。

それでも、劉焰は地獄へと誘おうとする。

「一つ、聞いていいか？」

体を起こし、ヒゲのオッサンは問う。

「どうして、俺らなんかそこまでしてくれるんだ？」

「理由？ そうだね……良い奴っぽかったから」

「は？」

「あんた、あの子供を人質にした時、罪悪感に駆られたでしょ？」

それに短刀で僕の急所を一切狙って来なかった。

それってさ、子供を慮んばかりの優しいさを持つてるって事じゃんか」

それに、と劉焰は続け、

「僕は生き抗おうとする奴は嫌いじゃないのさ」

ニツ、と生意気そうな笑みを浮かべた。

その笑みにつられたか、ヒゲのオッサンも笑い出す。そんな彼の目からは涙が溢れ出し始めていた。

「ボウズ。その取引、是非受けさせてくれ」

「覚悟出来たんだ？」

「ああ。ボウズみてえな奴が居るんだって解ったんだ。この国の未来は……まだ捨てたもんじゃねえって思えた」

「その気持ち、少し解る……」

劉焯の差し延べた手をヒゲのオッサンはしっかりと握った。

彼の決断理由に、劉焯は主の事を思い出す。

あんなお人好しが大勢いたら、きっと乱世もすぐに治まるのではないかと劉焯自身も考えた事が無かった訳でも無かった。

「直葉、鈴々。ちょっとお願いがあるんだけど」

「何だ？ 師匠」

「にゃ？ なんか用なのかー？」

「お使い行ってきた」

劉焯が気軽に頼むと、二人はあからさまに嫌そうな顔した。



厄介事に巻き込まれる、と警戒しているのかもしれない。

「直葉は旭を呼んで、このオッサンと一緒に家族の容体を診察してくるように言っただよ。」

鈴々は警備兵に伸びてる二人を診療所に連れてって

「……………いいのか？」

「何がさ？」

「勝手にこんな取引をしたなどと知られれば、北郷や愛紗が黙ってないと思うが」

「勝手にさせてもらうよ。直葉、これは僕の独断「じどん」なんだ。だから、駄々でもこねて認めてもらうさ」

飄々と言っただのける劉焯に、肩を竦め華雄は背を向けて城へと走り出した。

「鈴々も行くのだ。朔、貸し1だからね？」

「はいはい。今度、ご飯でも奢りますよ」

「やった！ 約束破つたら許さないのだ！」

満面の笑みを浮かべ、張飛も走り出した。それを見送ると、劉焯は袖を引つ張られ、何事かと目を向けた。

「どづしたのさ？」

袖を引つ張つたのは人質にされた男の子だった。劉焯も意外だったのか、目をぱちくりとさせて聞いた。

「あの、あのね」

「うん」

「ありがとう、わかさま」

「え？」

耳を疑った。

たどたどしいながらも、男の子は礼を述べた。

それに、劉焯を何と呼んだ？

「わかさま？」

「え、あ、ええ？　もしかしくなくても、若様って僕のこと？」

「うん！」

解っていないながらも信じられず、劉焯は思わず聞き返してしまう。それに男の子は満面の笑みで答えた。

「お父さんとお母さんが言ったの。わかさま、小さいけどすごく強いって」

「小さいは余計だよ……本当の事だけど」

「だからね、お父さんがぼくとね、一緒にいれるのわかさまのおかげなんだって」

「僕の……お陰？」

本当にそうなのか？

自身に対して劉焯は問い掛ける。

街の人達の為に、なんて考えて自分は戦ってきたのだろうか？

劉焯はそれをすぐに肯定できない。

この街に思い入れなど少ししかない。

一刀達がここにいるから、劉焯もここにいる。だから、顔もよく知らない民の為に戦ってるつもりは彼自身には無かった筈だった。

しかし、劉備はそれを否定した。

「朔くん、忘れてない？ 兵士の皆だって、この街に住む一人なんだって事。それでね、この子はね、うちの兵士の息子さんなんだって」

「でも、僕は兵士の皆全たと知り合ってる訳じゃないよ……」

「それは私もだけ……」。

じゃあ、『僕には二つ役目がある。一つは賊を討つ事、もう一つが皆を家族の下に生きて帰す事』……これ、誰が言ったか解る？」

「……逆に何で知ってるか聞きたいんだけどさ」

少し意地の悪い顔をして聞く劉備。それに劉焯は半眼で返した。

誰が言ったか、など考えるまでもない。

それは劉焯自身が初陣の際、率いる隊に対して語った言葉だ。

『僕には二つ役目がある。一つは賊を討つ事、もう一つが皆を家族の下に生きて帰す事。』

だから、怖くなったり死にそうになったら、逃げたつていい。無理に踏み止まろうとして死なれるより、ずっと良いからね。

もう僕が言いたい事、解ったよね？ 犬死に、無駄死になんて許さない。一時の矜持に命を捨てるな。

生き残る事が皆の役目だ。死に抗って生きようとしてたなら、僕が出来る限り守る。

……改めて言うよ。家族を遣して勝手に死ぬな！ この戦、全員生きて帰るぞ！』

鼓舞なんてした事などある筈も無かったあの頃。補佐が鳳統だった事もあり、代わりにやってもらった訳にもいかなかった。

だから、自分流でやった結果があれだった。

「何て言うか、朔くんらしい言葉だよ。それを聞いた皆がどう思

「つたか解る？」

「さあね。何言ってるんだ、このガキは、とか思ったんじゃないのさ？」

「変わってるな、って思ったって」

予想しないでも無かったが、言葉で聞くと何も言えなくなった。

「それに、嬉しかったって。目の前にいる自分達だけじゃなくて、家族の事まで想ってくれて」

「そ、それは生き残ろうとする理由に丁度良かったからで」

「でも、そう思えたって事は、やっぱり朔くんは街の人達の為にも頑張ってるって事だよ」

「う……」

「こういつ時の劉備はズるい、と劉焔は思う。」

普段ふわふわぼやぼやしてるのに、こういつ“誰か”が関わると途端に強い意志が現れる。

それが彼女の徳の根源からなのだろうが、一刀も然りこの状態になると劉焔は全く敵わなくなるのだった。

「朔くんが見せた優しさは兵士の皆から家族に伝わって、家族から街の皆にまた伝わってきたんだよ。」

でも、朔くんは街の皆にいつも遠慮したみたいにくらき下が

「っちゃうから。街の皆も、なんだか遠慮しちゃったんだよ」

つまり、互いに互いに気を遣い合った結果がこれ。解り合いたいの  
に、解り合えない状況を生み出していたという事か。

「莫迦みたいだ」

本当にそう思う。

鬼と疎まれた自分が、街の人達の笑顔を霞ませると思っていた。

けれど、それは知らぬ間に過去となっていた。それどころか、気遣  
った相手に気遣われていた。

莫迦みたいだ、と劉焯はもう一度自嘲した。

見習うべきは、自分より幼いこの男の子だ。幼いが故の純粹さは時  
に下手な大人より学ばされる事があるようだ。

「わかさま」

「えつと、何？」

呼ばれ慣れてない呼び方で反応が遅れながらも、劉焯は男の子の方  
を向いた。

「ぼくも、わかさまみたいになれる？」

「強くって事かな？」

「うん！」

男の子の問いに若干戸惑うも、劉焯の答えは先に答えた通り。

「なれるよ。お父さんとお母さんとずっと一緒にいたい、って思っ  
てれば。生きようと頑張れば、僕なんかよりきつと強くなれるよ」

「ほんと？」

「本当だよ」

劉焯の言葉に気を良くしたか、男の子は満面の笑みを浮かべる。劉焯も笑みを返すと、男の子は喜ぶようにくっついてきた。

「あは、懐かれちゃったね朔くん」

「そう……なのかな」

「そんな朔くんにお知らせ」

「何さ？ つ！？」

気付けば、囲まれていた。

子供に。

しかも、劉備にだけではなく自分の方にも近付いてくるのだ。

いくら戸惑いに戸惑っていたとは言え、囲まれるまで気付かないとは思わなかった。

「劉備様だー！」

「何してるの〜？」

「遊べる？ 遊ぼうよー！」

やばい、と劉焯は段々と顔が引き攣るのを感じた。男の子にくっつかれてるせいで、屋根の上に逃げる事も出来ない。

「あ、若様もいるー！」

「ほんとだ。若様だ！」

しかも、劉焯の姿を視認した途端に駆け出し、包囲網を一気に狭められていく。

劉焯がいつものように逃げられず、パニックになりかけているのに気付いたか、劉備はうん、と一つ頷いて口を開いた。

「みんなー！ なんと今日は若様も遊んでくれるって！」

しかし、助け舟ではなく、泥舟に乗せられ沈められた。

「ちょっと、桃香様！？」

慌てて叫ぶも、もう遅い。子供達は目に期待の色を乗せて劉焯を見ている。

これに勝てる者は、鬼でもそうそういないだろう。



「はあ……解ったよ。お相手させてもらっよ」

観念した劉焯は両手を挙げて言った。

「よし。じゃあ、広場の方に行くよ！」

「」「」「わー！」「」「」

「はあ……」

劉備の先導の下、劉焯を含んだちびっ子隊の音が通りに響いた。

「疲れた……」

夕方、言葉通り疲れた劉焯は足を引きずるようにして城に帰ってきた。

自分より少し幼い子供達と遊ぶのは、想像以上にしんどかった。

駆け回る彼らの体力は無尽蔵に思え、時にケンカし、時に泣き、そして笑う。

そんなころころと表情の変わる子供達から、片時も目を離せなかつ

た。

それに疲れたと言っても今まで体験した事のない疲れで、遊ぶという体力の使い方をまともに知らない劉焯にとって新鮮な心地でもあった。

「こづいづのもいいか……」

ぼつりと呟き、劉焯はいつの間にか止まっていた足を進めようとする、顔を合わせにくい人物がそこにいた。

「よっ」

「お父さん……」

劉焯を待っていたかのように現れた一刀は、片手を挙げて声を掛けてきた。

「聞いたぞ。街でまた勝手したつてさ」

「……わざわざ待って、そのお説教？」

「その件とは、また別だよ」

「じゃ、何さ？」

「俺は謝らない。それを伝えにきた」

一刀は劉焯を正面から見据え、自身の心中を吐露していく。

「俺はお前を独りにしたくないし、民と仲良くしてほしい。  
朔が皆に嫌な想いをさせたくないのも解るよ。けど、ずっと遠慮  
してる事ないんだ」

街の皆は、劉焯を少なからず見てきた筈だ。見ていないのなら聞いていた筈だ。

あとは、小さくとも歩み寄る一歩が必要なのだ。

「歩み寄る事が怖いなら、俺と一緒に一歩踏み出してやる」

語る一刀の顔は主ではなく、一人の親のそれとなっていた。

劉焯は義父の顔を見上げ、子の力になろうとする想いの強さに嬉しさが込み上がってくるのを感じた。

「僕も……謝らないよ」

短く告げ、劉焯は一刀の袖を握る。

「ご飯、まだだったら一緒に食べよ」

「そうだな……俺も腹減ったよ」

柔らかい笑みを浮かべ誘う劉焯に、一刀は彼の頭を撫でながら答えた。

そして、父と子は歩き出す。

手を繋ぎ、笑顔で一歩ずつゆっくりと。

## 鬼とすれ違い（後書き）

日常編第2段の今回。

朔と街の人たちとの歩み寄りを書かなくてはと思い、書いてみたものの………いつの間にか親子ケンカっぽいものを書いていました。あれ？

私は家族とまともにケンカしたことがないので、こんな感じになっ  
てしまいました。人によっては、これケンカ？ となるかもしれま  
せんが、そこはご容赦を。

感想、品評、お待ちしております。

鬼と新人メイドな2人（前書き）

今回は、サブタイトルから分かるかと思いますが、月と詠中心のお話です。

あと、もう一人追加してます。

## 鬼と新人メイドな2人

洛陽で暴政を振るった董卓は、袁紹率いる連合軍により窮地に立たされ、賈馮と共に屋敷に火を点けそのまま自害した。

それが世に名を残す事になった悪逆の最期だった。

という事になっている。

真実は、朝廷を蝕む策謀と張讓の名を騙った導師の目的に巻き込まれた董卓と賈馮を万民が認めるお人好しが保護しているのだ。

そして、

「な、ん、で！ 僕と月がこんな事しなきゃいけないのよ！！」

とある少女の文句が大音量で城中に響いた。

彼女の名は、詠。

もともと『詠』という名は彼女の真名であるが、死罪を避ける為に『賈馮』という名を捨てたのだ。

「え、詠ちゃん。落ち着こう？」

詠を宥める少女。

ほわほわおっとりとした雰囲気を持つ彼女なのだが、彼女こそ悪逆と呼ばれた『董卓』 真名を『月』<sup>ゆえ</sup>という その人なのだ。

前述通り、彼女らは<sup>お人好し</sup>一刀と<sup>お人好し</sup>劉備に保護される際、『董卓』と『賈馱』の名を捨て、一刀付きの侍女となった。

そんな怒り出すのと宥める二人が着ているのは紛う方ないMAID服。

「天の世界じゃ、これだって正しい侍女の服装なんだ!!」

と一刀が力説。そして、メイド服の図面を書き上げ、珍しい意匠の服に興味が湧いた服屋のおっちゃん<sup>の</sup>提供により、完成された一品なのだ。

「どこに能力の無駄遣いしてんだ、と思わずにいられない月と詠である」

「それはその通りなんだけど……さっきから何してんのよ、旭」

片眉を吊り上げ、詠は振り返る。

そこには、周倉が手でメガホンを作ってしゃがんでいた。その後ろにはメイド服と同時作成された執事服を着た劉焯と、同じくメイド服を着た見知らぬ女性が立っていた。

「何してるって、長々とモノローグ語ってたんすけど」

「も、ものろーぐ？ 何よそれ」

「説明めんどいから、イヤ。パス」

「がああああ！」

真顔で説明拒否する周倉を、詠は肩を掴んでガクガクと揺さぶる。

それを尻目に見ながら、月は取り敢えず劉焯に話し掛けた。

「朔くん、どうしたの？ それにその人は？」

「僕はちよつとした罰掃除だよ。あと、この人は侍女長の徐庶」

「徐庶元直にございます。以後よろしくお願い致します」

「ゆ、月です。よろしくお願い……します」

劉焯に紹介された徐庶は頭を下げ、礼をする。それに合わせて月もお辞儀した。

その最中に、徐庶の綺麗な立ち振る舞い、流麗な言葉遣いに董卓は思わず見惚れてしまった。

関羽程ではないが、背が高くすらつとした立ち姿。柔和な顔立ちの中に物事を見抜くような鋭さが顔をちらつかせ、大人の女性の色香を醸し出している。

体形も出るとこはとても出ていて、引つ込ませたいところは引つ込ん



でるといつ、月には羨ましいスタイルをしていた。

「へう……」

「？ どうしたの、自分の胸ぺたぺた触って」

「うう……」

劉焯の気遣いが更に月の薄

控えめな胸に突き刺さった。

そこに、徐庶は指を一本立て、

「若。女性の悩みというものは、得てして異性に打ち明けられず、理解し難いものが殆どでございます。」

そこを察し、適した言で心を労る。それが男子としての器量の見せ所でございますよ」

劉焯に優しく説き始めた。

劉焯も劉焯でへえ、と素直に耳を傾けていた。

「ふふつ。なんだか徐庶さんて、朔くんの先生みたいですな」

「そつでございますか？ 私程度が若に教鞭を執るなど恐れ多い事にございますよ」

片手を頬に当てて困ったように笑う徐庶。だが、それを聞いた周倉はそんな事ないと言い出した。

「せんちゃんは凄いい人っすよ。頭の良さはシュシュやヒナヒナにも

負けてないし、武術も中々の強さっす」

「うん。それは僕もそう思う……………で、旭は何してんの？」

「ふえ？」

「え、詠ちゃん……………」

「はあ……………はあ……………」

間の抜けた返事をする周倉に抱えられている詠の顔は、かなり上気して眼はとろんと蕩けていた。

「本当に何したのさ？」

「あんまりしつこいから、氣を撃ち込んだんすよ」

「こんな風になるなんて、どこに撃つたのさ？」

「どこにつすよ？」

答えを実演で見せようとしたのか、周倉はおもむろに詠のミニスカートの中に手を突っ込む。

途端、劉焯は徐庶に前後をぐるんと反転され、耳を塞がれた。

塞がれたせいで、しっかりとではないが、詠の悲鳴じみた叫びが聞こえた気がした。

振り返れば、案の定というべきか。

「詠、失神してる」

キョトンとした劉焯が指差しながら徐庶に問うように見上げる。問われる側である彼女としては、さすがにこの子供にあるがママを説明する事は躊躇われた。

「よいですか？ 若。世の中には年齢制限というものがあるのでございます。

残念ながら、若の年齢で知るには早過ぎる事例が、今の詠様の身に降り懸かったのでございますよ」

「……月は見てたの？」

「へう！？ ……う、うん。私も徐庶さんと同じで朔くんが知るには、は、早いと思うな」

「年齢制限？」

「そ、そう！ 年齢制限だよ！」

また指を一本立てながら説明する徐庶に、顔を真っ赤にして彼女に同意する月。そんな二人に言われて、解ったのか解ってないのか、劉焯は首を傾げながらも頷いた。

「千里せんりと月が言うなら、もう聞かない」

子供の純粋な質問を切り抜けた二人は、そつと胸を撫で下ろした。

同時に、こういった時の子供の質問は質たちが悪いと再認識した。

「そつだ……朔くんが今言った名前って」

「名前？ ああ、徐庶の真名だよ」

「やっぱりそつなんだ」

「はい。私の真名は千里と言つのでございます。以後、こちらでお呼びくださいませ、“董卓”様」

「っ！？」

捨てた名前と呼ばれ、思わず月の体が強張る。それを見逃さない徐庶はあらあら、と眼を細めた。

「……………どうやら予想的中のようでございますね、董卓様。そうしますと、あちらは賈馱様でございますね」

「ち、違います。私は董卓なんて名前じゃ　！？」

「ふふ。お見掛け通り、腹芸は得意ではないようでございますね」

徐庶の柔和な笑みにやられたか、月の頭の中は混乱も混乱していた。

彼女の言通り、自分は隠し事やら何やらは苦手。軍師であった詠ならば慣れていただろうが、頼りにしようにも失神していて頼るに頼れない。

「申し訳ございません。どうやら要らぬ混乱をさせてしまったよう  
で」

「へ、へう？」

謝る徐庶の顔には、少し悪戯しちやいましたね、と書いてある。

これが更に混乱に拍車をかけた。

「少し落ち着きましょう。はい、深呼吸でございますよ」

「ひっひっふー、ひっひっふー」

「……………。変わった深呼吸をお知りのようですが、どなたにお聞きになったのでございますか？」

「あ、旭ちゃんに」

「そうでございましたか。……………旭様、後でお話がございます」

とても綺麗なのに恐ろしい笑みを向けられ、周倉は冷や汗を流しながら何度もコクコクと頷いた。

関係ないのに徐庶の威圧の笑みに巻き込まれた劉焰は逃れたいと先を促す。

「千里はどうして月が董卓だって解ったの？」

「朔くん!!!」

「千里に嘘もごまかしも効かないよ。それに千里は月と詠の正体をバラしたりしない」

「若の信頼を頂けるとは嬉しい限りでございます。  
それでは、私が解った理由でしたね」

徐庶は指を一本立て、

「先ずですが、月様と詠様の雇用がいきなり過ぎるのでございます。  
まあ、あの方々の性格上、今まで無かったと言えば、大嘘になりま  
すね。

ですので、雇用の際にはご相談くださいと念に念を押していたの  
でございますが……………」

困ったような表情を浮かべる徐庶。

同じ事をし、その罰で掃除を言い渡された劉焰としては、ごまかす  
ように苦笑うしかなかった。

「それで気にかかったのでございます。相談が無くとも経緯の説明  
くらいありましよう。

しかし、無かったのでございます。我らが玉、天の御遣い様のお  
傍に付けるというのに」

「説明、無かつたんだ……………」

「はい。抜けた面は以前から少々見受けられましたが、ここで発揮  
してほしいはございませんでした」

今度は“ような”では無く、徐庶に本当に困った顔をされた。

あの二人の事だ、徐庶に話したくないとは考えていない筈だろう、

と劉焯は思う。

恐らく、月と詠の秘密を守る為に情報の漏洩を生真面目に防ごうとして、話すタイミングを計りかねていたのだ。反董卓連合での戦が終わったとはいえ、董卓が朝廷 天子を傀儡かいらいとしたという噂のほとぼりは、まだ治まりきっていない。

下手に考えたなりの方策だろうが、徐庶としてはやはり相談の一つくらいは欲しかっただろう。

「ごめん、千里」

「あらあら、若が謝る事ではございませんよ。それにご主人様も桃香様も、董卓様と詠様を慮おもつてした事でございましょう。」

それは、実にあの方々らしいのでございますよ」

「そうだね」

「まあ、それでも愛紗様と一緒にお説教をしに行かなくていけません  
んが」

「……………」

関羽と徐庶のお説教。

劉焯はそれを想像するのさえ嫌だった。

外からスタボロにしてくるのが関羽のお説教なら、罪悪感を的確に突いて内からじわじわとスタボロにしてくるのが徐庶のお説教だ。

内外同時にされでもしたら、その日は再起不能なる事は間違いない。

「主上と桃香様の冥福を祈ろう」

「朔くん、ご主人様と桃香様を勝手に殺しちゃダメだよ？」

月が優しく言うが、それは彼女がその恐ろしさを知らないからだ、と劉焯は思った。

「何にしろ、貴女様方が父母から頂いた名を捨てた理由、ご主人様のお側付きとなった理由……全てとはいきませんが、察しはつくのでございませよ。」

そして、その選択は間違ってたなかつたと断言するのでございます

「徐庶さん……」

「千里、で構いませんよ。生きようとしなければ、誰の行く先にも光は見えてこないのでございます。」

貴女が“今”という光を掴めたのなら、それを良きものへとしていきましょう、月様」

「……ありがとうございます、千里さん」

涙を眼に溜めながら礼を述べる月に、説教くさくなってしまいました、と徐庶は小さく笑った。

「それでは、お掃除再開でございます。終わりましたら、一緒にお茶に致しましょう」

「はい。お手伝いしますね」



「若も、早く終えて愛紗様に褒めてもらいましょう」

「罰掃除で褒めるも何もないと思うけど……」

まあ、いいや、と半眼になりつつも劉焯は掃除を始めた。

「よく綺麗に掃除したな。偉いぞ」

劉焯の頭を撫でながら、関羽は彼を褒めた。

まさか、本当に褒められるとは思わなかった。

劉焯のそんな気持ちが顔に出ていたか、徐庶は小さく微笑んでいた。

掃除を終えた劉焯達は東屋に集まり、徐庶の提案通り関羽を交えてお茶をしていた。

彼らの前にあるテーブルの上には幾つものお菓子が並び、甘いものに弱い女性陣は眼を輝かせている。

「よくもまあ、毎度の事ながらこれだけ多く作れるっすね」

そう感心半分呆れ半分で言う周倉。しかし、彼女も例に漏れず甘味

の魅力にやられている。

「確かにね。しかも手抜き無しって、かなり大変でしょ」

詠も同じ意見なのか、団子を手に取ってまじまじと言った。

そこで、彼女に疑問が湧く。

「これ、誰が作ったの？」

詠の問いに、劉焯達は一斉に同じ方向　徐庶の方を向いた。

「もしかして……」

「はい、私でございますよ」

詠も倣うならように見れば、徐庶はおっとりとした声で答えた。

「嘘……これ一人で？」

「凄いです」

「詠様も月様も、そんなに驚かれる事ではございませんよ？　一人の女性としてのちょっとした嗜みでございます」

何て事のないように徐庶は言うが、その瞬間に顔を反らしたり、目を泳がせたり、聞いていなかったふりをした者がいた。

誰がと言わない。察してほしい。

「そうそう。おチビ、アンタさつき罰掃除とか言ってたけど、何したのよ？」

話を切り替えるように、詠は急に話を振り出す。

「ああ、それ？ また勝手やったからだよ」

「内容が伝わってこないわ……」

「先日、若が人事部を通さず、勝手に兵を雇ったのでございます」

「うわっ、やっぱり親子ねアンタ達」

「え、詠ちゃん！」

「しかも、街で盗みを働いた者を、だ。取引と言いながら、実際はかなりの恩情を取り計らっていたのだ、朔は」

「盗もつとした商品の代金を代わりに払って、職まで斡旋して。私にはその人達の家族を診察させたんすよ」

「アンタ、どこまでお人好しなのよ!？」

「だから、勝手したって言ったじゃんか」

詠が呆れを混ぜて叫ぶも、劉焯は何食わぬ顔をして茶を啜すすった。

そんな彼を見て、月は柔和な笑みを浮かべ、

「でも、朔くんらしいです」

そう評した。

自身の優しさを自分の勝手と言い、助ける事を守る事と言い張る。

今回は手を差し延べる事を取引と称した。

そんな素直じゃない幼い少年。

確かにそれは、劉焰“らしい”と言えた。

「ま、あのお父さんの背中を見てきたなら、当然の成長ってところか  
かね」

「かもしれないね。でも、素直じゃないのは、誰の影響かな？」

「桃香？ ……じゃないか。朱里や千里でもないだろうし、星あたり  
でしょ」

「ふふ。ハズレでございます」

「じゃあ、旭ちゃん」

「不正解でございます」

口に手を当ててほのぼのと笑う徐庶の言葉に、詠と月はまた首を傾  
げた。

素直じゃない人？ あと誰がいたっけ？

そう考えながら脳内検索を行うが、ひっかかる人物が全然出て来ない。

(……正解は、目の前にあるのでございませよ)

「目の前?」

声を潜めて言ってきた徐庶の目配せを追い、月と詠もそちらを見る。

そこには、劉焯が食べ易いようにお菓子を小さくしている関羽がいた。

「あー……」

何故だか、凄く納得した。

「? 何故、こちらを見て得心がいった顔をしている?」

「別に。勝手に納得しただけよ」

「そうですね、納得しちゃっただけです」

「何か釈然としない……」

どこかスッキリとした表情の二人に対し、関羽は半眼で呟いたのだった。

「まあ、いい。……よし、出来た。このくらいの大きさなら、朔も食べやすいだろう」

「ありがと。でも、毎回やらなくていいよ」

「そういうのは、口の周りを汚さないようになれたら言いなさい」

「むう……」

窘められた劉焯は反論出来ず口をつぐんだ。そして、関羽に口の周りを拭かれ、若干顔を赤らめた。

そんな二人は、まるで幼子と世話を焼く母のように見えた。

「……」

「さつきから何なのだ？ 私と朔を見て、何か変か！？」

「ふ、ふん。別に何でもないわよ」

「いえ、他意は無いですよ？ そ、その……」

「では、何だと言うのだ？」

「まあまあ、でございますよ」

息荒くなり始めた関羽を徐庶が宥めた。

「月様も詠様も、若と愛紗様があまりに仲睦まじかったので、きつと親子に見えたのでございますよ」

「む……そうなのか？」

「は、はい。朔くん、愛紗さんに口の周りを拭いてもらって嬉しうでした。それに朔くんのお世話してる愛紗さん、何だか凄く優しい顔をしてましたよ」

「ボクも月と同じ。あの関雲長と小鬼のそんな顔、見る事になるとは思わなかったよ」

月にはほんわかと、詠には呆れ混じりに言われ、関羽は照れくさそうに頬を掻いた。

劉焯はさして興味が無いのか、小さくしてもらった徐庶印のお菓子をリスのように頬張っていた。

「あらあら、まあまあ」

「え？ うわっ!?!」

それにいち早く反応した徐庶は片手を頬に当てて蕩けた顔をし、詠はそんな彼女の突然の変化に驚いた。

一言で言えば、かなり幸せそうな表情をしているのだ。

(……え、詠ちゃん、愛紗さんも)

(愛紗も？ って、よく見たら旭もなってる!?)

劉焯の小さな口ではむはむと食べる様はどこか小動物的な印象があり、頬一杯にしてもまだかぶりつこうとする今の彼からは年相応のあどけなさを感じられる。

子供特有の可愛いらしさ。

それに関羽達三人は見事にやられているのだ。

確かに可愛いと月も詠も思う。しかし、お菓子を食べる劉焰を見ていると、何故か見た事があるような妙なデジャヴュを感じた。

緋い髪。

類い稀た武。

普段と打って変わった姿。

敵からは恐れられ、味方からは敬愛を受ける人材。

「ああ、あいつか……」

デジャヴュの理由が解り、詠は小さく呟く。

普段は手の掛かる問題児。けれど、一度戦場ひとたいに立てば彼女程頼りになる者はいなかった。

今は行方知れずの仲間。

無事でいるだろうか？

無事でいてほしい。

そんな事を考えていると、詠は手に柔らかな温もりを感じた。



見れば、月が優しく包むように手を握っていた。きつと彼女も同じ事を考えていたのだろう、と詠も感づき、同じように握り返す。

二人の顔には自然と笑みが零れた。

その笑みに気付いたのは、ただ一人。

彼女はそれを静かに見守った。

お茶会も終わり、各々が仕事に戻ろうとした時だ。

「月様、それに詠様」

徐庶は月と詠を呼び止めた。

「これは私の勝手な予想の上、差し出がましい事を申し上げさせて頂くのでございます」

「何ですか？」

「もし、力になれる事があれば、遠慮なく言ってほしいのでございますよ」

「え」

予想もしていなかった事を言われ、月と詠は言葉を失った。

それを察してか、徐庶は続きを口にする。

「お菓子を食べていた若を見た時、親しい誰かを思い出していたのではありませんか？」

それに無事を信じているものの、安否が気になっている。そんな顔をしていたのでございます」

「は、はい。その通りです……」

「アンタ、ホント何者なのよ？」

「ふふ、私はしがない侍女長でございますよ」

的を射ていた徐庶の推測に月は驚き、詠は半眼で呆れ混じりで呟く。それに徐庶はやりわりと返した。

「もし、大切な方と共にいたいと言うのであれば、きっとご主人様も若もお力になってくれる筈でございます。

それで貴女方の“今”をより良きものに出来るのなら、尚更に」

お人好しでございますから、と最後に付け足す徐庶。

実際、彼女の言う通りだろうと二人は思う。

若干素直じゃないのが一名いるが、例を見ないお人好し集団。中でも、そのトップのお人好し加減は群を抜いている。

お願いすれば、きっと応えてくれるだろう。

「……大丈夫です」

しかし、月はゆっくりと確かに告げた。

「私もあの娘がいてくれたら、嬉しいです。

……でも、必ず会えるって信じてます」

「ボク達、強引なところもあったけど、あのお人好し達に命を救ってもらってる。

曲がりなりにも受けた恩を少しも返さないまま、すぐ頼るような恥知らずじゃないわよ」

「……そうでございますか」

二人の答えを聞き、徐庶は思う。

(慧眼ここに極まれり、でございますね)

主二人の人を見る目の良さには、いつもの事ながら頭が下がる思いをさせられる。

人の心根を無意識に見透かし、接する事でその人自身の善性を引き出していく。

それが彼らの持つ、彼らなりの威徳の成せる業わざなのだろうか。

「ふふ、私はどうやら貴女様方を気に入ってしまったようでございます」

「な、何よ？ 突然」

「？ ありがとうございます」

「ですので、私の持つ侍女技術を全て伝授し、超一流 特級侍女へと成長させてみせるのでございます」

「「え……！？」」

話の飛びように一瞬で置いてかれた月と詠。本当に意味が解らない。

楽しみしててくださいませ、と徐庶は笑顔で去っていく。

残された二人は茫然としたまま、そんな彼女の背中を見送るしかなかった。

しかし、何故だろうか。

楽しみに、と言っていた徐庶の言葉とは裏腹に、

覚悟しておいてくださいませ

そう背中が物語っていた気がした。

「ありやりや、せんちゃんに気に入られちゃったんすね。ご愁傷様  
つす」

廊下の陰で見えていたのか、徐庶と入れ代わるように周倉がやって来た。

しかも、意味深なセリフ付きで。

「旭、そのヤバ気な発言は何？」

「今日のお菓子とか掃除とかで解ってると思うんですけど、せんちゃんって家事能力凄いですよ」

「うん。何て言うか、完璧だったね」

「そうなんですよ。それを伝授となると、一日教わったら二日間は疲労で動けなくなるんですよ」

.....

.....

.....

「今から、あの莫迦に頼んだら軍師に戻してもらえるかな？」

「詠ちゃん.....」

「表舞台に立てないのに、軍師やっていいんですかね？」

「うう.....」

「あと、せんちゃんの特別授業には護身術があって、撃剣を習うん

すよ

.....

.....

.....

「旭ちゃん……」

「旭い〜」

「いやぁ……泣きつかれても、どうにも出来ないっすよ」

月と詠に縊られ、周倉は苦笑いを浮かべるしかなかった。

彼女らの細腕では刀剣や木刀を振るところか、まず持ち上げられるかさえ怪しい、と周倉は思う。

「うう……侍女がなんで撃剣なんて使えるのよ」

「せんちゃん、昔は一時期だけ武侠だったらしいっすよ。それで色々あつて水鏡塾に入って、シュシュとヒナヒナと勉強したって話っす」

「朱里ちゃんと雛里ちゃんど？ じゃあ、千里さんは……」

「軍師……だね。どうりでボク達の事、見透かせる訳よ」

家事も出来て戦えて、更に軍師の才も持ち合わせている。どんな侍

女だ、と詠は心中で呟いた。

何にしても、だ。

「ボク達、特別授業は避けられないのね……」

「詠ちゃん、頑張る？」

「うう……月ええ〜」

抱きしめ合う美少女二人。美しき友情が形になったようで、とても絵になっていたのだった。

「因みに、せんちゃんはシュシュ達と同じ年だったり」

「嘘っ!?!」





鬼と新人メイドな2人（後書き）

今回の話ですが、書いていて方向性を見失ってました。

あれ？ 何書きたかったんだっけ？

という状況を繰り返しつつ執筆。

毎度のことながら、グダグダに感じましたら、平にご容赦を。

感想、品評、お待ちしております。

鬼と……にゃんこ？（前書き）

今回、私なりにふざけました。

この一言に尽きます。

鬼と……にゃんこ？

街の活気はなりを潜め、夜の帳が世界を包む。

誰もが寝静まる刻限。そんな時間に、平原のとある店を尋ねる青年の姿があった。

青年は周囲に視線を走らせ、自身の目撃者がいない事を入念に確かめると、その店の中に静かに入っていった。

店の中には、一人の男がいた。彼は青年の姿を認めると、ニヤリと怪しげな笑みを浮かべた。

「例の物は出来てるか？」

「へい。ばつちりですあ」

青年の問いに男は自信満々に答える。男の手にはいつの間にか長方形の大きめな箱があった。

「それが……見せてもらおうか？」

「どうぞ。あつしの腕に縋りをかけて作った作品です」

「ほう……中々のものだ。これなら、あと5年はいけるな」

男の作品を手を取った青年は、満足げにそう呟いたのだった。

突然だが、劉焯翔刃は逃げていた。

背後から迫る脅威の気配は、諦めを見せる事なく彼を追い立てる。

力強く地を蹴り、どんどん加速していく。それに合わせ、脅威も加速した。

何故、自分が逃げねばならない？

そんな自問自答を繰り返すとも、答えが出る筈もない。

その答えは彼の内には無いが、原因は劉焯自身なのだ。

「何だつてのさ……！？」

苛立ちながら、毒づく。そして、自身の後方を見遣る。

そこには自身を捕らえんとする脅威  
信頼している仲間の姿  
があった。

「若様の目、にゃんこに似てるね」

そんな事を言われたのは、劉焯が二人のお人好し（主）の警邏恒例『お姉ちゃんといっしょ』（命名、旭）が必然的に発生し、仕方なく混じってちびっ子達と遊んでいた時だ。

その内の女の子の一人が、突然劉焯の鬼眼をそう評した。

（にゃんこって……猫だよね？）

言われた瞬間、劉焯の頭はフリーズした。

異形の双眸　縦に開かれた瞳孔の細さは、時に猫に近いものに見えない事もないかもしれない。

しかし、鬼と猫では話が違い過ぎるだろう。

「若様、にゃー」

「え？」

「にゃーあっ！」

「ニャアーっ！」

「ニヤニヤッ！」

「増えたっ！？」

連鎖するように子供達が猫の鳴きマネをしだした。しかも、何か期待するように劉焯を見ている。

一人、また一人と増えだす度に外堀を埋められていく奇妙な感覚さえる。

「あ、あはは……」

「「「「にゃーっ……」」」」

「にゃ……にゃー」

「「「「若様、かわいいー！」「」」」

幼い自分より幼い子供達に遠回しに脅迫された気分を味合わされ、あまつさえ可愛いと言われるという、何とも言えない体験をした劉焯だった。

そして、そんな彼を見ていた保護者は、

「やばい……子供と戯れる朔……可愛い過ぎるっ……」

「見て見て愛紗ちゃん！朔くん達、にゃーにゃー合唱してるよ！」

「はい……はい……はあぁあ」

困っている当人を差し置き、和み続け、

「猫……か」

一刀が小さく眩いていた。

「ああ、あれが発端か……」

半眼で独り言ち、少し前の記憶を消去しなくなった。まあ、したとしても今の事実が消えないのだが。

「朔よ、大人しく縛に就け！」

劉焯を追いかけているのは、趙雲だ。

劉焯の取るルートは家々の屋根の上を通る為、普通に追うには難しい。よって、鬼の二人を除けば身軽さで一番であろう彼女は確かに適任だろう。

「縛に就け、って僕が何したってのさ!？」

「ふっ……確かにお主は何もしていない。

だが、これは上意だ。それに逆らえる筈なかつ」

クツ、と喉で笑う趙雲の言葉に耳を疑った。

上意。

主君・支配者の意見、または命令。彼女より上位の者からの命令だとすると、もう容疑者は二人しかいない。

「何考えてんのさ、あの主は!？」

私利私欲全開の命令を下す主へ文句を叫びながら、劉焯は路地へと着地した。

しかし、そこには蛇矛を構えた張飛が待ち構えていた。

「うっわ……先読みされてたか」

「そういう事なのだ。いくら朔の足が速くても、朔がくる所で待つてれば関係ないのだ」

「これ……朱里が読んだのさ？」

「朱里と雛里だけど、雛里の方がやる気出してたのだ」

予想が外れ、劉焯は目を丸くした。あの二人なら一刀の頼みを断り切れず仕方なく、という流れなら解るが、やる気まで出しているとは思わなかった。

「意外だ……」

「なんだかお兄ちゃんから耳打ちされたら、いつもの雛里じゃなくなっただ」

「ああ、買収されたのね……」

「因みに鈴々はね、朔を捕まえたら、お兄ちゃんがご飯たくさん食べさせてくれるって」



えへー、と楽しみだと笑みを零す張飛。

世の世知辛さをこんな事で再確認したくなかった、と劉焯は本気で思った。

「星は……いいや」

「いや、そこは聞くべきではないか？」

追いついた趙雲が半眼で言ってくるが、聞く気も起きなかった。

酒とメンマ。

これ以外に何があるのだろうか。いや、無い。（反語）

「何だか急に微妙な心持ちになってきたな」

「気にしなくていいよ。気のせいだから」

いつもの雰囲気になりかけているが、張飛は蛇矛を、趙雲は龍牙を構えている。

そして、劉焯は腰に双剣を佩<sup>は</sup>いている。

一触即発の状態とも言えるこの状況で、彼は取る行動を決めた。

「仕方ない。その命、喰らってやる」

というか、殺る事にした。

「なっ！？ 正気かっ！？」

「正気だよ。あんな辱めを受けるくらいなら、“角”でも何でも使  
つてやるさ」

「にゃー。こんな事で本気なるなんて、朔は大人げないのだ」

「欲に目が眩んだ輩に言われたくないね」

拳を軽く握り、劉焯は油断なく構えた。

彼から放たれる覇気に、張飛と趙雲は震えた。

武人としての心が。

強者と矛を交え、より高い境地へと至りたいという感情に火が着いた瞬間だった。

「ふふ……参った。これでは己を御しきれるものか」

「鈴々も思いつきり戦いたくなってきたのだ」

将が二人、獯猛な光を目に燈す。

刹那、我先にと張飛が飛び出す。振るわれた蛇矛が劉焯に迫るも、彼は半身反らす事でそれを躲し、反撃に出ようとした。

「そつはさせぬよ」

流麗に趙雲は眩き、高速の連続突きが放たれた。

完全に反撃のタイミングを潰され、劉焔は舌打ちする。突きの回避を強いられたそこに、張飛の剛速の薙ぎが重なった。

速さと力強い一撃が次々と連なり、劉焔は防御しか出来ない。

反撃の糸口が掴めず、劉焔の顔が強張る。

さすがは劉焔加入前からの、劉備軍三本槍と言ったところか。

防戦一方だが、一撃一撃を冷静に対処する余裕はまだある。

それでも劉焔は、ギリ貧は御免だった。

「うりゃーっ!」

「疾っ!」

張飛の上段からの斬撃を払い落とし、足で踏み付ける。

間髪入れず来た趙雲の突きを裏拳で打ち上げ、劉焔は趙雲へと一気に接近。

「うにゃっ!?!」

その際に張飛の襟首を掴んだ。くぐもった声が聞こえた気もするが、気にしている余裕は無い。

張飛の襟首を掴んだ手に更に力を込めた。振り上げるように腕を動

かせば、連動して張飛も浮き上がる。

その一瞬で劉焔は意地悪く口角を吊り上げ、

「反撃、つてね」

張飛を趙雲へと投げ付けた。

「ぐわあああ!?!」

「にゃーっ!?!」

絡まり合うように倒れ込んだ二人は、目を回したのか動かなくなつた。

「因果応報、つてやつさ。他人ほくの不幸で蜜を得ようとするからだよ」

劉焔は半眼で言い残し、また駆け出すのであった。

「しまった……まだこいつがいた」

そうばやく劉焔の前には、自称姉の周倉がいた。

人の少ない裏路地で身を隠そうとしたのも先読みされたらしい。な

んて軍師の才能の無駄遣いだろっか。

「あはー。もう逃げられないっすよ」

告げる周倉の手には、やはり羲和が握られている。

この軍の上層部、案外暇なのだろうか？

劉焯はそう思わずにいらなかった。

「旭も主上に買収された口なのさ？」

「まさか。そんな事無いっす」

首を横に振り、周倉は否定する。前例がいた為、劉焯はその点に見直した。

「初めからカズ兄に協力してるっす!!」

そして、見損なった。

「お前も敵なんだね……」

「あれ？　なんかお姉ちゃんへの好感度がアップして大幅ダウンした感じが……。そして、朔ちゃんの雰囲気なんか怖いっす!？」

俯きぼそりと呟く劉焯の姿に、周倉は頭の中で警鐘が鳴り響くのを感じた。

負のオーラが出るんじゃないかと思うくらい暗鬱とし劉焯は、ゆっ

くりと無手で構える。

次の瞬間、地が爆ぜた。

爆ぜる轟音に続き、鋼を打つ硬質な音が響いた。

それは義和と劉焯の拳が衝突した音だった。

「いきなり強烈!? そんなのくらったら、お姉ちゃん死んじゃう  
!?!」

「……………死ねばいい」

「うつわー、冷たい一言っすねー…………」

劉焯が拳を打ち込む度に、周倉は義和で防ぎ続ける。

鋼を打つ音は一撃毎に大きくなる。それは衝撃の凄まじさを物語っていた。

「手が痺れる〜〜!」

「大丈夫。死ねば、何もワカラナクナルヨ」

「全然大丈夫くないっ!?!」

妙な威圧感を放ってくる劉焯に周倉は悲鳴をあげる。

しかし、劉焯は彼女が悲鳴をあげようが構う事なく拳を打ち付ける。その度に義和も悲鳴をあげるように硬質な金属音を響かせた。

「イイカゲン、クタバレ」

「口調が戻ってない!? 怒ってる? カナ文字で喋っちゃうくらい怒ってるんすね!？」

「シンジャウ? シンジャエ」

「会話にならないっ!？」

話が一方通行になってしまい、話し合いが出来ない。元より、言い聞かせたとて、劉焔が嫌がるのは明白だと周倉も解っている。

(でも、私は私の癒しをゲットする為にも打ち負かしてみせる!)

しかし、私利私欲全開な周倉に劉焔の事情など知った事ではなかった。

「はー……………」

呼吸を深く吐き、周倉は精神を落ち着けると同時に、集中力を更に高める。

それに呼応するように、彼女の四肢に着けているリングが淡く輝き出した。

リングの輝きを目にした劉焔は苦い顔をすると、周倉から距離を取って干将と莫耶を構えた。

「……………本気だね？」

幾分か冷静さを取り戻したのか、劉焯は目を細めて周倉を見遣る。

「勝負つすよ。朔ちゃんが負けたら、言うこと聞いてもらつすよ」

「じゃあ、旭が負けたら、今度の休みは一日」

「一日？」

「千里のお手伝い」

「死んでも勝つー!!」

一日お手伝いの一言に、周倉は覇気を一段と高めて義和を構えた。

一日中徐庶のお手伝いという事は、とどのつまり城の中を隈なく掃除するという事だ。それを前に経験した劉焯と周倉にとって、あれは拷問だと共通の認識をしている。

「んじゃ、やりますか」

「そつすね」

劉焯が飄々と言い、周倉が淡々と答える。

「斯くもメンドい殺し合いを」

そして、姉と弟 二匹の戦鬼はくだらない理由で刃を激突させた。



「ここか……」

今日も今日とて街の巡回をしていた華雄は、街の人達から何やら爆音に近い騒音が聞こえると通報があり、その場所まで駆け付けてきたのだ。

見渡せば、地面には至る所に小さな罅割れ、廃屋は壁や柱が壊れ、炭化した木片まである。

「……………」

「どうしました？ 華雄様」

共に巡回していた兵に聞かれ、華雄は苦い顔を浮かべると、

「いや、一瞬だが見なかった事にしたくなっただけ」

彼女にしては珍しく怠慢な発言をした。

「そういう訳にもいかないのでは……」

「ああ、解っているとも」

そう呟くと華雄は進み出す。

そう、解っているのだ。

見なかった事にはいけない事も。

「……………はあ」

やっぱりだ、と華雄は頭を抱えて溜息を吐いた。

ついできた兵士も目を丸くして啞然としている。

華雄達の目の前には、目を回して倒れている周倉の姿があった。

「またやらかしたか……………この莫迦が」

華雄は毒づき、親友の肩を叩く。

そう解っていたのだ。

この鬼娘が騒動を巻き起こした一人なのだ。

体を引きずるようにして劉焰は城へと帰ってきた。

さすがに行く先々を読まれ続けられては、逃げ隠れるのは難しいと  
考えた。

だったらこの際、城で暴れてやろうと劉焯は決めた。

しかも周倉と戦った際には、裏路地の廃屋を何棟か潰してしまった。  
あんな戦闘を繰り返しては、恐ろしいお説教が十八番の目付役  
が火を噴くかもしれない。

(いや、確実に噴くよね……)

勝手に兵を雇った時は事情が事情だった為、お説教というより注意。  
それにお人好しと詰なられながら罰掃除をさせられた。

しかし、今回はそういかなのは确实。民に実害が無い事だけが救  
いだ。

「それにしても、今日の皆は意地悪だ……」

独り言ちながら廊下を歩いていると、新人メイドを見付けた。

「あ、朔くん」

「え？ ホントだ、おチビじゃない」

「月、ツンツンツン子」

「自然に人の名前を変えるな！」

こちらに気付いた月に続き、詠も劉焯に気付いた。

「で、珍しくボロボロじゃない。何したのよ？」

「……我が軍の武將に次々と襲われた」

「強く生きなさい……」

「その言葉で泣きたくなるよ……」

詠の励ましで心に会心の一撃をもらい、劉焯はさめざめと泣きたくなつた。

それに月は苦笑い、

「朔くん、このままだとダメだから、傷の消毒しよ」

「大丈夫だよ、このくらい」

「このくらい、なんて軽く考えちゃダメだよ。傷を放っておいて大変な想いをした人、いっぱいいるんだから」

「いや、僕、鬼……」

「屁理屈こねない。ほら、さっさと行くわよ」

「ちょ　ええ!？」

月に右腕を、詠に左腕を掴まれ劉焯はズルズルと引きずられていく。

メイドに小鬼が連行されるという、何とも妙な光景の完成だった。

それをたまたま見掛けた兵い曰わく、微笑いましかつたらしい。

「おかしい……」

「何がよ?」

「さっきの流れなら、手当してくれるのは月の善なのに」  
しかし、消毒セットを持って目の前にいるのは詠だ。

何故だろう。若干寒気を感じる。

「文句あるの?」

「詠せんせーにしてもらえるなんて光栄でありますな」  
ドスの効いた声で言われては、そう答えるしかなかった。

「と、というか、手当出来るの?」

「……ていつ」

「にゃあああああっ!?!? しみ、しみるー!?!?!」

「まだ莫迦にするか、このおチビは」

「うにゅう……ただ聞いただけじゃなか」

「ふん。ボクは名軍師と呼ばれた賈文和よ？ これくらい出来るわよ」

「……………元でしょが」

「どりゃっ」

「にゃああああっ！？ その掛け声は治療向きじゃないー！  
「！」

戦場で傷が痛くとも悲鳴をあげない小鬼が、簡単な傷の手当てで悲鳴をあげるとは誰が思おうか。

しかし、彼は歴とした将の一であり、賊狩りの戦鬼と恐れられている。

のだが、

「ごめんなさいでした」

そんな彼は消毒薬を持つメイドに敗北した。

「ったく、子供は子供らしく大人しく治療されなさいってのよ」

「優しい治療が受けられるなら、誰もが大人しくなるよ」

「……」

「詠さん、ごめんなさい。お願いだから、包帯で腕を絞り上げない  
てください」

包帯のきつい締め付けで腕の血が止まり、指先からチリチリと痺れ  
ていく。

ギチギチと音を鳴らす包帯を解かれ、劉焯は絞り上げられた腕を摩こす  
りながら詠を半眼で見た。

「乱暴」

「それが治療してくれた相手に言う言葉？」

「雑菌を殺すという名目で消毒という名の拷問を行い、包帯で束縛  
なんてやり方で苦しませてくれやがりまして、ありがとう」

「ごめん。僕が悪かったから、今の取り消して」

「？」

詠の言葉に劉焯は小首を傾げる。彼は気付いていない。

今の言葉は聞きようによつては、変態さんの台詞なのだ。

そんなもの誰か 延ひいては、あの目付役と侍女長に聞かれてもす  
れば、どうなるかなど考えたくもない。

(しかも、ボクが言わせてるようにはしか見えないだろうし……)

「詠?」

「何でもないわよ。ほら、終わりよ、終わり」

詠は劉焔の頬をつんと優しく突くと、救急セットを片付け始める。

そこにお茶セットを持ってきた月が戻ってきた。

「朔くん、治療終わった?」

「うん。詠が(痛め付けながら)やってくれた」

「今、何か言葉を伏せなかった? おチビ」

「やだなあ、解ってるくせに」

「ふふ、いいわ。その挑戦、受けて立ってやるわ」

「? 朔くんと詠ちゃん、すっかり仲良しさんだね」

いやに含み笑いを浮かべる小鬼と眼鏡メイドを他所に、月はほのぼのとズレた感想を口にした。

そのまま月は三人分のお茶を煎れると、それぞれの湯呑みを渡していく。

煎れたてのお茶の薫りを楽しみ、月と詠はゆっくりと飲む。口の中に広がる程よい苦みに、ほっと落ち着けた。



そこで、気付く。

劉焯はじつと湯呑み、正確には中のお茶を見ていた。一口も飲んでいないようだ。

「……月、これは誰のお茶？」

「え？ 千里さんのだよ。今日はこれでお茶しようって、話してたんだ」

「ふーん……」

半眼になった劉焯は湯呑みを置くと、次は茶葉の入った茶筒を開けてその匂いを嗅いだ。

そして、ゆっくりと蓋を閉めると溜息を一つ吐いた。

「……どこまで本気かな」

「どうしたの？ 朔くん」

「おチビの嫌いなお茶だったの？」

「何でもないよ。それに嫌いって訳じゃない」

劉焯は頬をぽりぽりと掻き、

「これ、眠り薬入ってる」

言いにくそうに二人に告げた。

その言葉に月と詠はフリーズ。湯呑みを上品に持ったまま、ほのぼのとした表情はビギリと固まってしまった。

動かない二人に劉焯は目をパチクリとすると、取り敢えず割らないように湯呑みを彼女らの手から取り、テーブルの離れた所に置いた。そして、

「じゃ、逃走再開、と」

部屋を出ると扉をバタン、と閉めた。その時、部屋の中でガタツ、と物音が聞こえた気がしたが、聞かなかった事にして劉焯は歩き出した。

劉焯が月と詠の部屋を去った後、しばらくして徐庶がそこを訪れた。

「あらあら」

眠っている二人を見た徐庶は困ったように呟き、机の上に湯呑みが3つあるのに気付いた。

月と詠のだろう湯呑みには僅かに飲んだ形跡が見て取れたが、残りの1つには無かった。

そして、次に見たのは茶筒。それは徐庶が月に飲もうと約束したものだ。

用意しておいた茶筒に、口をつけていないお茶。

それらから、徐庶は予想を独り言ちる。

「失敗でございますね」

このお茶に眠り薬を混ぜたのは何を隠そう、徐庶自身だ。

狙いは言うまでもなく、劉焰。

劉備軍の名だたる武将達と矛を交え続けるのは、相当な疲労を齎す。しかし、彼を捕らえられるかどうか別。彼女自身、それで捕まえられるとは思っていない。

そこで、搦手からめてをとる事にした。

予め眠り薬を混ぜた茶を用意し、月と詠に今日はこれを飲もうと約束する。

次に、いつもの仕事を彼女らと休憩時間がズレるようにこなし、休憩する月と詠が戻ってきた劉焰と遭遇するのを待った。

そして、気の利く月が徐庶と約束したお茶を用意する。そのお茶を飲んだ三人は眠りこける筈だったのだが。

「さすがは若でございますね。一口も飲まずに見抜くとは、見事な慧眼でございますよ」

ふふ、と優しい笑みを浮かべる徐庶。しかし、やった事はとてもじゃないが笑えなかった。

「若を捕らえられなかったのは残念でございますが、この小さ可愛  
いお二人がいるので良しとするのでございますよ」

そういつた徐庶は楽しそうに月と詠の服に手を伸ばした。

「今日は何なんだろ……もうあれだよ、不幸だー！」

とぼとぼと歩を進めながら、劉焰は取り敢えず叫んでみた。

叫んだところで状況が良くなる事は無いが、叫ばずにいられない事  
だって鬼にもあるのだ。

そんな事を考えていると、前に関羽が歩いているのに気付いた。

理由は解らないが、彼女の背中には怒気が立ち上っている気がする。

(……触らぬ愛紗に祟り無し。今、接触するのは危険だよ)

それに今日は武将が血気盛んみたいだし、と内心で独り言ち、劉焰  
は踵かかとを返した。

「ん？ 朔ではないか」

「……………あっちから接触してくるとは」

しかし、そうは問屋が卸してくれないらしい。

ギギギツ、と苦笑いながらゆっくり振り返ると、やはり関羽がいた。

「どうかしたの？ 愛紗」

「どうしたもこうしたもない。我が軍の将が次々と職務放棄して脱走しおつて。怠惰にも程がある！」

「それは大変だね」

「因みにお前もその一人だ」

「……………」

関羽に半眼で言われ、劉焰は顔を背けた。これはもう、自分は被害者だと言っても通じなさそうだ。

「まったく、今の時間は雛里に勉学を教えてもらう時間だろう？」

政務に忙しい中、先生をしてくれてる雛里に迷惑をかけてはダメだ」

「……………その先生が、忙しい中僕に餌を仕掛けてくるんだね」  
「どね」

「何か言ったか？」

「何にも……」

「そうか。ならば、行くとしよう」

「……………どこへさ？」

「雞里の所だ。確か、今は玉座の間にいた筈だ」

理解が遅れた劉焯の疑問に答えると、関羽は劉焯の手を取り歩き出す。

しかし、劉焯にとって今そこは敵の本陣でしかない。単独で攻め入る場所ではないのだ。

しかも、暴れようにも守るべき主に怪我を負わす可能性もある。

(けど、嫌だっ！ あんな辱め受けたくない！)

覚悟は決まった。あとは

「……って、うわっ！？ 何で抱き上げるの！？」

「お前が自分で歩かないからだろう」

困ったように関羽は言うが、その顔は満更でもないようだ。

逃げなくてはならないのに、関羽に抱き上げられてはどっしりしようもない。

焦る劉焯は頭を何とか働かせようとする。

その時、彼は見た。

廊下の奥、そこで可愛いらしく微笑む、はわわ軍師の姿を。

そして、気付いた。

全て、彼女の掌の上で踊らされていたのだと。

「孔明、アンタって人はあああああ！」

叫ばずにはいられず、咆哮をあげるが、

「うるさいぞ、朔」

「うにゅっ……」

関羽に黙らせられ、そのまま劉焯は連行されてしまっただった。

「……………何ぞ？」

「いや、何と云うか……………なあ？」

「う、うん。その、ね？」

「何さ何さっ！！ 笑えばいいじゃんか！！」

はつきりと答えない一刀と劉備。そんな不機嫌な劉焯はふて腐れながら、息を荒げる。

そんな今の彼の姿は、

## 猫

である。

厳密に言えば、猫の着ぐるみパジャマである。

もふもふとした毛色は黒。全身を包むタイプで、フード部分にはもちろんネコミミ、手足にも忘れてはいけないうにぶにな肉球が付けられている。

こんな格好では、さすがの鬼眼もにゃんこ眼と言われても仕方ないだろう。

一刀は前の「若様の目、にゃんこに似てるね」発言を聞いて、劉焯にこれを着せる画策していたのだ。

その為に、まず劉備に協力を取り付け、孔明と鳳統の二大軍師を味方に引き込む。次に、最初から協力を申し出た周倉に加え、交渉で



張飛と趙雲の二人を巻き込んだ。

因みに関羽と華雄、それに月と詠は普段の動きをしてもらった方が都合が良かった為、話さなかった。

そして、実行の日がやって来たその日、まず劉焯に着ぐるみパジャマを作ったから来てくれと頼んでみる。

もちろん、劉焯が拒否するのは想定済み。案の定、彼は拒否して逃走した。

そこで武将達の出番だ。予め鳳統が予想していた劉焯の逃走ルート上に張飛を配置した上で趙雲を追わせる。そして、段々と体力を削り取り、矛を交える事で大幅に削る。

それに周倉と戦えば、劉焯に精神的疲労も与えられる事も折り込み済みだった。

武将を退けた劉焯は心身共に疲れているだろうから、月と詠に会えばお茶を断りはしないだろう。

そこで、眠り薬入りのお茶である。捕まえられればとも思ったが、彼を良く知る周倉から成功はしないだろうと指摘があった。

なら、それさえ布石にするのが軍師というものらしい。

作成決行時間を変更し、敢えて鳳統との勉強時間に遅れるよう仕組んだ。

そうする事により、眠り薬を回避しようと遅かれ早かれ、劉焯は真

面目な関羽と会い、鳳統がいると伝えておいた玉座へと連行されるだろう、と孔明は予測していた。

こうして孔明の罠に嵌まっていた事に気づけなかった劉焔は、強制的にお着替えとなった。

のだが、

「……予想以上に似合い過ぎて何も言えなくなった」

「……せめて、笑い飛ばしてください」

羞恥心で泣きたくなる劉焔。しかし、そのぐずる感じさえ、劉備や関羽の母性を痛く刺激し、顔を物凄く蕩けさせた。

「愛紗ちゃん……朔くん、たまんないくらい可愛いね」

「私としては、何故こういった事してるのか謎ですが……もつどうでもいいです」

「そうでございますよ。気にしたら負け、でございます。しかし、若の可愛さは気にせずにいられないのでございますよ……」

三者三様で同意見な劉備達は、どこか満足げに蕩けている。

「しかし、見事な作り。服屋の主人、中々の腕前だな。今度、私も注文してみるとしよう」

「確かに凄いのだ。あ、星！ 肉球！ 肉球！ 本物みたいにぷにぷになのだ！」

「なんと。私にもぷにぷにさせる！ ……これはまた見事」

「ふふ…その肉球は何を隠そう、この旭ちゃんが南の方の友達<sup>って</sup>の伝手で手に入れた一品。とある大王様も御愛用してるんすよ」

「大王！？ にゃー、凄いのだ！！」

「随分と肉球好きな大王がいたものだな。だが、悪くない」

肉球のぷにぷにを楽しむ張飛と趙雲。それに周倉が肉球グローブの素晴らしさを高説し始めた。

着けさせられた劉焰としては、だからなんだ、と言いたい気分だ。

「……えへ、朔くんとお揃い」

「良かったね、雛里ちゃん」

孔明と鳳統に至っては、劉焰と同じような着ぐるみパジャマを着て喜んでいる。

あれで買収されたか、と劉焰は半眼で二大軍師に冷たい視線を送った。

「でもさ、最後の愛紗が僕を連行って、会わない可能性だってあるのに策に組み込むのおかしくない？」

「おかしくないですよ」

半眼で疑問を浮かべる劉焯に、孔明は胸を張って答える。

「だって、朔くん、ご主人様の次に愛紗さんに懐いてますから」

「……いや、それは理由にならない」

「そうですね？ 朔くん、一日に3回くらいは愛紗さんに必ず会いに行くじゃないですか」

「……………そうだったっけ？」

とぼけるように劉焯は言うが、皆が一齐に首肯。逃げ場は無かった。

「おチビの疑問が解けたなら、こっちの質問に答えてくれる？」

そう口にしたのは詠だ。しかも、その声音はなんだか不機嫌だ。

それも当然。

「ボクと月まで着せ替えられるのよ!？」

彼女と月も被害者なのだから。

この二人が着ているのは、劉焯のような着ぐるみパジャマではない。

端的に言おう。

ナース服だ。

「ふふ。二人共、お似合いでございますよ」

「へう……あ、ありがとございます」

「お礼言ってる場合じゃないよ、月！ 巻き込まれて眠らされた上に、こんな変な服着せられて！」

「でも、可愛いよ、詠ちゃん」

「月え〜……」

怒るべきところなのだが、月は恥ずかしいながらも気に入っているらしく、詠は仲間を早々と失っていた。

「で、着替えさせたのは誰よ？」

「私でございますよ」

「千里！？ なんでよ!？」

「私の趣味と、二人が可愛いらしかったからでございます」

彼女は何かおかしいだろうかと首を傾げ言っが、それはおかしいと断言出来るはずだ。

劉焯は二人に同情しつつ、徐庶が相手では仕方ないと呆れていた。

徐庶は小さいモノと可愛いらしいモノが好きだ、と劉焯は聞いた事があった。

“小さい”のカテゴリには子供は勿論、背の低い人も該当するらし

い。それに加え、可愛いらしければ堪らないらしい。

そして、“小さい”上に“可愛い”二人が眠り薬で眠っている。じやあ、若の代わりに着替えてもらおうと思っただらしい。

同じ理由で、前回の罰掃除の時に執事服を着せられた身としては、その何とも言えない妙な苦しみを十分に理解出来た。

「ガンバレー」

「アンタに言われたくないわ、チビにゃんこ。あと、棒読みすな」

互いに半眼で言う仔猫とメガネナース。見事に変な構図だ。

「あ、そうそう……皆さん、お楽しみのところ、なんですけど……」

思い出したように仔猫な劉焯が一刀達に呼び掛ける。

何故だろうか。愛くるしい姿なのに、彼からは不安や嫌な予感しか感じない。しかもよく見れば、もふもふな毛が逆立っているではないか。

「あ、旭。あれってね……」

「あー……あれはっすね、肉球と同じ特別製で、朔ちゃんの感情に反応して猫っぽい感じを全力全開で表現してくれてるんす。

因みに、耳や尻尾も動くっす」

「って事は、つまり……」

「朔ちゃん、お怒りっすね……」

劉焔の怒りをしっかりと表現してくれている着ぐるみパジャマに、一刀と周倉は顔を引き攣らせた。

「覚悟、出来てる?」

そう呟きながら、劉焔は飛將軍を相手取った時と同等の覇気を放ち始めた。

可愛いのに、怖い。

そんな矛盾めいた存在になった仔猫に、誰もが冷や汗を流し始める。

劉焔がぷにぷにと一歩踏み出せば、一刀達はズザッと一歩下がる。こんなやり取りを何度か繰り返した。

「フカーーーーーッ!!!」

にゃんこな小鬼は遂に飛び掛かった。

後日、一刀は語る。

「あんなにぷにぷにでも、人の意識飛ばせるんだな」

大量の書類に忙殺されながら、しみじみと。

〳〵余談〳〵

「なんだ、こりゃ？」

仕事をこなしていると、一枚の報告書に目が留まった。読んでいる内に段々と眉を顰め、一刀は苦笑した。

夜な夜な城内で、子供くらいある大きな猫が二本の足で歩いているのが度々目撃されているらしい。

心当たりがありまくる一刀としては、まさかこんな報告書が回ってくるとは思わなかった。

「なんだ、すっかり気に入ってるんじゃないか」

素直じゃないなあ、と独り言ちながら、一刀はこの案件を解消すべ



く部屋を出て行ったのだった。

鬼と……にゃんこ？（後書き）

やってしまったなあ、と思った今回の話、いかがだったでしょうか？

千里さん、カッコいいと言われてたのに自分の好きなモノを前に暴走。やってしまった……

前回の活報に書いた千里の子供好きは、小さいモノと可愛いモノ好きから来ています。納得して頂けると助かります、とても。

そろそろ次章に移ろうかな、と思いつつ、もうちょっとだけ日常編が続きます。でないと、恋も出せませんし。

またの感想、品評お待ちしております。

## 鬼と鍛錬（前書き）

結構早めに書けました。

またあの人達が出てきます。

## 鬼と鍛錬

ブオン！　ズドンツッ！

ブオン！　ズドンツッ！

そんなけたたましい騒音を聞き付け、一刀は城の中庭へと足を運んだ。

そこにいたのは、劉焔と華雄の二人。

鍛錬中なのか、華雄の手には金剛爆斧が握られ、二人の周囲の地面はやたらと判<sup>えぐ</sup>れていた。

（派手にやってるなあ）

一刀は内心で独り言ちると、鍛錬を見学する事にした。

劉焔は相も変わらず飄々とした面持ちで、無手で自然体に構えていた。

対する華雄は汗まみれで、肩で息をするように呼吸は弾み、自慢の戦斧を持ち上げられるのかと疑問に思う程に疲労が見て取れた。

それでも彼女は金剛爆斧を振り上げ、劉焔に向かって突撃する。

戦斧の刃が空気を唸らせ飛ぶが、劉焔の髪の毛一本掠る事なく空を斬るに終わった。

その一撃を目にした一刀は、さすが猛将と感心した。

疲労困憊での一撃に華雄本来の精彩さは無い。けれど、普段の彼女よりも今の方が迫力あり、何より鋭さがあつたように思えた。

「もう限界でいいんじゃない？」

「ま……まだま……だ」

淡々と問う劉焯に、華雄は齒を食いしばって答える。そして、よるめきながらも金剛爆斧を何度も振り下ろした。

しかし、戦斧は劉焯に掠る様子さえ見えない。

「これまた見事な」

一刀の口から素直な賛辞が零れた。

体力が極限状態の華雄が降るう刃が、また鋭さを増す。

だが、劉焯の回避は違う。格が違う。

迫る刃の群れをそよ風でも受け流すようにして、戦斧をいなしていく。

それに剣舞のような優雅な魅力など無い。なのに、惹き付けられる。

足捌きは軽やかでありながら堅実。それは上半身 腕や胴体の使い方にも言え、探そうとしても一刀の眼では無駄が見えない。

(……………ん?)

劉焔に眼を向けていると、一刀は違和感を覚えた。段々と劉焔の姿がぼやけて見えるのだ。それは眼を擦って見直しても治らなかつた。足捌きを一步する度に、また一段と劉焔の姿がぼやけていく。まるでそこにいるのにいないような不確かな存在になっていくように。

そして、遂には霞みのように消えた。

「マジか……………」

眼を見開き、一刀は絶句する。それは華雄も同じで、金剛爆斧を振り上げまま固まっていた。

「どこに消えたんだ？」

キョロキョロと見渡して見るが、何処にもいない。

そんな事をしていたからか、一刀は後ろから声をかけられた。

「誰か探してるのさ？」

「ああ、朔の奴が消えたんだよ。華雄の攻撃を避けてたら、なんか霧とか霞みみたいに」

「ふーん」

「ふーんって、お前なあ……………え？」

「やあ」

呆れ混じりに振り返ってみれば、探していた本人　劉焯がこちらを見上げていた。

「朔！？　え？　なんでここに！？」

「来たのに声もかけてこないし、鍛練見てへーとかほーとか唸ってるだけだから、こつちから聞きに来たんだけど」

「気付いてたのな……」

「誰だつて気付くよ」

「そうか？　と一刀が言うと、一応将だからね、と劉焯は簡単に返した。

「用は特に無いよ。……そうだな、もう少し見学していいか？」

「いいけど、休憩してからね」

「ああ、構わない」

一刀の申し出を劉焯は承諾。そして、華雄のところまで行き、休憩を伝えた。

華雄はやはり限界だったのか、聞いた途端、くず折れるように座り込んだ。

「お疲れ、直葉」

「あ、ああ……北郷か」

「どう？ 朔の指導は」

「そうだな……一言で言えば、地味だ」

「地味？」

出て来るとは思わなかった言葉に、一刀は驚く。見ていた限り、地味という一言で終わるものではないだろう、と思ったからだ。

「基礎を思い出せ。最初の指導でそう言われた。だから、私は自分の流派の基礎を朝から晩まで毎日やった」

「毎日……えらくきつい事を」

「そして、また言われたよ。基礎を利用出来ていない、と」

「朔、意外と辛口だな」

この前、にゃんこ化していた子供が言う台詞じゃないな、と一刀は思う。

だが、同時に思う。劉焯にとって武とは、生き残る術の一つだ。だから、彼は決してそれを疎かにしない。

厳しく言うのは、きっと華雄を生き残らせる為だと解る。けど、口にはしないだろう。それが劉焯翔刃なら。



「なあ、朔。直葉ってどこが悪いんだ？」

「力任せなこと」

一刀が聞いてみると、劉焯に即答された。

「簡潔に言つと、荒い。躍起になって力任せにやるから、動きが雑になるんだ」

「無駄に力んでしまつてるって事か？」

「そういうこと。多分、戦場を駆け巡つてる内にそうなたんだと思う。そこそこ勇名を馳せたみたいだし」

容赦なくチクチクと言う劉焯の言葉に、華雄はばつの悪い顔をしていた。

そして、

「でも、あと悪いところ無いんだ」

その言葉に華雄はパーッと顔を輝かす。

「直葉の流派をよく知らないから、厳密には言えないんだけど。基礎さえ直して、頑張れば良いとこまで行けるんじゃないかな」

「師匠！ 今のは本当か！？」

「？ 嘘言つてどつするのさ」

「っ！ う…………うおおおおっ！！ 師匠！ 私はやります！ 師匠のいる高みまで行ってみせます！！」

「あ…………うん、頑張って」

「では、走り込みに行ってきます！！」

「うん。怪我しないようにね」

熱血発動中の華雄を、淡々と送り出す劉焯。

なんと温度差の激しい師弟だろうか。

「…………行っちゃったな」

「うん。見学出来ないね」

「どうするかな」

「じゃあ、趣旨がちょっと違うけど…………はい」

劉焯が差し出した物は、木剣。

一刀は木剣と劉焯を交互に見て、背中に冷たいものが流れるのを感じた。

「自衛くらい出来るようになるっか」

「どうやら、見学は藪蛇だったらしい。」

嫌な予感を取り越し苦勞だったらしい。

一刀は劉焔の指導を受けてみて思った。

（一番まともだ……）

そう思うのも無理も無い。

一刀とて、この戦乱の世界に来てから鍛練をやっていた訳ではない。

祖父に教わった剣術と剣道部での経験を基に、自分なりに素振りな  
りを行ってきた。

関羽や張飛といった名立たる武将にも教えてもらった事もある。

しかし、間違ったと今では思っている。

戦乱に生きる将と平和に生きてきた人間の感覚に決定的な違いがあったのだ。

武術と武道。

他者を倒す為の術と自己の精神修養を目的としたスポーツは、端から比べられるものではない。

関羽達のような武将は、鍛練だろうと負けてはいけなないと本能に刷り込まれている。彼女らにとって、敗北は死に外ならないのだから。

しかし、一刀のような者にそんなものはない。敗北は敗北でしかなく、次があるのだ。敗北が死に直結していない。

だから、彼は武将との鍛練をすれば、必ずと言っていい程ズタボロにされる。

技量の差もあるが、打ち込まれるだけ打ち込まれて動けなくなるのだ。これで鍛練になる筈がなかった。

そして、今回は劉焯だ。

関羽達と同等にして、呂布と引き分ける実力を持つ彼にズタボロにされると思った一刀は、開始直後に心中で念仏を唱えた。

しかし、始まってみれば、一刀はそれが杞憂だったと知った。

劉焯の指導は、どちらかと言えば現代の指導に近かった。

一刀の素振りを見極め、悪い部分を即座に指摘して修正。また素振りさせる。その繰り返しだ。

こういう指導で良いのか？

一刀は劉焯と関羽達との指導のギャップに思わず聞いてしまった。

だが、劉焯には意味が解らなかつたらしく、逆にどついつ意味が聞かれてしまった。

説明してみると、劉焯は頭を抱えて呆れてしまった。

「安心していいよ。僕はそんな莫迦なやり方しないから」

「莫迦つて、言い過ぎじゃないか？」

「鬱憤晴らし染みた鍛練は鍛練じゃない。そういうのは実力を伴った相手にやるものだよ」

遠回しに実力が無いと言われ、一刀は苦笑う。それに劉焯の言葉が正論に聞こえ、関羽達のフォローも出来なかった。

「でも、主上の流派の型を見てると懐かしいよ」

「懐かしい？」

「僕が師匠に初めて習った型に似てるんだ」

そう言うと、劉焯は干将を抜くと構えてみせる。

構えは正眼。右半身を前に出し、右手は柄の上方を深く握り込み、左手は浅く柄頭を浅く触れている。

その時点で一刀は気付く。

これは大陸の剣術ではない。

劉焯は右足を“擦り足”で踏み込む。そして、干将を振り上げて袈裟切りを放つ。

続いて下段、中段、上段へと打ち込み。

途切れる事なく斬り上げ、斬り落としを披露し、間合いを侵略するかのようにして地を滑り走る。

そして、また干将を振るい空気を切り裂いた。

斬り、突き、薙ぎ、払いといった全ての動作に芯が通っていた。正中線が全くぶれていない。

見ているだけで圧倒される剣技。それでいて、昂揚感を込み上げさせてくる。

それは自身が日ノ本の国に生まれた大和男子やまとのおとこだからだろうか。

侍もののふという武士の技巧に、自身の北郷家の血が反応しているのかもしれない。

「朔、その剣術、俺に教えてくれ！」

だからなのか、一刀の決断は速かった。

ここに来て、一刀は天武の才というものを改めて実感した。

劉焯は一刀の指導を快諾すると、まず一刀の流派を聞いた。

一刀の流派は、丸目蔵人まるめくらんどのすけながよし佐長恵が開いたというタイ捨流。

右半開から始まり、左半開で終わる。つまり、袈裟斬りで終結する独特の構えにある。

そして、このタイ捨流には丸目長恵が教わった新陰流の影響もあり、飛び掛かり飛び回って相手を攪乱して打つ技、中国拳法を取り入れた刀と蹴り技を組み合わせた剣技が多い。

とはいえ、一刀は未熟。祖父から教わった事も少ない。

だと言うのに、その一刀から聞いた少ない情報だけで、祖父と同じ……もしくは以上の動きを再現して見せた。

「何いじけてるのさ？」

「違う。現実に打ちのめされてるだけ」

あんま変わんなくない？、と劉焯は首を傾げる。気にしないで、と一刀は劉焯の頭を撫でた。

「取り敢えず、基礎からやろっか」

そんな劉焯の一言で、走り込みをした後に素振りを始めた。

基礎は大切だ、と華雄に言ったように劉焯は一刀にも告げた。

劉焯の師匠曰く、基礎を疎かにする者はいかに才があるうと大成しない、とのこと。

ある流派では基本に当たる技が、実は極意の術理と同じだった、なんて話を一刀は聞いた事があった。

改めて基礎の大切さを思い知らされ、一刀は木剣を握り直して構えた。

「主上、構えが崩れてる。肘が上がってるし、脇の締め方も甘い。

あと、腰も引けてきてるし、そのまま真剣振ったら自分の足を切り落とすよ」

「げっ……」

劉焯の指摘に、一刀は顔を引き攣らせる。

「木だろうと竹だろうと、刃は刃である以上、相手も自分も傷付ける。それを理解して、意識して振り下ろすのを忘れないで」

「……………」

「自衛とは言っても、それは襲ってくる相手を打倒、最悪の場合になれば殺さなくちゃいけないんだ」

だから、いつか真剣を持たせる。



劉焔は眼でそう告げていた。

「……………解ってるよ」

伊達に戦場を越えて来た訳ではない。いつかは……………自身の手を血で汚す時が来るだろうと思わなかった事は無かった。

だから、一刀は素振りを再開した。

夜。

誰もが寝静まる刻限に、一刀は部屋を抜け出した。

手には昼間使った木剣。

劉焔に教わった構えを思い出し、振る。

何度も、何度も、振り下ろす。

自分を守る剣。

誰かを救う剣。

誰かを　　殺す剣。

美辞麗句で飾っても、その本質は変わらない。

救いたいという想いを通す為に、誰かを討たなくてはならない現実のように。

「はあ……はあ……」

息が弾む。

それでも振るう腕は止まらない。止められない。止めたくない。

邪念を払うように、ただ無心になりたかった。

「随分と青臭い事してるのね」

そんな時、聞き覚えのある声が聞こえた。

眼を向ければ、やはりといったところか。

月琴を携えたエセ占い師がそこにいた。

「管輅……アンタ、どうしてここに？」

「あら、またお侵入（おしよこ）するって言ったじゃない」

「やっば、なんかニュアンスが違くないか？」

汗を拭いながら、半眼で一刀はツツコミを入れるが、管輅は知らんとばかりにこちらに来る。

「天の御遣いが剣術なんて、何か心境の変化があつたの……？」

「……あつたんだと思う」

きっかけは前からあつた。

戦鬼の“角”の力に呑まれた劉焯。狂気に満ちた彼に何もしてやれなかつた無力感は、まだこの胸に燻くすぶっている。

「親が子を守りたいと思うは、おかしいか？」

「おかしくはないわ。けど、あの小鬼の力になれる程のレベルになんて、一朝一夕になれる訳ないでしょ」

「だからって、何もしないのは嫌だ」

「ふーん、意地になつてる訳だ。それとも、なけなしのプライド？」

「どっちもかな？」

そう答え、一刀は木剣を握り直す。青春ねえ、と管輅はぼそりと呟いた。

何ババくさい事言ってるんだ、と一刀は思ったが口にしながら最後、月琴が飛んできそうだったので飲み込んだ。

「で、今日はどうしたんだ？」

「用は無かったわよ、今まで」

「何言ってるんだ？」

「一刀がお稽古なんてしてるから、興が乗ったわ」

月琴を降ろして一刀の正面まで来ると、管輅は自然な動作で構えた。

「一つ、この管輅さんが揉んであげよう」

無手の構え。それが一刀が見てきた中で、誰よりも恐ろしく感じた。

一步も近付きたくない。一步も近付いてほしくない。

殺気もない。覇気もない。敵意さえ無い。

なのに、この恐怖は何だというのだろうか。

「あら、ダメじゃない」

「え」

気が付けば、管輅がすぐ目の前にいた。彼女の右手は一刀の喉に添えられている。

肺が引き攣り、呼吸が止まる。

(……………死んだ)

不思議と納得した。

「あれま、呆気ない。ていつ！」

「いたっ!？」

管輅は一刀にデコピンを食らわし、口の片端を吊り上げる。

デコピンにしては、痛烈なダメージに一刀は声を抑えて呻いた。

「つくうつくう……!？」

「ダメダメよ、かゝらずとくん。死をあっさりと納得するようじゃ

管輅はクツ、と喉で笑い、

「戦場に立つ資格さえ無いわ」

冷酷に告げた。

「命つてのは脆いのよ。貴方が見てきた以上に、知っている以上にね。

それを中途半端に人は理解している。だから、痛いのは嫌だし、死ぬのも嫌なの。

だから、必死になるの。生きたい、死にたくないってね。

けど、君は今それを受容した。潔い事は美德けいりだとしても、生きる意志を放棄するそれを、何があっても美德だなんて認めないわ」

「死に対して抗えって事が……」

「生き汚くたつていいのよ。生きてなきゃ前になんて進めない。それに君には、叶えたい理想と守りたい約束がある。なら、生き残らなきゃね、お父さん？」

「……耳が痛いね。でも、その通りだよな」

そっだ。

誰より死に抗う事を知ってるのは、誰よりも幼いあの少年だ。

幼い彼より年月を重ねた自分が、それを出来てないなんて情けない。理想を叶える為にも、約束を守るためにも、死は受け入れてはいけない。

「なら、抗う事から始めなくちゃな」

抗う事に必要なのは、意志と手段。

意志は、今燃え上がらせた。

手段は、今この手にある。

「ふふん、良い眼になったわね」

上機嫌になった管輅は、また無手で構えた。

それに対し、一刀は右足を後ろに引いて、木剣の剣先を後ろに向けた構えを見せた。

「右半開の構え……面白いわね」

クツ、と管輅は喉で笑い、接近する。薙ぐように蹴りを繰り出し、一刀の足を潰しに掛かった。

一刀はそれ“跨ぐようにして”右足で踏み込んだ。

管輅の蹴りは空振り、一刀の右足が地を強く踏み付ける。

放つは、袈裟斬り。

管輅の左肩を狙い、一刀は全力で振り下ろした。

「甘いわよ」

斬撃より速く、管輅が一步踏み込み、一刀の腹に肘を打ち込んでいた。威力は高く、一瞬の浮遊感を感じさせられ、一刀は地に落ちた。悲鳴さえあげられない痛みが、一刀を襲う。一瞬、胴体をまるごと吹っ飛ばされたかとさえ思った。

「がっ……がは……」

呼吸が酷くし辛い。だが、一刀は木剣を杖代わりにして立ち上がる。

ここで簡単に倒れているままでは、話にならない。

「まだ……まだだ！」

自身に喝を入れ、また管輅に立ち向かう。

「あああああっ！」

「はい、乙〜」

「なあああああっ!？」

木剣を振り下ろす一刀の腕を掴むと、管輅は一刀の力を利用して彼を投げ飛ばした。

「くっそ……」

「はい、おしまい」

地面に叩き付けられ、一刀は毒づく。そして、気付いた。いつの間にか、木剣を管輅に奪われ突き付けられていた。

「奪刀か……タイ捨流の技まで使えるのかよ。アンタ、凄いな……」

もはや、悔しいよりも感心するしかなかった。

「ふふん。管輅さんは強気に本気、素敵に無敵、元気に勇気です」とよー！」

「どこの神風怪盗だ」

一刀は体を起こして座り込むと、管輅が手を差し出してきた。

彼女の顔は上機嫌のまま。その手を掴むと、引き起こされた。



「ま、及第点かな」

「何がだよ？」

「つまり、合格って事。ギリギリ首の皮一枚ってとこだけど、特別にこの管輅さんの弟子にしてあげよう」

ふふん、と胸を張って管輅は言った。

「……管輅に師事すれば、俺は朔を守れるのか？ 桃香や愛紗の力になれるのか？」

「勿論よ。最低でも、肩を並べられるくらいにするから」

「なんかサラッと怖いこと言われた気がするけど」

「でも、力が欲しいんですよ？」

管輅は手を差し出し、問う。

彼女の手を取れば、我が子と仲間を守れる力が手に入る。

それは戦場では、もう比較的安全圏には居られない事を代償として  
いる。

見ているだけでなく、この手を血で汚す事に外ならない。

迷うな。

恐れるな。

一刀は自分に言い聞かせ、管輅の手を取った。

「頼む、力を貸してくれ」

「良いでしょう。その代わりに、覚悟なさい」

「生半可にはしないとか？」

「私が教えるからには、鬼も恐れぬ武士サムライにしてあげましょう」

「……上等だ」

一刀は管輅の手を握り締め、敵を討つ覚悟をした。

一刀が覚悟をした同時刻。

荊州にある城内の自室で、袁術は独り溜息を零していた。

それは董卓が討たれ、連合が解散されてからずっと続いていた。

彼女の脳裏に描かれているのは、一人の いや、一匹の小鬼。

焰のような緋い髪。

凜とした顔立ち。

怖いくらい鋭い眼光を湛えた人外の双眸。

それでいて、どこか捕え所のない気ままな雰囲気を持つ。

そんな彼を見て、袁術は傍にいてほしいと不思議と思った。

だから、言った。自分の下で働かないか、と。

けれど、彼は断った。

袁術は名家の人間だ。

彼女に仕えれば、劉備に仕えている時よりも禄を与える。地位も約束し、衣食住だって満足以上のものを用意出来る。

それでも彼は首を縦に振ってはくれなかった。

興味ない、なんて言葉付きで。

彼は無欲だった。

今の主と仲間と一緒に居られるだけで十分。

確かにこれは袁術には与えられない。彼が既に持っているそれは、自分には無いのだ。

あの時はそんな理由で、と理解出来なかった。今は羨ましいとさえ思う。

彼は主と仲間が大好きなのだ。ずっと一緒にいたいと思える程に、そこが自分の居場所なのだと思えられる程に。

なら、自分はどうかだろうか？

答えは真逆だ。信じられるのは張勳てんくんとだけ。あとは、自分の権力や財産欲しさに媚びへつらう者ばかり。そんな所にずっと居たくなんてない。

自分の言いなりになる世の中。我が儘を言えば、すんなり通ってしまふ施政。ハチミツ水だって飲み放題だ。

それでも心はどこか満たされない。

きっと穴が空いているんだ。だから、満足しようとしても、穴のせいで上手くいかないんだ。

袁術はそう考えた。

じゃあ、穴を塞ぐにはどうしたらいいのだろうか？

「……………劉焰、翔刃」

答えは自然と零れた。

「そつじゃ……………きつと、あ奴が傍におらぬから……………」

そうだ。彼のせいで、こんなにも満たされないのだ。

彼のせいで、こんなにも胸が苦しいのだ。

「会いたいのお……」

「それが貴女の望みですか」

突然、背後から男の声が響いた。

「だ、誰じゃ!？」

袁術は振り向き、叫ぶようにして問う。

暗がりの中から響く靴音が、彼女の恐怖心を酷く刺激していく。

靴音が止まり、声の主だろう男は姿を現した。

いたのは、秀麗であり冷酷な印象を持った導師。その顔は冷たい笑みを浮かべていた。

「これはこれは。怖がらせてしまったようですね」

カタカタと震える袁術を見て、導師は喜悦を深める。

「貴女の望みは、劉焰翔刃を手に入りたい。違いますか？」

「あ……あ、ああ……」

「ふむ、答えられないようですね。では、無回答は肯定としましよ  
う」

導師は勝手に話を進めるも、袁術は恐怖の余り思考が全く追い付いていなかった。

城内の警備は万全の筈だった。しかも、君主の部屋なら尚の事厳しい警備体制を敷いているはずだった。

しかし、城内は至って静かで、導師も一戦交えた様子も無かった。

もう袁術の頭の中はぐちゃぐちゃだった。

「もう一度聞きます。貴女の望みは、劉焰翔刃を手に入れたい。違  
いますか？」

「りゅ、劉焰を……？」

「そう。劉焰翔刃を手に入れば、貴女はきつと満たされる。彼だ  
つてあんな貧乏軍隊にいるより、貴女と共にいる方が幸せでしょう」

「しあ、わせ……」

導師の言う言葉は、袁術に甘く聞こえた。

さっきまでダメだと諦めていた事を、忘れさせるように染み込んでいく。

彼の言葉が全て正しく聞こえてしまう。

「でも、劉焯にとって劉備の所があ奴の居場所なのじゃ……」

そう、彼の幸せはあそこにしかない。だから、無理だ。

だが、導師はそれを読んだかのように告げる。

「 だったら、奪ってしまえばいい」

その言葉に袁術の思考が止まる。

「劉焯翔刃の居場所は、天の御遣いと劉備の下にしかない。なら、そこを壊してしまえばいいのです」

「そ、そんな事してしまえば………」

「ええ、彼はきつと嘆き悲しむでしょう。しかし、そこに貴女が手を差し延べれば、彼はきつと貴女の手を握る事でしょう」

それはなんて虫がいい話だろうか。

奪っておきながら、手を差し延べるなんて、普通ならおかしい。

こんな方法で、彼が靡なびくとは思えない。

なのに、

「微力ながら、私が袁術様にご助力致しましょう。」

「お前は……誰じゃ？」

「私は、于吉。滑稽な流れの導師「たなほし」ですよ。」

袁術は導師　　于吉の手を取ってしまった。



## 鬼と鍛錬（後書き）

今回は、一刀の改変が入りました。

しかも先生が朔と管輅さんというコンビ。あれ？ 一刀さん、死ぬんじゃない？

そして、次回から次章に入る予定なので、黒幕の于吉が暗躍してます。あんな感じで大丈夫ですかね？

感想、品評お待ちしております。

鬼と新天地 (前書き)

今回から、新章です。

けれど、あまり話が進んでません。

## 鬼と新天地

反董卓連合での戦が終わりに、一ヶ月が経とうという頃。煌びやかな服を着た使者が劉備のいる平原の城へ訪れてきた。

最初、どこの人だ？と訝しむ一刀達だったが、正体を知ると誰もが顔を引き攣らせた。

服が煌びやかなのも当然。彼は朝廷より使わされた使者だったのだ。思い切り怪しんでしまい、不興を買ってしまったのではないかと皆に緊張が走る。しかし、使者は表情を変える事無く役目を淡々と終わらせ、不満を零さずに帰っていった。

そんな彼の役目とは、一編の書簡を提示することだった。そして、その内容とは

平原の牧、劉備。前の董卓討伐において多大なる功績をあげたことを認め、徐州州牧を命じる。

つまりは、刺史や牧などよりも権限の大きい州牧着任の辞令。太守へと出世したのだった。

しかし、劉備としてはその実感が湧かず、他の者にしろ決して短くない時を過ごした平原の街を離れることになり、それぞれに感慨深い気持ちを抱いていた。

「引つ越しねえ……出来ればしたくないかな」

「そもも言つてられないのだぞ、朔よ。我らの大望を果たす為にも、これは大きな前進となるのだから」

若干不満気な劉焯が愚痴るように言うと、関羽に窘められた。

確かに関羽の言う通りなのだ。大きな前進なのは確かだ。それでも、劉焯にとって平原という街は、初めて自分<sup>鬼</sup>という存在を受け入れてくれた大切な場所なのだ。過ぎた時間は劉備や一刀には及ばないが、彼女らに負けなくらい大切だと思っている。

そんな街を離れるとなると、寂しいやら寂しいやらで劉焯の心には少しばかり不満が出てしまったのだった。

そんな気持ちを察したか、関羽も慰めるように彼の頭をくしゃりと撫でた。

「朔の気持も解るよ。けど、この街は皆の頑張りがあったからこそ、安心して暮らせる街になった。この街で学んだ事を活かしてき、段々でもこの街みたいになんか安心して暮らせる街を増やしていこう」

「うん……。じゃあ、皆で引つ越しの準備しましょ」

「引つ越ししし、引つ越ししし　　さっさと引つ越ししし　　新しい街はどんな所になるのかな？」

一刀の言葉に続くように劉備が促すと、よほど楽しみなのか張飛が歌いながら聞いてきた。

「……徐州は東は黄海に連なり、西は中原と隣接する……と、古くから五省に通ずる地として知られている所ですね」

「高祖劉邦様の故郷でもありません。……桃香様にとって、ある意味お里帰りに近いかもしれませぬね」

張飛の問いに答えたのは鳳統と孔明。すらすらと答えられたのは、しっかりと頭の中に知識が叩き込まれているからだろう。逆に、聞く側だった張飛もらしいと言えはらしいのだが。

「なんでお里帰りなのさ？」

今度質問したのは、劉焰だった。

「中山靖王劉勝の末裔らしいよ？ 私。嘘か本当か解ないけど」

「自分で言っちゃうんだ」

「だって、昔の事なんて知らないし。唯一、それっぽいつて言ったら、この剣だけだし」

そう言つて劉備が劉焰に見せたのは、一振りの剣。かなりの年月を経ている為か所々刃毀れはくれているが、シンプルな意匠ながらも王と共にいた事を示すように強い威光を放っている。

「靖王伝家。それが桃香様の剣の名でしたな」

趙雲が劉備の剣の名を口にすると、劉備は首肯した。

「だけどね、これを持ってれば中山靖王劉勝の末裔って誰でも名乗

れるんだから、あまり意味はないと思う」

「それはそれ、って事でいいと思うよ。百聞は一見に如かずって言うし、桃香様がやってきた善政は桃香様の功績だ。それは僕達が、街の皆が証明してくれるよ」

「朔くん……」

「そうですね、桃香様。鬼にも、愛らしい猫になる此奴が言つのです。要は誰が何を為し、何を残すか、ではありませんか？」

「はは。そうですね、朔くんの言う通りかも」

「星の言がかなり引つかかるけど、納得してくれたならいいや」

劉焯は半眼でそう言うが、趙雲に抗議の視線を向けていた。しかし、趙雲はどこ吹く風と彼の視線を受け流している。

そんな二人に苦笑を浮かべつつ、一刀は今までの事を思い出ししていた。

黄巾の乱を治め、その功績で平原に赴任してきた。理想の第一歩とも言えるこの街で、初めての内政で頭を悩ませたり、皆が笑顔でいられるように治安を維持したりと頑張ってきた。

そして、趙雲が仲間になり、劉焯とは家族になった。

反董卓連合では利用された面もあったが、周倉や華雄を仲間なり、戦の贄とされた月と詠を助けられた。

いつも忙しいながらも城の皆や街の人達と過ごしてきた日々は楽しく、一刀達にとって確かな原動力となっていた。

この思い出があれば、自分達は前に向かっていける。理想へとまっすぐに進んでいけると確信している。

「じゃ、みんな！ お引越作業かっいし〜」

劉備の掛け声と共に、皆それぞれの持ち場に向かっていく。

その歩みは、確かな未来へと踏み出されている。

「ねえ、直葉。気付いてる？」

「ああ、師匠。気付いている」

徐州に移ってきた劉焰と華雄は警邏のついでに街の地理を覚えようとしていた。

まだこの街に来て日が浅いのだが、それでもおかしいと気付いた。

「まあ、気付かない方がどうかしてるよね」

「確かに。あそこまで下手な間諜は初めて見た」

半眼の劉焰と華雄はちらと視線を向ける。その瞬間にビタツと足を止める人が6人はいた。物影に隠れている者も含めれば、9人といったところか。

「いくらなんでも一カ所に集まり過ぎじゃない？」

「それくらい師匠を警戒してるのだな。案外、頭の良い奴が黒幕か？」

「なんで自分も警戒されてるって思わないかな」

呆れ混じりに劉焰が言うと、私は未熟者だからな、と華雄に返された。

連合戦時の自信満々な華雄は見る影も無い。アンタ誰だ？と聞きたくなってしまふ。

「にしても、何処の勢力からだろうか？」

「袁家のどっちかでしょ。それか、桃香様を見下してる弱小諸侯の莫迦共。」

孫策も曹操もあんな間諜を使う筈ないし。白蓮は桃香様と友好的だから、探り入れるのは考えにくい」

「成る程。袁家などの配下なら有り得るだろうな」

華雄は納得しながら、またちらと視線を向けた。その瞬間、また間諜達はビタツと足を止めた。



華雄は猛烈に間諜達を狩り　もとい、捕らえたい衝動に駆られるが劉焯に止められた。

劉焯は、今は泳がせておく考えだった。

間諜はいずれ一応集めた情報を主の下に届けに行くだろう。

それを追跡し、敵勢力を暴こうという狙いらしい。

「それ、誰がやるんだ？」

「僕らしいよ」

「ほう、師匠が……………はあああつ！？」

華雄の驚きに、近くにいた人達が何事かと振り向き出す。劉焯も彼女の大声に耳がキーンとしたが、なんとか何でもないと周りをごまかした。

「いきなり大声出さないでよ」

「う、うむ。ではなく！　何故、師匠がそんな役目を！？」

「気配察知に長けているから。それに森暮らしの経験でね、隠密行動が得意なんだよ」

「森と街では違つたろう？」

「同じだよ。鬼は隠<sup>おぬ</sup>。いつだって、どこでだって、それは変わらないわ」

口角の片端を吊り上げ、劉焯は言つと歩みの速さを上げ、華雄より数歩速く角を曲がった。

後を追うように華雄も続くと、彼女は呆れたように溜息を吐いた。

「成る程。納得だ……」

劉焯の姿は何処にも無かった。

一刀は管輅に師事して以来、毎夜毎晩彼女に痛め付けられている。

それは徐州に移っても変わらない。

昼間に劉焯から教わった基礎を、管輅は復習させるように使わせる。

まるで劉焯が基礎の骨組みをつくり、管輅がまたそれを肉付けして頑強にするようなやり方だ。

違うのは、扱う物くらいか。

劉焯の時には木剣を。管輅の時には、袋竹刀を使っている。

袋竹刀は柳生新陰流の鍛練で使われる物だ。構造は名の示すように、

剣道で使われる真直ぐな破竹に分厚い牛革を被せて筒状に縫い合せ、保護している。

管輅がこれを用意した理由は、安全性にある。

袋竹刀は牛革などで刀身にあたる部分が保護されている為、本気で打ち込んでも怪我をする確率を大幅に下げられる。ただ、確率を下げるだけの為、当たれば痛むのは当然であり、怪我をする事もある。

それに加え、管路は改良を行って重さを調節出来るようにした。それこそ竹刀から真剣の重さにまで変えられるように。

そして、今一刀が振るう袋竹刀は真剣の重さになっている。それは偏<sup>ひんえ</sup>に重心の取り方を体に染み込ませる為だ。

木剣と真剣。木と鋼では、当然の事ながら重さが圧倒的に違う。従って、重心の位置も変わってくる。

木剣を使ったままでは、いざ真剣に変わった時に体の使い方がおかしくなる可能性が高いだろう。鍛練の時ならいい。しかし、街中等での突発的ないざござに巻き込まれた時にそんな事になれば、言い訳も出来ない。

だから、早めに真剣での重心の取り方を覚えさせたいと管輅は、改良袋竹刀を用意したのだ。

「デカイ隙あり」

「っただああ!？」

管輅の袋竹刀が一刀の側頭部を強かに打ち、一刀は呻いた。

だからといって管輅は手を止めない。直ぐさま柄で水月を打ち、蹴りを喰らわし、最後に袈裟に斬り伏せた。

流れるように打ち込まれ、一刀は地面に転がされた。

「これで何回目の死亡かしらね。今のくらい反応出来なきゃ、戦場じゃ邪魔な自殺志願者よ?」

「今のくらいって……どれくらいのレベルで打ち込んだんだよ?」

倒れている一刀を、袋竹刀でツンツンと突きながら管輅は言った。

痛みに顔を顰める一刀からすれば、反応するには明らかに無理な速さに思えた。彼の眼には管輅の残像しか見えていない。

「そうね……大体、趙雲くらいの速さかしら」

「簡単に言うようなレベルじゃないだろ!」

起き上がって一刀が叫ぶも、管輅は気にせず笑みを見せるだけ。

「そうかしら? 出来ない、なんて決め付けるのは早計よ」

管輅は一刀を立たせると、彼の正面で袋竹刀を正眼で構える。

相変わらずの妙な威圧感が襲ってくるが、一刀も負けじと袋竹刀を構えた。

「まだ構えただけよ。心を乱さない」

「……っ」

「水急不流月。

今の貴方は川に映る月。どんな流れだろうと、川面の月は流される事なく輝き続ける。心をその月となさい」

静かに告げる管輅の言葉に耳を傾け、一刀は一度深呼吸をする。

まずはイメージだ。

彼女の言葉通り、心を月にしていく。

緩やかだろつと、激しかろつと、その存在は不変。

恐れるな。

惑うな。

気負うな。

「……よろしい。それじゃ、次は視界を広く使いなさい。そうすれば、敵の攻撃の機微も、新たな敵の存在にも気付ける。それに戦場で一騎打ちなんて滅多に無い。敵は複数、多対一が常と心得なさい」

「……どうすればいいんだ？」

「俯瞰に徹して、視界の端をゆっくりと広げていく感じでやってみ

なさい。そうして一点を見つめないで、全体を捉えていくの」

「簡単に言うなあ……」

「ふふん。私は『しなさい』と言ったわよ」

有無を言わさぬ管輅の言葉に、一刀は半眼で呆れた。

言われた通り、視界を広く捉える努力をしていく。

見えているような見えてないような微妙な心持ちになる。視点が集中しきつていないからだと解るのだが、慣れない視界に一刀は少し顔を顰めた。

そして、視界の端に何かが迫っているのに気付いた。

すぐに管輅の打ち込みだと理解する。

避けられないとも理解した。

（ あれ？ ）

けれど、驚愕がない。

勝手に体が動いた。

一刀の手に強い衝撃が伝わってきた。

管輅の袋竹刀の切っ先は彼に届いていない。一刀の体はその切っ先を自身の袋竹刀の柄で防いでいた。

「ふふん、一回目で出来たわね」

「自分でも驚きだよ」

「本当は、ある程度は出来たのよ。けど、心が乱れてたせいで体の動きを邪魔してたの」

心と体は密接に繋がってるから、と管輅は何て事のないように言った。

それから管輅は連続して一刀に打ち込む。速さは先と同じ趙雲と同等。

袈裟、胴打ち、突きと瞬く間に放つ。

これに対し、一刀は袈裟を後退して避け、胴打ちを払い、突きを受け流した。

「あ、あれ？」

「出来たのに疑問持たない。褒めようかと思ったのに、それじゃ出来ないじゃないの」

「なんか実感湧かなくてさ」

「実感、ね。大丈夫よ、今からすぐに嫌でも感じさせてあげる」

にこやかな管輅の笑みと言葉に、一刀は物凄く嫌な予感がした。

そんな彼女の後ろから、左慈が現れる。そして、何も持たずに無言で構えた。

「荒行だけど、左慈と軽く殺り合ってもらおうから」

「なんでいきなり物騒な事になるんだよ!？」

「大丈夫大丈夫。死ぬ一歩手前で抑えてあげるから」

「嘘だつ!？ 左慈の眼、思い切り殺気が籠ってるし!」

「……ふん、ごちゃごちゃと」

ぎゃあぎゃああと喚く一刀を、左慈は鼻で笑つ。

そして、

「吠えるな、莫迦が」

怒りを露わにし、一刀に剛速の蹴りを見舞った。

一刀も袋竹刀を間に挟むようにして防ぐが、その衝撃は凄まじく、彼の顔をありありと歪めた。

「っ………デメエ」

「北郷一刀、貴様は何の為に剣を取った？ 小鬼を守りたいと願ったからだろう。」

小鬼の立つ戦場は死線を幾つも越えた先にしかない。一つ間違えば命を落とす、そんな地獄にだ」



「……」

「今、貴様が立っている所はまだ安全圏だ。傷付いても、死にはしない。」

その程度のリスクでぎゃあぎゃああと喚くのなら、とっとと消えろ阿呆が」

辛辣な言葉が一刀に突き刺さる。

悔しいが、左慈の言葉は正論だった。

そう、彼は正しい。

だが

「………黙って聞いてれば、好き勝手言いやがって!!」

一刀は怒りを込めて、左慈に切り掛かる。

「解ってる！ 解ってたよ！ 俺は無力だって事も！ 朔の足元に及ばないくらい才能が無いって事も！」

吠えるように叫ぶ度に、一刀は袋竹刀を叩きつけるように振るう。

八つ当たりように振るわれるそれは、メチャクチャな斬線を宙に刻み続けていた。

そんな荒い攻撃など、格上だろう左慈に届く訳も無かった。

横の一閃を避け、左慈は一刀の腹に痛烈な膝蹴りを打ち込んだ。

「　　っがあ」

「ふん、無力に嘆くだけなら誰でも出来る。だが、今の貴様はそれすら許されん」

続く左慈の上段蹴りが、刈るように一刀の顔面を蹴り飛ばした。

蹴り飛ばされた一刀はゴロゴロと転がされ、意識が薄れかけていた。

白く濁っていく視界を見ながら、意識が消える瞬間。

「貴様の覚悟など、所詮その程度だ。“覚悟”とは言えぬ名ばかりのものだ」

再燃した怒りが、意識を一瞬で覚醒させた。

(……名ばかり、なんかじゃ無い)

力の入らぬ四肢に無理やり立てと命令する。

ギシギシ、と軋む音が聞こえるが、今は無視だ。

「名ばかり、なんて……言わせない!」

親は子の為なら、何でも出来る。

憎たらしいが、左慈は格上だ。それでも、一太刀入れるくらい訳無い。

「見てろ。今からお前に吠え面かかせてやる」

一刀は右半開の構えをとり、はつきりと宣言した。

左慈はその宣言に表情は不敵に、内心楽しげに構える。

（そうだ……北郷一刀なら、屈する筈がない。貴様はあらゆる逆境を乗り越える存在だ）

この程度で屈してもらっては、北郷一刀足り得ない。

「なら、見せて見る、北郷一刀。貴様の覚悟を……！」

ぶつかり合う一刀と左慈に、管輅は半眼で呆れていた。

罵倒するように焚きつければ、当然のように立ち上がる。

どこの熱血物だ、と管輅は嘆息し、一度その場を離れた。

「青臭いわねえ、ほんと……」

「いいじゃない、たまには」

管輅の呟きに、誰かが言を返した。

管輅は驚くどころか笑みを浮かべ、闇の中にいる声の主を探す。

そして、闇の中から切り裂くように現れたのは白銀の突撃槍だった。

管輅は白銀の刺突を避けもしない。

襲いくる突撃槍の穂先は、彼女の鼻先三寸のところまで制止した。

「……お見事」

「下手な贅辞はいらないわ」

管輅の贅辞を声の主にして襲撃者　周倉は不機嫌そうにあしひ遇った。

「久しぶりね。旭ちゃん」

「アンタも相変わらずみたいね。ムカつくけど」

「あら、化けの皮が剥がれてるわね。そんなに頭にきてるの?」

「うっさい。アンタに化けの皮被ってどうするのよ、腹黒女」

「腹黒女……ふふん、褒め言葉だわ。ありがと」

悪態をつく周倉に、管輅は飄々と返していく。余程頭にきているのか、周倉はこのまま義和で貫こうかと思っただが、すぐに止めて下ろ

した。

彼女に当たる筈がないと知っているから。

「で、何でアンタがここにいいのか答えなさい」

「目的？ 見ての通りよ。天の御遣いを武士にするの。サムライ 本人もそのつもり」

「……死地に行かせるのね」

「当然。そんなもの、遅いか早いかだけの違いよ」

男だもの、と管輅が言つと、周倉は顔を顰めた。

彼女が一刀をどうしようとしているか気付いたのだ。

周倉が慕っていた“おじ様”。彼も剣術を使っていた。この大陸にない“刀”という切断力に優れ、見る者を魅了する芸術美を兼ね備えた武器を手にして。

「“おじ様”に近付ける……いや、同じにする気ね」

「惜しい。彼を超える武士にしてみせるわ」

敵意にも似た感情を視線に載せ、周倉は管輅を睨む。それを受けても、管輅は飄々と答えた。

そんな管輅の態度にまた苛立つ周倉だが、今は我慢だと自身に言い聞かせる。

「だから、わざわざこんな複雑で面倒な結界を張ってる訳だ」

「あら、気付いたんだ。成長したのね」

「空間を限定しての時間干渉。……結界外での一時間は、中だと三日ってところ？」

「はい、ハズレ。正解は一週間」

平然と告げられた管轄の答えに、周倉は驚きを隠せなかった。

空間を限定したとはいえ、それだけ干渉して時間を歪めるなど、狂気の沙汰ではないのだ。

一つ間違えば、この世界から世界の大元へと影響が及ぼす可能性がある。

「ま、綱渡りなのは確かだけど、成功してるじゃない。儲けもんねえ」

「アンタ、この外史せかいをメチャクチャにする気!？」

「莫迦言わないですよ。一刀に協力してるのに、彼のいる外史を破壊したりしないわ」

それに小鬼もいるし、と半眼で反論する管轄。だが、周倉はその言に薄ら寒いものを感じた。

裏を返せば、彼女は一刀や劉焯がいなければ。そして、協力してな

ければ破壊する考えを持っているという事だ。

「一刀に必要なのは時間よ。小鬼の力になれるように一刀が大成するには、どうしても時間がかかる。」

裏技使っても多少の無理や無茶はしないと、彼の願いは叶わないんだから」

「当然のリスクって事か……」

「旭ちゃん、死なせたくないのは私も一緒。だから、あんまり怖い顔しないでほしいかな」

「うっさい。まさか、朔にもちよっかい出す気じゃないでしょうね？」

周倉がそう問い質すと、管輅は悲しげに眼を伏せた。

「私は……まだあの子と顔を会わす事は出来ないわ。果たすべきけじめがあるから」

「……………」

「……………」

それでも周倉の胸には罪悪感が溢れてくる。彼女の言っけじめは少なからず自分にも関係があるのだ。

己に使命を課したように。

「そうだ。旭ちゃん、お願いが2つあるんだけど」

「……2つ？」

「そ。これは小鬼と一刀に関係あるの」

管輅の言う2つのお願い。

その内、小鬼についてのお願いを聞いた瞬間、周倉は悔しさに歯を強く噛み締めた。

翌日、周倉は劉焰と一刀の鍛練に立ち寄っていた。

「やあやあ、今日も今日とて張り切ってるっすね」

「張り切ってるのは、主上だけだけどね」

周倉の言に軽く訂正するように劉焰は答えた。

そんな彼の後ろでは、疲労に息を弾ませている一刀が座り込んでいる。余程疲れているのか、言葉ではなく手を振って周倉に伝えていた。

「お疲れみたいっすねえ。そんな力ズ兄に良いもの持って来たっすよ。って、なんで逃げるんすか!？」



周倉の叫びにスタートダッシュを切っていた親子はビタツと足を止めた。

彼らの眼は、明らかに不審そうだ。

「二人してひどいっすよ！」

「なんか嫌な予感がしてさ」

「だって、前にひどい目にあっただし」

苦笑いを浮かべながら一刀は言い、劉焯は半眼で言ってきた。

一刀はまだしも、劉焯の言に周倉は顔を逸らさずにいられない。

「まあ、いいや。良いものって何を持って来たのさ？」

「まあ、いいや、っってお姉ちゃんが言いたいっすよ。」

さて、取り出しましたこれは鍛練に最適な一品」

じゃじゃーん、と周倉が取り出したのは、一刀が管輅との鍛練で使っている袋竹刀だった。

受け取った劉焯はそれを手にて神妙な顔をするが、実際に振ってどんな物が解ると、へえと小さく感心した。

一刀は袋竹刀を驚くように手にしていた。まさか、彼女が持って来るとは思っていなかったからだ。

重さは自分が使っている物とまったく同じ真剣の重さ。さすがに新品なのか、汚れや傷みは無い。

「これ、旭が作ったのか？」

「あはー。そつすよ、旭ちゃんが作ったのだ！」

一刀の問いに、周倉は順調に成長中の胸を張るようにして答えた。

それに一刀は、彼女の師匠が教えたのだろうとあたりをつけた。水銀体温計を知ってるくらいだ、袋竹刀を知っていてもおかしくない。

(だとすると、管轄って何者なんだ?)

自分が悩んだり、思い詰めていると静かに現れる友達。

占い師だと言っていたが、ただの占い師にしては武術に精通している。素人に毛が生えたくらいの眼力で比較してはダメかもしれないが、時折彼女は関羽達よりも強いと感じた時があった。

「案外、朔と旭の師匠と知り合いだったりしてな」

ぼつりと独り言ち、一刀は鍛練を再開した。

劉焯と一刀に袋竹刀を渡した周倉は、すぐに立ち去りはしなかった。彼らの鍛練を見ながら、昨夜の事を思い出していた。

『カズ兄と朔に関係するってどういう事？』

『まず、一つは袋竹刀を朔にも渡してあげて。便利だし、これ使わなかったら小鬼も実戦形式で相手しにくいでしょうし』

『叩きのめしにくい、の間違いじゃない？』

『ふふん、否定しないわ。』

二つ目だけど……あの子、洛陽で戦鬼の“角”を使わなかった？』

『……使った。導師みたいな格好をした白装束のおかしな集団相手に』

『……あいつらか。そして、狂鬼と化したのね』

それはもう思い出したくない弟の姿。

激しい憎悪と憤怒、殺意。負の感情が命じるままに命を奪っていた。

『それが何？』

『何故、小鬼が狂気に囚われたか……それが問題って事』

はっきりと答えてくれない管轄に周倉は段々と嫌な予感がしてきた。

『白装束の一団と朔にどんな関係があるってのよ？』

周倉は聞きながらも、管輅が口にするだろう答えが予想出来ていた。何故かなど自身に問いかけたりしない。否定したいからに決まっている。

それを聞けば、自分も狂鬼へと化すかもしれないと恐れたから。

『小鬼の“角”には、あの子本来の憎悪や殺意が詰まっているのよ。それが“角”から解き放たれる時、小鬼は狂鬼と化す』

『そのトリガーとなるのが……白装束の一団』

周倉の言葉に管路は首肯すると、その理由を口にした。

『白装束の一団は、小鬼の怨敵。私達の大切な友の命を奪った憎むべき仇よ』

その言葉を聞いた瞬間、周倉の思考は停止した。否、憎悪という暗い血の色をした感情一色に染め上げられた。

『そいつらが……“おじ様”達を殺したのね……』

『旭ちゃん……一度、落ち着きなさい』

『落ち着けって、アンタ！ こんな事聞かされたら、落ち着いていられないでしょー！』

『なら、黙りなさい』

『……っ』

管路の静かな威圧に、周倉の憎悪は瞬く間に委縮していく。完全に消えないあたりは、彼女も引けない事柄だからだ。

『いい？ 旭ちゃんまで狂鬼になったら、誰があの子を守るの？』

『そ、それは……』

『お姉ちゃんなんですよ？ しつかりしなさい』

管路に窘められ、今度こそ周倉の憎悪は完全に消える。それに管路は胸を撫で下ろし、話を続ける。

『仇の件はこつちでなるべく済ますわ。小鬼と白装束の一団が会わないように気を付けなさい。記憶の無いあの子がそれ程反応したのだから、次も狂鬼から戻れるか保障はないからね』

『……分かった』

『頑張んなさい、お姉ちゃん』

そこで周倉は思い出すのをやめた。

目を劉焔達に向けると、劉焔の連撃を一刀が必死に防いでいる。

管路の鍛錬で向上しているが、一刀の防御はまだまだ危なっかしいところが多々ある。

「おじ様”を超えるには、まだまだかな……」

小さく呟くと、劉焔達の下へと歩いて行く。

失わない為に。

もう二度と、あの悲しみがあの子を苦しめないように。

「……やってやるわよ」

零した呟きは、誰に聞かれる事もなく風に溶けて消えた。

鬼と新天地 (後書き)

徐州へとお引越した朔達。なのに、徐州について、まったく触れませんでした。あつれ〜？

今回はなんだか後半がメインなもので、どこまで書いたものかとなりました。ネタバレ覚悟ですよ、ホント。

鍛錬のシーンで出した袋竹刀については、私見と私の都合が入り混じっています。正規の袋竹刀については、ググってみてください。

感想、批評、お待ちしております。

## 鬼と新天地2（前書き）

最近、書く度に内容が一刀くんの修行色が濃くなってるような気がします。願望だだ漏れですね。

今回、独自解釈等々がありますので、ご容赦を。



## 鬼と新天地 2

「ようやく徐州の生産高や産業の状況などが纏め終わりましたー！」  
そう達成感がこもった声をあげたのは、孔明だった。そして、その言葉に劉備や一刀達は、またひとつ仕事を成し遂げた安堵に頬を緩ませた。

劉備達が徐州に来てからというもの、やる事は多かった。政務に治安、徴兵に練兵と当然の如く山のように積み重なる。まったく知らぬ土地故に仕方のない事だと無理やり割り切り、仕事に顔を引き攣らせながら処理にひた走ること一カ月。ここにきてやっと徐州の生産高、産業状況が纏め終わったところだ。

孔明の調べによると、この徐州という土地は平原よりも生産力が大幅に高く、鉄や銅といった鉱物が産出可能。人口が多く、交通の便も良い事から商業も盛んで、力を蓄えるには良い場所だと孔明のお墨付きをもらった。

しかし、豊かだという事は、そうでない者から見れば良い狙い所に他ならない。群雄割拠の時代へと変わりつつある今となっては、賊だけでなく隣の諸侯にも油断はできない。漢王朝が未だ続いているものの、多くの英傑をpushさえ付けるには壊れかけた鎖か虫食いの縄のように頼りないものだ。いつ矛を向けてくるかなど解ったものではない。

そうなると、必要となってくるのは武力。軍備の拡張となる。他の諸侯へと攻め込んでいく気など劉備には毛頭ない。必要なのは街を守る力なのだ。その為にも徐州の民にも協力を願う必要がある。

事情はどうあれ、家族の一員を戦場へと駆り出すのだ。理解が得られなければ、不満は太守である劉備を始めとした軍へと爆発するだろう。

では、どうすればいいか？

劉備軍きつての二大軍師が出した結論は厳しいものだった。

「内政をして国力を充実させつつ、軍備の増強を図るしかないかと最大の生産科目と最大の消費科目を同時に行う。二律背反とも言える命題を達成させなければならぬという現実的に見ても苦しい策だ。」

「……軍備とは即ち兵<sup>すなわ</sup>。兵というものは基本的に非生産階級ですから、兵を充実させれば、生産力が落ちるのは当然です」

「その両方の天秤を平らに保つ事こそ、富国強兵の理想かと」

そうはつきりと鳳統と孔明が告げた意味は、現時点でこれが最良であり、達成しなければならぬという事に他ならない。

確かに難しい策だ、と一刀は思う。けれど、不思議とダメだなどと諦める心境にならない。難しいが、これは無理でも無茶でもない。

「……やってやれないことはない」

一刀の呟きを聞いたか、趙雲がクツと喉で笑う。彼女の笑みには、一刀同様に諦観の色は無い。

「そうですね、主よ。皆で力を合わせれば、理想は実現させる事が出来る。……私達はそう信じて、ここに居るのです」

「無理だ無茶だって諦めるような場面じゃない。あれこれ考えて雁字搦めんじがらになつて、動けなくなつてちや意味が無いんだ。予想で動くよりも、行動を起こしてから考えよう」

一刀は言い切り、皆の顔をゆっくりと見渡す。やはり誰一人として諦めているようなものはいない。

掲げた理想は、これ以上に遠く険しいもの。話し聞かせれば、笑い飛ばす人だっているようなものだ。

この問題を突破して見せなければ、実現させる事などそれこそ不可能だ。

よし、と意識を切り替え、次の仕事に移ろうとすると、一刀は劉備達が笑顔でこちらを見ているのに気づいた。何やら含みがありそんな笑みで、気になつて仕様がなない。

「俺の顔に何か付いてるか？」

「目と鼻と口っす」

「おい」

お決まりの返しを二文字で切り捨て、先を促す。

「なんだかご主人様、男らしくなつたなあ、って思ったの。うん、すつごくカッコ良くなつたよ」

「そうかな？ 自分ではそう思わないけどな」

「いえ、ご立派になられましたよ、ご主人様。立ち姿にどこか刃のように鋭い風格が滲み出ています。その覇気は、そこらの將に劣る事は無いでしょう」

手放して褒めてくる劉備と関羽の言葉に、一刀はむず痒さがゆを感じた。鍛錬で劉焰と管路は彼を褒める事はとても少ない。自分なりに出来たと思っても、二人にとっては及第点でまあまあという、褒めるには未だ至らない評価らしいのだ。

「ありがと。でも、ホントにそんな事ないと思うよ」

「なに、謙遜なさるな」

いつの間にか間合いを詰めていた趙雲は、言い終わるや否や一刀に向かつて拳打を打ちこんだ。狙いは彼の顔面。彼女の拳はまっすぐ飛んでいき

「ふむ……」

一刀の掌に吸い込まれるように受け止められた。

「いきなり何するんだよ、星」

「いえ、男っぷりが上がったようでしたので、少し確かめさせて頂きました。いやはや、拳とはいえ、この趙子竜の一打を慌てる事無く止めるとは……中々成長なされておられるようですね」

「先生が佳いからな。きつと上達が早いんだよ」

「今度、手合わせなど如何です？」

「はは。まだ星の相手は無理だよ。もうちょっと上達したら、こつちからお願いするよ」

「じゃあ、お兄ちゃん、鈴々とやるのだ！ 鈴々と！」

「お鈴、お鈴。それだとせつちゃんより弱いつて認めた事になるっすよ」

「にやつ！？ そんなことないのだ、星なんかに負けないのだ！」

「ほう、言つたな鈴々。ならば、どちらが上か思い知らせてやろう」  
なんだか解らない内に張飛と趙雲が火花を散らしだし、一刀は頭を抱えた。いつもはストッパー役の趙雲が暴れる側にいくと面倒極まりない。自分では止められないし、劉備や孔明達では無理なのは確定。周倉は端から止める気は無さそうだ。

となると、もう一人しかいないのだ。

「やめんか、莫迦共！！」

関羽の一喝に、張飛と趙雲は肩をビクリと震わせると渋々引き下がる。さすが委員長、と一刀は思った。

(ツンデレが抜けてるっすよ)

周倉が耳元で囁いてきた事は聞かなかった事にした。

「何を騒いでいたんだ？」

警邏から帰ってきたのか、華雄が怪訝な顔をして部屋に入ってきた。おそらく関羽の一喝が外まで聞こえていたのだろう。

「あ、おかえりっすよ〜スグっち」

「ああ、今戻った」

「お疲れ、直葉。街の皆はどうだった？」

「いつも通りと言いたいところだが、間諜の数が大分減っていた。師匠がいたく気にしておられた」

「え……朔が？」

劉焯が気にしていた、と聞いて一刀はビギリと表情を凍らせた。見れば、華雄と一緒に警邏に行ったのに、劉焯の姿が何故か無い。もう嫌な予感しかしなかった。

「直葉、うちの子はどこ？」

「師匠なら間諜を追って行ったぞ」

華雄の明瞭簡潔な答えに、また暴走かよ、と一刀は泣きたくなった。ここしばらく彼が大人しくしていたからか、油断していたようだ。

さめざめとした気分になっていると、華雄が手紙を差し出してきた。

またも嫌な予感がしつつ読んでみると

ちよつと出かけてきます。

朔

散歩気分かよ、と一刀は呆れつつ、手紙を丁寧に折ると決めた。

(朔が帰ってきたら、愛紗と千里と一緒に説教だな)

(なんで、寒気がするんでしょう?)

謎の寒気を感じつつ、劉焯は間諜を追って荊州までやって来ていた。

(荊州って言ったなら、領主は袁術だっけ)

思い出すのは、反董卓連合で会った一人の少女。

背丈も小さく、その小柄な体躯に見合った幼さを持っていた。人の事は言えないが、そんな彼女があんな戦場にいるのは正直なところ場違いに思えた。子供だが、彼女は名家の人間にして大領主だ。連合発起人の袁紹との折り合い　正しくは利を得る為の腹の探り合いもあつたのだろう。

そんな幼い時分から後ろ暗い闇を垣間見る羽目になったのは、不幸とも言える。

(にしても、名家が治める街にしては荒れてるような)

間諜を見逃さないようにしつつ、劉焯は袁術の治めている領地にそんな感想を抱いた。

人通りが少ない訳ではないが、かと言って多い訳でもない。建ち並ぶ商店を見れば、日中だというのにぼつぼつと閉まっている店もある。

それに、民の顔に活力が無かった。

劉焯は連合戦の折に袁術軍の装備を見ており、その質の高さから潤沢な資金があるのだと思っていた。

だが、それは民に重税を強いているからだと察した。

(為政者がこれじゃ、民の暮らしは楽にならないよ)

劉備の施政は彼女の気質もあって、民と手を取り合うような体裁を執っている。無理な強制はせず、それでも必要な場合は自身の言葉で理解してもらった上で協力してもらえるように懇願する。だからか、軍と民が互いを助け合うような形へ自然としまつのは劉備自身の徳が齎すものだろう。

民がいてこそ政は成り立つ。故に、不和は小さく済むように理解してもらい、最大限の配慮をしている。



しかし、袁術は違つようだ。

「一方的な強制に理解は無く、ただただ不和を生むばかり、ってね」  
小さく呟くように独り言ち、劉焰は外套を被り直すと歩きだした。

「……なんだか妙ね」

孫策は酒瓶を片手に、視線を巡らしながら呟く。

孫呉は今、客将という身分に甘んじている。しかし、袁術にとっては、使い勝手の良い矛扱いだ。

それは彼女らにとって屈辱に他ならない。

江東の地は孫策の母、孫堅が治めてきた領土だ。その地を袁術に好き勝手されるのは、我慢ならない。その大地を取り返す、という宿願は孫呉の民一人一人のもの。

それを袁術も気付いており、警戒しているのだろう。その証拠に孫策達には一昼夜に渡って監視が付けられている。

しかし、孫策はその監視の数が日毎に経つにつれ、段々と減ってい

るのに気付いた。

「戦でも起こるのかしら……ねえ、どう思う？」

口角を吊り上げ、孫策は一本の木に問い掛けた。

普通なら気が狂ったかと思うところだが、彼女の神懸かった勘は常識に囚われはしない。

「……………狙いは徐州だよ」

木　その裏から声が返ってくる。

聞き覚えのあるその声に、孫策は頬を緩める。そして、その木に寄り掛かるようにして座った。

「久しぶりね。私に会いに来てくれたの？」

「まさか。そこまで暇じゃないよ」

「……………少しはお世辞というものを覚えたら？」

「さあね。その内、孔明にでも習っとくよ」

相変わらずの飄々淡々ぶりに孫策は嬉しく感じ、杯に酒を注ぐ。トクツトクツ、と音に比例して杯に酒が満ちていく。口に含めば、喉から熱さが込み上げてくる。

「あー、おいしい。君も飲む？」

「いらぬ。お酒は二十歳になってからって言われてる」

「随分と遅いのね。おいしいのに、勿体ない」

「……僕、酔っ払いと話す口は持ってないんだけどさ？」

「はいはい。で、本題は何？」

注いだ酒を飲みつつ、孫策は先を促す。劉焰の溜息が聞こえても、次の酒を注ぐ手は止まらない。

「最近、僕らのいる徐州に間諜が増えてね。そいつを追ってきたら、こんなとこまで来ちゃったんだ」

「へえ。だから、私達への監視の数が減ったのね。それじゃ、袁術ちゃんと一戦交える訳だ」

「かもね。そうなると、そっちはどうするのさ？ 同盟は不可侵を条件に結んだもの。客将なら、利用される可能性は高いでしょ」

「どうかしらねえ？ 袁術ちゃん、莫迦だし」

当たり前のように孫策は言い、袁家だしなあ、と劉焰もその言い分に納得してしまった。

何にしても彼女ら孫呉が攻めて来る可能性は消えない。それに劉焰が憂慮していると、孫策はグツと酒を飲んで言う。

「けどね、孫呉は約定を違える事はしない。戦場で矛を交える事になっても、孫伯符の名に誓って何とかしてみせるわ」

「ま、期待しないで戦わせてもらっよ」

「あはは、そこは信用してほしいわね」

孫策は小さく笑うと、劉焔の気配が完全に無くなったのに気付いた。

(もうちょっとくらい、ゆっくりしていてもいいのに)

気ままぶりも相変わらずね、と嘆息すると、孫策はぐっと杯をあおる。舌がぺろりと酒に濡れる桃色の唇を舐めた。

その様はどこか妖艶で、どこか虎のような獰猛さを感じさせる。

「有り難く、この機を利用してもらっよ」

劉焔が留守の為、一刀は鍛錬を独りでやるうと思っていたが、思わぬ人が先生役を買って出た。

「旭先生の特別授業っすよ」

それが周倉だ。

一刀も彼女が関羽や張飛に引けを取らず、劉焔にも一目置かれてい

るのを知っている。何せ、彼女は劉焯と同じく“鬼”と名乗る者だ。江東の麒麟児と称される戦上手、孫伯符相手を圧倒して見せたらしい。

だが、普段の周倉はそんな素振りをまったく見せない。それどころか、人前で鍛錬する姿さえ見せないという、少し秘密主義的な面があった。

そんな彼女が何を教えるというのだろうか？ 一刀には見当もつかない。

「カズ兄、今日は錬功を覚えてもらおうよ」

「錬功？ えっと、氣の扱い方を教えてくれるって事か？」

「その通り。これを覚えれば、カズ兄の武は格段に進歩する事間違いない無しっす」

あはー、と笑いながら周倉は右手の指を三本立ててみせる。

「覚えるのは二つ。“氣”と“勁”っす」

は？と一刀は顔いっぱい疑問を露わにした。

氣の扱い方という話だから、氣はまだ解る。だが、勁が解らない。聞いた事はあるが、氣と似たようなもののイメージしか湧いてこない。

(二つに分けて言ったって事は、別物って事だよな。……まずい、全然解らない)

そのせいか、一刀の表情は怪訝なものへと変わった。しかし、周倉は気づかぬふりをして話を進めていく。

「まず、氣から説明するっす。氣は万物を構成する元素であると同時に、万物を動かす力だと考えられているっす。つまり、人間に動物、草花に限らず、劍や矛とか城にも宿っているって話っすね」

「じゃあ、俺の体にもあるし、世界中に溢れてるって事か」

「構成されてるって考えると、そうなるっす。想像しにくかったら、空気みたいにあるけど見えないものだって無理やり納得するっすよ」

強引だ、と一刀は口の中で呟きながら苦笑した。

「世界と比べるのもおかしな話っすけど、人間が保有、発生する量は少ないっす。そこで、余りある世界の氣を利用しようと考えた結果に生み出されたのが、氣の運用法っすね」

その運用法の例を挙げれば、『行氣』という修行方法がある。これは特殊な呼吸法により世界に満ちている氣を取り込み、不老不死を図るものだ。

似たようなものがあり、身体に必要な良い氣を外から体内に入れ、身体に合わない悪い氣を体外に排出させるなど氣の積極的な交換を行う外氣功がある。他にも、体内に氣を循環させ氣の質やコントロールする能力を高める内氣功がある。

他の分類には美容や病気の治癒も含めた健康面に関する氣功を軟氣功、護身術など相手を倒したりするものを硬氣功が含まれる場合が

ある。

「で、次に一個目の勁っすけど、氣みたいに摩訶不思議なもんじゃ  
ないっす」

「？ 違うのか？」

「全然違うっす。勁は運動量の事っす」

「……」

「無言！？ 無言はやめてほしいっすよ！」

「いや、だつてさあ。氣の次に運動量つて……」

「ぱつとしない？」

「うん！」

「あはー。先人に謝れ、この野郎……！！」

「ご、ごめんなさい……」

義和の穂先を笑顔で顔面に突きつけられ、一刀は謝罪を即断。少し刺さったような気がしなくてもない頬をさすりさすり、周倉に先を促した。

「まったく先人の功績を莫迦にするのは許さないっすよ」

「確かに失礼な発言だった。すまない」

「勁　まあ、発勁って言っちゃうすか。これは、発生させた運動量を作用させる事です。因みに、接触面まで導く事を運動、その所作を勁道って言うです。簡単に言うと、まず発生させた勁を余す事無く伝えられるように経路である勁道を開いて、運動で放ちたいとこまで持つてくんすよ」

まあ、口で言っても解り辛いから実演するです、と周倉は言うなり一刀に寄り添うように近付いた。

劉備に關羽、趙雲といった綺麗どころ達と理想の実現に奔走してきたとはいえ、どうしたところで一刀も男だ。自身より少し年下の周倉が醸す少女特有の甘い匂いに、ドキッとさせられる。

心臓の音が高鳴るのを感じつつ、一刀は周倉の顔を覗くようにして見た。そこには少女ではなく、艶やかな一人の女の顔があった。そして、

「ちゃんと、防がないと痛いよ？」

周倉の言葉に思考が一瞬だけ止まっていたのに気付かされた。だが、その警告が来た時点で既に遅いのだ。一瞬より短い刹那の時間さえ思考を、動きを止めてはいけない。それは“油断”という愚行に他ならない。

その愚行を犯した一刀の腹部に衝撃が貫いた。勿論、比喻でしかない表現であるが、彼は言葉通り槍や剣で体を貫かれたように感じ、たった一撃で意識が途切れる寸前までやられてしまった。倒れなかったのは、もはや偶然にしか思えない。



だが、解ったことがある。

“勁”の実例。

超至近距離からの一撃。

「い、今の……」

「あはー。ご察しの通り、寸勁つすよ」

寸勁。

至近距離から相手に勁を作用させる技術。身体動作を小さくしての僅かな動作で高い威力を出す技法。

これを周倉は実演してみせた。

「今のはご察しの通り、最小限の動作で生み出した勁を拳に収束して打ち込んだんす。これの他にも、体重移動なんかで体を沈む時に働く力の沈墜勁。体が開く時に働く力の十字勁。体や手足を捻じつた時に働く力の纏系勁てんしなんかがあるつすね」

「でも、それって剣術じゃないよな？」

「まあ、基本は無手で扱う武術ではあるつすけど。戦場では武器を扱うのが普通つすよね？」

「当たり前だろ」

「じゃあ、武器を無くしたらどうするんすか？」

「え……」

「武器がいくら頑丈でも刃毀れはするし、折れもする。それに弾かれてどこかに飛ばされるかもしれないっすよ？ 戦場で武器を無くした武人に待つのは、死だけっすよ。」

一芸特化も良いとは思いつすけど、生き残る為の手段は多い方がいいっす。だから、徒手格闘も覚えるべきっすね。それに力の使い方ってのは覚えておいて得はあっても損は無。旭ちゃんはそう断言するっすよ。」

そこまで言われると反論も思いつかない。戦場で武器を無くすよりも生き死にのイメージが先行してしまい、そんな考えに至った事もなかった。

ふと、戦場で武器を失った自分を想像してみる。この場合、失った武器は刀になるだろうか。

人を斬る。一人、二人、三人と。四人、五人と斬ったところで血糊ちのりが刃の鋭さが奪い、人骨を断った影響で刃毀れしてしまった。こうなっては切断ではなく鈍器のようなものだ。それでも叩きに叩きつけ、ついに刀は折れてしまう。

折れた刀に呆然とする自分。そこに敵の凶刃が迫る。次を避けても攻撃は治まる訳ではなく、矢が飛び、剣が掠め、とうとう槍衾やじふすまに一齐に貫かれた。

「ダメだ……。やられる光景しか浮かばない」

自分でイメージした死に方に一刀は、げんなりとした。

武器を失った自分に、想像だけでここまで気落ちさせられるとは一刀は思わなかった。もう少し頑張れよ、と思わなくてもないが想像できなかったという事は、ここまでの実力だと自認しているという事だろう。

妥当な判断に嫌になる。

「んじゃ、運動量の勁の重要さを解ってもらったところで。徒手格闘も並行してやってくすつよ」

周倉の言葉に一刀は深く頷く。

武器を得意とする武人から得物を取り上げてしまっっては、その才は如何様にしても発揮されない。発揮できる方法が少ないが為に、自身の生存確率を下げるのは頂けない。

自分は死ぬ訳にはいかないのだ。仲間の為にも、家族の為にも。

「よっし、やるか！」

気合いを入れ、一刀は周倉との鍛錬を開始する。

そして、一分と経たない内に天の御遣いの悲鳴が城中に響き渡った。

袁術の居城、その一室で于吉は縦長の紙へ筆を走らせる。筆が画く軌跡は複雑に交ざり合い、段々と形を成していく。形には意味が込められ、それらが幾つも組み合わせられる事で、ただの紙は一つの能力を持つ呪符となる。

于吉の机の上には同じように完成された呪符がまとめて積まれている。一枚出来れば積み、また出来れば積む。彼の腕は機械的に動き、その作業は止まるどころか遅くなる様子さえなかった。

「……精が出る事だな」

部屋に重く低い声が響く。

その声に機械的に動いていた于吉の腕が止まった。

「ようやく到着ですか……礼青」

于吉は筆を置くと、何も表情を浮かべぬまま訪問者を見上げる。そこには円形の笠を被った男がいた。

彼の容姿を一言で言うならば、長身瘦躯が相応しいだろう。身長は一丈（約3m）あるかと思う程に背が高く、その高身長もあってか手足も異様に長いが全体的に細い。笠に隠れた顔は肉付きが悪く、眼の周りも落ち窪んでいて病的な印象を受ける。

「こちらの事情を無視し、召集をかけたのは貴様だ。文句は聞かん」

「そうですね……では、不問としましょうか」

不遜な態度で礼青が告げると、于吉は言葉とは裏腹に気にしてもしないような口調で返した。

「さっそくですが、貴方には袁術軍の傘下に入って頂きたいのです」

「ほう……わしに矮小な人形の駒になれと言っか」

言葉の端に苛立ちを滲ませ、礼青は腰に佩いている剣の鯉口を切る。鞘と柄の間から青い刃が顔を覗かせ、陽光を青く照り返した。

それでも于吉は恐れを微塵も出さず、礼青を見返す。

「下賤な人形の駒になるなど我が矜持が許さん。このような“世界”にいるだけでも不快だというのにな。貴様一人でやるがいい」

「私も死神から身を隠している身でして、なるべく人目には付きたくないのですよ」

「ずいぶんと下手な言い訳だ。貴様の術を行使すればどうとでもなるっ」

「いえいえ、術の痕跡が残ると厄介でして。前回、術の反応を察知されて追いつかれるところでしたよ」

いやあ、危なかった、と于吉が肩を竦めると、ふん、と不快そうに礼青は鼻で笑われた。そんな礼青の態度に于吉はまた肩を竦めると、口を開く。

「敵に北斗の弟子がいる。それは貴方が剣を振る理由には足りませんか？」

「……何？」

北斗、という名に礼青の顔色が変わる。苛立ちはなりを潜め、彼の顔には凶暴な笑みが張り付いていた。

「北斗の弟子……戦鬼がいるというのは本当か？」

「ええ、袁術の標的は徐州 劉備です。そこには北郷一刀もいる。その彼の傍には当然、劉焰翔刃と周倉の二人がいます。しかも戦鬼の“角”も継承済みの上物です。どうです？ やる気は出てきましたか？」

にたりと于吉が笑みを浮かべながら問う。それは聞かなくとも答えは解っている笑みだった。歪んだ性格をしている、と彼は于吉を評すが、すぐに考えるのをやめた。

自身が属する組織に真つ当な者など一人もないのだから。

「いいだろう。ただし、戦鬼はわしに寄越せ。奴の弟子ならば、多少は齒応えもあるう」

「ええ、楽しみにしててください」

導師と巨人は笑みを浮かべる。

先に起こるであろう、人形同士の戯れ戦争を楽しもうと。

## 鬼と新天地2（後書き）

今回の【練功】の件を書こうと調べるまで、勁が運動量だなんて知りませんでした。もうWikiに頼りまくり、ググってどうしようかと内容探しの日々になってました。

### 鬼と新天地3（前書き）

……どうも、ホントにお久しぶりです。

遅筆記録を更新してしまい、本当に申し訳ありません。

遅れに遅れた今回、最後の方がグダグダかもです。



### 鬼と新天地3

劉焯は荊州に残り、情報収集に走っていた。しかし、孫策と会話をした日から、突然城内の警備が堅固なものになり、忍び込む事が出来なくなってしまうていた。

格段に上がる警備に仕方ないと気持ちを切り替え、劉焯はその城下町で民に流れる噂、兵が不意に零してしまう内部事情を集めていた。数日が過ぎ、集まった情報の大半は袁術の施政の不満、兵の練度の低さに新たに登用された将がいるといったところだ。

劉焯も新たに登用された礼青という将を調べたいのだが、城にも忍び込めない上に、袁術軍の兵もよく捉え切れていないようで、はっきりとしたことは解らなかった。

「どうしたもんかなー……」

食堂のテーブルに突っ伏しながら、劉焯は唸った。

もう少し確実な情報が欲しい身としては、もう一步深く踏み込むも吝かやぶらではない。しかし、不用意な一手で戦の導火線に火を点けるような真似はしたくない。

「愛紗に怒られたくないしなあ……」

実際問題、これが一番気になっている。

「ボウズ、どうした？ いやに唸ってるなあ」

「ん？ ああ、おっちゃんか」

思考が目付役の説教回避に移りかけていると、情報収集時によく利用する食堂の店主が注文していたラーメンを持ってきていた。

子供が何日も一人でいると外套で姿を隠していても、さすがに目立つ。しかも、宿代に食事代の蓄えもあるとすれば、下手なチンピラが狙ってくる可能性が高い。

そこで選んだのが、この店主が営む食堂も兼ねた宿なのだ。理由は単純、ずばりこの店主の風貌が怖いからだ。厳つい人相に類には大きな傷があり、筋骨隆々で誰が見ても賊か狭にしか見えないような男だ。

そのせいか、料理の味は中々なのだが入り込みは決して多いとは言えない。来るのは彼の外見に反した人の良さを知っている人に袁術軍の兵士の一部くらいだ。

「いやね、調べたい事があるけど出来ない状況になっちゃって、どうしよっかなあと」

「ああ、親父さんの手伝いか。よく出来たガキだねえ、お前めえさんは」  
突っ伏したまま劉焯が返すと、店主は腕を組んで唸った。

劉焯はこの店主に自分が父の手伝いで、荊州まで来たのだと伝えていた。これを聞いた店主は感心し、宿代を割引してくれたり、おかずを一品増やしてくれたりとサービスをしてくれた。まあ、嘘はついていないからいいか、と劉焯も厚意に甘えている。

「しっかし、最近のガキは大人顔負けだなあ」

劉焯が「いただきます」と手を合わせていると、店主は劉焯の前の席に座ってそう零した。彼の呟きに劉焯が首を傾げていると、店主は徐おもむくに語りだす。

「なに、お前さんみたいに甲斐甲斐しく親父さんの手伝いしてる奴もいりゃ、うちの領主みたいにガキ丸出しでやりたい放題してる奴もいるってこつた。それにガキでも將軍になって戦場で暴れ回ってやがる奴までいるそうだしな、この違いは何なんだって俺は思うのよ」

「ふうん」

「ははっ、ガキには興味ねえ話か。わりいな」

「言いたい事は解ったからいいけどね。それと……」

劉焯はラーメンのスープを一口飲むと、

「期待を裏切るようで悪いけど、僕はやりたい放題やって暴れ回るガキだよ」

飄々と言って、視線を店の外に向けた。

そこには何台もの荷車を引く袁術軍の兵士がいた。荷車には大きな箱が幾つも積まれ、荷車が揺れる度に聞こえる硬質な音は、劉焯にとって聞き慣れたものだ。

気が付けば、店主も眉を顰ひそめていた。

「ボウズ……早くこの街から出た方がいいかもしんねえぞ」

「戦が始まるからとか？」

「おっ、解ってんじゃねえか。そういうこった」

「……そうだね、ここらが切り上げ時かな」

劉焯はラーメンを完食すると、代金をテーブルの上に置いた。

「それじゃ、おっちゃん、元気でね」

「お前さんもな」

じゃあ、と劉焯は踵を返して一歩踏み出すと、すぐに振り返った。

「そうそう、おっちゃん」

「なんでい？」

「袁術の栄華、あと少しで終わるから」

「？　なんでそんな事が解るんだ？」

「さあ、なんでかな」

困惑する店主を他所に飄々と返すと、劉焯は荊州を後にした。

荊州を後にした劉焯は徐州への道中を直走<sup>ひた</sup>っていた。途中、山賊の追い剥ぎ<sup>は</sup>に遭ったが拳で黙らせて追い払ったり、盗賊に恐喝に遭って蹴散らしたりもしたが、あとは順調に徐州の領内に辿り着いた。

しかし、それも領内に入った途端に終わってしまった。

察知した気配の方向を見れば、遠くに砂塵が濛々<sup>もっもっ</sup>と上がっている。しかも、風に微かに血の臭いも混じっている。

「辞卑<sup>しひく</sup>くして広きものは徒<sup>かち</sup>の来るなり……だっけ。厄介事が増えそうだよ」

面倒だと零しながら、劉焯は外套を被り直すと砂塵が上がる方へと走り出した。すると、すぐに徐州領内の目と鼻の先にボロボロの軍隊が騎馬を駆け、こちらへと全速力で向かって来ている。その後ろにはもう一つの部隊が前の部隊を追い立てていた。

明らかに戦争があり、逃走中の敗残部隊と止めを刺さんとする勝者の構図だ。

そして、予想通り面倒な事に、敗残部隊の将が公孫贇であり、勝者の部隊が袁紹軍だった。

公孫贇軍は見た限り、確実に徐州へと向かっている。恐らく、親友である劉備に保護を求める為に来たのだろう。

袁術との戦争が起こるだろう。現在いま、劉備軍に強引に物量で押し迫ってくる袁紹の相手までしていられる筈が無い。かといって、公孫賛を見捨てるような真似は夢見が悪い。

（それに、白蓮に何かあつたら桃香様が悲しむよね）

仕方ないんだ、と言いつつがましく独り言ちると劉焯は肩を竦めた。そして、姿勢を低く構えると、公孫賛軍の後方　袁紹軍へと向かって駆けだす。

突然現れ、接近してくる劉焯に混乱する公孫賛軍だが、彼は知らんとばかりに加速。馬と馬、兵と兵の間を縫うように抜け、疾走する速度が十分に高まった瞬間、高々と跳躍して見せた。

外套を纏う劉焯を誰もが仰ぐように見上げ、言葉を失う。

上昇が終わり、降下が始まる。その勢いを利用し、劉焯は蹴撃を袁紹軍の前方の地面へと叩き込んだ。蹴撃は地面を砕き、砂塵を噴出させる。

袁紹軍は突然の襲撃に加え、砂塵に視界を遮られて混乱に陥る。前方に配置された兵は思わず足を止めてしまい、後ろに続く兵が次々に押し寄せて将棋倒しが起こってしまった。

出来上がった人垣を踏み越えて、劉焯は袁紹軍の後方の攪乱に向かう。砂塵が舞う中で双剣を抜くと、白と黒の刃を以てまた地面を破砕し、生じさせた土砂を浴びせるように飛ばした。

飛ばした土砂に泡を食った兵達は転ぶ者もいれば、転びかけて味方

に自身の武器を刺さないように慌てている者もいた。その様子を視界の端で捉えつつ、混乱を治めようとしている騎馬部隊へとダメ押しにかかる。

劉焯は干将を振るい、馬の足を擦れ違いざまに斬りつけていく。斬られた馬は悲鳴を上げ、騎手を巻き込んでどんどん倒れていった。

「これで最後……っ！」

倒れかけている馬を蹴り飛ばし、混乱に拍車をかけて追走を不可能にした。

「そんじゃ、帰りますか」

砂塵の中に身を潜め眩くと、劉焯は戦場から姿を消した。

袁紹軍を足止めに成功した劉焯は、縮地を使ってすぐさま公孫贇軍を追っていた。そして、それ程時間がかからない内に彼女の軍はすぐに見つかる。

公孫贇軍は徐州の州境から然程遠くない位置で、小休止を取っていた。擦れ違う際にチラと見えてはいたが、敗戦に重ねて強行軍での逃亡だったのだろう、兵達の疲労は色濃い。一里でも歩けば、すぐにでも倒れてしまうのではないかと思わせる程だ。

しかも、ゆっくりと正面から近づいているのだが、誰も劉焯の存在

に気付かない。気付けていない。恐らく、周囲に斥候も出ていないのだろ。それは、それ程までに余裕も体力も失われている事の証左だった。

「酷く疲れてるみたいだけど、大丈夫？」

「……は？ あつ、あなたは!？」

外套のフードを脱ぎ、一番近くの兵士に聞く。兵士や彼の近くにいた兵もやつと劉焯の存在に気付き、皆一様に表情を驚きに変えた。

「りゅ、劉焯將軍!! どうしてここに!？」

「も、もしかして、劉備様の軍が俺達を助けに来てくれたんじゃない?」

「そうだよ! 現に袁紹軍の奴らが追って来ない! 俺達、助かったんだ!」

そんな希望的観測を誰かが呟いた。それは瞬く間に次々と伝播していき、多少なりとも彼らに活力を起こしていた。

そこに真実を告げるのは劉焯とて心苦しい。希望が湧いた瞬間に挫くなど、とても残酷な行為に他ならない。

「落ち着け、お前達!!」

劉焯が真実を口にしようとした瞬間、一喝が兵士達を沈める。場に沈黙が広がる中、人垣が割れ、白い鎧を身に付けた見覚えのある少女がこちらへとやって来た。



「よう。久しぶりだな、朔」

「白蓮……」

手を振りながら公孫贄は挨拶する。その彼女の顔にも疲労が色濃く滲んでいた。白の鎧は血糊と砂に塗れ、見る限り純白な部分はないほどに汚れている。

「ご健勝のようで何より……とは言えないか。手酷くやられたみたいだね」

「……ああ、麗羽に 袁紹の奴にやられたんだ」

悔しさを言葉の端に滲ませて、公孫贄は語る。

反董卓連合後、自身の領地に戻った公孫贄は戦後処理の為、内政に取りかかっていた。しかし、明くる日の事だ。袁紹から使者が訪れ、突然の宣戦布告を告げられた。驚きに気を取られている暇を与えず拍車を掛けるように、袁紹はその日から国境の城を次々と落としていく。

連合戦の影響による兵糧や兵力の不足、それに加えての宣戦布告と同時の侵略に、公孫贄は終始後手に回る事になる。抵抗と言う抵抗も出来ず、気付いた時には領土の半分を奪われ、遂には遼東の城を全て落とされてしまった。

成す術も無くした公孫贄は敗北を余儀なくされ、残った兵を纏めて最後の頼みの綱 友である劉備に保護を求める事にしたのだった。

「甘かった……。麗羽がそんな事する筈ないって思ってたんだが……」

「確かに甘いね。諸侯同士で機を虎視眈々と狙ってる情勢じゃ、あのクルクル虚栄太守？が欲出して攻め込むのなんて時間の問題でしょ。前の連合戦じゃ、アイツは利っていう利を手に来れなかったんだから」

「ホント、読みが浅かったよ……」

「まあ、安心しなよ」

「……何がだ？」

「白蓮に死相は出てないから」

さらっと言い切る劉焯に、公孫贇は苦笑う。占いでいきなり安心しろと言われても、簡単には安心できないだろう。

「朔、そんなの視えるのか？」

「うん。でも、信じなくてもいいよ。所詮、占いだし」

「いや、信じるよ」

公孫贇は劉焯の頭に手を乗せ、

「賊狩りの戦鬼が言うんだ、間違いないだろ」

穏やかな笑みを見せた。

「さすがの甘さだね。まあ、そういう甘さが好きだから、僕もあの主に仕えている訳だし」

「ははっ。お前も十分甘いじゃないか。

敗走する私達を見かねて、単身突っ込んで助けてくれたんだろう？」

凶星を突かれ、むっ、と思わず唸る劉焯。それを見た公孫贇もふつ、と、してやったりと口角を片方釣り上げた。

「助けてないよ、守っただけ。にしても、よく解ったね。僕が独りだって」

「これでも一応、太守だったんだぞ？ 私は。それに、私達の軍に使者を送る余裕も無かったしな。救援にしては早すぎるし、その人数が独りだけってのは更におかしいからな」

言われて、そういうものか、と劉焯は納得してみる。単騎での応援をこなした経験からか、どうやら感覚がズレてきたらしい。きつとお人好しのせいだと責任を擦り付けなする事にした。

「？ どうかしたか？」

「いや、なんでもないよ」

いつの間にか顔に出ているらしい。

「もう少しだけ休んだら、桃香様のいる彭城まで案内するよ」

「ああ、助かる」

「あっ、あと馬に乗せてくれると助かるんだけどさ」

「解った。用意させてみる」

「え？」

「は？」

何故か首を傾げる劉焯に、公孫贇も首を傾げる。何かおかしな点があったかと考えてみるが、無かったのではないかと二人は思った。

「馬、乗るんだよな？」

「うん、乗る」

「だよな。すぐ用意させるからな」

「あれ？ 乗せてくれるんじゃないのさ？」

「いや、だから馬を……」

何か噛み合っていない。

おかしい、と公孫贇はもう一度考えてみる。馬に乗りたいのに用意すると言うと、首を傾げられる。もう一度ちゃんと確認しても、同じやり取りが発生した。

（まさかな……）

公孫贇の脳裏に冗談染みた予想が浮かんだ。しかし、すぐに有り得ないな、と否定する。なんせ相手は賊狩りの戦鬼。あの呂布と引き分ける程の武の持ち主が、そんな筈がないだろう。

公孫贇が頭の中で否定を繰り返していると、乾いた笑いを浮かべた。そんな彼女を劉焯はずっとキョトンと見ていた。

「どうかしたのさ？」

「いやさ、朔が馬に乗れないなんて莫迦みたいな事を考えてしまっ  
てさ」

「うん、そうだよ」

「……………えーと、今なんて？」

「僕、馬に乗れないよ」

案内役の劉焯は公孫贇の馬に相乗りさせてもらい、ゆらりゆられて城まで帰って来た。始終、公孫贇は遠い目をしていたが、そこは疲れているんだろうと気に構わずにおいた。

その後、公孫贇を一刀達がいる玉座に案内し、その間に彼女の兵士を城内の休める所まで誘導した。

「やっと帰って来たなあ……」

劉焯が独り言しながら歩を進めていると、前に困った顔をした月と妙に険しい顔をした詠がいた。何故か、自分を待ち構えていたような気がしてならない。思わず進行方向を反対に取る。

「待ちなさい」

一歩後ろに前進した瞬間、詠の制止の声がかかる。顔を引きつかせながら振り向けば、メイドがそれぞれ握力全開で劉焯の両肩を掴んだ。

「……どうして逃げるのよ？」

「虫の知らせで、そっちの方向には行かない方が良い気がした」

「そう……なんて勘の良い奴なの」

「……」

「詠ちゃん……それ、暗に何かあるって言ってるよ。ほら、朔くんも絶句してるし」

思わず零した詠の咳きに絶句しつつ、劉焯が逃げようと一歩踏み出すと足が後ろにずり下がった。

「……」

もう一歩踏み出してみる。同時にまた後ろにずり下がった。念の為、

もう一回試せば、当然のようにずり下がる。

「放してほしいんだけどさ」

振り返り、半眼で訴えるが二人のメイドは変わらず、険しい顔と困った顔をして劉焯を離さない。

「ダメよ。アンタを逃がしたら、ボク達がどうなるか解ったもんじゃないもの」

「どういう事なのさ？」

「ごめんね。朔くんが帰ってきたら、すぐ捕まえてお風呂に入れるように言われてるの」

「いくら天然でお人好しって言っても、桃香はアンタの主でしょ。そんな汚い格好で顔を出させる訳にはいかないの」

そうだね、と劉焯は納得しつつ首を傾げた。風呂に入れ、というのは解った。しかし、『捕まえて』が付くのは、これ如何に？

「おチビ、カラスの行水って知ってる？」

「ふえ？」

「お風呂に入ってもゆっくり洗わないで、すぐに出ちゃう事の例えだよ」

「つまり、アンタの入り方って事」

「へえ、勉強になったよ。じゃね」

「自然な流れで逃げようとしなない」

「うにゆう……」

再度逃走を図る劉焯の首元を、詠は猫っ掴みの要領で掴んだ。すかさず月も続くと、予想に反して腕をガツチリと極めてみせ、簡単に外せないようになっていた。

月なのに、月の善なのにと思わずにいられない。

「月、そのやけに上手な捕まえ方はどうしたのさ？」

「千里さんの撃剣授業の一環でね、簡単な捕縛術も習ったんだよ」

劉焯の問いに月は、はにかんで可愛らしい笑みを見せる。劉焯もそっかー、と頷ぐが、その可愛らしさに反した技術の高さが恨めしい。

「あと、もう一個質問。なんだか、どこか必死な感じがするんだけどさ？ 何かあったの？」

その問いに月と詠はビギリと固まった。それを切っ掛けに月は涙目を浮かべ、詠は体を震わせて遠くを見つめ出した。

明らかに凶星を突いた事に気付き、劉焯は嫌な予感が強まってきた気がした。

「……………にばる」



「は？」

「カーニバルって言われたのよっ……！」

詠の叫びが耳にクリーンヒットし、鼓膜を強く震わせる。キーンとして、正直痛い。

「カーにばる？」

「そう！ カーニバルよ！！ アンタを捕まえて入浴させないと、リオでジャネイロでカーニバルな服をボク達が着せられちゃうのよ……！」

「李尾？ 邪子？ 禍似婆琉？」

パニックを通り越して半狂乱に突入しようとしている詠。劉焰が小首を傾げて聞いても、彼女の耳には中々届かない。

すると、涙目な月が教えてくれた。

「……千里さん、朔くんがいない間に旭ちゃんから天の国の衣装の話聞いて、色々作っちゃったんだ。それで私達とか、朱里ちゃんに雛里ちゃんに着せてただけ……」

「なんだか、強制力があつた印象を受けたんだけどさ……」

「それでね」

「あ、流すんだ……」

「それでね、どうしても着れない、着たくない服があったの。それを罰にされて以来、詠ちゃんは……」

「あの様だと……」

綺麗な髪を振り乱して「お母さーん!!」と叫ぶ詠の姿に、どれだけ嫌なのか察せられる。しかし、同時にどんな衣装なのかと好奇心が鎌首をもたげてきた。

「因みにどんな感じなの？」

「え？ うん……大きな鳥の羽みたいな冠に、同じような飾りが腰の辺りに立てて付けられてるね。あ、あと、あと……ね……」

急に俯き、顔を紅潮させる月は恥ずかしそうにモジモジした。その際に極められた劉焯の腕が小さくミシツといったのだが、彼女は気付かない。静かに小鬼は痛みを耐えながら答えを待つ。

「あ、あと、あと何っ……？」

「そ、その……だ、だからね」

「う、うん。早めに答えてくれると嬉しいな。き、聞こえない？」

ほら、ギリツとかミシツとかさ。すぐ近くから」

「やっぱり言えないっ!?!」

「うなあああああああ!?!」

軋む音がギリツからギギギツへと変わる。的確な拘束は完全に間接

破壊へと至っていた。

半狂乱のメイドに、可愛らしく恥ずかしがりながら 本人の知らぬ間に 関節技をかけているメイド。そして、その被害を受けて痛みに喘ぐ小鬼。

何ぞ、この状況？

この言葉通りの状況が見事に完成していた。

だが、そんな状況にツツコミを入れてくれる者は誰も通らない。主も、将も、兵も、侍女部隊ですら影さえ見せない。

「もう……やめてほしいんだけどさ！」

自分の世界から戻ってこない月の帰還を待つのも限界に達し、劉焯は自分から腕の関節を外して拘束を解いた。

拘束していた月は関節が外れる生々しい音と感触に言葉を無くし、腰を抜かして顔を青くした。劉焯が関節を手際良く嵌め直すと、また生々しい音を聞かされた為か彼女は口元を押さえて、何かを必死に耐え始めた。

月がどうしてそんな状態に陥ったか解らない劉焯は、目を丸くしてメイド二人を見る。そして、ふと思った。

今なら逃げれると。

「………そしたら、禍似婆琉かにはるが見れるかな」

好奇心が満たされるなあ、と思考が逸れた瞬間に、つい独り言を零した。

「 させるかああ！」

禍似婆琉に反応したか、詠が半狂乱のまま劉焯に襲いかかる。そのタイミングは中々のもので、彼女の細い腕は小鬼の首を見事に捉え、徐庶仕込みの拘束術を遺憾なく発揮した。

何せ、偶然にも彼の頸動脈を綺麗に締め上げていたのだから。

血流が阻害され、脳に酸素が足りなくなる。

次第に劉焯の視界は黒く染まっていく。その中で、

(千里さんてば、けっこう鍛えたんですね)

徐庶の指導能力に感心して、気絶した。

玉座の間では、一刀に桃香を始めとした劉備軍の将が集まり、帰還した劉焯の報告に耳を傾けていた。

「報告は以上だよ……………」

そう締めくくり、劉焯は一刀達を見渡して頬を引き攣らせた。

何故、頬を引き攣らせたか。それは報告をしている彼を見て、全員が癒されているかのような蕩けた顔をしているからだ。それはもう、話を聞いていたかさえ怪しいレベルだった。

原因は、そんな彼の今の格好のせいだったりする。

頭には黄色い円形の帽子、水色のスモック、胸にはデフォルメされた鳥の刺繡ししゅうがされ、『さく』と何故かひらがなで名前まで入れている。とどめに、肩には小さなシヨルダーバッグ。

総じて、幼稚園児服と称される服装をしていた。幼い子が着る服だ、幼い劉焯が着て似合わない筈が無い。前のにゃんこパジャマの時もそうだが、今回も余りの似合いように和みに和んでしまったのだ。

それに不満なのは、当然で必然の事ながら被害者劉焯である。

詠による幸運的　劉焯にとっては不幸　な首絞めによって意識を刈り取られた劉焯は、気絶している間に風呂に入れられ、気が付いた時には幼稚園児服を着せられていた。すぐ隣で徐庶が満面の笑みを見せていた為、服は確実に彼女の仕業だと勘付いた。

因みに、

『や、やっぱり、子供でも付いてるのよね……』

『へう……そ、そうだね、男の子だもんね。と、とと、当然だよね』

『……ってことは、おチビが大きくなったら、ああ、あ、あれも

』

『え、詠ちゃん！？ ダメだよ、そこから先を考えちゃダメええええ！』

などという会話が合ったかどうかは……察してほしい。

きあぐまっしょう  
閑話休題。

「前も言ったと思うんだけど、いつその事笑い飛ばしてくれた方が清々しいんだけどさ」

「笑い飛ばすなんてしないよ」

「そうです。朔を笑い飛ばすなんて、そんな罰あたりな事などしない」

少しむくれる劉焯の言を劉備と関羽が否定。そして、力強く断言する。

「むしろ、あやして愛でまくりたい！！」

「僕は赤ちゃんじゃないんだけどさっ！？」

何故それを力込めてまで言うのか理解できない。自分がいない間に何かあったのかと怪訝な顔をするが、彼は知らない。

彼が心配するような事は特に無く、彼自身が意図せずして仲間の母性を 約1名は父性だが いたく刺激しているだけなのだ。

そんな要らぬ心配をしている劉焯は、この場に連れてきた筈の人物  
がない事に気付いた。

「そっぴや、白蓮は？」

「白蓮なら、今は部屋で休んでもらってるよ。俺達のところに来て  
大丈夫だつて解つたら、張り詰めていたもの切れたんだと思う。今  
はぐっすり寝てるよ」

「……だろっね」

劉焯の眼 延いては、子供の眼から見ても公孫贄達の限界は近か  
つたのだ。いや、もう疾とうに超えていたのだろう。

そこをなんとか耐え、落ちのびようと生きてここまで来たのだ。  
劉焯からすれば賞賛ものだ。

「それで、白蓮達はこれからどうするのさ？ やっぱり、仲間にな  
るのかな？」

「やっぱり、つて朔くんつてば、お見通しだったんだね。うん、も  
ちろん白蓮ちゃんもこれから一緒に頑張つていく仲間だよ！」

嬉しそうに劉備は劉焯の予想を首肯した。経緯はどうあれ、大切な  
友人が無事で、これから共にいれる事に心から喜んでいるのが、と  
ても伝わってくる。

助けを求める公孫贄を拒む理由など、劉備を始めとしたこの仲間達  
には無い。いや、あつても関係ないのだ。だから、どうしたとばか  
りに撥はね退のけてでも、彼女らはきつと手を差し伸べ、掴んでみせる

だろう。

現に大領主である袁術との戦争が頭を出し始めている。そんな状況下で、またも大領主の袁紹とまで矛を交えなければならぬという危機的状況に陥る事は、弱小軍の劉備にとって明日は無いも同然だ。それを理解していながらも、劉焯は公孫贄を守り、劉備の下まで連れて来た。そして、愚を犯した筈の彼を誰も叱らない。むしろ、よくやったと褒め称えた。

本当に変で、お人好しの集団。

心中で呆れに似た評価を付ける劉焯。そして、それが好ましくて共にいる自分も、やはり変わり者だという事実にも言えなくなつた。

「話を戻すけど、袁術との戦は確実として……孫呉はどうする？」

劉焯の懸念事項に、皆一様に神妙な面持ちになる。

物量、兵数の両方で大きく優位に立つ袁術。彼女の傘下にある客将孫呉の武力はどう言っても見過ごせない。

袁術よりも兵数などは少ないだろうが、戦上手の孫策に出て来られでもすれば、あちらの掌の上で踊らされる可能性が高い。たれば、などと希望的観測で語るにはリスクが高過ぎる相手だ。

「僕としては、同盟云々うんぬん関係無く参戦すると思つよ」

「でもでも、孫策のお姉ちゃんちゃんは鈴々達が攻めなきゃ戦わないって



言ってたのだ」

「そうだよ、孫策さんが約束を破る筈無いよ」

「いや、それはどうだろうな」

劉焯の考えに異を唱える張飛と劉備。それに返すように異を唱え返したのは、趙雲だった。

「確かに不可侵の同盟を交わした。しかし、あれは我らと孫策との密約だ。故に袁術は知る由も無く、知っていたとしても守る謂われも無い。あの武力を浪費する事はあっても、飾りにしておく愚は流石に犯さんだろう。」

それに英雄とはいえ、今の孫呉は袁術の客将にすぎん。主従程の強制力は無くとも、出ざるおえんよう仕向けるだろうさ」

「まあ、最初から反抗できるくらいなら、客将なんて身分に甘んじるような人じゃないっすからね」

趙雲の言に周倉が同意した。

彼女の言に納得した部分があるからか、劉備も張飛もむう、と押し黙った。

では、どうするのか？

その判断をどう下すべきか、皆の視線が軍師二人に向けられる。

熟考していたのか、孔明は一瞬遅れてそれに気付く。鳳統に至っても同様で、視線に気付くとビクツと体を振るわせた。

「わ、私としては、朔くんの考え　孫呉が出てくる可能性が高い  
と思いましゅ！」

「うう、朱里ちゃんまで……」

「怖いのは袁術軍のような物量で押しつけてくるのではなく、兵数が少  
なくとも孫呉の武力が紛れもなく高い事です。

兵数の多い袁術軍が壁役として私達の動きを抑え、その隙に孫呉  
の高い武力による一太刀を当てる。これは単純な例ですが、当たり  
所によつては致命的な一手になりかねません」

質と量。

互いの利点を組み合わせるべつかられては、流石に苦戦は避けられ  
ない。必至といったところか。

その事実を再認識させられ、皆の表情に僅かなれど陰りがかかる。

「でもさ、これっていつもの事だよな」

「だね。僕らが不利な状況なんて、連合の時もそうだったし」

「そんで、そんな不利な状況を打ち破ってきたのが桃ちゃん達なん  
すよね。私なんて、おかげで過去に痛い目見たっすからねえ」

だが、その中で能天気ともとれる発言をする者が3名いた。一刀、  
劉焯、周倉である。

確かに彼らの言う事は事実で、自身達が起こしてきた結果だ。苦境

を越えて培ってきた自信も勿論ある。しかし、そう何度も上手いくかどうか不安な面もあるのが事実だ。

そう安易な事ばかり考えてもいられない。

「今更悩んでたって状況は変わらないよ。

それに周りの餓虎なんかの餌にならない為に、僕らが得なきやいけないのは勝利という結果。そのひとつただただだよ。弱々しく見えようと、この獣には鋭い爪と牙があるんだって世に知らしめなきゃいけない」

淡々と述べられた劉焯の言には、どこか含みを感じた。彼の言葉を噛み砕いて考え直すと、劉備達はその表情の陰りを一段階濃くなっ

た。

「これも朔くんの言う通りなんです」

孔明は劉焯の言を肯定し、補足する。

将は一線級でも兵の質は決して高いとは言えない。それが劉備軍の実状。要は、徐州の州牧となろうが、一カ月と幾許いくばくかの月日で弱小の域から抜け出せる訳がないのだ。

徐州は、土地としては地理的にも商工的にも中々の土地。そんな土地を弱小軍が治めているのだ、格好の的だと諸侯は考えている事だろう。それでも安易に攻める動きを見せてこなかったのは、先の反董卓連合においての名将、飛将と打破して見せた武功が功を奏しているからだろう。

そして今回、動きを見せたのは袁術。言わずと知れた名家の出にし

て大領主の彼女が劉備を攻めると知れば、諸侯は餓虎の如く鼻を利かせ、劉備軍が劣勢となればその尻馬に乗るのだろう。あとは、袁術に取り入るなり奪うなりする事で自分の取り分を確保しようとするだろう。

「卑怯者共め……」

孔明の説明を聞いた関羽が吐き捨てるようにそう呟く。

卑怯者。確かにそうなのだろう。だが、乱世においては、これが常と言っても間違いではないだろう。理想、宿願、大望、野心、と言葉を変えようとそれを胸に抱えて戦場を歩む者は、いつか選択を迫られる。

非情と卑怯。

どちらか二つに一つ。

蔑まれ、誹りを受け<sup>そし</sup>るしかない選択を。

この選択を躊躇い、放棄や拒否した者は、餓虎の腹の中に消える事だろう。言葉通り、“弱肉強食”を実感しながら。

「……ですから、私達は袁術さんを素早く撃破し、隙は無いのだと示さなくてはいけません。でなければ、餓虎となった諸侯の餌食になりかねません」

でも、と結論を述べた鳳統は続け、

「今回は運が良かった面もあります」

その一言に劉備達は眼を丸くした。

「にゃー？ 敵はいつぱいで孫策のお姉ちゃんまで出てくるのに、なんで運がいいのだ？」

張飛が口にした疑問は皆の疑問だった。明らかな状況不利に頭を抱えているというのに。

「……敵の正体は明らか。最悪の状況も不安要素も解っています。あとは、対処と仕掛けで私達が戦局の流れを掴みます。軍師の智望わたしの見せ所です」

軍師モードの鳳統の強気発言に、劉備を始め劉焰まで思わず拍手する一行。

「それで、どんな策で袁術の度肝を抜いてやるんだ？」

一刀がどこか愉快そうに聞くと軍師二人は愛らしい笑みを見せ、

「まず、何もしない事です」

袁術よりも先に仲間の度肝を抜いた。

「悪いけど、もう一回言ってくれろ？」

その言葉を発したのは孫策だ。その美貌は声音と同じく、どこか苛立ちを押し隠しているように見える。

孫策は袁術の急な召喚により、彼女のいる居城を訪れた。そして、その城の玉座の間にて、城主である袁術と謁見していたのだが

「妾は徐州を落とし、小鬼を手に入れるのじゃ。孫策、そちも付いてくるがいい」

開口一番に徐州攻略を宣言した。

予想してもなかったが、ここまで直球で言ってくるとは思っていなかった。しかも、土地が狙いではなく、劉焯を狙っているときた。

(……………なぐんか、癩に障るわね)

よく解らない不快さと苛立ちを感じ、孫策は内心で首を傾げた。

「妾は戦鬼、劉焯翔刃が欲しい。その為に徐州を落とすのじゃ。異論は許さぬ」

「……………あなた、本当に袁術ちゃん？」

再度の宣言に孫策は眉を顰めた。最後のいやに強気な言葉に違和感を覚えたのだ。いつもの袁術ならば腹立たしい物言いなれど、見た

目に年相応な言動の色が混じる。しかし、今の袁術からはそれを感じない。数日の間で、こころも変わるものだろうか。

それに、と孫策は袁術の隣へと視線を向ける。

そこには秀麗であり冷酷な印象を持った導師がいる。彼女の視線に気付いたのだろう、導師は温度を感じさせない笑みを顔に張り付け一礼した。

「お初にお目に掛かります、孫策殿。私は于吉。つい先日から袁術殿に御厄介になり、軍師の真似事をしています」

ふっ、と笑うその顔は、普通ならば見惚れる程に端正な顔付きだ。しかし、見ているだけで、どこか嫌悪感を起こさせる。

「そう、せいぜい頑張んなさい」

「おやおや、つれない御方だ。ですが、そんな孫策様に要請があるのです」

于吉は口角を吊り上げ、言う。

「兵2万を率い、徐州攻略に参戦しなさい」

それは要請ではなく、もはや命令だった。

「随分と上から言うじゃない？ 新しい軍師は」

「ええ、相手の弱みを握っているものですから」

「……………どういう事？」

「妹君……………孫尚香殿といいましたか。中々お転婆なお姫様だ」

「……………っ」

末の妹の名が于吉の口から零れ、孫策は苦虫を噛み潰したような表情をした。

末妹の孫尚香は袁術軍の監視下に置かれ、孫策とは遠く離れた地で暮らしている。連絡は頻繁ではないものの、息災だとは知っていた。それでも、袁術の一言で処遇が変わる可能性がある。両親を失い、妹まで失うのは正直……………辛い。

「……………解ったわ、劉備と矛を交えましょう」

絞り出すように口にした言葉が、自身の心を苛む。無意識の内に歯をギリツと強く噛み締めていた。

（悪いわね、翔刃。嘘、つくことになっちゃったわ）

届かぬ謝罪を、孫策は心中で唱え続けた



### 鬼と新天地3（後書き）

前書きに続き、遅れに遅れて本当に申し訳ないです。

夏の暑さにやられ、書く気力が微塵も湧かないような状況でした。その原因の一つに仕事も入るのですが、なんにせよ言い訳ですね。

本当に申し訳ありませんでした。

鬼と新天地 4 (前書き)

お久しぶりです。

今回は前哨戦……になってたらいいな。

## 鬼と新天地 4

荊州より劉焰が帰還したその日の夜、一刀は管輅の指導を受けていた。何度も疑似的に死をお手軽体験させられた後、休憩中に袁術との戦について話が及んだ。

「で、勝算はあるわけだ？」

「ある……んだと思う。肝心の軍師が教えてくれないから、どんなとも言えないんだけどさ」

「ふうん。でも、無いよりマシでしょ。わざわざ人目を避けて色々動いてるんだし」

「……へ？」

「どういう事？、と一刀が視線で問えば、管輅はふふつ、と笑って飄々と流してしまふ。気になるものの、多少なりとも彼女の人と為りは掴めてきている。あれは教える気など更々無い。しつこく聞こうものなら、常人離れた武で月琴とんきをフルスイングしてくるだろう。

被害者左慈は語っていた。

あれは楽器である筈が無い。鉄鞭か何かに違いない、そうとしか思えない。

蹲りながら悲愴に満ちた声で語られては、信じそうになる。人間を思い切り殴りつけておきながら、壊れるどころか凹みや傷一つ出来ないのだから尚更だ。

楽器？の恐怖に背筋を震わせていると、

「まあ、貴方も大変な目に逢うでしょうね」

一刀の耳に何やら不穏な発言が聞こえた。

「大変なのは解るんだけど、今の言い方の感じだと俺個人が該当してる気がするな」

「ええ、そういつつもりで言ったもの」

あっけらかんと言つてのける彼女に少し殺意が沸いた。

「普通の戦なら孔明や鳳統なんかの名軍師に任せていけばいいけど、小鬼と周倉もいるのよ？　きっと引っかき回すんじゃない？」

「おかしいな……否定できない気がして仕様がな……」

「それで、その二匹の鬼に巻き込まれる感じで一刀は大変になる。そんな感じかしらね」

「俺、泣いてもいいかな……」

予想される原因が主戦力の一角な上に、いつもの事ながら自身の息子が関わっているのに現実逃避したくなる。

そんな一刀の気持ちを知ってか知らずか、管輅は楽しそうに彼の姿を見て笑っている。鬼と言うのは劉焰じゃなく目の前のエセ占い師の事を言うんだ、と一刀は確信した。

(ん？ 占い師？)

自分で言っておきながら、管輅が占い師である事を今更思い出した。

趙雲並みの速さで突き、張飛同様の豪撃で薙ぎ払い、関羽同然の一撃で斬り断つ。

一廉ひとかどの武人の技を容易に模倣し、再現して見せる規格外の存在だ。そんな占い師がいてたまるものか、と何度も一刀は思った。しかし、現実には厳しく、そんな人外じみた管輅に師事しているのが、他の誰でもない北郷一刀自身だった。

「何よ？」

「いや、ホントに 안타って色々な意味でエセ占い師だよな」

「え……何を今更っ!？」

「自覚あったのかよ!！」

「ふふん。じゃなきゃ、“エセ”だなんて言われて肯定しないわ。因みに詐欺師でも可」

「可 じゃねえええ！ しかも少し嬉しそうに言うな！ 信じ込ませた者勝ちのハツタリとか言ってたけど、それもう犯罪だからな！」

「貫き通せば、きっと本物になるわ……!！」

「良いセリフだけど、やってることは最悪だ!！」

休憩中だという事を半ば忘れながら、一刀は続けてのツッコミに回復させる筈の体力を削っていった。それすらも楽しんでいるあたり、管輅の性格は歪んでいると察しがつく事だろう。

「ふふっ……一刀も少しは成長したわね。前はポケてもツッコミなんてしてくれなかったし」

「変な方法で人の成長を確認するな。それに、したくてもできる状態じゃなかったら」

一刀がジト目で反論するも、管輅はどこ吹く風だ。

彼がそんな顔をするのも当然だ。彼女の扱きは壮絶の一言に尽きる。もしくは、地獄が妥当だと一刀は確信している。

最初は転ばされる、軽い投げをくらわせるくらいで一刀もすぐに立ち上がって向かっていったのだが、最近は出来なかった。不可能だったと言ってもいい。

向かった瞬間、意識が刈り取られるのだ。

袋竹刀を振り上げた途端に袋竹刀が消失。足払いで折られる足、腹にめり込む拳、跳ね上げられる顎、潰される喉、止めとどめにまた戦斧の如き踵落としをもらい、視界は見事にブラックアウト。

その間際には見えた管輅の笑顔が、やけに綺麗だったのがとても気になる。

加えて、目が覚めると体の痛みが不思議な程に消えていたりする。

おかしいと感じ、管輅や左慈に聞いても自分が気絶していたのは、ほんの数分だと言い張るのだ。意識を刈り取る程の攻撃を流れるように当てられ、ダメージがほとんど残っていないなど有りえない。

聞いてもそうとしか答えないのであれば、それで良いと一刀は割り切る。ダメージがほとんど無いのなら、その分管輅へと向かって行ける。それこそ何度でも。

しかし、“何度でも”という行いは相手が管輅とあつては“打ち倒される”の枕詞にもなってしまう。

そんな気絶と再起のサイクルをグルグルと回り、一刀はなんとか打倒されるも気絶しない程度には鍛えられていた。

その弟子の努力の成果を、このお師匠様はおふざけで確認するといふ非道ひみちい方法をとるのだ。

だからだろうか、一刀はたまに殺意かんどうの余り彼女に真剣でお礼をしたくなるのだった。

「取り敢えず、決めた」

「どうしたのよ、急に?」

「俺、朔がお前みたいにならないように頑張るよ」

「それ、本人を目の前にして爽やかな顔で言わないでくれる!?!」

「お父さんは頑張るよ————!!」

管轄は急にやる気を出した一刀の頑張る発言に頬をひくつかせながらも、やる気を出した事自体は良い事なので自分に対する発言をスルーする事にした。

「親バカさん。頑張るのはいいけど、戦場じゃ大して役に立てないんじゃない？」

「……お前って本当に容赦ないなあ」

「弟子の不様な姿は、さぞ滑稽でしょうね」

「滑稽って、まだ決まってないじゃないか」

「そうかしら？ 小鬼の事だから奇策で貴方の事を戦場に置き去り……なんて事も」

「どうか、お力をお貸しく下さいお師匠様！！」

有り得無くもない未来を提示され、弟子は師匠かんろに頭を下げる他無かった。

「ふふん。どうしよっかなあ？」

「……………」

「ちょっと！？ 焦じらした瞬間に無言で袋竹刀を握らない！ どれだけ堪え性がないのよ！？」

「お前の焦らしは、なんかムカつく」



「師匠への畏敬はどこにっ!?」

「そんなものは、そこらの狗いぬに喰わせた!」

「くうう! 今すぐ貴方の心臓を貰い受けたい気分だわ!」

「……………何をしているんだ、お前達は?」

ギャーギャー、と一刀と管輅が騒いでいると、左慈が半眼で呆れたようにやってきた。

「あ! 聞いてよ左慈! 一刀つたら小鬼が私みたいにならないように頑張るなんて言うし、師匠への畏敬なんか狗にごはんだよ、って食べさせたとかいうのよ!」

「それが騒いでいる原因か。はあ……………北郷一刀」

「なんだよ?」

「その点に関しては賛同してやる。しっかり教育しろ」

「ああ!」

「裏切り者!」

味方してくれると思っていた左慈が一刀側に付き、管輅は叫びながら駄々っ子のようにゴロゴロと寝転んだ。どうやら不貞寝ふてねを敢行するつもりだよつだ。

子供か、と一刀は心中でぼやいた。

「尊敬されない理由が解らんような奴は放っておくとして」

「意外と冷たいんだな……」

「貴様の知ったことではない」

「あら、床では情熱的よ？」

「お前は黙っている……」

「……………」

「北郷一刀！ 貴様はニヤニヤと笑うな……」

「あはははははっ……」

「貴様……！ 今すぐ殺す……」

~~~~しばらくお待ちください~~~~

一暴れしてスッキリしたのが、ようやく落ち着いた面々は各々に真剣な表情をつくる。

「話を戻すけど、今の一刀じゃ戦場に立っても死線は越えられない。これは自覚してるわね？」

管輅の言に一刀は苦々しく頷く。

北郷一刀は“死”を知らないからだ。

自分が相手へと降す“死”を知らない。

天の世界　現実世界で平和に暮らしてきた彼だが、この世界へと来た事でたくさん命が散っていく様を幾度となく見てきた。これからもその上塗りされてく新しい惨状を、自軍の後方で見ていく事になるのだろう。そう思っていた時期があった。

時は経て、それを自身で新たに変えた。

己が子を守る為、戦場を織り成す死線へと向かう覚悟をした。

そして、北郷一刀は自身の手で命を奪う側の人間となった。

けれど、彼の中には“殺人”という行いへの恐怖が燻っている。

殺さなければ殺される。そんな言葉通りの戦場の中で、その恐怖を御しきれぬのだろうか？ 想像するだけで不安が爆発的に高まっていくのを感じ、一刀は情けなく思い、拳を強く握り締めた。

「……………怖いって感情は、決して情けなく思うようなものじゃないわ」

一刀の心情を察したのか、管輅は穏やかな表情で言葉を紡ぐ。

「知らないものでも知っているものでも、怖いものは怖いでしょう？ それって、恐怖が自分を守ってるも同然だと思っの。大なり小なり、それは自分には危険だって感じるのは、生きようとする意志に

繋がっているから」

「生きたいと願うのは皆共通だ。いくら強かろうが恐怖を軽んじれば、その報いは己に帰る。」

武士となった北郷一刀は水面に映る月なのだろう？ 湧きあがる恐怖を受け入れる。そうすれば迷いは生まれず、そうすれば貴様を生かす糧になる」

管輅に続き、左慈も一刀を穏やかな声音で諭す。

そこまで言われ、ようやく一刀は彼女達に励まされているのだと気付いた。

「二人とも……ありがとう」

一刀が素直に礼を述べると管輅は綺麗な笑みを浮かべ、左慈はフン、と鼻を鳴らしてそっぽを向いた。

「さて、素直な一刀くんには、お師匠様から生き残る為に良い物をあげる」

綺麗な笑みを浮かべたまま管輅は一振りの剣を一刀に渡した。

その剣を見た瞬間、一刀は言葉を失う。呆然としかけた思考で鯉口を切り、ゆっくりとその刀身を引き抜く。そして、月光の下に現れたその刃に目を奪われた。

刀長は二尺六寸五分（約80.3cm）。造り込みはしんじゆくわいのし鑄造、あみ庵棟。  
反りは腰反り高く小切先。刃紋は変化に富んだ小乱れ。帽子は小丸掃き掛け。

その独特の拵えに、一刀は生唾を飲み込んだ。

それは自身の名にある剣であり、存在する筈もない代物。

【折れず】、【曲がらず】、【よく切れる】といったその相反する  
3つの性質の同時達成を追求したが故に生まれた  
日本刀。

その一振りが今、一刀の眼の前でその存在を強く示していた。

晴天の中、孫伯符は不機嫌を露わにしていた。

そんな彼女の横では周瑜が彼女の態度に溜息を零し、黄蓋は洪面に。  
そして、彼女らの後ろでは呉の兵士がきびきびと行軍している。更  
に奥には、孫策の不機嫌の原因である袁術の軍隊が続いていた。

孫策、そして袁術の向かう先は、劉備が治める荊州。その目的は、  
一匹の小鬼を手に入れる事。本来の目的であろう領地の奪取など、  
実のところは二の次なのだった。

諸侯が他の領地を攻めるのは戦乱の世の常だ。矛を交え、敵を屈服  
させ、領地を拡大し、覇を唱えるのが乱世を駆ける将というものだ  
ろう。それに矜持を持つ者も少なくない筈だ。

しかし、袁術は違った。ただ己が欲望の成就の為、兵に矛を振り回させる。矛の代わりに我儘わがままを振りかざすような子供でしかなかった。その我儘の為に末の妹は今回の出陣の餌にされ、密約とはいえ同盟相手の劉備を裏切らせられ、孫策お気に入りごの小鬼をご所望ときた。それが頭よきを過る度に孫策の不快指数は悪化の一途を辿っている。積もり積もった苛立ちは段々と隠しきれなくなり、彼女の表情に滲むように表れ出した。

「伯符、いい加減機嫌を直せ。我が軍の士気に係わる」  
さすがに見兼ねたか、周瑜が孫策を諫める。

周瑜は孫策とは公私共に付き合いが深い。故にこのまま戦闘に移られては、孫策は体に流れる孫呉の血たぎの滾りが命じるままに剣を振るうに違いない。

孫伯符は王だ。

国の先頭に立つ人間が血の滾りに理性の箍たがが外れかけているような様を見せては、誰も畏敬や敬慕を抱く筈が無い。恐怖は抱かれるだろうが、それだけでは民は付き従わない。

江東の地を取り返すという宿願を果たすまでは、『孫策伯符』という人間性を押し殺してでも、善き王の仮面と衣装を纏う必要があるのだ。

「解ってるわよ、冥琳。でも、腹が立って仕様がななんだもの!!」

ぶう、と孫策は可愛らしくむくれて見せた。しかし、彼女の瞳の奥にありありと怒りの色を見た周瑜は、額に手を当てて重い溜息を吐いた。

「公謹よ、儂も策殿と同じ気持ちじゃ。あの小生意気な童子の額に矢でも放ちたい衝動が湧いてきて仕様がな」

「祭殿……貴女までそのような事をおっしゃらないでください」

不満を露わにしだす二人に、周瑜は頭が痛くなりそうだった。

勿論、周瑜とて今回の戦に不満が無い訳が無い。孫策達に負けず劣らずある。しかし、彼女の軍師という役目は感情で物事を運ぶ訳にはいかないのだ。感情が高ぶれば、見通せるものも見通せない。それは自軍に危機を招く事に直結しているのだから。

「……………解った。袁術に言われるがまま従うのは、私としても屈辱だ。多少の溜飲は下げさせてもらおう」

「あら、冥琳ってば何か名案でも思いついたの？」

興味津々を全面に放出してくる孫策。その横で、ほう、と黄蓋も控えめながら興味を示していた。

「それが軍師というものだ、伯符。……………しかし、これを通すには不安要素がある」

そう呟き、周瑜が視線を走らせた先は袁術軍。だが、袁術が問題なのではない。

問題なのは、袁術軍の右翼に展開している呉軍の反対側　左翼に展開している“軍旗を掲げていない部隊”だ。

孫策達、呉の面々すらその正体を知れず、袁術と張勳のみが知るという状況だった。

恐らくは自分達のように客将か、外部より招いた部隊だろうと察しがつく。何故かといえば、答えはとても簡単だ。

練度が違う。戦場を歩む彼らの風格は、袁術軍のような装備と兵自身が伴っていない虚仮威こけあてではない。若干の士気の低くさは否めないが、一線級を歩むに足るそれだった。

だが、味方としては役に立つのだろうか、正体が解らなくては意味が無い。足並みを揃えようにも、姿が見えない相手とは揃えられる訳がないのだ。

「別にいいんじゃない？」

そう言ったのは孫策だった。

「こっちは最初からこの戦には乗り気じゃないもの。協力なんて、最小限に済むようにしましょ」

それに、と彼女は続け、

「あっちだって、協力する気なんて無いでしょうっし」

眼光を鋭いものにし、断言した。



その断言が、いつもの常人離れした天性の勘によるものだと言はれれば、そこには息を切らせて戻ってきた斥候の姿があった。

「申し上げます！ 4里程前方に劉備軍を確認しました！」

「そうか……数は？」

周瑜が先を促すと、斥候は少し言い淀んだ。その様子を怪訝に思いながら、再度先を促す。

「それが」

意を決した斥候の言葉に、周瑜は耳を疑い、黄蓋は頬をひくつかせ、孫策はおもしろそうに笑った。

「……やっと来たか」

敵 袁術軍、呉軍の姿を捉えた劉焰は、そう独り言ちた。

劉備軍の斥候の話では、袁術軍4万、孫呉2万。そして、正体不明の部隊が1万という数だった。

（正体不明、ね……）

敵の正体が明確に見えないのでは対策も打ち辛い。しかも、袁術は恐らくその部隊を連れていく為だけに、曲陽を通るといふ遠回りをして徐州に侵攻してきた。

曲陽は彭城の後方にある。奇襲する経路に適していたのだが、奇襲に必要な拙速さが欠片も無かった。そうまでして自軍に組み込みたい程の戦力なのだろう、と予想がつく。

そんな軍旗を掲げていない正体不明の部隊から、劉焯はどこか覚えのある気配を感じ取っていた。その数は2つ。しかし、頭を過る<sup>かよ</sup>記憶の気配は、もっと強烈で精彩なものだった。

「病気が怪我か……。まあ、弱ってるんだったら、どっちでもいいや」

対処は頼れる仲間任せよう。そんな丸投げな考えをし、自分の仕事をやる為<sup>ため</sup>に劉焯は“独り”歩を進めた。

幾人もの呉の兵達が音を立てて砂塵を巻き上げ、劉焯に向かってくる。

小鬼一匹に対して、多勢での構成。

その対応が普通で当然。劉焯の方がおかしいのだ。戦場で、たった独りでいる者が愚かなのだ。

そんな愚かな小鬼の前に、呉の兵達が立ち塞がる。劉焯は突き付けられた槍に冷めた視線を送り、次に兵を引き連れた将を見た。

「久しぶり……えっと、甘寧だっけ」

「相も変わらず、貴様は莫迦な行動をしているな」

「一言目から厳しいね」

会ってすぐにそう言われ、劉焯は肩を竦めた。その瞬間、より一層槍の穂先が彼に近づく。

「孫策様と劉備との約定の件は聞いた。事情が何であれ、裏切った事は事実。すまないと思っっている」

だが、と続けて自身の得物　鈴音を抜き、

「今、お前達が敵である以上、我らが王に勝利を献上するのが私の役目だ。……お前を捕らえさせてもらう」

甘寧は刃を向けた。

その声音に迷いは無い。彼女の鋭い眼光が小鬼へと突き刺さり、貫いた。

それに小鬼は嘲るように口元を歪めた。

「謝るなんて殊勝な事だね。でも、僕らは謝罪なんて求めちゃいない。それにさ、鎖に繋がれ、飼い殺されかけてる虎を誰が怖がるつてのさ？　少なくとも、小鬼はほく恐れちゃいない」

劉焯の主を貶めるような言に呉の兵達は怒り、持つ槍が震える。ぶるぶると震える穂先は今にも劉焯の細い首に刺さりそうだ。

それを理解しながら、劉焯は続ける。

「英雄に真の友人などいない、居るのは利用する輩のみ　　い  
つだったか、関羽がそう言った。その通りなら、孫策は僕らを利  
用しようとして利用出来なかった訳だ……救いが“少ない”ね。ま  
あ、それはアンタらもだけど」

言い終えるや否や、劉焯は嘲りの表情を消す。

そして同時に、呉の兵達が持つ槍の穂先が軒並み消失した。

息を飲む音が聞こえ、劉焯はく、と喉で笑う。手にはいつ抜刀した  
のか、干将が握られている。

「取り敢えず、アンタらには此処から退場してもらおうよ」

驚愕に固まる呉の兵達に淡々と宣告し、劉焯は拳を、足を繰り出し、  
文字通り彼らを飛ばした。

数秒だけ空の人となった兵達は後続の兵を巻き込み、落下する。巻  
き込まれなかった兵は愕然とし、仲間を飛ばした当人を改めて見た。  
子供だ。

自分達のだいたい半分程の身長しかない子供だ。

しかし、ただの子供ではない。

それは、たった今起こされた現象が証明していた。化物じみた臂力りょりょく

を持った子供のように小さい鬼なのだと。

「……………やはり、賊狩りの戦鬼相手に簡単に済む訳がないか」

異常こわじを前にして固まりかけている兵を一瞥し、甘寧は呟き歯噛みした。

甘寧に与えられた命の中には、『可能な限り』迅速に劉備軍を降し、袁術に悟られないよう保護する』といった難題があった。

この広い戦場だ、どこに袁術の眼があるか解らない。もしかしたら、拙いながらも呉の精兵に紛れ込んでいるかもしれない。

加えて、兵はともかくとして、劉備軍の将は手強い。関羽、張飛、趙雲といった名立たる武將に、孔明に鳳統という智謀に長けた軍師。何より厄介なのは、

「次は、鈴の甘寧殿が相手してくれるのかな？」

多勢を目の前にして飄々としている劉焰翔刃という戦鬼だった。

甘寧が反董卓連合時に会った際、この少年に抱いた印象は、『よく解らない』だった。それは今も変わらない。

飄々淡々にして不敵。

そんな言葉で表現される彼は、幼いながら飛將軍呂奉先と引き分けているらしい。

そんな噂を聞き、ある者はありえないと否定し、またある者は恐怖し、そのまたある者は危険視し、その他の者は歓喜し、とある王はおもしろいと笑った。

甘寧はその中でも彼を危険視していた者の一人だった。

戦鬼の武は確かに類い稀なものだ。それは甘寧自身も認めている。しかし、彼は呉に属する将ではない。それは一つ間違えれば、鬼の爪牙が呉に突き立てられる事に他ならない。

救いなのは、彼の二人の主が戦場に似つかわしく無い程にお人好しであり、彼自身もその例に漏れずお人好しであるようだった事。そこに補強するように互いの料理への不干渉を誓った同盟を組み、彼女らとの戦を避けられる筈だった。

だが、それを袁術が崩した。

こちらから同盟を持ちかけておきながら、当人が早々に破ってしまった。理由が何であれ、言い訳が立つはずが無い。

その代償に、戦鬼は呉に牙を？いた。

「貴様という存在は、袁術よりも厄介だな」

「それは褒めてるの？ それとも莫迦にしてるのさ？」

「安心しろ。それだけじゃない……!!」

甘寧は地を蹴り、劉焰へと一気に接近する。振るわれる鈴音が斬閃を描いた。紫の閃きが黒の閃きと激突し、甲高い音を響かせた。

「色々と含みがあり過ぎて、安心なんて無理だね」

鋼と鋼がギチギチと削り合う中、劉焯がそう返す。その声音は相も変わらず飄々としている。

甘寧は劉焯のこの態度に微かに口角を吊り上げると、一端距離を取った。

互いに言葉を発さず、劉焯は干将を握り直し、甘寧は鈴音を背に回すようにして構えた。

沈黙のまま数秒が過ぎ、そして風が吹いた。

チリン

鈴の音が戦場に響く。

紫の斬撃が劉焯の顔のすぐ目の前まで迫っていた。

「疾ッ!!」

劉焯は体を後ろに反らし、斬撃を干将で弾いた。彼の横を通り抜けるように攻撃していた甘寧は、態勢が崩れた一瞬を見逃さず、鈴音を素早く引き戻して再度仕掛けた。

持ち前の速さを活かし、左右から斬撃を繰り出して劉焯に防戦を強いらせる。攻撃されれば、一気に形勢を持っていかれると甘寧は気付いていたからだ。

先の一撃は甘寧の最高速の一閃だった。自分よりも体が小さくとも、劉焯に力で負けているのは打ち合っただけで、すぐに解った。だからこそ、先の先を取っての勝利を狙った。だが、それを紙一重ながら防がれてしまった。

「はあああああつー!!」

ならば、反撃の暇を与えずに打ち伏せるしかなかった。

咆哮を上げ甘寧は連撃を繰り返し続ける。紫の閃光は幾重にも宙に刻まれ、そのどれもが眼前の小鬼を打倒しようと襲いかかった。

鋼同士の衝突に次ぐ衝突。それに連動し、金属音が両者の耳を劈くひざり。

鳴り止まないかとも思われたその音が、唐突に止んだ。

「……悪いね」

“目と鼻の先にいる”劉焯の悪びれも無い謝罪に、甘寧は息を呑む。

劉焯は甘寧の連撃を躲す為に、彼女の間合いを侵略した。雨のように振り下ろされる鈴音の刃を潜り抜け、文字通りの目と鼻の先まで接近した。鈴音は甘寧の腕の先　つまり、手にある。それよりも内側にいる劉焯には実質、刃は届かない。

だが、それは劉焯にも言える事。彼もこの近さでは刃を振るえない。そこに甘寧は疑問を覚えた。

そして、気付いた。



( 剣を鞘に納めている！？ )

干将は既に鞘に納まれ、握っていた筈の手は固く握りしめられて自身を捉えていた。

瞬間、甘寧の体を衝撃が貫く。

至近距離からの拳打は甘寧を自陣に押し返すように飛ばす。威力は彼女の体を地に弾ませ、呉の兵達にぶつけた。

「くっ……」

兵に起こされながら、甘寧は揺れる視界を振り払うように頭を振る。視界が正常になると、すぐに小鬼てきを睨んだ。

「今のは……寸勁か？」

「ご名答。生憎あいにく、僕は剣だけで生き残れるとは思ってないんだ」

「その上、手加減したな？」

「さてね」

苛立たしげに問う甘寧に、劉焰はとぼけて背を向けた。

敵を前に背を向けるという愚行をし、劉焰は歩き出す。しかし、すぐに足を止め、

鎖って、ちょっとしたコツで壊せるんだってぞ。

そう言い残すと姿を消した。

小鬼が突然消えた、と呉の兵達が色めき立つ中、甘寧は彼の言葉を計り兼ねていた。

突然過ぎる言葉は理解に苦しむものだった。だが、甘寧は理解出来れば光明が見えるような気がした。理屈など無い。ただそう思えたのだ。

（私は孫策様ではないのだがな）

内心で独り言ちると、服の内側でカサリ、と音がした。甘寧が不審に思って確認すると、すぐに深く息を吐いた。

「……………やってくれる」

劉焰と孫呉の接触から数刻後、待ち構えていた劉備軍は孫呉・袁術軍を視認する。

「遂に来ちゃったね」

「はい」

敵軍を見据えながら劉備がそう零すと、隣にいた孔明が頷いた。

兵の質の高い孫呉に物量差で押してくる袁術。そして、予想外であった袁術に与する謎の部隊。劉焰の言った通り、あの将が率いているのだとしたら尚の事頭が痛くなる問題だ。

けれど、劉備は証明しなければならない。

義勇軍から成り上がった劉備玄德という太守は、見かけ通りの少女ではない。幾つもの戦場を渡り、実力で死線を越えてここまで来たのだと。その爪牙は敵の息の根を止めるには十分に鋭く、我が領地<sup>なわばり</sup>を狙うなど愚行にしかないのだと。

それを今、かつての同盟相手に。

「……………」

「桃香様、お辛いのは解りますが、今は堪えてください。兵の士気に関わります」

「うん、解ってるよ、朱里ちゃん」

ごめんね、と謝りながら劉備は目を閉じ、感傷的になっていた自分を内側から追い出す。

目を開けば、劉備の双眸はまだ血に濡れていない戦場を映し出す。それを受け止め、将として劉備玄德は戦況を確認しだした。

「私達が4万の兵で、孫呉・袁術軍は計7万だったよね？」

「はい。3万の差ですが、策が上手くいけば形勢はすぐにひっくり返せます。問題は……」

「時間だよね？」

孔明は首肯すると、視線を自軍の左翼へと向ける。

「今回は時間との勝負でもありません。第2段階の為に、兵の犠牲は最小限に抑えてほしいんです。」

だから、行軍速度を速める為に兵数を少なくしましたが、時間がかかればかかる程に私達の敗北は近付きます」

「その為に、左翼の皆には頑張ってもらわなきゃね」

胸の前でぎゅっと拳を握る劉備。だが、すぐに不安そうな顔しだした。それに気付いた孔明も苦笑した。

「でも、左翼って……」

「……朔くん達です」

「直葉ちゃんもいるんだけど、大丈夫だよね？」

「大丈夫ですよ……多分」

「うう……断言してよ」

「だって、朔くんですし……」

「だよね〜……」

暴走という前料がある者達に、不安が拭えきれないのは何故だろうか？

そんな答えが付いている疑問を浮かべ、二人は祈るように左翼を見つめた。

「美羽様〜！ 劉備軍が見えましたよ〜」

間延びした張勳の声に、袁術は頷くだけで答える。

もうすぐ。もうすぐだ。

もうすぐ、劉焰こおに翔刃が手に入る。

そうすれば、きっと心を開いた穴が埋まってくれる。満たされる筈だ。

ああ、なんて待ち遠しい事だろうか。

「七乃……」

「はあーい」

「全軍を以て、劉備を滅ぼすのじゃー!!」

もう

待ちきれない。

己が欲望の為に兵士駒を動かす袁術わいじゆの姿に、于吉は滑稽だと口元を歪ませた。

彼にとって袁術も孫策も劉備も、ここにいない曹操でさえすへか須らく等しい価値でしかなかった。

## 人形

どれだけ愚かな太守であろうと、どれだけ麒麟児と讃えられていても、どれだけ慈しみと優しさを備えていようと、どれだけ才能高く

覇の道を行く王の器であろうと。

于吉という導師おんこしにとっては、人形と人形が争い、滅ぼし合うだけの不様で哀れで滑稽な人形劇でしかない。

故に、人が斬られて血を噴き出しても、人形の綿が飛び出ただけに過ぎず。

故に、人の首が断たれようとも、人形の頭が千切れたに過ぎない。

その程度の瑣末事でしかない。だから、この外史せかいで人が何人死のうが、国が滅びようが何とも思わない。どちらかといえば、退屈でつまらない劇ごっこを見せられた被害者の心境だ。

しかし、その認識から外れた異端そんざいがいる。

それが天の御遣い 北郷一刀。

そして、戦鬼 劉焰翔刃、周倉。

どちらも、本当ならばこの外史せかいに居る筈もない、言うならば異物でしかない。

いかに滑稽な人形劇であろうと、異物を許しておく気など無い。

それが于吉という導師おんこしに課せられた役目なのだから。

「人形同士の戯れは、それ程に面白いか？」

そう問うのは、円形の笠を被った長身瘦躯の男 礼青。肉付きの

悪い不健康そうな彼の顔にも、歪んだ笑みが張り付いている。

「ええ。全ては仮初かりそめでしかなく、天寿を全うしようと、戦で命を落とそうと、それはやはり夢幻まぼろしでしかない。

いくら懸命けんめいに生きようと、夢幻である限り露つゆと消えるが必定。そこに価値も何も無いでしょう？ それでも懸命けんめいに、無価値に生きるしかない。ほら、酷く滑稽ではありませんか？」

「ふん……わたしには貴様の嗜好は解らん。わたしは、あの北斗の弟子と戦えるのであれば、それでいい」

礼青が浮かべた笑みは凄惨なものに変わり、視線は獲物を探す獰猛な獣のそれにな変わった。

「ふふ……それでは、戦鬼の相手はお任せしましたよ」

「言われるまでもない」

巨人怪物は戦場戦場に赴き、導師人形は戯れ戦争を観賞観賞しました。



#### 鬼と新天地 4（後書き）

最近、どうも筆が進まず、大変お待たせしました。

本当なら、もう少し先に進む筈でしたが、今回はここで切らせて頂きました。

例のごとく、支離滅裂で御不快な思いをさせてしまいましたら、誠に申し訳ありません。

鬼と新天地 5 (前書き)

またもや2ヶ月近くお待たせしてしまい、申し訳ありません。

今回は、携帯版では読みづらい箇所があるかと思えます。ご了承くださいませよう、お願いいたします。

## 鬼と新天地 5

袁術の命により、兵隊は砂塵を巻き起こし前進する。

敵は田舎勇軍からの成り上がり。片や、こちらは名家。その上、数も勝っている。勝利は袁術軍のものだと、銀色の華美な鎧を纏う彼らは一様に思う。

孫呉と軍旗を掲げていない部隊を除いて。

成り上がりという事は、その高みまで登って来たという事。つまりは、真正正銘の実力で太守という位まで登りつめて来たのが、劉備玄德という英雄だ。

英雄と呼んだものの、劉備自身に取り立てて飛び抜けた才は無い。周りを囲む将達と比べるまでもなく、武も智も数段劣る。傍から見れば、何故に彼女が有能な将達の上に立っているのか疑問に思ってしまう程に。

だが現実には、劉備は一軍を率いる代表として君臨している。

それは彼女が持つ仁徳の成せる業。一騎当千の将が、神算鬼謀の軍師が君主と仰ぎ、不惜身命の限りを尽くして仕えたい、と魅せられたから。

そして、彼女と同等にして異なる仁徳を持った人物 天の御遣いという存在があった事もその一因だろう。

劉備と天の御遣いの仁徳は、正直を言えば戦場にあるべきでない、

似つかわしくないものだ。

人は、彼らを非情になりきれない半端者と笑うだろう。

人は、彼らを夢見がちな愚か者と罵るだろう。

人は、彼らを現実から目を背けた逃避者と蔑むだろう。

しかし、そんな甘さが功を奏してきたのだ。

現に、彼らが抱く甘ったれた幻想を好んだ者達がいるのだ。いや、その内の独りは、“者”と言っては語弊があるだろうか。何故なら、彼は人という律から外れた存在であるのだから。

「さあーって、お仕事を始めますか」

そして今、その存在は牙を剥く。

彼は力を溜めるように姿勢を低くし、次の瞬間には風を切り裂いて駆け出した。

それは放たれた漆黒に赤い矢羽の矢の如く。しかし、その勢いは一矢一殺では済まない。

異形の双眸から放たれる眼光は鏃やじりよりも鋭く、敵軍ひょうていの一角へと翔ぶ。

鮮やかな赤で彩られた『孫』の牙門旗を掲げた、そこ

へ。

大気を震わせ、響く轟音。砂塵が上がり、濛々と天に向かって伸びていく。

それは軍を率いて先人に立っていた孫策の耳にも届いた。それが、地面が砕かれた音だとも同時に認識させられた。

いや、届かない筈がなかった。

認識出来ない筈がなかった。

それは、彼女の“すぐ目の前で”起こったのだから。

孫策は後ろにいる兵達が声を失って固まっているのが見なくても解った。実のところ、一緒になって声を失いかけていた。そうならずとに止まれたのは、彼女の持つ天性の勘に因るところが大きい。

そして、

「相変わらずデタラメなのね、君は」

「……厄介の次はデタラメ、ね。アンタらに僕がどう認識されてるか、よく解ったよ」

地面を砕いた張本人を知っていた事だろう。

舞い上がった砂塵の中から姿を見せたのは、独一匹りの子鬼供。

腰に双剣を佩き、漆黒の戦装束に真紅の鬼兜。

「ぞ、賊狩りのせ、戦鬼……」

その姿に誰かが声を震わせて眩き、呉の兵達は思わず息を呑んだ。

彼の戦鬼は御遣いに仇なす賊を許さず、彼と彼を慕う民を守る為ならば千の賊にも恐れず立ち向かい、その力を振るう。

彼らはそれが真実だと知っている。反董卓連合においての実力を見た。先の甘寧との攻防で、それがただの噂ではないと理解させられた。

そして、徐州へと攻め込んでいる自分達は、あの戦鬼に主に仇なす賊だと判断された。

小さな鬼の爪牙が襲い来る。その現実に身を震わせた。

「  
狼うろた狽たえるな!!」

孫策は声を張り上げ、兵達の震えを覇気で強制的に押さえ付けた。

戦バケモ鬼を前に、呉の王は前に歩を進める。

怯えも気負いも無く、悠然と向かっていく姿は彼らに力を与えた。我らが王は戦鬼になど恐れぬ。ならば、仕える我らが怯えていて良い筈がある筈もない。

孫策の一喝と行動により、呉の兵達の恐怖は静まり、二本の足に力が戻る。

精兵が本来の姿を取り戻した事に、劉焯は面倒そうに頬を掻いた。

「お見事、とでも言っておくよ」

このまま落ちていてくれれば自分の仕事も楽になったのに。そう考へながら、劉焯は己が主とは違う、孫策の人を惹きつける力に感心しながらそう言った。

たった一声、たった数歩で落ち出していた士気を元に戻す。

溢れだす覇気に才気が混じり、王としての風格を顕わにしたその姿は、正しく『霸王』。

これが鎖に繋がれながらも、孫策が小霸王と呼ばれる所以ゆえんなのかもしれない。

「まったく……これで鎖に繋がれてるって言うんだから、世の中つてのは儘ままならぬね」

「ホントね。でも、キミと戦えるのは不幸中の幸いかもしれないわ」

「僕は不幸だと確信してるよ」

相変わらずつれないわね、と零しながら、孫策は口元を歪めて笑みを形作る。手はゆっくりと剣へと伸び、南海霸王が鞘から引き抜かれた。

陽光に反射し輝く刃。その切っ先が劉焰へと向けられる。

「……さあ、始めましょ」

「血の気の多い事で……」

戦意を高めて告げてくる孫策に、劉焰は嘆息しながら双剣を引き抜いて構える。

両者は見合い、黙した。

言葉を語らず、自然と互いに一步踏み出す。二歩目には地を蹴り、敵の命を狩らんと駆けた。

繰り出す干将かんせいと南海霸王なんかいばおう。

ぶつかり合う鋼が甲高い硬質な音を打ち鳴らす。その音は何合も切り結ぶ度に凄惨なものへと変わっていった。ここが戦場だと、命を喰らい合う無情な地獄なのだと自覚させるように。

だと言うのに、孫策の顔には笑みが張り続けている。

これを勇猛と言おうが、異常と言おうが、なんだろうと構わないだろう。



敗北と死が同義であるこんな場所では

( 考えるだけ無駄な行為なのかもね )

口の中でそう呟きながら、劉焯は孫策が振り下ろす一撃を交差させた双剣で受け止める。拮抗の様相を削り合う音が知らせる中、彼は愉悦が滲む孫策の笑みを冷やかな目で見ながら、ゆっくりと口を開いた。

「……………約束」

ぼそり、と小さく呟いた一言に、孫策の笑みが消えた。変わるように表れたのは、感情の揺らぎ。そして、悔恨の表情。

なるほど、と劉焯は内心で独り言ちる。

「完全に割り切った訳じゃないんだ」

「……………割り切った筈なんだけどね」

孫策は後ろに跳んで、劉焯から距離をとった。

顔に表れていた悔恨の色を引っ込め、彼女は王としての自分を戻す。割り切った筈の感情の発露に、孫策は内心で溜息を零した。

結んだ同盟は、呉に生きる民の為だった。母、孫堅が築き上げた大地を取り返す為の布石。敵を減らし、味方を増やす一手に間違いは無い。

相手は格好の者達だった。その時点で最上の相手だった。

少しの対話に、少しの共闘で知りあつて間もない他勢力との同盟に  
応じてしまふ、愚かといつていい程にお人好しな彼ら。

そして、会つたばかりの自分に簡単に死ぬなど、命を軽く扱ふなど  
怒る小さなお気に入り君。

その誰もが性格と反した高い武と智を備えている。

そんな彼らが孫呉と轡くわを並べるならば、難敵が立ち塞さくがるうと簡単  
には屈しない確信があつた。もし、劉備達が先に落とされたのなら、  
盟友として彼女らを保護し取り込めれば孫呉の武は更に強大にする  
事が出来るだろうと打算もあつた。

だが、それも今では意味は無い。

崩れ去つた約束に価値は無い。

「悪いけど、孫呉の宿願……その為の礎になつてもらつたわ」

「礎？ 人柱か人身御供の間違いでしょ」

生憎と僕は鬼なんだけどね、と劉焰は飄々とそう返し、双剣を鞘に  
納める。孫策は不審に思い、甘寧が無手での一撃をもらった事を思  
い出した。

超至近距離にまで間合いを侵略されては敵わない。甘寧の二の轍を  
踏まぬよう、孫策は警戒心を最大まで高めた。

警戒する孫策を他所に、劉焰はゆっくりと口を開く。

「さて、問題。約束を持ちかけられ、結んだ相手に裏切られた者達はどうしたらいいと思う?」

その問いは、言外と言うには聊か直球過ぎた。それが自分達の状況を物語っていると気付けない当事者はいないだろう。

「普通なら、敵対でしょうね。機を狙い、力を蓄えて報復してもいい。もしくは、他勢力と新たな同盟を組むなりなんなり勝手にすればいいわ」

「勝手に、ね……」

孫策の言葉を反芻し、劉焯は口角を吊り上げる。丁度良いと言わんばかりに。

「勝手に、って事は自分の都合で、好きなようになんでもしていいって事だよな?」

「それがどうしたの?」

「つまりは                    あなたの相手もしなくて言い訳だ」

言い終わるや否や、劉焯は姿を消す。それは孫策に先の周倉との戦いを想起させ、弾かれるように南海霸王を構えた。

どこから来る?

思考を巡らせ、視線を走らせる。

だが、彼女の警戒を他所に悲鳴が上がった。

孫策が目を向ければ、自身の精兵が宙を舞っていた。

劉焯の拳が鎧をもものともせず突き刺さり、蹴りが薙いでいく。何度も、何度も繰り返し、人が雨のように落下していった。

孫策は気付く。あの小鬼は、もう孫伯符を見ていない。ただ、兵を削ぐ事だけしかするつもりはないのだと。

（素通り？ 無視？ …… やってくれるじゃない！！）

胸の内に広がる不快感が苛立ちを巻き起こす。孫策は駆けだすと、劉焯に南海霸王を叩きつけるように振り下ろした。

しかし、刃は劉焯の戦装束すら掠めなかった。彼は孫策の斬撃が迫るよりも速く、別の兵へと接近してその一撃を回避と同時に攻撃を行った。

傍から見れば、小鬼は小霸王に歯牙にも掛けない。戦闘中においては徹底した無視っぷりだった。

肩がわなわなと震え、南海霸王を握る手からギリ、と音が鳴った。不快感による苛立ちが身体の芯に種火を着け、血が熱く滾り始める。

「劉焯……翔刃あああああああ！！」

「そんなに叫ばなくても聞こえてるよ」

咆哮を上げ、孫策は刃を振り上げ肉迫する。その彼女に対して、劉

焰は干将を投擲した。

孫策は南海霸王で迫る干将を弾き、次の一太刀を喰らわせようとした瞬間

「……………!?」

彼女の持つ天性の勘が、危機を知らせた。悪寒じみた電流が身体を走り、無理矢理に身体を横に反らさせた。身体が急制動に軋みを上げる中、孫策は自分の首があつた空間を干将とよく似た白の刃莫耶が貫いて行つたのを見た。

体勢を立て直した孫策の視界に、掠めて切れた淡い桜色がかつた自身の髪が舞つた。その向こうで、付けていた鋼糸で双剣を引き寄せた劉焰は気のない拍手をしていた。

「よく避けたね。それも勘つてやつなのさ？ 大したもんだね」

「そつちこそ、二本目の剣が一本目の剣に隠れるように投げるって、どれだけ器用なのよ」

「その分、苦勞してるんだよ」

そう答えて肩を竦めた劉焰は、双剣を一閃する。黒閃と白閃は飛来した二本の矢を斬り落とした。

「援軍か……………」

目を向ければ、そこには『黄』の軍旗を掲げた部隊があり、その先頭に矢を番えた妙齡の女性がこちらを狙っていた。

ここまでかな、と口の中で呟くと劉焯は踵を返して走り出した。

戦鬼が一目散に後退した事に呆気にとられた孫呉。数拍の後、劉焯の追撃に掛かる。

そこで、事態は起こった。

「深追い、し過ぎたわね……」

苦々しく零す孫策の耳には、怒号と悲鳴が混じり合った叫喚が響いていた。

視界は砂塵で埋め尽くされて、無いと言っても過言ではないだろう。何せ、すぐ隣にいる黄蓋の顔もよく見えないのだ。

「やられましたな、策殿……」

「短絡的だった、そう言いたいんでしょ？ 祭」

何の含みも込めず言う黄蓋に、孫策は半眼で言い返す。

孫策隊、そして援軍の黄蓋隊は後退した劉焯を追った。だが、その時点で気付くべきだった。劉焯が尋常ではない速さで動けるとい



視界を奪い、混乱しているところを突く。単純だが、効果のある策だ。

隊列を整えようにも、敵どころか味方の姿も見れない。いくら孫策が号令を掛けようが、銅鑼を鳴らしたとしても、今の兵達の耳に届く可能性は低い。

「それにしても、奴らは正気ですか……」

「ほんとね、味方翔刃を殺す気なのかしら？」

自分達を覆う砂塵の帳は未だ晴れない。当然だ、まだ地面が爆ぜる音が聞こえるのだ。小鬼がせつせと地面を砕いているのが伝わってくる。

つまり、劉備軍は味方が“敵陣の真っ直中にも関わらず”矢を斉射したのだ。

視界をほぼ奪われている孫策隊と黄蓋隊だが、奪っている本人がその敵陣の中にいる以上、劉焰とてその例に漏れる筈がない。それで尚、射ってきたのは彼への信頼の厚さか、単なる運任せか。

「如何する？ 策殿。ここは一旦、尻尾でも逃げるべきかの？」

「んー……それはやめとくわ。もうすぐ、砂塵これも晴れる気がするから」

「ふむ、それも勘ですか」

そうよ、と孫策が頷くと、示し合わせたように砂塵がゆっくりとそ



の密度を薄くしていく。日光を遮る暗雲が晴れるかのように、視界が広がっていった。

「ふうん……これは予想してなかったわね」

砂塵が晴れたその先に居たのは、賊狩りの戦鬼ではなかった。関羽でも、張飛でも、趙雲でもない。

それどころか、一廉ひしかたの武人でさえなかった。

その人物は、ここ大陸より東　日本の國の衣装を纏っていた。白の『十文字』の家紋を入れた漆黒の半着に、薄墨色の武者袴。額には真紅の鉢金、両腕には漆黒の籠手、そして腰には一振りの刀を佩いている。

その戦装束は、普段の彼の服装とは真逆の色合いだった。どこか戦鬼と似せているのは、彼と近い者であると示すが故か。

それとも、“今の自分は天の御遣いではない”とでも言っ気なのか？

「どういっつもりなのかしら、御遣いさん？」

「見ての通りだよ。死線にやってきた」

孫策の問いに、天の御遣い　北郷一刀は恐れも惑いも無い声で淡々と答えた。

おかしい、と孫策は違和感を覚えた。会ったのは同盟の話を持ちかけた2度だけ。だが、その時の彼は、今日の前にいるような男だっただろうか。

劉備と並んでお人好しであり、反董卓連合での彼の閃きを聞いて、多少は頭の切れる男なのだと知った。だが、武では一兵卒程度の強さだろうと察しをつけていた。

そして、今現れた北郷一刀は、あの時の北郷一刀と同一人物なのだろうか。

あの時の彼の佇まいには鋭さが無かった筈だ。刃のように鋭い、武人としての覇気が。

「会わない内に随分と成長したじゃない」

「息子の成長が早いからな、親も負けてられないだろ」

「大変ね、お父さんは」

からかうような口調の孫策に、子が子だから尚更だよ、と一刀は肩を竦めた。戦場に不釣り合いな雰囲気を出し始めた一刀に、戦る気も無さそうに飄々としている劉焰が思い出される。やはり親子か、と孫策の口角は笑みをつくった。

「策殿、あれが噂の男か……？」

「ああ、祭は初見だったわね。彼が劉備と並び立つ大徳の一人、北郷一刀。天の御遣い……でいいのよね？」

「何故、疑問形なのかな？」

「だって、違い過ぎるんだもの」

孫策は目を細め、一刀を見遣る。それに一刀は正解だとも言うように笑みを浮かべた。

「死線にやってきたのなら、北郷おれ一刀はもう天の御遣いじゃない」

サムライ  
武士だ。

知らぬその呼称に孫策と黄蓋は眉をひそ顰めた。

その存在は、自分達と同じ存在。

武勇を以て主君に仕え、戦場を駆ける者。

それを知らぬが故に、彼女らは同類の匂いを感じ取り、悟った。

「手を血で汚す覚悟が出来たんだ？」

「正直言つて、まだ怖いよ。人を斬るのも、斬られるのも。だから、孫策さん達に比べたら俺の覚悟なんて、比べられたもんじゃないのかもしれない」

「ただ、と一刀は言う。」

「後ろで見ているだけの自分は、もうやめた」

「一刀の手が左腰に佩いている刀の柄に添えられる。」

それに黄蓋が反応し、即座に弓に矢を番えた。しかし、孫策が遮るように手で制する。

何をするのか、と孫策が抗議しようとするが、すぐにやめた。何せ己が主の顔に愉悦が浮かんでいた。孫策を小さい頃から見て来た彼女だ、もう止められないのだと理解するのも早かった。

「殺り合う前に、聞いていい？」

「いいよ。何かな？」

「貴方達、本当にあの賭けに勝てると思ってるの？」

「それを聞くって事は俺達の声は届いてたんだな。そう思ってるからこそその賭けだよ。まあ、ほとんど実行使だけど」

「つまりは、もぎ取るってことね。嫌いじゃないけど……」

「乗るには分が悪過ぎるんだろ？ だから、好きにしたらいいさ。こっちはそうしてる訳だしさ」

「……ほんと、この親にしてこの子あり、って事かしら。貴方、翔刃と似たような事言ってるわ」

「へえ、そうなのか。……あの暴走っ子と似てるって言われると、複雑な気分だな」

そう困ったように言いながらも、その顔には確かな嬉しさが混じっている。微笑ましい姿なのだろうが、ここは戦場。似つかわしくない行いは控えるべきだろう。

一刀は、すぐに表情を引き締めた。

「今度はこっちからいいかな？」

「ええ、どうぞ」

「どうしたら、孫呉はこの賭けに乗ってくれる？」

その言葉に、孫策は耳を疑った。

この男はまだそんな事を言っているのか？ 自分で分の悪い賭けだと言いつつたというのに。孫呉にまだそんな希望を抱いているのか。

「それは虫の良い話じゃない？ 好きにしたらいいって言うておきながら、賭けに乗ってほしいなんて。こんな敵味方の状態で、今更持ちかける話じゃないわ」

「同盟は互いの利害の一致からのものだろ。俺たちは生き残る為に、孫呉は宿願を果たす為に敵を討つ。味方は多いに越した事は無い筈だ」

「前に私達が持ちかけた内容をなぞるように持ちかけられてもね……」

「だろうね。なら、もう一つ。……朔との約束を守る気はもうないのか？」

「……………っ」

「もし、まだ守る気があるなら……破ってしまった事で王の誇りに付いた汚名を少しでも雪ぎたいのなら、俺達と一騎討ちで戦ってくれ。そして」

俺が勝ったら、力を貸してくれ。

その一言は驚きを招き、そして理解できないものだった。

一騎討ち。

味方の助力もない、一個人同士での純粋な武の競い合いをこの男は希望した。

相手は誰だ？

それは、孫策伯符。

江東の虎、孫堅が一子。戦上手とも、江東の麒麟児とも呼ばれた自分を。

たかだか数カ月程の鍛錬で、この高みにまで来たと思っているのか。

ああ、それはなんて愚かだろうか。身の程知らずも甚だしいとしか言えない。

「それは、本気？」

「力不足で、分不相応な役目だったのは解ってるんだけど……やる

気出さないとか」

「どうしてよ？ 負けるって、死ぬって解っていないながら挑むなんておかしいじゃない」

理解できないとばかりに零す孫策の言葉に、一刀はゆっくりと穏やかに笑みを浮かべる。

「……おかしくていいよ。それに、親が子の期待を裏切る訳にいかない」

その笑み、その言葉で孫策の脳裏に小鬼の姿が過る。<sup>よき</sup>

その笑みはいつか見た、今もなお自分の中に焼きついている笑みにとても似ていて。

その言葉で、子が親を信じて任せただと解った。

「……いいでしょう。翔刃に免じて、受けて立ってあげる」

気付けば、了承していた。

黄蓋が了承に驚いているが、孫策の心境はいやに落ち着いていた。まるで、始めからこうするつもりだったかのように。

「策殿！ 袁術の目が何処にあるか解らん状態で、そのような博打など受けてはならん！！ 呉の宿願の成就が遠退いてもよろしいのか！？」

「大丈夫よ、祭。監視の目がある可能性を劉備の軍師が見落とす筈

ないわ。だから、北郷だつて持ちかけてきた……そうよね？」

「ああ、ご明察だよ」

一刀の答えと同時に、それ程遠くない場所で破碎音が響いた。見れば、そこには真紅の鬼兜に黒の戦装束を着た子供の姿がある。ただ、その手にあるのはいつもの双剣ではなかった。

自身の倍の長さもある長槍　張飛の武器である蛇矛を肩に担いでいた。

「へえ……今度は張飛の得物を使ってるのね、翔刃つてば」

そう納得したように孫策が呟けば、遠くにいる小鬼が不敵に笑ったように見えた。

先の戦で、三国無双と称された呂布を相手に関羽の得物　青龍偃月刀を用いて一本取ったとも聞いていた。蛇矛を使っていたとしても、ありえない事ではないだろうと思った。

「実は、朔に孫呉の兵隊に紛れ込んだ袁術軍の兵士を倒してもらつてたんだ」

「万単位の人の中から探し出すなど、いくらなんでも無理じゃろう！？　いくら出来たとしても時間が足りぬ上に、敵軍であるお主達ならば尚の事解らぬ筈じゃ」

「朔が言うには、敵だからこそ解るんだつてさ」

孫呉の兵を赤い石に例えて言おう。



赤い石は綺麗に縦横に並べられている。間隔さえも均等な幅で乱れないのだが、おかしな箇所があった。赤しかない筈の中に、黒い石がぽつぽつとあったのだ。そこだけ色だけでなく、間隔もずれているのが如実に解る。

石と石の間隔は、兵の練度。陣形を描くのは兵達一人一人なのだ、隊列の乱れは戦に多大な影響を与えてしまう。一人が誤ってしまえば味方に悪影響を及ぼし、最悪、仲間にも自分にさえも死を招いてしまう事だろう。

だから、皆必死になる。生き残る為に、願いを叶える為に。

その中に異物と言える黒い石 練度の低い袁術軍の兵士が紛れ込めば、劉焰にとって一目瞭然らしいのだった。

「じゃが、新兵の可能性も考えられたであろう？」

「主君である王の部隊に、足手纏いになりやすい新兵を組み込むとは思いにくい。そういうのは後方に回すものでしょ」

「むう……。では、あそこに小鬼らしき姿があるという事は、監視の目を全て潰したという事か？」

「そういう事だよ」

「ふ〜ん……。じゃあ、邪魔もされず君と戦える訳だ」

安心したわ、と零す孫策。

「私を無視してまでやったんですもの、それくらいはしてもらわなきゃね」

「じゃ、お手柔らかに頼むよ」

言葉は穏やかに、一刀は刀の鯉口を切る。

カチャリ、と音が鳴り、空気が一変した。

戦場の温度が急激に下がり、より鋭い気配が辺りを包みこんだ。

それを発したのは、北郷一刀。

もうそこには天の御遣いは、居ない。居るのは

「日の本が武士サムライ、北郷一刀」

「孫呉の王、孫伯符」

両者は名乗りを上げ、王と武士は剣戟を振るう。

鬼と新天地 5 (後書き)

実をいいますと、まだ執筆モチベーションが下がったままなんです。

このままでは、埒が明かないと判断し、一端ここで切ることになりました。もしかしたら、大幅な修正を入れるかもしれない。

ご容赦ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0128i/>

---

真・恋姫十無双 ~ 羅刹戦記 ~

2011年11月29日00時51分発行